愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第108集

水　入　遺　跡

第２分冊

中近世・科学分析・考察編

2005

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

総　目　次

第１分冊

第１章　序説
第２章　旧石器時代から縄文時代の石器
第３章　縄文時代の遺構と遺物
第４章　弥生時代末期の遺構と遺物
第５章　古墳時代中期の遺構と遺物
第６章　奈良時代から平安時代の遺構と遺物

第２分冊

第７章　鎌倉時代の遺構・遺物
第８章　戦国時代から江戸時代前半の遺構・遺物
第９章　江戸時代後半の遺構・遺物
第10章　環境・年代・胎土の科学分析
第11章　考察

第３分冊

写真図版　遺構
写真図版　遺物
遺構基本図

第２分冊目次

第７章　鎌倉時代の遺構・遺物
第１節　鎌倉・戦国時代の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）　1
第２節　竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）　3
第３節　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）　16
第４節　大溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）　54
第５節　土坑墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）　58
第６節　その他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）　90
第８章　戦国時代から江戸時代前半の遺構・遺物
第１節　大溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）115
第２節　区画溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）122
第３節　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）134
第４節　竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）149
第５節　その他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）151
第９章　江戸時代後半の遺構・遺物
第１節　水田・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）165
第２節　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）167
第３節　堤状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）170
第４節　溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川井）171
第10章　環境・年代・胎土の科学分析
第１節　水入遺跡の堆積環境・・・・・・・・・・・・・・・（鬼頭・古澤）175
第２節　炭素年代測定（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・（山形）185
第３節　炭素年代測定（2）・・・・・・・・・・・・・（パリノサーヴェイ）186
第４節　竪穴建物竈焼土の焼成年代測定・・・・・・・・・・・・（藤根）188
第５節　水入遺跡出土木材の樹種同定・・・・・（佐々木・植田・松葉）192
第６節　矢作川流域出土の土師器甕の胎土分析・・・・・（藤根・今村）206
第７節　水入遺跡の遺物包含層中より産出した昆虫化石について・（森）227
第８節　水入遺跡から出土した大型植物化石・・・・・・・・・（新山）231
第11章　考察
第１節　水入遺跡出土の古墳時代中期の土器・・・・・・・・・（永井）248
第２節　水入遺跡の古代の土器について・・・・・・・・・・・（永井）261
第３節　水入遺跡の古墳時代中期から平安時代について・・・・（永井）268
第４節　水入遺跡出土の金属関連遺物・・・・・・・・・・・・（鈴木）284
第５節　中世から近世後期の水入遺跡・・・・・・・・・・・・（川井）287
第６節　水入遺跡における環境復元 CG の作成・・・・・・・・（宮塚）319

第 2 分冊挿図目次

第 408 図　99ASB07　4
第 409 図　99ESK900　5
第 410 図　99GSB14・16　6
第 411 図　99GSB30　7
第 412 図　99GSB12・13　8
第 413 図　99GSB02 ～ 06　9
第 414 図　99ISX05 平面図　10
第 415 図　99ISX06　11
第 416 図　99ISX08 平面図　12
第 417 図　98DSB07　13
第 418 図　99DSB09　14
第 419 図　98DSB82　15
第 420 図　掘立柱建物軸線別分布図 1　23
第 421 図　掘立柱建物軸線別分布図 2　24
第 422 図　掘立柱建物軸線別分布図 3　25
第 423 図　掘立柱建物平面図　26
第 424 図　掘立柱建物平面図　27
第 425 図　掘立柱建物平面図　28
第 426 図　掘立柱建物平面図　29
第 427 図　掘立柱建物平面図　30
第 428 図　掘立柱建物平面図　31
第 429 図　掘立柱建物平面図　32
第 430 図　掘立柱建物平面図　33
第 431 図　掘立柱建物平面図　34
第 432 図　掘立柱建物平面図　35
第 433 図　掘立柱建物平面図　36
第 434 図　掘立柱建物平面図　37
第 435 図　掘立柱建物平面図　38
第 436 図　掘立柱建物平面図　39
第 437 図　掘立柱建物平面図　40
第 438 図　掘立柱建物平面図　41
第 439 図　掘立柱建物平面図　42
第 440 図　掘立柱建物平面図　43
第 441 図　掘立柱建物平面図　44
第 442 図　掘立柱建物平面図　45
第 443 図　掘立柱建物平面図　46
第 444 図　掘立柱建物平面図　47
第 445 図　掘立柱建物平面図　48
第 446 図　掘立柱建物平面図　49
第 447 図　掘立柱建物平面図　50
第 448 図　掘立柱建物平面図　51
第 449 図　掘立柱建物平面図　52
第 450 図　掘立柱建物平面図　53
第 451 図　柱穴出土遺物　53
第 452 図　99A・BSD01 断面図　55
第 453 図　SD01 出土遺物実測図（1）　56
第 454 図　SD01 遺物実測図（2）　57
第 455 図　98DSK241　58
第 456 図　98DSK432　59
第 457 図　98DSK05　60
第 458 図　98DSK20　60
第 459 図　98DSK326　60
第 460 図　99ASK2007　61
第 461 図　99ESK89　61
第 462 図　99ESK582　62
第 463 図　99GSK18・15　62
第 464 図　99GSK324　63
第 465 図　99GSK322　64
第 466 図　99GSK53　64
第 467 図　99GSK445　65
第 468 図　99JSK87　65
第 469 図　99KSK69　66
第 470 図　99KSK1871　66
第 471 図　土坑墓（1）　68
第 472 図　土坑墓（2）　69
第 473 図　土坑墓（3）　70
第 474 図　土坑墓（4）　71
第 475 図　土坑墓（5）　72
第 476 図　土坑墓（6）　73
第 477 図　土坑墓（7）　74
第 478 図　土坑墓（8）　75
第 489 図　土坑墓（9）　76
第 480 図　土坑墓（10）　77
第 481 図　土坑墓（11）　78
第 482 図　土坑墓（12）　79
第 483 図　土坑墓（13）　80
第 484 図　土坑墓（14）　81
第 485 図　土坑墓（15）　82

第 486 図　98DSE01　91
第 487 図　99DSE03（1）　92
第 488 図　99DSE03（2）　93
第 489 図　99DSE03（3）　94
第 490 図　99ESE01　95
第 491 図　99GSK143　95
第 492 図　99FSE01 ～ 08　96
第 493 図　99ESE03 ～ 07　97
第 494 図　99ISE01　98
第 495 図　99BSE01　99
第 496 図　99ISX01　100
第 497 図　99ISX02・04　101
第 498 図　99ISE02　101
第 499 図　99ISK311　102
第 500 図　98DSK335　103
第 501 図　98DSK363　104
第 502 図　98DSK371　104
第 503 図　98DSK384　105
第 504 図　98DSK385・387　105
第 505 図　谷地形概略図　107
第 506 図　谷出土遺物実測図　108
第 507 図　その他の出土遺物（1）　109
第 508 図　その他の出土遺物（2）　110
第 509 図　その他の出土遺物（3）　111
第 510 図　その他の出土遺物（4）　112
第 511 図　その他の出土遺物（5）　113
第 512 図　その他の出土遺物（6）　114
第 513 図　水入遺跡出土の中世瓦実測図　114
第 514 図　大溝　116
第 515 図　土塁（1）　117
第 516 図　土塁（2）　118
第 517 図　土塁（3）　119
第 518 図　99BSD03 出土遺物実測図　120
第 519 図　区画溝（1）　123
第 520 図　区画溝（2）　126
第 521 図　区画溝（3）　127
第 523 図　区画溝（4）　128
第 524 図　区画溝（5）　130
第 525 図　区画溝（6）　131
第 526 図　水入遺跡青磁・白磁出土分布図　133
第 527 図　青磁・白磁実測図　133
第 528 図　掘立柱建物平面図　137
第 529 図　掘立柱建物平面図　138
第 530 図　掘立柱建物平面図　139
第 521 図　掘立柱建物平面図　140
第 532 図　掘立柱建物平面図　141
第 533 図　掘立柱建物平面図　142
第 534 図　掘立柱建物平面図　143
第 535 図　掘立柱建物平面図　144
第 536 図　掘立柱建物平面図　145
第 537 図　掘立柱建物平面図　146
第 538 図　掘立柱建物平面図　147
第 539 図　柱穴出土遺物実測図　148
第 540 図　98DSB46　149
第 541 図　99BSK55　149
第 542 図　99BSK82　150
第 543 図　99BSK130・131　150
第 544 図　98DSK368　151
第 545 図　99ASE01　152
第 546 図　99ASE02（1）　153
第 547 図　99ASE02（2）　154
第 548 図　99BSE8001　155
第 549 図　99ESE02　155
第 550 図　99BSE8002・8003　156
第 551 図　99ASD24・SK5014　157
第 552 図　99BSK01　158
第 553 図　方形土坑　159
第 554 図　谷地形　160
第 555 図　98B2SX01　162
第 556 図　99BSX8001　163
第 557 図　その他の出土遺物　164
第 558 図　98A 区南壁断面図　165
第 559 図　98A・B・C 区遺構全体図　166
第 560 図　方形土坑群平面図　168
第 561 図　埋め甕を伴う土坑　168
第 562 図　98C1 区 SK05 平面・断面図　169
第 563 図　99GSK295 断面図　169
第 564 図　99ISK918・931 断面図　170
第 565 図　99K 堤状遺構　172
第 566 図　98C1SD03　173
第 567 図　99CSD03 断面図　173
第 568 図　99JSD24　174
第 569 図　99BSK5001　174
第 570 図　深掘り地点図　176
第 571 図　第 1 地点土層柱状図　177
第 572 図　第 2 地点土層柱状図　177

第 573 図　第 3 地点土層柱状図　178
第 574 図　テフラ分析結果　179
第 575 図　遺跡周辺等高線図　182
第 576 図　遺構焼土の磁化方向と Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲線の一部　188
第 577 図　木製品の樹種組成（n=63）　197
第 578 図　自然木・自然木？の樹種組成（n=35）　197
第 579 図　本川遺跡自然木の樹種組成（n=35）　197
第 580 図　胎土分析試料を採取した土師器（1）　207
第 581 図　胎土分析試料を採取した土師器（2）　208
第 582 図　胎土分析試料を採取した土師器（3）　209
第 583 図　古墳時代中期の須恵器出土分布図　251
第 584 図　古墳時代中期の須恵器窯式別出土分布図　252
第 585 図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（1）　254
第 586 図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（2）　255
第 587 図　水入遺跡における古墳時代中期の土師編年図（3）　256
第 588 図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（4）　257
第 589 図　水入遺跡出土指ナデ調整甕の一般的な成形工程図　258
第 590 図　屈折脚高杯の製作技術変遷図　259
第 591 図　岡崎市高木・神明遺跡および豊田市神明遺跡出土土器実測図　260
第 592 図　編年対照図　260
第 593 図　真宮遺跡出土土師器実測図　262
第 594 図　梅坪遺跡出土の濃尾型甕実測図　262
第 595 図　水入遺跡における古代の土師器甕編年図　263
第 596 図　西三河地域を中心とした三河型甕の成立過程図　265
第 597 図　天神前遺跡古墳時代遺構全体図　268
第 598 図　郷上遺跡古墳時代～古代の遺構全体図　269
第 599 図　郷上遺跡大溝と水入遺跡大溝の断面比較図　270
第 600 図　鴛鴨・渡刈地区の遺跡と大溝の関係図　271
第 601 図　奈良県天理市布留遺跡における石上溝の位置図　271
第 602 図　豊田市足助地区寺ノ下遺跡遺構全体図　273
第 603 図　寺ノ下遺跡出土の古墳時代土器の実測図　273
第 604 図　大阪府東大阪市神並・西ノ辻遺跡の祭祀遺構図　274
第 605 図　水入遺跡における古墳時代ミニチュア土器の出土分布図　275
第 606 図　水入遺跡における古墳時代小型壺出土分布図　275
第 607 図　水入遺跡における古代集落の変遷図　277
第 608 図　水入遺跡における古代製塩土器の出土分布図　278
第 609 図　鴛鴨・渡刈地区の古墳時代～古代遺跡動向図　280
第 610 図　豊明市若王子遺跡遺構全体図と出土土器実測図　282
第 611 図　尾張東部地域と西三河地域の交流想定図　283
第 612 図　水入遺跡出土の金属関連遺物実測図　285
第 613 図　土坑墓分布想定図　289
第 614 図　大屋敷地区掘立柱建物概略図（中世前期）　290
第 615 図　下糟目地区掘立柱建物概略図（中世前期）　291
第 616 図　掘立柱建物概略図（戦国期）　294
第 617 図　区画内遺構概略図（大屋敷地区）　296
第 618 図　近世後期遺構概略図　298
第 619 図　99I 区四面庇建物復元案　306
第 620 図　出土遺物破片数分布図 1（灰釉系陶器）　307
第 621 図　出土遺物破片数分布図 2（灰釉系陶器）　308
第 622 図　出土遺物破片数分布図 3（瀬戸美濃）　309
第 623 図　出土遺物破片数分布図 4（瀬戸美濃）　310
第 624 図　出土遺物破片数分布図 5（瀬戸美濃）　311
第 625 図　出土遺物破片数分布図 6（土師器鍋釜）　312
第 626 図　出土遺物破片数分布図 7（土師器鍋釜）　313
第 627 図　出土遺物破片数分布図 8（土師器鍋釜）　314
第 628 図　出土遺物破片数分布図 9（土師器鍋釜）　315
第 629 図　水入遺跡周辺の DEM　319
第 630 図　DEM からシェーディングモデルの作成　319
第 631 図　明治 24 年地形図を DEM に貼り付け　320
第 632 図　明治 24 年地形図を DEM に貼り付け　320
第 633 図　戦国期広域地形・植生復元　320
第 634 図　戦国時代広域 CG　320

第2分冊表目次

第9表　掘立柱建物一覧（1）　18
第10表　掘立柱建物一覧（2）　19
第11表　掘立柱建物一覧（3）　20
第12表　掘立柱建物一覧（4）　21
第13表　掘立柱建物一覧（5）　22
第14表　土坑墓一覧1　83
第15表　土坑墓一覧2　84
第16表　土坑墓一覧3　85
第17表　土坑墓一覧4　86
第18表　土坑墓一覧5　87
第19表　土坑墓一覧6　88
第20表　土坑墓一覧7　89
第21表　水入遺跡出土の銭貨一覧　121
第22表　区画溝A　122
第23表　区画溝B　124
第24表　区画溝C　125
第25表　区画溝D　125
第26表　区画溝E　129
第27表　区画溝F　129
第28表　区画溝G　132
第29表　掘立柱建物一覧（1）　135
第30表　掘立柱建物一覧（2）　136
第31表　水田一覧　167
第32表　第1地点におけるテフラ鉱物組成　180
第33表　第2地点における放射性炭素年代測定結果　180
第34表　第3地点における放射性炭素年代測定結果　181
第35表　放射性年代測定結果　186
第36表　放射性年代測定結果（その1）　187
第37表　放射性年代測定結果（その2）　187
第38表　熱残留磁気年代測定結果　190
第39表　考古地磁気による年代　191
第40表　樹種同定結果　193
第41表　樹種同定結果（元興寺文化財研究所実施分）　194
第42表　時期別樹種　194
第43表　製品と樹種の対応関係　196
第44表　樹種別点数　197
第45表　試料および肉眼観察一覧（1）　211
第46表　試料および肉眼観察一覧（2）　212
第47表　微化石・鉱物組成一覧（1）　215
第48表　微化石・鉱物組成一覧（2）　216
第49表　微化石・鉱物組成一覧（3）　217
第50表　微化石・鉱物組成一覧（4）　218
第51表　粘土・砂粒・鉱物一覧（1）　220
第52表　粘土・砂粒・鉱物一覧（2）　221
第53表　胎土中岩石片の分類と組み合わせ　222
第54表　粘土材料と砂粒組成　223
第55表　水入遺跡から産出した昆虫化石　230
第56表　大型植物化石一覧（1）　233
第57表　大型植物化石一覧（2）　234
第58表　大型植物化石一覧（3）　235
第59表　大型植物化石一覧（4）　236
第60表　大型植物化石集計表　237
第61表　時期・遺構別の大型植物化石集計表　238
第62表　時期別の大型植物化石集計表　239
第63表　金属関連遺物の出土点数　286
第64表　タイプ別時期別土坑墓一覧　287
第65表　調査区別時期別土坑墓一覧　287
第66表　地区別出土遺物カウント一覧　300
第67表　区画別出土遺物カウント一覧　303
第68表　区画内出土遺物カウント一覧（瀬戸美濃製品）　305

第７章　鎌倉時代の遺構・遺物

第１節　鎌倉・戦国時代の概観

（1）遺構

遺構の表記については、17区画にのぼる調査区と各調査区で検出された膨大な遺構数を整然と表記する方法として、本章以降も前章までと同様に発掘調査時に設定した調査区に、同じく発掘調査時に付けた遺構略記号及び番号を用いて表記を行う。例えば、「99ASD01」とは「99年度（平成11年度）の調査区Aで検出された溝（SD）01」という意味である。（川井）

鎌倉時代に属する遺構は、調査区全域で確認されており、特に下糟目地区を中心に検出された。遺跡の様相は、基本的に墓域としての空間利用がなされており、土坑墓とそれに附随すると考えられる施設が展開していたと想定される。また、古墳時代から継続する大溝（大屋敷地区SD01）は、埋没が進行はするものの上部は溝としての機能を保持し続けており、大屋敷地区の景観を特徴づけている。

戦国時代は鎌倉時代に墓域の一部であった大屋敷地区を中心に屋敷地区画がつくられ、埋没の進行した大溝の上部が再掘削される。一方下糟目地区では、複雑な屋敷地区画は発達せず、一辺55～70mの区画がひとつ認められる程度である。（永井追記）

（2）遺物

出土した当該期の遺物は、陶磁器、土師器、貿易陶磁器、木製品、金属製品などがある。以下、種類ごとに概要を記述し、遺物表記に際し参考とした編年基準を明記しておく。

灰釉系陶器　灰釉系陶器は瓷器系陶器第Ⅱ類に分類される無釉の陶器である。一般的には「山茶碗」と称される。水入遺跡で出土した灰釉系陶器の器種には、椀・皿・鉢などがあり、出土遺物全体に占める割合では、椀・皿が圧倒的に多い。灰釉系陶器は、胎土に砂粒をほとんど含まず、器壁が比較的薄く仕上げられている北部系と砂粒を含む粗い胎土で、長石分の吹き出しなどが顕著である南部系に大別される。水入遺跡で出土する灰釉系陶器は、南部系がその大半を占め、北部系はほとんど見られない。

遺物の記述にあたっては、藤澤良祐氏（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、現在、愛知学院大学）の研究に依拠し、藤澤氏が提唱している型式名を用いている。尚、実測図を掲載した灰釉系陶器（椀・皿）の型式については、岡本直久氏（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）にご教示をいただいた。

土師器　土師器は皿・鍋・釜が中心であり、中世前半の遺物を灰釉系陶器が占めるのに対し、中世後半は土師器の鍋・釜がそれに替わる。

皿は、ロクロ成形と非ロクロ成形に区分される。西三河地域から出土する土師器皿は、ロクロ成形によるものが大半を占める傾向が指摘されているのであるが、水入遺跡の場合もやはり大部分はロクロ成

形であり、非ロクロ成形の土師器皿は少量である。胎土は、ロクロ成形・非ロクロ成形ともやや砂粒の多い、赤褐色を呈するものが中心を占める。但し、第８章戦国期に該当する土師器皿には、砂粒の混入が少なく、灰褐色を呈する胎土のものが増加する。

鍋・釜について、中世前半は口縁端部を内側に折り返し、器壁が薄く、外面にハケメ調整が施される「伊勢型鍋」が中心である。その後、中世後期には器種も増加し、内面に耳を持つ内耳鍋や体部外面に鍔を持った「羽釜」と称されるものが登場する。鍋・釜の呼称については、鈴木正貴氏の研究成果に基づき、内耳鍋は「くの字形内耳鍋」「半球形内耳鍋」「内彎形内耳鍋」に、釜は「羽釜」「内彎形羽釜」「茶釜形羽釜」と称する。

なお、陶磁器と区別するために土師器の実測図は断面にアミフセを施した。

施釉陶器　瓷器系陶器第Ⅰ類に分類される陶器。水入遺跡からは、「古瀬戸」「大窯」「連房」と称される灰釉や鉄釉を施した陶器が出土した。器種としては、椀・皿・鉢・壺などがあるが、全出土遺物量から見れば少量であり、記述に際しては灰釉系陶器同様、藤澤氏の研究成果に依拠した器種名を使用する。

ここで水入遺跡から出土した施釉陶器を概観しておく。「古瀬戸」については、蔵骨器として使用されたであろう瓶・壺類が前期に属することを除けば、大半が後Ⅳ期に該当する。「大窯」製品については、出土量で最も多くを占める器種は擂鉢であり、次いで天目茶碗となる。出土遺物量は大窯第２段階と第４段階が多く、連房へ入ると第１・２小期を境として、施釉陶器の出土量は激減する。

なお、水入遺跡から出土した瀬戸美濃窯産の施釉陶器については、藤澤良祐氏にご教示いただいた。

焼き締め陶器　焼き締め陶器は瓷器系陶器第Ⅲ類に属する陶器で、いわゆる「常滑」・「渥美」と称されるものである。出土した器種は、壺・甕・鉢が中心であるが、鉢については胎土により２種類に区分が可能であり、灰釉系陶器と同じ胎土の鉢については灰釉系陶器に含めて記述している。ここでの鉢は、焼き締め陶器と同じ胎土の遺物に限定している。

水入遺跡では、この類の出土量は少ない。遺物の出土傾向は遺構の性格に左右される可能性が高いのであるが、壺・甕は居住域が展開する戦国時代においてもその出土は増加を見ない。最も壺・甕の出土を見るのは、近世後半以降水入遺跡が耕作地として再開発が行われるようになった頃からである。また、「渥美」産と思われる遺物は壺片が２点確認されているのみである。

貿易陶磁　貿易陶磁はすべてが中国磁器であると考えられ、青磁がその大半を占め、少量の白磁が出土する。器種は青磁・白磁ともにほとんどが碗であり、他に皿や香炉、合子が少量出土している。遺物の年代観は、13 世紀代が中心であり、それを前後する遺物はほとんど認められない。

貿易陶磁の年代観については、大庭康時氏（福岡市教育委員会）にご教示をいただいた。

第 2 節　竪穴建物

(1) 概観

本節において取り扱う“竪穴建物”とは、古代の竪穴住居と同じく、地面を掘り込んで壁の一部とし、上屋を伴う（であろう）遺構を意味する。“竪穴住居”としなかった理由については、今回の調査では該当遺構からは竈など積極的に生活を示す痕跡が確認されておらず、“住居”とするには確証に欠けるため、建物として扱う。

水入遺跡で確認された竪穴建物は大屋敷地区の99ASB07 1 棟を除き、その他はいずれも下糟目地区で検出されている。

(2) 遺構各説

99ASB07　調査区南西部 IG14d グリッドで検出された隅丸長方形の竪穴建物。長軸 6.1m、短軸 4.1m を測る。後世の削平をうけたためか、検出面からの掘形が浅く、深さは 0.1m であった。遺構の遺存状況はあまり芳しくなく、かろうじて建物南半部に周溝が残存する程度で、上屋を支える柱穴については、明確にし得なかった。竪穴を覆っていた埋土は、ブロック状の地山土や炭化物、焼土塊が多く観察された。長軸は N-45°-W を示し、軸線は 99A 区で確認された古代の竪穴住居とほぼ同方向を示す。

灰釉系陶器を中心に若干古代の遺物が混入するが、柱穴とおぼしき土坑からも灰釉系陶器が出土している。このことから、発掘調査時には SB07 は古代の竪穴建物 SB06 より以前に構築されたと考えたが、遺構の切合い関係が逆であると判断した。但し、遺物に関しては破砕された感が強い。3234 から 3239 までは灰釉系陶器椀。藤澤編年の 6 型式と 7 型式が混在する。3240 は灰釉系陶器鉢の口縁部。

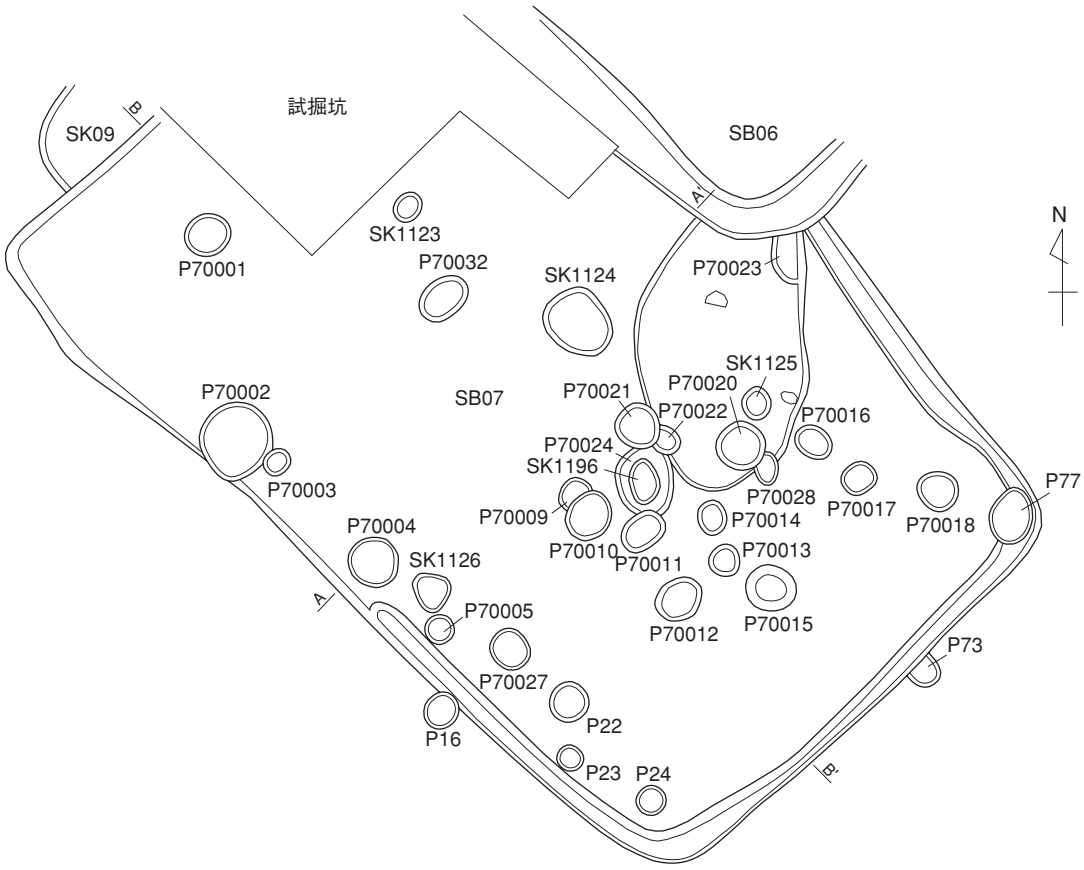
99ESK900　調査区北西壁際 VIIII9a グリッドで検出。遺構の規模は長・短軸ともに 1.9m を測る。SK600 により西壁は切られているため、本来は東西に長い隅丸長方形の竪穴建物であったと思われる。長軸と思われる東西軸は N-78°-W を示す。遺構上部が削平されていると思われ、竪穴の深さは数 cm という程度であった。そのため、周溝や柱穴は検出できなかった。また竪穴周辺にも柱穴とおぼしき土坑は確認されておらず、上屋構造は不明。調査時には SK= 土坑扱いをしたが、遺物の出土状況から竪穴建物の可能性が考えられると判断し、ここに掲載する。

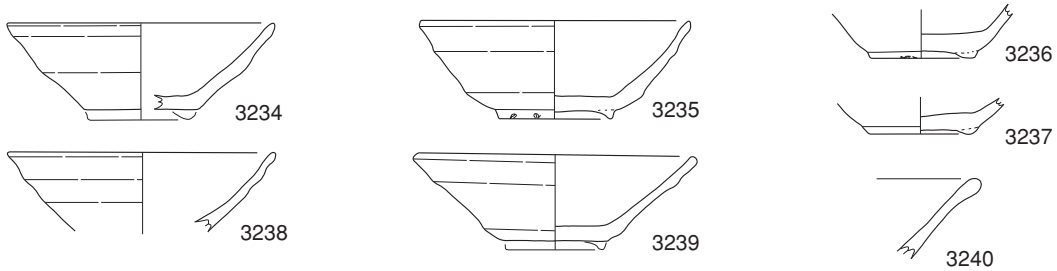
竪穴の埋土である暗褐色粘質シルト中からは円・角礫と共に灰釉系陶器や土師器鍋・皿などが出土している。これらの遺物はいずれも床面直上からの出土である。3241 ～ 3250 はいずれも灰釉系陶器の椀である。3250 は高台は認められず、剥離の痕跡もないことから本来的に高台をもたないと思われるが、その他の特徴から判断すると 6 型式に属する可能性が強い。その他の椀については、3241、3242 が 6 型式であり、残りは 7 型式に属する。

99GSB14　調査区北西部中央より VIIII6k グリッドで検出。竪穴のプランは 4.2 × 3.4m の隅丸長方形を呈し、南辺は近世後半以降の開削により削平をうけており、構築時の竪穴規模は不明。長軸の方位は N-4°-E を示す。検出面からの深さは 30cm ほどであり、北側に向かって掘形はやや深くなっている。東壁がほぼ垂直に立ち上がる以外は緩やかな立ち上がりであり、周溝等の痕跡は認められなかった。床面で

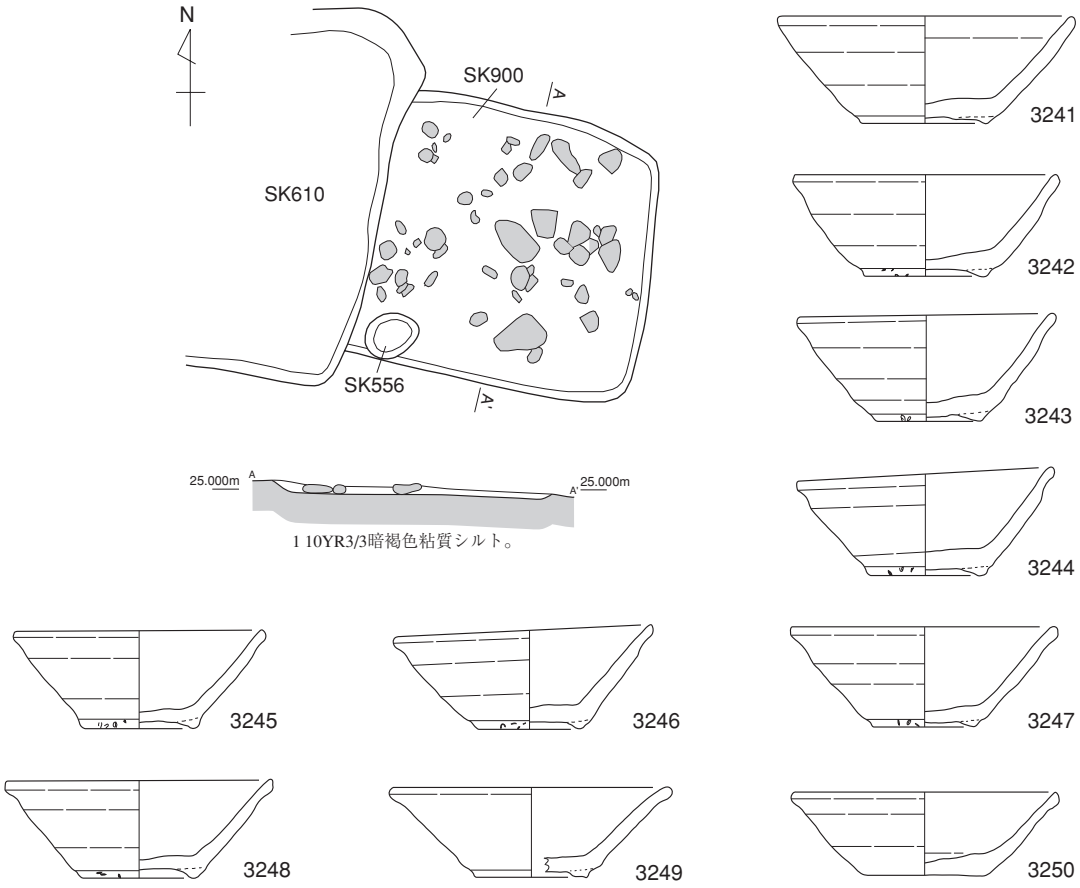
検出し得た土坑は南壁際に2基のみで、柱穴もしくはその他の機能を持ってSB14に伴う遺構として掘削されたか否かは明確ではない。したがって柱穴を竪穴外に想定する必要があるのだが、竪穴周辺に土坑は検出されたが、柱穴を想定しうる規格性を持った土坑列は認められなかった。竪穴の覆土は暗褐色粘質シルトが中心で、そこに地山土（褐色粘質シルト）の斑土や焼土塊が混入する層序が観察された。

他の竪穴建物同様、大小の礫と共に灰釉系陶器や土師器が出土している。3254・3255は灰釉系陶器皿。底径に比べて高さが低く、体部は直線的に立ち上がっている。藤澤編年7型式。3256 ～ 3259は灰釉系





第408図　99ASB07（遺構図1:50、実測図1:4）

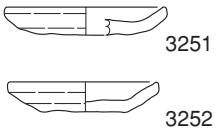


第409図　99ESK900（遺構図1:50、実測図1:4）

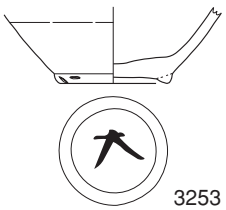
陶器椀。3257は高台が剥離した痕跡が観察された。3256は6型式、3259が8型式、その他の椀は7型式に属する。3262・3263は土師器皿。ともにロクロ成形による。3262の底部には板目状圧痕が観察される。形状は灰釉系陶器皿に類似し、それを模して作成されたことが推測される。3264は「伊勢型鍋」の口縁部。折り返しが短く、比較的口縁端部は厚めである。3265は古瀬戸の四耳壺口縁部。内外面ともに灰釉が施される。古瀬戸前1ｂ期。3261は常滑産甕、6ｂ期。3266・3267は陶丸。3268は灰釉系陶器皿の底部を利用した加工円盤。水入遺跡では加工円盤は数点確認されるのみである。帰属時期は灰釉系陶器椀の藤澤編年6型式。

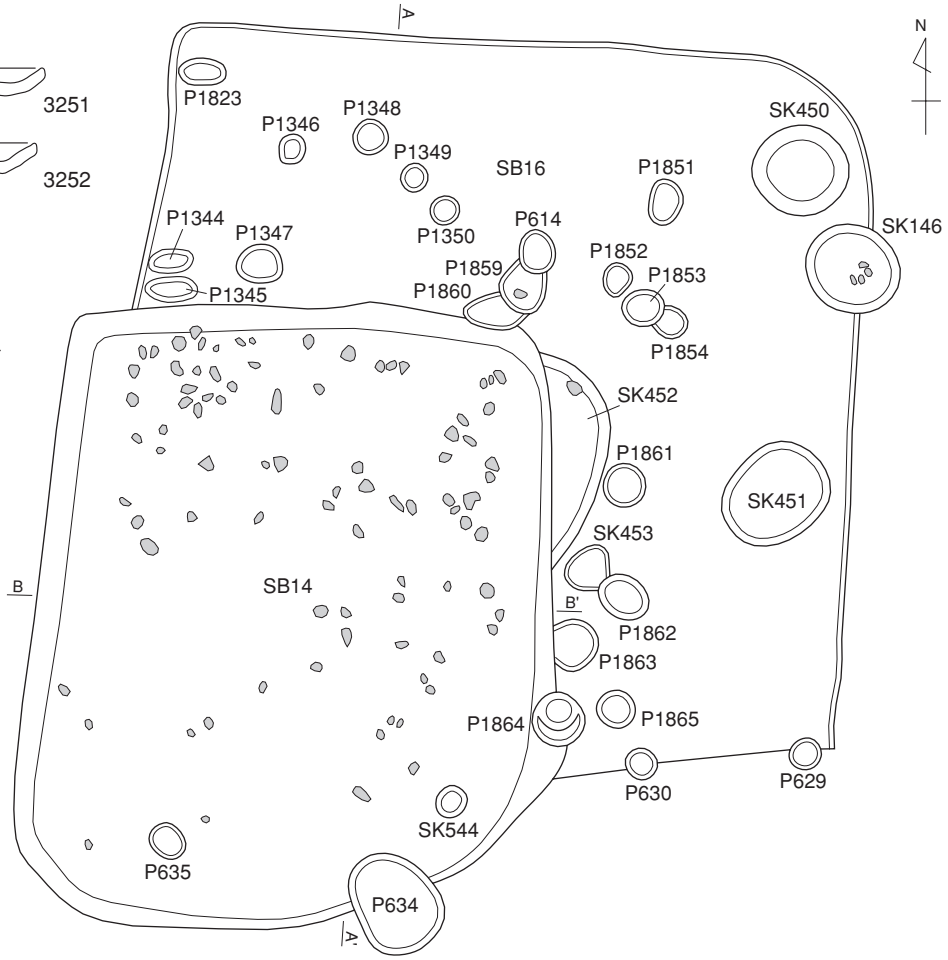
99GSB30　調査区南西壁中央部VIIII12kグリッドで検出。竪穴は長軸5.5m、短軸4.2mの長方形に近いプランを呈する。長軸方向はN-7°-Eを示す。東・南壁がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、北・西壁はやや緩やかな立ち上がりとなっている。埋土の断面観察によりこの竪穴建物は、一旦竪穴全体を埋め戻し、竪穴の規模はそのままで少なくとも1度は作り直されていることが判明した。つまり、最初に掘削した竪穴を短期間で地山土と思われる暗褐色粘質シルトで埋め戻し、床面を新たに構築し、建物として再利用している。この暗褐色粘質シルトが張り床である可能性も考えられるのだが、埋め戻された覆土下面から柱穴と思われる遺構が確認されていること、この覆土直上に地下水によると思われる鉄分の沈着層が認められ、水はけが悪く張り床としての機能を果たさないと思われること、などから埋め戻しによる床面の作り直しと判断した。99GSB30（古）の柱穴と思われる土坑は南壁際で検出された99GP1497・1499

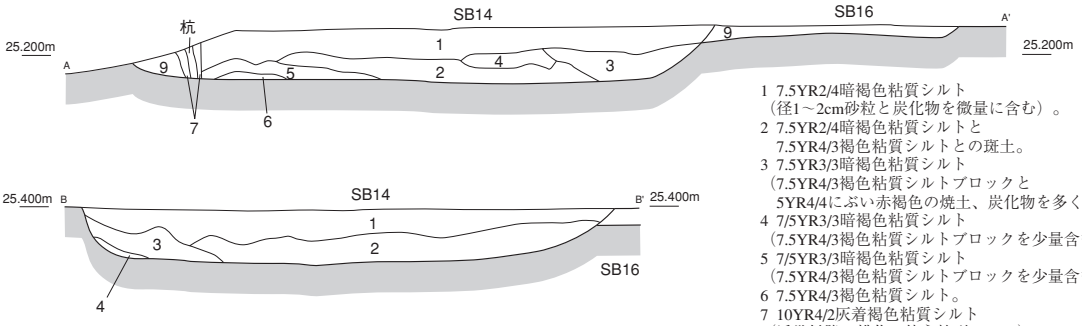
SB16出土遺物



SB14出土遺物

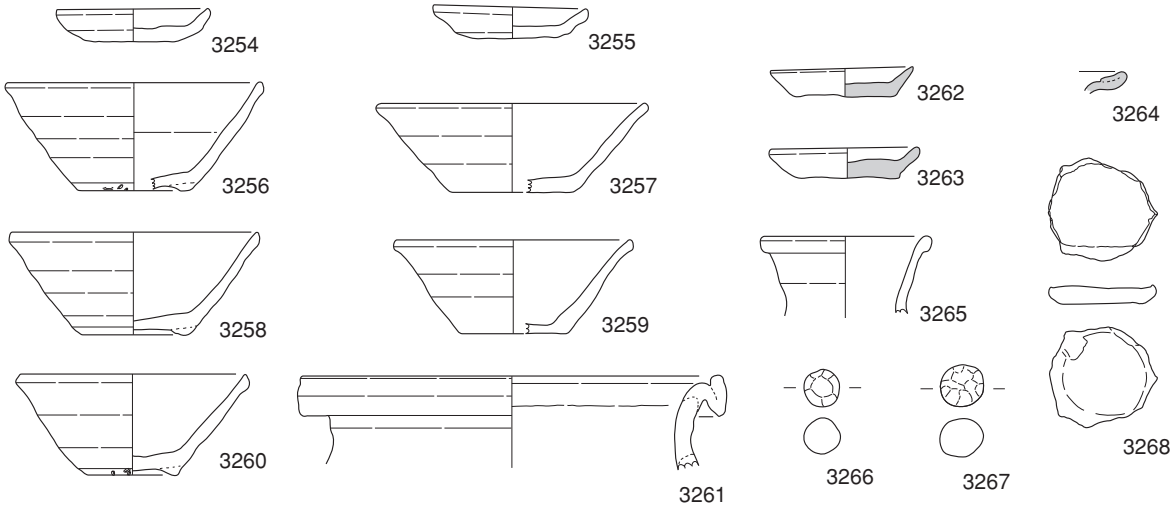




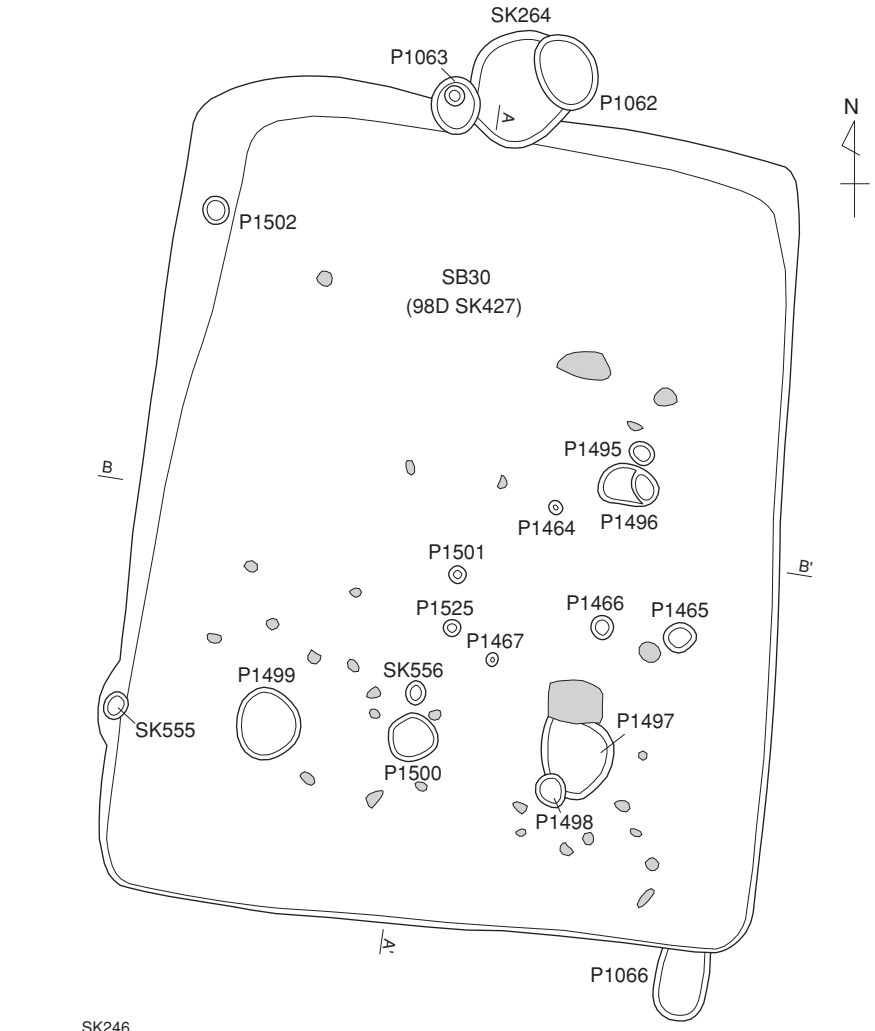


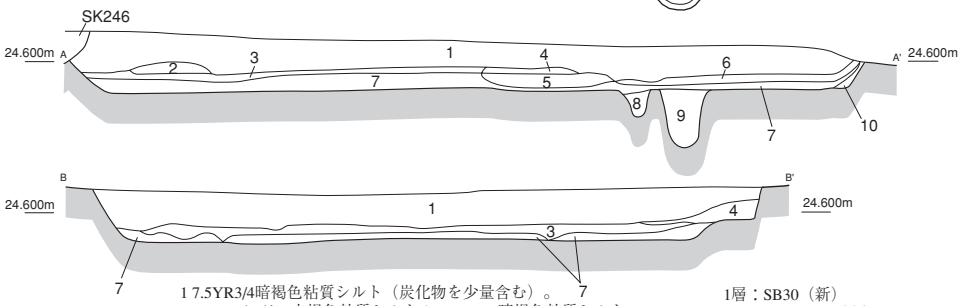
1 7.5YR2/4暗褐色粘質シルト
（径1～2cm砂粒と炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR2/4暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/3褐色粘質シルトとの斑土。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと
5YR4/4にぶい赤褐色の焼土、炭化物を多く含む）。
4 7/5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
5 7/5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
6 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
7 10YR4/2灰着褐色粘質シルト
（近世以降の耕作に伴う杭列の１つ）。
8 １に同じ（１が７により分断）。
9 7.5YR4/37.5YR3/4暗褐色粘質シルト。

SB14出土遺物



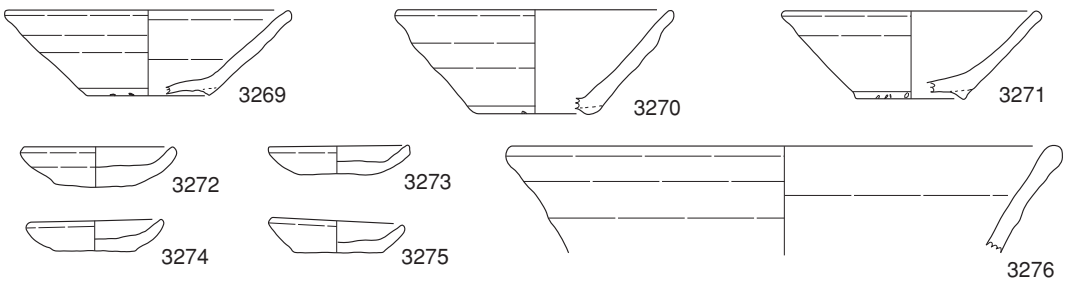
第410図　99GSB14・16（遺構図1:50、実測図1:4）





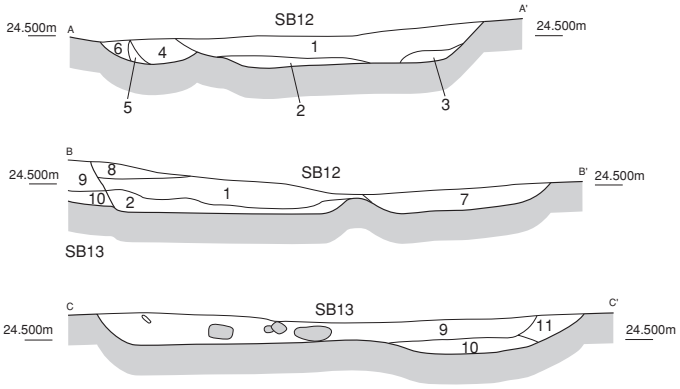
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
2 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト＋7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
3 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト（ベースと同じ）。
（全体にベースの上で埋め戻しがされている感あり、
7の層の境界部に地下水の鉄分が沈着している。→部分的にブロック状を呈する。）
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（5層の影響で4と5の境界部分に地下水のFe分の沈着がみられる）。
5 3と同じ。
6 3と同じ（但しこの層はブロック状を呈する部分はなく均一に埋め戻されている）。
7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを多く含み、炭化物を少量含む）。
8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
9 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7より7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
10 7.5YR4/6褐色粘質シルト（ベースの崩落に近い）。

1層：SB30（新）
2～10層：SB30（古）

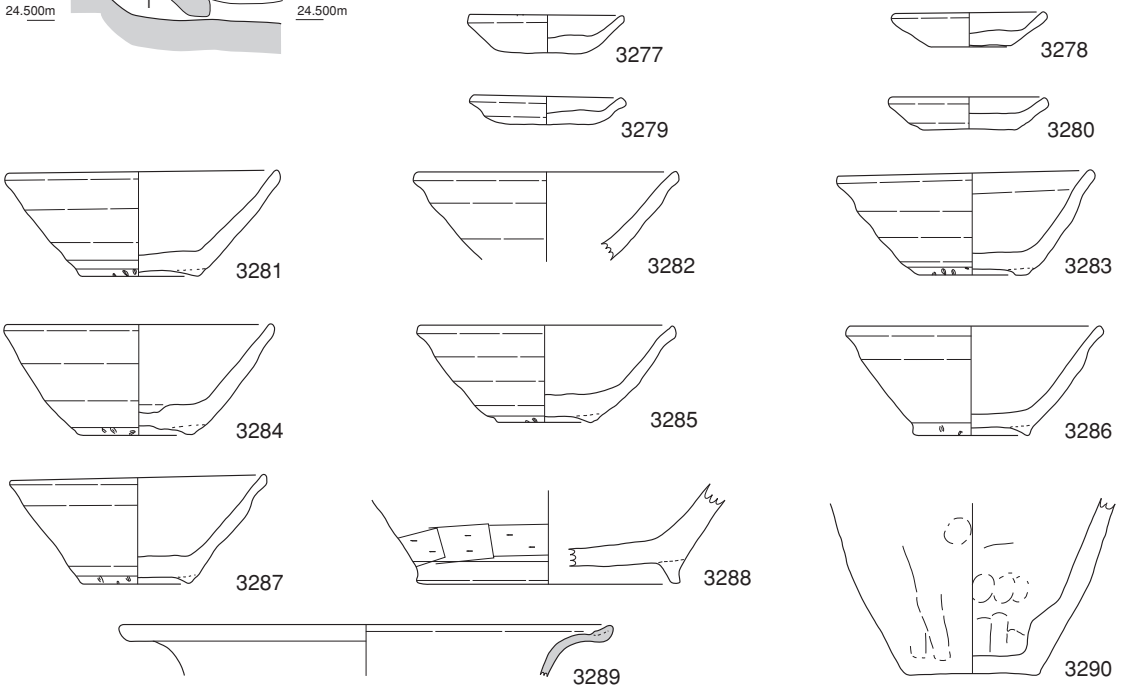


第411図　99GSB30（遺構図1:50、実測図1:4）

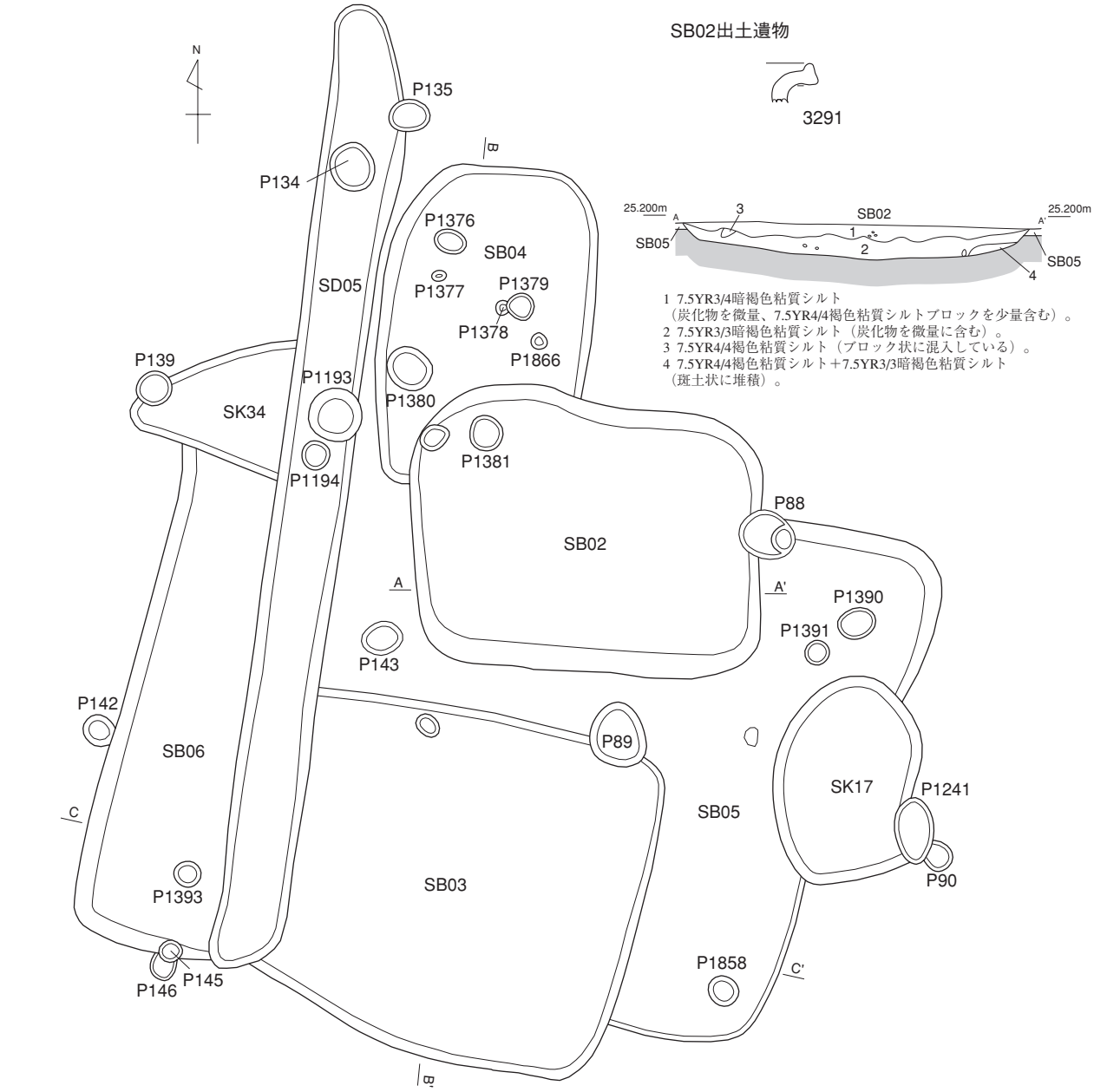




1 10YR3/1黒褐色粘質シルト。
2 10YR4/1褐灰粘質色シルト
（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含み、
粘性ややは弱い）。
3 10YR3/2黒褐色粘質シルト＋7.5YR4/6褐色粘質シルト。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
5 7.5YR4/6褐色粘質シルト
（10YR4/2灰黄褐色粘質シルトを微量に含む）。
6 10YR5/1褐灰色粘質シルト
（炭化物を微量に含み、粘性やや弱い）。
7 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
8 10YR3/3暗褐色粘質シルト
（径1～2mmの細粒含み、粘性やや弱い）。
9 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（径1～2mmの細粒含み、粘性やや弱い、
炭化物を少量含む）。
10 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト
（9よりやや粘質強く炭化物を微量に含む。
7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
11 10YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/5褐色粘質シルトブロックと
炭化物を微量に含む）。



第412図　99GSB12・13（遺構図1:50、実測図1:4）



第413図　99GSB02～06（遺構図1:50、実測図1:4）

の２基である。これらの土坑は間層上面では検出できなかった。その他のピットも間層下面で検出されており、99GSB30（古）に関連する可能性が高い。これに対し99GSB30(新)に関連すると思われる柱穴等は確認されておらず、前述の99GSB14同様上屋構造は判然としない。

遺物は間層より下位を中心に出土しており、基本的には99GSK30（古）に属すると考えられる。灰釉系陶器が中心であるが、その多くは小片である。図化し得た遺物は灰釉系陶器のみであり、3269～3271は椀、3272～3275が皿、3276は鉢である。帰属時期は藤澤編年の６・７型式が混在する。

99GSB12・13　99GSB13は調査区南東部VIIII15rグリッドで検出された不整形なプランを呈する竪穴建物。東側をSB12によって削平されているため掘削時の竪穴のプランは不明である。竪穴の規模は検出部で長軸3.3m、短軸2.1mで深さは0.2m前後であった。長軸はN-51°-Wを呈する。上屋を想定しうる柱穴は、竪穴内及び周辺では検出されなかった。

99GSB12は東辺がやや短めの隅丸台形状のプランで、深さ0.2～0.3m、南北軸はN-4°-Wを示す。竪穴中央部がやや高まりを持ち、柱穴と思われるピットが１基確認された。

99GSB13の埋土中から大小の礫と共に、灰釉系陶器を中心とした遺物群が床面直上から出土した。3277～3281は灰釉系陶器の皿と椀。大半が藤澤編年の７型式に該当するが、一部６型式が混在している。7054は灰釉系陶器鉢の底部。体部下半はケズリによる調整が認められる。内面は摩滅しており、使用の痕跡が確認できる。3289は伊勢型鍋。体部外面にはススが付着している。3290は常滑産壺の底部。

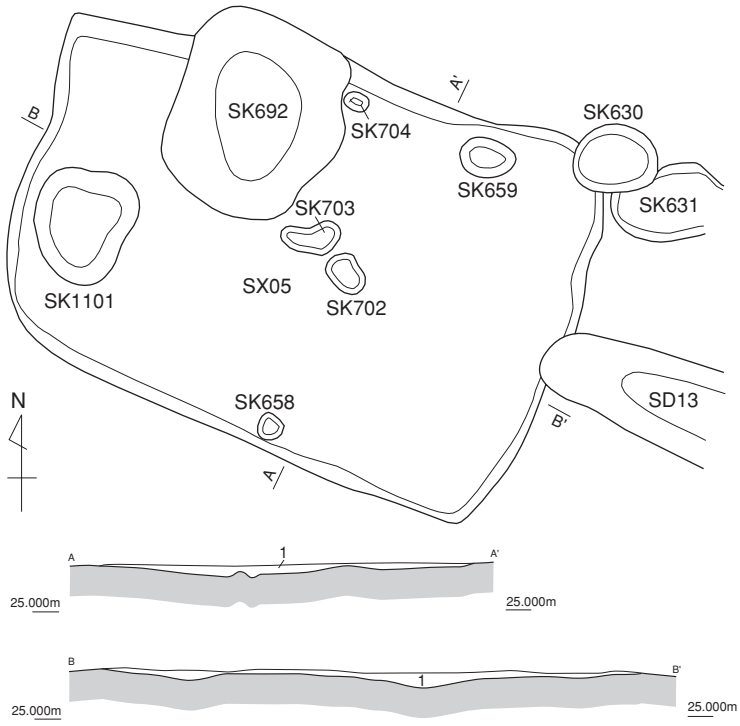
99GSB12については、ほとんど遺物の出土は見られなかった。

99GSB02・03・04・05・06・16　99GSB02～06は調査区北東壁中央部VIIIJ8bグリッドで、99GSB16は調査区北西部中央よりVIIII6Kグリッド、99GSB14と一部重複する状態で検出された竪穴建物。６棟とも掘形が非常に浅い。各竪穴建物の形状は以下の一覧のとおり。

出土遺物は当該期の灰釉系陶器を中心とするが、他の竪穴建物のようなまとまった出土状況とは異なり、小片の遺物が少量出土するにとどまっている。

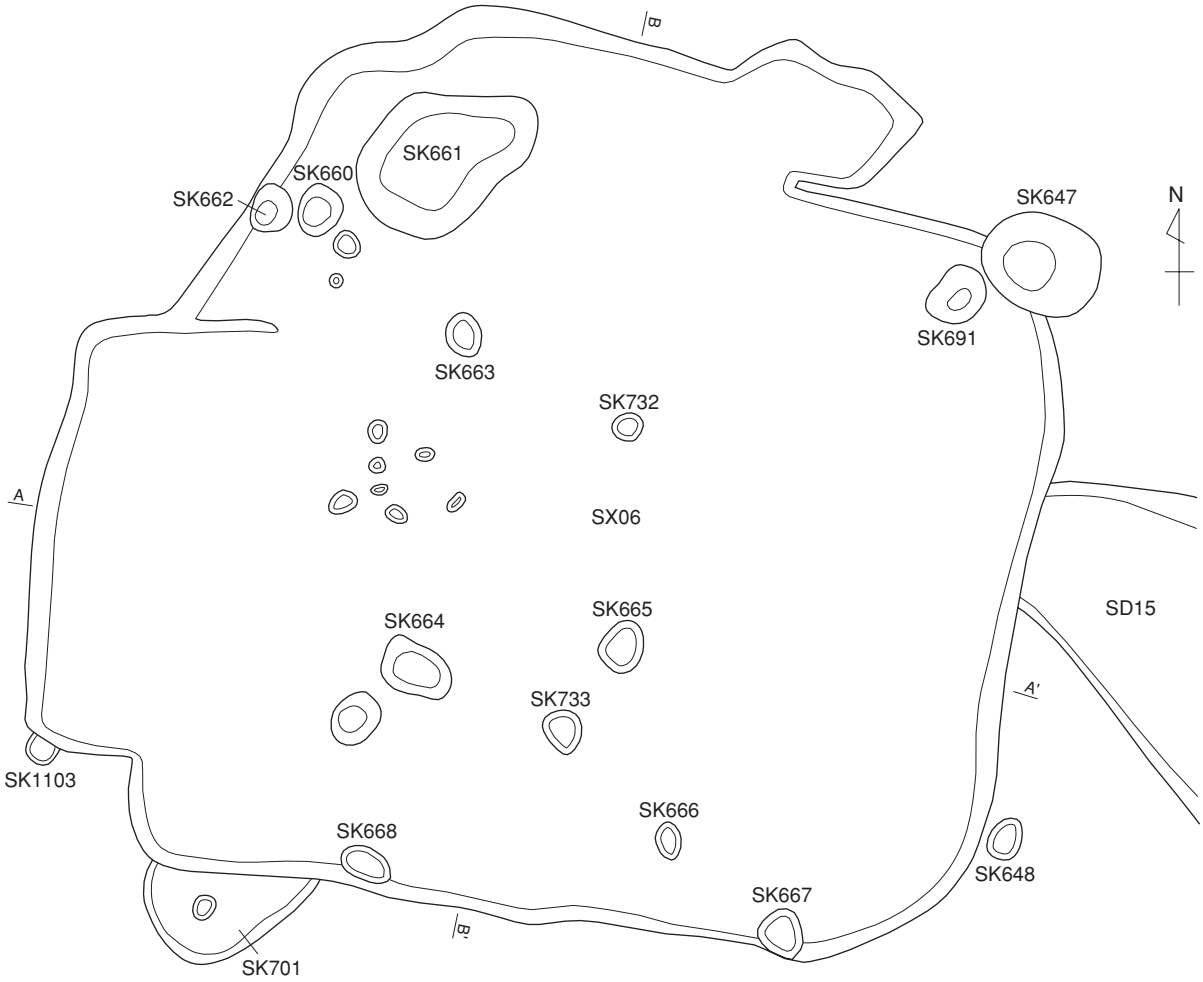
99ISX05　調査区南部VIIIJ1eグリッドで検出。竪穴のプランは東西軸3.8×南北軸2.6mの長方形を呈し、南北軸方位はN-20°-Wを示す。検出面からの深さは0.1m程度であった。柱穴、周溝は確認できなかった。

出土遺物は少量であるが、灰釉系陶器片が中心であることからこの時期の遺構であると判断した。



第414図　99ISX05平面図（1:50）

99ISX06　調査区南部VIIIJ3 f グリッドで検出。竪穴のプランは南北軸5.9m、東西軸6.5m、深さ0.2mを測る。南北軸はN-8°-Eを示す。西壁および北壁には張り出し部がついている。検出されたプランが不整形なため遺構検出段階では複数の竪穴建物の切合いを想定したが、断面観察の結果、切合い関係は確認されず、99ISX06に伴うと判断した。この張り出し部の機能は明らかにできなかったが、西壁突出部周



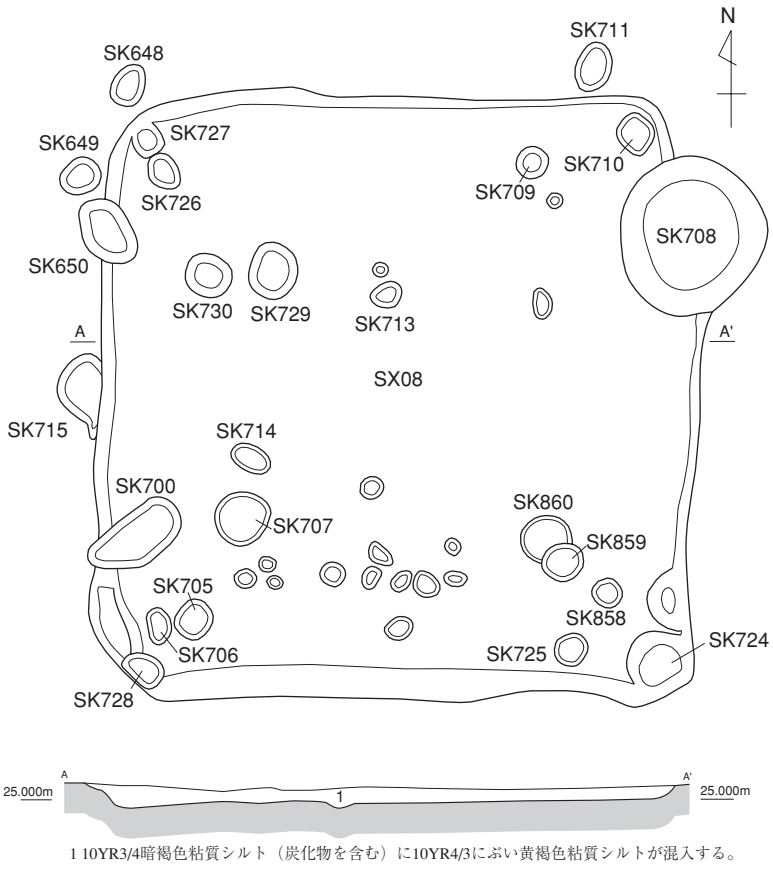
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）に7.5YR4/4褐色粘質シルトと5Y6/3オリーブ黄色粘質シルトが混じる。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）に7.5YR4/6褐色粘質シルトと5YR3/4暗褐色粘質シルトが混じる（焼土）。
3 10YR2/3黒褐色粘質シルトに7.5YR4/6赤褐色粘質シルトと7.5YR2/4極暗赤褐色粘質シルトが混じる（焼土）。
4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）に10YR4/4褐色粘質シルトが混じる。

第415図　99ISX06（遺構図1:50、実測図1:4）

辺には、炭化物や焼土塊を含む層序が観察され、竈などの施設が破壊された可能性が考えられる。上屋についても竪穴床面で複数の土坑が検出されたが、規則的に並ばず柱穴と断定することはできなかった。また、竪穴周辺にも多数土坑が検出されたが、柱穴列とおぼしき組み合わせは認められなかった。但し、南壁については掘形が浅くなっていることから、出入口であったことも想定できる。

3292は灰釉系陶器椀の底部。内面は摩滅しており、使用されていた可能性が高い。3293～3295は灰釉系陶器皿。椀・皿ともに帰属時期は藤澤編年の7型式。但し、3293は8型式の新しい段階に下がる可能性を持つ。3296はロクロ成形の土師器皿。3297は「内彎羽釜」と称される土師器鍋。最大径が体部中央付近にあり、口縁下に位置する鍔は本来の役割を果たしていない。この遺物は14世紀にまで下がるものであり、遺構の廃絶時期を示す遺物であると考える必要がある。3298は常滑産甕の口縁部片。6a期と思われる。

99ISX08　調査区南部VIIIJ3fグリッドで検出されたほぼ正方形のプランを呈する竪穴建物で、東西軸4.0m、南北軸4.0m、深さ0.2mを測る。南北軸はN-1°-Eでほぼ真北にちかい。今回の発掘調査で確認された竪穴建物のなかで、古代竪穴住居の形状に最も近い遺構である。竪穴の床面は平坦で、掘形はやや浅いが壁はほぼ垂直に立ち上がっており、主柱穴と思われる土坑が3基(SK707・729・860)確認されている。周溝は確認されなかった。



第416図　99ISX08平面図（1:50）

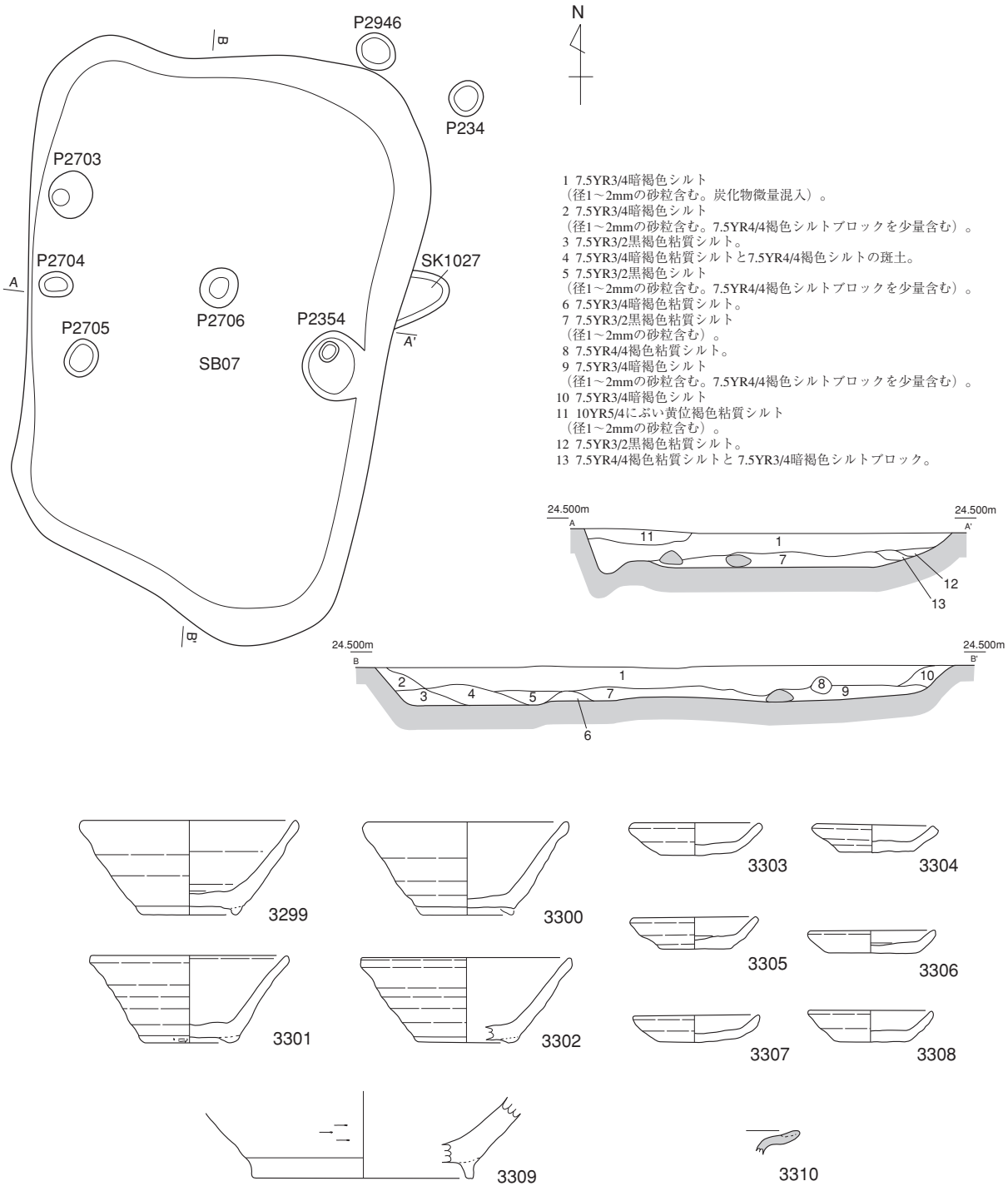
遺物は細片であるが、覆土および手中穴から灰釉系陶器が出土していることから、中世の竪穴建物と判断した。

98DSB07　調査区北東部中央よりVIIII17fグリッドで検出。竪穴はやや不整形な隅丸長方形のプランを呈し、南北軸4.0～4.7m、東西軸2.8～3.2m、深さ0.3mを測る。南北軸はN-8°-Eを示す。壁は東・北辺は緩く、南・西辺で垂直に近く立ち上がっている。このことから北東部のやや張り出した部分がスロープ状の出入口であった可能性が考えられる。この竪穴建物も98DSB09同様床面直上から大小の礫と共に灰釉系陶器や土師器などが出土している。礫の中には被熱したものも認められ、埋土中から焼土塊が観察されていることから、内部で火を使用していたことが考えられる。

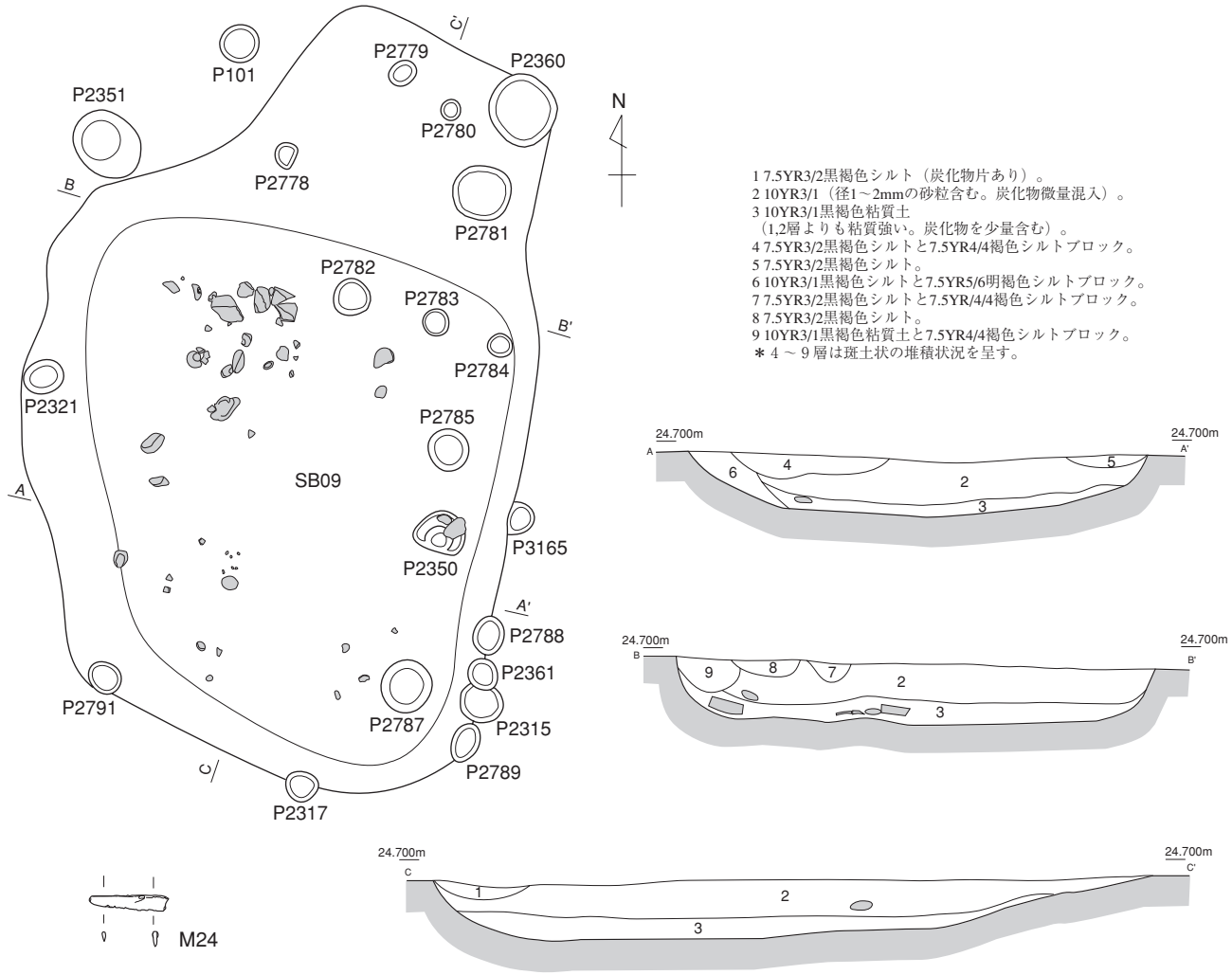
3299～3308は灰釉系陶器の椀・皿。3303が藤澤編年5型式、3308が同6型式である以外はいずれも7

型式に相当する。3309は灰釉系陶器鉢。内面摩滅による使用が認められる。3310は「伊勢型鍋」の口縁部片。

98DSB09　調査区北東壁近くVIIII14kグリッドで検出。竪穴は北壁がスロープ状に張り出した不整形なプランを呈する。他の壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。この形状から判断すると北壁部分が出入口の役割を果たしていたと思われる。規模は5.2×3.6m、深さ0.4mを測り、長軸はN-12°-Eを示す。床



第417図　98DSB07（遺構図1:50、実測図1:4）



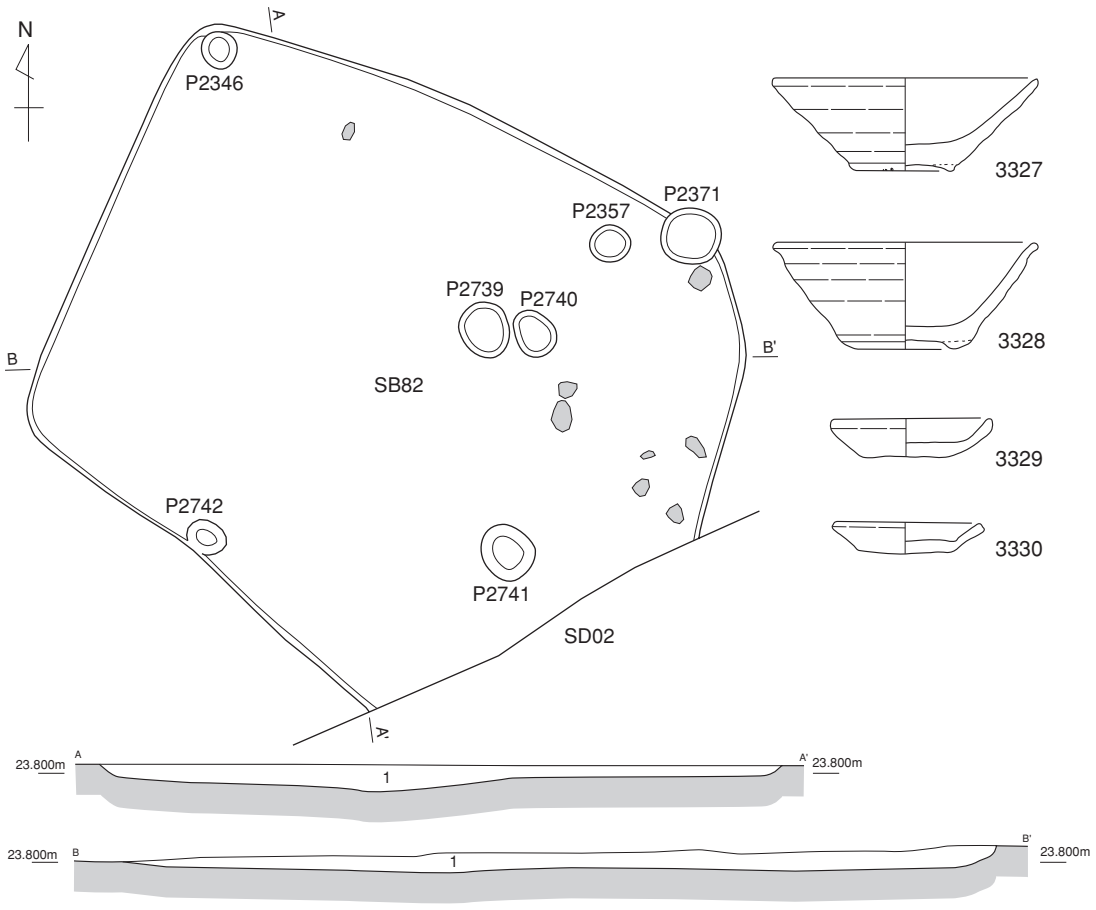
第418図　98DSB09（遺構図1:50、実測図1:4）

面は水平に作られており、98DSB07同様大小多数の礫が散乱した状態で検出されている。

床面直上から大小の礫と共に、灰釉系陶器などが出土している。98DSB07から出土した礫群同様、一部被熱したものも認められ、内部で火が使用されていたことが分かる。礫の材質は、花崗岩が大半を占め、遺跡東を流れる矢作川水系で容易に入手可能な礫である。M24は鉄製刀子。99DSB09北西部に集中する礫群の中から出土した。両端は欠損する。3311～3316は灰釉系陶器椀。3313・3315は藤澤編年8型式、その他は7型式。3317～3320は灰釉系陶器皿。3321は著しい焼ひずみがみとめられ、型式は不明。その他の皿は6型式と思われ、椀の帰属時期とのずれが生じる。3322～3324は土師器皿。いずれも西三河地域で顕著に認められるロクロ成形である。3325・3326は灰釉系陶器鉢。

98DSB82　調査区中央部南東よりIXI8dグリッドで、竪穴南東角を98DSD02に切られた状態で検出された竪穴建物。南北軸4.7m、東西軸4.3m、深さ0.1mの隅丸長方形のプランを持つ竪穴で、南北軸はN-21°-Eを示す。埋土は黒褐色粘質土の単純層で、少量の炭化物と径1～2 mm程度の砂粒が観察された。竪穴内に土坑が数基確認されたが、規則性を持たず柱穴とは考えにくい。また、竪穴周辺にも柱穴と思しき土坑が検出されていない。

灰釉系陶器片が少量出土しており、3327～3330はいずれも灰釉系陶器椀と皿。藤澤編年の6型式と7型式に相当する遺物である。



1 2.5YR3/2黒褐色粘質土（径1～2mmの砂粒と炭化物を含む）。

第419図　98DSB82（遺構図1:50、実測図1:4）

第３節　掘立柱建物

(1) 基本方針と概観

水入遺跡で確認された掘立柱建物は、327棟にのぼり、これらの掘立柱建物が所属する時期は古代から近世前期までの長期間にわたる。そこで、本報告書では、以下の原則に基づき掘立柱建物について確認作業を行った。

1　掘立柱建物を想定する際、基本的に長方形もしくは正方形のプランで、柱通りを考える。柱通りが悪く、直線でない場合は除外する。柱間は尺で想定し、整数もしくは五寸単位で表現できる組み合わせを考える。

2　柱穴の深さについては、あくまで遺構検出面からの深さであり後世の削平をうけている可能性が考えられ、かならずしも建物存在時の深さを反映していない。したがって、建物を想定する際に柱穴の深さは参考程度とし、仮に浅い柱穴であっても（数cm程度）柱通りを優先させた。

3　調査区外へ続いてゆく可能性のある建物については、できるかぎり建物のコーナーが３個所以上推定できる建物とする。

4　建物の柱穴が欠如する組み合わせは基本的に考えない、他の柱穴の状況や周辺遺構のあり方から判断して、妥当である場合は建物として認定する。

5　建物の推定案は永井・川井が個別に想定した建物を２人で検討し、共通して推定復元した建物及び周辺遺構との関連性や空間利用の観点から検討し、妥当と思われる建物を確定した。

しかし、今回推定した掘立柱建物の大半は柱穴から遺物が全く出土せず、各建物の時期を決定することは困難であった。さらに、柱穴の重複が激しく今回確定した掘立柱建物以外にも永井・川井ともに異なる建物案を相当数提示することができている。したがって、今回の建物案が正確に当時の状況を反映しているというのではなく、今後の検討のための原案といった意味合いを含んでいることをことわっておきたい。

鎌倉時代（遺物が出土せず時期の特定が困難で、周辺遺構との関連等により“中世”という範疇で捉える必要がある建物を含む）として考えることができる掘立柱建物は全部で186棟復元することができた。こられの建物のうち、大屋敷地区に展開した建物は16棟と全体の１割以下にとどまる。その他の建物はすべて下糟目地区において確認された。下糟目地区に設定された９調査区のなかでもその展開には粗密が認められ、谷地形から少し内部に入る調査区に集中していることが窺える。

この時期に属する建物の柱穴の掘形は20～30cm前後のものが多く、99I区に展開する一部の建物に大型の掘形を持つ柱穴が確認されている。残念ながら柱として使用された部材は一切残っておらず、材質等は明らかにし得なかった。

建物の規模としては、梁行２間×桁行３間の建物が最も多く、次いで梁行１間×桁行２間の建物や梁行･桁行ともに１間の建物が多く認められた。この規模の建物は隣接して構築されているエリアが多く、２棟で１セットとして何らかの機能を果たしていた可能性が考えられる。そのことは同一エリアに頻繁に建替えが行われていることからも裏付けることができる。また、一部に庇（四面および南面）を持つ

建物が存在しており、他の建物とは異なる性格を有する建物が存在した可能性を示している。愛知県下で確認されている多くの中世集落は、溝で囲まれた空間に建物群が展開することが多い。水入遺跡の南側に位置する天神前遺跡や郷上遺跡などでも溝で囲まれた屋敷地が確認されている。しかし、水入遺跡の場合、鎌倉時代を含む中世前期の区画溝は確認されておらず、広大な空間に掘立柱建物が展開していたと思われる。一部柵列も確認されてはいるが、柵列による区画を想定することは困難である。したがって庇を有する建物を中心に区画施設を伴わない空間が複数存在したと考えることが妥当であり、その意味合いからも庇を持つ建物は注目される。

次に掘立柱建物の軸線についてみてみる。今回建物の軸線は真北と建物の梁行で構成される角度を計測した。その結果、軸線の方向については各調査区毎で異なっていることが判明した。大屋敷地区は後述する戦国時代の建物も含め、軸線は大溝（SD01）に規制されており、N40W 前後と N40E 前後に集中している。この 2 方向は東西棟（梁行が東西に長い建物）と南北棟（梁行が南北に長い建物）がほぼ直交する角度であり、まさに大溝に沿った空間利用がなされていることを証明しているものといえる。これに対し、下糟目地区に展開する建物の軸線はかなりのばらつきを示している。例えば98D区においては、あえてまとまりを求めるとすればN10E もしくは N20E 前後に集中しているように思われる。また99G区ではN5E付近にほぼ集中しており、大屋敷地区同様これに直交する軸線であるN85W周辺にもある程度のまとまりを認めることができる。では、これが何に規制されているかであるが、大屋敷地区の大溝のような明確な要因を下糟目地区で明らかにすることはできなかった。あくまで推測の域は出ないが、このことに言及するのであれば、谷地形に近い調査区は谷の展開の仕方に、谷から離れた調査区では先に述べた庇を持つ特殊な建物（99GSH32 は N2W、99ISH07 は N1W を示す）に規制されているのかも知れない。

本来であれば、ここで個々に掘立柱建物についての記述をするのであるが、総数があまりに多いため個別の状況は一覧表にまとめることで代わりとする。一覧表の項目については、（ア）遺構番号は竪穴建物と区別するためにSHの記号を使用し、調査区を併記する方法をとった。（イ）軸線は先に述べた方法で計測した。但し一覧表のスペースの関係から角度は数字のみにて表記した。（ウ）梁行×桁行のうち、調査区外へ建物が展開する場合や他の遺構により削平をうけている場合はカッコを付けた推定値で記述した。（エ）時期については、いずれの表記もあくまで建物の上限を示している。表記の意味については、遺物が出土した柱穴で遺物の時期が判明する場合は最も新しい遺物の時期を記載した。遺物が出土しても時期が詳細に特定できない場合（灰釉系陶器の体部片など）は“中世”または“中世後期”、遺物が出土せず他の遺構との関連性等から判断した場合は“中世か”または“中世後期か”と表記した。

遺物が出土した柱穴は少なく、図示しうる遺物はさらに少量であった。

遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　考
98BSH05	N41E	1 × 3	中世か	やや小型、単独棟（他の建物との重複なし）
98BSH08	N40E	2 × 3	中世か	単独棟、98B2SX01脇に構築
98DSH00	N7E	×	13前半～	
98DSH07	N8W	2 × 2	13後半～	単独棟、２×３の可能性あり
98DSH09	N26E	2 × 3	14前半～	98DSH10と重複、東ー西方向への建替えか？新旧関係は不明
98DSH10	N28E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	98DSH09と重複、東ー西方向への建替えか？新旧関係は不明
98DSH16	N64W	1 × 3	中世か	やや小型の単独棟。古代竪穴住居を切る。
98DSH19	N23E	2 × 3	13後半～	98DSH20と重複。東ー西方向への建替えか？新旧関係は不明。土坑墓脇に構築
98DSH20	N23E	2 × 3	13後半～	98DSH19と重複。東ー西方向への建替えか？新旧関係は不明。土坑墓脇に構築
98DSH22	N20E	2 × 2	中世か	単独棟、土坑墓を切る。
98DSH24	N18E	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	方形建物。98DSH25と重複。98DSH25～29とのセット関係、建替え関係を想定可能。
98DSH25	N19E	2 × 3	13後半～	総柱建物の可能性あり。土坑墓を切り、戦国期の竪穴建物に隣接する。
98DSH26	N21E	2 × 3	13後半～	土坑墓を切り、戦国期の竪穴建物に隣接する。98DSH24～29でのセット関係、建替え関係を想定可能。
98DSH28	N19E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	98DSH24～29でのセット関係、建替え関係を想定可能。
98DSH29	N20E	2 × 3	12前半～	98DSH26と並列。セット関係または建替え関係の推定可能。
98DSH30	N24W	2 × (3)	中世か	古代竪穴建物を切る。98DSH30～32が重複、建替えの可能性あり。（但し新旧関係は不明）
98DSH31	N14W	2 × (2)	中世か	古代竪穴建物を切る。98DSH30～32が重複、建替えの可能性あり。（但し新旧関係は不明）
98DSH32	N24W	(2) × 3	中世か	古代竪穴建物を切る。98DSH30～32が重複、建替えの可能性あり。（但し新旧関係は不明）
98DSH33	N20E	(2) × 3	13前半～	土坑墓と重複。98DSH28・29と並列する。建替えまたはセットの可能性あり。
98DSH38	N77W	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	区画溝により一部削平。98DSH38～41が重複。建替えの可能性あり。但し、規模的にSH40は別か。
98DSH39	N59W	2 × 2	13後半～	区画溝により一部削平。98DSH38～41が重複。建替えの可能性あり。但し、規模的にSH40は別か。
98DSH40	N69W	2 × 2	13後半～	区画溝により一部削平。98DSH38～41が重複。建替えの可能性あり。但し、規模的にSH40は別か。
98DSH41	N69W	1 × 3	中世か	区画溝により一部削平。98DSH38～41が重複。建替えの可能性あり。但し、規模的にSH40は別か。
98DSH43	N12E	2 × 2	中世か	古代竪穴建物を切る。98DSH44と重複。建替えの可能性あり。土坑墓と隣接し、並存は困難。
98DSH44	N14E	2 × 2	中世か	古代竪穴建物を切る。98DSH43と重複。建替えの可能性あり。
98DSH45	N10E	2 × 3	13後半～	古代竪穴建物を切る。98DSH46～48と重複。東ー西への建替えか。
98DSH46	N9E	2 × 3	13前半～	98DSH47とほぼ同位置での建替えか。98DSB07、周辺土坑墓以前の可能性あり。
98DSH47	N7E	2 × 3	13前半～	98DSH46とほぼ同位置での建替えか。98DSB07、周辺土坑墓以前の可能性あり。
98DSH48	N82W	3 × 4	13後半～	土坑墓、中世竪穴建物と重複。98DSH45～47重複するが唯一東西棟。時期別か。
98DSH49	N7E	ー × ー	13前半～	四間分の柵列
98DSH50	N11E	1 × 2	13後半～	98DSB09と重複。上屋の可能性あり。
98DSH51	N4E	2 × 2	13後半～	98DSH52・53と重複。規模は98DSH24と類似。土坑墓に隣接。周辺のものとは別時期か。
98DSH52	N7E	2 × 3	14前半～	梁行狭い長方形建物。新旧関係は98DSH53→SH52→SH51。土坑墓との重複なし。
98DSH53	N74W	2 × 3	13前半～	土坑墓と切合いあり。98DSH51・52と重複。新旧関係は98DSH53→SH52
98DSH54	N30E	1 × 4	中世か	98DSH55・56と重複。SH55より梁行は広いが、軸線は類似。建替えか。
98DSH55	N21E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	98DSH54との建替えの可能性あり。但し、軸線はやや異なる。
98DSH56	N2W	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	98DSH54・55と重複。SH55と規模は類似するが、軸線が異なるため別時期の可能性あり。
98DSH57	N32E	1 × 3	中世か	単独棟、古代竪穴建物を切る。SH54と軸線が類似、同時期の可能性あり。
98DSH58	N58W	2 × 2	中世か	98DSH59と重複するやや小型の建物。98DSH59との北ー南への建替えの可能性あり。

第９表　掘立柱建物一覧（１）

遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　　考
98DSH59	N53W	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	98DSH58との建替えの可能性あり。新旧関係は不明。ともに土坑墓とは重複せず。
98DSH61	N76W	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	やや小型の建物、98DSH38～41と重複。規模から98DSH38との建替えの可能性あり。新旧関係はSH38→SH61
99ASH09	N40E	2 × 3	13前半～	単独棟。99ASH20・21と同方向。SH21とセット関係の可能性あり。
99ASH19	N57E	3 × 3	中世か	単独棟。区画のコーナー部分に構築。近くに和鏡を伴う土坑墓あり。古代以前の掘立とは重複。
99ASH24a	N53E	1 × 2	中世か	99ASH24bと重複、新旧関係は不明。区画溝により一部削平。
99ASH24b	N51E	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	99ASH24aと重複、新旧関係は不明。区画溝により一部削平。
99ASH25	N62W	×	13後半～	区画溝により一部削平される北西側以外に庇が付く建物。単独棟。主殿1×2間、庇3間。御堂的性格も考えられる。
99ASH32	N32E	2 × 3	中世か	99ASH33と重複。区画溝により削平されるため、区画設定以前の建物と思われる。
99ASH36	N47E	2 × 3	中世後期か	99ASH22と重複。99ASB07との切合いから、新旧関係はSB07→SH36
99ASH37	N80W	1 × 3	中世か	梁行が狭い長方形建物。軸線も区画溝や周辺建物と異なる。
99BSH06	N52W	2 × 3	13後半～	99BSH60と重複。区画溝とは軸線が異なり、戦国以前の建物の可能性高い。
99BSH37	N46W	(2) × 3	中世（灰釉系陶器）	南東部が調査区外。SH33・34と重複し、この2棟に先行する建物。
99BSH60	N25W	2 × 3	中世か	SH06と重複、区画溝と建物の軸線が異なる。区画以前の建物の可能性あり。
99BSH64	N58E	2 × 3	中世か	単独棟。土塁下層および区画溝掘削後柱穴確認。中世の可能性が高い。
99CSH02	N48W	3 × 4	中世か	単独棟。柱穴が区画溝に切られる。
99CSH03	N52W	1 × 2	中世か	単独棟。
99DSH01	N15E	2 × 3	中世か	区画溝により一部削平される。SH02と重複、規模・軸線から建替えの可能性が高い。
99DSH02	N13E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	SH01と重複、建替えか。
99DSH06	N18E	2 × 2	中世か	SH07と重複する２×２の方形建物。規模・軸線から建替えの可能性あり。
99DSH07	N22E	2 × 3	中世か	SH06と重複。規模・軸線から建替えの可能性あり。
99DSH08	N86W	1 × 3	中世（灰釉系陶器）	単独棟、SH01・02と同規模。古代竪穴住居を切る。
99DSH10	N2E	1 × 3	中世か	単独棟、区画溝により一部削平される。
99ESH02	N18E	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	SH01と重複。規模・軸線から隣接するSH03とセットの可能性あり。
99ESH03	N20E	1 × 2	中世（灰釉系陶器）	SH02とセットと思われる。SH07・08と重複。建替え関係は不明。SH04～06の柵列を伴う可能性あり。
99ESH04	N79W	1 × 3	中世（灰釉系陶器）	Ｌ字状の柵列。検出時は柵列だが、建物が削平されたとも考えられる。SH05・06と重複。
99ESH05	N81W	2 × 2	中世か	Ｌ字状の柵列。柵列か建物の一部かは判別不能。SH04・06と重複。
99ESH06	N76W	2 × 4	中世か	Ｌ字状の柵列。柵列か建物の一部かは判別不能。SH03・07・08に伴う可能性もあり。
99ESH07	N17E	2 × (2)	中世か	SH03・08と重複。一部削平により消滅。南北棟の可能性が高い。
99ESH08	N80W	(2) × 3	中世か	SH03・07と重複。一部削平により消滅。東西棟の可能性が高い。
99ESH09	N59W	2 × 4	中世（灰釉系陶器）	SH10・11と重複、SH10との建替えか。土坑墓と重複する。
99ESH10	N60W	2 × 4	14前半～	SH09・11と重複。SH09との建替えか、新旧関係は不明。土坑墓と重複する
99ESH11	N70W	2 × 3	13後半～	SH09・10と重複。軸線・規模とも異なるため建替え関係は薄い。SH11・12の柵列を伴うか。土坑墓に隣接するが重複はしない、同時存在も可能。
99ESH12	N69W	×	中世（灰釉系陶器）	３×４間のＬ字状柵列。99ESH13と建替え関係、99ESH11とセット関係の可能性あり
99ESH13	N70W	×	中世（灰釉系陶器）	２×５間のＬ字状柵列。99ESH12と建替え関係か。柱穴の切合いからSH12→SH13
99ESH14	N29E	2 × 3	中世か	単独棟、一部削平により柱穴欠損。谷地形埋没後（中世後半）の建物か。
99ESH15	N67W	2 × 3	中世か	柱間が不揃い。重複するSH16と規模・軸線が類似、建替えか。土坑墓と重複、時期が異なる。
99ESH16	N63W	3 × 3	中世か	方形に近い建物。SH15との建替え。土坑墓と重複、時期が異なる。
99ESH17	N10E	1 × 2	中世（灰釉系陶器）	単独棟。土坑墓と隣接する。同時存在も可能。
99ESH18	N79W	2 × 3	中世（常滑甕）	単独棟、土坑墓と隣接する。同時存在も可能。

第10表　掘立柱建物一覧（２）

遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　考
99FSH01	N23E	2 × 2	13後半～	SH02・03と重複。99FSH02との建替えか、但し新旧関係は不明。土坑墓と隣接するが重複はなし。同時存在も可能。
99FSH02	N22E	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	SH01・03と重複。99FSH01との建替えか、但し新旧関係は不明。土坑墓と隣接するが重複はなし。同時存在も可能。
99FSH03	N16E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	SH01・02と重複。柱穴周辺に別の柱穴が掘削されており、復元はできないが、建替えられた可能性あり。
99GSH01	N9E	2 × 3	中世か	SH09と重複。柱穴の切合いから新旧関係はSH01→SH09
99GSH02	N	×		99GSB16の４柱穴
99GSH03	N7E	1 × 3	13後半～	SH08と一部柱穴を共有。新旧関係は不明。SB14を切っていることから中世後期の建物か。
99GSH04	N80W	1 × 2	中世か	SH05～08と重複。SH03と並列、SH10と同規模。
99GSH05	N7E	3 × 4	13前半～	SH07・08と3回建替えの可能性あり。遺構の切合いからSH08→07→05の新旧関係。柱穴が重複することからSH03との同時存在の可能性は低い。
99GSH06	N3E	2 × 2	中世か	SH04～08と重複するが、規模的に建替え関係は考えにくい。SH09・10とのセット関係は想定可能。
99GSH07	N2E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	SH05・08と重複、新旧関係はSH08→07→05。
99GSH08	N3E	2 × 3	13後半～	SH05・07と重複、新旧関係はSH08→07→05。
99GSH09	N89W	2 × 3	中世か	SH04～08・10とのセット関係は重複により不可能。但し、SH06とのセット関係は想定可能。
99GSH10	N79W	1 × 2	中世か	SH05～09と重複。軸線から判断するとSH06と同時期の可能性が考えられる。
99GSH11	N6E	2 × 3	中世後期か	単独棟。土坑墓と重複、土坑墓以降の建物か。
99GSH12	N9E	2 × (3)	中世か	単独棟。土坑墓との重複なし、時期不明。
99GSH13	N89W	1 × 3	中世後期か	小型の単独棟。土坑墓と重複、土坑墓以降か。SH14と並列、セット関係が想定可能。
99GSH14	N2E	2 × 3	13後半～	SB30と重複。切合いからそれ以降の建物の可能性が高い。
99GSH15	N9E	2 × 3	中世後期か	梁行が狭く桁行の長い建物。SH16、土坑墓と重複する。SH16とは同規模で建替えの可能性あり。新旧関係はSH16→SH15。
99GSH16	N17E	2 × 3	中世後期か	SH15と重複、規模的に建替えの可能性が高い。
99GSH17	N5E	1 × 2	中世後期か	単独棟。土坑墓と重複、それ以降の建物か。
99GSH20	N2W	1 × 3	中世か	単独棟。
99GSH21	N30E	2 × (2)	中世か	梁行が広く大型建物の可能性を持つ。単独棟。
99GSH22	N40W	1 × 2	中世か	単独棟。他の建物とは軸線が異なるが、SH23とは軸線が類似している。特殊な時期の可能性がある。
99GSH23	N40W	2 × 2	13前半～	SH24・25と重複。
99GSH24	N4W	2 × 2	中世か	SH23・25と重複。軸線からはSH22・23とSH24、SH25・26の３時期に区分される。
99GSH25	N24E	2 × 2	中世か	SH26と重複。梁行の方向が変わるが、規模的に建替えの可能性あり。
99GSH26	N64W	2 × 2	中世か	SH25と重複、南北棟から東西棟への建替えの可能性あり。
99GSH27	N5E	2 × 2	中世か	小型の単独棟。SH28・29・30・37と重複。99ISH03・04とのセット関係も想定可能。
99GSH28	N10E	2 × 1	中世か	SH29と重複する小型建物。建替えの可能性あり。単独棟ではなくセット関係で機能を果たしていたと推定される。
99GSH29	N14E	2 × 2	中世か	SH28と重複する小型建物。主屋に対する付属施設または簡易な建物か。土坑墓との重複なし。
99GSH30	N55E	2 × 3	中世か	小型建物。SH37と同規模。SH35・36のセット関係での建替えが想定される。
99GSH32	N2W	1 × 3	中世か	主屋１×３間、１間の庇がつく建物。一部が調査区外となるため、全体像は不明だが四面庇の建物と思われる。特殊な性格の建物か。
99GSH33	N34W	2 × 2	時期不明	軸線からSH22・23と同時期か。中世の範疇で捉えるべきか。
99GSH34	N4E	2 × (3)	中世か	大半が調査区外へ展開する。SH32と重複、庇を持つ可能性も考えられる。
99GSH35	N57E	2 × 3	中世（１３代）	SH36と重複する梁行広い建物。SH35→36の新旧関係の建替えの可能性大。土坑墓と重複。
99GSH36	N51E	2 × 3	中世か	SH35と重複。中世竪穴建物とも重複するため中世後期に属する建物か。
99GSH37	N57E	1 × 2	中世か	単独棟。SH35・37とSH30・36の大小２棟でのセット関係か。
99GSH38	N86W	2 × 3	中世後期か	複数の建物と重複するやや大型の東西棟。土坑墓とも重複する。
99GSH39	N3E	2 × 3	中世後期か	SH40・41との建替えの可能性あり。新旧関係は不明。土坑墓と重複。
99GSH40	N5E	1 × 3	14前半～	SH39・41との建替えの可能性大。
99GSH41	N6W	1 × 3	13後半～	SH39・40との建替えの可能性が考えられる。遺物からSH41→SH40の新旧関係、SH39とは不明。
99ISH01	N1W	2 × 3	中世か	単独棟、土坑墓との重複なし。

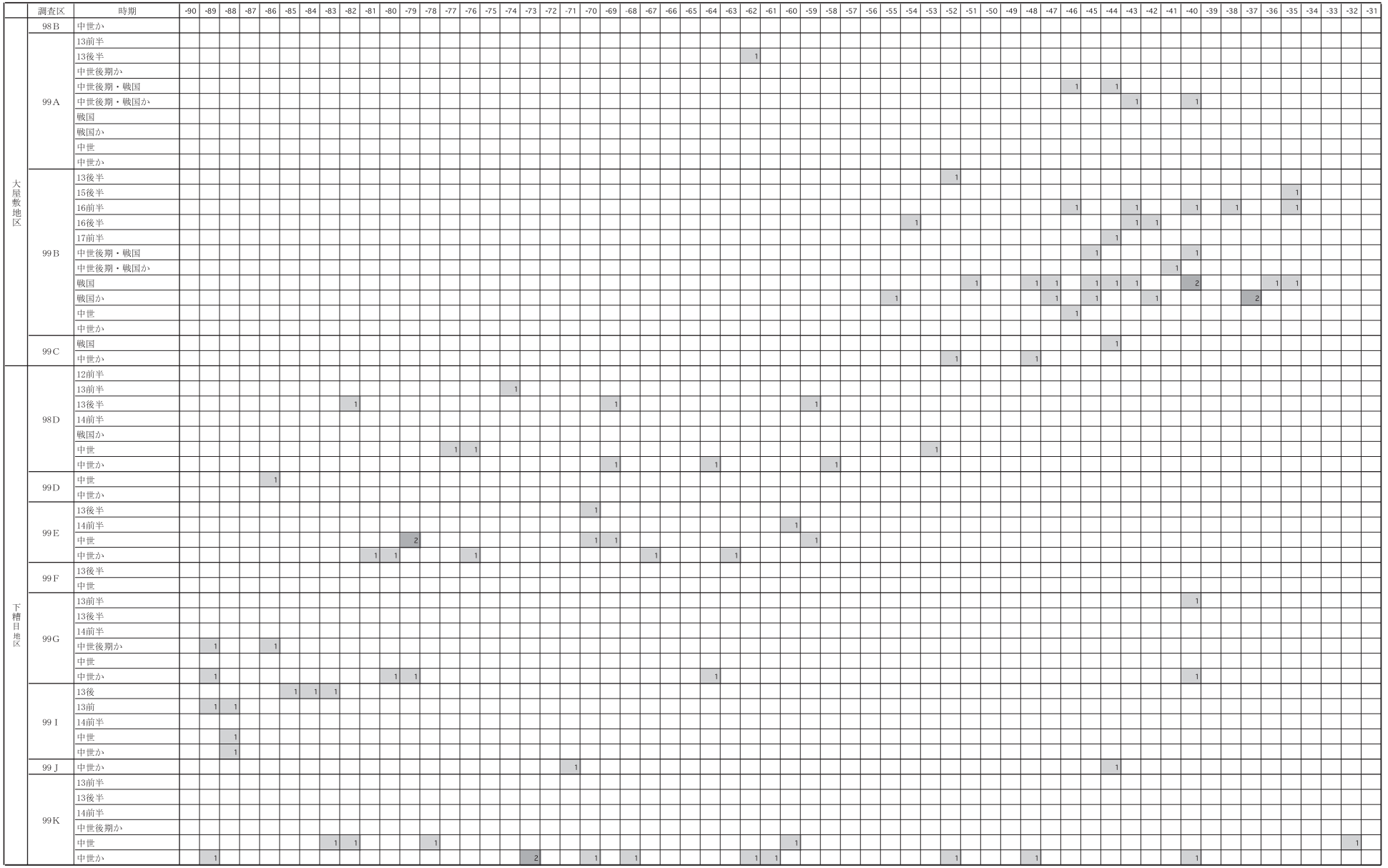
第11表　掘立柱一覧（３）

遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　　考
99ISH02	N9W	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	SH03・04と重複。但し新旧関係は不明。
99ISH03	N88W	2 × 2	中世か	SH04と重複、建替えか。99GSH27とのセット関係も考えられる。
99ISH04	N88W	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	SH03との建替え、新旧関係は不明。
99ISH05	N8E	×	不明（中世か？）	6間分の柵列。周辺に建物なし。
99ISH06	N8E	1 × 2	13後半～	単独棟。
99ISH07	N1E	2 × 3	14前半～	総柱建物。SH08と重複、建替えの可能性大。四面庇の建物の主屋に比定した建物。SK301を使わなければ南庇の建物となる。
99ISH08	N0E	2 × 3	14前半～	総柱建物。SH07と重複、新旧関係は遺物からSH07→SH08。
99ISH09	N89W	2 × 3	13前半～	SH12と重複、建替えの可能性が高い。SH09・10のセット関係と考えられ、SH12・13のセット関係との建替えが想定される。
99ISH10	N88W	2 × 3	13前半～	SH12と重複、建替えの可能性が高い。SH09・10のセット関係と考えられ、SH12・13のセット関係との建替えが想定される。
99ISH11	N13E	2 × 3	13後半～	総柱または北面庇の建物。SH07・08と東へ振った軸線の建物。東側に展開する建物群とセット関係か。
99ISH12	N85W	2 × 3	13後半～	SH09と重複、建替えの可能性が高い。セット関係はSH09・10とSH12・13、新旧関係は遺物からSH09・10→SH12・13となる。
99ISH13	N83W	1 × 3	13後半～	SH10と重複、建替えか。遺物からはSH10→SH13の新旧関係。
99ISH14	N9E	2 × 3	14前半～	複数の建物と重複。
99ISH15	N10E	2 × 2	14前半～	方形の建物。SH14と同規模、建替えの可能性あり。新旧関係は切合いからSH14→15。
99ISH16	N15E	2 × 3	14前半～	SH17と同規模、建替えか。但し新旧関係は不明。
99ISH17	N21E	2 × 3	14前半～	SH16と重複、やや大型化しての建替えか。
99ISH18	N23E	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	複数の建物と重複、但し新旧関係は不明。
99ISH19	N4E	2 × 3	14後半～	SH20と南－北方向での建替えか。遺物からSH19→20の新旧関係と考えられる。
99ISH20	N3E	1 × 3	14前半～	SH19との建替えか。
99ISH21	N84W	2 × 3	13後半～	複数棟と重複するが、建替え・セット関係は不明。単独棟か。
99ISH22	N7E	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	方形の単独棟。小規模であり他の建物とセットで機能を果たしていた可能性が考えられる。
99JSH01	N78E	1 × 2	中世か	SH02と重複する方形に近い建物。
99JSH02	N44W	2 × 2	中世か	SH01と重複するが、新旧関係は不明。軸線として類例が少ない方向をもつ建物。
99JSH03	N71W	2 × 3	中世か	単独棟。土坑墓との重複もなし。
99KSH01	N27E	2 × 3	中世か	単独棟。SH05～07と梁行方向は異なるが軸線は一致する。但し、セット関係は不詳。
99KSH02	N70W	2 × 3	中世か	1/3が調査区外となる東西方向の単独棟。周辺に位置するSH05～07と軸線は類似する。
99KSH03	N21W	2 × (3)	中世か	1/4が調査区外となる。SH01・02・05～07と重複するが軸線がこれらの建物とはややずれる。新旧・セット関係は不明。
99KSH04	N29W	(2) × (2)	中世か	2/3は調査区外となる東西棟。SH05・06と重複する。新旧関係等は不明。但し建替えの可能性は考えられる。
99KSH05	N61W	(2) × (3)	中世か	2/3は調査区外となる東西棟。SH06・07と重複。この周辺の建物については、SH03・04がセット関係にあり、SH05～07が東西棟の建替えと考えることが妥当と思われる。但し、新旧関係は明らかにし得ない。
99KSH06	N68W	2 × (3)	中世か	1/2は調査区外となる東西棟。
99KSH07	N62W	(2) × (2)	中世か	3/4は調査区外となる建物。重複関係から東西建物と推定される。
99KSH08	N89W	2 × 3	中世か	調査時には古代に属すると認識したが、周囲の状況から中世とした。土坑墓と重複する。
99KSH09	N32W	2 × 3	中世（灰釉系陶器）	SH10と重複、規模・軸線から建替えか。周辺の建物との関係はSH09・12、SH10・13の2棟がセットとなりL字状に並立していたことが想定される。
99KSH10	N40W	2 × 2	中世か	SH09と重複、建替えか。SH13とのセット関係を想定。
99KSH11	N29W	2 × 3	中世か	複数棟と重複するが、やや大型で軸線もずれることから、建替えやセット関係の想定は困難と思われる。
99KSH12	N58E	2 × 2	中世（灰釉系陶器）	SH13と重複、建替え関係か。SH09とのセット関係の可能性が高い。
99KSH13	N48W	1 × 2	中世か	SH12と重複、建替えか。SH10とのセット関係が想定される。
99KSH16	N88E	1 × 3	中世（灰釉系陶器）	一部調査区外となる建物。SH08と重複、建替えか。柱穴の切合いからSH08→16の新旧関係となる。土坑墓とも重複する。

第12表　掘立柱一覧（4）

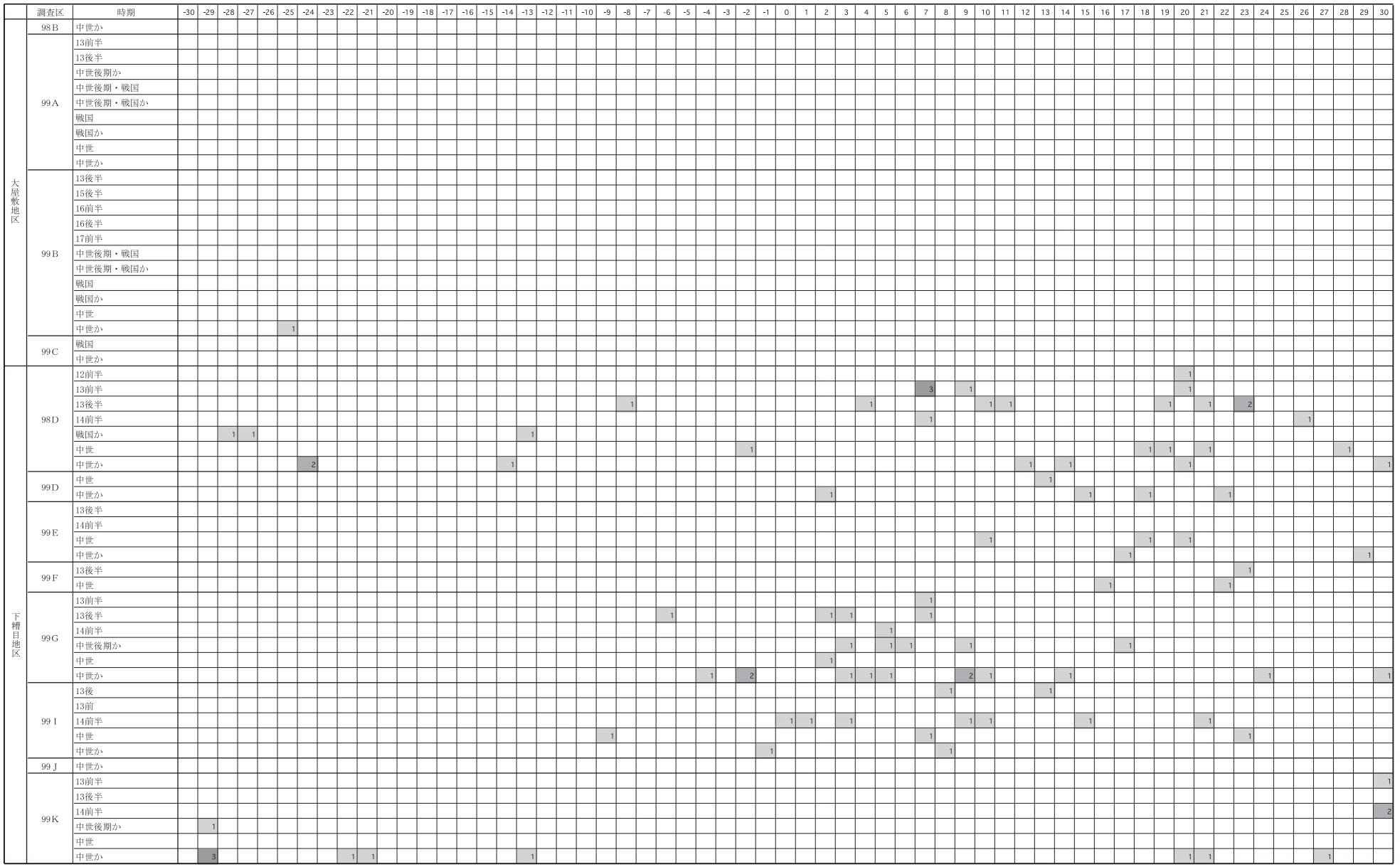
遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　　考
99KSH17	N83E	1 × 4	13後半～	一部調査区外となる。複数棟と重複し、切合いからSH18→17の新旧関係は判明。SH17～22までの重複する建物にセット関係は想定されない。軸線方向から、SH17・19の建替え、SH18・20～22の建替えが想定される。遺構の切合いからSH18・20～22の建替えの後SH17・19の建替えが行われたと考えられる。
99KSH18	N83W	1 × (4)	中世（灰釉系陶器）	一部調査区外となり、複数棟と重複する。
99KSH19	N83E	2 × (4)	中世（灰釉系陶器）	一部調査区外となる。複数棟と重複し、切合いからSH21→19は判明。軸線方向はSH17と一致。建替えの可能性も考えられる。
99KSH20	N82W	2 × (4)	中世（灰釉系陶器）	一部調査区外となる建物。複数棟と重複。
99KSH21	N73W	2 × (4)	中世か	複数棟と重複する。一部調査区外。
99KSH22	N78W	2 × (3)	中世（灰釉系陶器）	複数棟と重複する。一部調査区外。
99KSH26	N20E	2 × 3	中世か	単独棟。認識はできなかったが、同じ場所で柱穴が複数掘削されているため、建替えが行われたことが推定される。その場合、SH26・32→SH26・33のセット関係の建替えが考えられる。
99KSH27	N30E	2 × 3	14前半～	SH29・31と重複。規模はSH28とほぼ同じ。2棟1セットであるとすれば、SH27・30、SH28・29とするのが妥当と思われる。
99KSH28	N33E	2 × 3	中世か	SH30・31と重複。遺構の切合いからSH31→28の新旧関係となる。SH29とセット関係を想定。
99KSH29	N30E	2 × 4	14前半～	SH27・31と重複。柱穴が同一個所に複数存在することから認識はできなかったが、建替えられた可能性が高い。SH28とのセットを推定。
99KSH30	N30E	2 × 3	13前半～	SH28・31と重複。規模はSH29と同一。SH27とのセット関係を想定。
99KSH31	N60W	3 × 3	中世（灰釉系陶器）	複数棟と重複。但しこの建物のみが東西棟となる。遺構の切合いからSH31→28の新旧関係であることから、東西棟から南北棟への建替えが想定される。
99KSH32	N21E	2 × 3	中世か	SH33と重複。但し、規模的に建替えは想定しにくい。
99KSH33	N73W	2 × 3	中世か	SH32・34と重複。遺構の切合いからSH32→33の新旧関係。但し、規模・軸線も異なることから建替え・セット関係は不明。
99KSH34	N69E	2 × 4	中世か	土坑墓、SH33と重複。建替え、セット関係は不詳。
99KSH35	N39E	2 × 2	中世か	やや小型の単独棟。時期を特定する材料に欠けるが、類似する建物から中世の可能性が指摘できる。
99KSH36	N29W	2 × 4	中世後期か	土坑墓と重複する単独棟。周囲の遺構の展開状況から土坑墓以降の可能性が高い。
99KSH37	N29W	1 × 3	中世か	単独棟。土坑墓との切合いもみられない。時期特定の材料に欠ける。周囲の遺構状況から中世と判断。
99KSH38	N67E	(2) × 4	中世後期か	SH39～41と重複。1/2が調査区外へ展開する東西棟の可能性が高い。土坑墓とも重複する。
99KSH39	N69E	2 × (4)	中世か	2/3が調査区外。時期判断の材料に欠けるが、周辺の遺構状況から中世とした。
99KSH40	N67E	2 × (4)	中世か	2/3が調査区外。時期判断の材料に欠けるが、周辺の遺構状況から中世とした。
99KSH41	N67E	2 × (4)	中世か	2/3が調査区外。時期判断の材料に欠けるが、周辺の遺構状況から中世とした。
99KSH42	N13W	2 × 3	中世か	SH43・45と重複。遺構の切合いからSH42→45の新旧関係となる。
99KSH43	N52W	2 × 3	中世か	SH42・45と重複。遺構の切合いからSH45→43の新旧関係となる。
99KSH44	N22W	2 × (3)	中世か	一部調査区外となる。土坑墓と重複する。SH38～41と軸線が一致する。但しSH44のみ南北棟となる。
99KSH45	N31E	1 × 4	13後半～	複数棟と重複する。遺構の切合いからSH42→45→43の新旧関係となる。
99KSH46	N82E	(2) × (2)	中世か	3/4が調査区外となる。SH47との建替え関係を想定。時期決定の材料に欠けるが、周囲の遺構の状況から中世とした
99KSH47	N82E	(2) × (2)	中世か	3/4が調査区外となる。SH46との建替え関係を想定。時期決定の材料に欠けるが、周囲の遺構の状況から中世とした

第13表　掘立柱建物一覧（５）



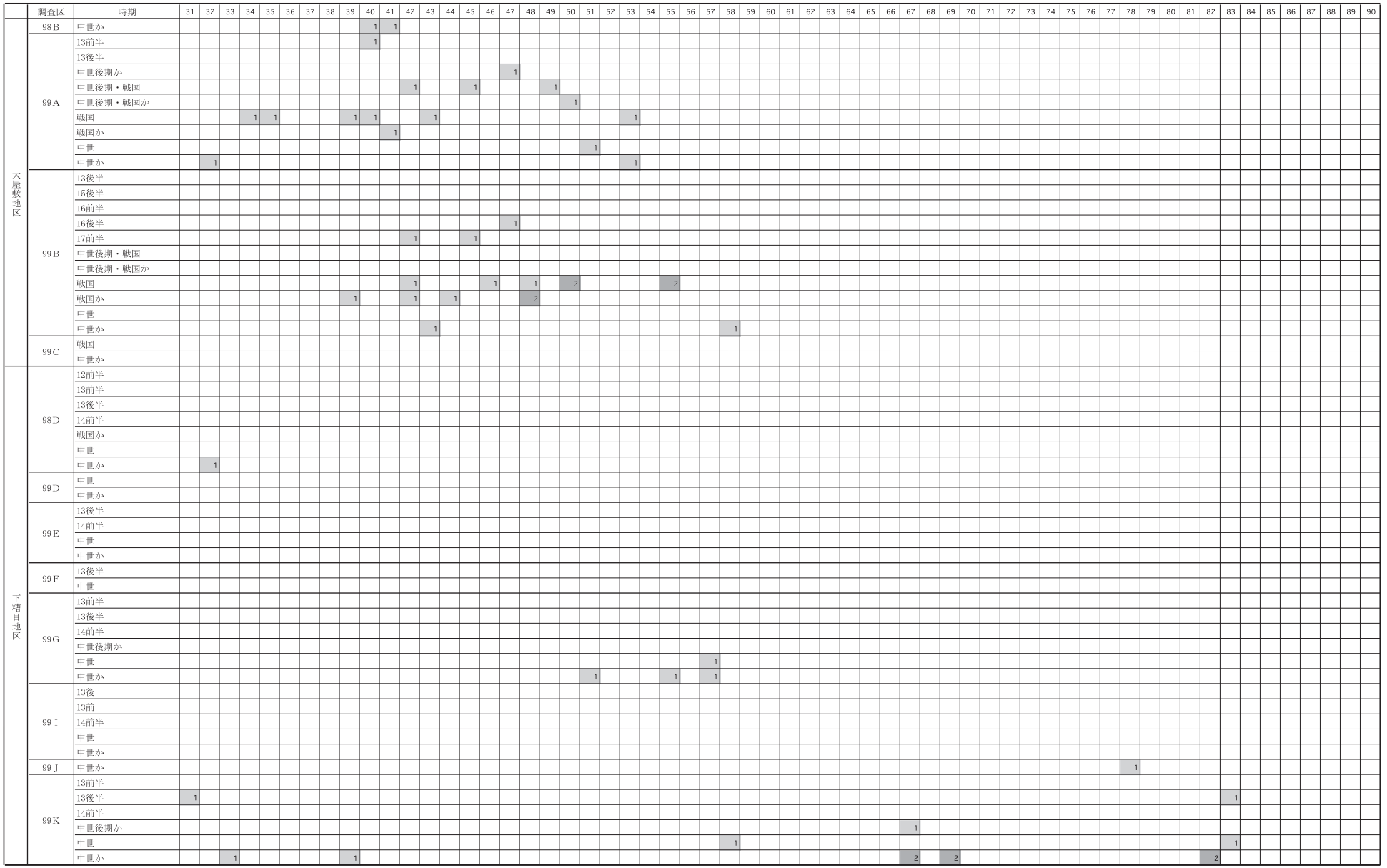
第420図　掘立柱建物軸線別分布図１

目次
終了



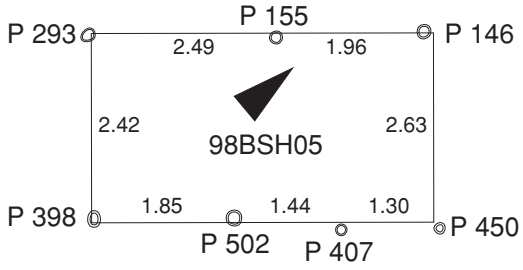
第421図　掘立柱建物軸線別分布図 2

目次
終了

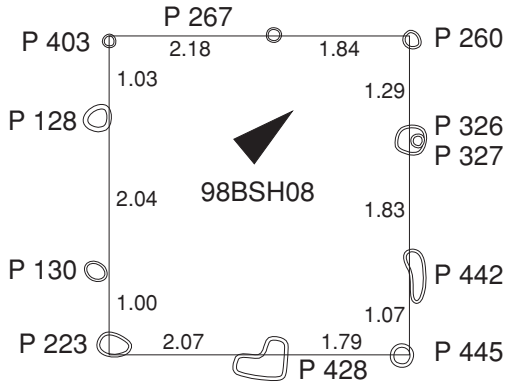


第422図　掘立柱建物軸線別分布図 3

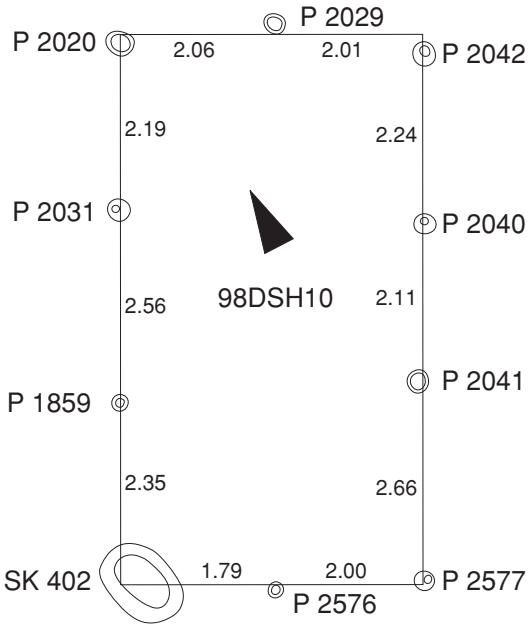
目次
終了



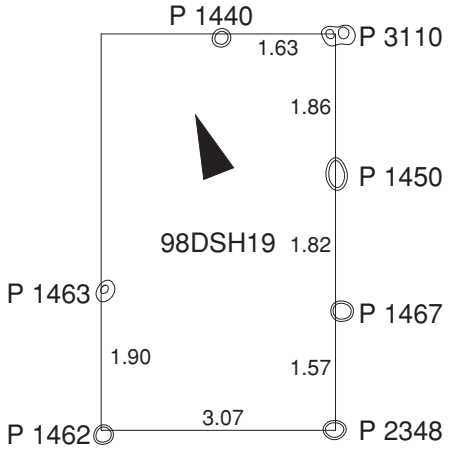
番号	深さ
P 146	16
P 155	12
P 293	5
P 398	5
P 407	8
P 450	8
P 502	13



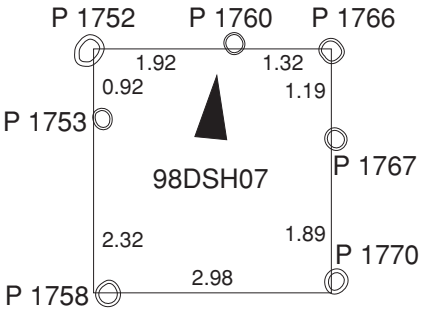
番号	深さ
P 128	11
P 130	9
P 223	7
P 260	10
P 267	9
P 370	8
P 403	8
P 428	16
P 442	7
P 445	9



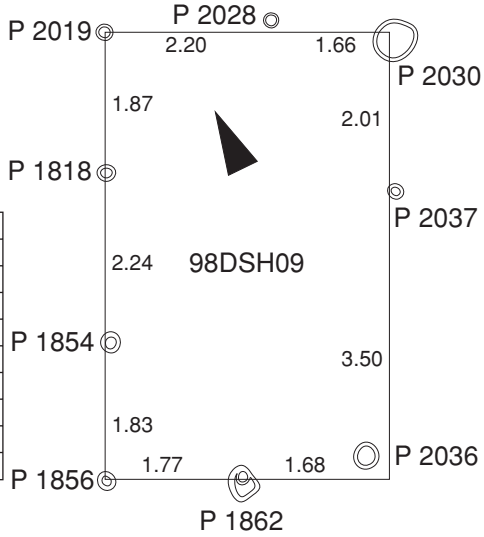
番号	深さ
P 1859	30
P 2020	26
P 2029	21
P 2031	25
P 2040	29
P 2041	63
P 2042	32
P 2576	22
P 2577	31
SK 402	24



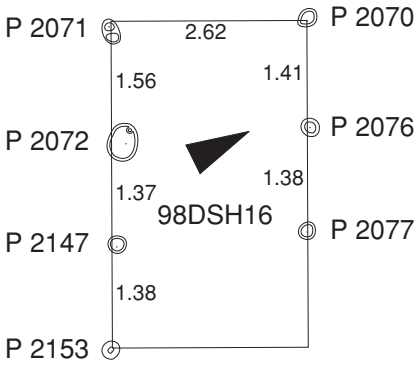
番号	深さ
P 1440	3
P 1450	17
P 1462	17
P 1463	10
P 1467	18
P 2348	45
P 3110	56



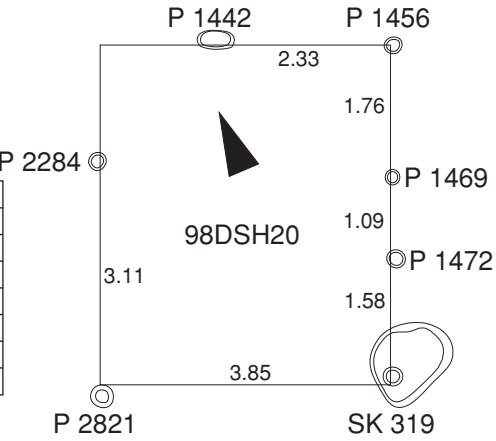
番号	深さ
P 1752	50
P 1753	42
P 1758	56
P 1760	18
P 1766	28
P 1767	26
P 1770	31



番号	深さ
P 1818	10
P 1854	38
P 1856	35
P 1862	61
P 2019	22
P 2028	42
P 2030	11
P 2036	72
P 2037	21

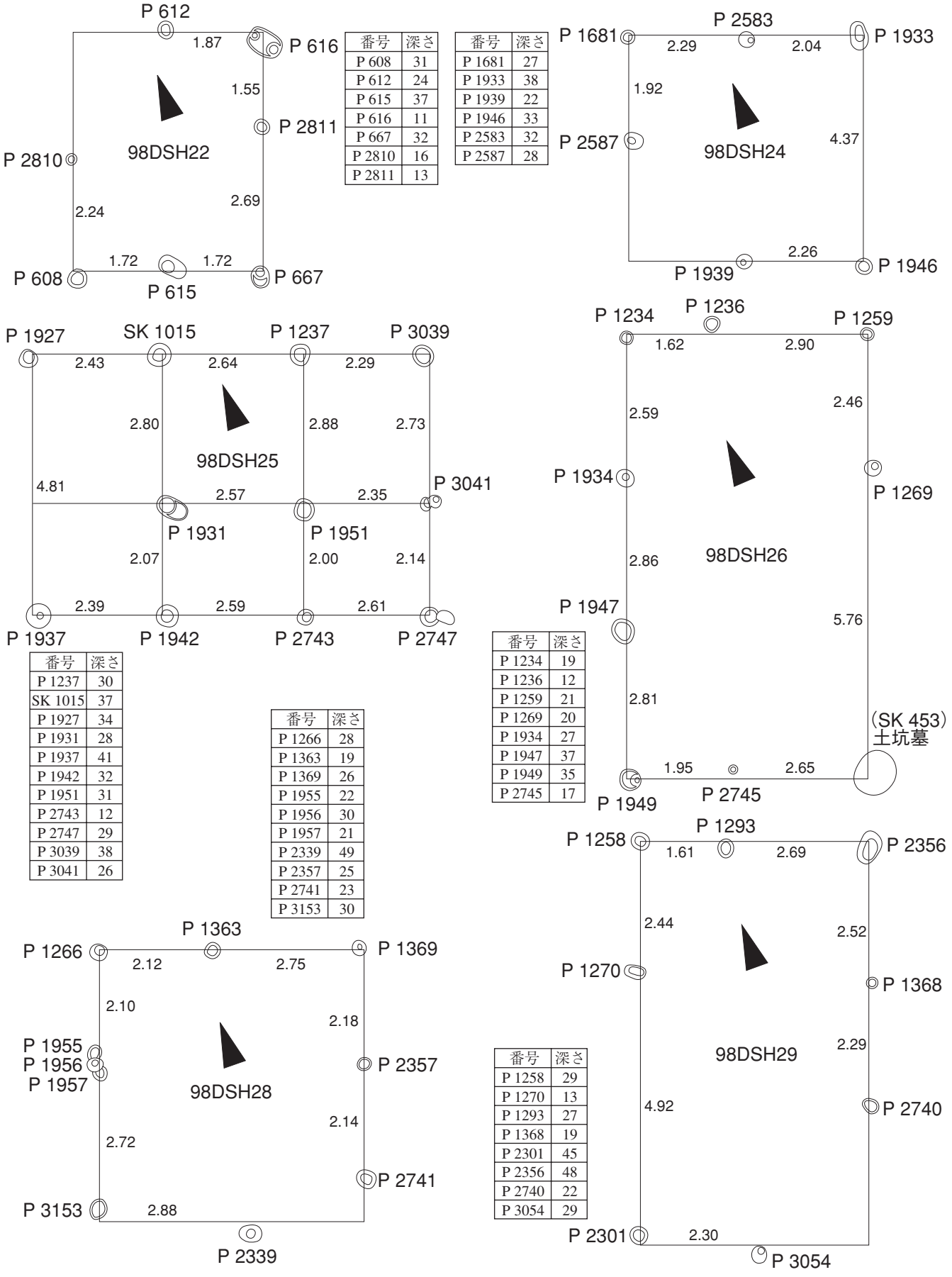


番号	深さ
P 2070	23
P 2071	29
P 2072	16
P 2076	16
P 2077	20
P 2147	22
P 2153	16



番号	深さ
P 1442	14
P 1456	7
P 1469	43
P 1472	13
P 2284	40
P 2821	17
SK 319	28

第 423 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 608	31
P 612	24
P 615	37
P 616	11
P 667	32
P 2810	16
P 2811	13

番号	深さ
P 1681	27
P 1933	38
P 1939	22
P 1946	33
P 2583	32
P 2587	28

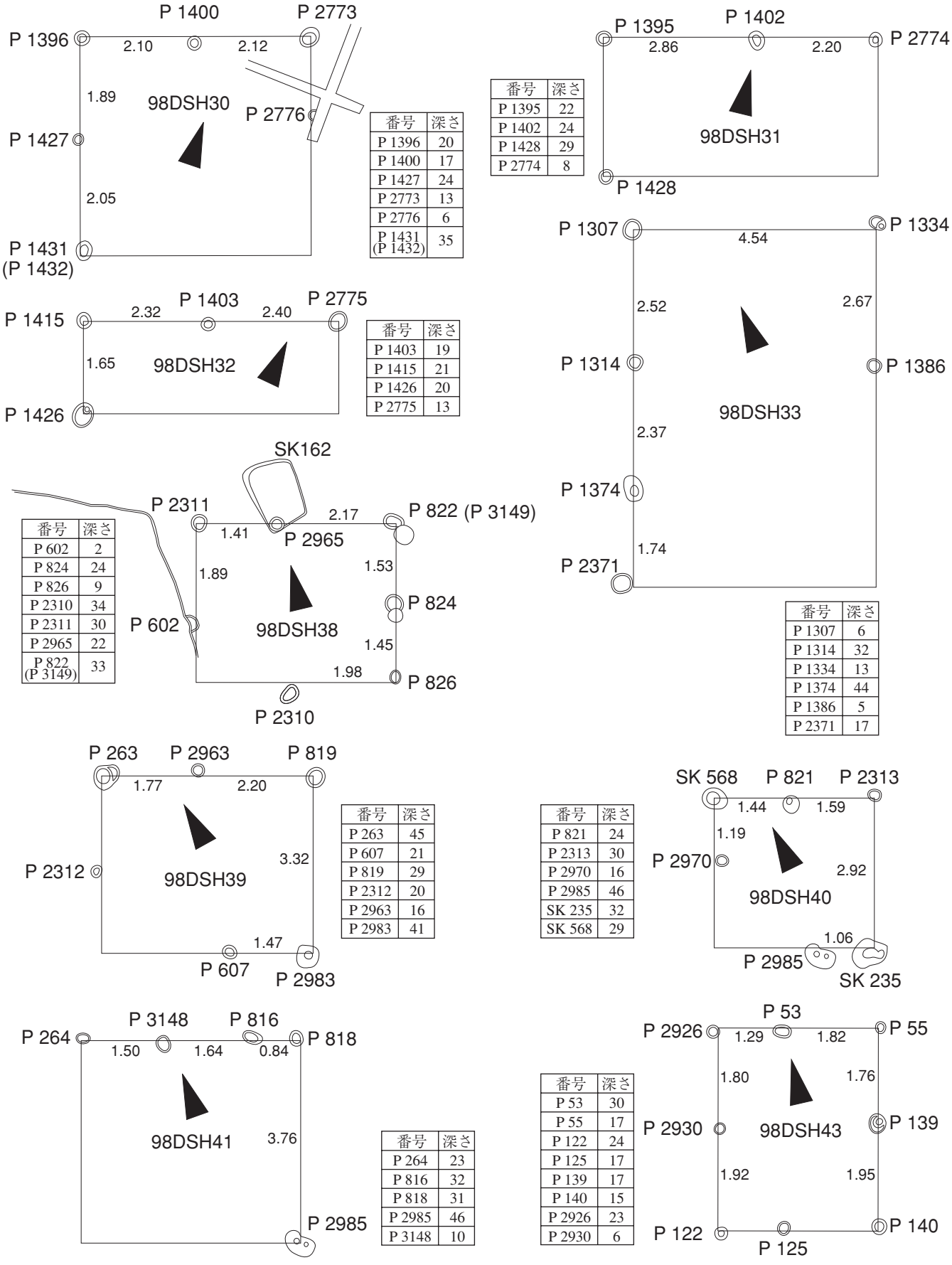
番号	深さ
P 1237	30
SK 1015	37
P 1927	34
P 1931	28
P 1937	41
P 1942	32
P 1951	31
P 2743	12
P 2747	29
P 3039	38
P 3041	26

番号	深さ
P 1234	19
P 1236	12
P 1259	21
P 1269	20
P 1934	27
P 1947	37
P 1949	35
P 2745	17

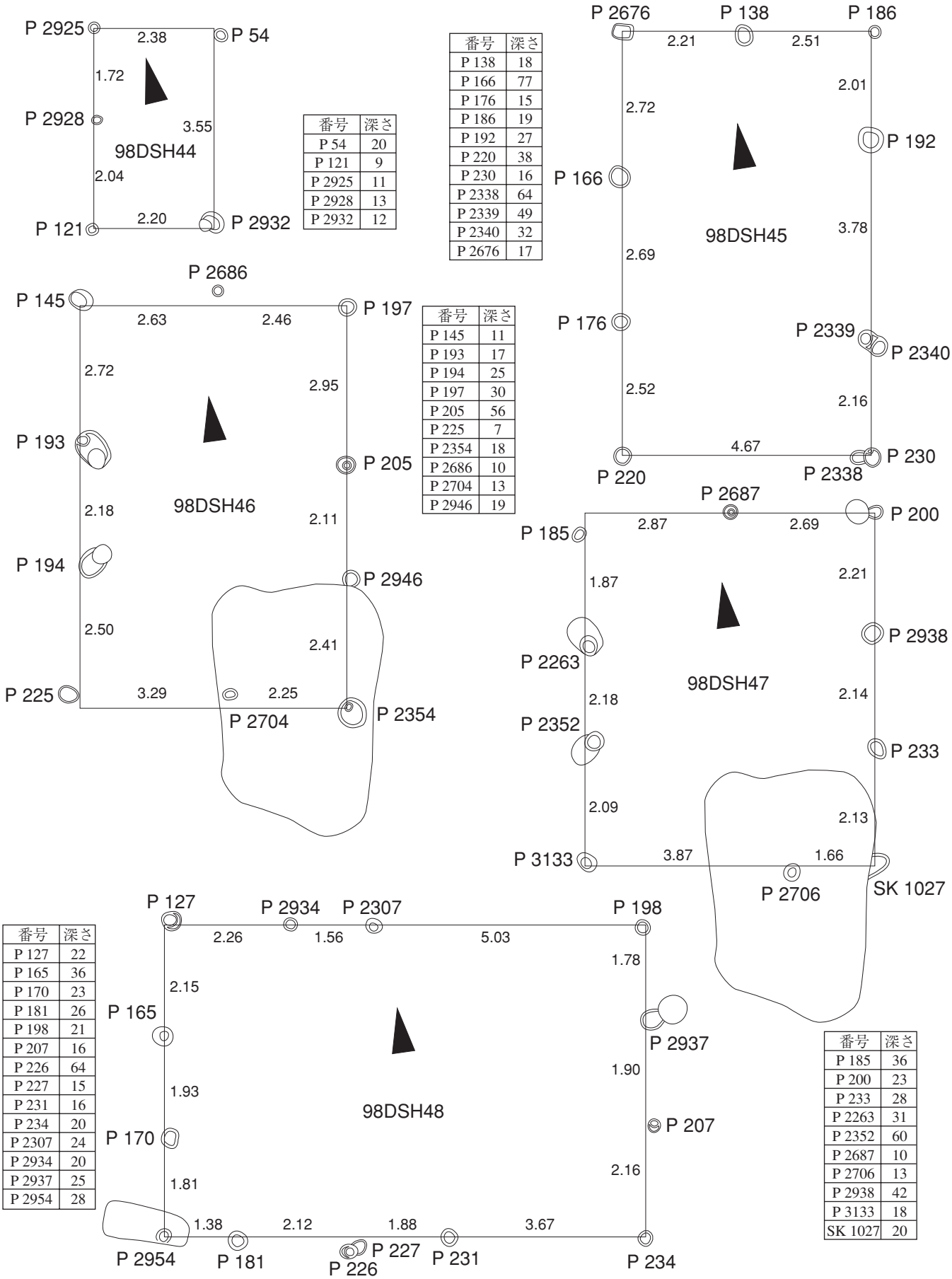
番号	深さ
P 1266	28
P 1363	19
P 1369	26
P 1955	22
P 1956	30
P 1957	21
P 2339	49
P 2357	25
P 2741	23
P 3153	30

番号	深さ
P 1258	29
P 1270	13
P 1293	27
P 1368	19
P 2301	45
P 2356	48
P 2740	22
P 3054	29

第 424 図　掘立柱建物平面図（1:100）



第 425 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 54	20
P 121	9
P 2925	11
P 2928	13
P 2932	12

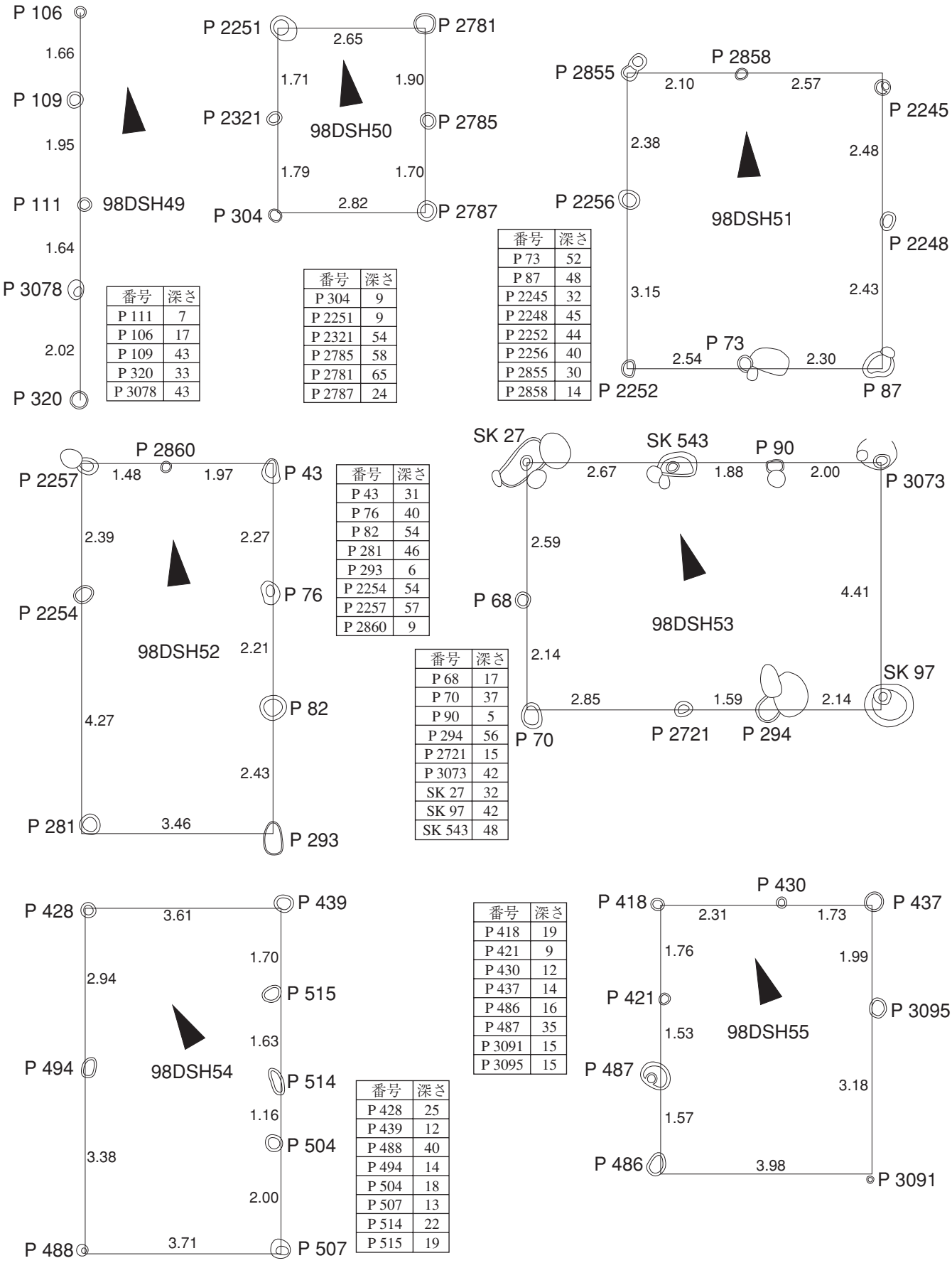
番号	深さ
P 138	18
P 166	77
P 176	15
P 186	19
P 192	27
P 220	38
P 230	16
P 2338	64
P 2339	49
P 2340	32
P 2676	17

番号	深さ
P 145	11
P 193	17
P 194	25
P 197	30
P 205	56
P 225	7
P 2354	18
P 2686	10
P 2704	13
P 2946	19

番号	深さ
P 127	22
P 165	36
P 170	23
P 181	26
P 198	21
P 207	16
P 226	64
P 227	15
P 231	16
P 234	20
P 2307	24
P 2934	20
P 2937	25
P 2954	28

番号	深さ
P 185	36
P 200	23
P 233	28
P 2263	31
P 2352	60
P 2687	10
P 2706	13
P 2938	42
P 3133	18
SK 1027	20

第 426 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 111	7
P 106	17
P 109	43
P 320	33
P 3078	43

番号	深さ
P 304	9
P 2251	9
P 2321	54
P 2785	58
P 2781	65
P 2787	24

番号	深さ
P 73	52
P 87	48
P 2245	32
P 2248	45
P 2252	44
P 2256	40
P 2855	30
P 2858	14

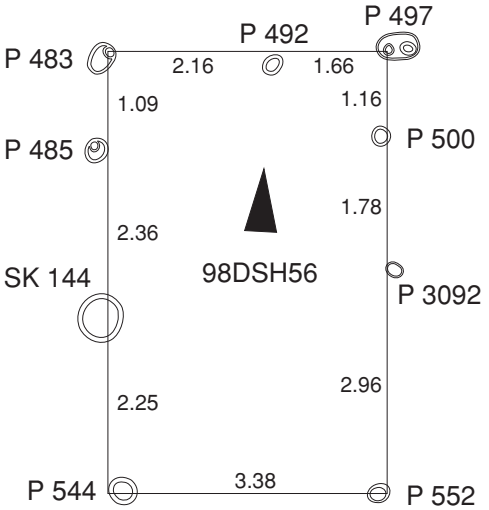
番号	深さ
P 43	31
P 76	40
P 82	54
P 281	46
P 293	6
P 2254	54
P 2257	57
P 2860	9

番号	深さ
P 68	17
P 70	37
P 90	5
P 294	56
P 2721	15
P 3073	42
SK 27	32
SK 97	42
SK 543	48

番号	深さ
P 428	25
P 439	12
P 488	40
P 494	14
P 504	18
P 507	13
P 514	22
P 515	19

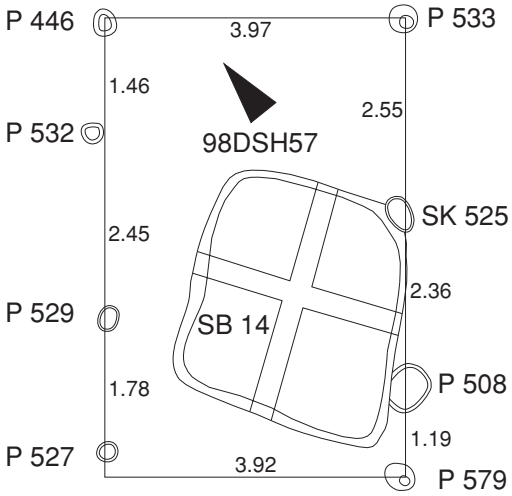
番号	深さ
P 418	19
P 421	9
P 430	12
P 437	14
P 486	16
P 487	35
P 3091	15
P 3095	15

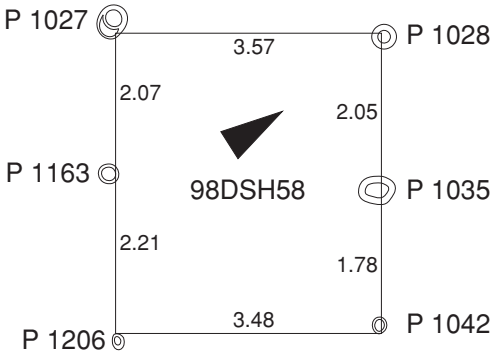
第 427 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 483	24
P 485	20
P 492	15
P 497	20
P 500	17
P 544	33
P 552	10
P 3092	15
SK 144	20

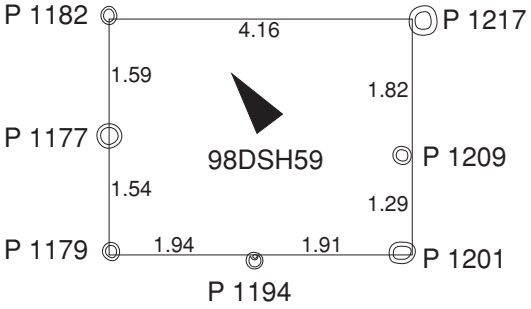
番号	深さ
P 446	19
P 527	11
P 529	7
P 532	22
P 533	18
P 579	14
P 580	9
SK 525	5

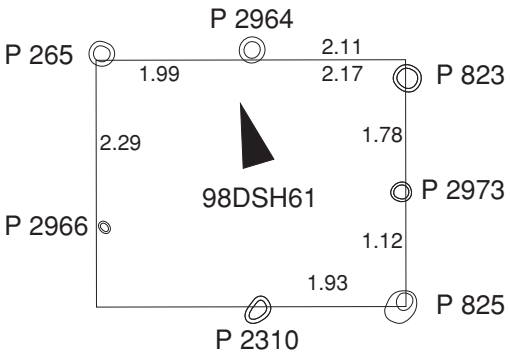




番号	深さ
P 1027	30
P 1028	25
P 1035	34
P 1042	23
P 1163	22
P 1206	22

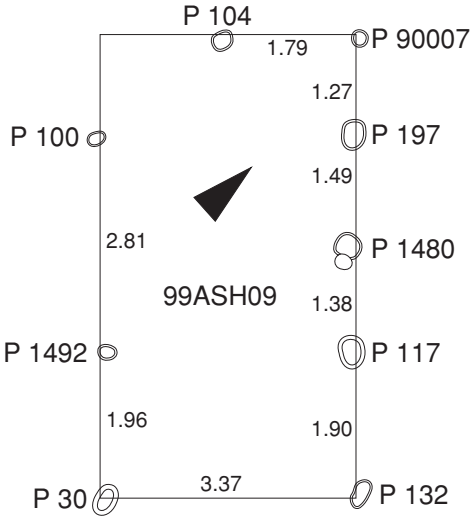
番号	深さ
P 1177	13
P 1179	19
P 1182	15
P 1194	21
P 1201	5
P 1209	20
P 1217	32

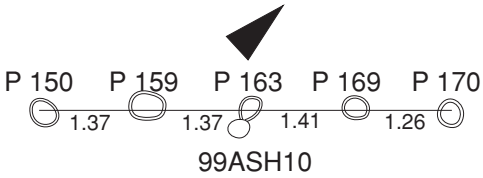




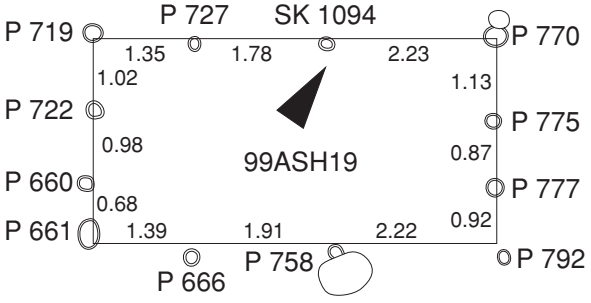
番号	深さ
P 265	10
P 823	31
P 825	39
P 2310	34
P 2964	25
P 2966	7
P 2973	28

番号	深さ
P 30	17
P 100	25
P 104	20
P 117	23
P 132	17
P 197	5
P 1480	14
P 1492	17
P 90007	21



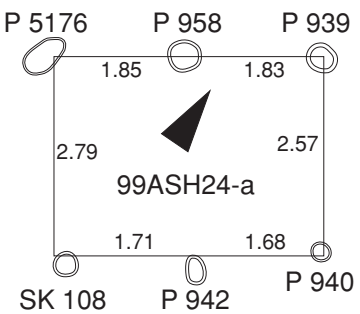


番号	深さ
P 150	20
P 159	45
P 163	40
P 169	10
P 170	15

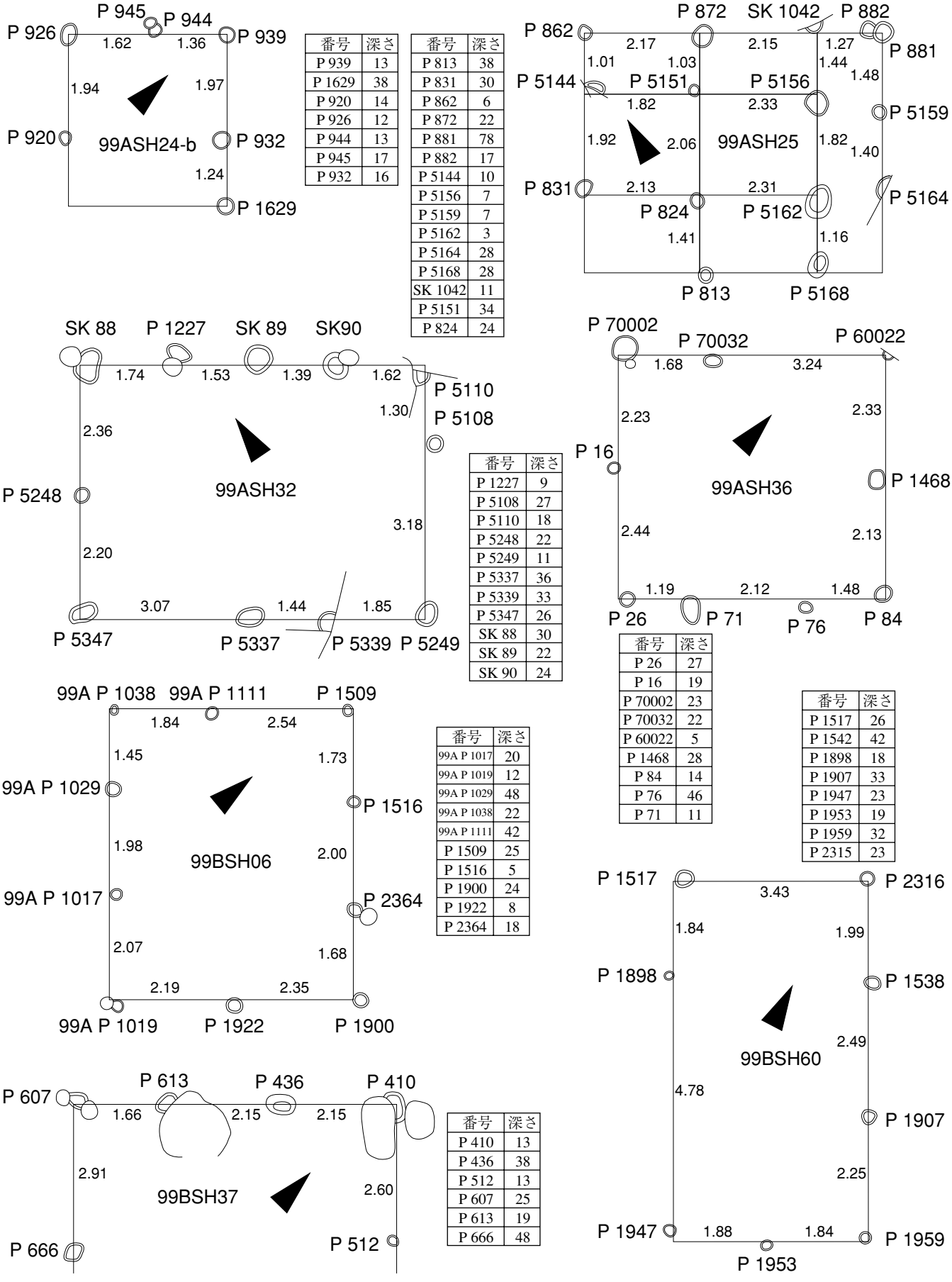


番号	深さ
P 660	15
P 661	26
P 666	18
P 719	12
P 722	19
P 727	14
P 758	9
P 770	14
P 775	26
P 777	13
P 792	4
SK 1094	26

番号	深さ
P 5176	53
P 958	18
P 1016	13
P 940	19
P 942	11
SK 108	51



第 428 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 939	13
P 1629	38
P 920	14
P 926	12
P 944	13
P 945	17
P 932	16

番号	深さ
P 813	38
P 831	30
P 862	6
P 872	22
P 881	78
P 882	17
P 5144	10
P 5156	7
P 5159	7
P 5162	3
P 5164	28
P 5168	28
SK 1042	11
P 5151	34
P 824	24

番号	深さ
P 1227	9
P 5108	27
P 5110	18
P 5248	22
P 5249	11
P 5337	36
P 5339	33
P 5347	26
SK 88	30
SK 89	22
SK 90	24

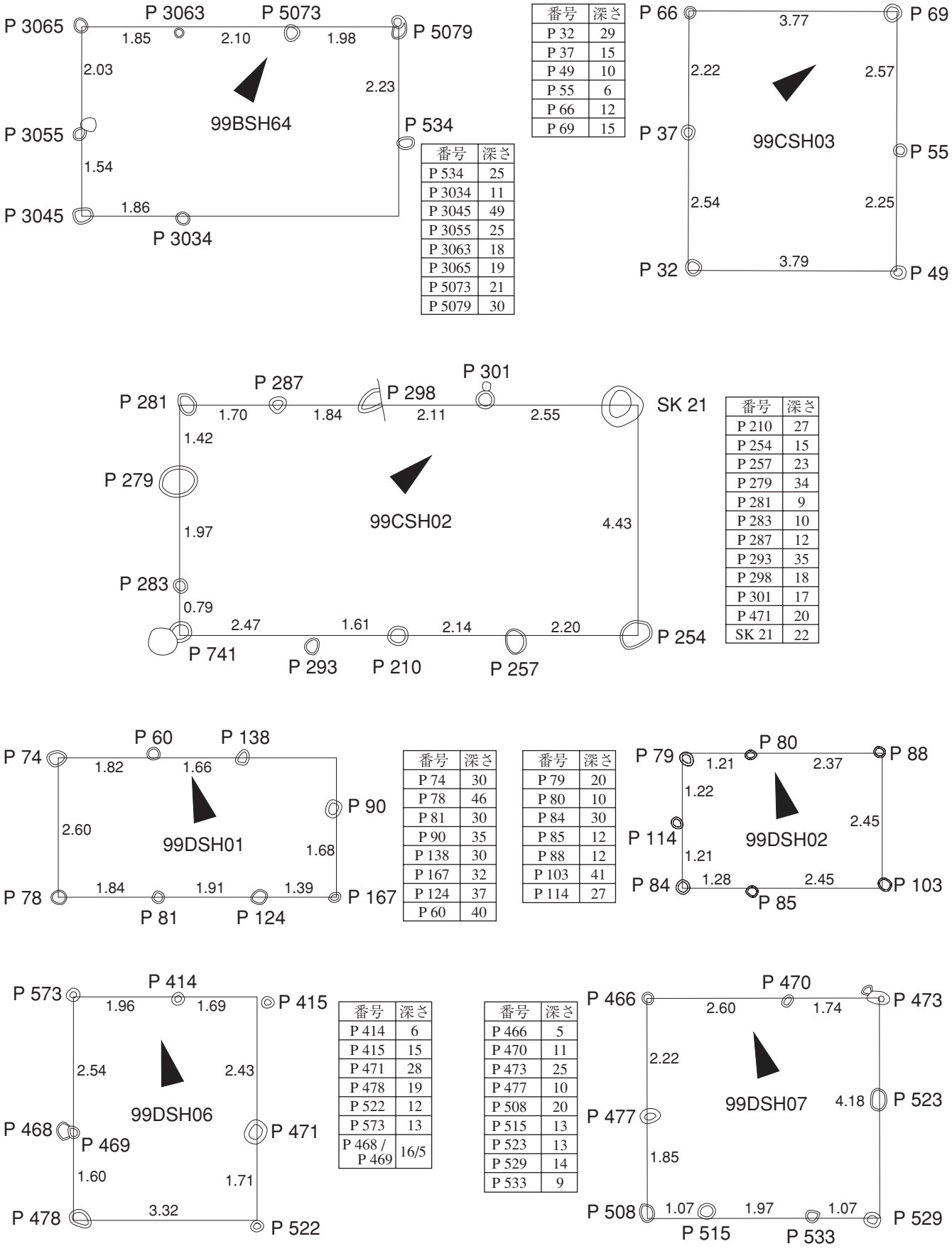
番号	深さ
P 26	27
P 16	19
P 70002	23
P 70032	22
P 60022	5
P 1468	28
P 84	14
P 76	46
P 71	11

番号	深さ
99A P 1017	20
99A P 1019	12
99A P 1029	48
99A P 1038	22
99A P 1111	42
P 1509	25
P 1516	5
P 1900	24
P 1922	8
P 2364	18

番号	深さ
P 1517	26
P 1542	42
P 1898	18
P 1907	33
P 1947	23
P 1953	19
P 1959	32
P 2315	23

番号	深さ
P 410	13
P 436	38
P 512	13
P 607	25
P 613	19
P 666	48

第 429 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 534	25
P 3034	11
P 3045	49
P 3055	25
P 3063	18
P 3065	19
P 5073	21
P 5079	30

番号	深さ
P 32	29
P 37	15
P 49	10
P 55	6
P 66	12
P 69	15

番号	深さ
P 210	27
P 254	15
P 257	23
P 279	34
P 281	9
P 283	10
P 287	12
P 293	35
P 298	18
P 301	17
P 471	20
SK 21	22

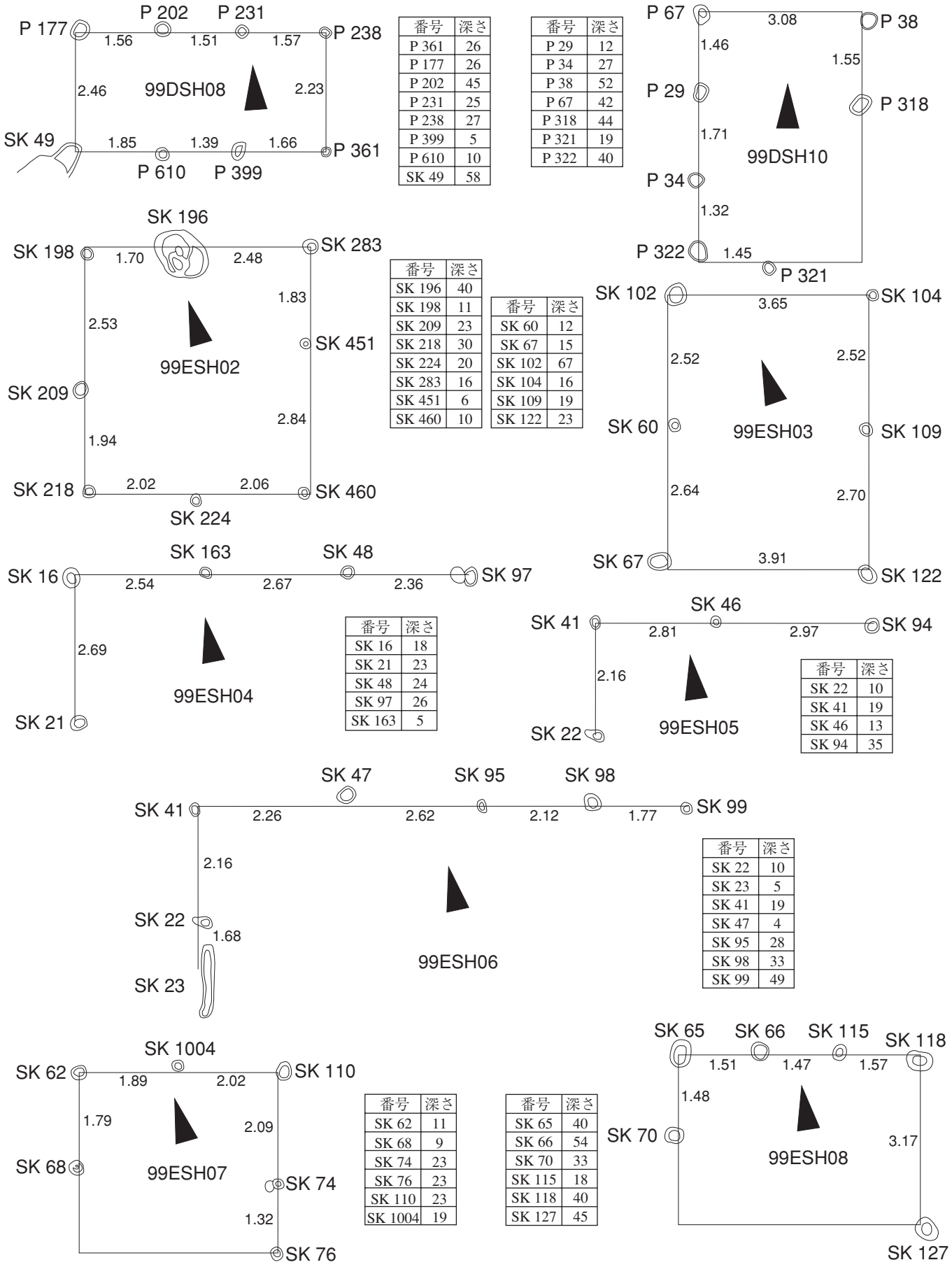
番号	深さ
P 74	30
P 78	46
P 81	30
P 90	35
P 138	30
P 167	32
P 124	37
P 60	40

番号	深さ
P 79	20
P 80	10
P 84	30
P 85	12
P 88	12
P 103	41
P 114	27

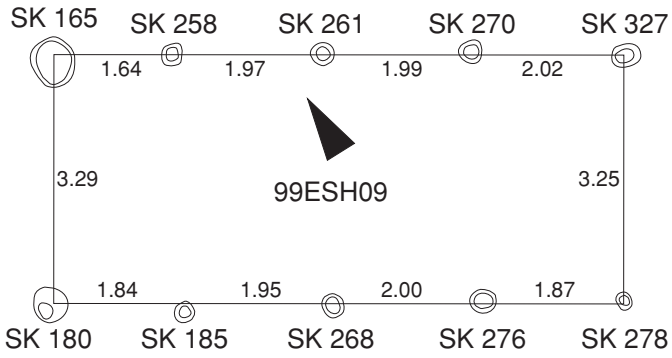
番号	深さ
P 414	6
P 415	15
P 471	28
P 478	19
P 522	12
P 573	13
P 468 / P 469	16/5

番号	深さ
P 466	5
P 470	11
P 473	25
P 477	10
P 508	20
P 515	13
P 523	13
P 529	14
P 533	9

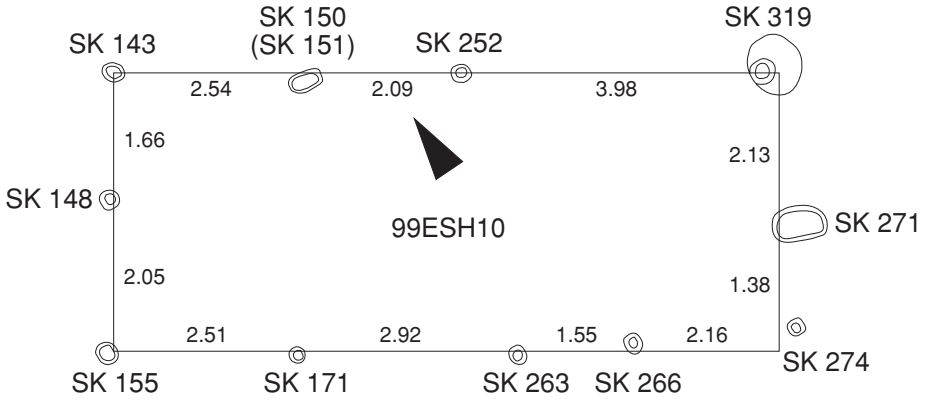
第 430 図　掘立柱建物平面図（1:100）



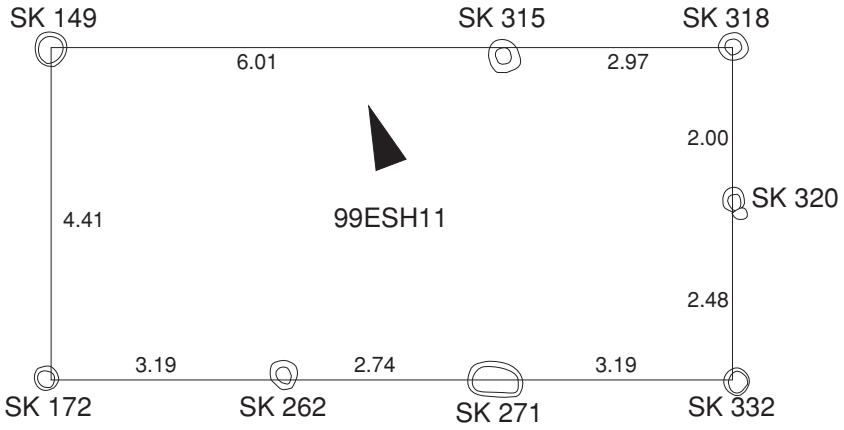
第 431 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
SK 165	30
SK 174	9
SK 180	41
SK 185	17
SK 258	22
SK 261	40
SK 268	30
SK 270	36
SK 276	38
SK 278	18
SK 327	15

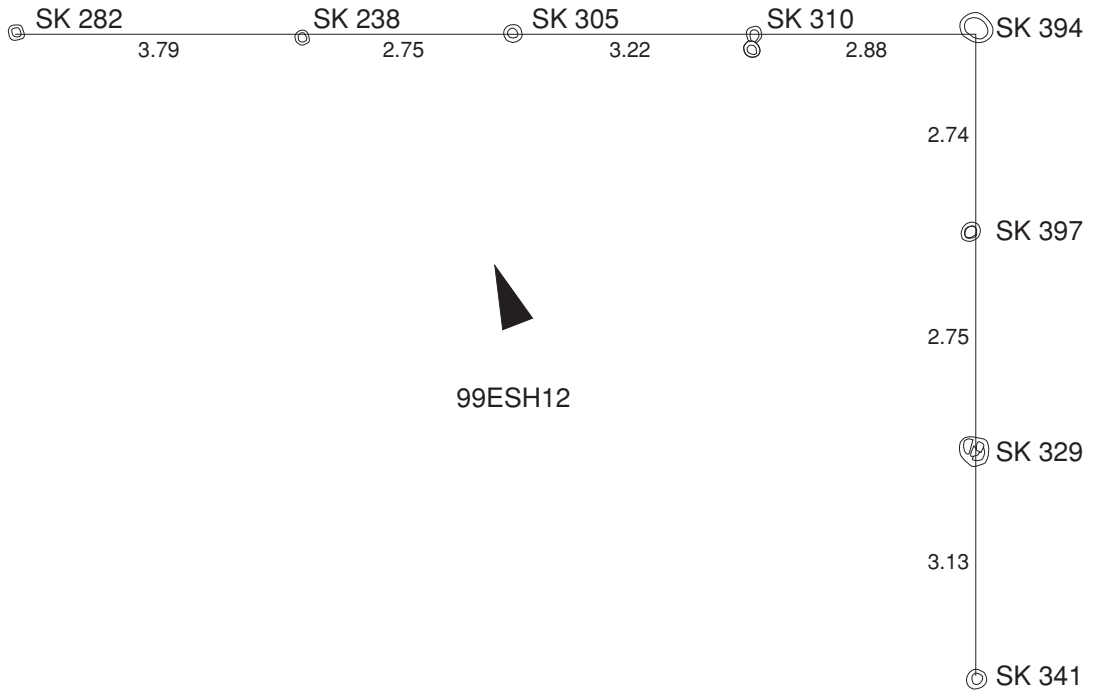


番号	深さ
SK 143	22
SK 148	23
SK 150 (SK 151)	39
SK 155	45
SK 171	11
SK 252	25
SK 263	12
SK 266	10
SK 271	44
SK 274	25
SK 319	27

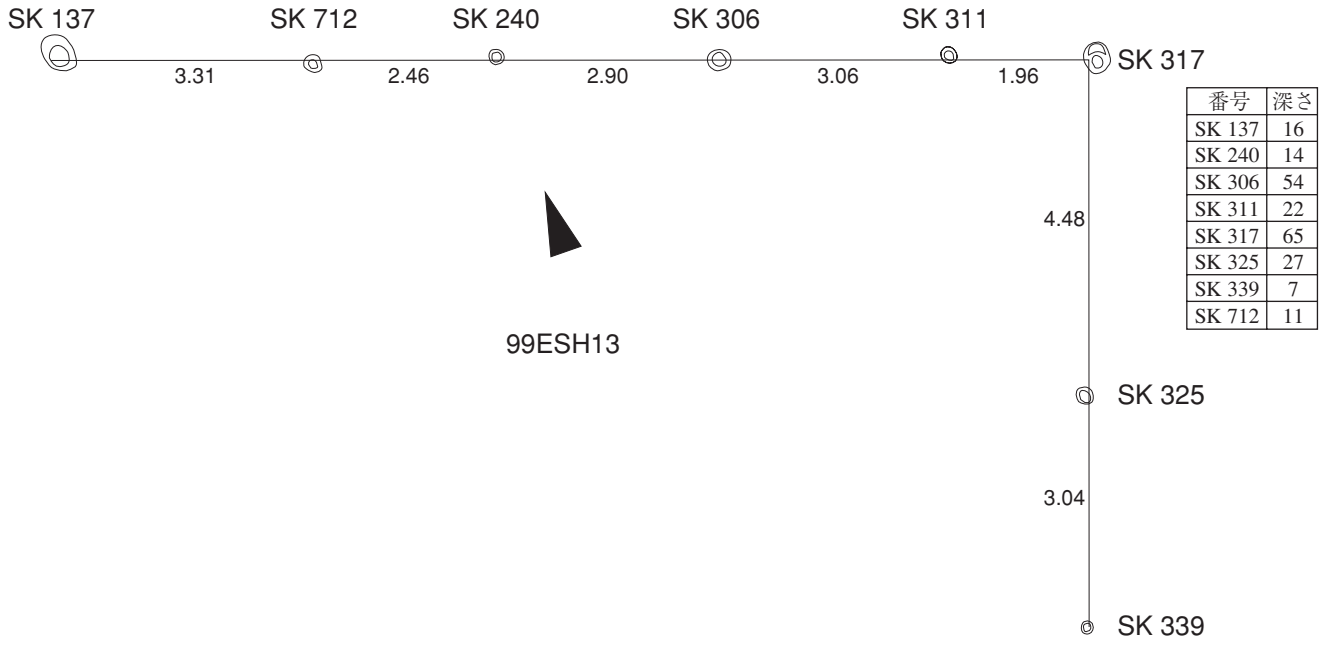


番号	深さ
SK 149	31
SK 172	50
SK 262	49
SK 271	44
SK 315	56
SK 318	52
SK 320	51
SK 332	63

第 432 図　掘立柱建物平面図（1:100）

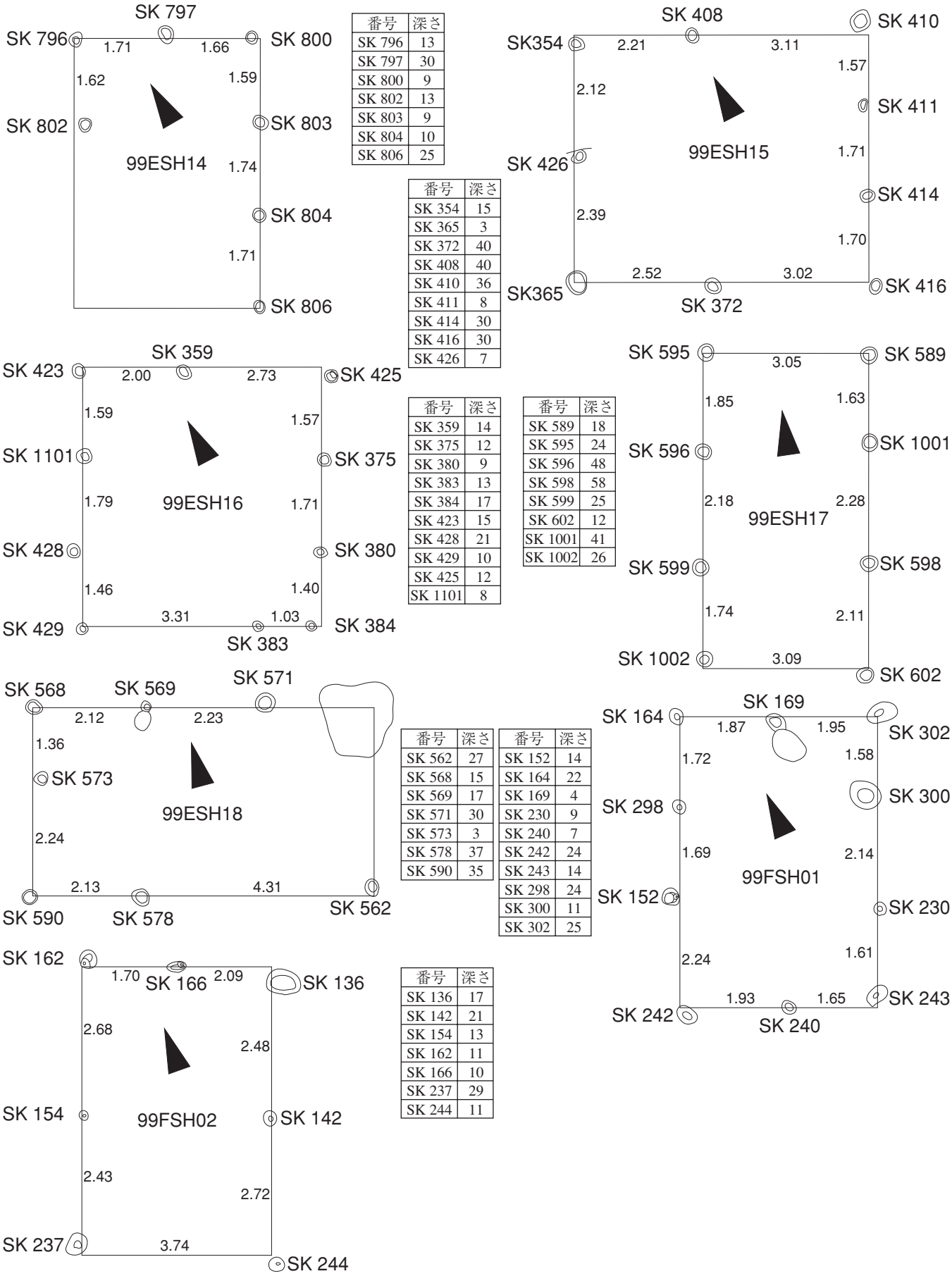


番号	深さ
SK 238	30
SK 282	19
SK 305	10
SK 310	22
SK 329	29
SK 341	10
SK 394	29
SK 397	64



番号	深さ
SK 137	16
SK 240	14
SK 306	54
SK 311	22
SK 317	65
SK 325	27
SK 339	7
SK 712	11

第 433 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
SK 796	13
SK 797	30
SK 800	9
SK 802	13
SK 803	9
SK 804	10
SK 806	25

番号	深さ
SK 354	15
SK 365	3
SK 372	40
SK 408	40
SK 410	36
SK 411	8
SK 414	30
SK 416	30
SK 426	7

番号	深さ
SK 359	14
SK 375	12
SK 380	9
SK 383	13
SK 384	17
SK 423	15
SK 428	21
SK 429	10
SK 425	12
SK 1101	8

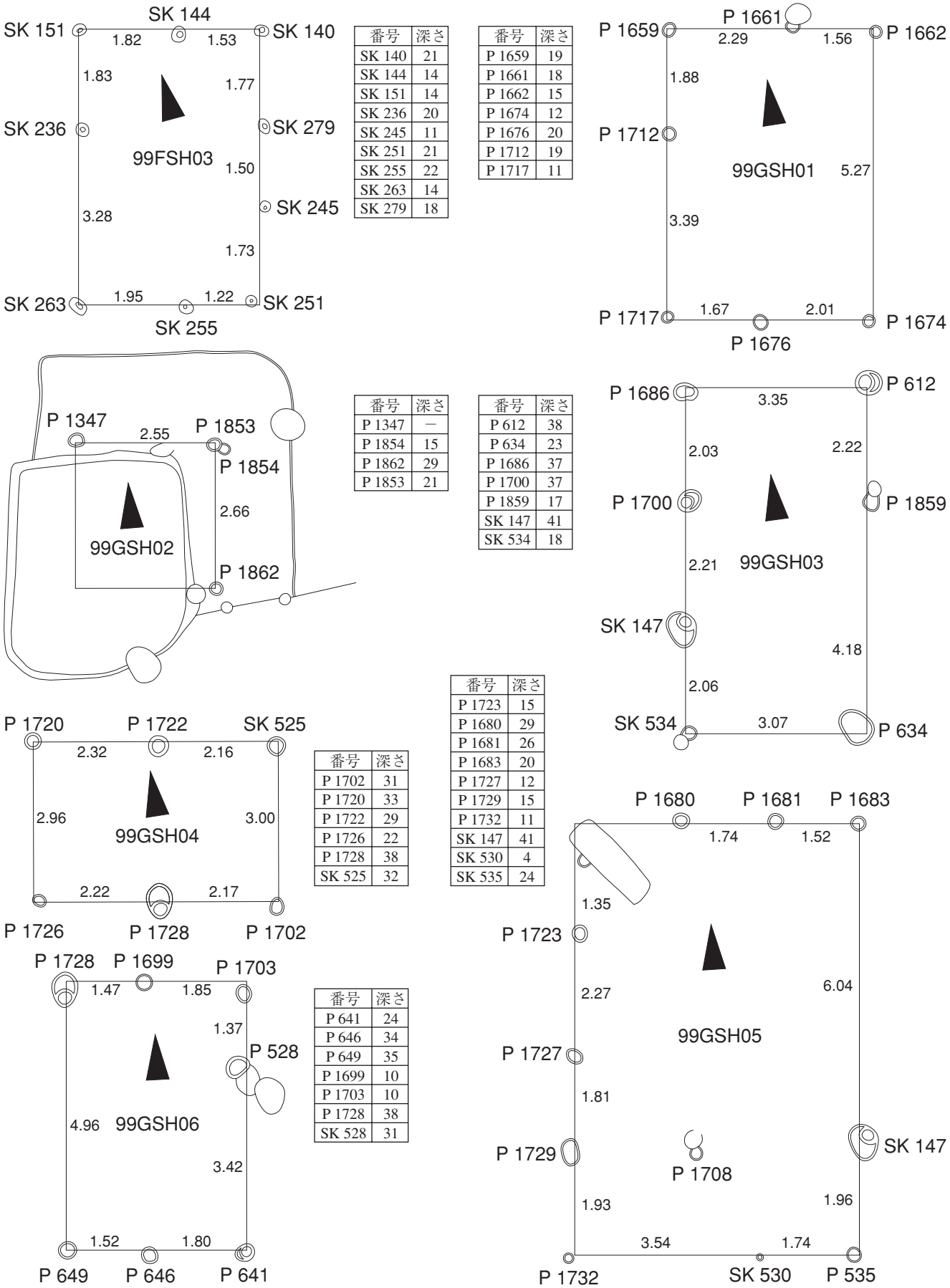
番号	深さ
SK 589	18
SK 595	24
SK 596	48
SK 598	58
SK 599	25
SK 602	12
SK 1001	41
SK 1002	26

番号	深さ
SK 562	27
SK 568	15
SK 569	17
SK 571	30
SK 573	3
SK 578	37
SK 590	35

番号	深さ
SK 152	14
SK 164	22
SK 169	4
SK 230	9
SK 240	7
SK 242	24
SK 243	14
SK 298	24
SK 300	11
SK 302	25

番号	深さ
SK 136	17
SK 142	21
SK 154	13
SK 162	11
SK 166	10
SK 237	29
SK 244	11

第 434 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
SK 140	21
SK 144	14
SK 151	14
SK 236	20
SK 245	11
SK 251	21
SK 255	22
SK 263	14
SK 279	18

番号	深さ
P 1659	19
P 1661	18
P 1662	15
P 1674	12
P 1676	20
P 1712	19
P 1717	11

番号	深さ
P 1347	—
P 1854	15
P 1862	29
P 1853	21

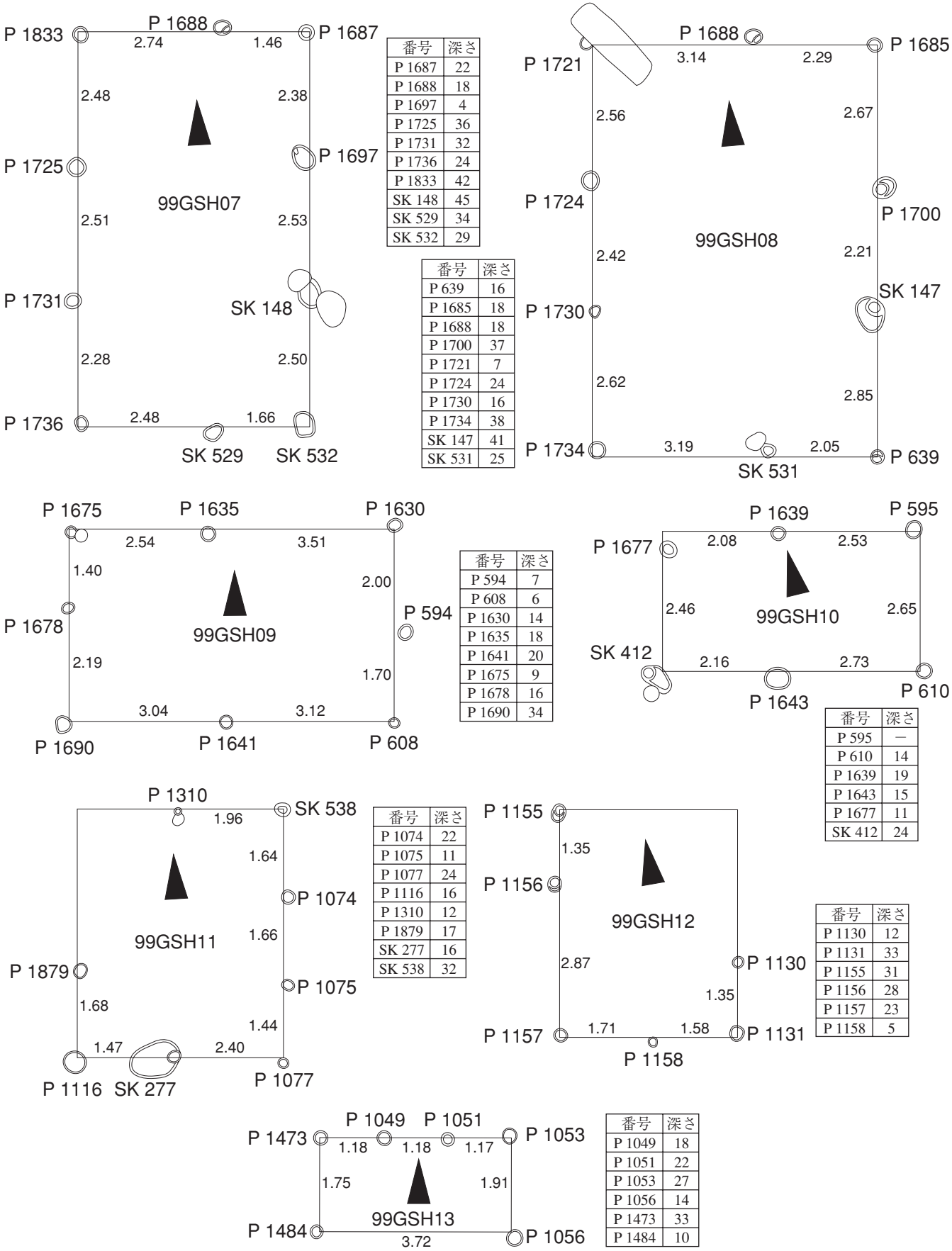
番号	深さ
P 612	38
P 634	23
P 1686	37
P 1700	37
P 1859	17
SK 147	41
SK 534	18

番号	深さ
P 1723	15
P 1680	29
P 1681	26
P 1683	20
P 1727	12
P 1729	15
P 1732	11
SK 147	41
SK 530	4
SK 535	24

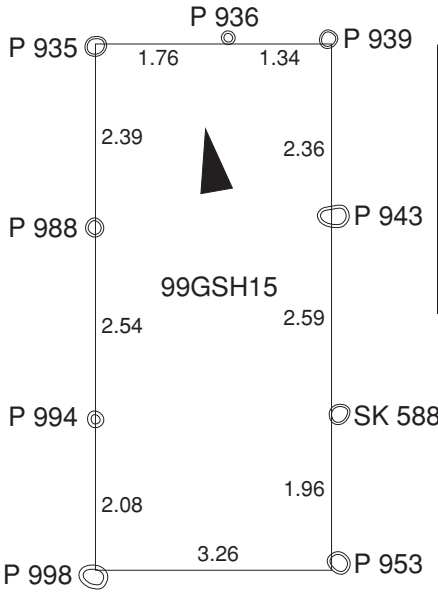
番号	深さ
P 1702	31
P 1720	33
P 1722	29
P 1726	22
P 1728	38
SK 525	32

番号	深さ
P 641	24
P 646	34
P 649	35
P 1699	10
P 1703	10
P 1728	38
SK 528	31

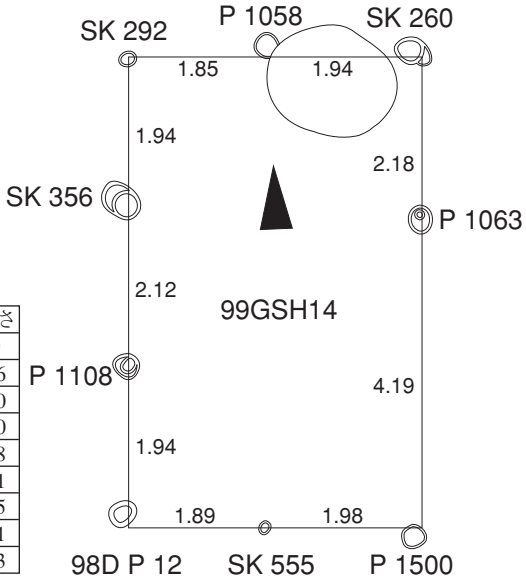
第 435 図　掘立柱建物平面図（1:100）



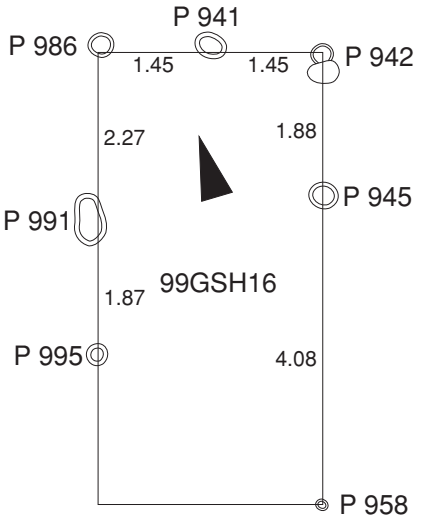
第 436 図　掘立柱建物平面図（1:100）



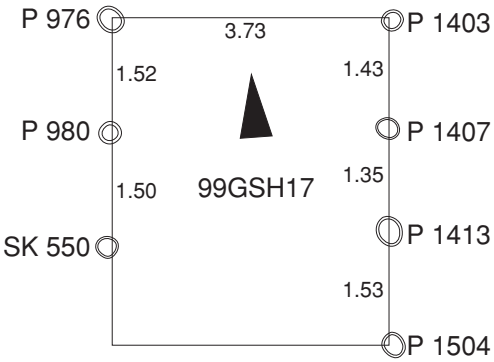
番号	深さ
P 935	35
P 936	19
P 939	27
P 943	30
P 953	22
P 988	21
P 994	9
P 998	30
SK 588	1



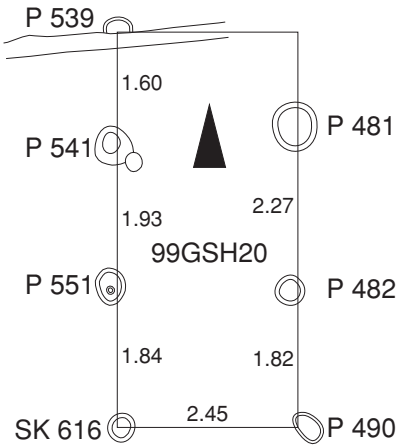
番号	深さ
P 1058	9
P 1063	26
P 1108	30
P 1500	20
SK 260	38
SK 292	51
SK 356	35
SK 555	11
98D P 12	43



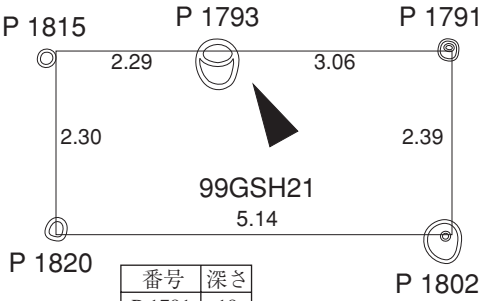
番号	深さ
P 941	37
P 942	19
P 945	23
P 958	8
P 986	31
P 991	30
P 995	21



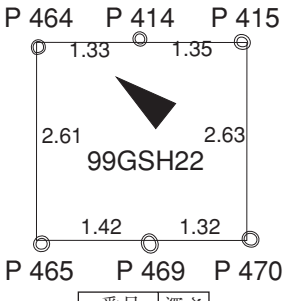
番号	深さ
P 976	8
P 980	33
P 1403	27
P 1407	15
P 1413	18
P 1504	18
SK 550	27



番号	深さ
P 481	16
P 482	19
P 490	16
P 539	17
P 541	24
P 551	27
SK 616	10

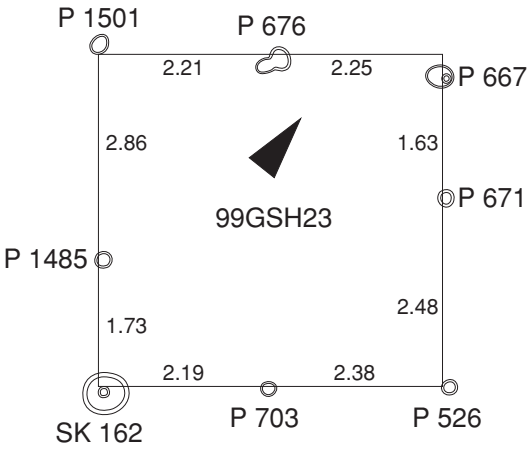


番号	深さ
P 1791	19
P 1793	22
P 1802	22
P 1815	10
P 1820	13



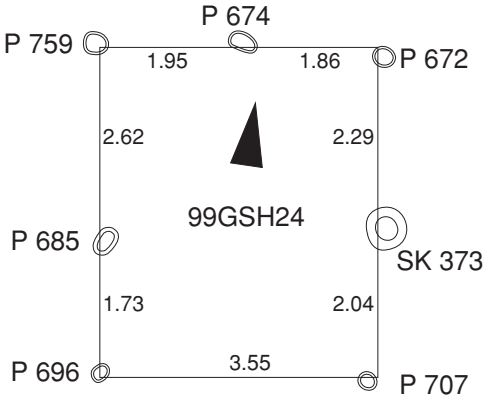
番号	深さ
P 414	9
P 415	11
P 464	9
P 465	10
P 469	12
P 470	11

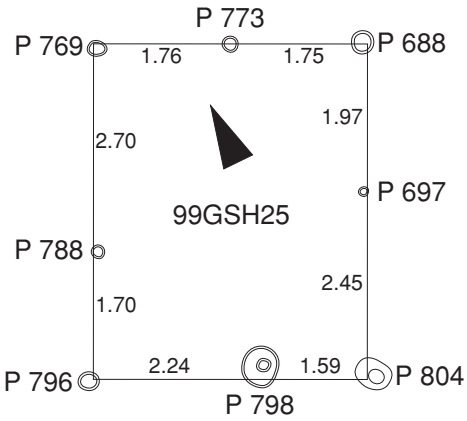
第 437 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 1485	15
P 526	12
P 667	15
P 671	14
P 676	19
P 703	16
P 1501	34
SK 162	22

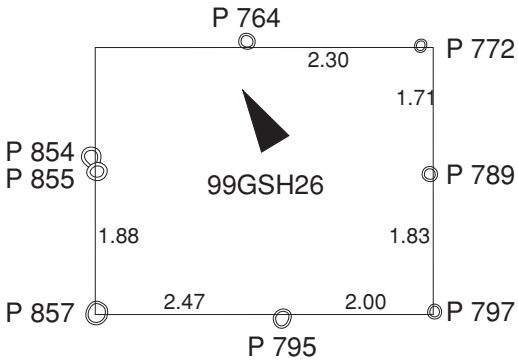
番号	深さ
P 672	8
P 674	9
P 685	13
P 696	5
P 707	19
P 759	4
SK 373	14

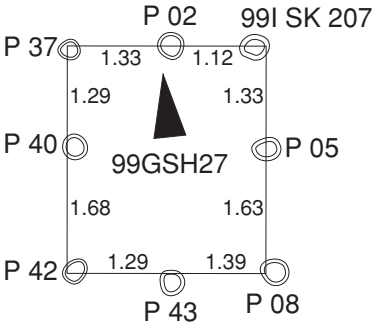




番号	深さ
P 688	15
P 697	2
P 769	14
P 773	16
P 788	12
P 796	8
P 798	21
P 804	22

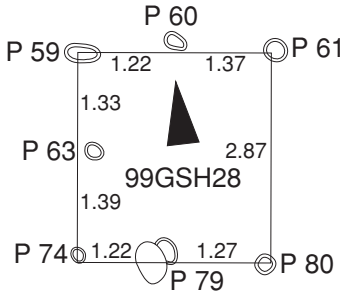
番号	深さ
P 764	18
P 772	11
P 789	13
P 795	20
P 797	11
P 854	11
P 855	8
P 857	7

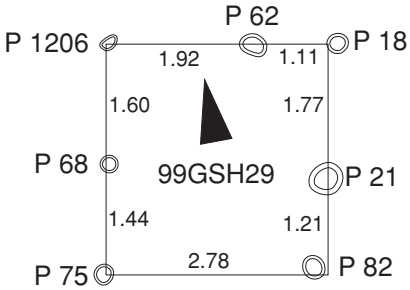




番号	深さ
P 02	19
P 05	21
P 08	18
P 37	13
P 40	15
P 42	9
P 43	19
99I SK 207	31

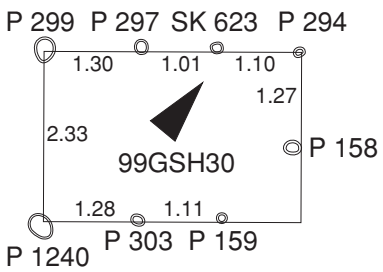
番号	深さ
P 59	17
P 60	15
P 61	18
P 74	13
P 79	14
P 80	13



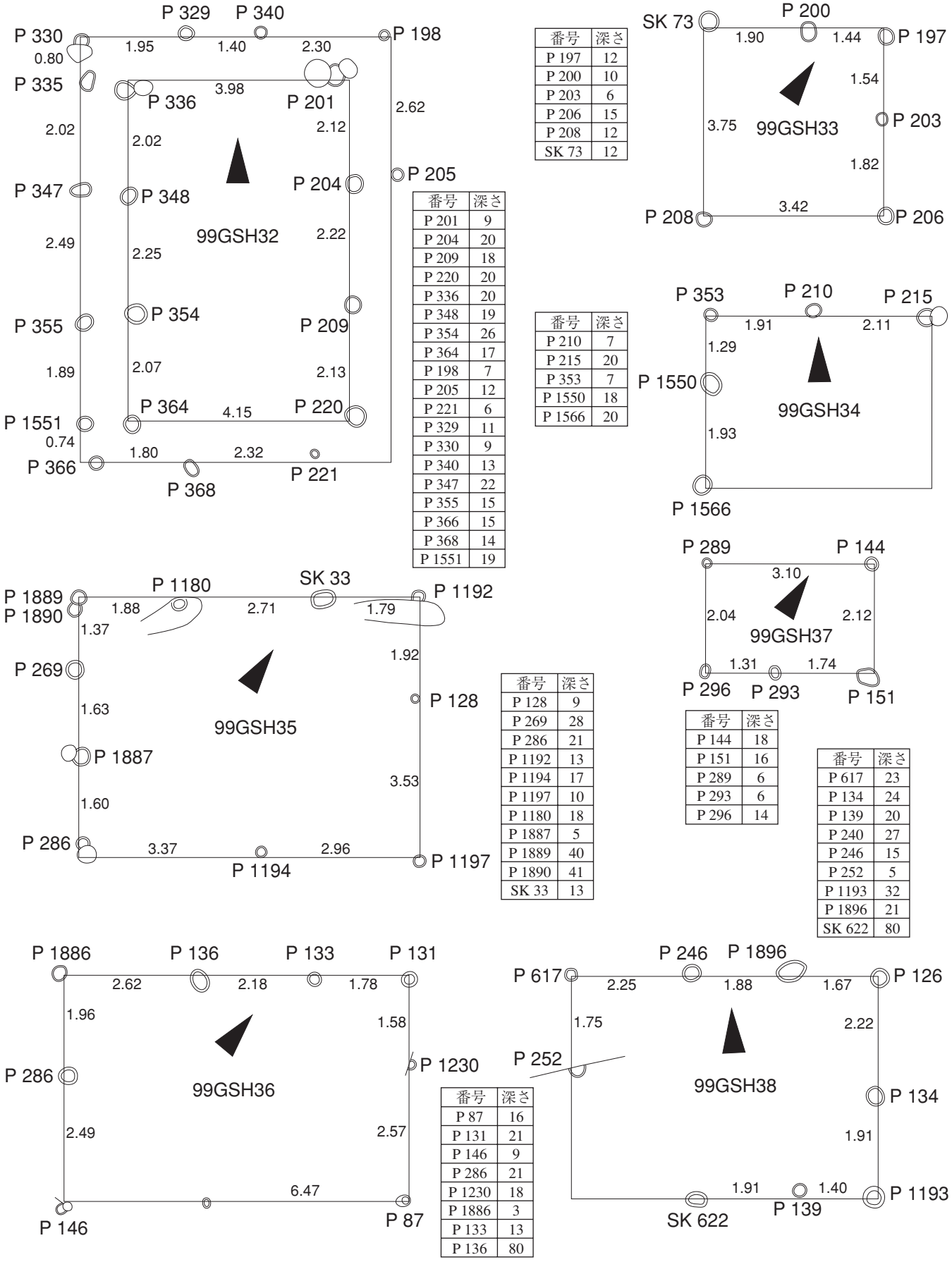


番号	深さ
P 18	19
P 21	15
P 62	15
P 68	18
P 75	14
P 82	14
P 1206	16

番号	深さ
P 158	6
P 159	8
P 294	—
P 297	14
P 299	9
P 303	9
P 1240	13
SK 623	4



第 438 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 197	12
P 200	10
P 203	6
P 206	15
P 208	12
SK 73	12

番号	深さ
P 201	9
P 204	20
P 209	18
P 220	20
P 336	20
P 348	19
P 354	26
P 364	17
P 198	7
P 205	12
P 221	6
P 329	11
P 330	9
P 340	13
P 347	22
P 355	15
P 366	15
P 368	14
P 1551	19

番号	深さ
P 210	7
P 215	20
P 353	7
P 1550	18
P 1566	20

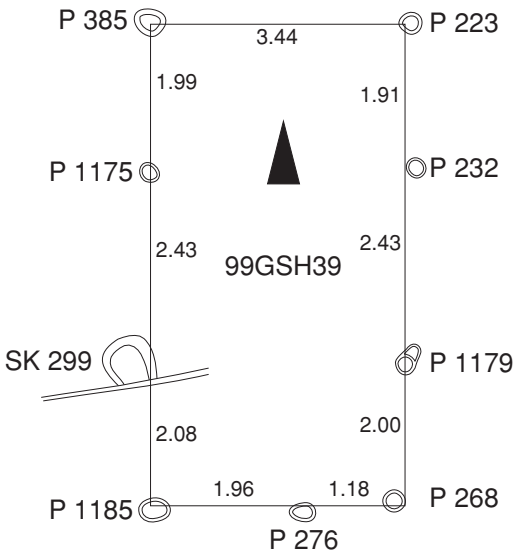
番号	深さ
P 128	9
P 269	28
P 286	21
P 1192	13
P 1194	17
P 1197	10
P 1180	18
P 1887	5
P 1889	40
P 1890	41
SK 33	13

番号	深さ
P 144	18
P 151	16
P 289	6
P 293	6
P 296	14

番号	深さ
P 617	23
P 134	24
P 139	20
P 240	27
P 246	15
P 252	5
P 1193	32
P 1896	21
SK 622	80

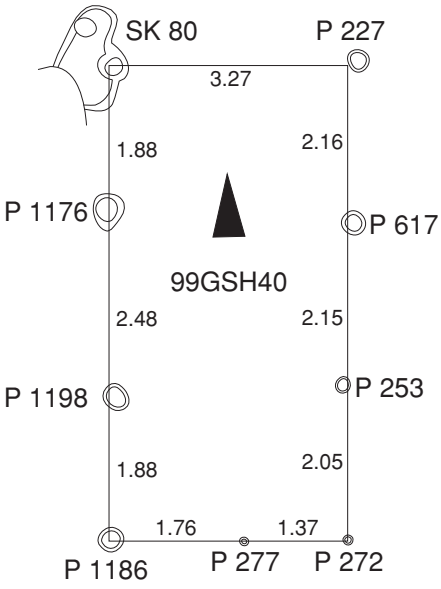
番号	深さ
P 87	16
P 131	21
P 146	9
P 286	21
P 1230	18
P 1886	3
P 133	13
P 136	80

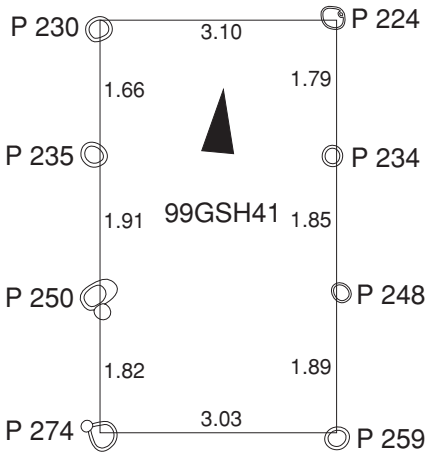
第 439 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 223	21
P 232	17
P 268	17
P 276	15
P 385	15
P 1175	14
P 1179	26
P 1185	18
SK 299	18

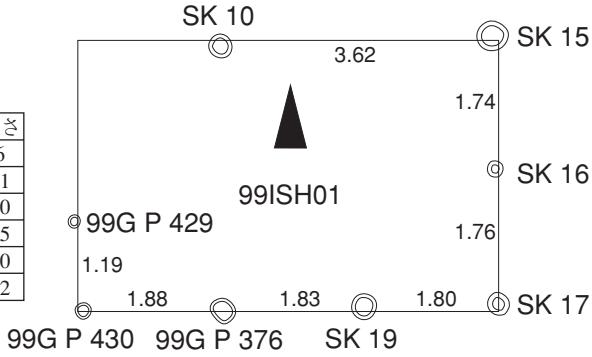
番号	深さ
P 253	12
P 272	5
P 617	18
P 1176	31
P 1186	21
P 1198	26
SK 80	11

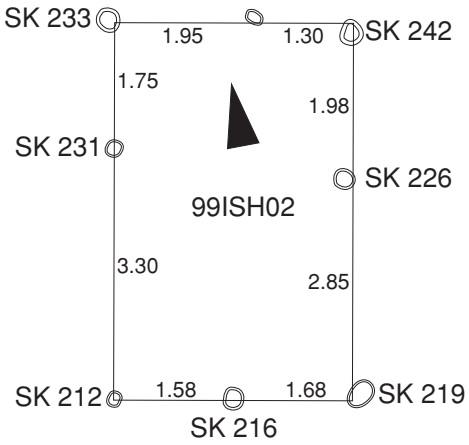




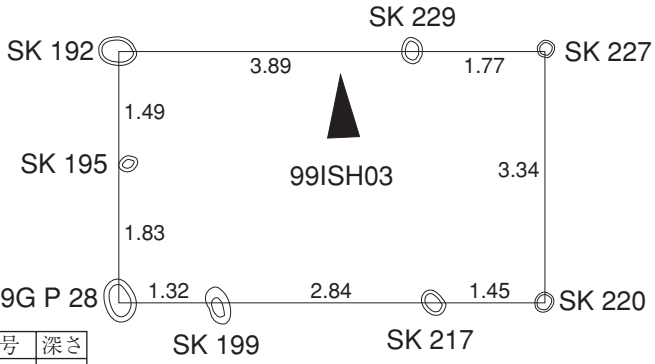
番号	深さ
P 224	13
P 230	20
P 234	14
P 235	25
P 248	9
P 250	22
P 259	16
P 274	24

番号	深さ
99G P 429	6
99G P 430	11
SK 10	30
SK 15	15
SK 17	20
SK 19	32



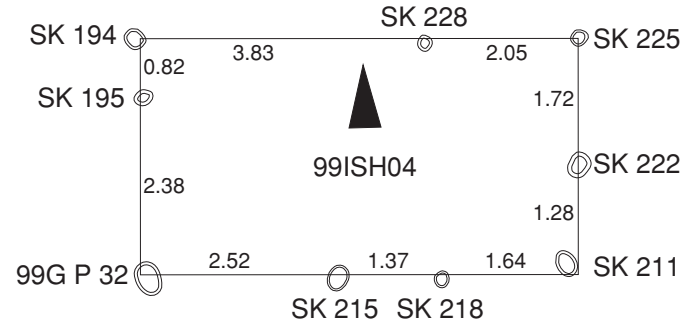


番号	深さ
SK 212	4
SK 216	21
SK 219	30
SK 226	26
SK 231	21
SK 233	24
SK 242	24
番号なし	15

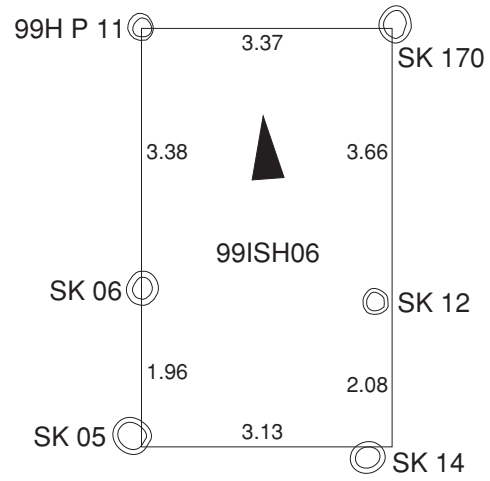


番号	深さ
99G P 28	18
SK 192	10
SK 199	8
SK 217	30
SK 220	21
SK 227	15
SK 229	25
SK 195	15

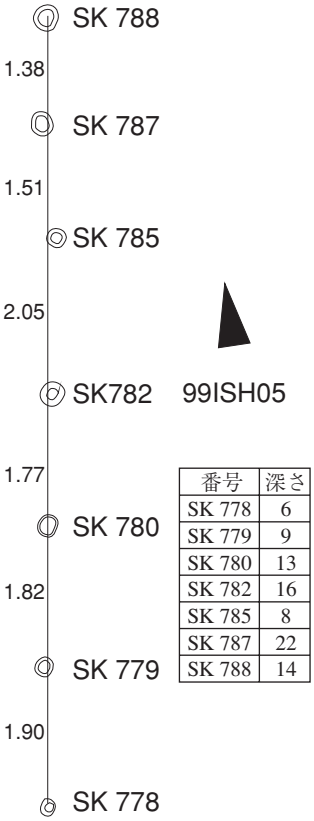
第 440 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
99G P 32	13
SK 194	23
SK 195	12
SK 211	30
SK 215	10
SK 218	21
SK 222	19
SK 225	6
SK 228	6



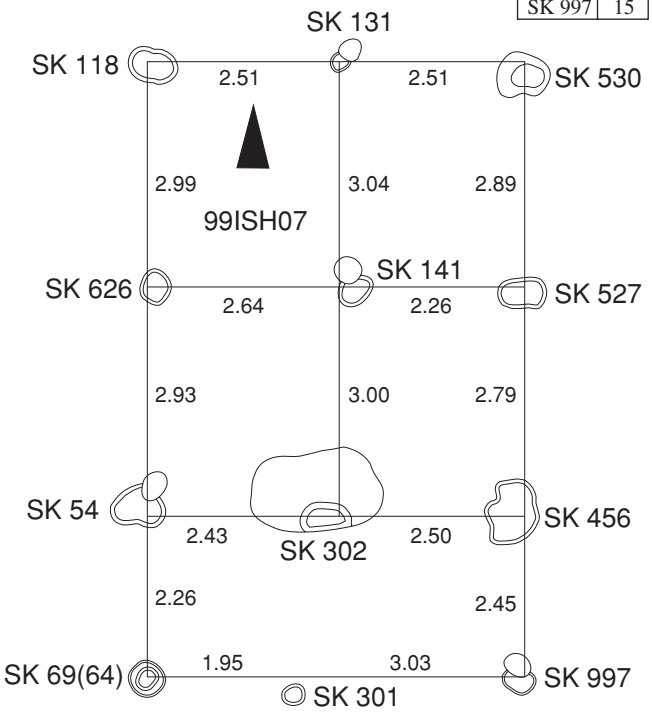
番号	深さ
99H P 11	12
SK 05	38
SK 06	36
SK 12	26
SK 14	24
SK 170	10

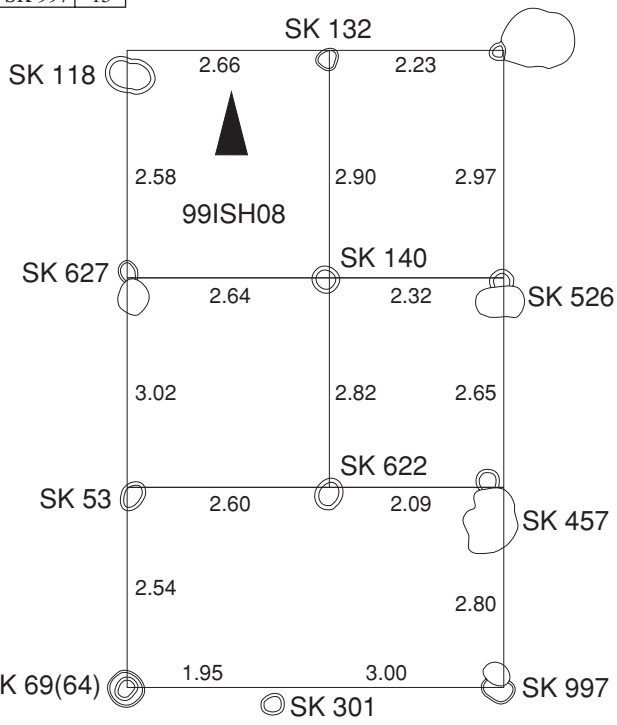


番号	深さ
SK 778	6
SK 779	9
SK 780	13
SK 782	16
SK 785	8
SK 787	22
SK 788	14

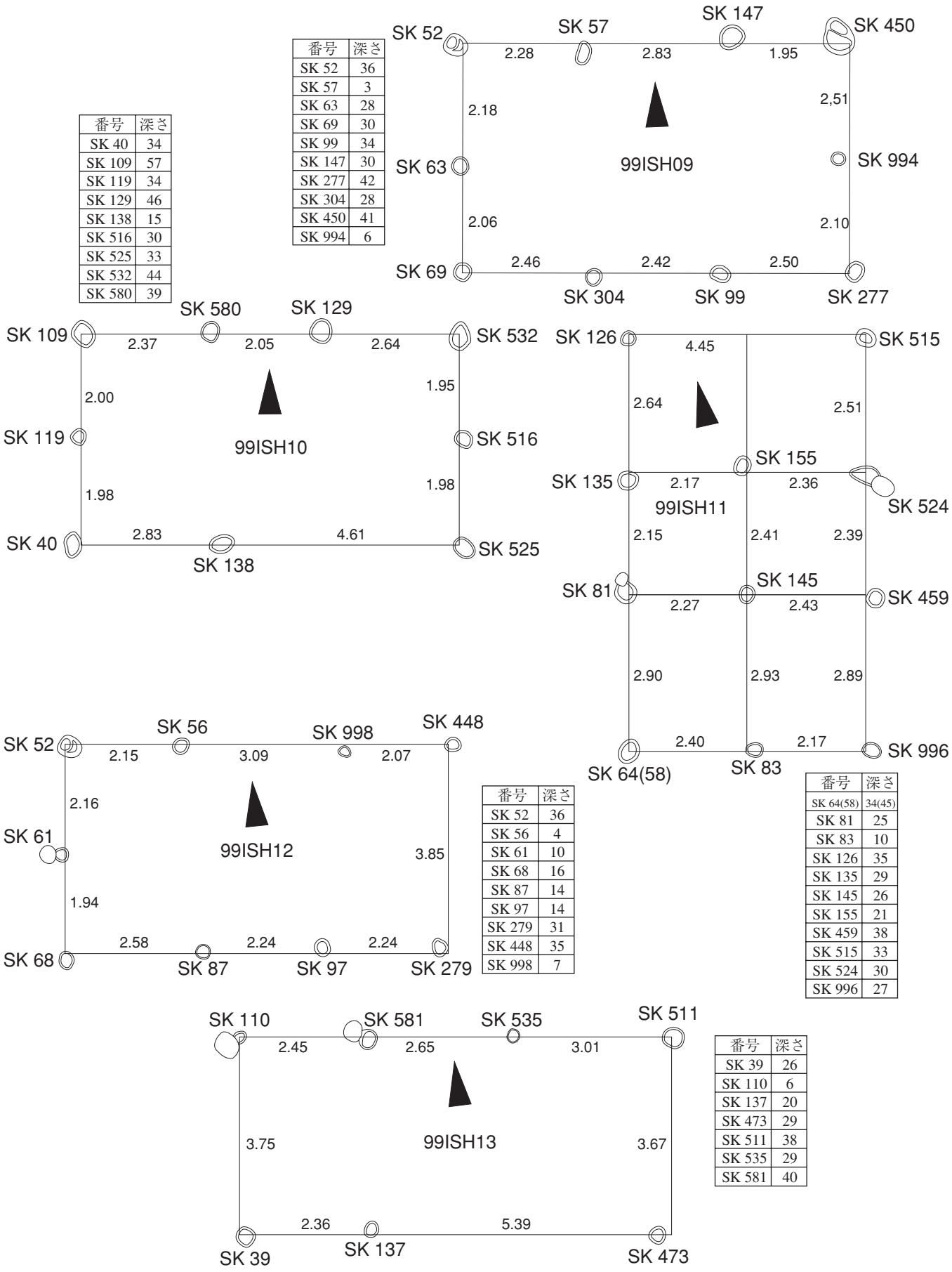
番号	深さ
SK 54	42
SK 69(64)	30(34)
SK 118	47
SK 131	9
SK 141	22
SK 301	27
SK 302	26
SK 456	69
SK 527	50
SK 530	52
SK 626	28
SK 997	15

番号	深さ
SK 53	33
SK 69(64)	30(34)
SK 118	47
SK 132	26
SK 140	26
SK 301	27
SK 457	18
SK 526	23
SK 622	28
SK 627	18
SK 997	15





第 441 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
SK 40	34
SK 109	57
SK 119	34
SK 129	46
SK 138	15
SK 516	30
SK 525	33
SK 532	44
SK 580	39

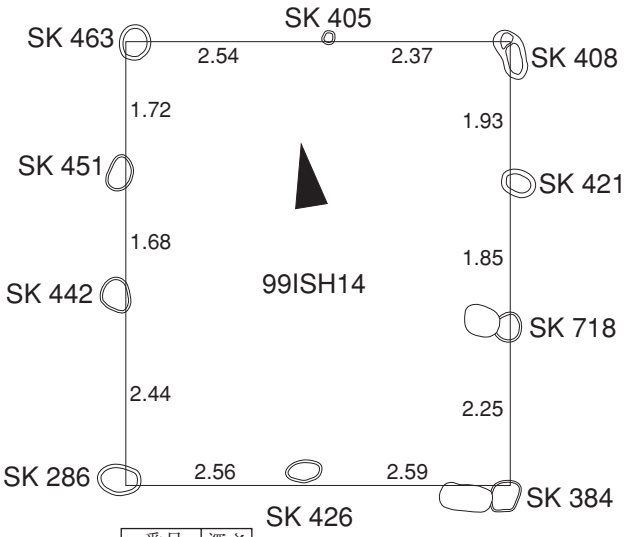
番号	深さ
SK 52	36
SK 57	3
SK 63	28
SK 69	30
SK 99	34
SK 147	30
SK 277	42
SK 304	28
SK 450	41
SK 994	6

番号	深さ
SK 52	36
SK 56	4
SK 61	10
SK 68	16
SK 87	14
SK 97	14
SK 279	31
SK 448	35
SK 998	7

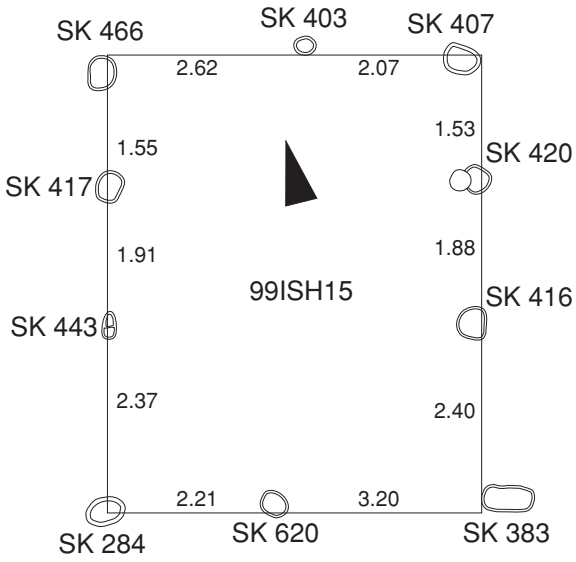
番号	深さ
SK 64(58)	34(45)
SK 81	25
SK 83	10
SK 126	35
SK 135	29
SK 145	26
SK 155	21
SK 459	38
SK 515	33
SK 524	30
SK 996	27

番号	深さ
SK 39	26
SK 110	6
SK 137	20
SK 473	29
SK 511	38
SK 535	29
SK 581	40

第 442 図　掘立柱建物平面図（1:100）



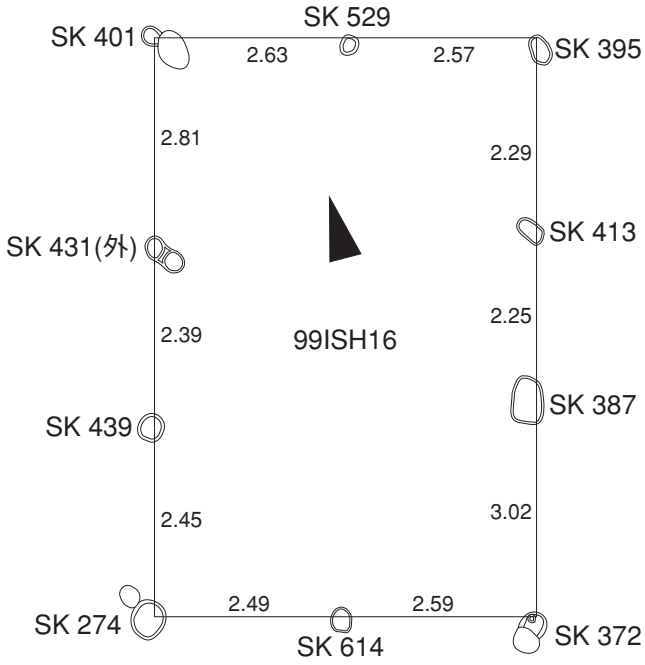
番号	深さ
SK 286	34
SK 384	44
SK 405	20
SK 408	43
SK 421	41
SK 426	23
SK 442	36
SK 451	38
SK 463	45
SK 718	38

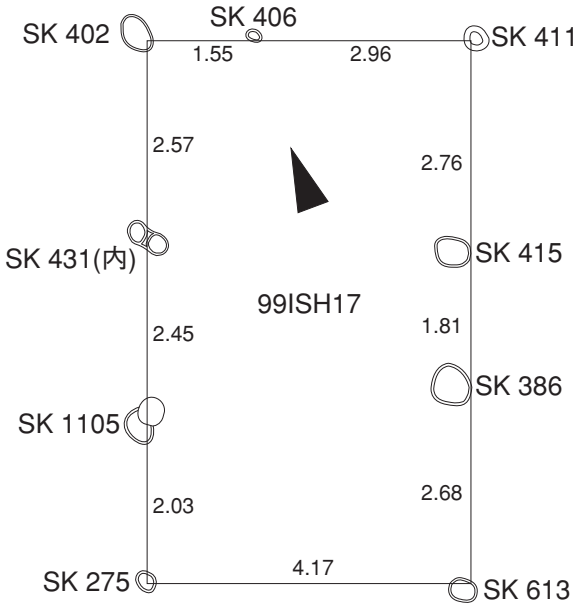


番号	深さ
SK 284	34
SK 383	38
SK 403	3
SK 407	27
SK 416	36
SK 417	32
SK 420	26
SK 443	10
SK 466	34
SK 620	37

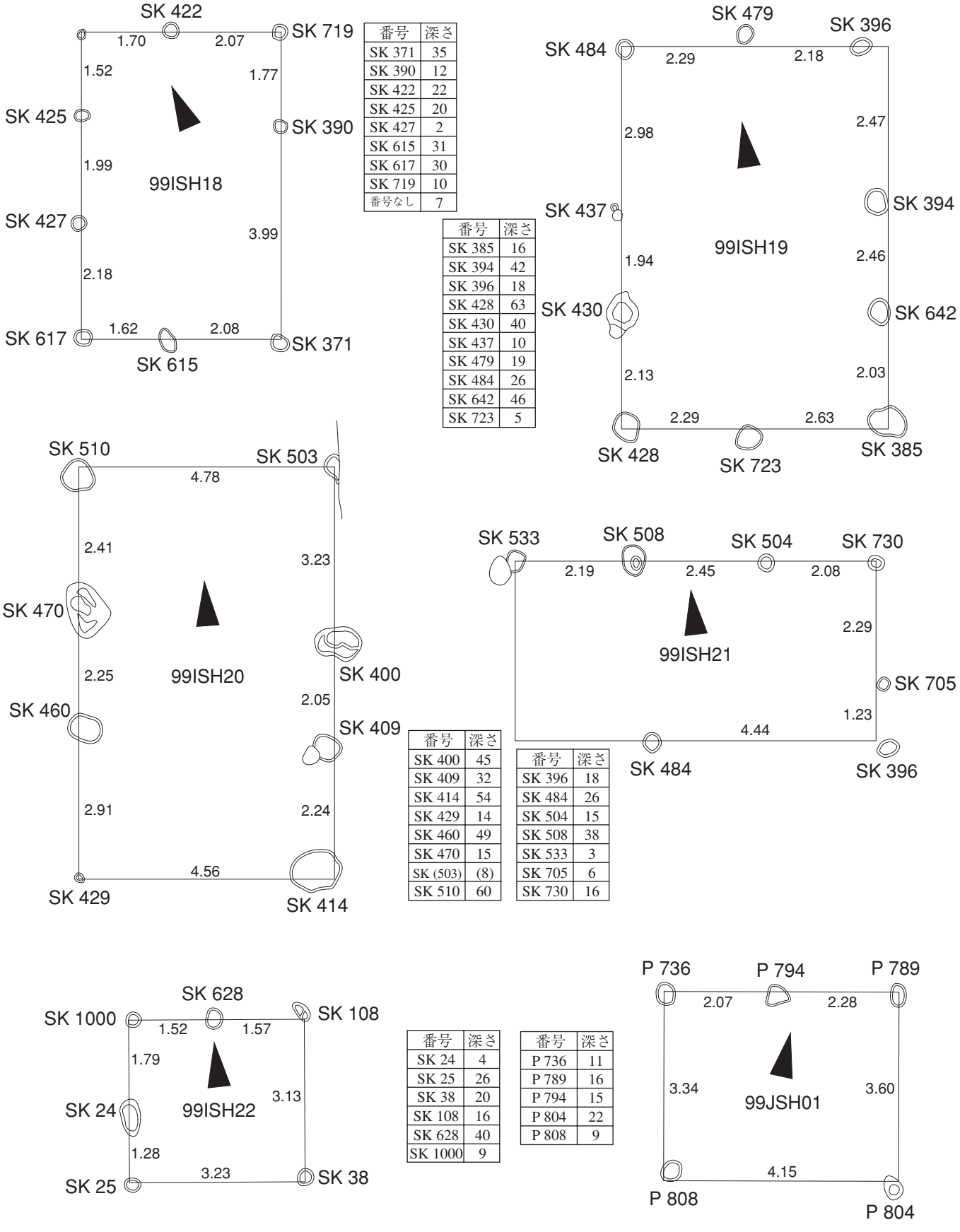
番号	深さ
SK 274	37
SK 372	13
SK 387	36
SK 395	15
SK 401	18
SK 413	20
SK 431(外)	43
SK 439	25
SK 529	20
SK 614	27

番号	深さ
SK 275	6
SK 386	42
SK 402	45
SK 406	10
SK 411	14
SK 415	38
SK 431(内)	33
SK 613	32
SK 1105	31

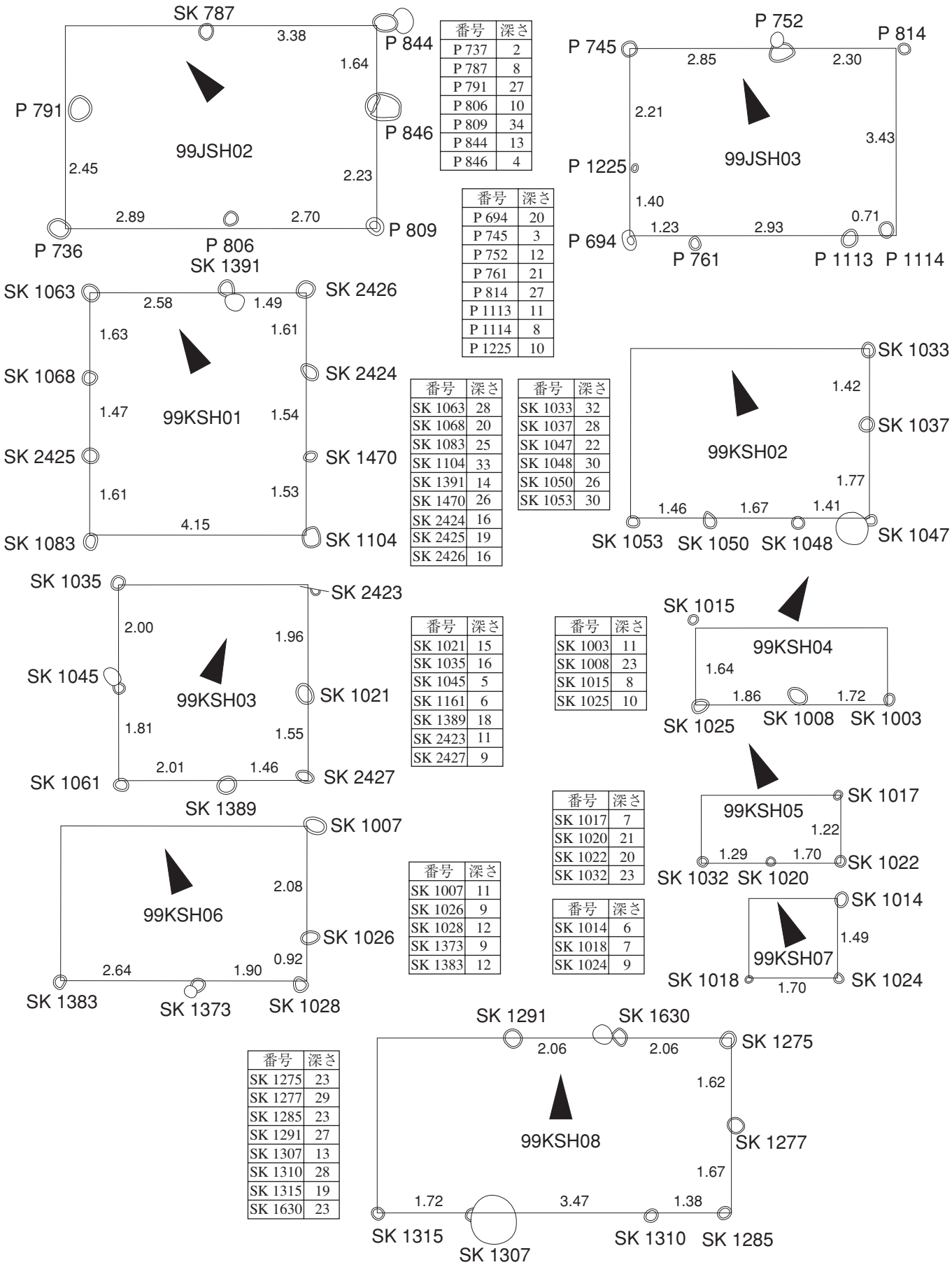




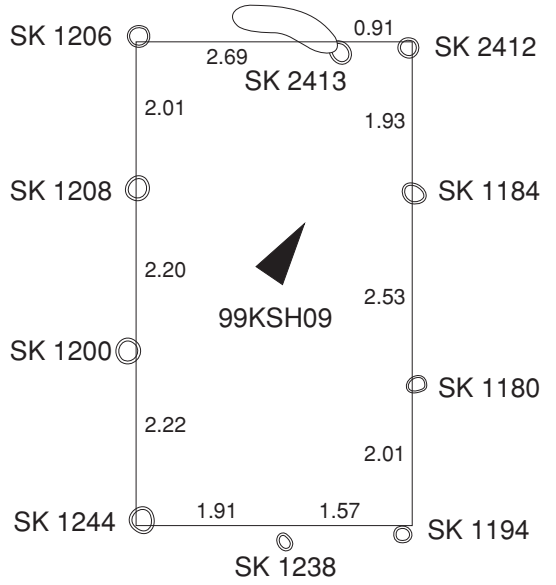
第 443 図　掘立柱建物平面図（1:100）



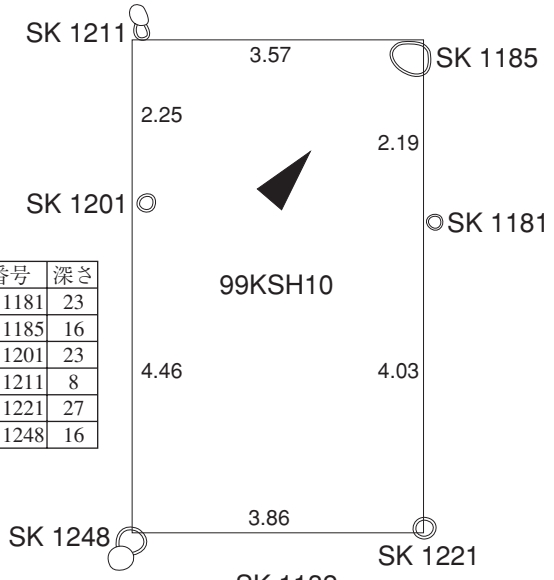
第 444 図　掘立柱建物平面図（1:100）



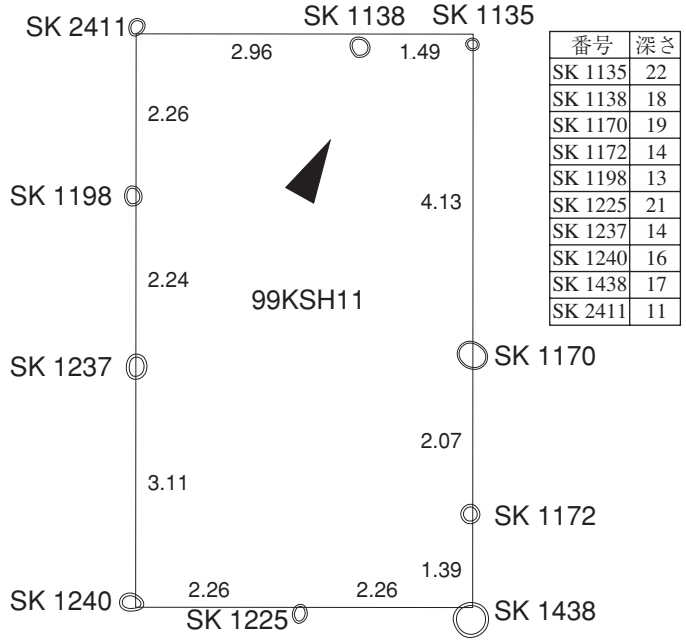
第 445 図　掘立柱建物平面図（1:100）



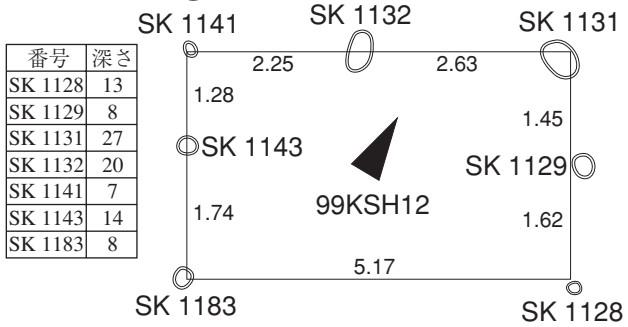
番号	深さ
SK 1180	13
SK 1184	18
SK 1194	22
SK 1200	33
SK 1206	32
SK 1208	30
SK 1238	6
SK 1244	21
SK 2412	24
SK 2413	17



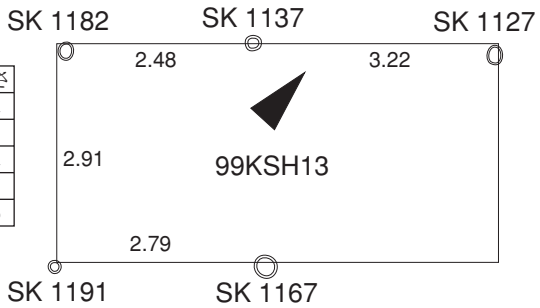
番号	深さ
SK 1181	23
SK 1185	16
SK 1201	23
SK 1211	8
SK 1221	27
SK 1248	16



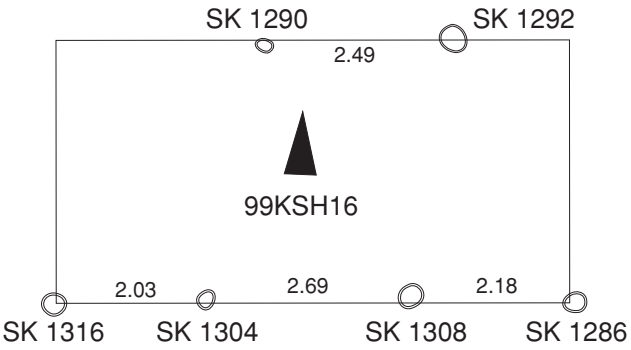
番号	深さ
SK 1135	22
SK 1138	18
SK 1170	19
SK 1172	14
SK 1198	13
SK 1225	21
SK 1237	14
SK 1240	16
SK 1438	17
SK 2411	11



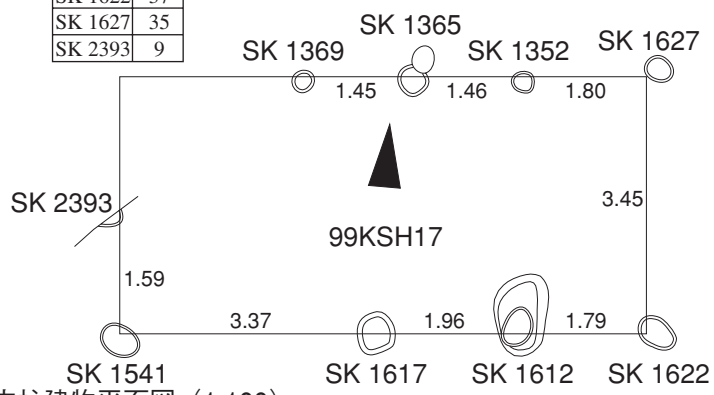
番号	深さ
SK 1128	13
SK 1129	8
SK 1131	27
SK 1132	20
SK 1141	7
SK 1143	14
SK 1183	8



番号	深さ
SK 1127	12
SK 1137	11
SK 1169	22
SK 1182	17
SK 1191	16

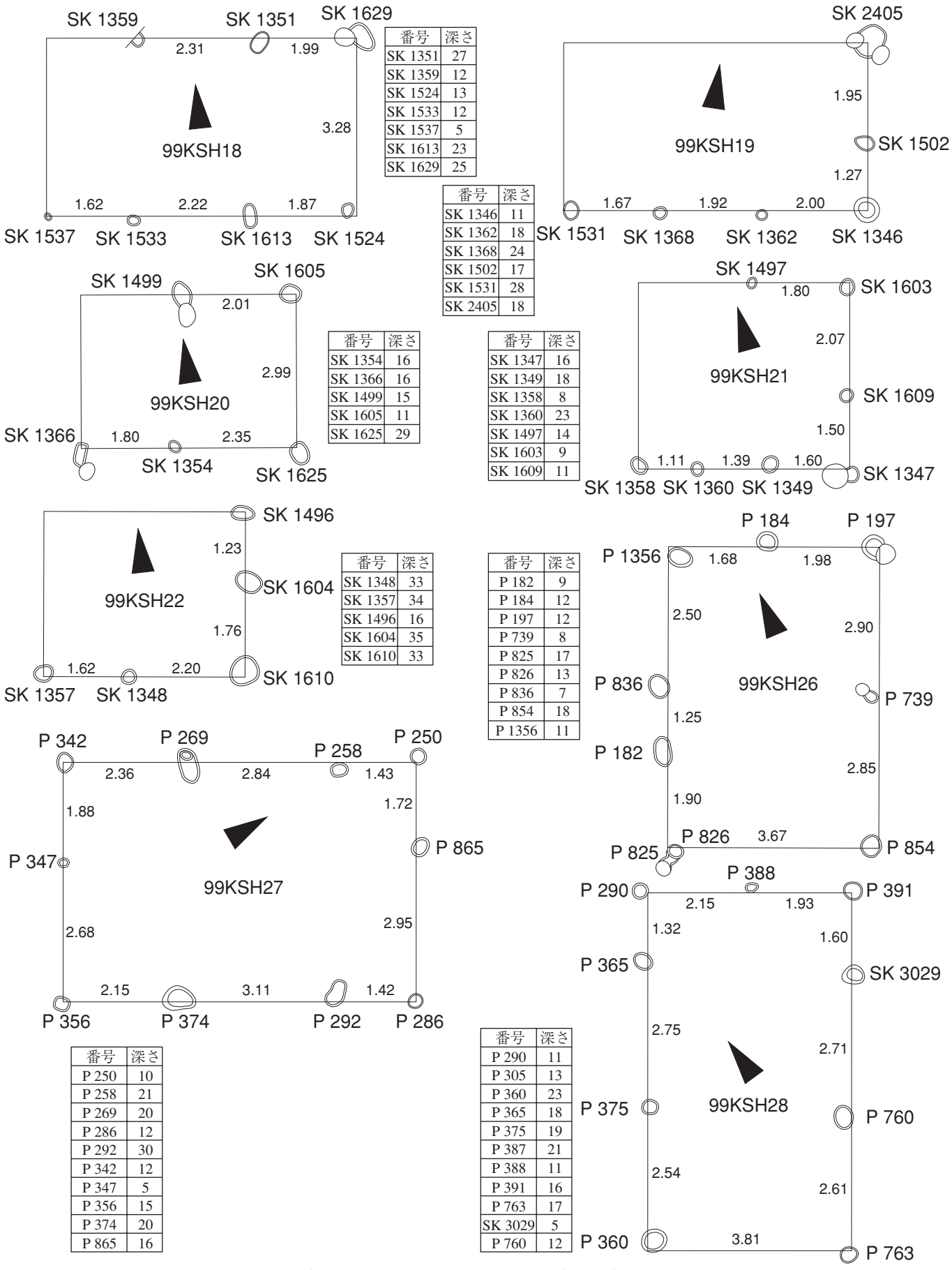


番号	深さ
SK 1286	27
SK 1290	9
SK 1292	18
SK 1304	18
SK 1308	27
SK 1316	27



番号	深さ
SK 1352	29
SK 1365	35
SK 1369	19
SK 1541	11
SK 1612	46
SK 1617	24
SK 1622	37
SK 1627	35
SK 2393	9

第 446 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
SK 1351	27
SK 1359	12
SK 1524	13
SK 1533	12
SK 1537	5
SK 1613	23
SK 1629	25

番号	深さ
SK 1346	11
SK 1362	18
SK 1368	24
SK 1502	17
SK 1531	28
SK 2405	18

番号	深さ
SK 1354	16
SK 1366	16
SK 1499	15
SK 1605	11
SK 1625	29

番号	深さ
SK 1347	16
SK 1349	18
SK 1358	8
SK 1360	23
SK 1497	14
SK 1603	9
SK 1609	11

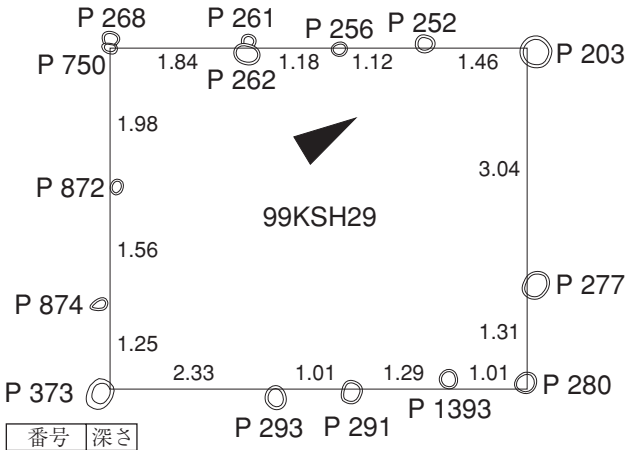
番号	深さ
SK 1348	33
SK 1357	34
SK 1496	16
SK 1604	35
SK 1610	33

番号	深さ
P 182	9
P 184	12
P 197	12
P 739	8
P 825	17
P 826	13
P 836	7
P 854	18
P 1356	11

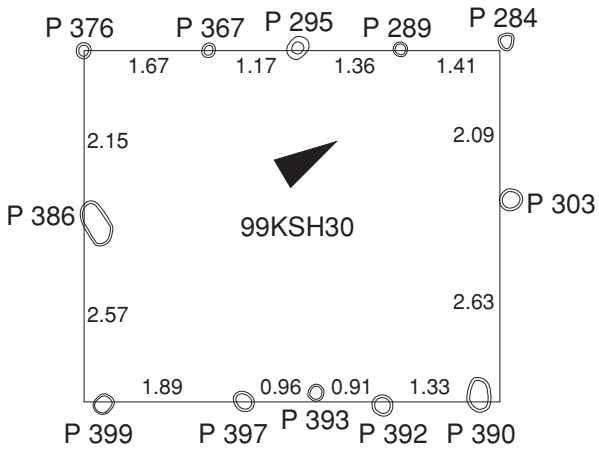
番号	深さ
P 250	10
P 258	21
P 269	20
P 286	12
P 292	30
P 342	12
P 347	5
P 356	15
P 374	20
P 865	16

番号	深さ
P 290	11
P 305	13
P 360	23
P 365	18
P 375	19
P 387	21
P 388	11
P 391	16
P 763	17
SK 3029	5
P 760	12

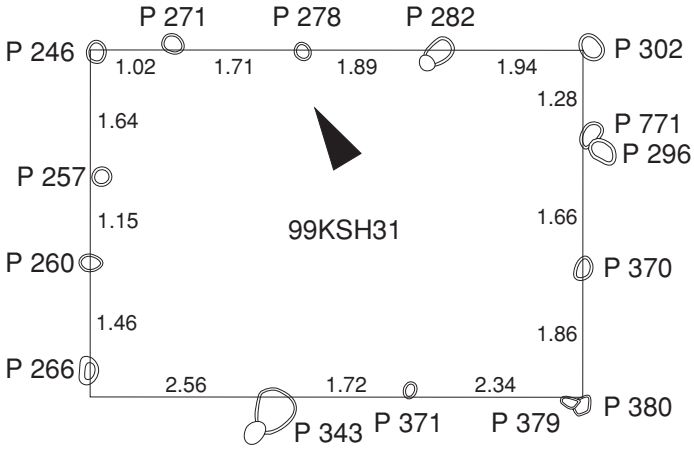
第 447 図　掘立柱建物平面図（1:100）



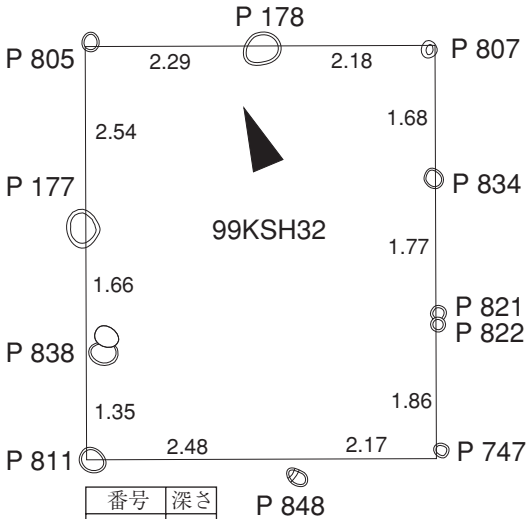
番号	深さ
P 203	23
P 252	15
P 256	5
P 261	11
P 262	16
P 268	20
P 277	13
P 280	11
P 291	19
P 293	18
P 373	18
P 750	9
P 872	10
P 874	6
P 1393	9



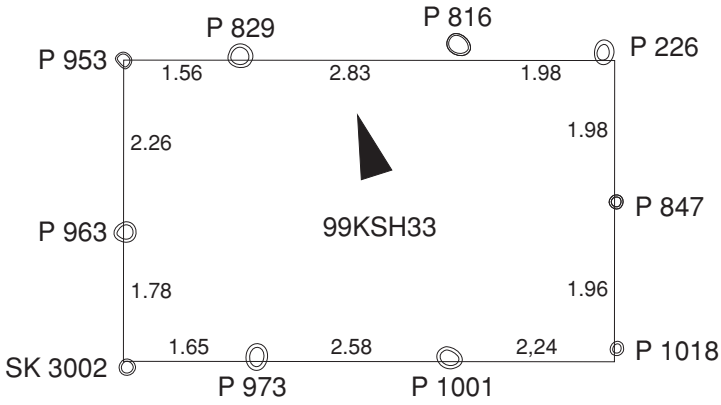
番号	深さ
P 284	13
P 289	3
P 295	13
P 303	17
P 367	11
P 376	11
P 386	21
P 390	14
P 392	7
P 397	16
P 399	14
P 393	10



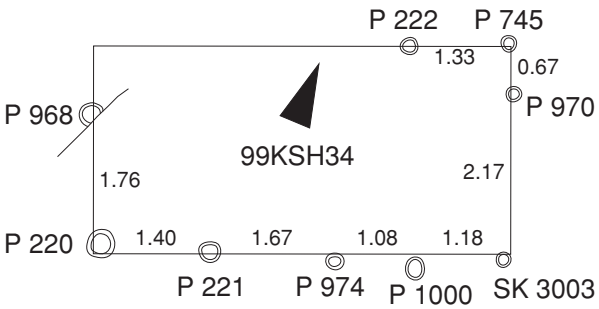
番号	深さ
P 246	7
P 257	14
P 260	13
P 266	12
P 271	7
P 278	8
P 282	16
P 296	14
P 302	11
P 343	9
P 370	12
P 371	14
P 379	10
P 380	11
P 771	14



番号	深さ
P 177	19
P 178	14
P 747	6
P 805	5
P 807	6
P 811	21
P 821	1
P 822	2
P 834	3
P 838	10
P 848	15

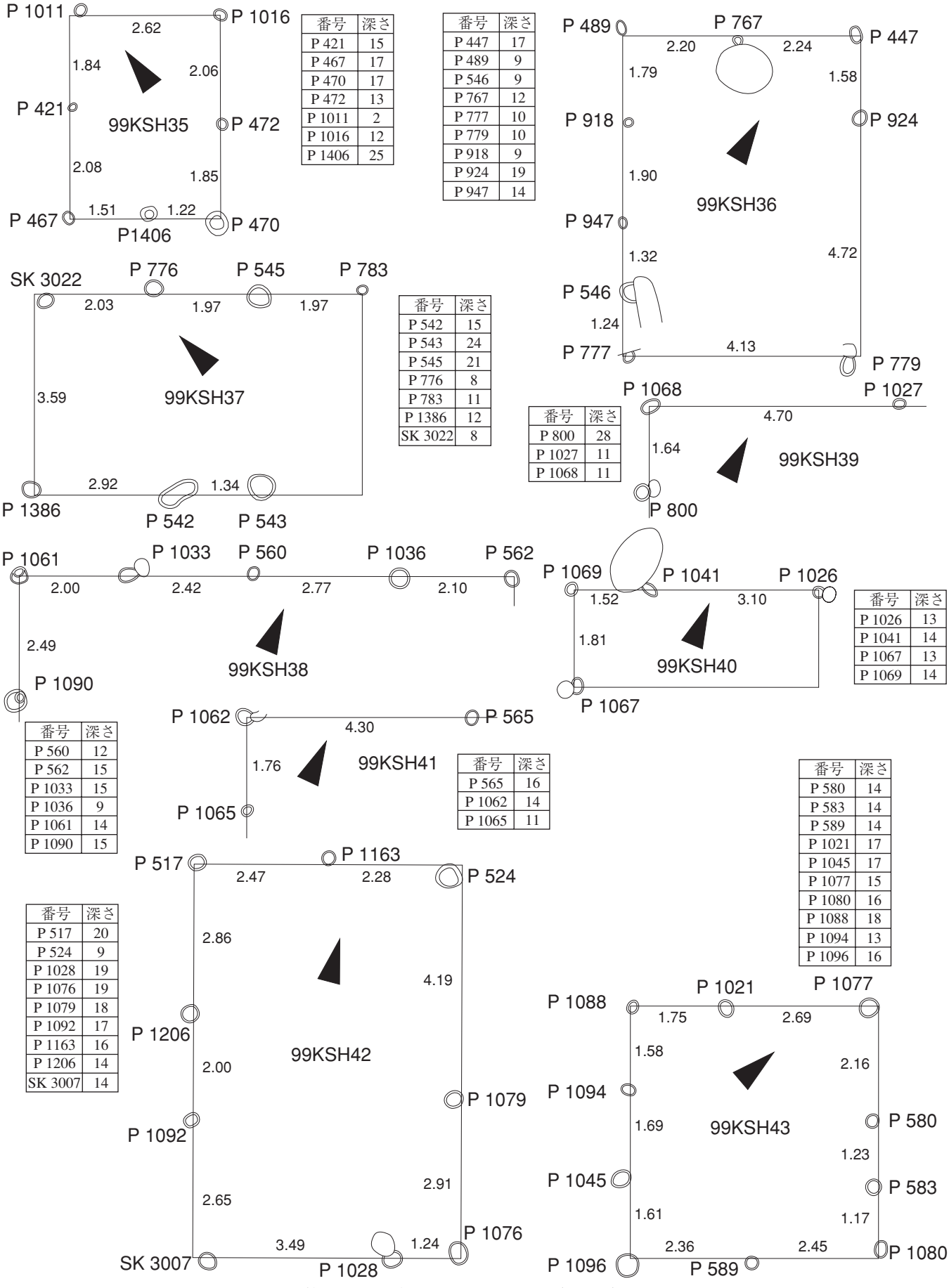


番号	深さ
P 226	15
P 816	8
P 829	13
P 847	14
P 953	17
P 963	15
P 973	13
P 1001	15
P 1018	9
SK 3002	14

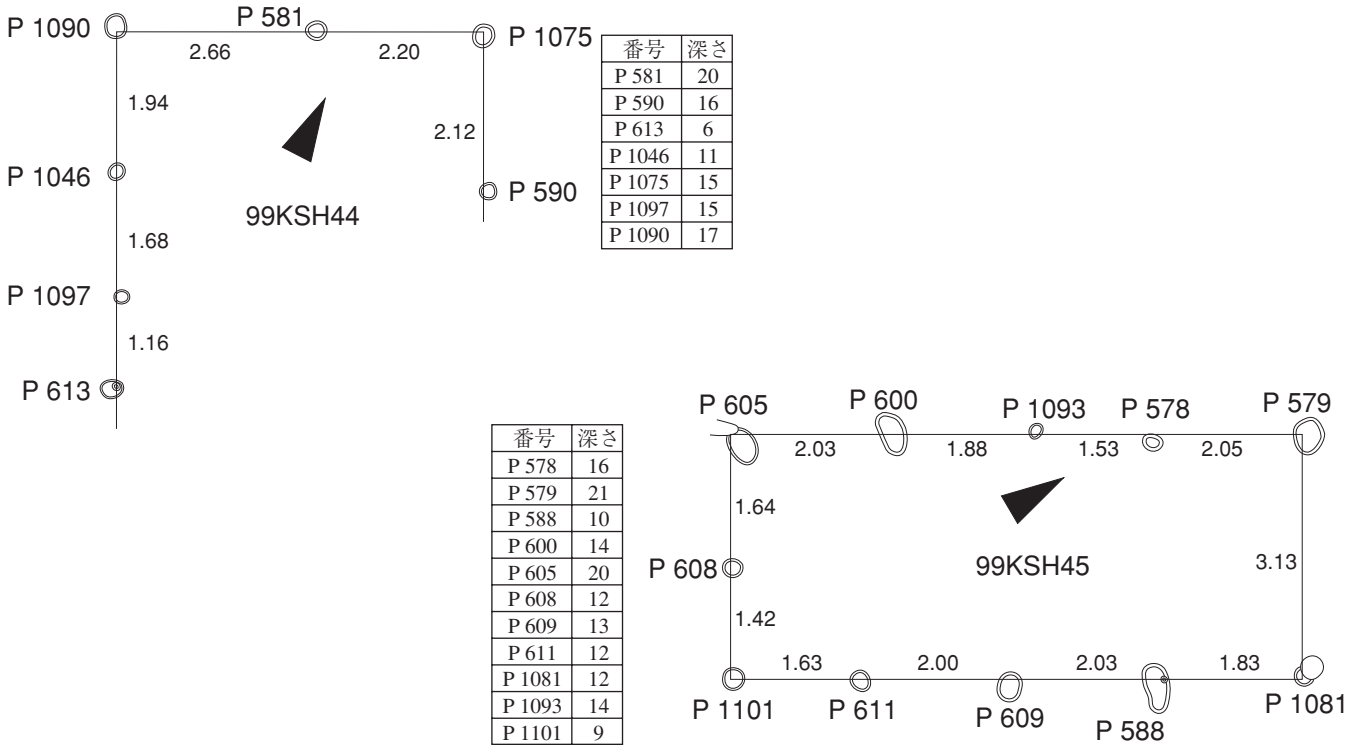


番号	深さ
P 220	19
P 221	17
P 222	16
P 3003	9
P 745	15
P 968	10
P 970	11
P 974	12
P 1000	14

第 448 図　掘立柱建物平面図（1:100）



第 449 図　掘立柱建物平面図（1:100）



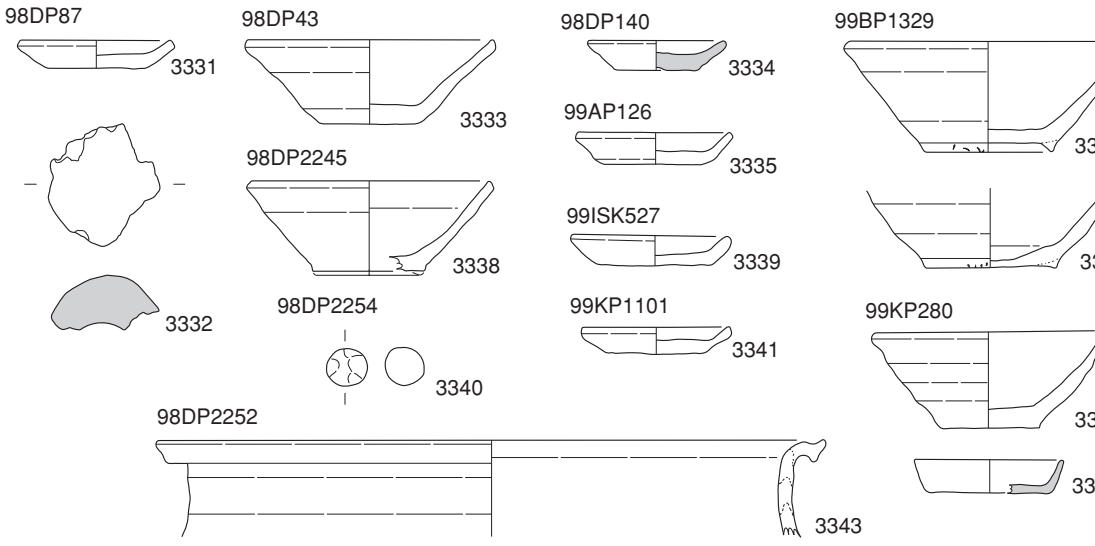
番号	深さ
P 581	20
P 590	16
P 613	6
P 1046	11
P 1075	15
P 1097	15
P 1090	17

番号	深さ
P 578	16
P 579	21
P 588	10
P 600	14
P 605	20
P 608	12
P 609	13
P 611	12
P 1081	12
P 1093	14
P 1101	9

番号	深さ
P 1379	13
P 1381	9
P 1395	20

番号	深さ
P 1376	15
P 1378	9
P 1394	11

第 450 図　掘立柱建物平面図（1:100）



第451図　柱穴出土遺物（1:4）

第 4 節　　大溝（SD01）

大屋敷地区を縦断し、この地区の景観的特徴を造り出していた大溝（SD01）は、中世にはいると、上位 2 層を残しほぼ埋没したと考えられる。埋土の状況は、色調は断面観察地点により黒褐色であったり灰黄色であったりと相違がみられたが、土質はいずれの地点でも粘質シルトに 5 ～ 10cm 程度の円礫が混入していた。この土質から判断すると、大溝は中世段階でも滞水していたと思われる。

規模については、大溝両側には古墳時代に構築された土塁を覆うように表土が堆積しており、当時の生活面から推定すると、溝幅約 10 m、深さ 1.5m 前後であったと考えられる。

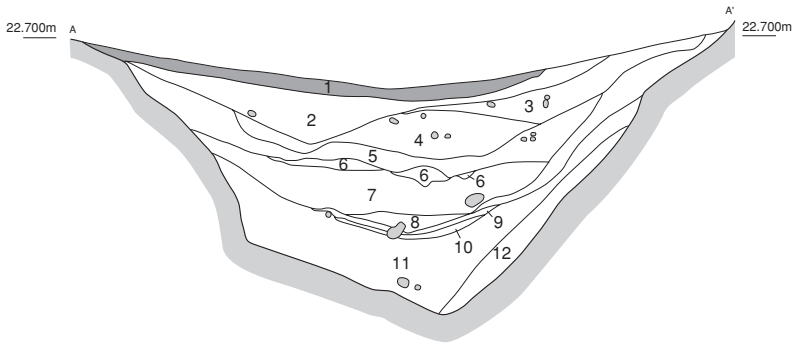
出土遺物は、灰釉系陶器椀・皿を中心とした遺物が大量に出土している。これらの遺物には完器で出土する遺物も多く含まれている。当時水入遺跡には墓域が展開しており、それに関連する遺物が大溝へ廃棄されたものと考えられる。但し、大屋敷地区で確認された土坑墓の数は、下糟目地区にくらべるとかなり少なく、すべてをその範疇で考えることに関しては無理があると思わる。このことは後世の開発行為により破壊され、遺構として確認し得なかった空間が、大屋敷地区に広がっていた可能性を考える必要があると思われる。

具体的な出土遺物については、灰釉系陶器は椀・皿ともに藤澤編年の 6 ・ 7 型式を中心とし、椀には一部 5 型式に該当する遺物が認められた。また、3360・3397 は百代寺窯式（ 2 型式）、7126 は 4 型式に相当する。3346 と 3347、3377 ～ 3387 は灰釉系陶器の椀・皿に認められた墨書。記された文字は「一」「十」「の」といった単純で、ある意味記号とも捉えることができるものが中心である。3387 が体部に墨書される以外は、いずれも高台内または底部外面に記載される。3348 は灰釉系陶器椀の高台部を打ち欠いて作られている加工円盤。3372 はロクロ成形による土師器皿。底部には回転糸切りによる切り離し痕が観察される。3376 は常滑産の釜。M5 は鉄製の小刀か。



写真　99ASD01 第 1 層完掘、第 2 層確認状況（左）と同掘削作業風景（右：いずれも北から）

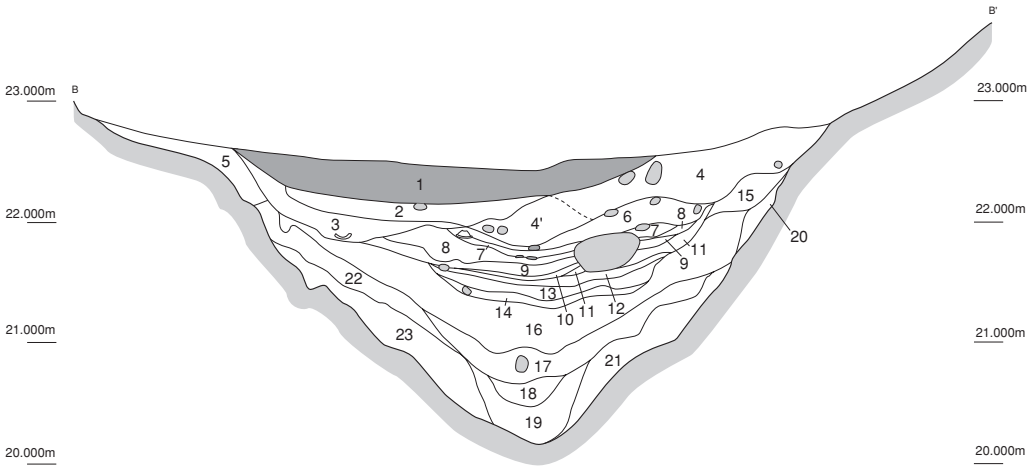
99A北ベルト



土層構成
2層 1　中世・12C後半～13C代
3層 2　奈良末～平安時代・8C末～10C代
4層 3,4　飛鳥～奈良初・7C-2～8C-2
5層 5　古墳中期（須恵器以降）・5C後半～6C
6層 6,7,8　古墳中期（須恵器以前）・5C前半
7層 9,10　古墳中期（須恵器以前）・5C前半　5C前半でも前の方か
8層 11　古墳中期（須恵器以前）・5C前半
9層 12　古墳中期（須恵器以前）・5C前半→大溝開削時の流し込み

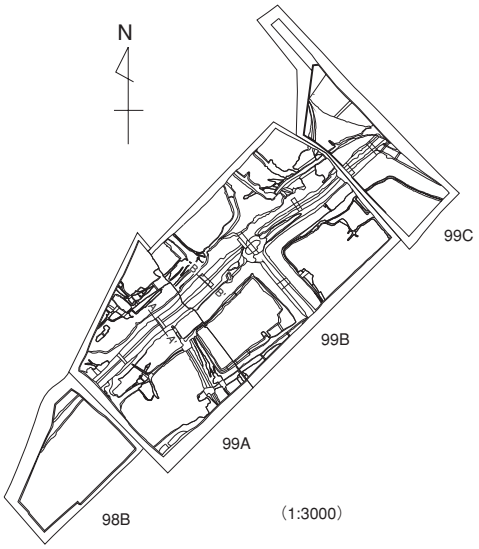
1 10YR3/1黒褐色粘質シルト
(ラミナなし、10cm大の円礫入る、粘性とくに強い）。
2 10YR3/1黒シルト 炭化物を中心とした黒色物から成る
(ラミナ形成→流水あり）。
3 2.5Y4/1黄灰シルト主体に細粒砂混じる
(ラミナなし、5cm大円礫若干入る）。
4 2.5Y4/1黄灰細粒～極細粒砂混合
(ラミナはみえない、5～10cm大円礫多く入る）。
5 5BG4/1暗青灰シルトに粗粒砂若干入る
(ラミナなし、東側より5cm 大円礫流れ込む、炭化物多く含む）。
6 5の下部で極粗粒砂が混入
(レンズ状堆積、円礫なし、植物質・炭化物入る ）。
7 7.5YR2/2暗オリーブ灰シルト粗粒砂若干入る
(11が溶け出している様が判別できる）。
7' 基本は7で20cm以下円礫多く含む、東側からの流れ込みか。
8 5Y4/1灰シルト砂質強いラミナ形成せず混入物なし。
9 5GY7/1明オリーブ灰と5GY3/1暗オリーブ灰シルト～細粒砂のラミナ
(植物質なし、→流水あり）。
10 N2/黒 炭化した植物質層、ラミナなし粗粒砂、小円礫若干入る。
11 N5/灰粘質シルト、底付近で20cm以下円礫入る
(5GY7/1 明オリーブ灰地山粒(2cm)多く見られる
とくに東反部で炭化物多く入る傾向ラミナなし）。
12 5GY7/1明オリーブ灰粘質シルト～粘土
(粒状の集積でラミナなし、混入物なし）。

99B南ベルト

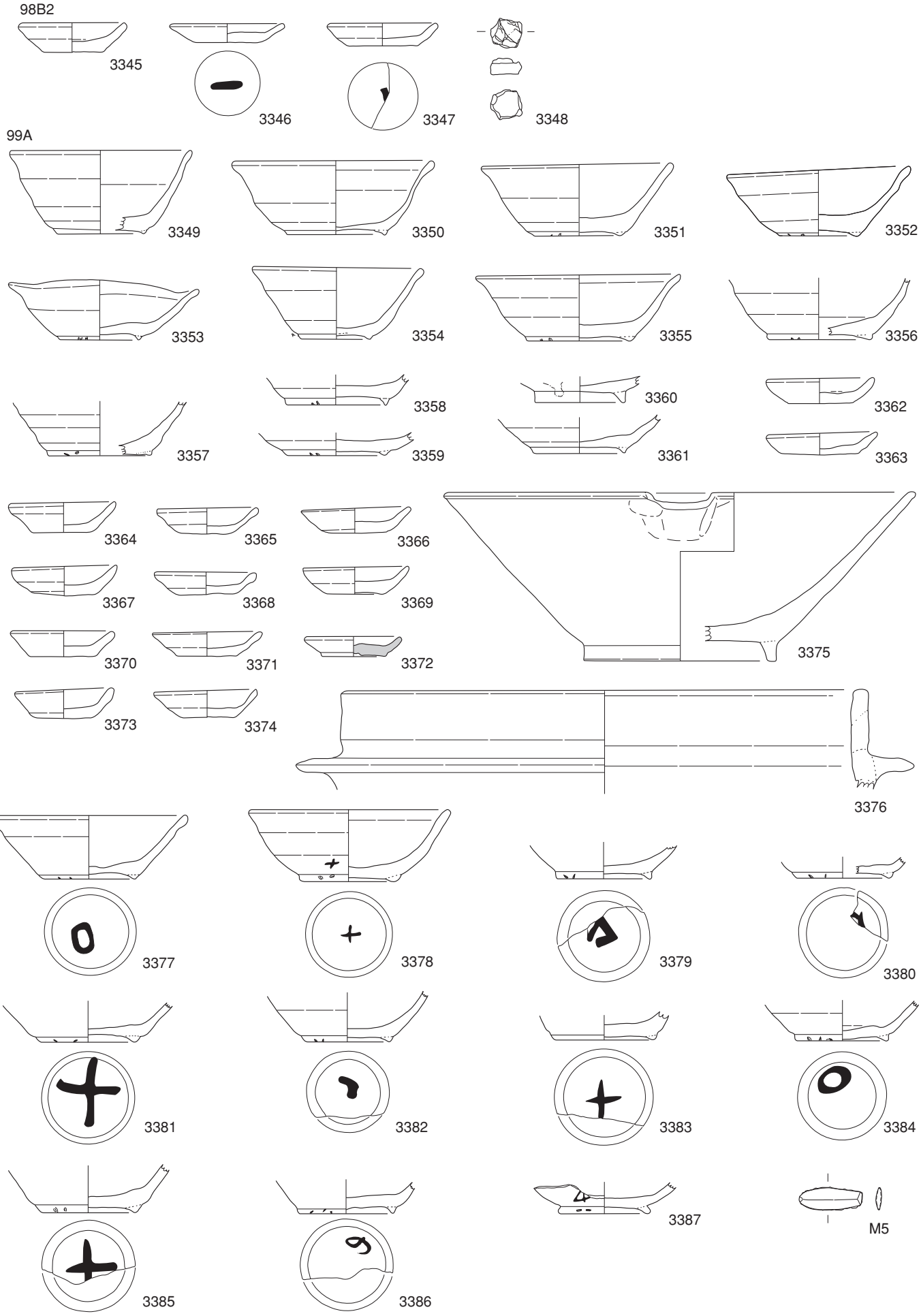


（土層構成）
2層　1
3層　2
4層　3,4,5
5層　6
6層　7,8,9,10,11
7層　12,13
8層　14
9層　15,16,17,18,19

1 10YR3/1オリーブ黒粘質シルト10cm以下の円礫入る、下半部は0.5cm以下小礫、粗粒砂入る。
2 10YR2/1黒粘質シルト3cm以下円礫若干入る、不明瞭ながらラミナあるもよう、炭化物多い。
3 10Y4/1灰砂質シルト主体に粗粒砂～1cm以下の円礫入る、地山粒若干入る。
4 5Y5/2灰オリーブ砂質シルト細粒～粗粒砂多く入る、2cm以下円礫入る、炭化物あり。
(4')には7.5Y4/1灰粘質シルトに粗粒砂入る。
5 5Y5/3灰オリーブ粘質シルト1cm大地山粒多く入る、円礫なし、粗粒砂若干入る。
地山主体に流れ込み。
6 10Y4/1灰粘質シルト主体、粗粒砂多く入る、下方に粗粒砂多い傾向、10cm以下円礫入る。
炭化物粒・土器片多い。
7 10G5/1緑灰粘質シルト、粗粒砂若干入る、礫なし、炭化物若干。
8 2.5Y7/2灰黄粗粒～中粒砂、西よりレンズ状堆積、その他の部分で5Y4/1砂質シルト、礫なし。
9 5GY3/1暗オリーブ灰粘質シルト主体、細～粗粒砂若干入る、植物質入る、円礫わずかにあり。
10 N2/ 黒 炭化すすんだ植物質多く集積。
11 2.5GY5/1オリーブ灰砂質シルト粗粒砂～5cm円礫多く入る、東側からの流れ込み。
12 2.5GY4/1暗オリーブ灰砂質シルト、礫・炭化物入らず、ラミナなし。
13 2.5GY7/1明オリーブ灰と2.5GY3/1暗オリーブ灰細粒砂～シルトのラミナ
炭化物なし、流水は北から南へ。
14 N2/ 黒 炭化すすんだ植物質の層、下部で5cm以下の円礫入る。
15 7.5Y5/2灰オリーブ粘質シルト、粗粒砂入る、礫なし。
16 10BG4/1暗青灰粘質シルト主体に粗粒砂10cm以下の円礫入る、粗粒砂は多い。
ラミナなし、炭化物粒入る。
17 10BG5/1青灰粘土～粘質シルト砂質少ない、2cm以下円礫1点、炭化物粒多い。
18 7.5GY5/1緑灰粘土～砂質シルト、粗粒砂、炭化物粒入る。
19 7.5GY5/1緑灰粘質シルト、砂質少ない、炭化物は東側で多い傾向。
20 2.5GY5/1オリーブ灰粘質シルト、地山粒若干みえる。
21 5G7/1明緑灰粘土、粒・ブロック状はみえない、礫なし。
22 5G7/1明緑灰粘土＆暗青灰粘土が粒・ブロック状に混入、礫なし。
23 5G7/1明緑灰粘土、粒・ブロック状はみえない、礫なし。

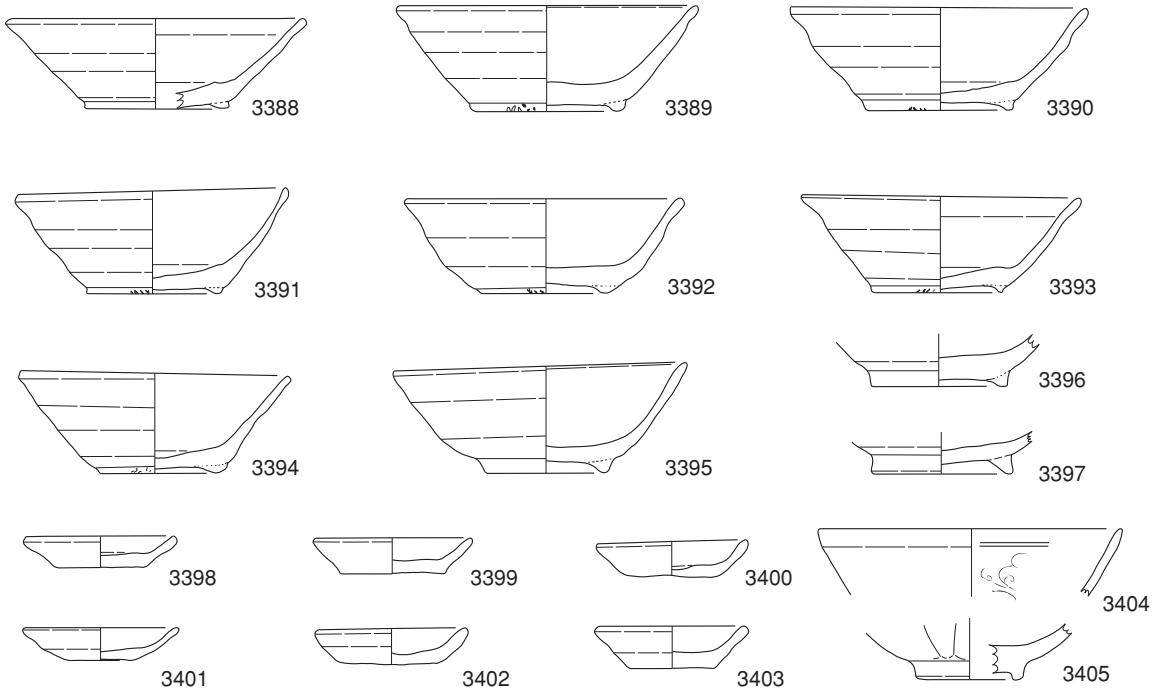


第452図99A・BSD01断面図（1:50）



第453図　SD01出土遺物実測図（１）（1:4）

99B



第454図　SD01遺物実測図（２）（1:4）

第5節　土坑墓

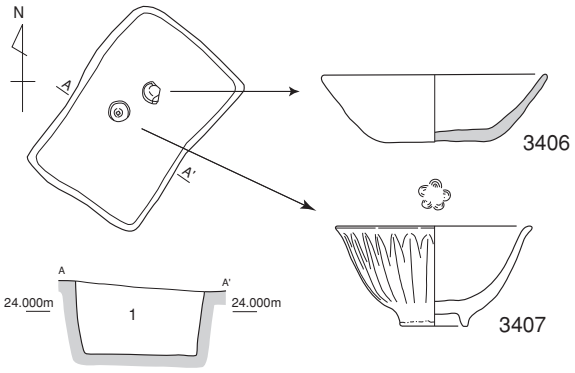
(1) 概観

今回の発掘調査で確認された土坑墓の総数は381基に及ぶ。しかし、これらの土坑墓からは骨片や棺等が確認されなかった。そのため土坑墓であるかどうかは、各調査担当者が調査時点で土坑墓と認識した遺構を中心に、報告書作成にあたり、遺構の形状・埋土・遺物の出土状態などをもとに比較検討を行い判断した。381基の土坑墓は、99A·B区で検出された26基以外はすべて下糟目地区で確認されており、98D区で全体の約4割にあたる164基が、次いで99K区で67基、99G区で66基と下糟目地区においても矢作川に比較的近い調査区に集中して構築されていた。

本来であればすべての土坑墓について説明を加えるべきではあるが、記述に関しては特徴的なものに限定し、他の土坑墓については一覧表にまとめることで、記述にかえることとする。また、出土遺物については、土坑墓から出土してた図示可能遺物を掲載している。出土遺物の数量についても同じく一覧表を参照されたい。また、遺構図中の濃いアミふせは礫を意味している。

(2) 遺構各説

98DSK241　調査区中央部南側IXI1gグリッドで検出。長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.4mを測る平面長方形、断面箱形の土坑墓。長軸はN40°-Eを示す。埋土は暗褐色粘質シルトと土坑掘削時に掘り返したと思われる地山土が斑土状に堆積しており、炭化物も少量ながら確認された。平面長方形は水入遺跡で確認された土坑墓のうちSK241のみで、コーナー部分も丸みを帯びず鋭角になるように丁寧に掘削された感がある。



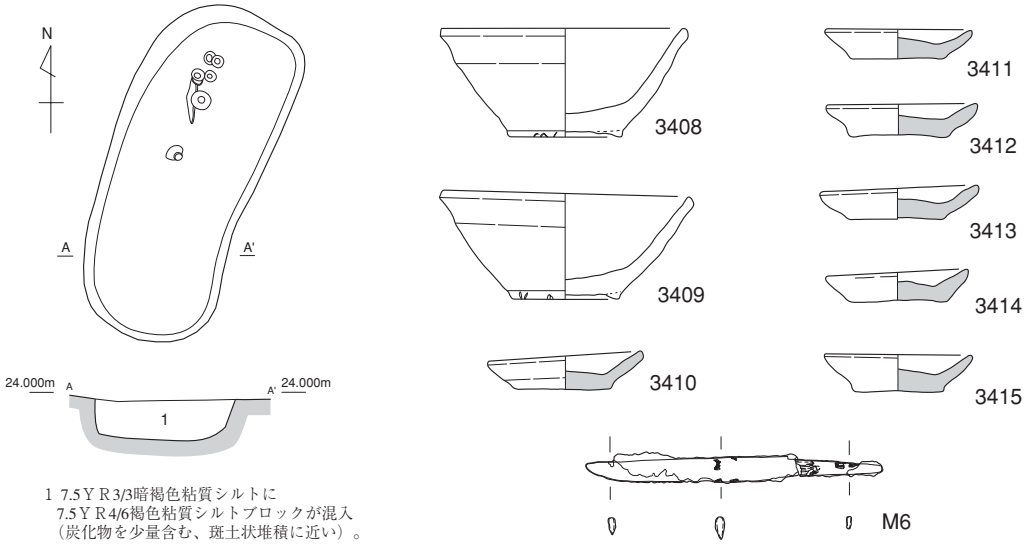
1 黒褐色粘質シルトと褐色粘質シルトの斑土。

第455図　98DSK241（遺構図1:50、実測図1:4）

遺物としては、土坑北東辺中央部の床面直上から完器の青磁碗1点と土師器皿1点が上を向く状態で出土している。3406は土師器皿。非ロクロ成形によるもので、胎土は薄い赤褐色を呈する。水入遺跡出土した土師器皿はロクロ成形が大半で、非ロクロ成形の皿はほとんど認められない。この土師器皿は遺存状態が極めて悪く時期は決めにくいが、中世前半に属すると思われる。3407は青磁小碗。体部には鎬連弁が施され、見込みには梅文が貼付されている。時期は13世紀半ば以降と思われる。したがって、土坑墓の時期については青磁小碗が伝世品である可能性も考えられるが、土師皿の時期と水入遺跡の遺構のあり方から中世前期に属すると判断した。

98DSK432　調査区南西部IXH7tグリッドで検出。長軸2.3m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る平面楕円形、断面U字形の土坑墓。長軸の方位はN-20°-Eを示し、埋土は暗褐色粘質シルトと褐色粘質シルトの斑土に近い状態で、微量に炭化物が混入していた。98DSB62の掘形内であったため、遺構検出時には確認できず、98DSB62掘削後かろうじて床面で遺物の出土と共に平面形を確認することができた。

遺物は、北東部床面直上から上向きに灰釉系陶器椀１点（3408、藤澤編年７型式）、２枚ずつ重なった状態で土師器皿６点（3410 ～ 3415、すべてロクロ成形）、中央部床面直上から横向きの状態で灰釉系陶器椀１点（3409、藤澤編年７型式）が出土している。いずれもほぼ完器であった。また、椀・皿の下に置かれた状態で鉄製刀子１点（M6）が出土している。刀子の残存状況は良好で、柄部分には刀子を覆っていたであろう木質も確認されている。



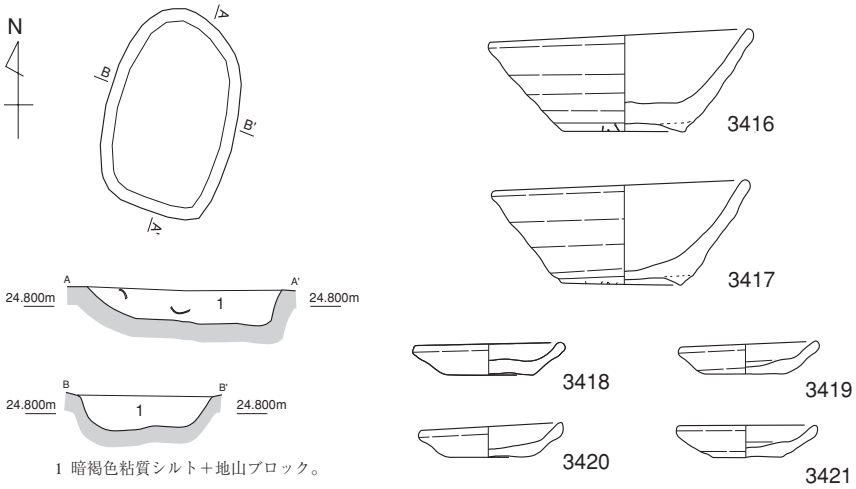
第456図　98DSK432（遺構図1:50、実測図1:4）

98DSK05　調査区北東部 VIIII12h グリッドで検出。長軸 1.3m、短軸 0.9m、深さ 0.9m を測る平面隅丸長方形、断面U字形に近い掘形を持つ。埋土は暗褐色粘質シルトに地山である褐色粘質シルトがブロック状に混入する。地山ブロックと共に炭化物も若干認められた。長軸方位は N-12°-E を示す。

遺物は、土坑北側床面からはやや離れた位置で灰釉系陶器椀１点が横向き、同皿４点が重なる状態で、土坑中央部から灰釉系陶器碗が１点上向きで出土している。

3416・3417 は灰釉系陶器椀。内面に摩滅は確認されず、未使用で埋納されたと思われる。3416 は藤澤編年６型式、3417 は同７型式。3418 ～ 3421 は灰釉系陶器皿。椀同様内面に摩滅は認められず、未使用で埋納されたと思われる。3418 は７型式に属するが、他の３個体は６型式。

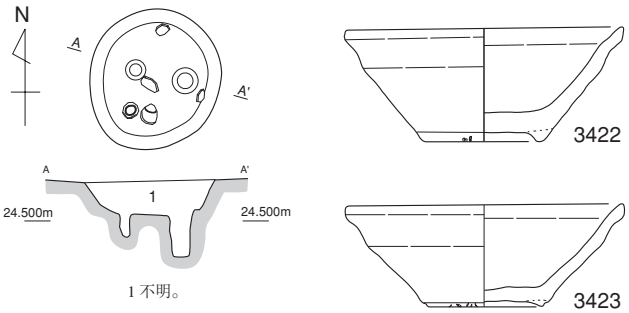
98DSK20　調査区北東部 VIIII14e グリッドで検出された径 0.9m を測る円形プランを持つ土坑墓。断面は皿形に近い形状を呈する。埋土は黒褐色粘質シルトに褐色粘質シルトの地山土がブロック状に混入していた。床面に掘削されているピット２基については、深さ 5cm を目安に土坑全体を徐々に掘り下げる掘削方法をとっていたにもかかわらず、ピットが確認できたのは土坑床面であり、掘り下げ途中ではピットの存在は認められなかった。このことから考えれば、ピット２基は土坑廃絶後に掘削された可能性は低く、土坑掘削以前の遺構、もしくは何らかの機能を持って土坑と同時に掘削された遺構であると考えられる。遺物は、床面直上から灰釉系陶器椀のほぼ完形品と底部片、口縁部破片が出土している。遺構の掘形・出土遺物共に水入遺跡で検出された土坑墓の最も一般的なあり方といえる遺構である。



1 暗褐色粘質シルト＋地山ブロック。

第457図　98DSK05（遺構図1:50、実測図1:4）

3422・3423ともに灰釉系陶器椀。型式はともに藤澤編年7型式。3422は土坑内出土の3破片が接合し、3423は2破片が接合している。ともに内面の摩滅は観察されず、未使用であったと思われ、埋納時に意図的に破砕された可能性が考えられる。

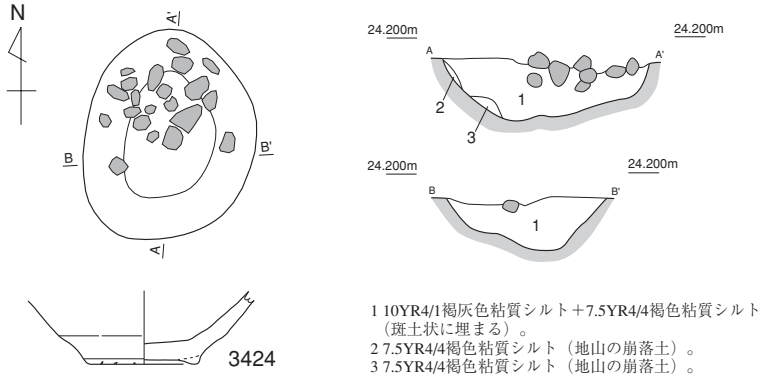


1 不明。

第458図　98DSK20（遺構図1:50、実測図1:4）

98DSK326　調査区南東部IXH6sグリッドで検出された集石墓の可能性を持つ土坑。平面は楕円形で、長軸方位N-8°-Eを示し、規模は長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.4mを測る。土坑北側埋土上部に拳大の円礫が不規則ではあるが、多数認められた。埋土は灰褐色粘質シルトに褐色粘質シルトがブロック状に混入しており、短期間に埋め戻された様子を表していた。埋土中の礫については、埋葬後埋め戻された土坑の表面に不規則に積まれていた礫の一部が埋土の陥没と共に埋没し、混入したと思われる。

遺物は灰釉系陶器椀・皿とともに土師器片が出土している。3424は灰釉系陶器椀の底部。藤澤編年6型式。



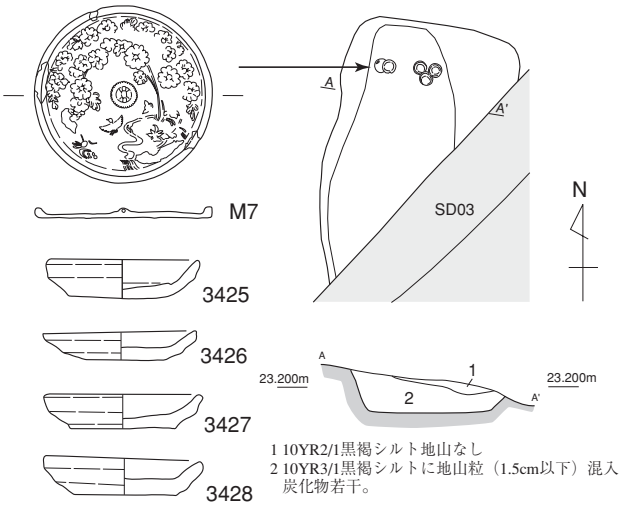
1 10YR4/1褐灰色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色粘質シルト（斑土状に埋まる）。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山の崩落土）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山の崩落土）。

第459図　98DSK326（遺構図1:50、実測図1:4）

99ASK2007　調査区中央部IG9eグリッドで検出。99ASD03により土坑南東部が削平されている。平面は隅丸長方形を呈すると思われ、長軸・短軸共に残存で1.8m、1.1mを測り、長軸はN-10°-Eを示す。断面は箱形状を呈し、地山が南に向かって傾斜しているため、深さは0.3～0.2mである。埋土は黒褐色シルトに地山ブロックが混入し、他に炭化物も認められた。

土坑北辺の床面直上から上向きの灰釉系陶器皿4点と共におもて面を上にした状態で和鏡が出土して

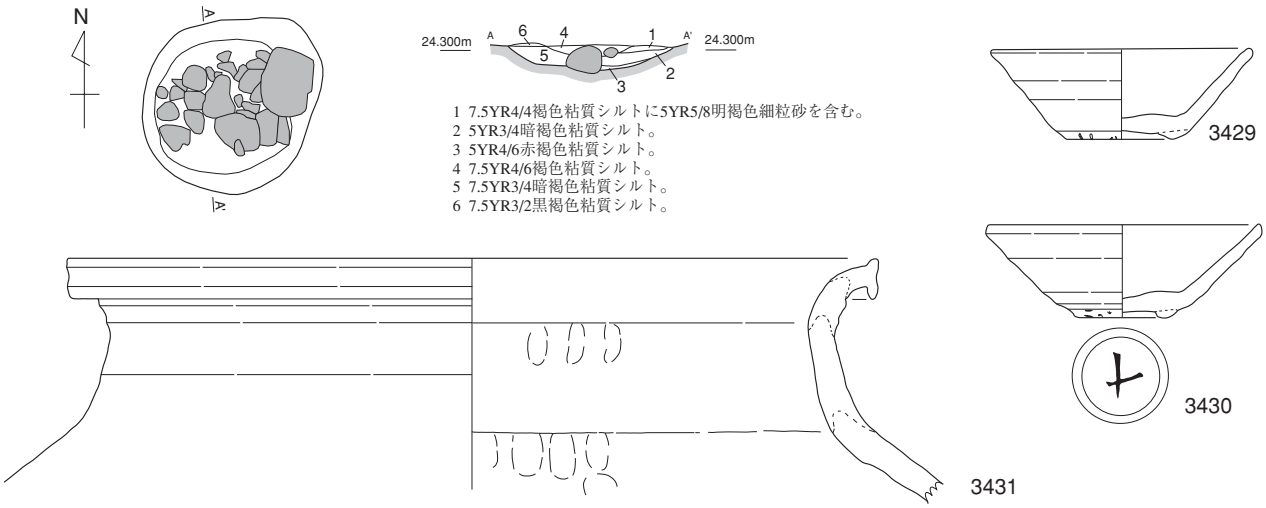
いる。和鏡を納める箱物や袋などは確認されなかった。M7が和鏡。腐食により一部欠損しているが、ほぼ原型を留めていた。裏面には花鳥文が全面に施されている。3425～3428は灰釉系陶器皿。3425が藤澤編年6型式であるが、その他は7型式に該当する。4個体とも内面に摩滅は認められず、未使用状態の遺物が埋納されたと考えられる。



第460図　99ASK2007（遺構図1:50、実測図1:4）

99ESK89　99E区谷A東側、VIIIH16gグリッドで検出。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.2m浅い楕円形のプランを呈する。長軸はN-50°-Eを示し、埋土は暗褐色粘質シルトが中心で、斑土状の堆積は観察されなかった。掘形が浅く、土坑床面近くを残すのみであったが、調査区全体が後世の削平をうけており、本来の深さは不明である。土坑内には暗褐色粘質シルトとともに、人頭大から拳大までの円・角礫が床面直上から出土している。但し、これらの礫は規則的に積み上げられた様子はうかがえない。この礫の間から灰釉系陶器椀・皿などが出土している。礫の解釈については判然としないが、98DSK326同様集石墓であった可能性も考えられる。

3429・3430は灰釉系陶器椀。両個体とも内面は摩滅している。3430の高台内には「十」と記した墨書が認められた。ともに藤澤編年6型式に該当する。3431は常滑産甕の口縁部。6 a型式。



第461図　99ESK89（遺構図1:50、実測図1:4）

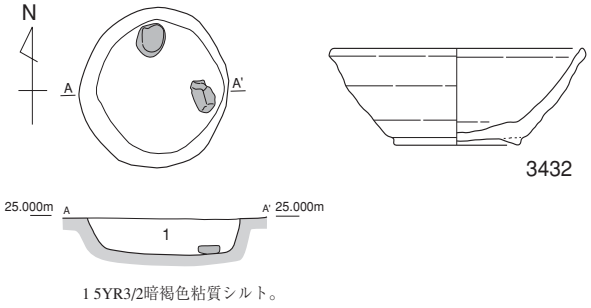
99ESK344　99E谷B西側、VIIIH17iグリッドで検出。径0.9mの円形状のプランを呈する深さ0.2mの土坑。埋土は2層に分かれ、上層は褐色粘質シルトと明褐色粘質シルトが混入し、下層は極暗褐色粘質シルトである。土坑内東壁沿いに小土坑が確認されたが、本遺構に伴うかどうかについては不明。

土坑北側床面直上から灰釉系陶器椀1点が、伏せた状態で出土している。

99ESK582　調査区北東部VIIII10eグリッドで確認された、円形土坑。径1.0m、深さ0.2mを測る。埋土

は暗赤褐色粘質シルト。土坑北壁および東壁際から長さ30cm前後の礫が出土している。いずれも床面直上からの出土であり、埋納時に何らかの目的で設置されたと考えられる。埋土中からは灰釉系陶器椀、常滑産甕片などが出土している。

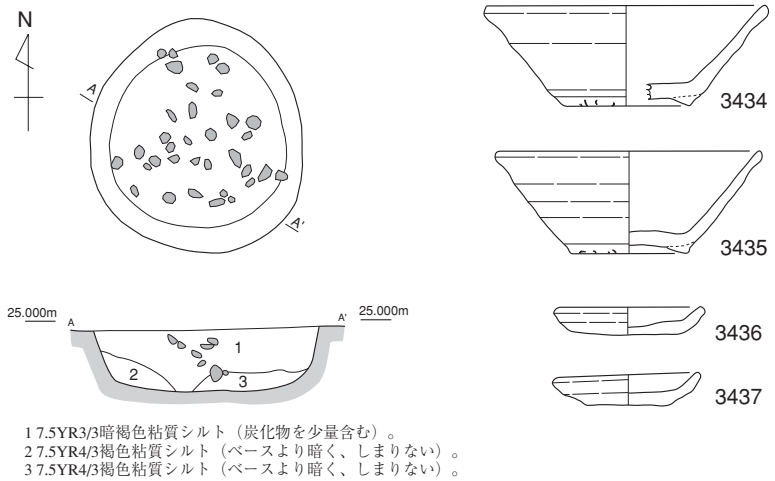
3432は灰釉系陶器椀。内面は摩滅し、一部に自然釉がかかっている。藤澤編年6型式。



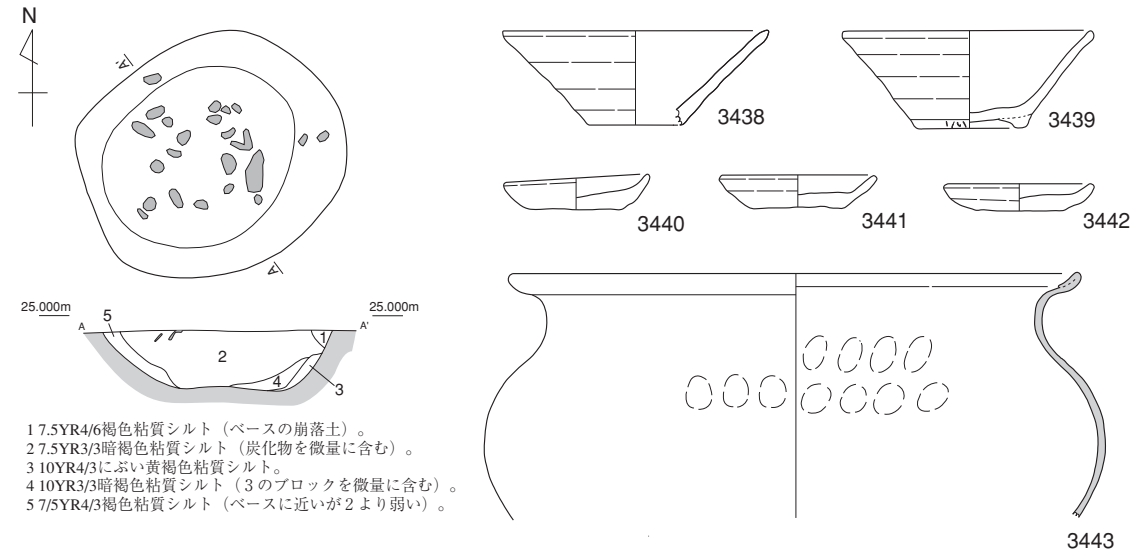
第462図　99ESK582（遺構図1:50、実測図1:4）

99FSK112　調査区南西部に展開する谷の東側、VIIIH8hグリッドで検出された隅丸方形を呈する土坑。長軸1.7m、短軸0.7m、深さ0.3mを測り、長軸はN-32°-Eを示す。埋土は上層が暗褐色粘質シルト、下層は褐色粘質シルトに分層される。地山ブロックや炭化物等は観察されなかった。

SK18



SK15



第463図　99GSK18・15（遺構図1:50、実測図1:4）

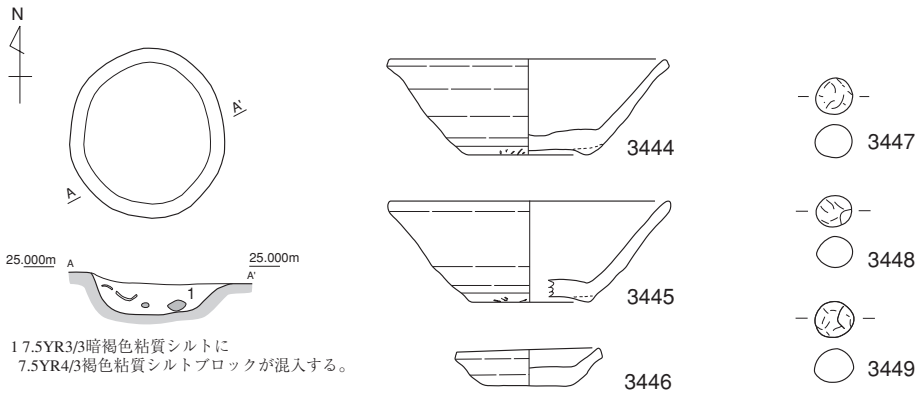
土坑北東側壁の床面直上から灰釉系陶器椀1点（7201、藤澤編年8型式）が上向きに置かれた状態で出土している。

99GSK18　調査区北東部、99I区との調査区境で確認された土坑、グリッドはVIIIJ9c。深さ0.4m、長軸1.6m、短軸1.5mの円形に近いプランを呈する。暗褐色粘質シルトに炭化物が混入する埋土中から、拳大の小礫と共に灰釉系陶器を中心とする遺物が出土している。小礫・遺物共に床面からは浮いた状態で出土しており、本来は土坑を充填していた土の表面に置かれていた遺物が、埋土の陥没に際し陥落し混入したと判断した。本遺構同様の遺物出土状態を呈する遺構が複数基認められ、例えば99G区でもSK15・16・219などがそれに該当する。但し、今回は遺物・礫共に土坑にともなう遺物とする判断をしたが、後世土坑が窪んだ状態にある時に投棄された可能性も考えられることを付記しておく。

3234～3237は99GSK18から出土した藤澤編年7型式に属する灰釉系陶器の椀と皿。3436の底部には板目状の圧痕と回転糸切りによる切り離し痕が観察された。4個体とも内面は摩滅している。3438～3443は99GSK15出土遺物。3438の灰釉系陶器椀は底部の大半が欠損しており、高台の有無が不明確であるため、はっきりとした型式は確定しがたいが、その他の特徴から判断すると7型式もしくは8型式と考えられる。その他の灰釉系陶器はいずれも7型式。3443は「伊勢型鍋」。頸部には内外面ともに指押さえによる調整が施される。また、外面にはススが付着している。

99GSK324　調査区南東壁近くVIIIJ12cグリッドで検出。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.3mを測る平面円形、断面U字形の土坑。埋土は暗褐色粘質シルトに褐色粘質シルトブロックが混入する。拳大の円礫と共に灰釉系陶器椀を中心とする遺物が出土する点は先述の99GSK18と類似するが、出土位置がSK324は床面近くから出土している点で異なっている。やはり廃棄土坑である可能性も考えられるが、今回は土坑墓の範疇として捉えておく。

3444～3446は灰釉系陶器の椀と皿。6型式と7型式の個体が混在する。7216～7218は灰釉系陶器の胎土を用いて作られたいわゆる「陶丸」。水入遺跡全体で出土した陶丸は15点と少なく、陶丸が出土した土坑墓は数例確認されるにとどまった。



第464図　99GSK324（遺構図1:50、実測図1:4）

99GSK322

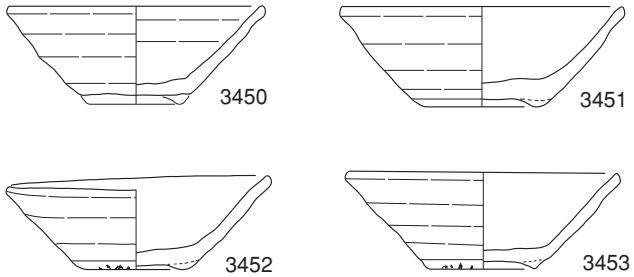
99GSK324北側、同一グリッドで検出された楕円形のプランを呈する土坑墓。SX01とした不整形な浅い落ち込みの下層で検出された。SX01の性格については判然としない。長軸1.7m、短軸0.7m、深さ0.4m、断面U字形の土坑で、長軸はN-32°-Wを示す。埋土は上層が炭化物を微量に含む暗褐色粘質シルト、下層が灰褐色粘質シルトであった。遺物の出土状況が特徴的で、上層埋土中からは拳大の円・角礫と共に灰釉系陶器類が出土し、下層埋土中か

らは土坑北壁近くの床面直上で灰釉系陶器椀が1点上を向いた状態で出土している。この遺物の出土状況から、埋葬時に灰釉系陶器椀を埋納品として納め、土坑を埋め戻した際、土饅頭的に土を盛り上げ、そこに礫と共に遺物も据え置かれていたことが想定される。その後、土饅頭の陥没と共に礫・陶器類も埋土中に陥落していったと思われる。当時の埋葬状態を考える上で参考となる遺構といえる。

いずれも灰釉系陶器椀。3453が下層埋土中から上向き状態で出土した遺物である。3451が藤澤編年6型式に相当する以外は、同7型式に属する。



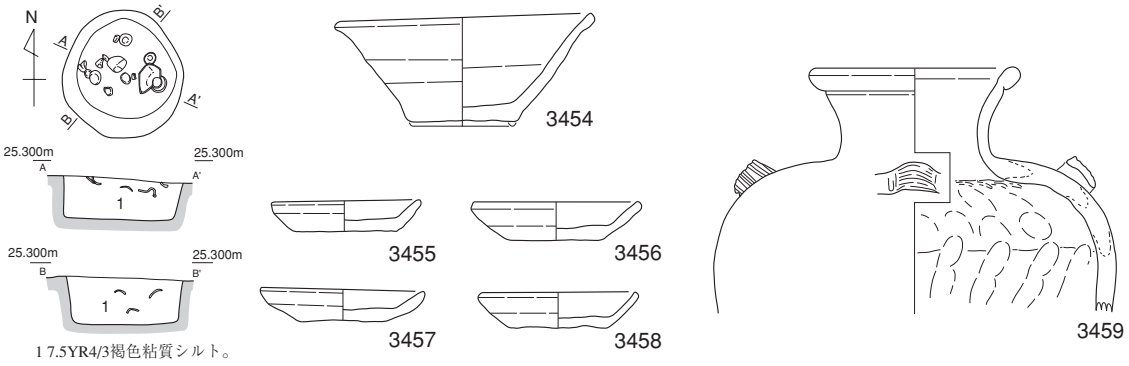
（南西より）



第465図　99GSK322（実測図1:4）

99GSK53　調査区北東壁99I区寄りのVIIIJ7aグリッドで検出。長軸0.8m、短軸0.7mのほぼ円形に近いプランを呈し、深さ0.3m断面箱形の土坑。埋土は褐色粘質シルト単一で、地山の斑土等は観察されなかった。埋土中からは、古瀬戸前期と考えられる灰釉四耳壺の口縁部と共に灰釉系陶器椀・皿が出土している。

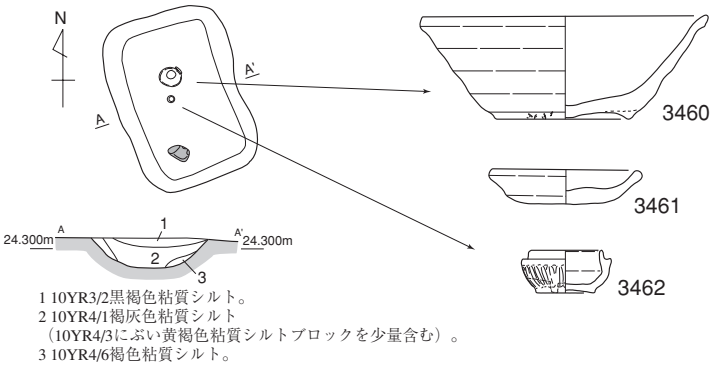
3454は灰釉系陶器椀。高台が剥離しており、痕跡のみが観察された。3455～3458は灰釉系陶器皿。型式は3457を除いて7型式。3457は6型式。3459は瀬戸美濃産のいわゆる古瀬戸四耳壺。口縁部と貼付された3個所の耳部分以外は欠損している。内面には指押さえによる調整痕が明瞭に認められた。外面には灰釉が施されているが、一部剥落しており、残存状態はあまり良好ではない。時期は古瀬戸前Ⅱ期。



第466図　99GSK53（遺構図1:50、実測図1:4）

99GSK445　調査区南西端、VIIII19qグリッドで検出。断面は深さ0.2mの浅い皿状を呈し、プランは長軸1.1m、短軸0.8mの隅丸方形で、長軸はN-17°-Wを示す。埋土は褐灰色粘質シルトに黄褐色粘質シルトがブロック状に混入する。

土坑床面直上南壁近くから砥石１点が、同中央部からは上向きに置かれた白磁合子身と灰釉系陶器椀・皿が各１点ずつ出土している。白磁合子の蓋は出土しなかった。灰釉系陶器椀は合子と同じく上向きに置かれており、その北東側に灰釉系陶器皿が横向きで椀体部に接する状態で出土している。時期は灰釉系陶器は椀・皿ともに６型式であり、白磁合子もほぼ同時期と思われる。

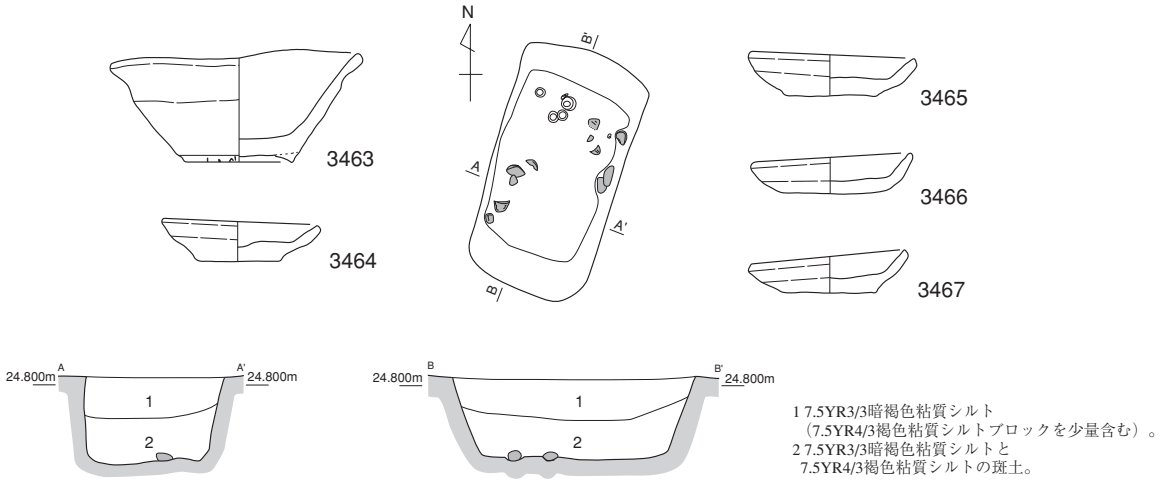


第467図　99GSK445（遺構図1:50、実測図1:4）

99JSK87　調査区南西端VIIIA2bグリッドで確認された平面隅丸長方形、断面箱形を呈する土坑。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.6mを測り、土坑長軸はN-21°-Eを示す。埋土は上層が褐色粘質シルトブロックを含む暗褐色粘質シルト、下層は暗褐色粘質シルトと褐色粘質シルトの斑土であった。土坑北壁際の床面直上から灰釉系陶器椀１点と同皿４点が出土している。出土状態は、椀は伏せられた状態で、皿は２点が上向き、１点が伏せられた状態で、１点が横向きであった。

また、土坑床面で認められた礫については、99J区から99K区にかけては遺構検出に際しベースと認定した黄褐色粘質シルト層の下部に礫層が存在しており、人為的に敷き詰められたのではなく自然の堆積物であると考えられる。

3463は灰釉系陶器椀。焼ひずみにより口縁部は不整形となっている。3464～3467は灰釉系陶器皿。椀と皿はともに藤澤編年７型式に該当する。また、出土した灰釉系陶器は内面に摩耗が認められないことから、未使用製品が埋納されたと考えられる。

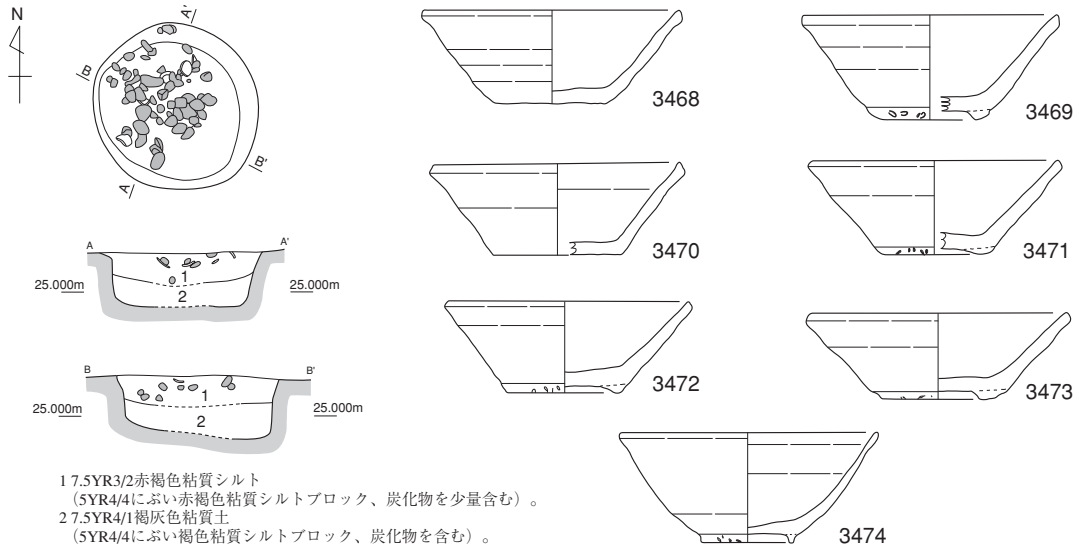


第468図　99JSK87（遺構図1:50、実測図1:4）

99KSK69　調査区南東壁際VIIIA8iグリッドで検出。径1.1mの円形プランを呈し、土坑断面は箱形である。埋土は黒褐色粘質シルトと褐灰色粘質土に分層され、どちらにも炭化物とにぶい赤褐色粘質シルトブロックが少量観察された。上層にあたる前者の埋土中から10cm前後の円礫と共に灰釉系陶器類が出

土している。99GSK18同様廃棄土坑として後世利用された可能性を含んではいるが、ここでも土坑表面を覆っていた覆土表面に置かれた遺物であると判断した。

図化し得た遺物はいずれも灰釉系陶器の椀である。このうち7243は「北部系」または「均質手」と称される灰釉系陶器で、胎土が均質、精良で、他の「南部系」灰釉系陶器に比して体部の器壁が薄く仕上げられている。北部系の灰釉系陶器は水入遺跡からは数点出土するのみで、三河地域における出土傾向の特徴と一致を見る。時期は、3468・3470が8型式、その他は7型式。

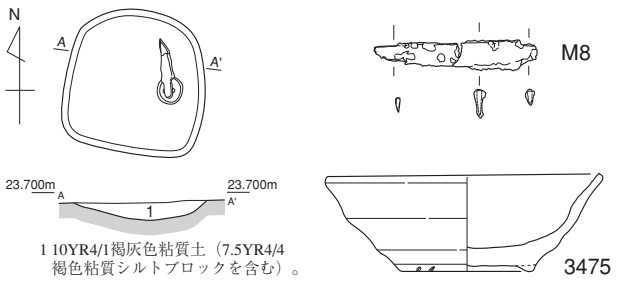


1 7.5YR3/2赤褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック、炭化物を少量含む）。
2 7.5YR4/1褐灰色粘質土
（5YR4/4にぶい褐色粘質シルトブロック、炭化物を含む）。

第469図　99KSK69（遺構図1:50、実測図1:4）

99KSK1871　調査区南西部IXJ9aグリッドで確認。長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸方形状のプランを呈し、断面は深さ0.1mと浅い皿状である。深さに関しては、遺構検出の際に地山面まで掘り下げを行ったため、本来の掘形が捉えられておらず、実際はいま少し深い土坑であったと思われる。長軸はN-10°-Eを示す。埋土は褐色粘質シルトブロックを含む褐灰色粘質土で、炭化物は観察されなかった。

土坑北東隅の床面から上向きで灰釉系陶器椀1点（3475、藤澤編年5型式）と、椀に乗せられた状態で鉄製刀子1点（M8）が出土している。刀子は柄部分が一部欠損し且つ腐食が進行する過程で灰釉系陶器の口縁から内面上部に融着していた。



1 10YR4/1褐灰色粘質土（7.5YR4/4
褐色粘質シルトブロックを含む）。

第470図　99KSK1871（遺構図1:50、実測図1:4）

その他の土坑墓　上記以外にも、水入遺跡では数多くの土坑墓が確認されている。それら土坑墓のうち、断面観察により埋土堆積が分層されたものについては、以下の図版に遺構実測図を掲載し、あわせて出土遺物も掲載した。また、埋土堆積が分層されなかった土坑墓については、遺物実測図のみを掲載し、埋土については一覧表に掲載した。

出土遺物の大半は灰釉系陶器が占める。時期は藤澤編年の6型式と7型式が中心で、多くが6型式であ

るか７型式であるかの判断に窮する遺物であった。以下、特徴的な遺物についてのみ説明を加えておく。

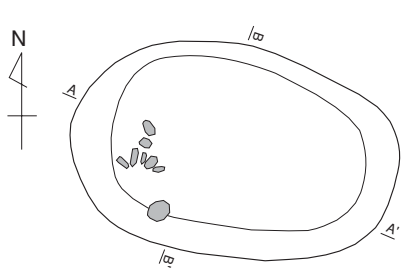
3490（98DSK191)は龍泉窯系の青磁碗底部。水入遺跡では土坑墓から青白磁が出土する例は極めて少なく、青白磁が出土するという点で被葬者に何らかの特徴を考えることができる可能性が考えられる。但し遺構の形状は灰釉系陶器が埋納される土坑墓や遺物が出土しない土坑墓と同じである。3501（98DSK276)は土師器皿。表面の劣化が激しく、明確な調整痕などは確認しがたいが、底部には回転糸切りによる切り離しの痕跡がかろうじて確認される。灰釉系陶器皿を模したロクロ成形の遺物。3517（98DSK328)は龍泉窯系青磁碗の口縁部。連弁文が体部外面に施されている。3524（98DSK364)は灰釉系陶器皿の底部を利用した加工円盤。本報告書においては、出土した陶磁器のうち５ヶ所以上に人為的と思われる破砕面を確認した遺物を加工円盤とした。3537 ～ 3548 は 99DSK24 出土遺物。99GSK18 に類似する遺構と思われる。3537 ～ 3544（98DSK24)の灰釉系陶器は、内面が摩滅しているものとそうでないもととに区分される。3545（98DSK24)は龍泉窯系の青磁碗底部。3547（98DSK24)は常滑壺の頸部から体部にかけての破片。常滑産の壺・甕については、中世前半が蔵骨器を伴わない墓域であるため、全体に出土量は少ない。そのため、土坑墓から常滑産壺・甕が出土する類例も多くない。3548（98DSK24)は伊勢型鍋。3552 ～ 3557 の 98DSK56 から出土している灰釉系陶器の椀・皿も内面摩滅が観察される遺物とそうでないものとに２分される。3591（98DSK278)はロクロ成形による土師器皿。3595（98DSK297)は劃花碗。体部内面にヘラもしくは櫛具で施文し、５ないし６区画に区分する。3608（98DSK349)は渥美産の壺肩部。連弁文と思われる施文が施されている。同一個体と思われる破片が 99DSX01（谷地形）から出土している。3625 ～ 3630（99ESK184）は灰釉系陶器椀。3626 が藤澤編年６型式である以外は７型式。いずれの椀も内面が摩滅しており、使用されていたものが埋納用に転化されたと思われる。3632（99ESK299)は非ロクロ成形の土師器皿。胎土・色調はロクロ成形の土師器皿とほぼ同じである。3637（99ESK409)は常滑産鉢。内面はかなり摩滅しており、使い込まれた遺物である。常滑産鉢が出土している土坑墓はこれのみである。3650（99GSK243)は底部に回転糸切り痕が観察されるロクロ成形の土師器皿。3651（99GSK243)は連弁文が施される、龍泉窯系の青磁碗。3677（99GSK219)・3684・3685（以上２個体 99GSK283)はロクロ成形の土師器皿。99GSK85、99GSK219、99GSK300、99HSK06、99ISK48 などは複数個体遺物が出土する土坑墓であるが、埋納される灰釉系陶器には内面が摩滅している個体と摩滅していない個体が混在している。

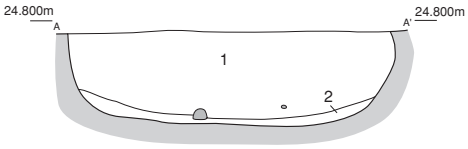




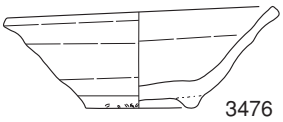
写真　99AGSK53 発掘作業風景（左）と 98DSK241 遺物出土状況（右）

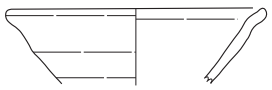
98DSK02





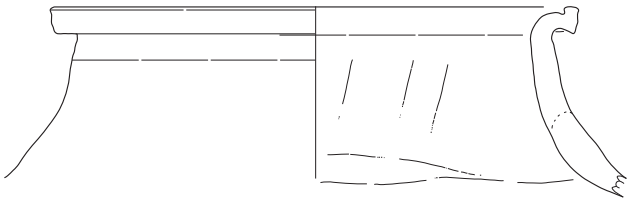
1 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR暗褐色粘質シルトが斑土状に堆積する（炭化物含まない）。
2 7.5YR4/6褐色粘質土（ベースと同じだが粘質が強い）。


3476

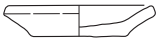

3477



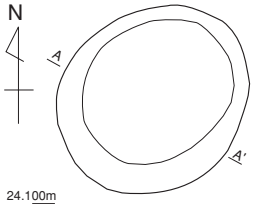
＊ 袋状に掘削された土坑墓。

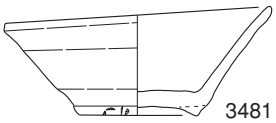

3480

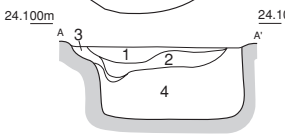

3478


3479

98DSK68

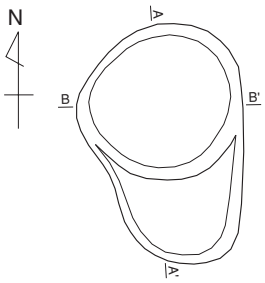


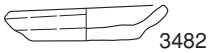

3481

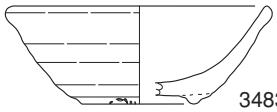


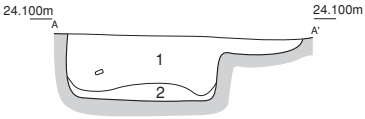
1 10YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルト＋10YR4/4褐色粘質シルトブロック。
3 2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂質土。
4 10YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（炭化物含む）。

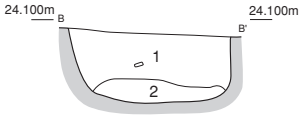
98DSK75




3482

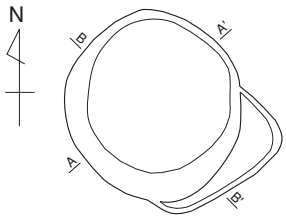

3483

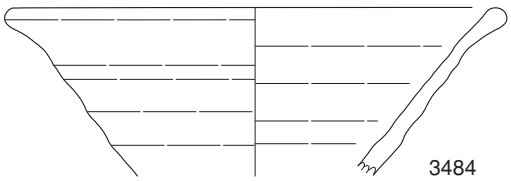


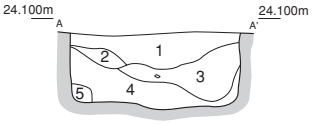


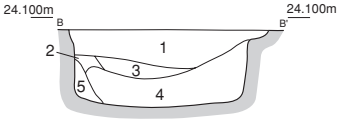
1 7.5YR3/4暗褐色シルト（径1～2mmの砂粒含む）＋7.5YR4/6褐色シルトブロック。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5Y3/4褐色シルトの斑土。
＊テラスをもって掘削されている。

98DSK79



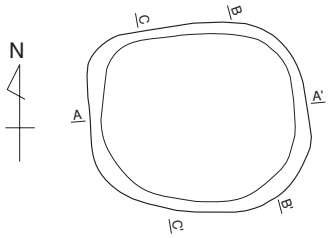

3484

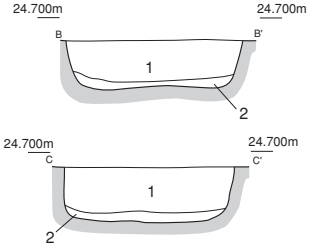


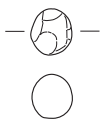


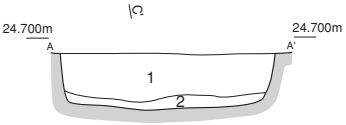
1 7.5YR3/4暗褐色シルト（径1～2mmの砂粒含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロックの斑土。
4 10YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（少量の炭化物含む）。
5 7.5YR4/4褐色シルト＋10YR2/4暗褐色粘質シルトブロック。

98DSK92





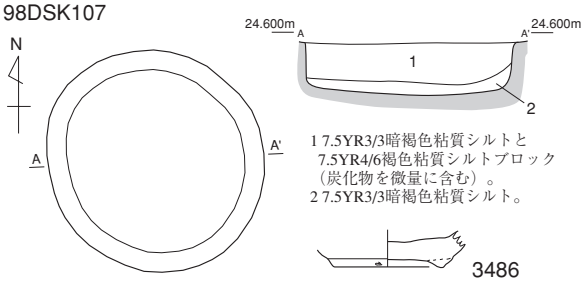

3485



1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR5/4にぶい褐色シルト（微量に炭化物を含む）。
2 10YR4/2灰黄褐色粘質。

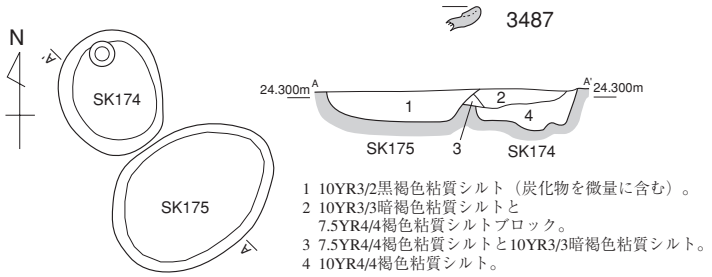
第471図　土坑墓（１）（遺構図1:50、実測図1:4）

98DSK107



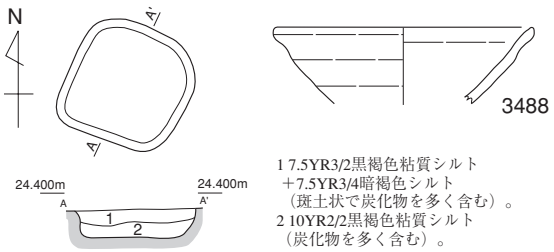
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック
（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

98DSK174



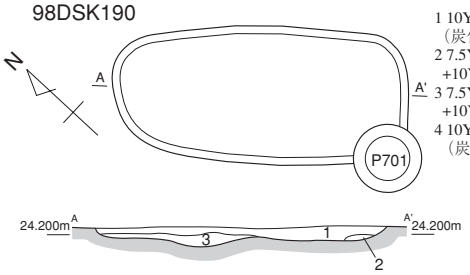
1 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルト。
4 10YR4/4褐色粘質シルト。

98DSK178



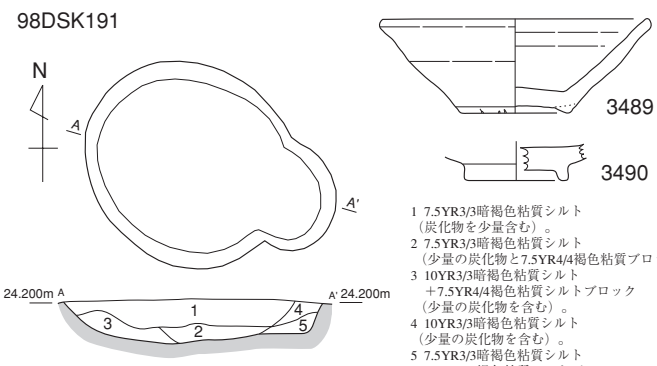
1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
＋7.5YR3/4暗褐色シルト
（斑土状で炭化物を多く含む）。
2 10YR2/2黒褐色粘質シルト
（炭化物を多く含む）。

98DSK190



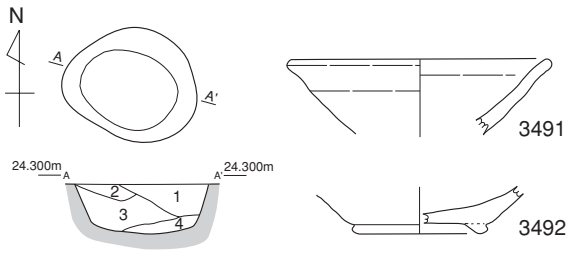
1 10YR2/1黒色粘質シルト
（炭化物多量に含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質土
+10YR2/1黒色褐色粘質シルト。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
+10YR2/1黒色粘質シルト黒粘質シルト。
4 10YR4/1褐灰色粘シルト
（炭化物少量含む）。

98DSK191



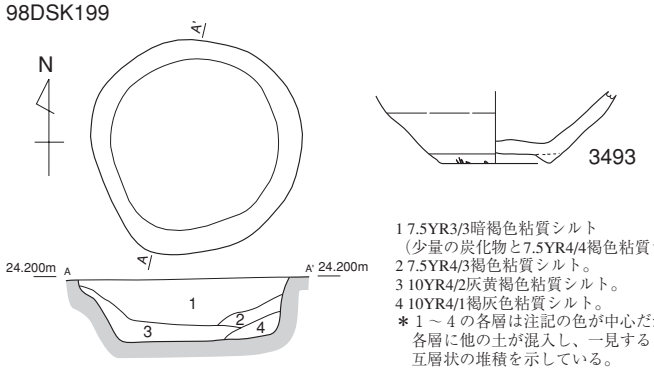
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（少量の炭化物と7.5YR4/4褐色粘質ブロックを含む）。
3 10YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック
（少量の炭化物を含む）。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルト
（少量の炭化物を含む）。
5 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.4YR4/4褐色粘質シルトブロック。
＊ 2基の土坑の切り合い。

98DSK192



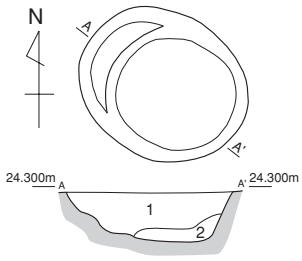
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（少量含む）。
3 7.5YR3/5暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトの斑土。
4 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト。

98DSK199



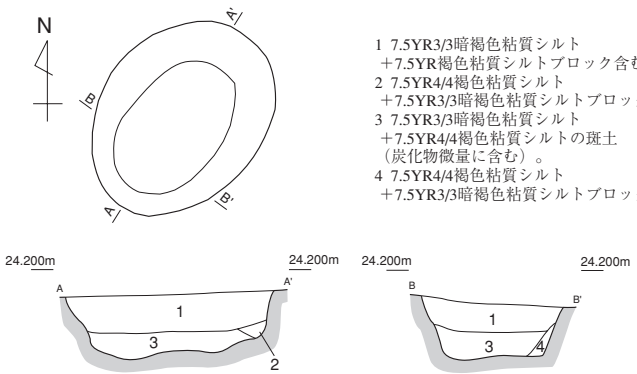
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（少量の炭化物と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック含む）。
2 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
3 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
＊ 1 ～ 4 の各層は注記の色が中心だが、
各層に他の土が混入し、一見すると
互層状の堆積を示している。

98DSK204



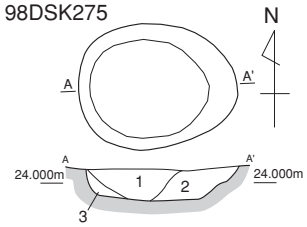
1 7.5YR3/4暗褐色シルト
＋7.5YR4/4褐色シルトブロック
（炭化物なしの斑土状）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

98DSK230



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR褐色粘質シルトブロック含む。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルト
＋7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土
（炭化物微量に含む）。
4 7.5YR4/4褐色粘質シルト
＋7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。

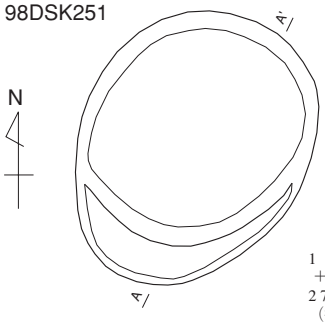
98DSK275

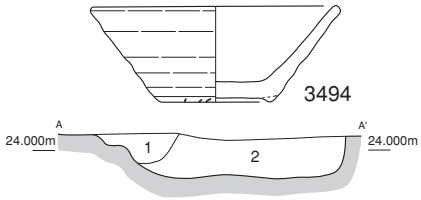


1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（微量に7.5YR 褐色シルトブロックと炭化物を含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色シルト
＋7/5YR4/3褐色シルトの斑土
（炭化物を少量含む）。
3 7.5YR3/3暗褐色シルト
＋7/5YR4/3褐色シルトの斑土
（炭化物を少量含む）。

第472図　土坑墓（２）（遺構図1:50、実測図1:4）

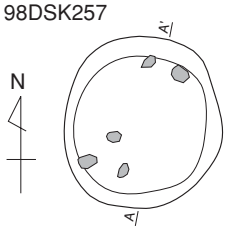
98DSK251

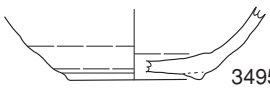


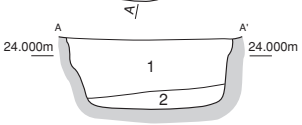


1 10YR4/1褐灰色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR4/1褐灰色粘質シルトの斑土
（微量に炭化物を含む）。

98DSK257

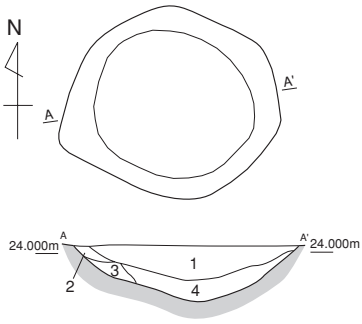






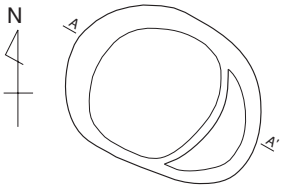
1 7.5Y3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック
（炭化物を少量含む）。
2 10YR4/1褐色粘質土。

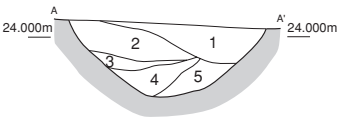
98DSK270



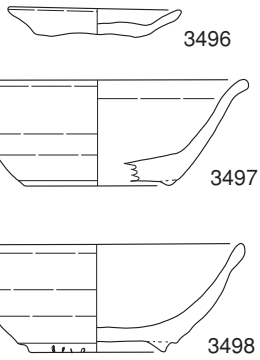
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 5YR3/4暗赤褐色粘質シルト。
3 10YR4/4褐色粘質シルト。
4 10YR4/4褐色粘質シルトと
7.5YR3/4暗褐色粘質シルトの斑土。

98DSK272

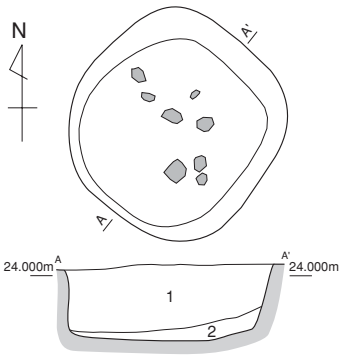


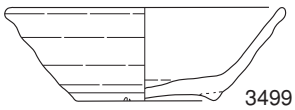


1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
2 10YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
3 10YR4/1褐灰色粘質土（炭化物を微量に含む）。
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。
5 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。



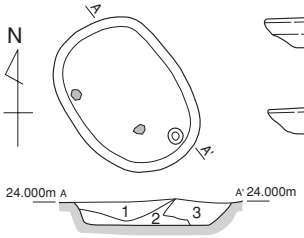
98DSK273

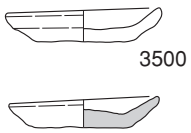




1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを微量に含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質土
（1と2は粘質の違いで2の方が粘質強い）。

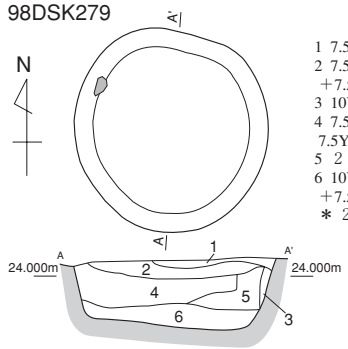
98DSK276





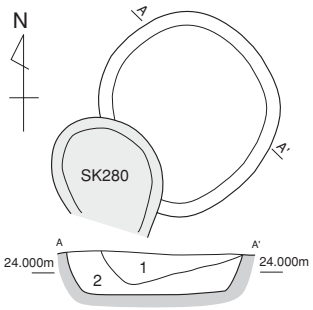
1 10YR4/1褐灰色粘質シルト
（少量の10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
2 10YR3/1黒褐色粘質シルト
（炭化物と10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
3 10YR3/2黒褐色粘質シルト
（炭化物と10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロックを少量含む）。

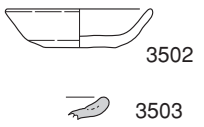
98DSK279



1 7.5YR3/2黒褐粘質シルト。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルト
＋7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロック。
3 10YR3/2暗褐色粘質シルト。
4 7.5YR4/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
5 2と同様だがブロックの混入は少ない。
6 10YR4/2灰黄褐色粘質土
＋7.5YTR4/4褐色粘質シルトブロック。
＊ 2、4、5、6は斑土に近い。

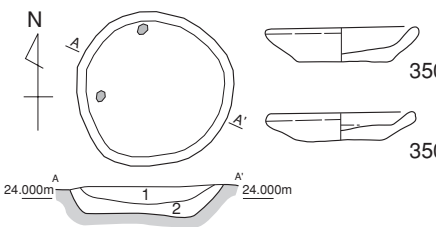
98DSK281





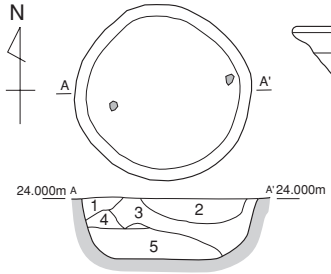
1 7.5YR3/2黒褐色シルトと
7.5YR4/4褐色シルトの斑土
（炭化物微量に含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色シルトと
7/5YR4/4褐色シルトブロック（少量）
（炭化物を微量に含む）。

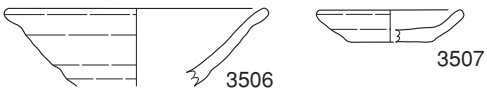
98DSK290



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルト（粘質強く炭化物を少量含む）。

98DSK296

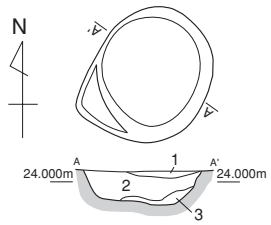




1 10YR3/3暗褐色粘質シルト＋10YR4/4褐色シルトブロック。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルト ＋10YR4/4褐色シルトブロック。
3 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物が少量混入）。
4 7/5YR4/6褐色粘質シルト
（地山よりしまりなく掘り出された感あり）。
5 10YR3/3暗褐色粘質シルト ＋10YR4/4褐色粘質シルトの斑土。

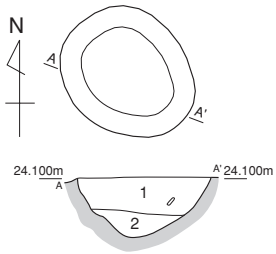
第473図　土坑墓（3）（遺構図1:50、実測図1:4）

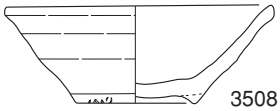
98DSK317



1 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
＋7.5YR4/3褐色粘質シルト（斑土状）。
3 7.5YR5/4にぶい褐色シルト。

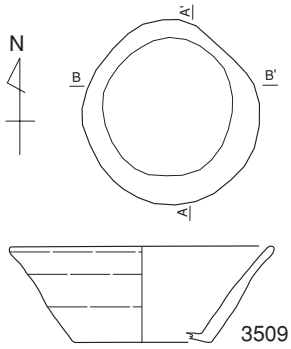
98DSK318

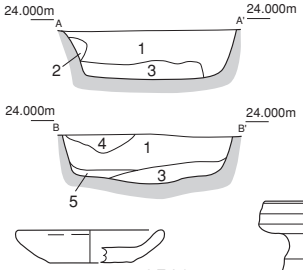




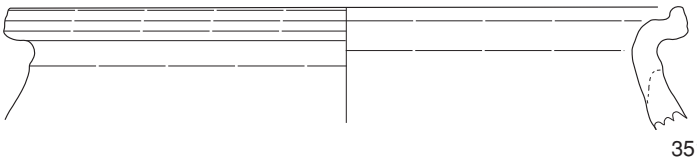
1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
2 1層よりうすく灰色が強い
（7.5YR4/4褐色シルトブロックを極少量ずつ共に含む）。

98DSK321



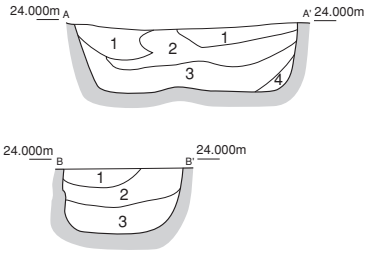


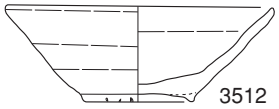
1 7.5YR3/4暗褐色シルト。
2 7.5YR3/3褐色シルト（地山の崩落）。
3 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
＊土全体にしまりなし、炭化物なし。
4 7.5YR3/4暗褐色シルト＋10YR4/4褐色シルトブロック。
5 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト＋10YR4/4褐色シルトブロック（粘質が3より強い）。

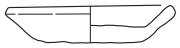


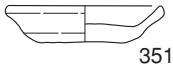
98DSK328

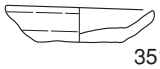


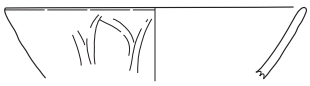








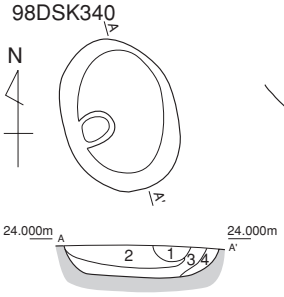






1 7.5YR3/4暗褐色シルト（炭化物を微量に含む）。
2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色シルト（斑土状）。
3 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物含む）。
4 7.5YR4/4褐色粘質シルト
＋7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック
（地山、地表面の崩落土）。

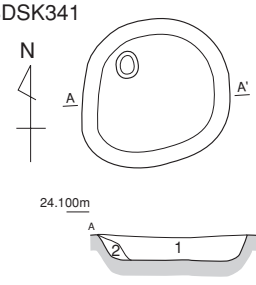
98DSK340





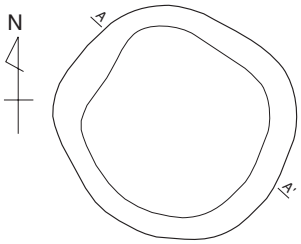
1 7.5YR4/4褐色粘質シルト
＋10YR3/3暗褐色シルト（斑土）。
2 10YR3/3暗褐色シルト。
3 10YR3/3暗褐色粘質シルト
（かなり粘性強い）。
4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
（地山の崩落）。

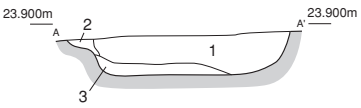
98DSK341



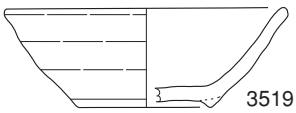
1 10YR3/1黒褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）。
2 7.5YR4/3暗褐色シルト。

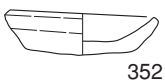
98DSK364

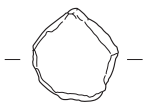


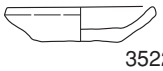


1 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR4/6褐色シルト
（1のブロックを少量含む、地山の崩落土）。
3 10YR2/3暗褐色粘質土（1より粘質強い）。

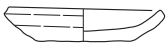








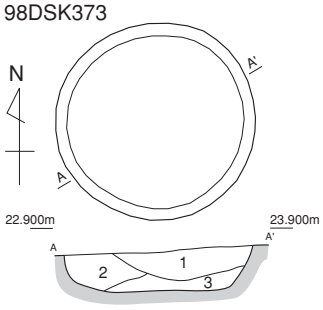






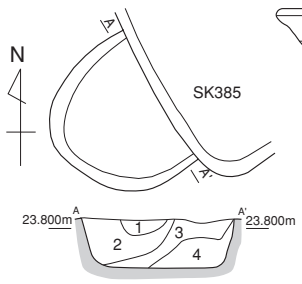
第474図　土坑墓（4）（遺構図1:50、実測図1:4）

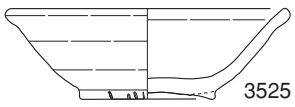
98DSK373



1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色シルトの斑土。
2 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト
（炭化物を微量に含む）。
3 7.5YR4/6褐色粘質シルト。

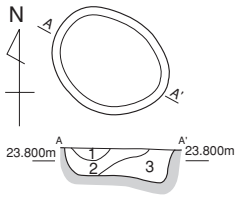
98DSK386





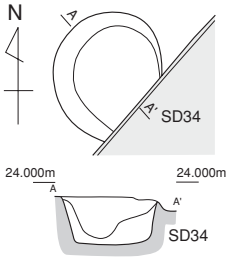
1 10YR3/3暗褐色粘質土。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
+7.5YR4/4黒褐色粘質土。
3 10YR3/2黒褐色粘質土。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
+7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。

98DSK389



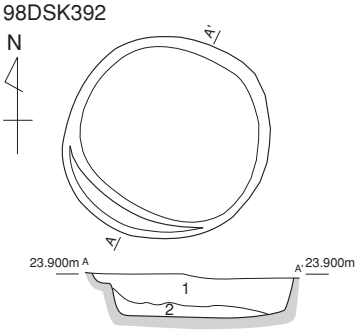
1 10YR3/2黄褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（少量）。
2 10YR3/2黄褐色粘質シルト
（炭化物を微量に含む）。
3 10YR3/2黄褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。

98DSK391



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
2 10YR3/2黒褐色粘質土。

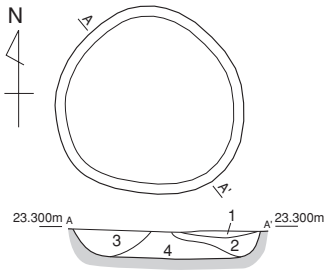
98DSK392



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色シルトの斑土。
2 10YR4/1褐灰色粘質土。

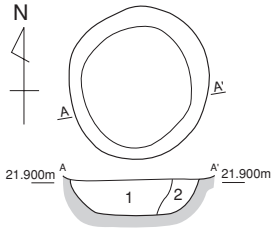


98DSK410

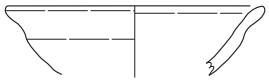


1 7.5YR3/4暗褐色シルト
＋7.5YR4/6褐色シルトブロック。
2 7.5YR4/6黒褐色シルト
＋7.5YR4/6褐色シルトブロック（極少量）
(炭化物が微量に混入する）。
3 7.5YR3/1黒褐色シルト
＋7.5YR4/6褐色シルトブロック(極少量)
(炭化物が微量に混入する）。
4 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
＋7.5YR4/6褐色シルトの斑土。

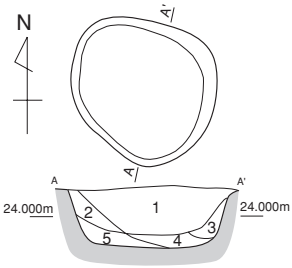
98DSK447



1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 1＋7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック。

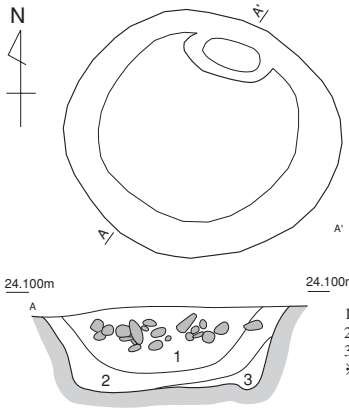


98DSK448

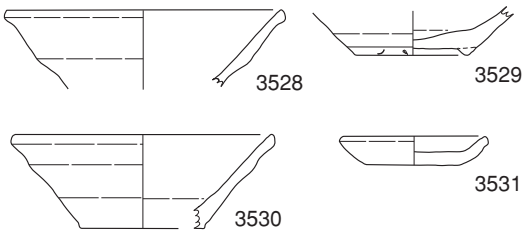


1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 1＋7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック（少量含む）。
3 1＋7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック（少量含む）。
4 1＋7.5YR3/4暗褐色粘質シルトの斑土。
5 7.5YR4/1褐灰色粘質土。

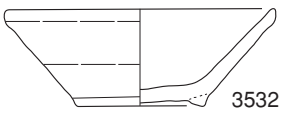
98DSK470



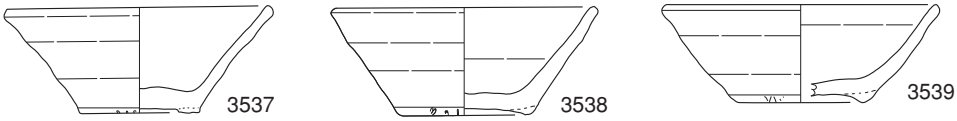
1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（拳大の円礫及び炭化物を含む）。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR4/2灰黄褐色粘質シルトの斑土（炭化物を含む）。
3 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を含む）。
※集石墓にしては礫の配置に規則性がなく底低部のレベルの位置も不揃い。
（棺があってそれが落石したとも考えらなくもない）。



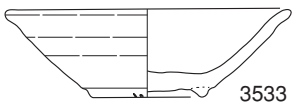
98DSK06

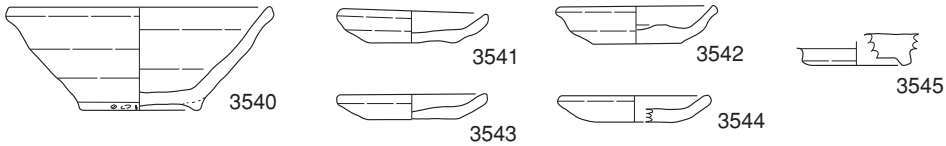


98DSK24

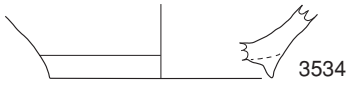


98DSK09

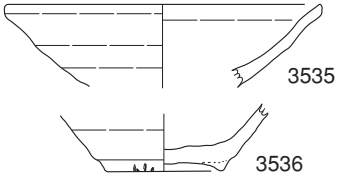


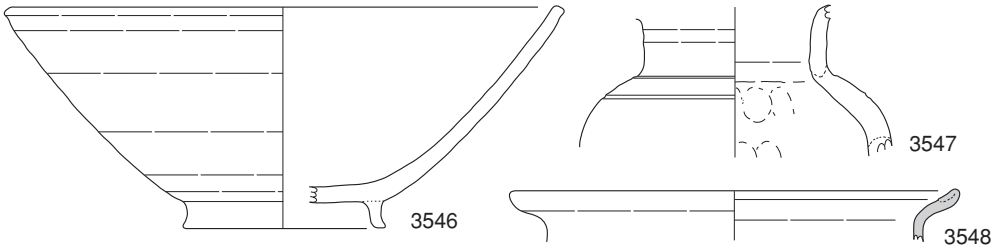


98DSK12

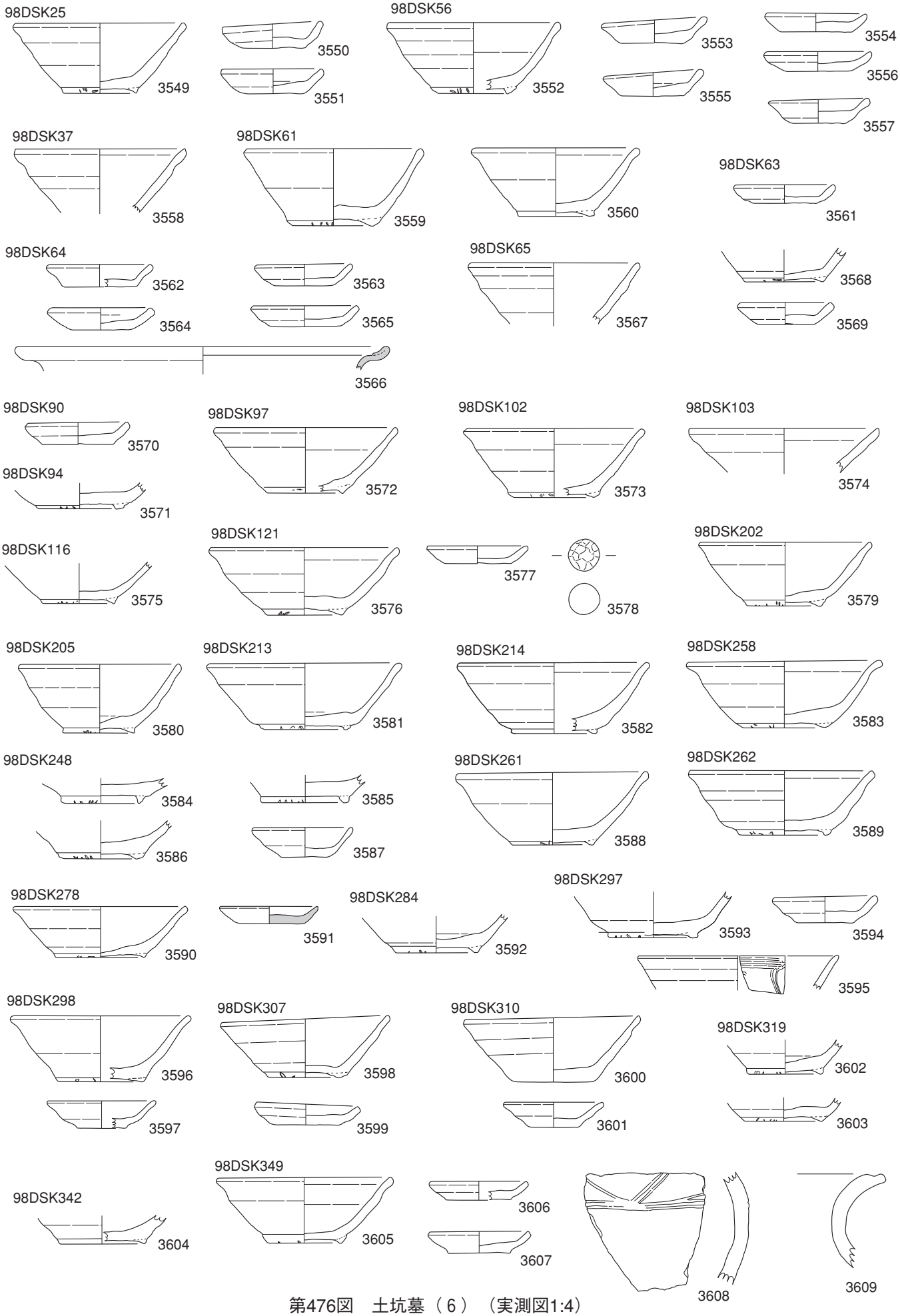


98DSK22



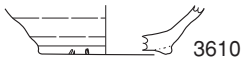


第475図　土坑墓（５）（遺構図1:50、実測図1:4）

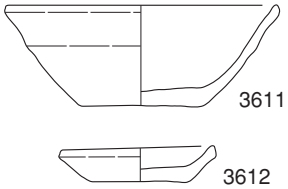


第476図　土坑墓（６）（実測図1:4）

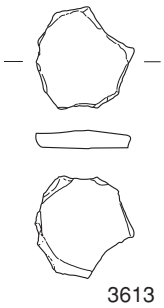
98DSK351



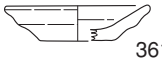
98DSK365



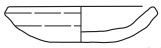
98DSK374



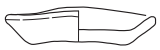
98DSK388



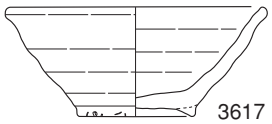
98DSK438



98DSK449



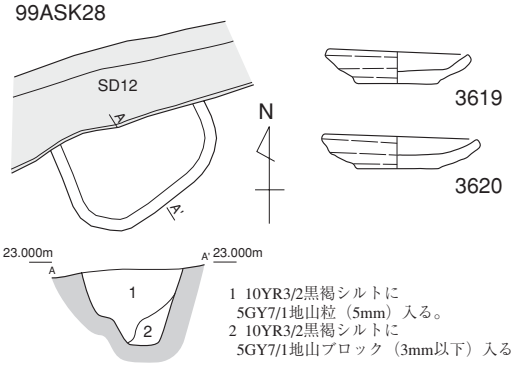
98DSK472



98DSK473

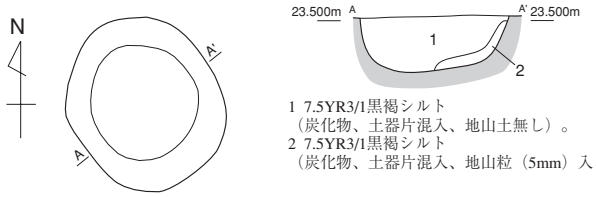


99ASK28



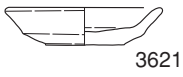
1 10YR3/2黒褐シルトに
5GY7/1地山粒（5mm）入る。
2 10YR3/2黒褐シルトに
5GY7/1地山ブロック（3mm以下）入る。

99ASK77

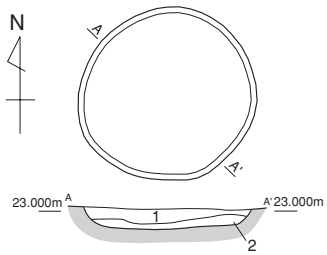


1 7.5YR3/1黒褐シルト
（炭化物、土器片混入、地山土無し）。
2 7.5YR3/1黒褐シルト
（炭化物、土器片混入、地山粒（5mm）入る）。

99ASK5002

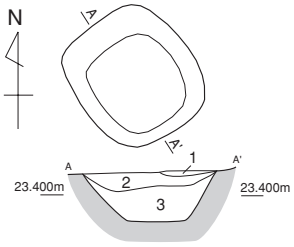


99BSK51



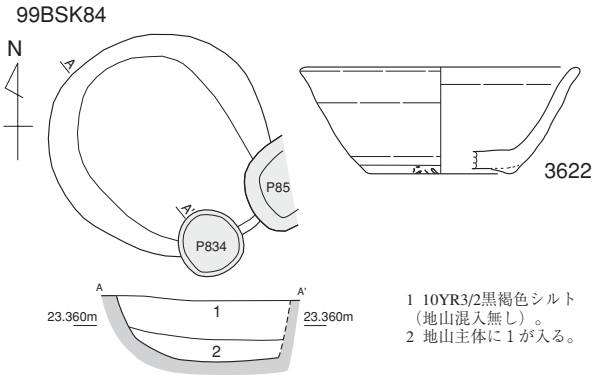
1 5BG3/1暗青灰粘質シルト（粘質強い）
（地山ブロックと若干の炭化物が混入する）。
2 10YR4/2灰黄褐シルト（やや砂質）
（地山粒が混入し、炭化物は混入しない）。

99BSK75



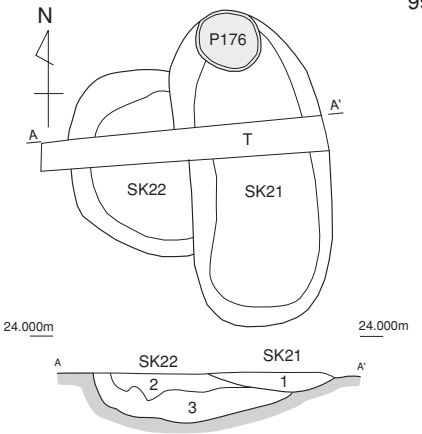
1 10YR5/1褐灰色極細粒砂。
2 10YR4/1褐灰色シルト炭化物あり。
3 地山主体に5Y4/1灰色シルト砂入る。

99BSK84



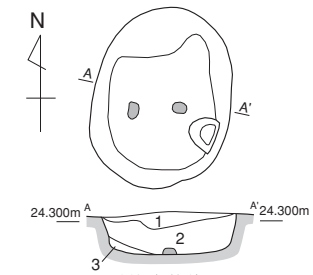
1 10YR3/2黒褐色シルト
（地山混入無し）。
2 地山主体に 1 が入る。

99DSK21・22



1 7.5YR3/1黒褐色シルト。
2 10YR3/2黒褐色シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを多く含む）。
3 10YR2/1黒色シルトと10YR5/2灰黄褐色粘質シルトの斑土
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。

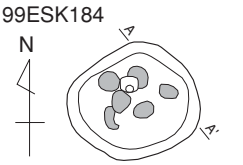
99ESK169



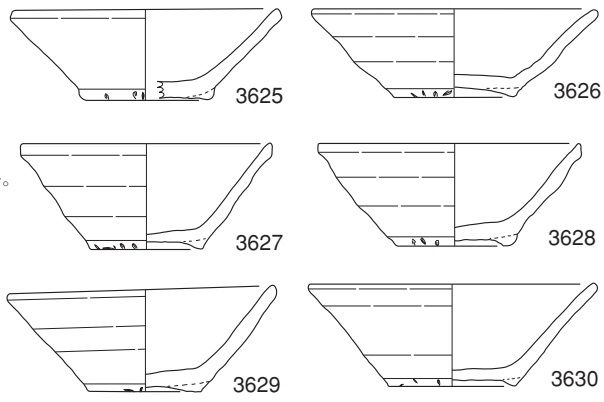
1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトに
7.5YR4/6褐色極細粒砂を横じま状に含む。
2 7.5YR3/2黒褐色砂質シルトに
7.5YR4/4褐色極細粒砂を含む
（ブロック状に炭化物を含む）。
3 7.5YR4/4褐色砂質シルト。

3623
3624

99ESK184

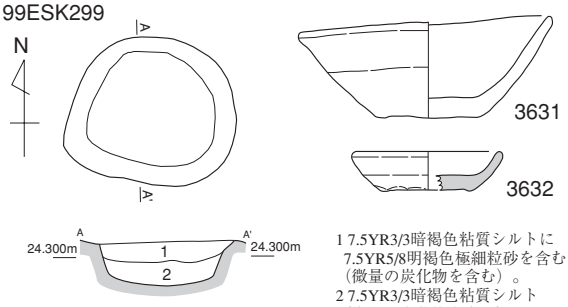


1 10YR3/2黒褐色粘質シルトに
7.5YR5/8明褐色細粒砂を含む。
2 7.5YR5/6明褐色細粒砂。
3 7.5YR4/4褐色細粒砂。



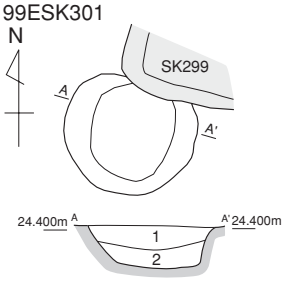
第477図　土坑墓（７）（遺構図1:50、実測図1:4）

99ESK299



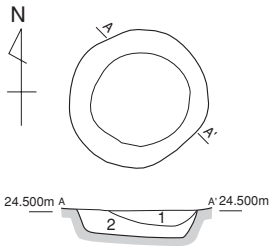
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトに
7.5YR5/8明褐色極細粒砂を含む
（微量の炭化物を含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（微量の炭化物を含む）。

99ESK301



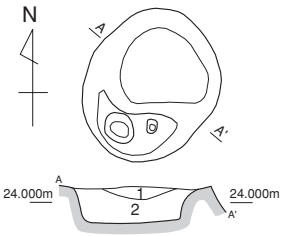
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに
7.5YR6/8極細粒砂を含む
（少量の炭化物を含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

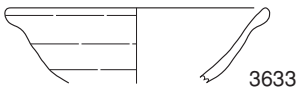
99ESK357



1 5YR4/6赤褐色粘質シルト。
2 7.5YR4/6褐色粘質シルト。

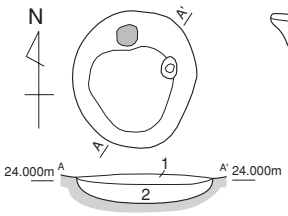
99ESK342

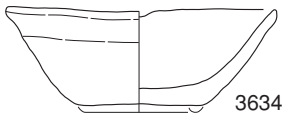




1 7.5YR4/6褐色粘質シルトに
7.5YR5/8明褐色極細粒砂を含む。
2 7.5YR3/2極暗褐色粘質シルトに
7.5YR4/4褐色粘質シルトを含む。

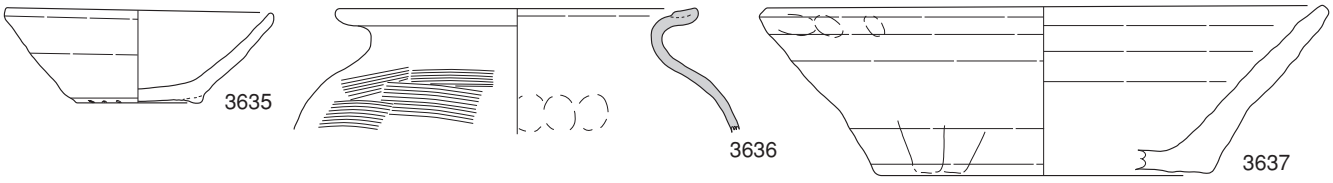
99ESK344



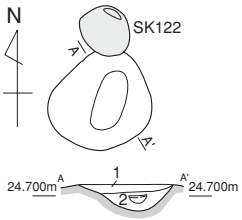


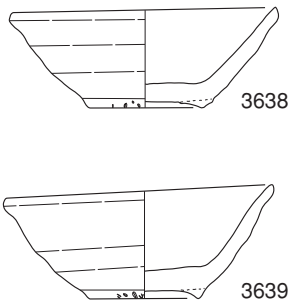
1 7.5YR4/6褐色粘質シルトに
7.5YR5/8明褐色粘質シルト。
2 7/5YR2/3極暗褐色粘質シルト。

99ESK409



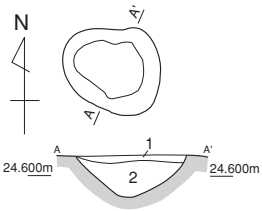
99FSK123





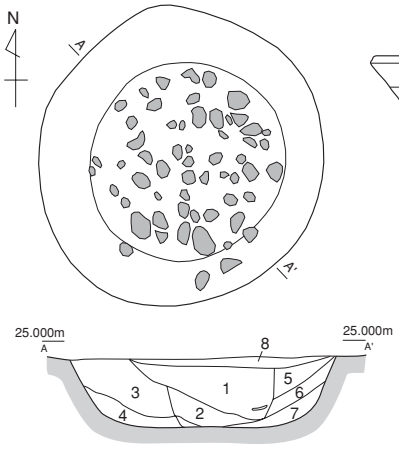
1 7.5YR3/2暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルトに
7.5YR4/6褐色粘質シルトが混じる。

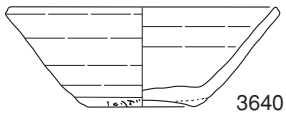
99FSK224



1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに
7.5YR4/6褐色粘質シルトが混じる。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

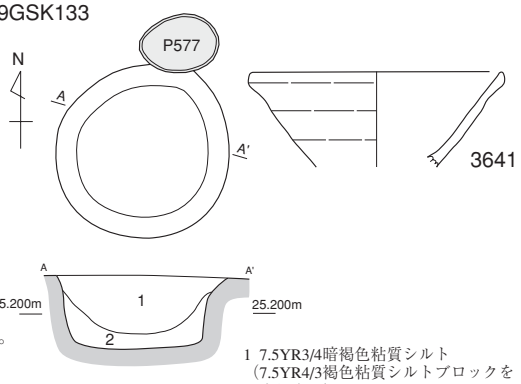
99GSK68





1 10YR4/2灰着褐色粘質シルト
（しまり弱くブロック状に見える）。
2 10YR3/3暗褐色粘質土
（粘質が1よりやや強く炭化物微量に含む）。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを微量に含む）。
4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）。
5 3と同じ。
6 3よりも7.5YR4/4褐色シルトブロックを多く含む。
7 4と同じ。
8 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。

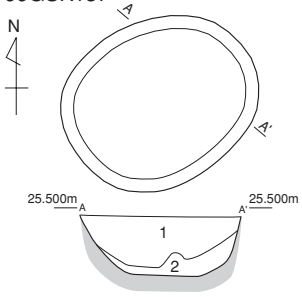
99GSK133



1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを
少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/3褐色粘質シルト。

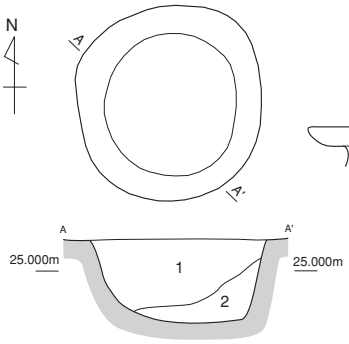
第478図　土坑墓（8）（遺構図1:50、実測図1:4）

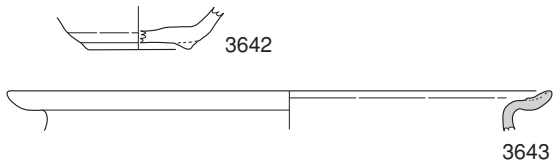
99GSK137



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土状。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。

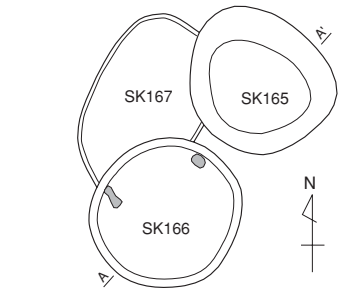
99GSK142

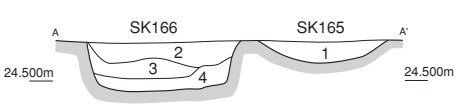




1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（斑土状）
＋7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。
2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（やや粘質強い）。

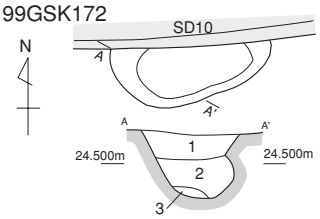
99GSK165・166



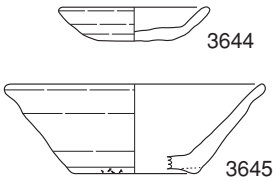


1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。
3 7.5YR3/2黒褐色シルト
（1より粘質強くブロック少ない）。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（2よりブロックを多く含む）。

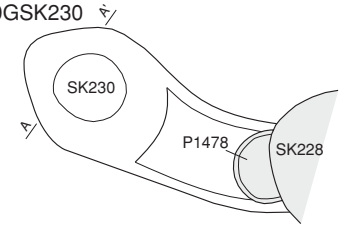
99GSK172

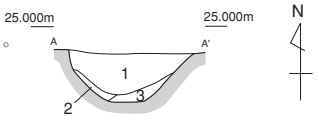


1 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 10YR2/2黒褐色粘質シルト
（1より粘質強く7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
3 7.5YR4/3褐色粘質シルト＋10YR4/2灰褐色粘質土。



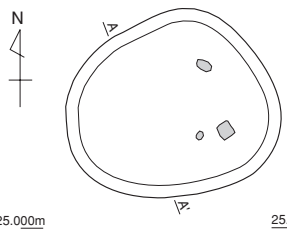
99GSK230

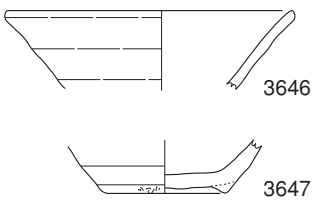


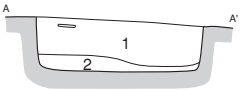


1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
2 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルト。
3 7.5YR4/2灰褐色粘質土
（1.2より粘質が強い）。

99GSK241

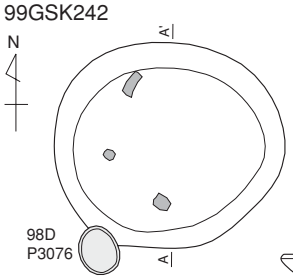






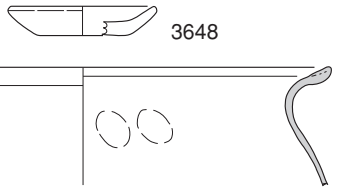
1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
（径1～2mmの砂粒と炭化物をやや多く含む）。
2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
（径1～2mmの砂粒を少量含み1よりやや粘質強い）。

99GSK242

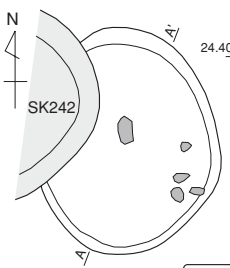


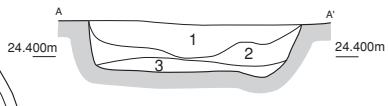


1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。

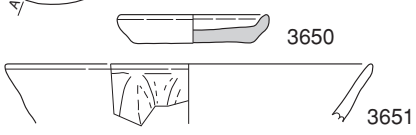


99GSK243

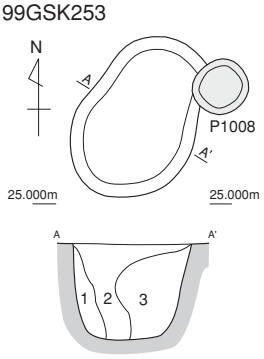




1 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルト
＋10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロック。
3 10YR5/2灰黄褐色粘質土。

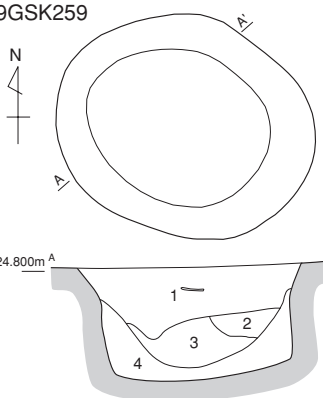


99GSK253



1 7.5YR4/4褐色粘質土
（ベースに近いが粘質強くしまりなし）。
2 7.5YR3/4黒褐色粘質シルト。
3 7.4YR4/3褐色粘質シルト。
※2.3ともに径1～2mm大の砂粒を含みやや粘質弱い。

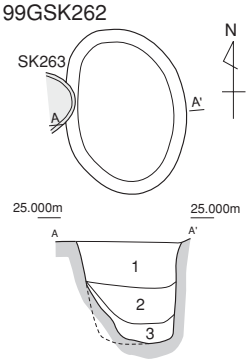
99GSK259



1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR4/3褐色粘質シルト（FeaMg分の沈着あり）。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質土（2より粘質強く、しまり弱い）。
4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと
5YR4/4にぶい褐色粘質シルトの互層。

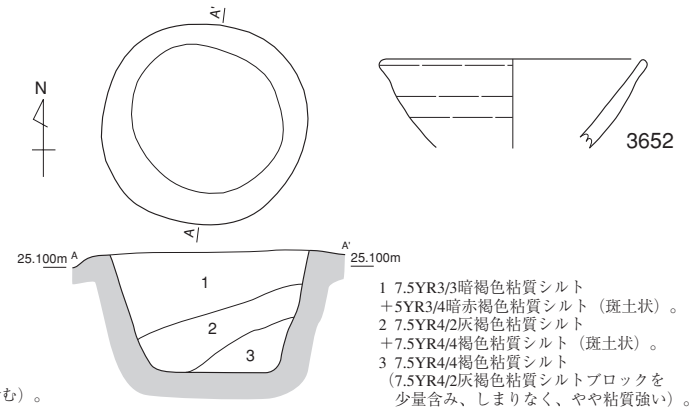
第479図　土坑墓（9）（遺構図1:50、実測図1:4）

99GSK262



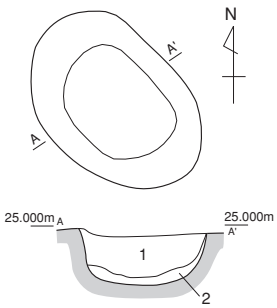
1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。

99GSK273



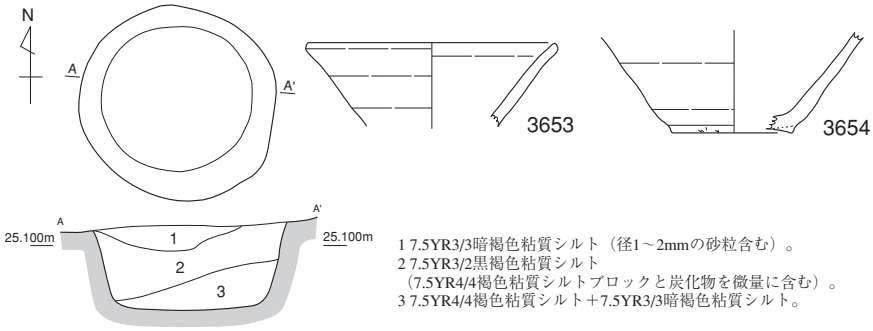
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
＋5YR3/4暗赤褐色粘質シルト（斑土状）。
2 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルト（斑土状）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルト
（7.5YR4/2灰褐色粘質シルトブロックを
少量含み、しまりなく、やや粘質強い）。

99GSK321



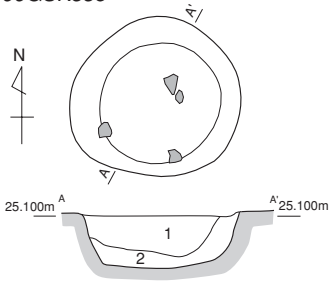
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを
微量に含む）。
2 7.5YR4/3褐色粘質土。

99GSK282



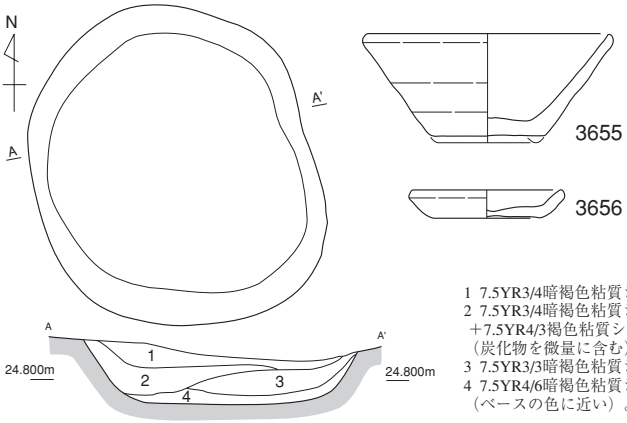
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルト＋7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

99GSK335



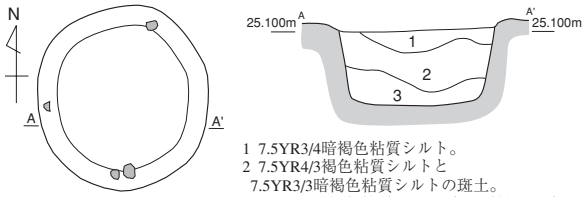
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと
炭化物を微量に含む）。
2 10YR4/2灰黄褐色シルト
（やや粘性強く、7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
ブロックを少量含む）。

99GSK284



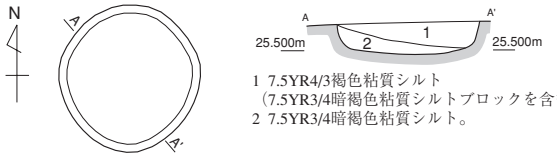
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
＋7.5YR4/3褐色粘質シルト
（炭化物を微量に含む）。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
4 7.5YR4/6暗褐色粘質シルト
（ベースの色に近い）。

99GSK336



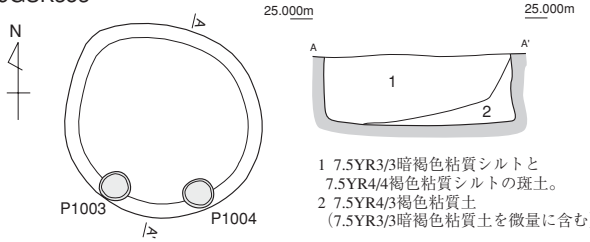
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR4/3褐色粘質シルトと
7.5YR3/3暗褐色粘質シルトの斑土。
3 10YR灰黄褐色粘質シルト（やや粘性強い）。

99GSK389



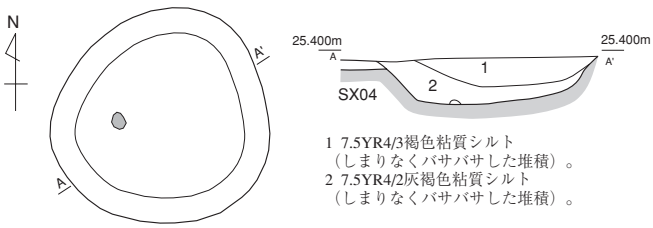
1 7.5YR4/3褐色粘質シルト
（7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。

99GSK353



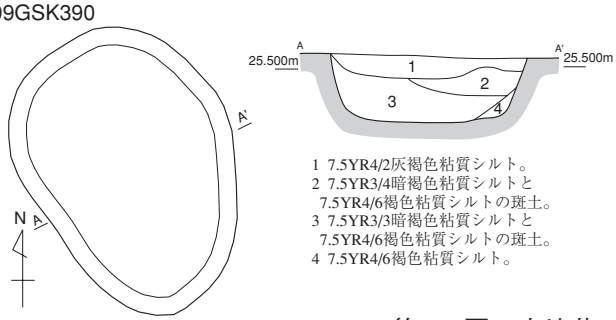
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
2 7.5YR4/3褐色粘質土
（7.5YR3/3暗褐色粘質土を微量に含む）。

99GSK357



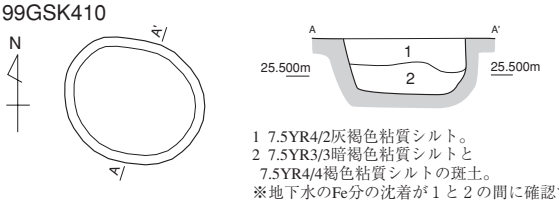
1 7.5YR4/3褐色粘質シルト
（しまりなくバサバサした堆積）。
2 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
（しまりなくバサバサした堆積）。

99GSK390



1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/6褐色粘質シルトの斑土。
4 7.5YR4/6褐色粘質シルト。

99GSK410



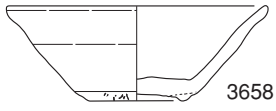
1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
※地下水のFe分の沈着が1と2の間に確認できる。

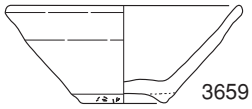
第480図　土坑墓（10）（遺構図1:50、実測図1:4）

99GSK43



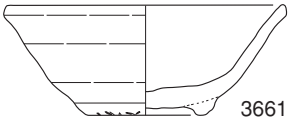
99GSK85

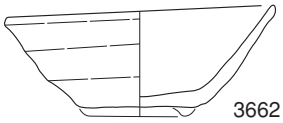


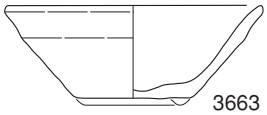




99GSK125

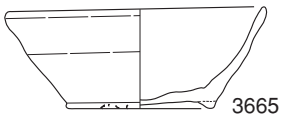


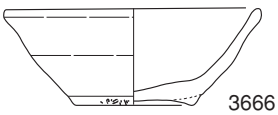


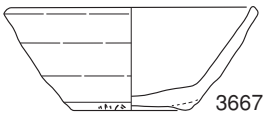




99GSK176

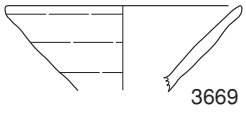




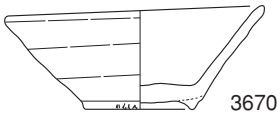


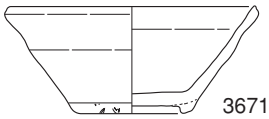


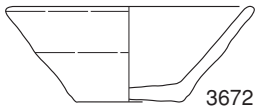
99GSK210

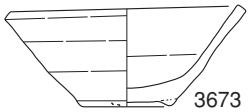


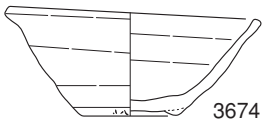
99GSK219





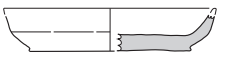


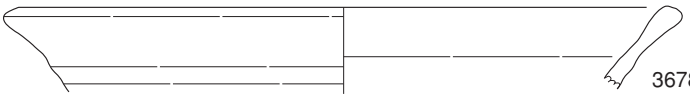




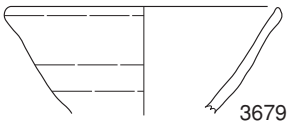




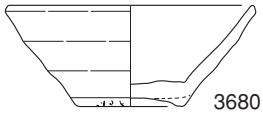


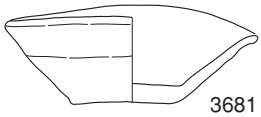


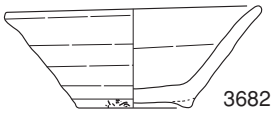
99GSK283

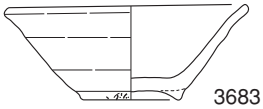


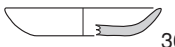
99GSK300

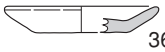




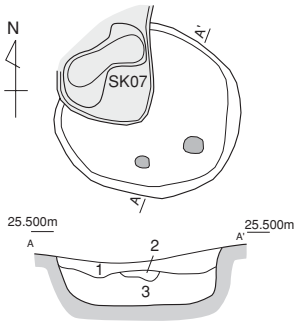


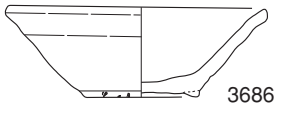


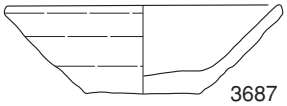




99HSK06

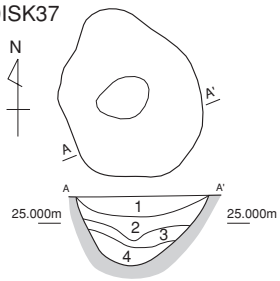


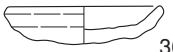




1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（0.5cm以下の炭化物を若干含む）。
2 7.5YR4/6褐色粘質シルト。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

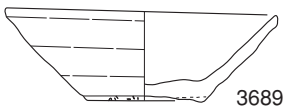
99ISK37



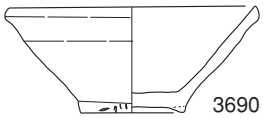


1 10YR4/4褐色粘質シルト
（炭化物を含む）。
2 10YR4/6褐色粘質シルト
（炭化物を含む）。
3 10YR4/8赤褐色粘質シルト
＋10YR5/8明褐色粘質シルト。
4 10YR3/4暗褐色粘質シルト
（3cm程度の礫を少々含む）。

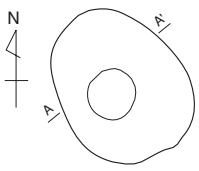
99HSK05

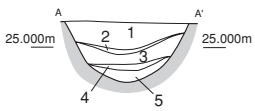


99HSK173

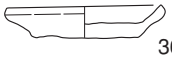


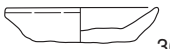
99ISK48





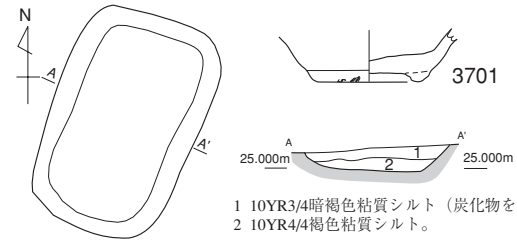
1 10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
2 5YR4/8赤褐色粘質シルト＋10YR4/4褐色粘質シルト。
3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
4 5YR4/8赤褐色粘質シルト。
5 7.5YR4/6褐色粘質シルト（炭化物を含む）。





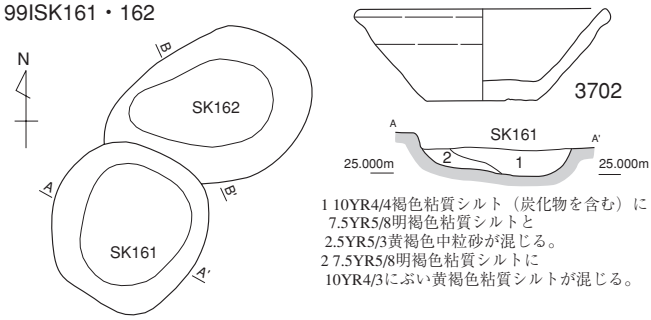
第481図　土坑墓（11）（遺構図1:50、実測図1:4）

99ISK70



1 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
2 10YR4/4褐色粘質シルト。

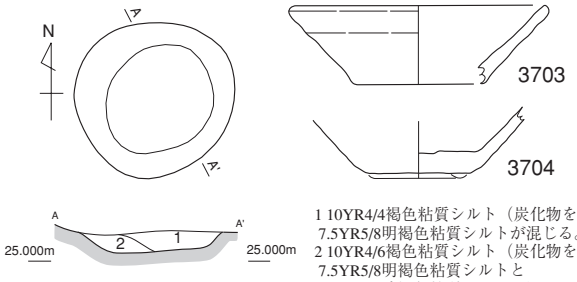
99ISK161・162



1 10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
7.5YR5/8明褐色粘質シルトと
2.5YR5/3黄褐色中粒砂が混じる。
2 7.5YR5/8明褐色粘質シルトに
10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトが混じる。

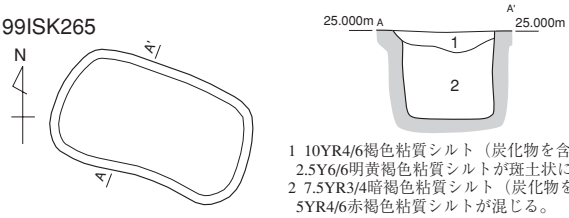
1 10YR4/4褐色粘質シルトに
10YR5/6黄褐色粘質シルトが混じる。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに
7.5YR5/8明褐色粘質シルトと
10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルトが混じる。

99ISK164



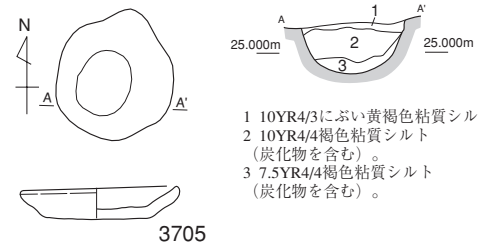
1 10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
7.5YR5/8明褐色粘質シルトが混じる。
2 10YR4/6褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
7.5YR5/8明褐色粘質シルトと
7.5YR3/4暗褐色粘質シルトが混じる。

99ISK265



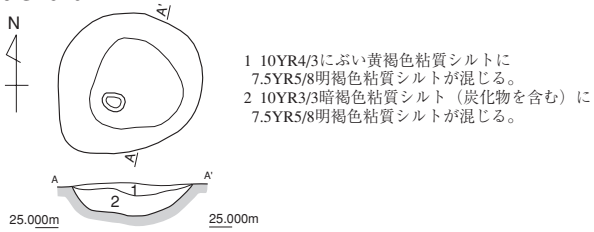
1 10YR4/6褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
2.5Y6/6明黄褐色粘質シルトが斑土状に混じる。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
5YR4/6赤褐色粘質シルトが混じる。

99ISK518



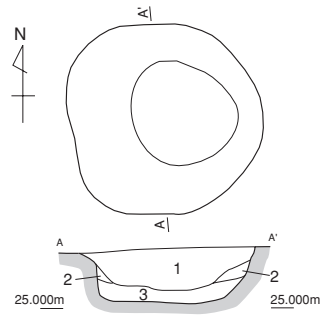
1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。
2 10YR4/4褐色粘質シルト
（炭化物を含む）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルト
（炭化物を含む）。

99ISK540



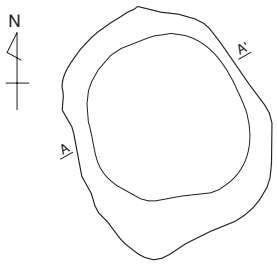
1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトに
7.5YR5/8明褐色粘質シルトが混じる。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
7.5YR5/8明褐色粘質シルトが混じる。

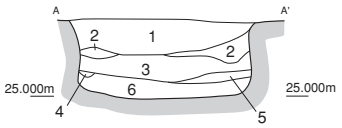
99ISK567



1 7.5YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
7.5YR4/6褐色粘質シルト。
2 7.5YR4/6褐色粘質シルト。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルト。

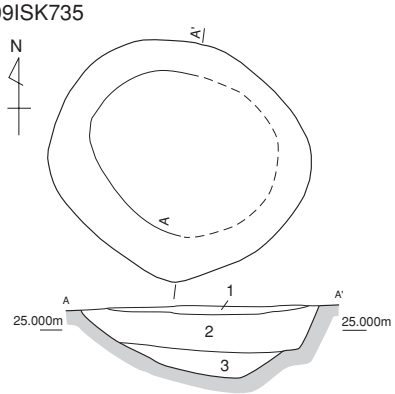
99ISK596





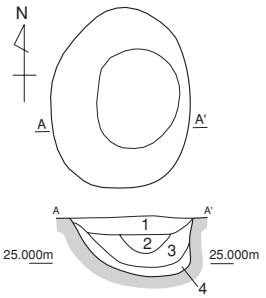
1 7.5YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に2.5YR5/4黄褐色粘質シルトが混じる。
2 7.5YR5/8明褐色粘質シルトに7.5YR4/4褐色粘質シルトが混じる。
3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに 7.5YR4/4褐色粘質シルトが混じる。
4 7.5YR5/8明褐色粘質シルトに7.5YR4/4褐色粘質シルトが混じる。
5 7.5YR5/8明褐色粘質シルトに7.5YR4/4褐色粘質シルトが混じる。
6 10YR4/6褐色粘質シルトに2.5YR5/4黄褐色土と10YR3/4暗褐色粘質シルトが混じる。

99ISK735



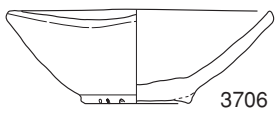
1 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物、礫を含む）に
10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトが混じる。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルトに
7.5YR4/3褐色粘質シルトが混じる。

99ISK757

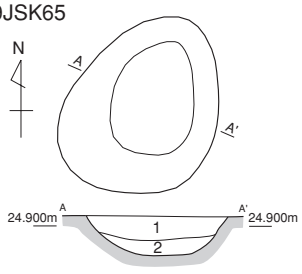


1 7.5YR2/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに
7.5YR4/4褐色粘質シルトを含む。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
4 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトに
10YR4/4褐色粘質シルトを含む。

99ISK735



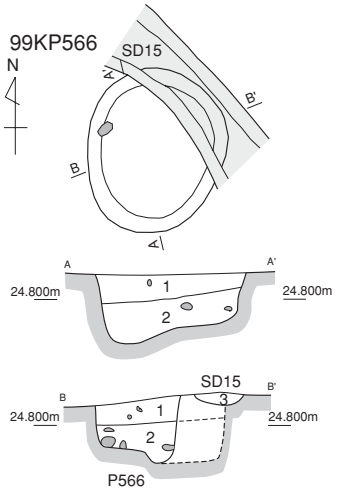
99JSK65



1 7.5YR3/3褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/3褐色粘質シルトブロック
＋5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック。

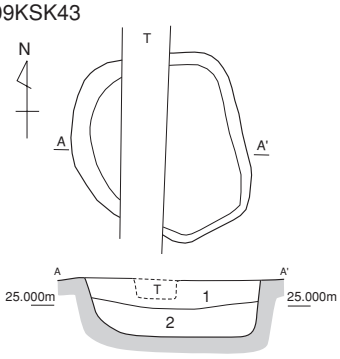
第482図　土坑墓（12）（遺構図1:50、実測図1:4）

99KP566



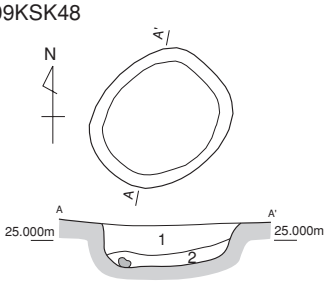
1 7.5YR4/3褐色粘質土（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（有機物が多く黒っぽく見える）。
3 2.5YR5/2暗灰黄色シルトブロック
＋7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック。

99KSK43

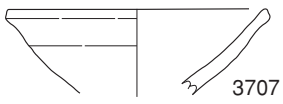


1 10YR3/3暗褐色粘質土（炭化物を少々含む）。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック、
炭化物を少量含む）。

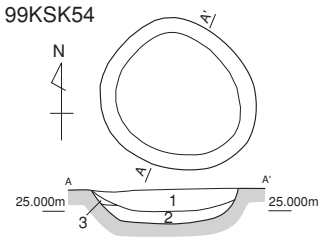
99KSK48



1 7.5YR3/4褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト
ブロックを含む）。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物を少量含む）。

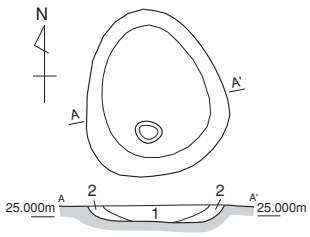


99KSK54



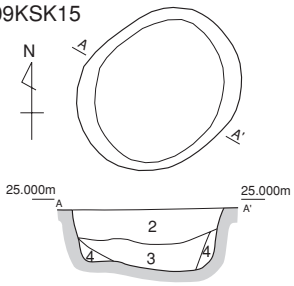
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロックを含む）。
3 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック
＋7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック。

99KSK23



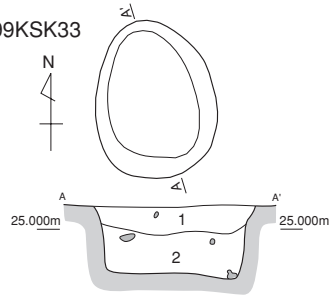
1 10YR5/灰黄褐色粘質土ブロック
＋7.5YR3/3暗褐色粘質土ブロック
（地山ブロックを少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質土ブロック
＋7.5YR4/6褐色粘質シルト（地山）ブロック。

99KSK15



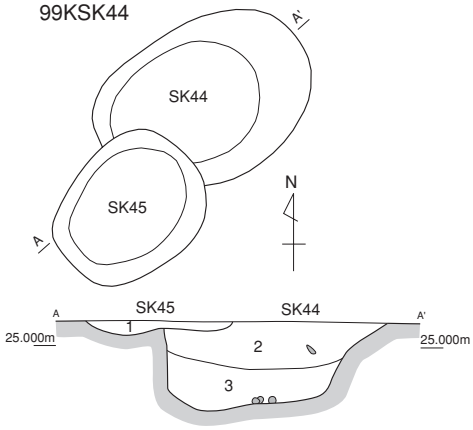
1 2.5YR5/3黄褐色砂質シルト。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質土。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質土ブロック
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。

99KSK33



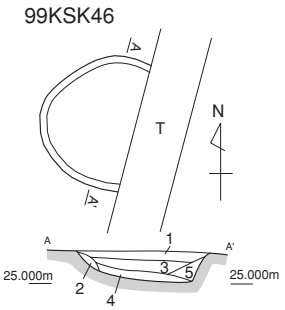
1 10YR4/4褐色粘質シルト
（炭化物を少量含む）。
2 10YR4/6褐色粘質シルト
（礫をわずかに含む）。

99KSK44



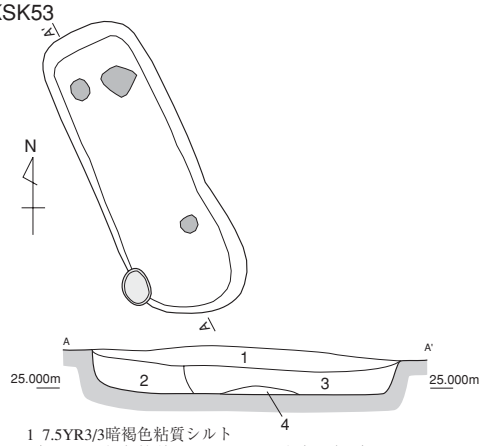
1 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト
（7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック砂を少量含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック炭化物を含む）。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック
（4.5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック）。

99KSK46



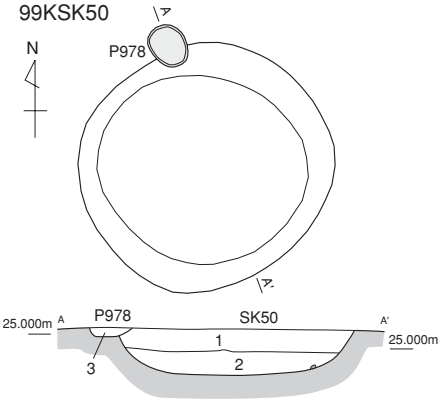
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山の崩落か）。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルト
（5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック炭化物を含む）。
4 10YR3/3暗褐色粘質土
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック炭化物を含む）。
5 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロックを少量含む）。

99KSK53



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少々含む）。
2 7.5YR3/3褐色粘質シルトブロック
＋7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
3 10YR3/2黒褐色粘質土ブロック
（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
4 7.5YR4/6褐色粘質シルト（地山か？）。

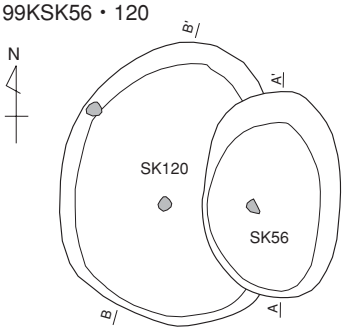
99KSK50

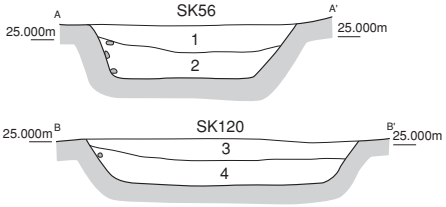


1 10YR3/4褐色粘質シルトブロック
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
2 10YR3/3褐色粘質シルト。
3 7.5YR4/3褐色軟シルト。



99KSK56・120

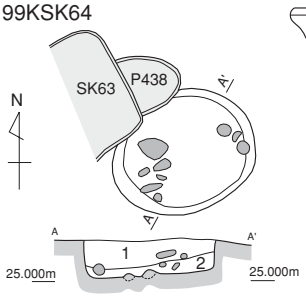


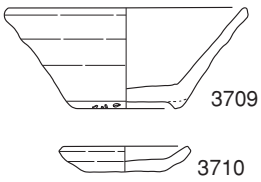


1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
3 10YR3/4暗褐色粘質土（有機分の沈着あり）。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。

第483図　土坑墓（13）（遺構図1:50、実測図1:4）

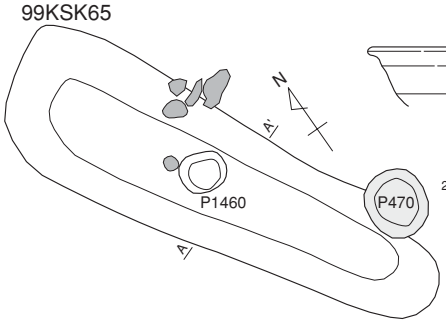
99KSK64

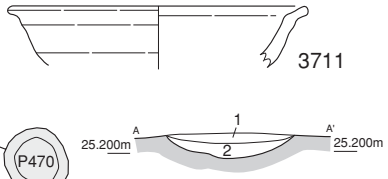




1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト
ブロックを含む）。

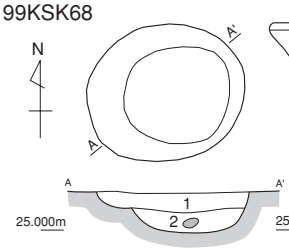
99KSK65

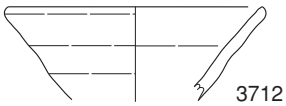




1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
2 7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト
（炭化物を少量含む）。

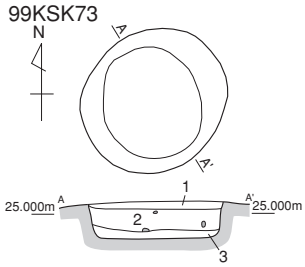
99KSK68





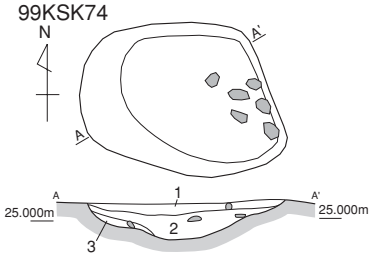
1 10YR3/3暗褐色粘質土
（炭化物を少量含む）。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルト
ブロックを含む）。

99KSK73



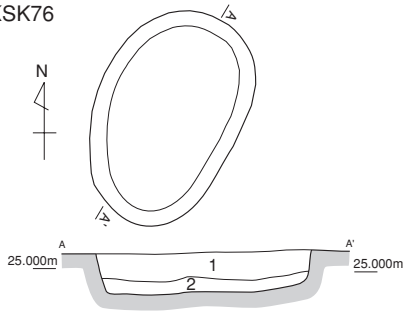
1 10YR4/2灰黄褐色シルト（砂を含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（砂を含みしまり弱い）。

99KSK74



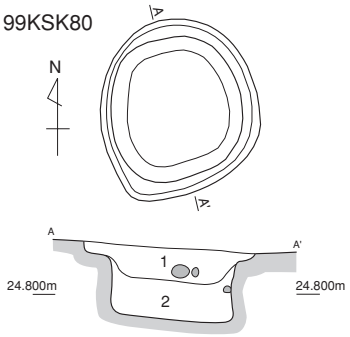
1 7.5YR4/2にぶい褐色粘質土
（砂を多く含む）。
2 7.5YR4/2にぶい褐色粘質土
（有機分が沈着し黒っぽく見える）。
3 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト。

99KSK76



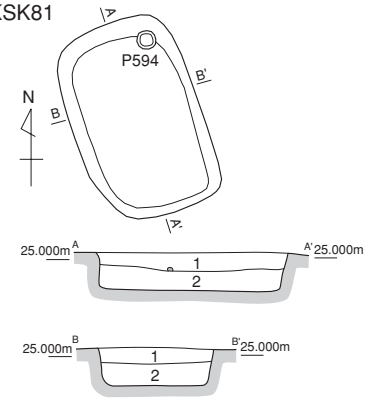
1 7.5YR4/3褐色粘質シルト
（鉄分の沈着あり）。
2 7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト
（ところどころに有機物の沈着あり）。

99KSK80



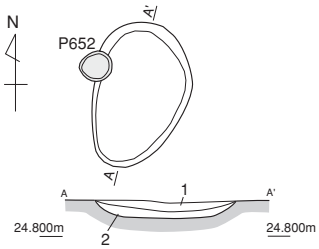
1 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物、小礫を含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物、小礫を含む）。

99KSK81



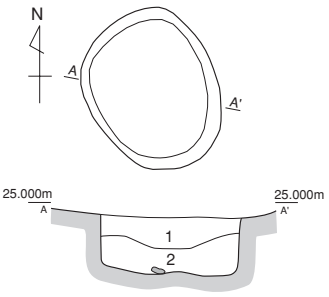
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
（有機分が沈着し、黒っぽいところがある）。
2 7.5YR4/3褐色粘質シルト（有機分多し）。

99KSK102



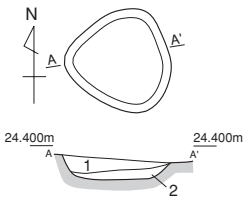
1 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 10YR3/2黒褐色粘質シルトブロック
＋7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック。

99KSK105



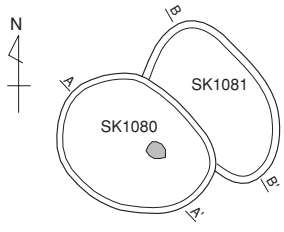
1 10YR4/2灰黄褐色粘質土（炭化物含む）。
2 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）。

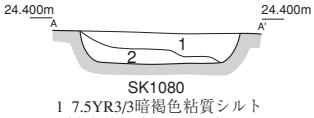
99KSK1012



1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。

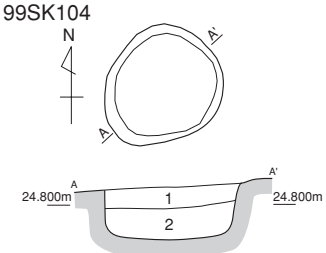
99KSK1080・1081





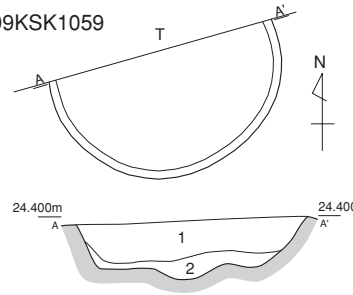
SK1080
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR4/3褐色粘質シルト
＋2.5YR暗褐色粘質シルト
（炭化物を微量に含む）。

99SK104



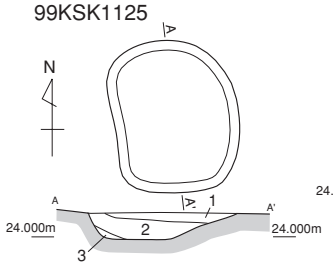
1 10YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物、小礫を少量含む）。
2 10YR3/2黒褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトを含む）。

99KSK1059

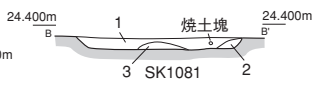


1 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 1＋7.5YR4/4褐色粘質シルト
（斑土ではないがブロック状に多く含まれる）。

99KSK1125



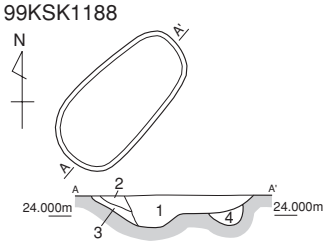
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト。
3 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト
＋7.5YR4/4褐色粘質シルト。



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（焼土塊を含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト
＋ベースブロック（微量）。
3 2に同じだがベースブロックは2より多い。

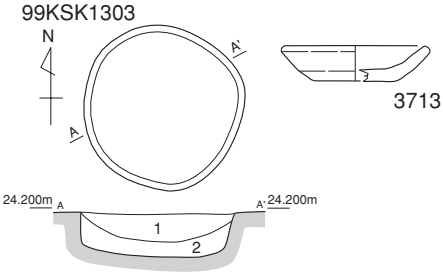
第484図　土坑墓(14)（遺構図1:50、実測図1:4）

99KSK1188



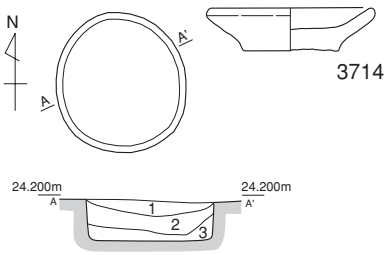
1 10YR4/1褐灰色粘質（炭化物を微量に含む）
2 7.5YR3/2暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）
3 7.5YR4/4暗褐色粘質シルト
（7.5YR2/3褐色粘質シルトを少量含む）
4 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（別ピット有り）

99KSK1303



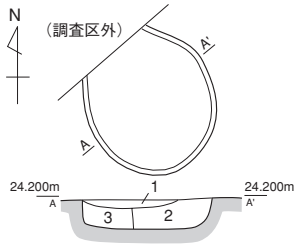
1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（炭化物と焼土片を微量に含む）。

99KSK1306



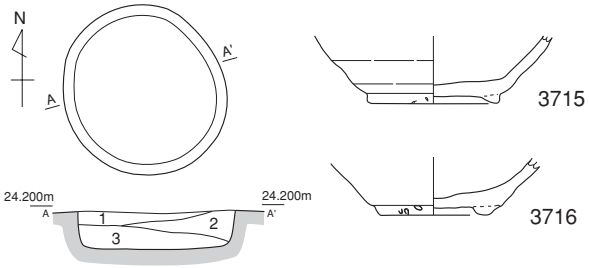
1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 7.5YR2/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）。
3 10YR3/2黒褐色粘質シルト
（7.5YR4/4 褐色粘質シルトブロックを含む）。
※3層は見た目には青みがかって見える。

99KSK1312



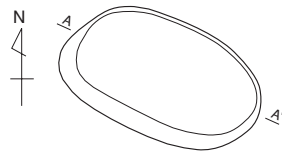
1 7.5YR2/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
2 7.5YR4/2褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルトと
7.5YR3/2暗褐色粘質シルト斑土。
※2と3の境界はほぼ明瞭に垂直に切れる。

99KSK1333



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
2 7.5YR3/2暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。
3 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（7.5YR4/4 褐色粘質シルトブロックも含む）。

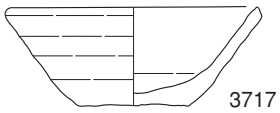
99KSK1530





1 7.5YR2/3暗褐色粘質シルト
（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量含む）。
2 7.5YR4/2褐色粘質シルト
（ベースの掘りかえしの土と思われる）。

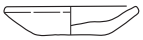
99KSK63



99KSK70



99KSK109



第485図　土坑墓（15）（遺構図1:50、実測図1:4）

調査区	遺構№	長　軸	短　軸	深　さ	埋　　土	グリッド	長／短	分類	時　期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
98D	SK02	214	140	56	7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/4暗褐色粘質シルトの斑土状堆積	Ⅷ12f	1.5	B	13後半		1	3	8					6	18
98D	SK03	180	82	28	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	Ⅷ12f	2.2	D	不明									1	1
98D	SK05	134	88	20	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ12h	1.5	D	13後半			10	2						12
98D	SK06	105	96	25	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ12h	1.1	A	13後半		1	1	1	1				2	6
98D	SK07	126	80	26	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ13h	1.6	D	不明									7	7
98D	SK09	174	102	10	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ12g	1.7	D	13前半			3						6	9
98D	SK12	90	79	13	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ13f	1.1	A	不明									8	8
98D	SK14	86	82	30	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13j	1.0	A	不明									2	2
98D	SK16	78	70	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13j	1.1	A	13後半				1					1	2
98D	SK20	96	88	32	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ14e	1.1	A	13後半			2	2					3	7
98D	SK21	126	79	43	10YR2/2暗褐色粘質シルト＋炭化物	Ⅷ14e	1.6	B	不明									1	1
98D	SK22	114	102	40	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ14f	1.1	A	13後半			5	1					4	10
98D	SK24	166	160	41	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ14g	1.0	A	13後半		3	17	26					39	85
98D	SK25-1	(110)	97	32	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ14h	(1.1)	(A)	13後半			5	5					22	32
98D	SK25-2	82	74	34	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ14h	1.1	A	不明										
98D	SK35	74	50	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13j	1.5	B	不明									5	5
98D	SK36	87	80	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13k	1.1	A	不明										
98D	SK37	90	82	29	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13k	1.1	A	13後半			1	2					7	10
98D	SK38	72	67	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13k	1.1	A	不明									3	3
98D	SK39	70	60	45	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ13k	1.2	A	13後半				2					8	10
98D	SK40	97	(72)	18	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ13k	(1.3)	A	不明									2	2
98D	SK41	73	69	8	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ13k	1.1	A	不明										
98D	SK51	108	102	44	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15e	1.1	A	不明									1	1
98D	SK52	96	92	36	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15e	1.0	A	13後半			1	1					2	4
98D	SK54	30	29	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15f	1.0	B	不明										
98D	SK55	138	125	22	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15f	1.1	A	不明										
98D	SK56	153	90	17	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15f	1.7	B	13後半			12	2					28	42
98D	SK57	110	84	14	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15f	1.3	B	不明										
98D	SK61	78	78	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ16f	1.0	A	13後半			7	1					12	20
98D	SK62	126	112	46	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ16g	1.1	A	13後半			1	1					19	21
98D	SK63	98	91	16	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15g	1.1	A	13後半			1	2					10	13
98D	SK64	138	112	50	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	Ⅷ16g	1.2	B	13後半	1		7	21					52	81
98D	SK65	104	94	32	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ16g	1.1	A	13後半				7	1				19	27
98D	SK68	146	118	45	10YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（炭化物含む）→斑土状の堆積	Ⅷ17d	1.2	A	13後半			2	5					24	31
98D	SK75	106	102	47	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）＋7.5YR4/6褐色シルトブロック	Ⅷ18f	1.0	A	14前半			3	1		2			16	22
98D	SK79	138	117	52	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）	Ⅷ18e	1.2	A	13後半		3	9	6					48	66
98D	SK90	100	98	40	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15i	1.0	A	13後半			2	6					1	9
98D	SK91	122	80	35	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15i	1.5	D	13後半			1	1					8	10
98D	SK92	146	126	39	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR5/4にぶい褐色シルト（斑土状を呈する）（微量に炭化物を含む）	Ⅷ15i	1.2	A	不明									13	13
98D	SK94	104	90	21	10YR2/2暗褐色粘質シルト	Ⅷ15i	1.2	A	13前半		1	1						2	4
98D	SK97	91	80	42	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ15j	1.1	A	13前半			5						6	11
98D	SK98	126	110	58	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15j	1.1	A	14前半						1			3	4
98D	SK99	97	95	54	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ15j	1.0	A	13後半		1		4					11	16
98D	SK100	(70)	83	17	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ15j	(0.8)	(B)	不明										
98D	SK102	110	60	36	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック	Ⅷ16h	1.8	B	13後半		1	1	1	1				1	5
98D	SK103	81	79	33	10YR2/2暗褐色粘質シルト	Ⅷ16h	1.0	A	13後半			1	1						2
98D	SK104	80	70	32	10YR2/2暗褐色粘質シルト	Ⅷ16h	1.1	A	13前半			1						2	3
98D	SK107	152	142	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）	Ⅷ16i	1.1	A	13後半			2	3					14	19
98D	SK108	78	78	20	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ16j	1.0	A	不明									2	2
98D	SK109	90	84	18	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物	Ⅷ16j	1.1	A	不明										
98D	SK113	110	100	27	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック＋炭化物	Ⅷ16i	1.1	A	不明									1	1
98D	SK116	115	100	27	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物	Ⅷ16j	1.2	A	13後半				4					1	5
98D	SK118	85	76	32	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック	Ⅷ16k	1.1	A	不明										
98D	SK119	76	70	11	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ16k	1.1	A	不明										
98D	SK120	74	72	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ16l	1.0	A	不明									1	1

第14表　土坑墓一覧１

目次
終了

調査区	遺構No.	長　軸	短　軸	深　さ	埋　　土	グリッド	長／短	分類	時　期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
98D	SK121	162	156	53	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック	Ⅷ16l	1.0	A	13後半	1		1	1	1				10	14
98D	SK124	112	102	6	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ16l	1.1	A	不明										
98D	SK125	90	90	34	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ16l	1.0	A	不明										
98D	SK160	130	120	25	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物＋地山ブロック	Ⅷ20d	1.1	A	不明									3	3
98D	SK161	126	78	21	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物	Ⅷ20d	1.6	D	不明									2	2
98D	SK174	81	68	39	10YR4/4褐色粘質シルト	Ⅸ11e	1.2	A	不明					2				4	6
98D	SK175	118	(86)	20	10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	Ⅸ11e	(1.4)	B	不明									4	4
98D	SK178	81	80	24	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト＋7.5YR3/4暗褐色シルト（斑土状で炭化物を含む）	Ⅸ11e	1.0	C	13前半			2						1	3
98D	SK190	166	92	8	10YR2/1黒色粘質シルト（炭化物を多量に含む）	Ⅸ12e	1.8	D	不明										
98D	SK191	172	130	28	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	Ⅸ13e	1.3	B	13後半			3	1					7	11
98D	SK192	90	76	33	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅸ14t	1.2	A	13前半		2	2						5	9
98D	SK199	146	140	46	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（少量の炭化物と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）	Ⅸ13d	1.0	A	13後半			1	3					4	8
98D	SK201	106	88	11	10YR2/2暗褐色粘質シルト＋地山ブロック	Ⅸ13e	1.2	A	不明										
98D	SK202	93	89	9	10YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）	Ⅸ13e	1.0	A	13後半			2	2					5	9
98D	SK204	115	98	32	7.5YR3/4暗褐色シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（炭化物なしの斑土状）	Ⅸ14a	1.2	A	不明									2	2
98D	SK205	84	77	27	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ14a	1.1	A	13前半			2						2	4
98D	SK206	82	80	42	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ14a	1.0	A	不明										
98D	SK209	96	88	49	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ14b	1.1	A	不明									3	3
98D	SK213	95	52	28	10YR3/3暗褐色シルト（径1～2mmの砂粒と少量の炭化物を含む）	Ⅸ14b	1.8	B	13前半			2						3	5
98D	SK214	82	78	27	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ14b	1.1	A	13前半			1						4	5
98D	SK219	92	84	24	10YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/5褐色粘質シルトの斑土（炭化物を微量に含む）	Ⅸ14d	1.1	A	12後半		1								1
98D	SK220	89	81	37	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物＋地山ブロック	Ⅸ14d	1.1	A	不明										
98D	SK221	77	75	22	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（少量炭化物を含む）	Ⅸ14d	1.0	A	不明									1	1
98D	SK222	93	88	12	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ14e	1.1	A	不明									3	3
98D	SK230	140	108	58	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（+7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）	Ⅷ20i	1.3	B	不明										
98D	SK241	134	90	42	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ11g	1.5	D	13前半			2		1				11	14
98D	SK245	88	68	22	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ12g	1.3	B	不明									1	1
98D	SK246	90	82	15	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ12g	1.1	A	不明									1	1
98D	SK251	190	152	37	7.5YR4/1褐灰色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック	Ⅸ13f	1.3	B	13後半			1	1	1				9	12
98D	SK254	94	92	22	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（少量の炭化物と径1～2mmの砂粒含む）	Ⅸ14t	1.0	A	不明									2	2
98D	SK257	116	104	39	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）	Ⅸ15c	1.1	A	13前半			2						8	10
98D	SK258	132	104	44	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルト（斑土状で炭化物を少量含む）	Ⅸ15b	1.3	B	13後半			2	1					6	9
98D	SK261	452	120	35	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ15a	3.8	D	13後半			5	1					23	29
98D	SK262	112	109	31	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ15a	1.0	A	13前半			2						6	8
98D	SK265	85	75	11	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ16a	1.1	A	不明										
98D	SK267	86	80	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ15a	1.1	A	不明									2	2
98D	SK268	107	106	48	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ15b	1.0	C	不明									1	1
98D	SK269	125	118	31	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ15b	1.1	A	不明									1	1
98D	SK270	136	121	44	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅸ15b	1.1	A	13後半		3	3	5					9	20
98D	SK271	158	(92)	44	10YR3/3暗褐色シルト	Ⅸ15b	(1.7)	B	不明									2	2
98D	SK272	138	107	53	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微妙に含む）	Ⅸ15b	1.3	B	13前半			5						7	12
98D	SK273	140	136	57	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを微妙に含む）	Ⅸ15c	1.0	C	13後半		1	4	4					17	26
98D	SK274	90	82	25	10YR3/2黒褐色粘質シルト（微量に7.5YR4/3褐色シルトブロックと炭化物を含む）	Ⅸ15c	1.1	A	不明									1	1
98D	SK275	104	84	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（微量に7.5YR4/3褐色シルトブロックと炭化物を含む）	Ⅸ15c	1.2	A	13前半			1						7	8
98D	SK276	109	80	30	10YR4/1褐灰色粘質シルト（少量の10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブッロクを含む）	Ⅸ15c	1.4	B	13前半			4		1				11	16
98D	SK278	194	86	25	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（微量に7.5YR4/4褐色シルトブロックと焼土塊を含み、少量の炭化物も混入する）	Ⅸ15d	2.3	D	13後半		2	4	2	1				21	30
98D	SK279	135	128	43	10YR4/2灰黄褐色粘質土+7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（斑土に近い）	Ⅸ15d	1.1	A	不明									2	2
98D	SK281	136	120	31	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色シルトブロック（少量）（炭化物を微量に含む）	Ⅸ15d	1.1	A	13前半		1	3						9	13
98D	SK284	88	68	22	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック＋炭化物	Ⅸ15d	1.3	B	13前半			2							2
98D	SK290	105	104	22	10YR3/3暗褐色粘質シルト（粘質強く炭化物を少量含む）	Ⅸ16b	1.0	A	13前半	1		5						4	10
98D	SK291	132	90	17	10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトの斑土	Ⅸ16b	1.5	D	不明									1	1
98D	SK293	152	104	23	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（少量）	Ⅸ16b	1.5	B	13前半		1	2						1	4
98D	SK294	106	86	34	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅸ16b	1.2	C	13後半				2					5	7
98D	SK295北	105	101	26	7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土	Ⅸ16c	1.0	A	13後半			1	1					31	33
98D	SK295南	110	(85)	27	7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土	Ⅸ16c		A	13後半										

第15表　土坑墓一覧２

目次
終了

調査区	遺構No.	長　軸	短　軸	深　さ	埋　　土	グリッド	長／短	分類	時　期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
98D	SK296	118	118	42	10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物が微量混入）	Ⅸ16c	1.0	A	13後半			7	2					13	22
98D	SK297	200	110	19	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトの斑土（微量に炭化物含む）	Ⅸ16c	1.8	B	13後半		1	4	1	2				6	14
98D	SK298	100	95	36	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（微量に炭化物を含む。7.5YR4/3褐色シルトブロックも微量混入）	Ⅸ16d	1.1	A	13後半			4	1					10	15
98D	SK299	84	84	7	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ16d	1.0	A	13後半			1	1					7	9
98D	SK301	69	65	14	10YR2/2暗褐色粘質シルト＋地山ブロック＋炭化物	Ⅸ16e	1.1	A	不明										
98D	SK302	88	80	28	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック＋炭化物	Ⅸ16e	1.1	A	不明										
98D	SK307	114	98	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト7.5YR4/4褐色シルトブロックを含む）	Ⅸ16g	1.2	A	13後半				4					1	5
98D	SK310	125	124	42	10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト＋7.5YR4/3褐色シルトブロック（極微量）	Ⅸ17d	1.0	A	13後半		3	5	3					27	38
98D	SK317	93	78	22	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト＋7.5YR4/3褐色粘質シルト（斑土状）	Ⅸ15p	1.2	A	不明									2	2
98D	SK318	95	80	36	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物を微量に含み、7.5YR4/4褐色シルトﾌﾞﾛｯｸを極少量含む）	Ⅸ15q	1.2	A	13後半		1	1	4					5	11
98D	SK319	120	94	28	7.5YR3/4暗褐色シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（炭化物を微量に含む）	Ⅸ15q	1.3	B	13後半		1	8	3					18	30
98D	SK321	122	118	35	7.5YR3/4暗褐色シルト	Ⅸ15r	1.0	A	14前半			3	6		1			13	23
98D	SK324	96	76	14	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物	Ⅸ15s	1.3	B	不明									1	1
98D	SK326	142	112	37	10YR4/1褐灰色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色粘質シルト（斑土状に埋まる）	Ⅸ16r	1.3	B	13後半	1		3	2					6	12
98D	SK328	151	137	48	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物含む）	Ⅸ16t	1.1	C	13後半			8	3	2				2	15
98D	SK340	104	72	30	10YR3/3暗褐色シルト	Ⅸ17r	1.4	B	13前半			2						3	5
98D	SK341	100	98	26	10YR3/1黒褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）	Ⅸ17t	1.0	A	13前半			1							1
98D	SK342	87	87	16	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ17t	1.0	A	13前半		1	1							2
98D	SK349	216	120	13	10YR2/2暗褐色粘質シルト	Ⅸ18n	1.8	D	13後半		4	6	6	2				32	50
98D	SK351	73	66	25	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	Ⅸ18n	1.1	A	13前半			2						6	8
98D	SK355	160	120	27	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ18o	1.3	D	不明									1	1
98D	SK364	154	148	27	10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	Ⅸ19m	1.0	A	14前半			14	5		1			9	29
98D	SK367	102	98	24	10YR3/2黒褐色粘質シルト＋7.5YR4/3褐色シルトブロック（炭化物なし）	Ⅸ19q	1.0	A	不明									1	1
98D	SK373	132	132	20	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトの斑土	Ⅸ10m	1.0	A	不明									2	2
98D	SK374	140	139	20	7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色シルトと7.5YR4/6褐色シルトの斑土	Ⅸ10m	1.0	A	12後半	1	1							6	8
98D	SK378	110	(40)	38	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトブロック（微量に炭化物を含む）	Ⅸ11q		(B)	不明									2	2
98D	SK386	100	(75)	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土	Ⅸ19a		(C)	13前半		1	2						2	5
98D	SK388	93	83	17	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルト（微量に炭化物を含む）	Ⅸ19a	1.1	A	13前半		3	2						2	7
98D	SK389	82	66	20	10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトの斑土	Ⅸ19a	1.2	A	不明									2	2
98D	SK390	93	92	23	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトの斑土（ﾌﾞﾛｯｸ少量。炭化物を微量に含む）	Ⅸ19a	1.0	A	不明									3	3
98D	SK391	(87)	72	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土	Ⅸ19b	(1.2)	A	13前半			1						4	5
98D	SK392	138	134	30	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土（炭化物を少量含む）	Ⅸ19b	1.0	A	13前半		2	4						17	23
98D	SK399	125	103	34	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルト（微量に炭化物を含む）	Ⅸ19t	1.2	B	不明										
98D	SK401	79	75	25	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（微量に7.5YR4/4褐色シルトブロックと炭化物が混入する）	Ⅸ10b	1.1	A	不明										
98D	SK406	100	98	20	7.5YR3/1黒褐色シルト（炭化物を微量に含む）	Ⅸ12s	1.0	A	13前半			2						9	11
98D	SK409	166	108	19	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ12b	1.5	D	不明										
98D	SK410	128	126	18	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト＋7.5YR4/6褐色シルトの斑土	Ⅸ13s	1.0	A	不明									6	6
98D	SK417	80	68	19	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ13k	1.2	A	不明									1	1
98D	SK422	102	82	40	5YR3/3暗赤褐色粘質シルト＋5YR4/4赤褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）	Ⅷ16h	1.2	B	不明										
98D	SK432	230	104	30	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ17t	2.2	D	13後半			8	2					6	16
98D	SK435	108	106	44	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ14h	1.0	A	不明										
98D	SK436	(110)	120	42	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	Ⅷ15h	(0.9)	A	13後半			1	2					7	10
98D	SK438	(103)	(60)	41	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ16g		(A)	13後半			2	3					6	11
98D	SK446	105	80	24	7.5YR3/1黒褐色シルト（7.5YR4/6褐色シルト炭化物を微量に含む）	Ⅸ10a	1.3	B	不明										
98D	SK447	102	92	27	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅸ14b	1.1	A	13前半			2							2
98D	SK448	98	97	37	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅸ15a	1.0	A	不明										
98D	SK449	123	116	51	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋炭化物＋地山ブロック	Ⅸ15b	1.1	A	14前半				2		1				3
98D	SK450	110	98	29	10YR2/2暗褐色粘質シルト＋地山ブロック	Ⅸ17t	1.1	A	不明										
98D	SK451	111	104	38	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色シルトの斑土（微量に炭化物を含む）	Ⅸ10t	1.1	A	不明										
98D	SK452	100	76	26	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅸ10a	1.3	B	不明									1	1
98D	SK467	85	82	19	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ15j	1.0	A	不明									1	1
98D	SK468	196	188	20	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ14d	1.0	C	不明									1	1
98D	SK470	184	166	65	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（拳大の円礫及び炭化物を含む）	Ⅸ12h	1.1	A	13後半			16	22	1				95	134
98D	SK472	110	82	12	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ17i	1.3	B	13後半			4	6					6	16
98D	SK473	(90)	(86)	13	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	Ⅷ18f	1.0	A	13前半			2							2
98D	SK512	95	73	25	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト＋地山ブロック	Ⅸ17a	1.3	B	不明										

第16表　土坑墓一覧 3

目次
終了

調査区	遺構No.	長　軸	短　軸	深　さ	埋　土	グリッド	長／短	分類	時　期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
98D	SK526	120	100	27	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋地山ブロック	ⅦI15j	1.2	A	不明										
98D	SK560	81	58	21	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(炭化物を含む)	ⅦI18e	1.4		不明										
99A	P408	77	70	14	7.5YR3/1黒褐色シルト（混入物なし）	IG12g	1.1	A	不明									2	2
99A	SK28	111	(72)	25	10YR3/2黒褐色シルトに5GY7/1地山粒（5mm）入る	IG13e	(1.5)	D	13後半			2	4					12	18
99A	SK51	80	78	22	7.5YR4/2灰褐色シルトと5Y6/1灰色シルト混じる（炭化物若干、地山土なし）	IG11f	1.0	A	不明									4	4
99A	SK52	80	68	14	5Y3/1灰褐色シルト（砂っぽい地山土、炭化物なし）	IG11f	1.2	A	不明									4	4
99A	SK53	78	70	21	7.5YR3/2黒褐色シルト（焼土粒、炭化物若干。地山土なし）	IG11f	1.1	A	不明									2	2
99A	SK58	91	70	5	7.5Y6/2灰オリーブ色シルト（地山土主体に褐灰色シルト若干）	IG10e	1.3	B	不明										
99A	SK62	80	68	26	7.5YR2/1黒色シルト　地山粒（1cm大）入る	IG10g	1.2	A	不明									8	8
99A	SK66	95	85	20	5Y4/1灰色シルト～極細粒砂（やや砂っぽい。地山土ない）	IG10g	1.1	A	不明									6	6
99A	SK77	115	98	34	7.5YR3/1黒褐色シルト（炭化物、土器片入る。地山土なし）	IG8i	1.2	A	不明									4	4
99A	SK89	56	53	22	10YR4/1褐灰色シルトに地山ブロック若干（黒色土若干入る、礫なし）	IG4b	1.1	A	不明										
99A	SK2007	(180)	(117)	34	10YR3/1黒褐色シルトに地山粒（1.5cm以下）混入（炭化物若干）	IG9e	1.5	D	13前半			4						4	8
99A	SK5001	80	71	17	7.5YR4/1褐灰色シルト	IG13f	1.1	A	不明									2	2
99A	SK5002	125	98	19	7.5YR3/1黒褐色シルト（混入物なし）	IG14f	1.3	B	13前半			2						6	8
99B	SK03	89	86	19	10YR3/2黒褐色シルト主体。地山粒若干入る。炭化物粒わずかに入る。礫なし。	XG17s	1.0	A	不明									1	1
99B	SK04	131	108	12	10YR3/2黒褐色シルト主体。地山粒若干入る。炭化物粒わずかに入る。礫なし。	XG17s	1.2	A	不明									2	2
99B	SK08	96	94	11	5Y3/2オリーブ黒色シルト　地山ブロック（5cm大）入る。礫、炭化物なし。	XH19a	1.0	A	不明										
99B	SK51	117	114	17	5BG3/1暗青灰色粘質強シルト（地山ブロック若干、炭化物入り）	XG19s	1.0	A	不明									1	1
99B	SK75	89	80	36	地山主体に5Y4/1灰色シルト若干入る	IG1s	1.1	C	13後半				1						1
99B	SK77	96	70	21	10YR4/1褐灰色シルト	IG2r	1.4	B	13前半			1							1
99B	SK83	147	86	33	10YR4/1褐灰色シルトと5Y4/1灰色シルト混合に地山粒若干入る。炭化物入る。	IG1q	1.7	B	不明									4	4
99B	SK84	154	145	43	10YR3/2黒褐色シルト　地山土なし。	IG1p	1.1	A	13後半		1		2					9	12
99B	SK87	110	75	20	10YR3/3褐色シルト主体に5Y4/1灰色　混入	XG20p	1.5	B	不明										
99B	SK158	94	70	20	10YR3/2黒褐色シルト主体。地山粒若干入る。炭化物粒わずかに入る。礫なし。	IG8k	1.3	D	不明									3	3
99D	P160	88	87	7	7.5YR4/1褐灰色シルト	ⅨH14r	1.0	A	不明									1	1
99D	SK03	116	(45)	20	7.5YR5/1褐灰色粘土と5YR5/8明赤褐色粘土の斑土	ⅨH9m		(A)	13前半			1							1
99D	SK21	210	92	19	7.5YR3/1黒褐色シルト	ⅨH13r	2.3	D	不明									3	3
99D	SK22	124	(80)	32	10YR2/1黒色シルトと10YR5/2灰黄褐色粘質シルトの斑土（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）	ⅨH13r	(1.6)	(B)	不明									1	1
99D	SK24	110	(80)	5	5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルト	ⅨH14q	(1.4)	(A)	不明										
99E	SK89	127	115	15	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅦH16f	1.1	A	13後半			5	7					17	29
99E	SK169	122	92	34	7.5YR3/2黒褐色砂質シルトに7.5YR4/4褐色極細粒砂を含む（ブロック状に炭化物を含む）	ⅦH15g	1.3	C	13後半			2	3					8	13
99E	SK184	88	76	17	10YR3/2黒褐色粘質シルトに7.5YR5/8明褐色細粒砂を含む	ⅦH16g	1.2	A	13後半		1	3	12					11	27
99E	SK187	127	118	10	5YR3/2暗赤褐色粘質シルトに5YR4/8赤褐色土斑点混入	ⅦH16g	1.1	A	13後半			1	1					3	5
99E	SK298	85	80	8	5YR2/2黒褐色粘質シルトに5YR4/6赤褐色土斑点状に混入	ⅦH14i		A	不明										
99E	SK299	110	98	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトに7.5YR5/8明褐色極細粒砂を含む（微量の炭化物を含む）	ⅦH14i	1.1	A	14前半					1	1				2
99E	SK301	88	78	31	7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに7.5YR6/8極細粒砂を含む（少量の炭化物を含む）	ⅦH14i	1.1	A	不明										
99E	SK342	100	85	30	7.5YR2/3極暗褐色粘質シルトに7.5YR4/4褐色粘質シルトを含む	ⅦH17i	1.2	A	13前半			2						4	6
99E	SK343	77	68	18	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト	ⅦH17i	1.1	A	不明									1	1
99E	SK344	92	82	25	7.5YR2/3極暗褐色粘質シルト	ⅦH17i	1.1	A	13後半			1	1						2
99E	SK357	92	88	19	7.5YR4/6褐色粘質シルト	ⅦH12j	1.0	A	不明										
99E	SK374	96	86	7	5YR3/4暗赤褐色粘質シルト（微量の炭化物を含む）	ⅦH13j	1.1	A	不明										
99E	SK409	63	57	10	2.5YR3/2暗赤褐色粘質シルト	ⅦH12k	1.1	A	13後半			1	2						3
99E	SK582	108	98	24	5YR3/2粘質シルト	ⅦI10e	1.1	A	13前半			1							1
99E	SK601	98	89	22	5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト（微量の炭化物を含む）	ⅦI11d	1.1	A	不明									3	3
99E	SK702	108	94	8	7.5YR4/3褐色粘質シルト（微量の炭化物を含む）	ⅦI11e	1.1	A	不明									1	1
99E	SK719	100	97	7	5YR3/3暗赤褐色粘質シルト	ⅦH12q	1.0	A	不明										
99E	SK720	93	90	10	7.5YR4/4褐色粘質シルト	ⅦH12q	1.0	A	不明										
99E	SK721	100	100	7	7.5YR4/4褐色粘質シルト	ⅦH12q	1.0	A	不明										
99E	SK722	90	(65)	15	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅦH13q	(1.4)	(B)	不明										
99E	SK723	103	85	6	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅦH13q	1.2	A	不明										
99E	SK724	84	78	13	7.5YR4/4褐色粘質シルト（微量の炭化物を含む）	ⅦH13q	1.1	A	不明										

第17表　土坑墓一覧 4

目次
終了

調査区	遺構No.	長　軸	短　軸	深　さ	埋　　土	グリッド	長／短	分類	時　期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
99E	SK725	96	92	16	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（微量の炭化物を含む）	ⅧH13q	1.0	A	不明										
99F	SK112	170	76	20	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧH8h	2.2	D	14前半						1			3	4
99F	SK123	70	60	12	7.5YR4/4褐色粘質シルトに7.5YR4/6褐色粘質シルトを含む	ⅧH8g	1.2	A	13後半				2						2
99F	SK170	70	50	6	10YR4/4褐色粘質シルトに7.5YR4/6褐色粘質シルトと炭化物を含む	ⅧH9f	1.4	B	不明										
99F	SK176	62	58	8	10YR3/4暗褐色粘質シルトに7.5YR4/6褐色粘質シルトを含む	ⅧH8f	1.1	A	不明									1	1
99F	SK224	69	59	20	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	ⅧH10g	1.2	A	不明									2	2
99G	SK15	175	154	41	7.5YR4/6暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅧJ12d	1.1	A	13後半				6						6
99G	SK18	157	142	34	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧJ9c	1.1	A	13後半			3	15					22	41
99G	SK43	104	103	16	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを微量に含む）	ⅧJ12b	1.0	A	13前半			1							1
99G	SK53	81	76	17	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧJ7a	1.1	A	13後半			5	7					6	18
99G	SK58	(160)	100	18	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧJ8a	(1.6)	(B)	13後半			1	1					4	6
99G	SK68	198	188	60	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（しまり弱くブロック状にみえる）	ⅧJ11a	1.1	A	14前半			2	4		1			12	19
99G	SK85	206	202	49	10YR4/1褐灰色粘質シルト	ⅧI11t	1.0	A	13後半			2	4						6
99G	SK92	149	130	31	10YR4/4褐色粘質シルト	ⅧI15s	1.1	A	13後半				2	1					3
99G	SK125	89	74	14	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(2.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを微量に含む)	ⅧI17r	1.2	A	13前半			1							1
99G	SK133	120	115	43	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを少量含む)	ⅧI4m	1.0	A	13後半				1					10	11
99G	SK134	135	124	44	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト(7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む)	ⅧI4m	1.1	A	13後半				4					7	11
99G	SK137	130	110	40	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土状	ⅧI4l	1.2	A	不明									5	5
99G	SK142	130	122	60	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（斑土）+7.5YR4/3褐色粘質シルトﾌﾞﾛｯｸ（炭化物を微量に含む）	ⅧI6m	1.1	A	13後半			1	2					1	4
99G	SK165	101	89	18	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）	ⅧI16q	1.1	A	不明										
99G	SK166	102	97	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）	ⅧI16q	1.1	A	不明									1	1
99G	SK172	107	(40)	41	10YR3/2黒褐色粘質シルト	ⅧI16q	(2.7)	B	13前半			2							2
99G	SK175	78	70	19	10YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを微量に含む）	ⅧI17q	1.1	A	不明									1	1
99G	SK176	95	88	13	10YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）	ⅧI17q	1.1	A	13後半			3	1						4
99G	SK210	102	98	29	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧI10n	1.0	A	13後半				1						1
99G	SK219	207	188	53	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅧI15n	1.1	A	14前半				8	2	1		1		12
99G	SK227	112	94	30	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土	ⅧI11m	1.2	A	13前半			1						5	6
99G	SK228	97	91	34	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土状堆積	ⅧI12m	1.1	A	不明									1	1
99G	SK230	(204)	85	41	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを微量に含む）	ⅧI11m	(2.4)	(A)	不明										
99G	SK241	142	122	40	7.5YR4/2灰色粘質シルト（径1～2mmの砂粒と炭化物をやや多く含む）	ⅧI14m	1.2	A	13後半			1	2					8	11
99G	SK242	152	137	48	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト	ⅧI14m	1.1	A	13後半			2	6					20	28
99G	SK243	151	(120)	36	10YR3/3暗褐色粘質シルト	ⅧI14m	(1.3)	B	13後半				3	1				12	16
99G	SK247	90	82	29	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土状堆積	ⅧI10l	1.1	A	不明									4	4
99G	SK250	88	70	12	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧI11l	1.3	B	不明										
99G	SK252	(78)	48	21	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧI13l	(1.6)	(B)	不明										
99G	SK253	115	80	47	7.5YR4/3褐色粘質シルト（径1～2大の砂粒含み、粘質弱い）	ⅧI13l	1.4	B	不明										
99G	SK258	108	90	20	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/3褐色シルトブロックを微量に含む）	ⅧI11k	1.2	A	13後半				1					4	5
99G	SK259	172	145	79	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅧI11k	1.2	A	13後半			1	2					12	15
99G	SK261	81	63	14	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧI11k	1.3	B	不明										
99G	SK262	110	80	72	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	ⅧI11k	1.4	B	13後半				1					3	4
99G	SK266	92	86	38	5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルト+7.5YR4/1褐灰色粘質シルト（しまり弱く、共に細かいブロック状をなして堆積する）	ⅧI12j	1.1	C	13後半				1					3	4
99G	SK270	113	106	16	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト+7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック	ⅧI7j	1.1	A	不明										
99G	SK272	71	69	30	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト+7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック	ⅧI7j	1.0	A	13前半			1							1
99G	SK273	134	136	77	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト+5YR3/4暗赤褐色粘質シルト（斑土状）	ⅧI7i	1.0	A	13後半				1	1				4	6
99G	SK276	198	120	28	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅧI8j	1.7	A	13前半			1						3	4
99G	SK280	96	94	9	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅧI11j	1.0	A	不明										
99G	SK281	91	85	18	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅧI11j	1.1	A	不明										
99G	SK282	134	125	54	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）	ⅧI7i	1.1	A	13後半			4	4					20	28
99G	SK283	138	122	34	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧI7i	1.1	A	13後半			2	2					19	23
99G	SK284	220	180	44	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅧI7i	1.2	A	14前半			2	4		1			20	27
99G	SK292	190	156	51	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（粘質やや強くしまりなし）	ⅧI11j	1.2	A	13後半				3					15	18
99G	SK300	82	62	15	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅧI7t	1.3	B	13後半				4	2				1	7
99G	SK321	133	90	37	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）	ⅧJ12b	1.5	B	不明										
99G	SK322	156	66	40	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）+7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	ⅧJ12c	2.4	D	13後半			1	3						4

第18表　土坑墓一覧 5

目次
終了

調査区	遺構No.	長 軸	短 軸	深 さ	埋 土	グリッド	長／短	分類	時 期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
99G	SK324	113	101	29	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック	Ⅷ J12c	1.1	A	13後半			2	2					3	7
99G	SK335	115	107	44	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）	Ⅷ I6m	1.1	A	不明										
99G	SK336	122	112	59	7.5YR4/3褐色粘質シルト＋7.5YR3/3暗褐色粘質シルトの斑土	Ⅷ I7n	1.1	A	不明										
99G	SK353	140	128	45	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土	Ⅷ I12l	1.1	A	不明										
99G	SK357	144	142	36	7.5YR4/3褐色粘質シルト（しまりなく、バサバサした堆積）	Ⅷ I5m	1.0	A	不明										
99G	SK360	116	91	47	7.5YR4/3褐色粘質シルト	Ⅷ I10l	1.3	B	不明										
99G	SK363	73	62	23	7.5YR4/3褐色粘質シルト	Ⅷ I10l	1.2	A	不明										
99G	SK389	98	93	29	7.5YR4/3褐色粘質シルト（7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロックを含む）	Ⅷ I12l	1.1	A	不明										
99G	SK390	189	138	47	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅷ I12l	1.4	B	不明										
99G	SK403	(72)	80	29	7.5YR4/3褐色粘質シルト	Ⅷ I11 9j	(0.9)	（A）	不明										
99G	SK407	129	(129)	25	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅷ I12k	(1.0)	（A）	不明										
99G	SK410	95	82	36	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト	Ⅷ I13i	1.2	A	不明										
99G	SK413	198	67	62	7.5YR4/3褐色粘質シルト	Ⅷ I11 9j	3.0	B	不明										
99G	SK419	128	(70)	57	7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト	Ⅷ I11h	(1.8)	（A）	不明										
99G	SK445	119	80	22	10YR4/1褐灰色粘質シルト（10YR4/3黄褐色粘質シルトブロックを少量含む）	Ⅷ I19q	1.5	D	13前半			2						1	3
99H	SK05	125	125	10	7.5YR4/6褐色粘質シルト+7.5YR3/4暗褐色粘質シルトの斑土	Ⅷ I20t	1.0	A	不明									1	1
99H	SK06	123	115	9	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ I11 9t	1.1	A	14前半			1			1				2
99H	SK08	108	100	30	2.5YR4/4褐色粘質シルト（0.5cm以下の炭化物を若干含む）	Ⅷ I11 9r	1.1	A	不明									1	1
99H	SK09	112	87	17	7.5YR4/6褐色粘質シルト	Ⅷ I11 8r	1.3	B	不明										
99H	SK10	116	110	28	7.5YR4/4褐色粘質シルト	Ⅷ I11 8t	1.1	A	不明										
99I	SK37	110	96	45	10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）	Ⅷ J3b	1.1	A	13後半			1	4					8	13
99I	SK48	105	82	43	10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）	Ⅷ J4b	1.3	B	13後半		1	8	14	1			1	17	42
99I	SK70	145	98	13	10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）	Ⅷ J5b	1.5	D	13後半			3	1					1	5
99I	SK161	(105)	100	14	10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に7.5YR5/8明褐色粘質シルトと2.5Y5/3黄褐色中粒砂が混じる	Ⅷ J2c	(1.1)	A	13後半				1					1	2
99I	SK162	105	95	10	7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに7.5YR5/8明褐色粘質シルトに10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルトが混じる	Ⅷ J2c	1.1	A	14前半						2			3	5
99I	SK164	105	103	16	10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に7.5YR5/8明褐色粘質シルト	Ⅷ J1c	1.0	A	14後半			1	2			1	1	2	7
99I	SK265	130	70	61	7.5YR3/4褐色粘質シルト（炭化物含む）に5YR4/6赤褐色粘質シルトが混じる	Ⅷ J6d	1.9	D	不明									1	1
99I	SK540	95	93	22	10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）に7.5YR5/8明褐色粘質シルトが混じる	Ⅷ J1c	1.0	A	不明									4	4
99I	SK567	125	125	35	7.5YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に7.5YR4/6褐色粘質シルト	Ⅷ J20d	1.0	A	不明									10	10
99I	SK596	(150)	131	50	7.5YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を含む）に2.5Y5/4黄褐色粘質シルトが混じる	Ⅷ J19b	(1.1)	（A）	不明										
99I	SK735	170	160	48	10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物、礫を含む）に10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトが混じる	Ⅷ J2h	1.1	A	13前半			2						6	8
99I	SK757	116	92	35	10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）	Ⅷ J1g	1.3	B	不明										
99J	SK64	195	126	7	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト(5YR5/4にぶい赤褐色シルトブロック、炭化物を少量含む)	Ⅷ A17i	1.5	B	不明										
99J	SK65	124	100	36	7.5YR2/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ A17i	1.2	A	不明										
99J	SK87	163	93	33	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトとの斑土	Ⅷ A2b	1.8	D	13後半				5						5
99K	P435	(56)	71	7	10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）	Ⅷ A7g	(0.8)	（A）	不明										
99K	P504	(53)	82	19	7.5YR3/3暗褐色粘質土（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）	Ⅷ A8i	(0.6)	（A）	13後半				1					3	4
99K	P566	107	72	28	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（有機分が多く黒っぽく見える）	Ⅷ A11b	1.5	B	不明										
99K	SK15	116	96	34	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	Ⅷ A20i	1.2	A	不明										
99K	SK17	220	(81)	8	10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（7.5YR5/8明褐色粘質シルト斑状に混じる）	Ⅷ A1h	(2.7)	（A）	不明										
99K	SK23	112	95	9	10YR5/2灰黄褐色粘質土ブロック＋7.5YR3/3暗褐色土ブロック（地山ブロックを少量含む）	Ⅷ A2j	1.2	A	不明										
99K	SK33	107	81	25	10YR4/6褐色粘質シルト（礫をわずかに含む）	Ⅷ A3h	1.3	B	不明										
99K	SK35	112	102	12	10YR3/3暗褐色粘質土（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）	Ⅷ A3i	1.1	A	不明										
99K	SK40	82	78	11	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	Ⅷ A4h	1.1	A	不明									1	1
99K	SK41	109	101	13	10YR5/2灰褐色粘質土（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）	Ⅷ A4h	1.1	A	不明										
99K	SK43	128	108	24	10YR3/3暗褐色粘質土（炭化物を少量含む）	Ⅷ A4k	1.2	C	14前半						1			2	3
99K	SK44	145	107	30	10YR5/2灰褐色粘質シルト（7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック砂を少量含む）	Ⅷ A4j	1.4	B	不明									1	1
99K	SK45	105	84	8	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロックを含む）＋7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロックを含む	Ⅷ A4 j	1.3	D	不明										
99K	SK46	(64)	90	21	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	Ⅷ A5j	(0.7)	（A）	不明									3	3
99K	SK48	98	82	27	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロックを含む）	Ⅷ A5j	1.2	C	13後半				1					8	9
99K	SK50	168	158	32	10YR4/3暗褐色粘質シルトブロック＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック	Ⅷ A6c	1.1	A	13後半				1						1

第19表　土坑墓一覧 6

目次
終了

調査区	遺構No.	長　軸	短　軸	深　さ	埋　　土	グリッド	長／短	分類	時　期	12前半	12後半	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	不明	総計
99K	SK51	136	78	30	7.5YR4/3褐色粘質シルト	ⅧA6d	1.7	D	不明										
99K	SK53	206	72	26	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含む）	ⅧA6f	2.9	D	不明									1	1
99K	SK54	106	97	22	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧA6j	1.1	A	不明									12	12
99K	SK56	138	88	36	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト	ⅧA6j	1.6	B	不明									1	1
99K	SK59	122	60	8	10YR4/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック、炭化物を少量含む）	ⅧA7g	2.0	D	不明										
99K	SK60	(136)	87	16	10YR3/3暗褐色粘質土ブロック＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック	ⅧA7g	(1.6)	(B)	14前半						1			8	9
99K	SK61	77	72	6	10YR4/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック、炭化物を少量含む）	ⅧA7g	1.1	C	不明									1	1
99K	SK62	74	70	18	10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧA7h	1.1	A	不明										
99K	SK63	99	81	11	10YR3/3暗褐色粘質シルト	ⅧA7h	1.2	C	14前半				1		1			2	4
99K	SK64	99	79	16	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧA7h	1.3	B	13後半				3					3	6
99K	SK65	316	84	16	7.5YR5/3にぶい褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧA8e	3.8	D	不明								1		1
99K	SK68	104	92	28	10YR3/3暗褐色粘質土（炭化物を少量含む）	ⅧA8h	1.1	A	13後半				1					1	2
99K	SK69	106	96	34	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト、炭化物を少量含む）	ⅧA8i	1.1	A	14前半				10		3			15	28
99K	SK70	82	80	24	7.5YR3/3暗褐色粘質土（炭化物を含み、全体に黒っぽく見える）	ⅧA8i	1.0	A	13前半			1							1
99K	SK73	98	92	25	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧA10b	1.1	A	不明										
99K	SK74	130	114	24	7.5YR4/2にぶい褐色粘質土（有機分が沈着し、黒っぽく見える）	ⅧA11c	1.1	C	不明										
99K	SK76	146	99	34	7.5YR4/3褐色粘質シルト（鉄分の沈着あり）	ⅧA11f	1.5	B	不明										
99K	SK80	116	107	34	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物、小礫を含む）	ⅧA11c	1.1	A	不明										
99K	SK81	133	86	39	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（有機分が沈着し、黒っぽいところがある）	ⅧA11f	1.5	D	不明										
99K	SK96	94	(72)	16	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（小礫を少量含む）	ⅧA19i	(1.3)	(B)	不明										
99K	SK102	100	62	15	10YR3/2黒褐色粘質シルト	ⅧA20j	1.6	B	不明										
99K	SK104	85	73	18	10YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトを含む）	ⅧA1h	1.2	A	不明										
99K	SK105	109	88	34	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色シルトブロックを含む）	ⅧA1h	1.2	A	不明										
99K	SK106	80	77	12	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（7.5YR4/6褐色粘質シルトブロックを少量含む）	ⅧA2j	1.0	A	不明										
99K	SK109	123	75	10	7.5YR3/3暗褐色粘質シルトﾌﾞﾛｯｸ＋5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトﾌﾞﾛｯｸ（炭化物を含む）	ⅧA5j	1.6	B	13後半				1					7	8
99K	SK120	183	(94)	33	10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック＋7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック	ⅧA7b	(1.9)	B	不明									3	3
99K	SK121	151	92	35	7.5YR5/4にぶい褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）	ⅧA10b	1.6	B	不明										
99K	SK125	148	95	2	7.5YR4/2灰褐色粘質シルト(炭化物を少量含む)	ⅧA11e	1.6	B	不明										
99K	SK131	154	150	18	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック、小礫を少量含む）	ⅧA7b	1.0	A	不明									1	1
99K	SK1005	(51)	68	9	10YR2/2黒褐色粘質シルト	ⅧJ20m	(0.8)	(A)	不明										
99K	SK1012	70	66	15	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト	ⅧJ20l	1.1	C	不明										
99K	SK1042	86	68	11	7.5YR3/4暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/4褐色粘質シルト	ⅧJ20k	1.3	B	不明										
99K	SK1054	(103)	170	59	10YR3/2黒褐色粘質シルト	ⅧJ20j	(0.6)	(A)	不明									1	1
99K	SK1059	(78)	156	31	10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅧJ20i	(0.5)	A	不明									1	1
99K	SK1080	110	86	20	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅨJ1j	1.3	B	不明										
99K	SK1081	110	54	7	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（焼土塊を含む）	ⅨJ1j	2.0	D	不明										
99K	SK1085	90	76	10	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	ⅨJ1j	1.2	A	不明										
99K	SK1113	128	110	10	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト＋7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む	ⅨJ2j	1.2	A	不明										
99K	SK1125	103	82	23	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	ⅨJ2i	1.3	D	不明									2	2
99K	SK1162	88	72	17	7.5YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅨJ3i	1.2	A	不明										
99K	SK1186	106	54	21	10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅨJ3h	2.0	D	不明									1	1
99K	SK1252	76	66	10	7.5YR4/1褐灰色粘質土（炭化物を微量に含む）	ⅨJ4h	1.2	A	不明										
99K	SK1297	82	78	31	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト	ⅨJ2e	1.1	A	不明									2	2
99K	SK1299	62	57	18	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅨJ2e	1.1	A	不明										
99K	SK1303	107	106	30	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と焼土片を微量に含む）	ⅨJ2e	1.0	A	13後半				1					3	4
99K	SK1306	94	87	30	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）	ⅨJ2e	1.1	A	12後半	1	1							1	3
99K	SK1312	(89)	90	34	7.5YR4/2褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅨJ2d	(1.0)	A	不明										
99K	SK1333	115	109	29	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）	ⅨJ3e	1.1	A	12後半		2							1	3
99K	SK1361	92	90	15	7.5YR4/4褐色粘質シルト＋7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（全体に灰褐色がしみこみ状に広がる。性格不明）	ⅨJ3c	1.0	C	不明										
99K	SK1371	287	179	16	7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）	ⅨJ1k	1.6	D	不明									4	4
99K	SK1530	138	82	14	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）	ⅨJ4c	1.7	B	不明										
99K	SK1562	100	89	20	7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/6褐色シルトブロックを微量に含む）	ⅨJ5c	1.1	A	不明										
99K	SK1812	92	84	4	10YR3/1黒褐色粘質シルト(10YR5/2灰黄褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む)	ⅨJ9b	1.1	A	不明										
99K	SK1871	96	96	13	10YR4/1褐灰色粘質土（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）	ⅨJ9a	1.0	C	12後半		1							2	3

〈分類〉 A：円形、B：楕円形、C：（隅丸）方形、D：（隅丸）長方形

第20表　土坑墓一覧 7

目次
終了

第 6 節　その他の遺構

（1）井戸

概要　今回の発掘調査で確認された中世に属する井戸は18基であり、そのいずれもが下糟目地区に認められた。18 基のうち、99GSK143 と 99ISE01（調査時は SX03)以外はいずれも後述の谷地形周辺に掘削されていた。井戸の掘形は99DSE03 に板材使用の痕跡が確認されたのみで、その他の井戸は内部構造物の伴わない素掘りのすり鉢状土坑であった。また、谷地形周辺に掘削されている関係からであろうか、掘削深度は浅く、自然地形の水道をうまく利用して設置場所を選択していると考えられる。また、99E・F 区では複数の井戸が谷地形周辺に近接して検出された。これは前述の通り地形をうまく利用した選地ではあるが、逆に河川による洪水被害をうけやすく、井戸の機能停止が頻繁に起こり、同一個所に繰り返し井戸を掘削せざるを得なかったのであろう。

98DSE01　調査区南東部に広がる谷地形（98DSX01)に掘削された井戸。検出されたグリッドは IXI1i。東西に長い楕円形のプランを呈する井戸で、長軸 4.2m、短軸 3.3m を測る。土坑の掘形は 1.2m で、現況では湧水層に達しており、発掘調査時にはかなり激しい湧水が認められた。本来の断面はすり鉢状に近いと思われるが、水流の関係か、一部周辺の土層がラミナ状に変質している個所が認められた。構造物やその痕跡は確認されなかった。

出土遺物としては、灰釉系陶器類が中心で、埋土上層に板状木製品が投棄されていたが、厚みがなく長大で、井戸枠の一部とは考えにくい形状である。3720 ～ 3727 は灰釉系陶器の椀・皿。藤澤編年の 5 型式から 8 型式までが混在する。3728 は常滑産甕の口縁部。

99DSE02　調査区南西壁際から調査区外へ展開する円形に近いプランを呈すると思われる、谷地形(99DSX01)の落ち際に掘削された素掘りの井戸。深さ 0.7m の断面袋状の土坑で、発掘調査時ではこの深さで湧水点に達している。

99DSE03　99DSE02同様谷地形（99DSX01)の落ち際に掘削された井戸。検出されたグリッドはIXH11l。調査時の湧水が非常に激しく、それに起因する地山崩落のため、井戸底は確認し得なかった。掘形はやや不整形な楕円で、規模は 4.2 × 4.4m、深さは確認し得た範囲で 0.6m であった。この井戸のみ板材と桟木による構造物の一部が確認されている。全体像が確認できていないので定かではないが、方形横桟横板組式井戸ではなかったかと思われる。

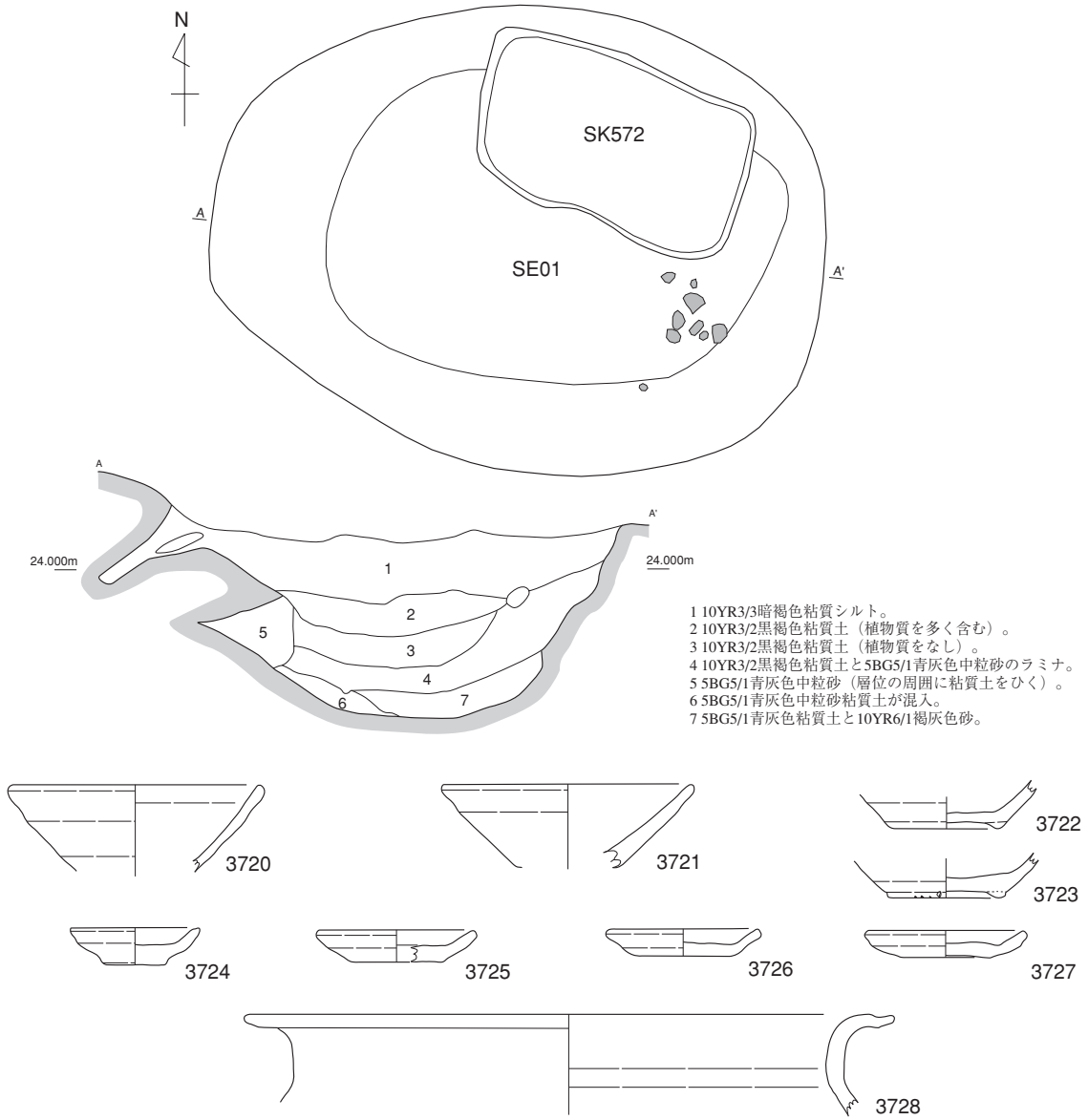
出土遺物は灰釉系陶器が大半を占めている。3729 ～ 3742 は灰釉系陶器椀。うち 3734 と 3736 は内外面にすすが付着していることから別の用途に転用されていたと思われる。型式は 6 型式と 7 型式が混在するが、数量的には 7 型式が勝っている。3743 は灰釉系陶器の片口鉢。灰釉系陶器の椀とほぼ同等の法量である。藤澤編年 6 型式。3744 ～ 3751 は灰釉系陶器皿。3747 は 5 型式、3744 は 6 型式、その他は 7 型式。3752 は非ロクロ成形の土師器皿。外面底部周辺は指押さえによる調整がなされている。内面はなで調整が施されていると思われるが、器面の摩滅により明瞭ではない。3753はロクロ成形による土師器皿。3754 は常滑産の鍋。内面は板状工具による調整痕が認められた。外面にはすすが付着している。W36 ～

W42は木製品。W36は板状木製品で、用途は不明。中央部に穿孔されている。W37は曲げ物の底板。片面には刃物による傷跡が多数確認され、底板から転用して使用されていたことが解る。W38～W42は井戸枠を構成していたであろう部材。

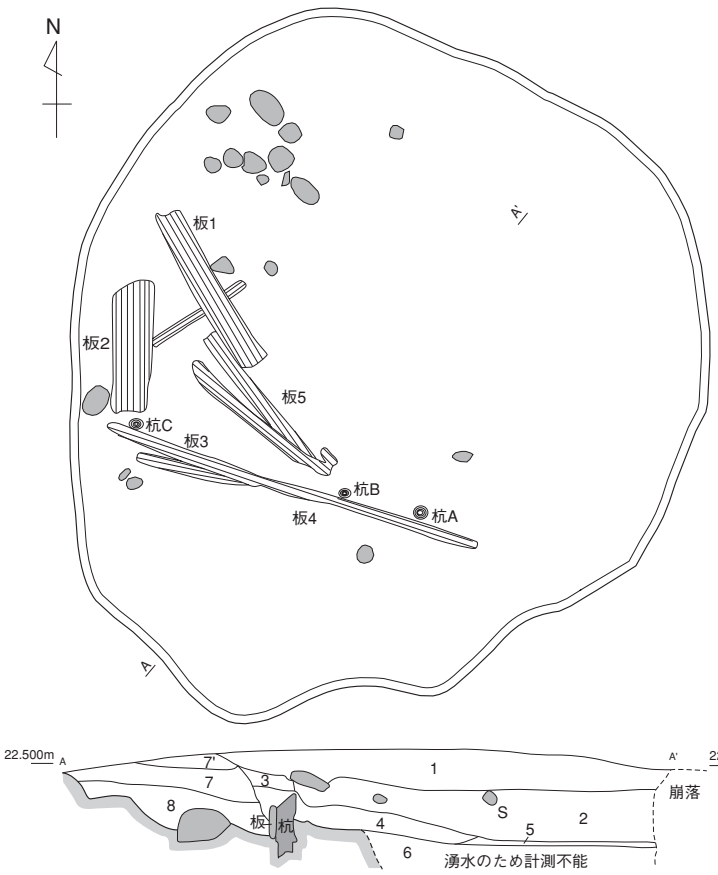
99ESE01　99E区谷A落ち際、VIIIH20dグリッドで検出された井戸。掘形は不整形な楕円状を呈し、長径3.8m前後、短径3.3m前後、深さは1.0mを測り、断面はU字形に近い。現況では湧水が激しく、湧水点までの人力による掘削後、重機断ち割りによる断面観察を行ったが、構造物は確認されなかった。

99ESE03　調査区北壁際に掘削された井戸で、掘形は調査区外へと展開する。検出グリッドはVIIIH13m。プランは不整形であり、調査区外へ展開することもあって明らかにし得なかった。99E区谷B北側の落ち際に掘削されており、発掘調査時にはかなり激しい湧水が認められた。断面は皿状で、深さは0.8mを測る。他の井戸同様井枠等の構造物は確認されなかった。

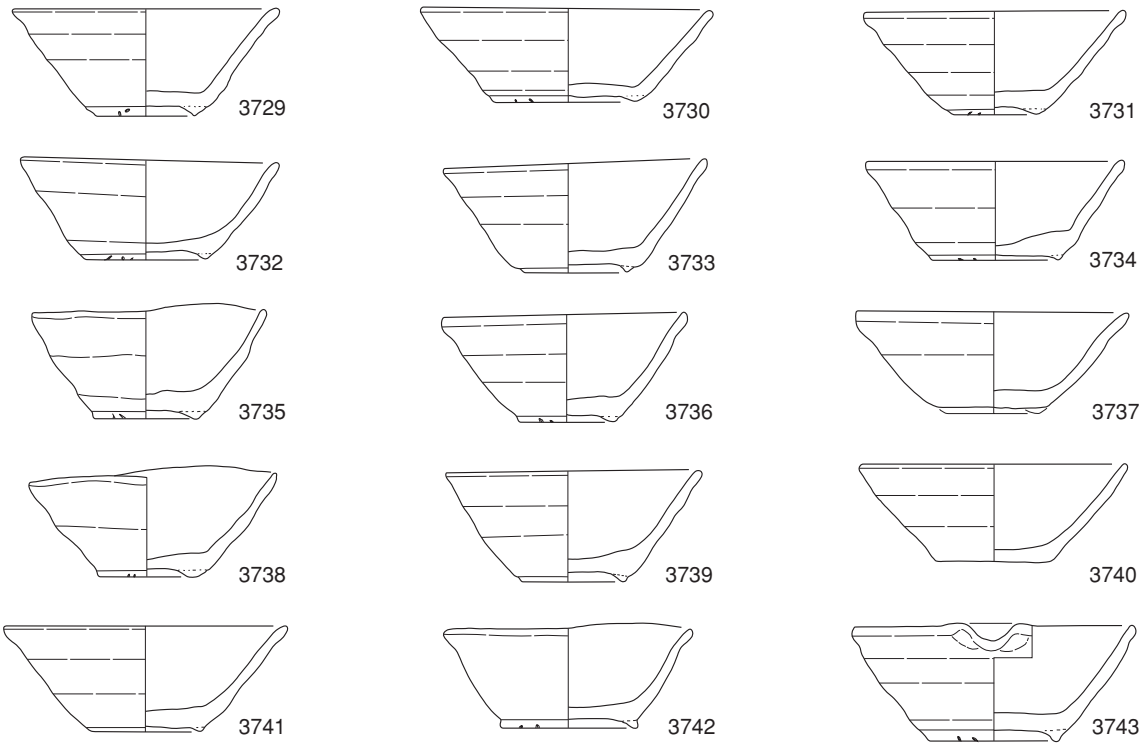
99ESE04・05・06　谷B周辺に構築された大型土坑。遺構検出段階では井戸を想定して掘削したが、現



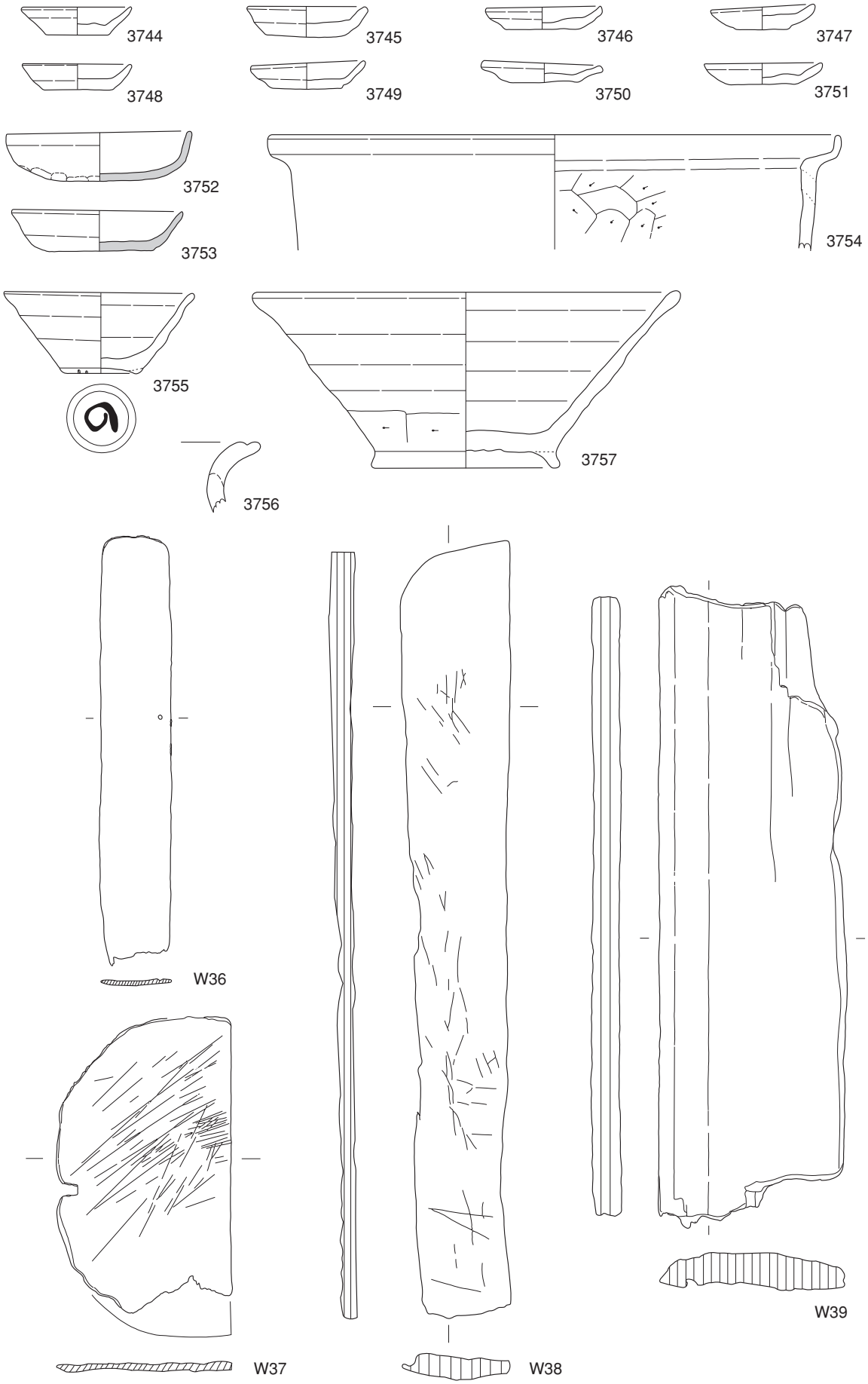
第486図　98DSE01（遺構図1:50、実測図1:4）



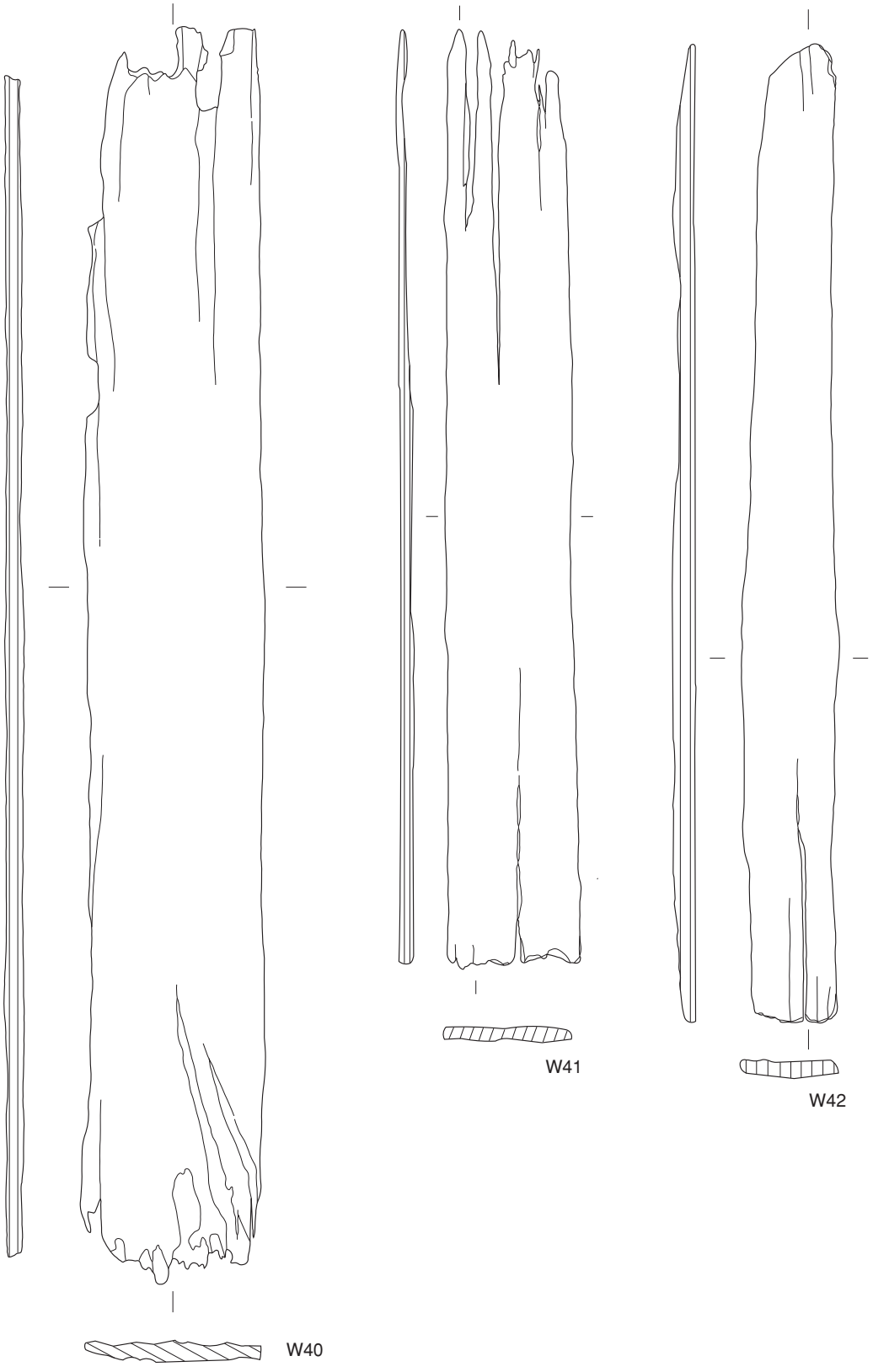
1 10YR4/1褐灰色粗粒砂と10YR4/1褐灰色粘土と5Y7/1灰白色シルトと5Y7/1灰白色粘土の斑土。
2 2.5Y3/1黒褐色粘土（植物遺体を多く含む）。
3 10GY8/1明緑灰色中粒砂と10Y7/1灰白色中粒砂と2.5Y3/1黒褐色粘土の斑土。
4 2.5Y7/2灰黄色中粒砂。
5 5YR3/1灰色粘土。
6 7.5YR3/1黒褐色粘土（植物遺体も多く含む）。
7 10YR4/1褐灰色粘土と10YR3/1黒褐色粘土と10GY7/1明緑灰色粘土の斑土
（7'は10GY7/1明緑灰色粘土ではなく2.5Y6/4にぶい黄色～2.5Y7/4浅黄色粘土の斑土）。
8 7.5Y3/1黒色粘土（10Y7/1灰白色粘土ブロックを多少、10Y7/1灰白色粘質シルトブロックを若干含む）。



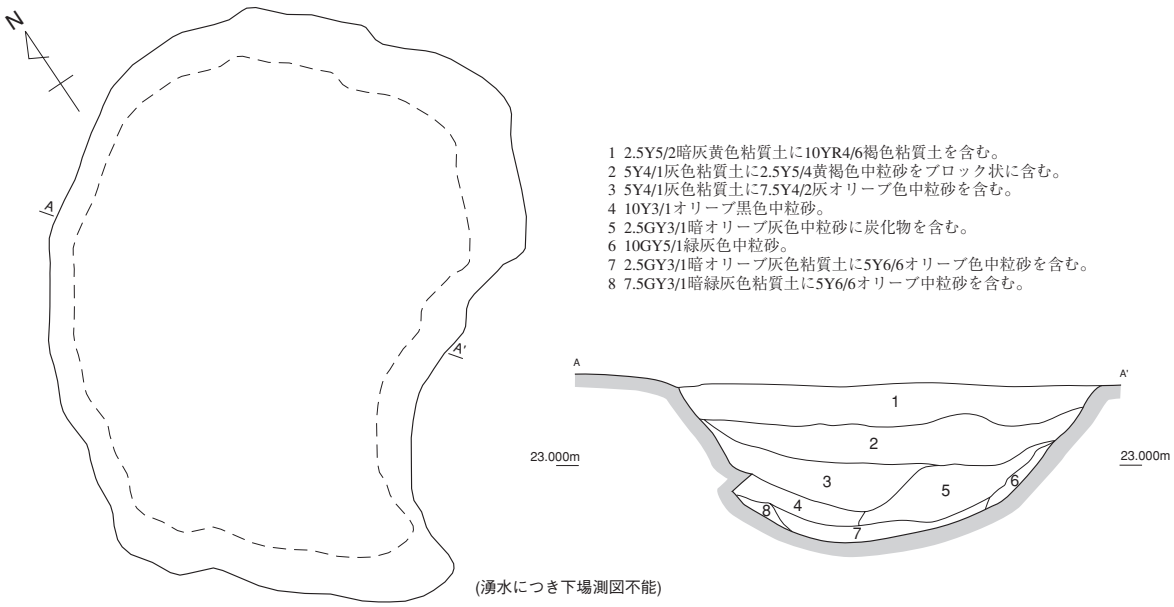
第487図　99DSE03（１）（遺構図1:50、実測図1:4）



第488図　99DSE03（２）（土・陶器1:4、木製品 7530,7531：1:4、その他1:8）



第489図　99DSE03（３）（木製品1:8）



第490図　99ESE01（遺構図1:50）

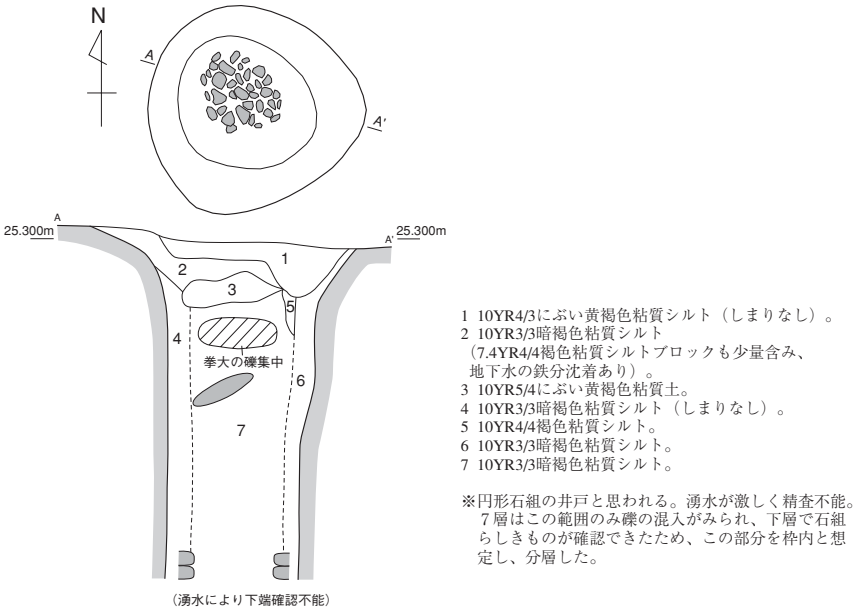
況では湧水が認められなかった。掘形は同調査区内で確認された井戸と類似し、構造物を持たないことも一致している。湧水に関してはあくまで現況であり、本来井戸として機能していた遺構が、水道の変化により廃絶されたことも想定しうる。

3763、3764 ともに灰釉系陶器。皿は藤澤編年 5 型式、椀は同 6 型式。

99ESE07　谷B東肩落ち際で検出された断面は箱形、平面が隅丸長方形状を呈する井戸。VIIIH18グリッド。同調査区で確認された井戸と同じく、構造物は認められなかった。掘削深度は0.8mと浅いが、現況では湧水が認められた。

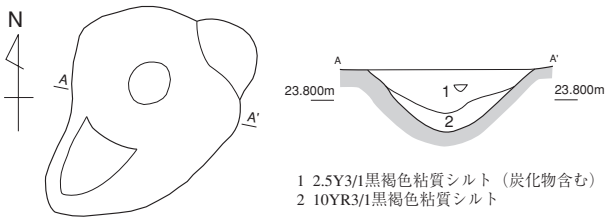
3765 ～ 3767 は灰釉系陶器の椀と皿。いずれも藤澤編年 7 型式に相当する。

99GSK147　調査区中央部VIIII5lグリッドで検出。遺構検出時には土坑墓を想定していたため、遺構略記号はSKとなっている。1.4 × 1.4mの円形に近いプランを呈し、検出面から深さ2.2mで井戸底に到達

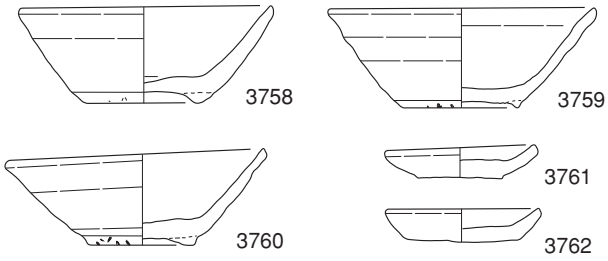


第491図　99GSK143（遺構図1:50）

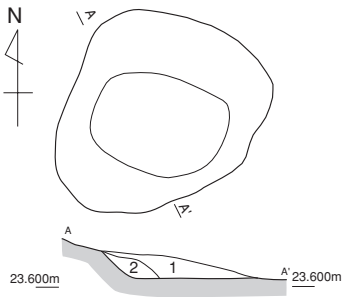
99FSE01



1 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト（炭化物含む）
2 10YR3/1黒褐色粘質シルト

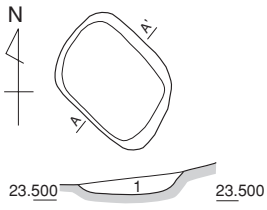


99FSE02



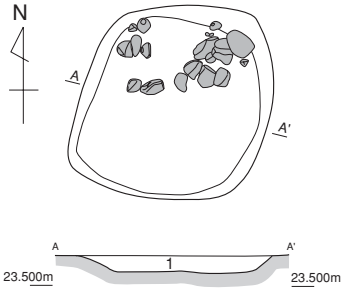
1 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。
2 10YR3/1黒褐色粘質シルト。

99FSE03



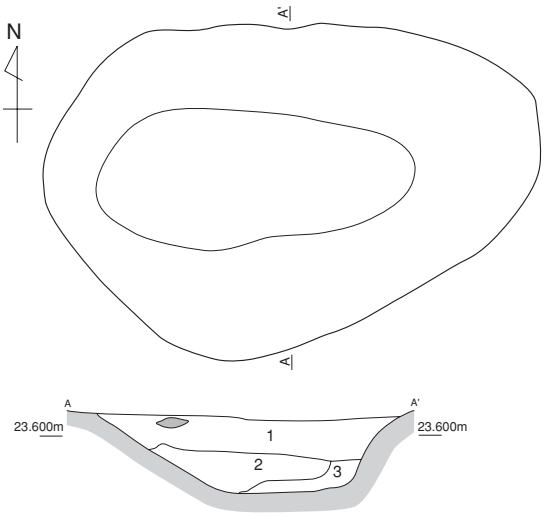
1 10YR2/2黒褐色粘質シルト。

99FSE04



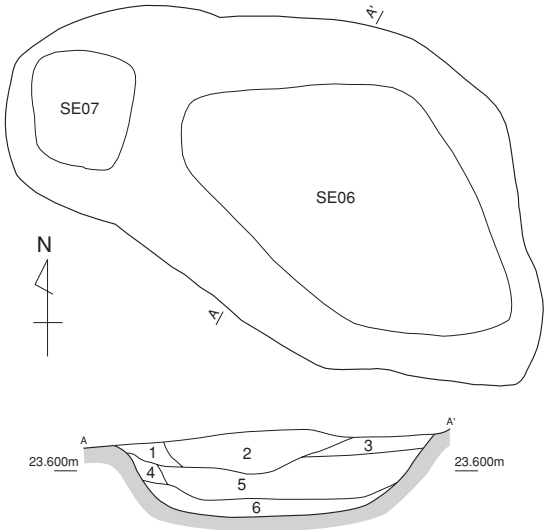
1 2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y4/1黄灰色粗粒砂が混じる。

99FSE05



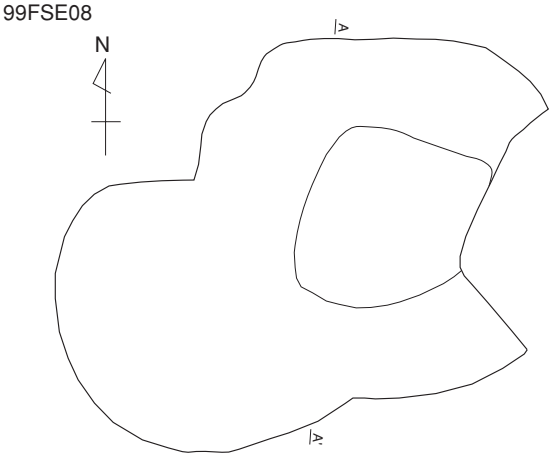
1 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト。
2 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂に2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが斑点状に混じる。
3 2.5Y4/1黄灰色粘質シルトに2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが斑点状に混じる。

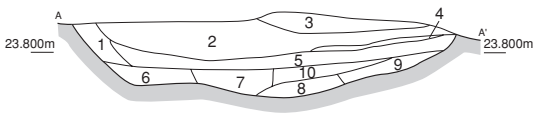
99FSE06・07



1 10YR3/4暗褐色粘質シルトに2.5Y4/1黄灰色粘質シルトが混じる。
2 10YR4/4褐色粘質シルトに2.5Y3/2黒褐色粘質シルトが混じる。
3 2.5Y3/2黒褐色粘質シルトに10YR4/4褐色粘質シルトが混じる。
4 5GY5/1オリーブ褐色粘質シルトに5Y4/3オリーブ褐色粘質シルトが混じる。
5 2.5Y3/2黒褐色粘質シルトに2.5Y2/1黒色粘質シルトが斑点状に混じる。
6 10Y5/1灰色粘質シルトに7.5Y2/1灰オリーブ色細粒砂が混じる。

99FSE08





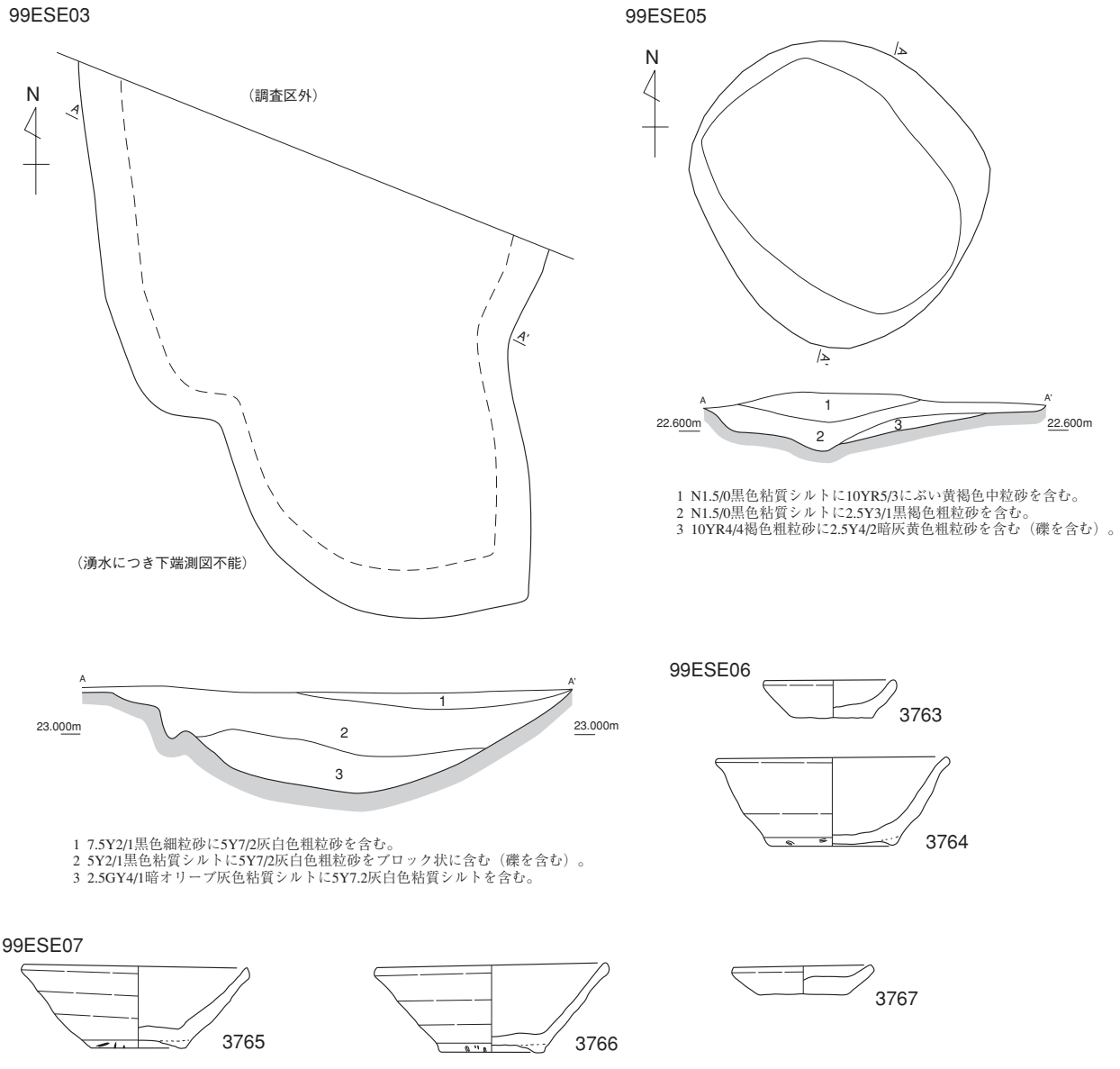
1 10YR4/1黄灰色粘質シルト。
2 2.5Y3/2黒褐色粘質シルトに2.5Y4/1黄灰色粘質シルトが混じる。
3 10YR4/4褐色粘質シルトに10YR3/4暗褐色粘質シルトが混じる。
4 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂（やや粘り気あり）。
5 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト。
6 5Y4/1灰色粘質シルト。
7 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト（粘性が強い）。
8 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。
9 2.5GY5/1オリーブ灰色粘質シルトに7.5Y4/1灰色中粒砂が混じる。
10 2.5Y4/1黄灰色細粒砂。

第492図　99FSE01～08（遺構図1:50、実測図1:4）

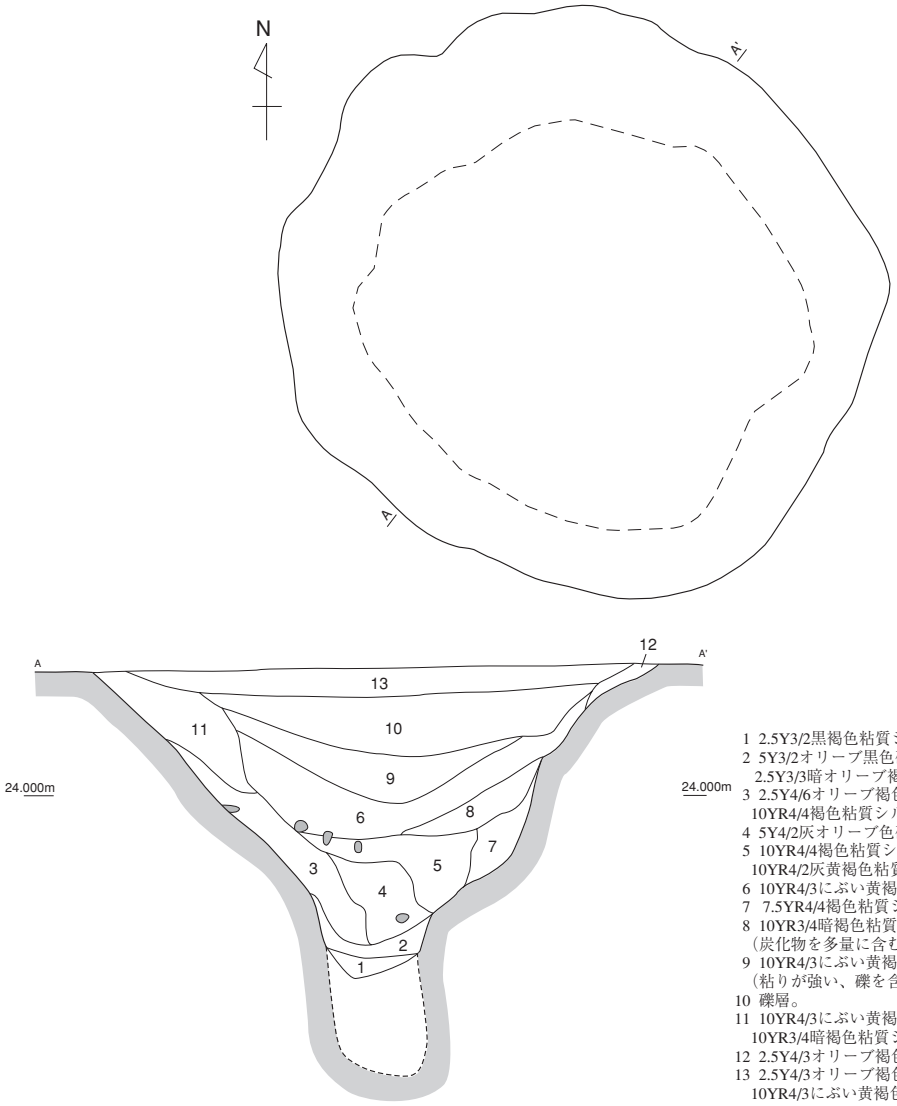
する。断面は検出面から0.4mまでが漏斗状、それ以下から井戸底までの1.8mがほぼ垂直に掘り下げられている点は注目される。今回下糟目地区で検出された井戸の内、谷地形周辺に構築されていない2基のうちの1基。構造物を持たない点は同じだが、他の多くの井戸が擂鉢状の掘形であるのに対し、ほぼ垂直に掘り下げられた掘形は特徴的である。

99FSE01～08　調査区西端部に展開する谷地形内及び肩部に合計8基の井戸が確認された。平面不整形・断面皿状・浅い掘形の比較的大型な土坑である点や、構造物を伴わない点などは99E区で検出された井戸と類似している。但し、この99F区の井戸は現況での湧水は認められなかった。また、SE05・06・07・08は非常に近接して構築されているが、出土遺物にあまり時期差がないことから、短期間に何度も構築・廃絶が繰り返されていたと思われる。

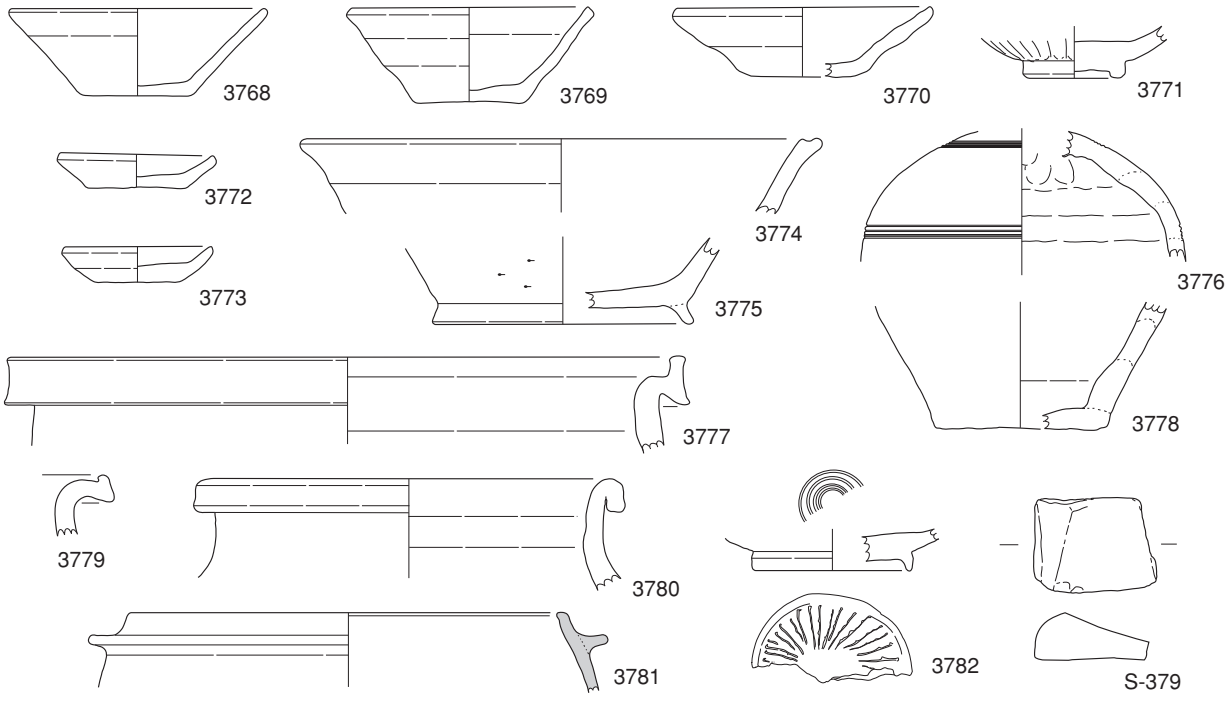
3758～3762は灰釉系陶器。3758が藤澤編年6型式、その他は同7型式。



第493図　99ESE03～07（遺構図1:50、実測図1:4）



1 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト（泥状態）。
2 5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトに
2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトが混じる（泥状態）。
3 2.5Y4/6オリーブ褐色粘質シルト（炭化物を含む）に
10YR4/4褐色粘質シルトが混じる。
4 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト（泥状態）。
5 10YR4/4褐色粘質シルトに
10YR4/2灰黄褐色粘質シルトが混じる。
6 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
7 7.5YR4/4褐色粘質シルト。
8 10YR3/4暗褐色粘質シルト
（炭化物を多量に含む、鉄分を含む）。
9 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
（粘りが強い、礫を含む）。
10 礫層。
11 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトに
10YR3/4暗褐色粘質シルトが混じる。
12 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト（粘りが強い）。
13 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト（粘りが強い）に
10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトが混じる。



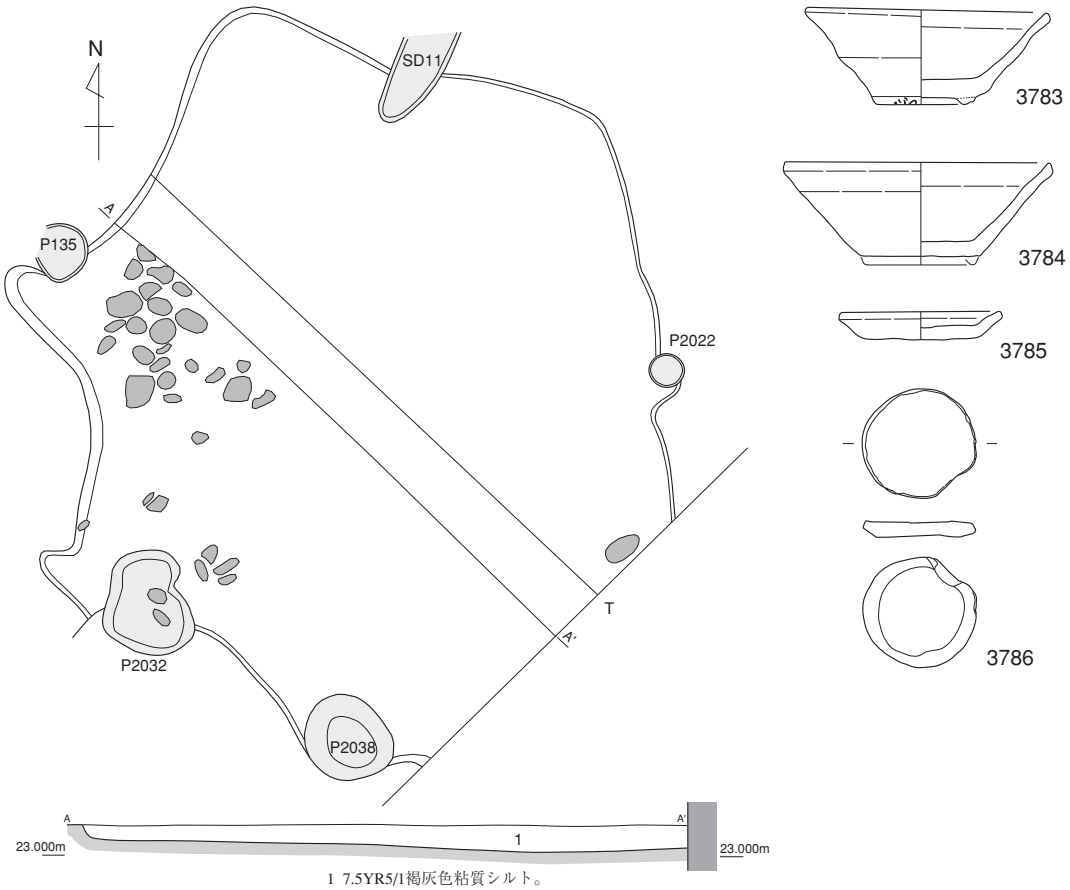
第494図　99ISE01（遺構図1:50、実測図1:4）

99ISE01（SX03） 調査区南端部、VIIIJ7eグリッドで検出された井戸。埋土上層に拳大の礫が充填されており、廃絶時もしくは後世地固めのために投棄されたと思われる。規模は3.7×3.8mの円形に近いプランを呈す。99GSK143同様谷地形から離れた位置に掘削されているためか、検出面から井戸底までの深さは2.7mを測る。掘形上部は漏斗状に、下部は垂直に掘削されている。掘削深度が深く、且つ激しい湧水のため、人力による掘削は困難で、調査最終段階で重機による断ち割りを行い、井戸底レベルおよび構造物のないことを確認した。

3768～3770は灰釉系陶器椀。3個体とも胎土に砂粒を多く含む「南部系」の椀であるが、3769が8型式、3768が8型式もしくは9型式、3770が9型式と、水入遺跡ではほとんど出土を見ない新しい時期の灰釉系陶器である。3772・3773は灰釉系陶器皿。椀が新しい型式であったのに対し、皿は7型式とやや古い様相を示している。3776・3778はいわゆる古瀬戸の瓶・壺類。いずれも外面灰釉が施されているが、器面の劣化による釉の剥離が顕著である。3776が古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期、3778は古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期に属する遺物である。3782は同じく古瀬戸の底卸目皿。瓶・壺類同様釉の剥離が激しい。時期は古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期。S379は砥石。

（2）大型土坑

99BSE01 調査区北東端、XH20bグリッドで検出された不整形な土坑。土坑南東部は調査区外へ展開し



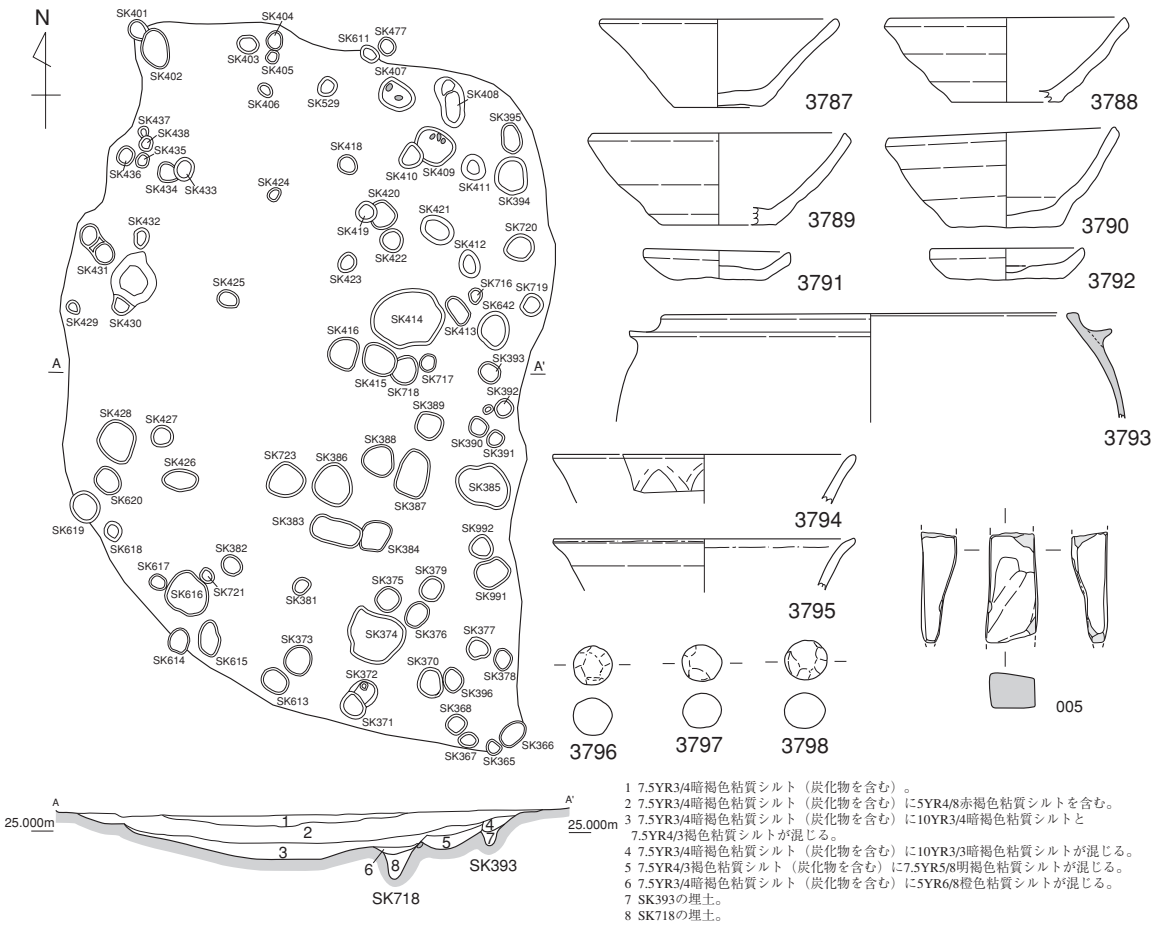
第495図 99BSE01（遺構図1:50、実測図1:4）

ている。検出されたプランで規模は4.8×3.8m、深さ0.2mを測る。遺構検出段階では大型の掘形を持つことから井戸を想定したが、掘削の結果井戸でないことが判明した。壁はほぼ垂直に立ち上がり、土坑底部は平坦に掘削されている。出土遺物は灰釉系陶器が中心であり、当該期の遺構といえるが、性格・機能に関しては不明。

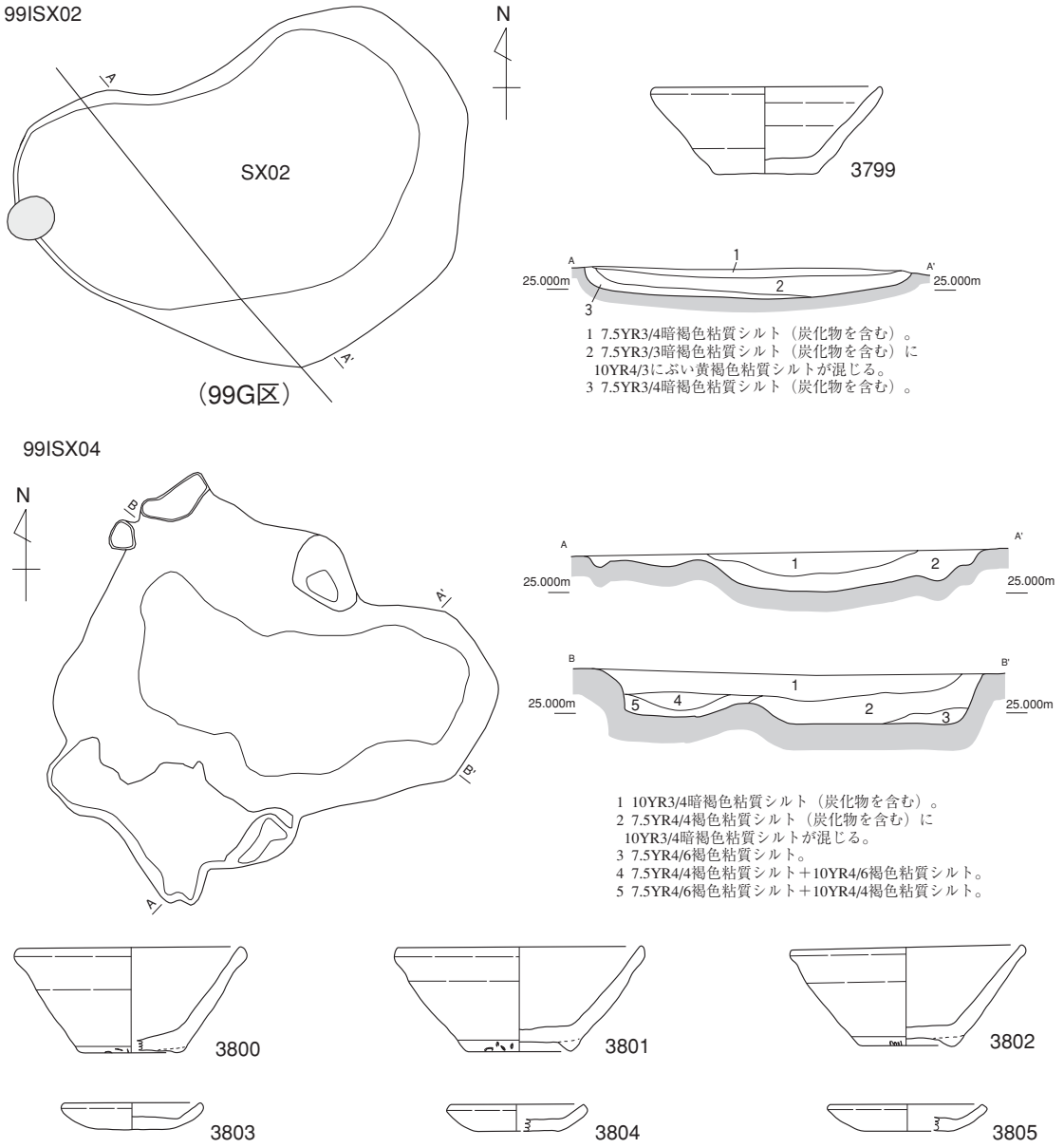
3783・3784は灰釉系陶器椀。ともに藤澤編年の7型式。3784は高台が剥離し、痕跡のみ確認された。7565は底部に回転糸切りによる切り離し痕が確認される。椀同様7型式と思われるが、8型式の特徴も一部含んでいる。3786は灰釉系陶器の皿底部を利用した加工円盤。体部を打ち欠いた後、破面を削り込んで円形に仕上げている。

99ISX01　調査区南端部、VIIIJ5eグリッドを中心に展開する不整形な大型土坑。規模は9.0×6.3m、断面はすり鉢状を呈し、最深部で0.6mを測る。埋土の暗褐色粘質シルトには炭化物や赤褐色・褐色粘質シルトブロックが混在することから、自然の落ち込みが徐々に堆積していったとは考えにくく、人為的に掘削された可能性が高い。また99ISX01からは多くの土坑が検出された。これらの土坑との切合い関係は双方の埋土が同一であったため検出時には把握できず、99ISX01掘削後に土坑を確認した。

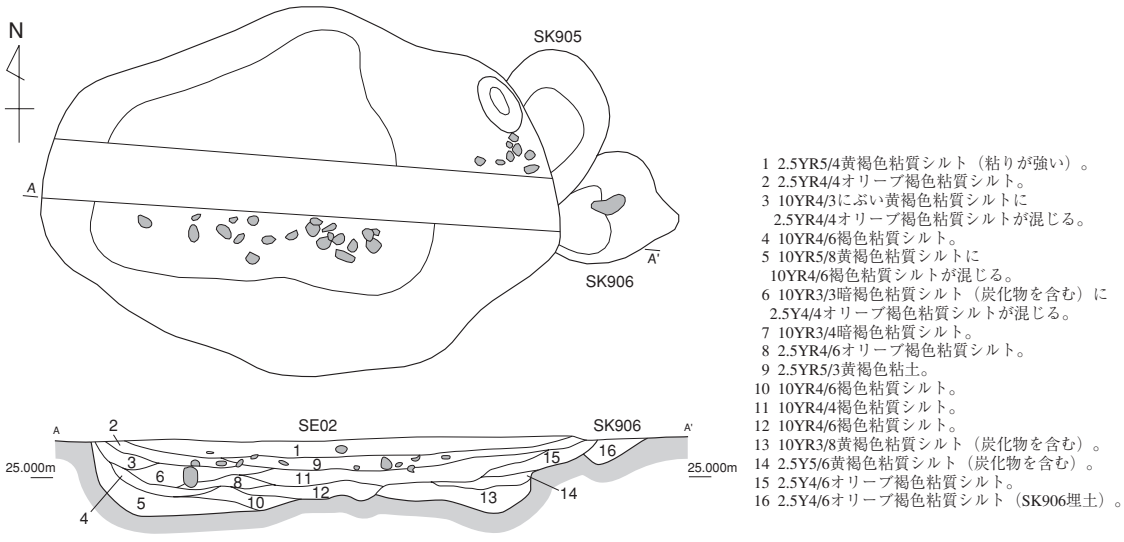
3787～3790は灰釉系陶器椀。99ISE01同様水入遺跡で出土する灰釉系陶器の最も新しい段階の遺物で、3787が藤澤編年9型式、その他が同8型式となる。これに対し、3791・3792の灰釉系陶器皿は、同6型



第496図　99ISX01（遺構図1:100、実測図1:4）



第497図　99ISX02・04（遺構図1:50、実測図1:4）



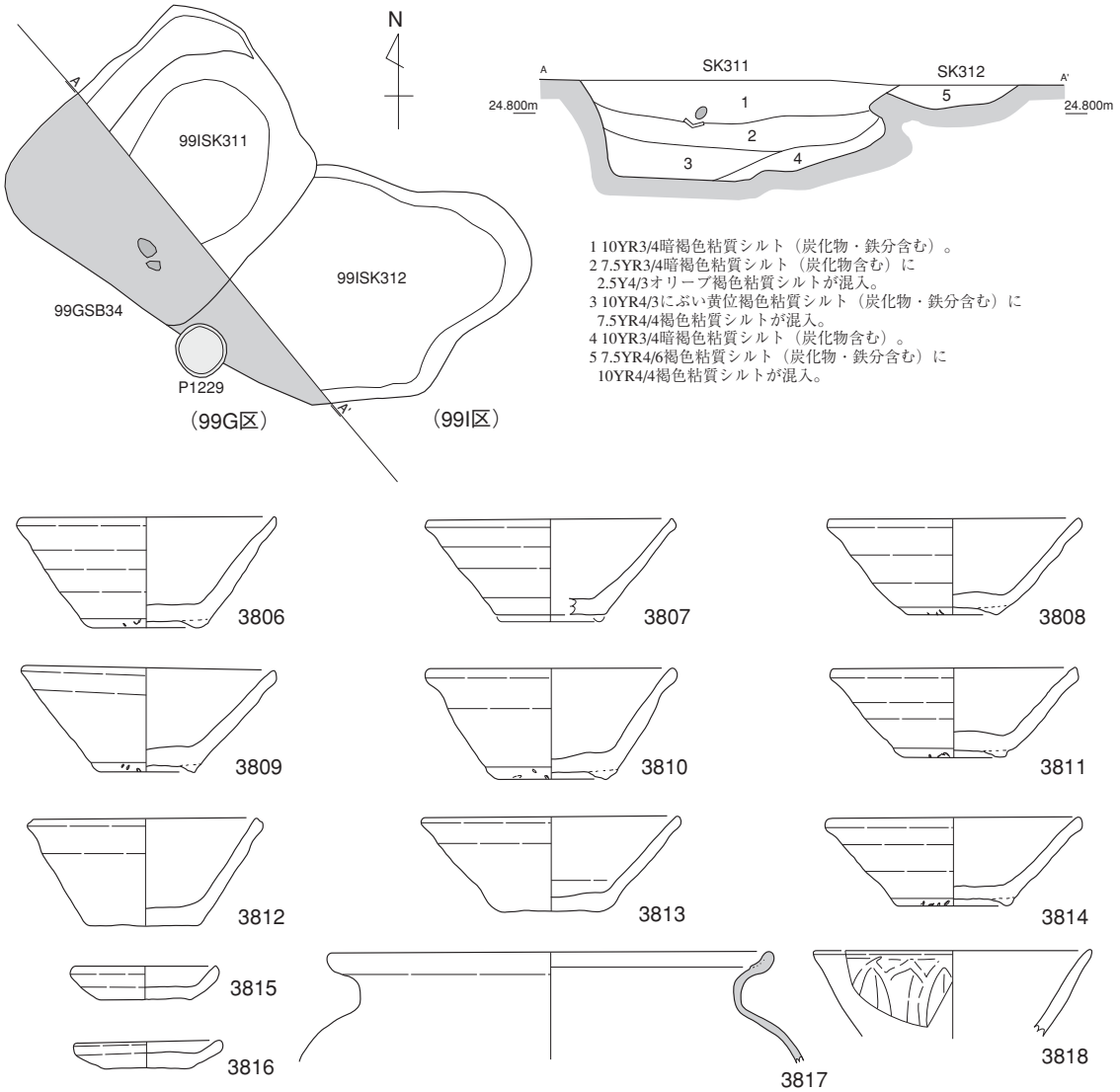
第498図　99ISE02（遺構図1:50、実測図1:4）

式・7型式と古い様相を呈している。同調査区で確認された99ISE01でも同様の傾向が窺われるが、理由は判然としない。3793は内彎羽釜。器面の劣化により調整痕は判別し得なかった。体部外面にはすすが付着する。3794は龍泉窯系青磁碗。外面には連弁文が施される。3795は白磁碗。口縁部はやや外反し、釉が削り取られ口禿となっている。3796～3798は陶丸。

99ISX02　99G区との調査区境で検出された不整形土坑。規模は3.1×2.1mを測り、遺構断面は皿状に近く、深さは0.2mと比較的浅い。

3799は灰釉系陶器の椀。この椀は藤澤編年の9型式にあたる。この遺物以外にも、小片のため図化はできなかったが、常滑産甕片、土師器皿片、鍋・釜片、陶丸などが出土している。

99ISX04　99ISX01北側で検出された不整形土坑。単独土坑として発掘調査時には認識したが、断面観察に拠れば、南西部分の突出部は別遺構が存在し、それを取り込むように新たな土坑が掘削された可能性が認められた。掘形は南東方向が10cm前後と浅く、その他の土坑壁はしっかりと掘削されている。性格は不明。



第499図　99ISK311（遺構図1:50、実測図1:4）

3800 ～ 3805 は灰釉系陶器の椀・皿。3805 が藤澤編年 8 型式となる可能性を持つが、その他の遺物はいずれも藤澤編年 7 型式に相当する。

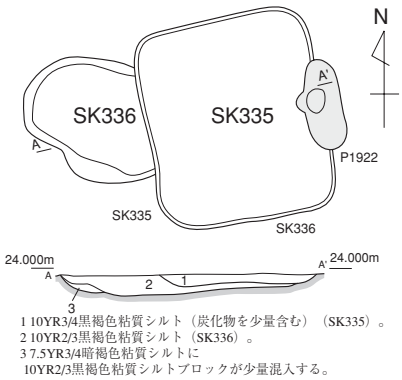
99ISE02　調査区北東壁際中央部VIIJ11kグリッドで検出された不整形楕円状のプランを呈する土坑。規模は 3.5 × 2.5 m、深さ 65cm を測る断面すり鉢状の土坑。遺構略記号が示すように、発掘調査時には規模から井戸であろうと考えられた遺構であったが、湧水層まで達しておらず、構造物も認められなかったことから、井戸ではないと判断した。出土遺物も灰釉系陶器片少量に須恵器片が若干混在する程度で、明確な時期については判断しにくい。性格も不明であるが、出土遺物のあり方からこの時期に含めて考えることとした。

99ISK311　99G区との調査区境で検出された隅丸方形状に近いプランを呈する土坑。99G区を調査した際には、遺構のプランから竪穴住居とした。両調査区の調査結果に基づけば、2 基の土坑が切り合っていたと考えられ、まず不整形な 99ISK312 が掘削された後、その一部に重複するように 99ISK311 が構築されている。99ISK311 の規模は、長径 1.8m、短径 1.6m、深さ 0.7m を測り、99ISK312 側の掘形は袋状にオーバーハングするように掘削されている。遺構の性格は定かではなく、小型の竪穴建物であった可能性を指摘するに留めておく。

3806 ～ 3815 は灰釉系陶器の椀・皿。藤澤編年 7 型式が大半を占める。そのうち 3812・3813 は 8 型式と一型式新しい遺物である。7597 は「伊勢型鍋」。7598 は龍泉窯系の連弁文が施された青磁碗。

98DSK335　調査区南西部中央、IXH7r グリッドで検出された隅丸方形のプランを呈する土坑。規模は、長軸 2.8 m、短軸 2.5 m、深さ 0.2 m を測り、長軸は N-12°-W を示す。土坑壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦に掘削されている。また、底面に土坑、ピットなどは確認されなかった。出土遺物は灰釉系陶器が見られた。

この遺構の性格については、竪穴建物である可能性も考えられるが、埋土が黒褐色粘質土で充填されており、竪穴建物の埋土とは異なっていること、遺物の出土に集中が見られないこと、以下に述べる大型土坑と埋土や遺物出土状況が類似することから今回は大型土坑として扱うこととした。



1 10YR3/4黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）（SK335）。
2 10YR2/3黒褐色粘質シルト（SK336）。
3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに
10YR2/3黒褐色粘質シルトブロックが少量混入する。

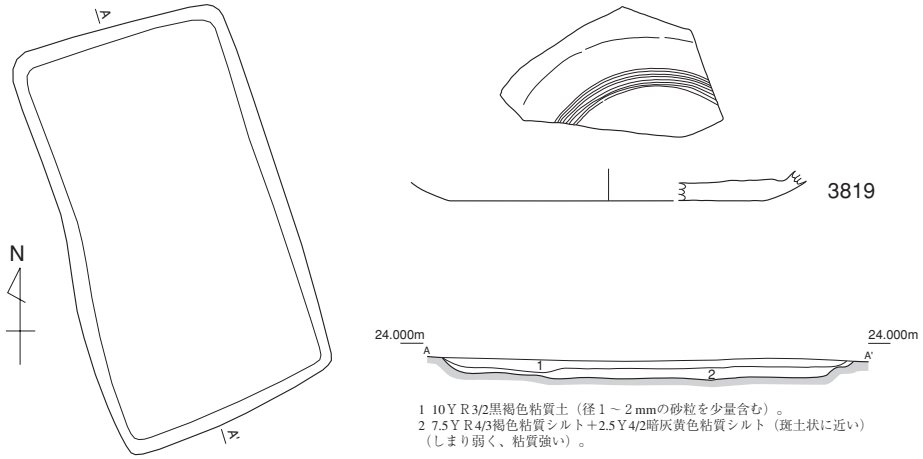
第500図　98DSK335（1:100）

98DSK363　98DSK335 すぐ南、IXH8s グリッドで検出された隅丸長方形の大型土坑。規模は長軸 5.5m、短軸 3.0m、深さ 0.2m を測り、長軸は N-17°-W を示す。南東壁は一段テラス状の平坦面が作られるように掘削されており、その他三面はテラスがなく緩やかに立ち上がっている。土坑床面は平坦であり、柱穴と思われるピットや土坑は認められなかった。埋土は黒褐色粘質土層と褐色及び暗灰黄色粘質シルトの斑土状堆積の二層に分層された。性格については不明。

出土遺物は灰釉系陶器が中心で、一部古代の遺物が混在する。その中に 1 点（3819）古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期に属する折縁深皿が出土している。

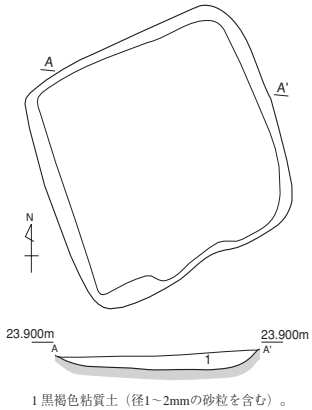
98DSK371　98DSK363 すぐ南で検出された隅丸方形のプランを呈する土坑。グリッドは IXH9s。規模は 3.2 × 3.3 m、深さ 0.2m、南北軸は N-22°-W を示す。埋土は黒褐色粘質土単一層で、98DSK363 上層埋土

と同じであった。土坑北西壁際に柱穴と思われるピットが検出されているが、このピットは土坑下層から検出された98DSB65に伴う遺構である。したがって、この土坑も掘形は竪穴建物と類似するが、98DSK335と同様の理由により大型土坑扱いとした。性格は不明。出土遺物には、灰釉系陶器の他に常滑産甕片などが認められた。



第501図　98DSK363（遺構図1:100、実測図1:4）

98DSK384　調査区南西部中央、IXI8aグリッドで検出。北西および南西片に不整形な突出部を持つ隅丸方形に近いプランを持つ大型土坑。突出部以外での土坑の規模は、長軸4.4m、短軸3.4m、深さ0.2mを測り、長軸はN-26°-Wを示す。埋土は土坑壁際に地山土の崩落したと思われる層位が確認された以外は黒褐色粘質土単一層であり、突出部に関しても複数の遺構が切り合っている状況は確認されなかった。床面は中央部がやや低くなってはいるがほぼ平坦に造り出されており、そこから複数のピットが検出されている。P2593、P2605、P2606、P2603、P2604を柱穴とした竪穴建物も想定しうるが、確証に欠ける。



第502図　98DSK371（1:100）

3820は青磁碗の高台部片。見込みに櫛描きによる文様が施されているが、小片のため全体像は不明。この遺物以外には灰釉系陶器片が少量出土している。

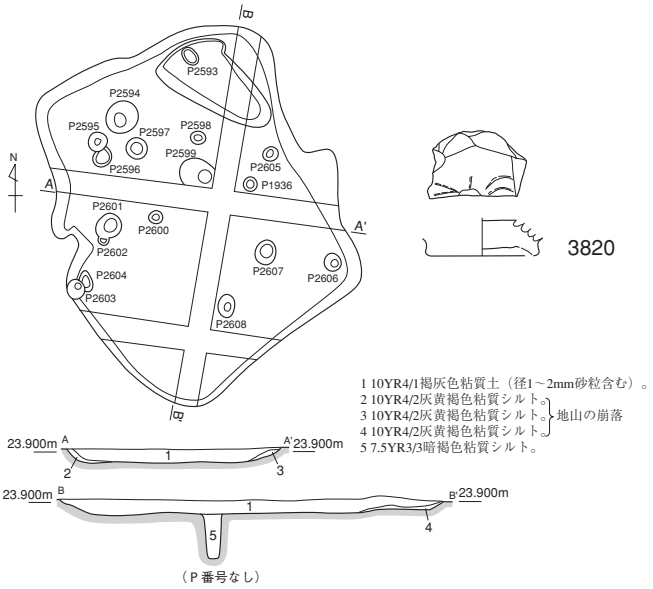
98DSK385　98DSK384南西に近接して検出された土坑。長軸2.7m、短軸1.8m、深さ0.1mを測る長方形プランを呈する。長軸はN-30°-Wを示す。壁は北西壁は緩やかに立ち上がるが、その他は垂直に近くなっている。床面は平坦となっているが、明確な柱穴等は検出されなかった。

98DSK387　98DSK384東、IXI8cグリッドで検出。長軸5.2m、短軸3.5mを測る長方形のプランを持った大型土坑である。但し、断面は深さ10cm前後と浅い皿状を呈する。長軸の方位はN-55°-E。埋土は他の大型土坑同様の粘質土で、床面には柱穴等のピットは確認されなかった。出土遺物は灰釉系陶器片が出土している。

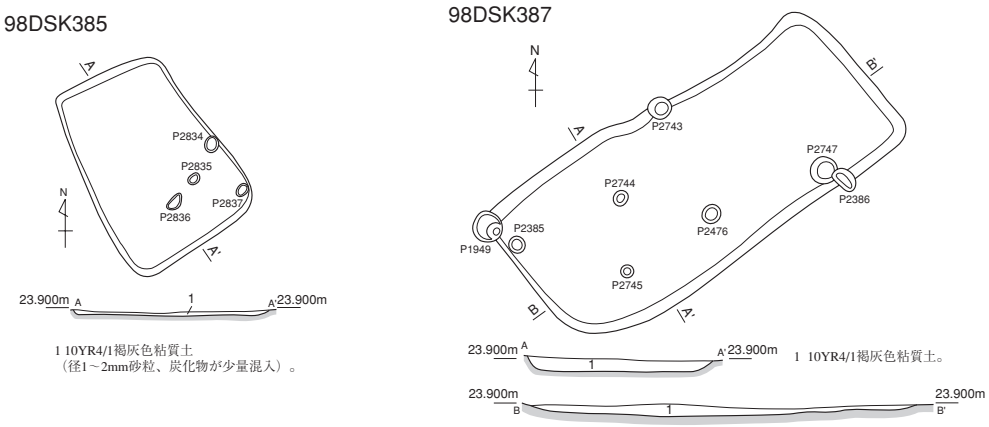
（3）谷地形

概要　谷地形は水入遺跡南東側を流れる矢作川と、大屋敷地区と下糟目地区の間を流れる宝蔵川の影響で形成されたと考えられる。断面観察により、中世段階でかなりの部分が埋没し大半は陸地化しており、“谷”的景観は失われつつあったと思われる。

谷地形の埋没過程は、堆積層の土質がシルト中心であることから、矢作川の洪水に際し自然堤防を越えて押し寄せた水流が、谷地形に流れ込むことの繰り返しであったと想定される。したがって、日常は乾地化した沖積地であるが、洪水により水没し沼沢地化してしまう地域でもあった。個別調査区で確認された谷状地形は以下のとおりである。



第503図　98DSK384（遺構図1:100、実測図1:4）



第504図　98DSK385・387（1:100）

99ASX01　99A区南端部で確認された矢作川際の落ち込み。発掘調査時は“ガケ”として掘削。調査区南端部から緩やかに地山が傾斜してゆき、南東壁近くで急激に落ち込んでゆくことが確認されている。中世までに、急激に落ち込む“ガケ”は埋没しており、地山の緩やかな落ち込みが矢作川方向へ延長していたと思われる。

99CSX01　99C区北東端部で検出された谷地形。調査区の北東側を流れる宝蔵川に向かって落ち込んでゆく。堆積層は8層に分層されたが、それ以下の層位に関しては、調査区上の制約や湧水により確認不能であった。各層位から出土する遺物で判断すると、上位3層が中世以降の堆積層であり、宝蔵川により形成されたと考えられる台地の急斜面部分はすでに埋没しており、検出面から深さ約0.7m程度の緩やかな落ち込みであったと思われる。

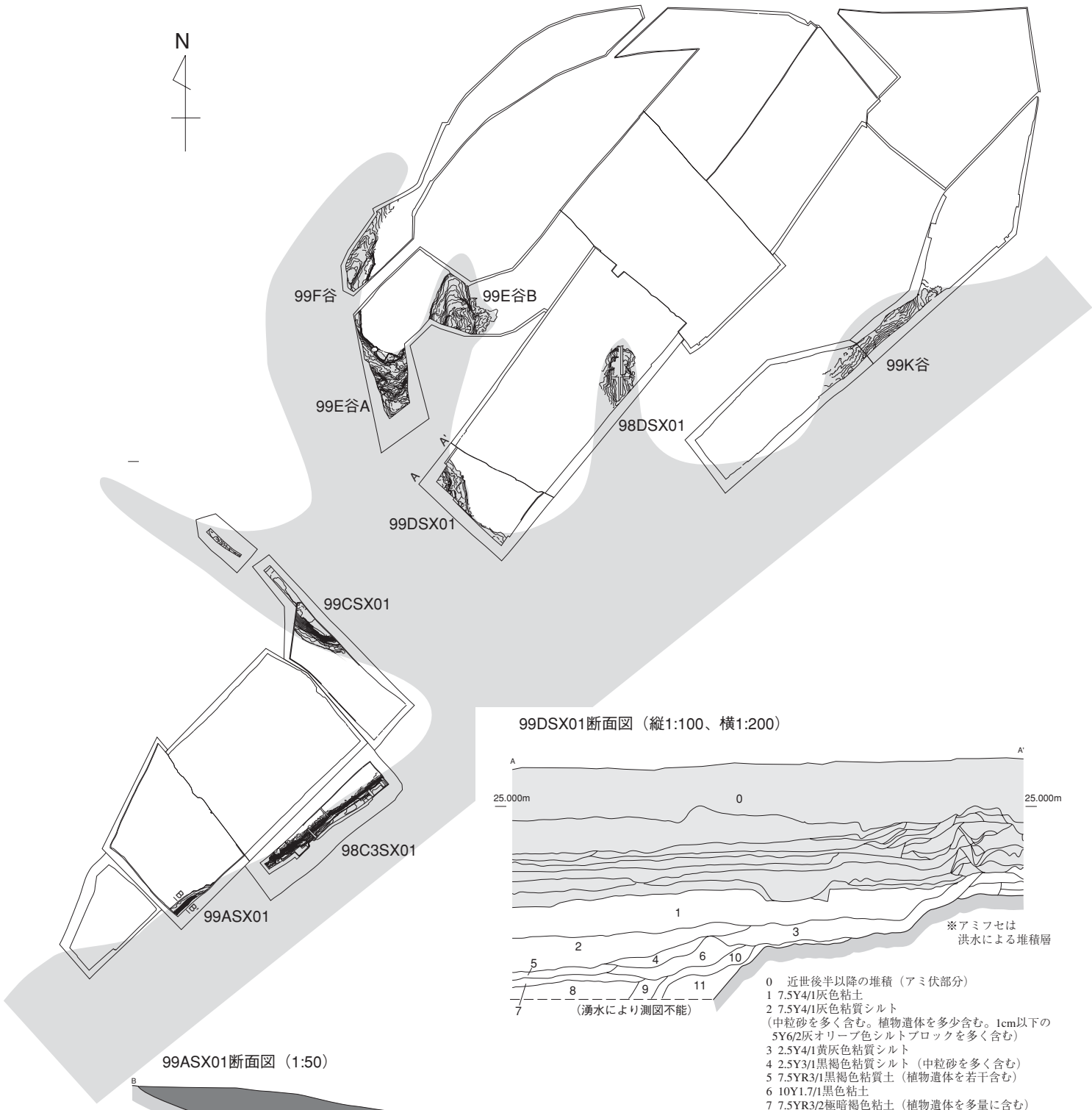
99DSX01　99D区調査区南西部に展開する谷地形。調査区南西側を流れる宝蔵川方向へ落ち込んでゆく。断面観察に拠れば、検出面とした低位段丘は緩やかに宝蔵川方面へ落ち込み、一旦テラス状の平坦面を形成した後、再び落ち込んでいることが判明した。出土遺物から、中世段階では２段目の落ち込みまではすでに堆積が進んでおり、検出面から約 1m 程度の深さであったと推定される。埋土は黄灰色粘質シルトもしくは中粒砂と植物遺体を多く含む灰色粘質シルトであり、このことから頻繁に洪水の被害を被っていたことが推測される。

99E 谷 A・B　99DSX01 と一連の遺構で、宝蔵川左岸の谷地形は上流域で二股に分岐し、99E 区西端部で確認された谷地形が“谷 A”、同調査区中央部で確認された遺構が“谷 B”となる。谷 A は 99DSX01 同様、中世ではすでに大半の部分が埋没し、浅い沼沢地状の地形となっていたと考えられる。ちなみに、調査区南端部では現地表面より約 4.5m 下でベースが確認されており、遺構検出面からでも 3m ちかい比高差が認められる。これに対し谷 B は、谷地形の最奥部にあたるためベースの落ち込みも比較的浅く、深さ 1m 程度の緩やかな皿状の落ち込みといった感が強い。但し発掘調査時には継続的な湧水が認められ、前述のように地形の落ち際に井戸が複数基構築されていることから、湧水に関しては当時も比較的現在の環境とよく似ていたことが想定しうる。谷 A に連続する地形は 99F 区でも認められているが、地形的特徴は谷 B に類似する。

98DSX01　調査区中央やや北よりの南東壁際から北方向へ延びる谷地形。この遺構も 99E 谷 B 同様、検出面から 1m 程度の浅い皿状の落ち込みで、矢作川が形成したであろう谷地形最奥の一部に相当すると思われる。

99K 谷　調査区中央部で確認された矢作川方向への落ち込み。この地形も谷最奥部に相当し、谷地形が検出された調査区際ではフラットな台地面も認められた。矢作川方向へのベースの落ち込みは緩やかで、深さも検出面から約 1m 程度であった。

谷地形からは灰釉系陶器を中心とした遺物が出土している。3821 ～ 3824、3827 ～ 3829、3835 ～ 3837、3857 は墨書のある灰釉系陶器の椀と皿。他の遺構から出土している墨書土器同様「十」「の」など一文字が記されている。3829 は○が 2 つ連なるように描かれている。記号か。3835 は文字の半分が欠損しているため判読に窮するが、「の」であろうか。3836 も同様に大半が欠損しており、判読不明。但し、他の墨書とは異なるやや複雑な文字である可能性は高い。3839 ～ 3843 は貿易陶磁。3839 は口禿の白磁小碗。3840 は龍泉窯系青磁碗。体部外面には連弁文が施されている。3814 は龍泉窯系皿。口縁部を外反させ、端部を上方につまみ上げている。3842 は白磁碗の底部。見込みに沈線状の段が認められる。3843 は青磁香炉。W43 は漆椀の底部片。高台部に欠損は認められず、やや突出するに止まっている。内面朱、外面黒の漆が施されている。一部に被熱した痕跡が観察された。W44 は角材状の木製品。１ヶ所穿孔されている。建具関連の部材か。M9 は金属の鋲。M10 は金属が丸められた製品。S380 は五輪塔の火輪。全幅に対して高さがあり、空風輪のほぞに対する穴を持ち、底面は平坦に仕上げられている。軒先の反り上がりは欠損により不明であるが、稜線から推定すれば、あまり彎曲はないものと思われる。99DSX01（谷地形）の第 4 層から出土しているが、火輪の時期はもう少し下がる可能性があり、後世に投棄されたものが沈み込みによりこの層位から出土したことも考えられる。

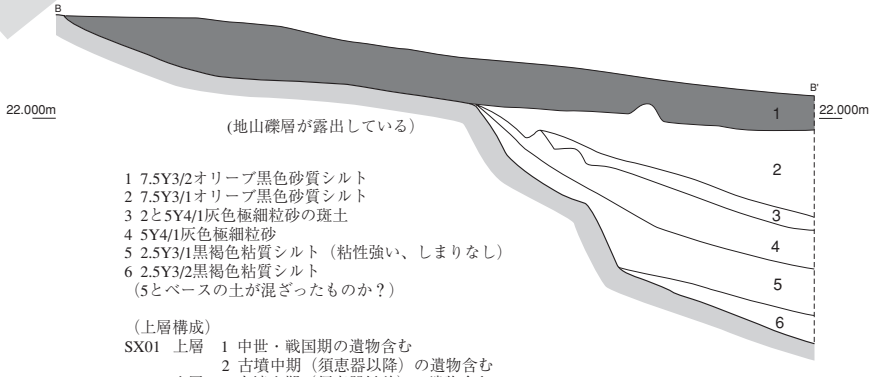


99DSX01断面図（縦1:100、横1:200）

0　近世後半以降の堆積（アミ伏部分）
1 7.5Y4/1灰色粘土
2 7.5Y4/1灰色粘質シルト
（中粒砂を多く含む。植物遺体を多少含む。1cm以下の5Y6/2灰オリーブ色シルトブロックを多く含む）
3 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
4 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト（中粒砂を多く含む）
5 7.5YR3/1黒褐色粘質土（植物遺体を若干含む）
6 10Y1.7/1黒色粘土
7 7.5YR3/2極暗褐色粘土（植物遺体を多量に含む）
8 10YR3/2黒
9 10YR2/1褐色粘土（植物遺体を多量に含む）
10 2.5Y4/1黄灰色中粒砂（粘質極めて強い）
11 N7/灰白色粘土灰白色粘土

層序関係
第1～3層　中世後半以降：1
第4・5層　中世前半：2、7

99ASX01断面図（1:50）

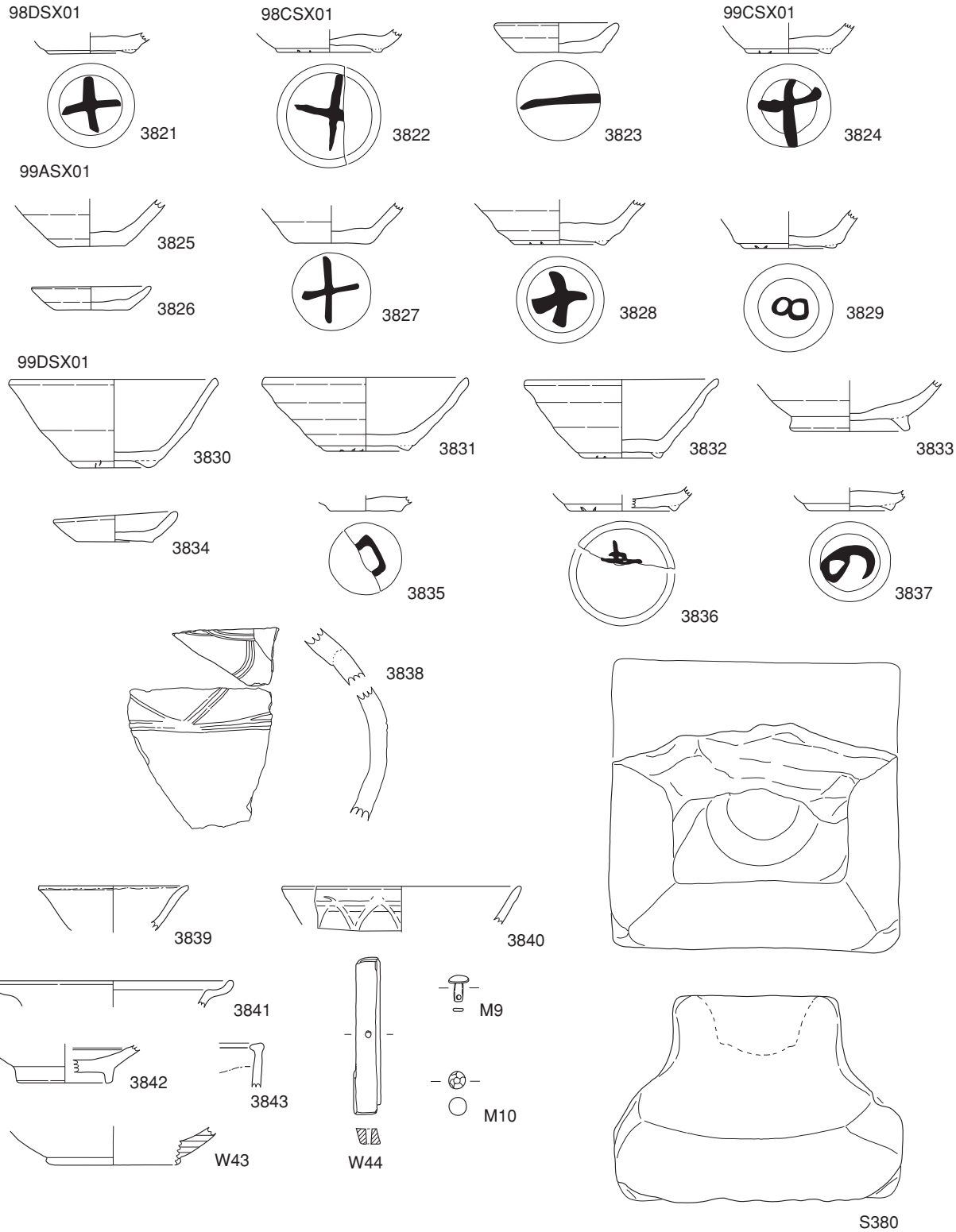


（地山礫層が露出している）

1 7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト
2 7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト
3 2と5Y4/1灰色極細粒砂の斑土
4 5Y4/1灰色極細粒砂
5 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト（粘性強い、しまりなし）
6 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト
（5とベースの土が混ざったものか？）

（上層構成）
SX01　上層　1 中世・戦国期の遺物含む
　　2 古墳中期（須恵器以降）の遺物含む
　中層　3 古墳中期（須恵器以前）の遺物含む
　下層　4 灰色砂層・古墳中期・水位上昇時か
　　5.6 古墳中期（3よりやや古い土器）の遺物含む

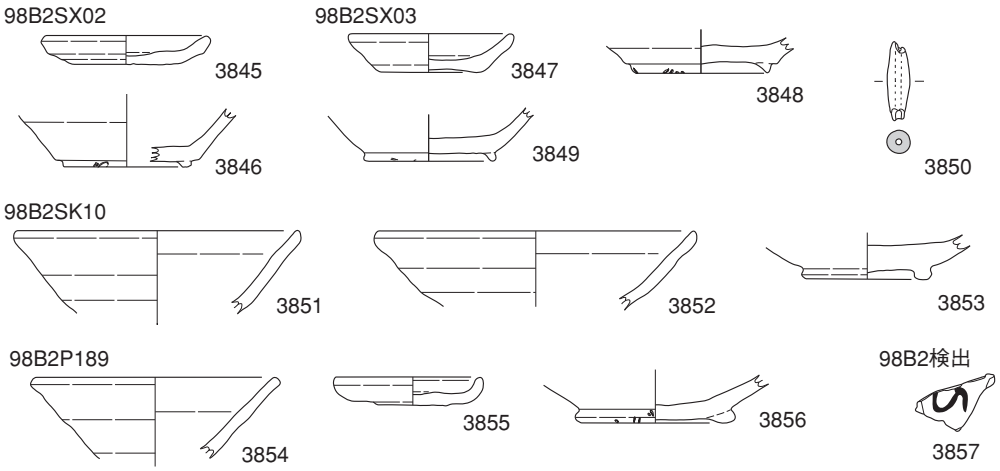
第505図　谷地形概略図（1:3000）



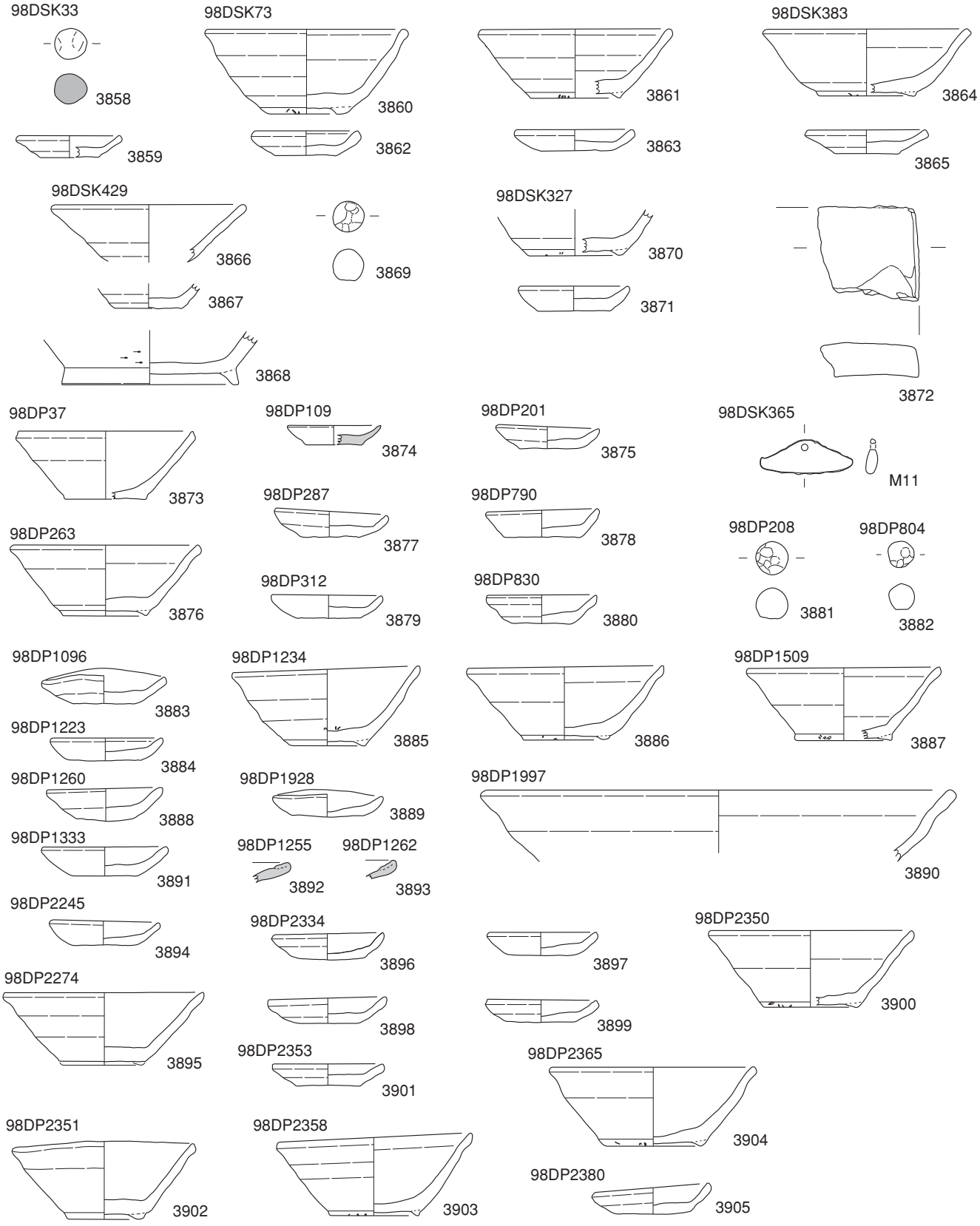
第506図　谷出土遺物実測図（1:4）

（４）その他の遺構

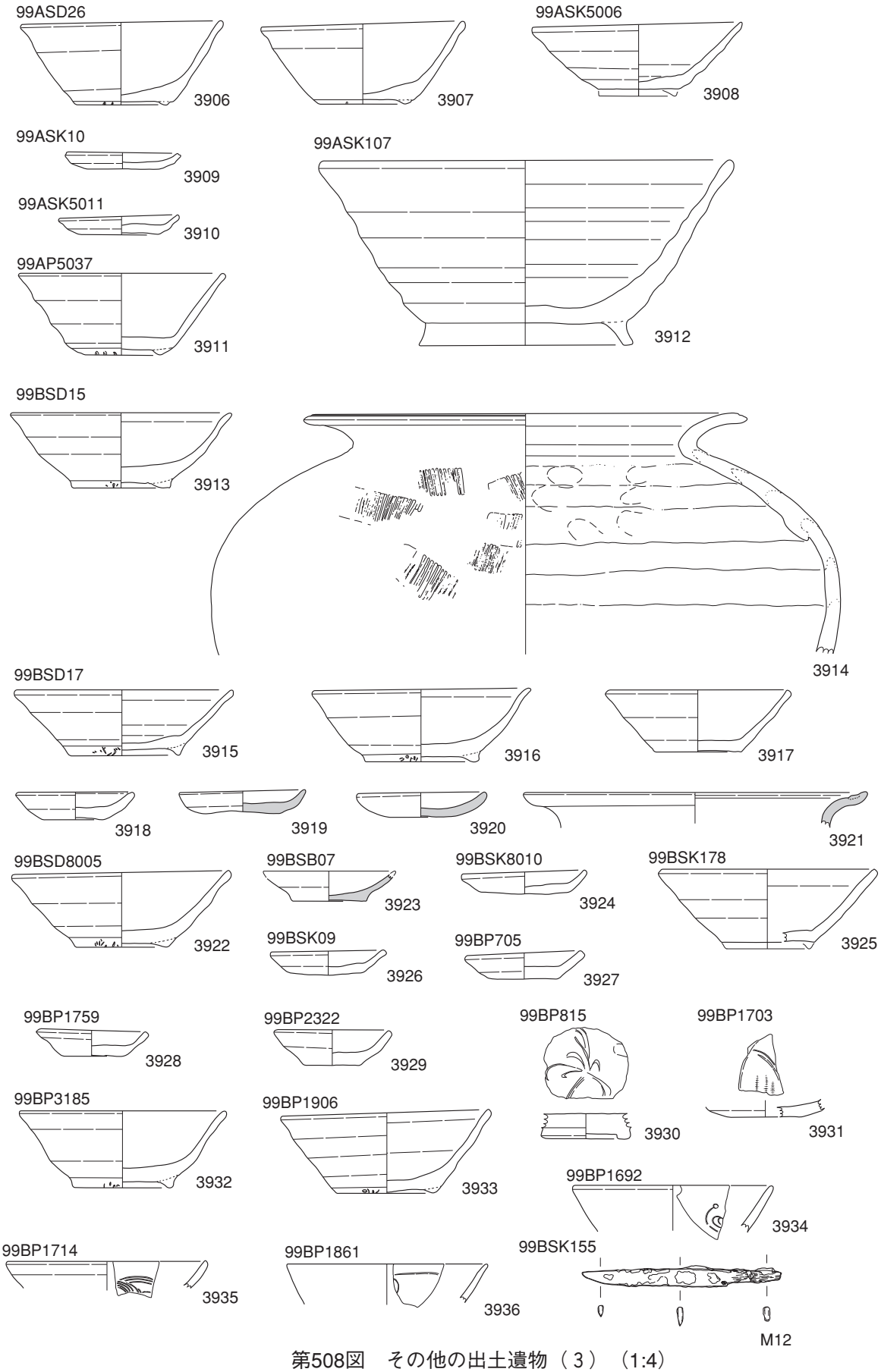
水入遺跡は上記以外にも膨大な数にのぼる遺構が確認されている。それらの概要については、巻末の一覧表を参照されたい。また、出土遺物についても遺構の時期決定に有効であると考えられるものを選別し、調査区単位で掲載した。同じく一覧表を参照されたい。



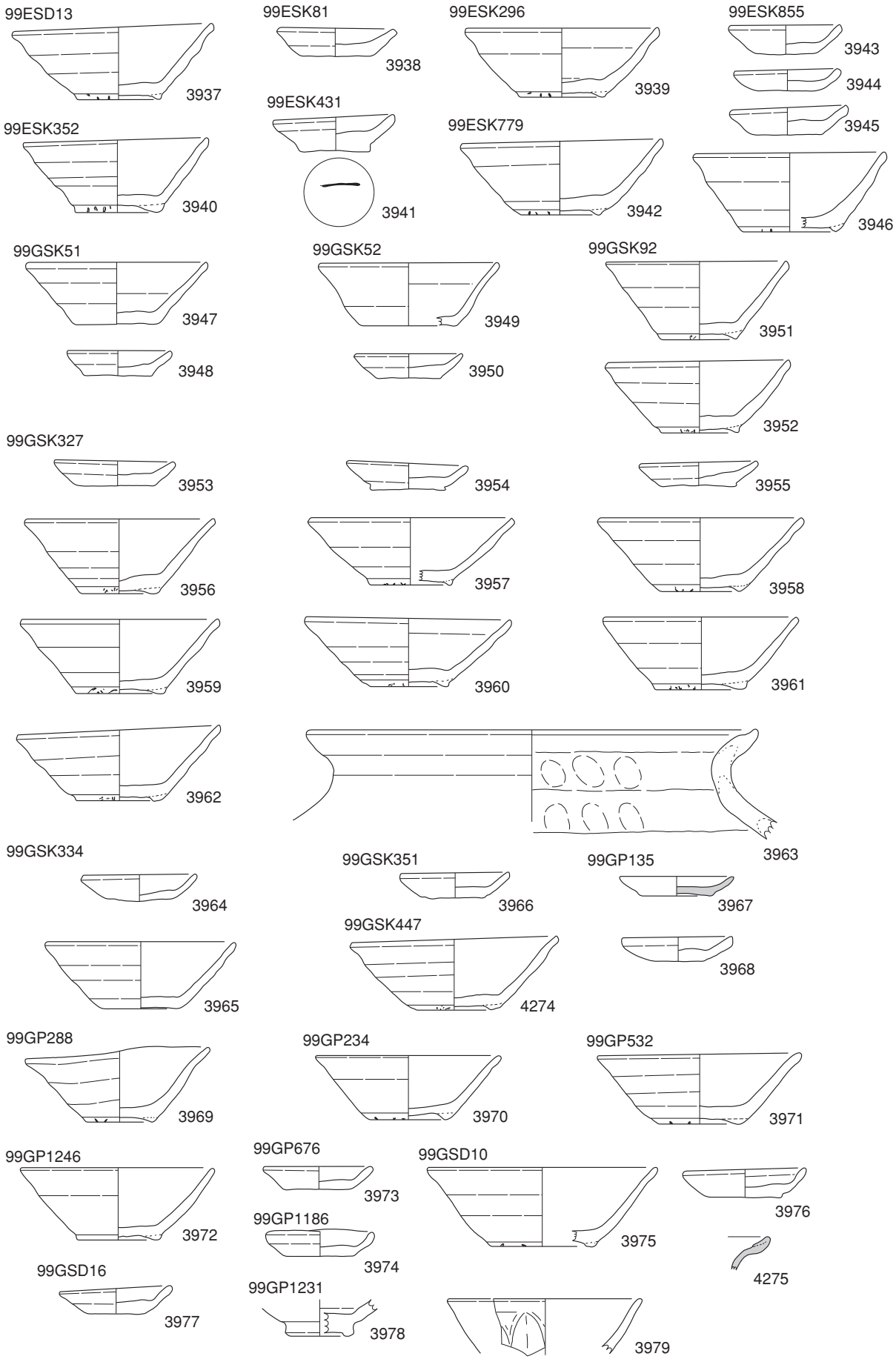
第507図　その他の出土遺物（１）（1:4）



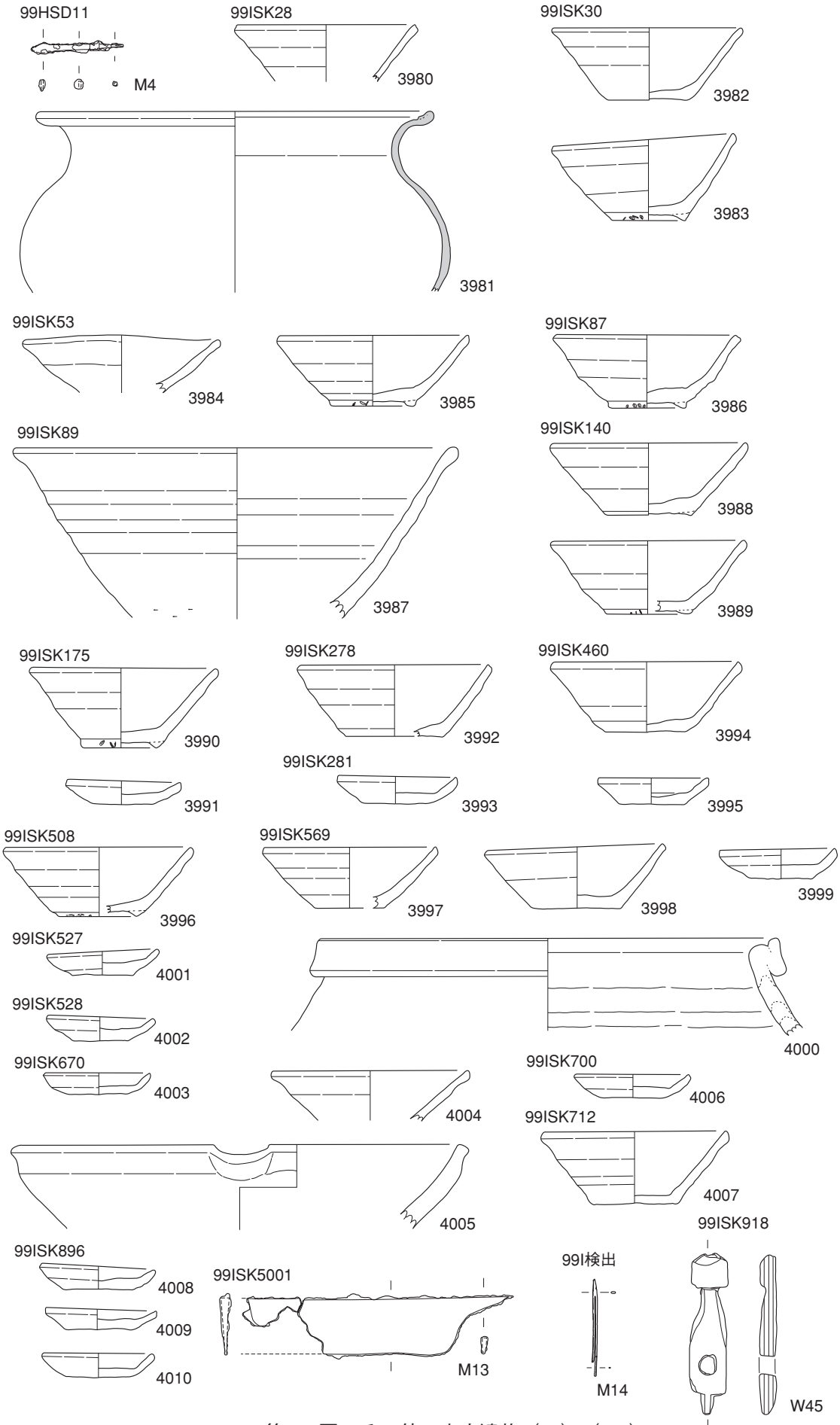
第508図　その他の出土遺物（２）（1:4）



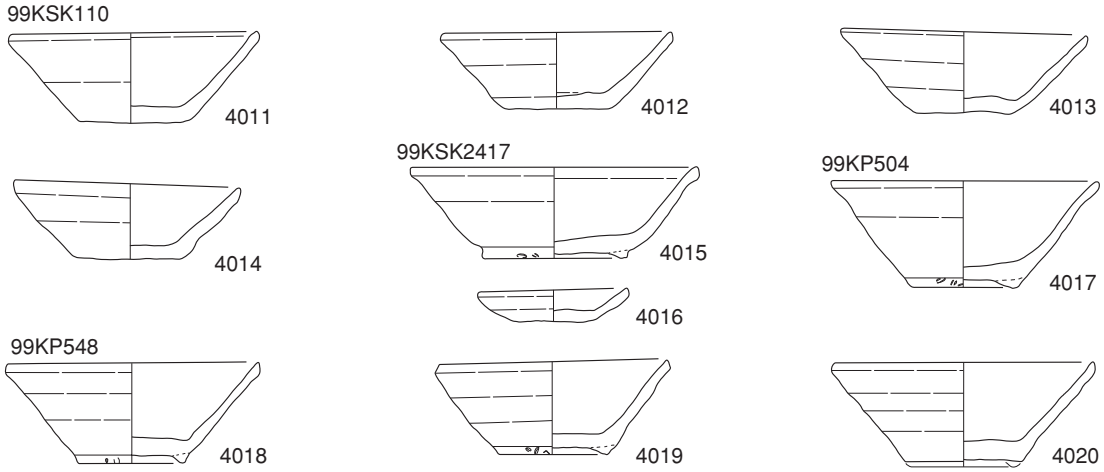
第508図　その他の出土遺物（３）（1:4）



第510図　その他の出土遺物（４）（1:4）



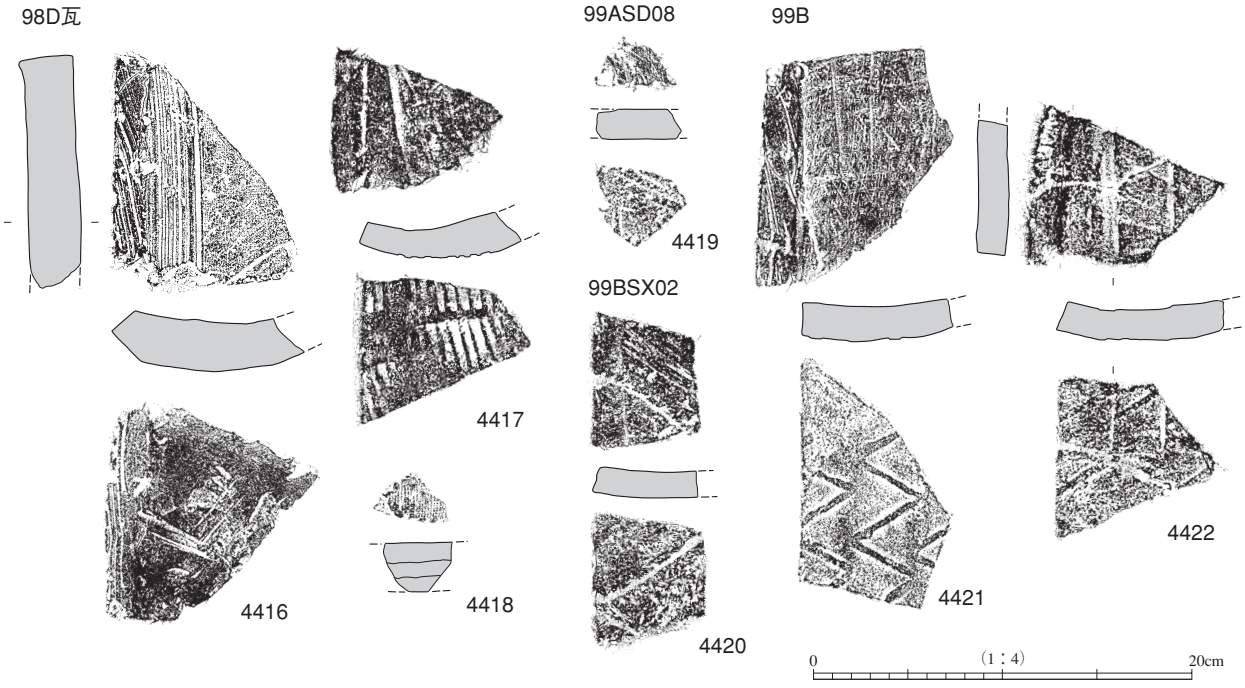
第511図　その他の出土遺物（５）（1:4）



第512図　その他の出土遺物（６）（1:4）

補足：水入遺跡出土の中世瓦　広大な調査面積ではあるが、古代～中世の瓦は下に提示した程度でごく少数であった。この遺跡の範囲内に当該期の瓦葺き建物があった可能性はかなり低いと言わざるを得ない。布目瓦片の全てを図示したが、4417を除き硬質な焼成である。4416は須恵質で古代の丸瓦の可能性もある。凸面指ナデ消し、凹面は糸切痕と側縁のヘラ削り。4417は凸面に平行タタキの平瓦と推定されるが、遺跡の北にある豊田市勘学院文護寺跡で出土する古代瓦の平行タタキに類似する。4421・4422は中世陶器と同じ焼成で、凸面に幾何学文タタキで天神前遺跡や郷上遺跡出土のものと同類である。

以上の瓦は、瓦という以外にまとまりがほとんどなく、出土地点も大きく離れることから、瓦どうしの関連もほとんどないであろう。本来屋根葺き材であるはずの瓦であるが、板のような形状は応用がきくとおもわれる。ささいなきっかけで持ち込まれたと考えられる。（永井）



第513図　水入遺跡出土の中世瓦（1:4）

第８章　戦国時代から江戸時代前半の遺構・遺物

第１節　大溝

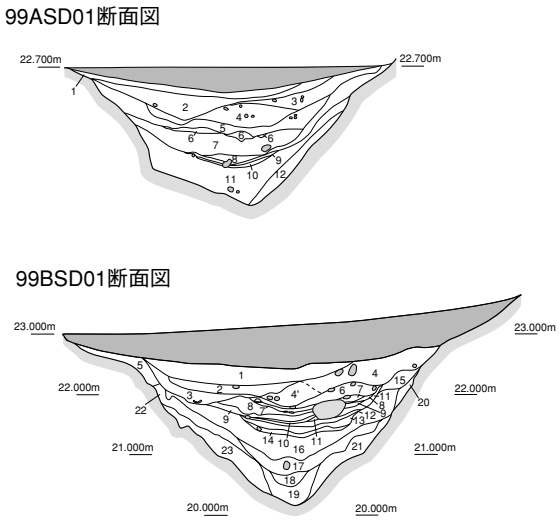
古墳時代掘削された大溝（SD01)はこの時期にいたっても完全に埋没することはなく、大屋敷地区に設定された98B2 － 99A － 99B － 99C の４調査区を縦断して検出されており、特徴として次の２点をあげることができる。先ず１点目としては、溝幅が何らかの理由により拡幅されていることである。掘削時の掘形は薬研状に掘削されていたが、前章で述べたように中世前期段階では埋没が進み、浅い皿状の断面を呈するようになっていた。戦国期に入るとその大溝を溝底は浚渫せずに、溝幅のみを拡幅するのである。その結果、大溝は深さが1m 前後であるのに対し、溝幅は最大 30m、平均で 20m 前後の広さを持つようになる。さらに、本来は宝蔵川に向かって直線的に掘削されていた大溝を、99C 区北東壁付近で南東方向(宝蔵川下流、矢作川方向）に分岐させるような溝(99CSD02)が掘削される。流水については確証を得ていないが、覆土の土質が粘質土であったことから考えると、少なくとも雨水などによる滞水はあったものと思われる。

２点目は大溝南東側に土塁（99BSX02）が再構築されることである。本来大溝の両側には古墳時代の大溝掘削時に排土を利用したと考えられる土塁が構築されていた。大溝北西側の土塁（99BSX03）は大溝拡幅時にかなりの部分が削平されたと思われ、断続的に残存しているだけであった。これに対し、南東側に構築された 99BSX02 はこの土塁を基底部（第 515 図 11・12 層）とし、その上に盛土をすることで 99BSX02 として再構築している（第 515 図 9・10 層）。99BSX02 の規模は上底 2.5 ～ 4.0m、下底 4.5 ～ 8.5m、高さ 0.9m 前後を測り、断面台形状を呈する。

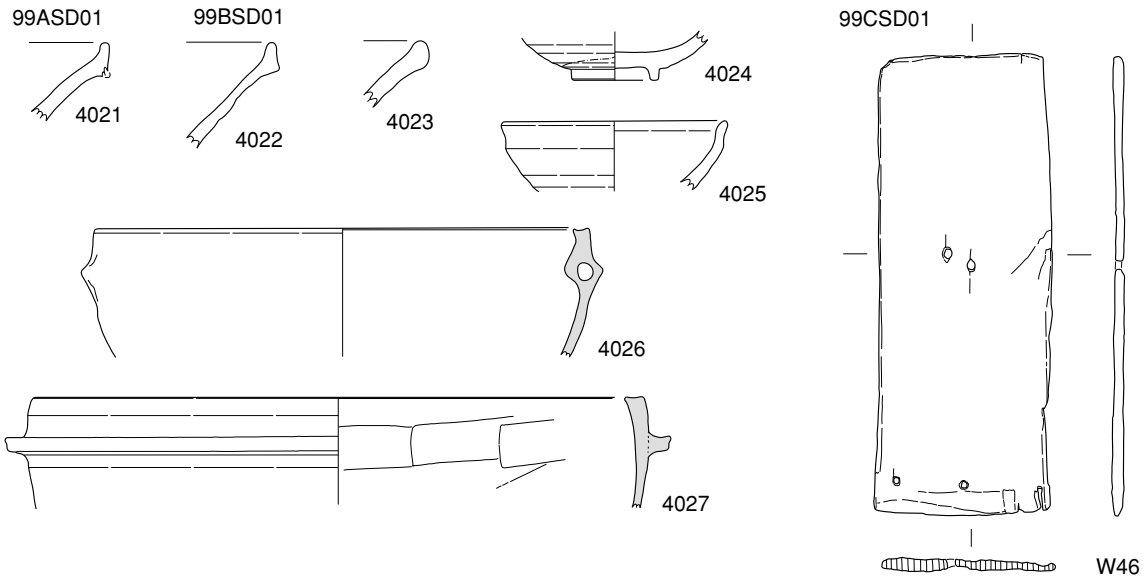
さらにこの段階には 99BSX02 に直交し、２基が並行するような土塁（99BSX01･04）が新たに構築されている。99BSX01 は 99BSD03 と 99BSD06 の間に造られた土塁で、XG20n グリッドで 99BSX02 から南東方向へ直角に屈曲し、98C1 で検出された土塁へと続いてゆく。上底 1.5 ～ 2.0m、下底 4.0 ～ 4.5m、高さ 0.9m 前後を測り、断面は台形状を呈する。99BSX01 南西側法面は一段テラス状の平坦面を造り、その後 99BSD03 へと伸びていく。この 99BSX01 の埋土中には大量の灰釉系陶器が人頭大の円礫と共に盛り土内に混入していた。99BSX04 は 99BSD03 と 99BSD05 の間に造られた堤状遺構で、IG11 グリッドで 99BSX02 から 南東方向へ直角に屈曲する。規模は上底 0.6 ～ 1.0m、下底 3.0 ～ 4.0m を測り、断面台形状を呈する。遺構検出面からの比高差は屈曲部分の 0.6m が最高で、調査区端へ近づくに従い徐々に低くなり、IG3n グリッド以南では高まりは観察されなかった。これらの土塁は構築後何度か修復の手が加えられており、最上層の埋土からは近世初頭の遺物が出土している。

4021 ～ 4027、W46 は大溝から出土した遺物。4021 ～ 4023 は瀬戸美濃産擂鉢で、4021 は大窯３段階後半、4022 は大窯１段階、4023 は古瀬戸後Ⅳ新期。8004 は瀬戸美濃産の内外面とも灰釉が施された碗。時

期は近世後期にまで下がることから、大溝がその機能を停止した後の遺物と考えられる。4025は瀬戸美濃産天目茶碗。大窯4段階の前半。4026は半球型内耳鍋。内面にはハケメ調整の痕跡が認められるが、摩滅により詳細は不明。外面にススは付着していない。4027は羽釜。外面にスス付着。ともに16世紀後半か。Wは板状木製品。本来は折敷の底板であったと考えられる。合計4ヶ所の穿孔が行われている。4028～4074は大溝に直行する土塁99BSX01上層からの出土遺物。4028・4029は灰釉系陶器の椀と皿。4030はロクロ成形による土師器皿。4031は瀬戸美濃産鉄釉丸皿で大窯3段階後半。4032は灰釉折縁皿。大窯4段階前半。4033は仏餉具。内外面ともに鉄釉が掛けられているが、色調は紫色に近い。時期は大窯1段階。出土が希少な器種である。4034は小壺。古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期に属する。4035～4039は鉄釉擂鉢。4035が大窯3段階後半である以外は、大窯1段階の遺物である。4044は丸瓦片。色調は灰白色で、内面には布目が観察される。4045は大窯3または4段階に該当する甕。外面は鉄釉が体部過半にまで施され、内面は口縁部周辺のみ鉄釉が掛けられている。釉調は発色不良もしくは2次的被熱により黄褐色に近くなっている。4046～4074、S381は大溝に直行する土塁99BSX01の下層から出土した遺物群。4046～4058は灰釉系陶器の椀で、時期は藤澤編年の6～8型式。掲載した遺物以外にも多数の灰釉系陶器の椀がほぼ完器で出土している。いずれの椀も内面は摩滅しており、使用された後に埋土中へ混入した可能性が高い。4065～4064は灰釉系陶器皿。椀同様完器に近い状態で埋土中から出土している。時期は椀と同時期である。4068～



大溝断面図（1:100）
（土色説明・実測位置は第7章第14図参照）

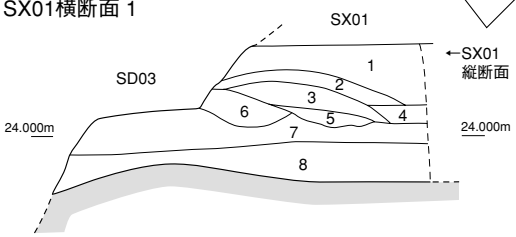


第514図　大溝（断面図1:100、実測図1:4）

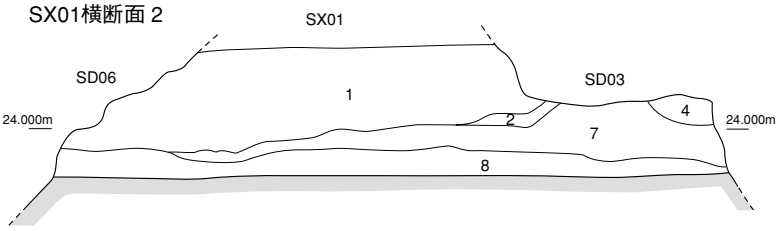


写真　99BSD01第1層作業風景（北から）

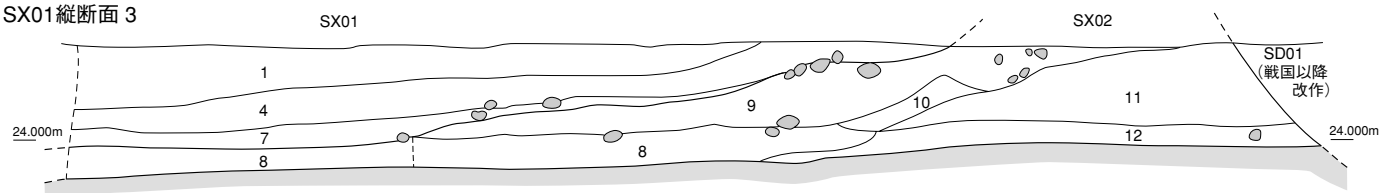
SX01横断面 1



SX01横断面 2



SX01縦断面 3



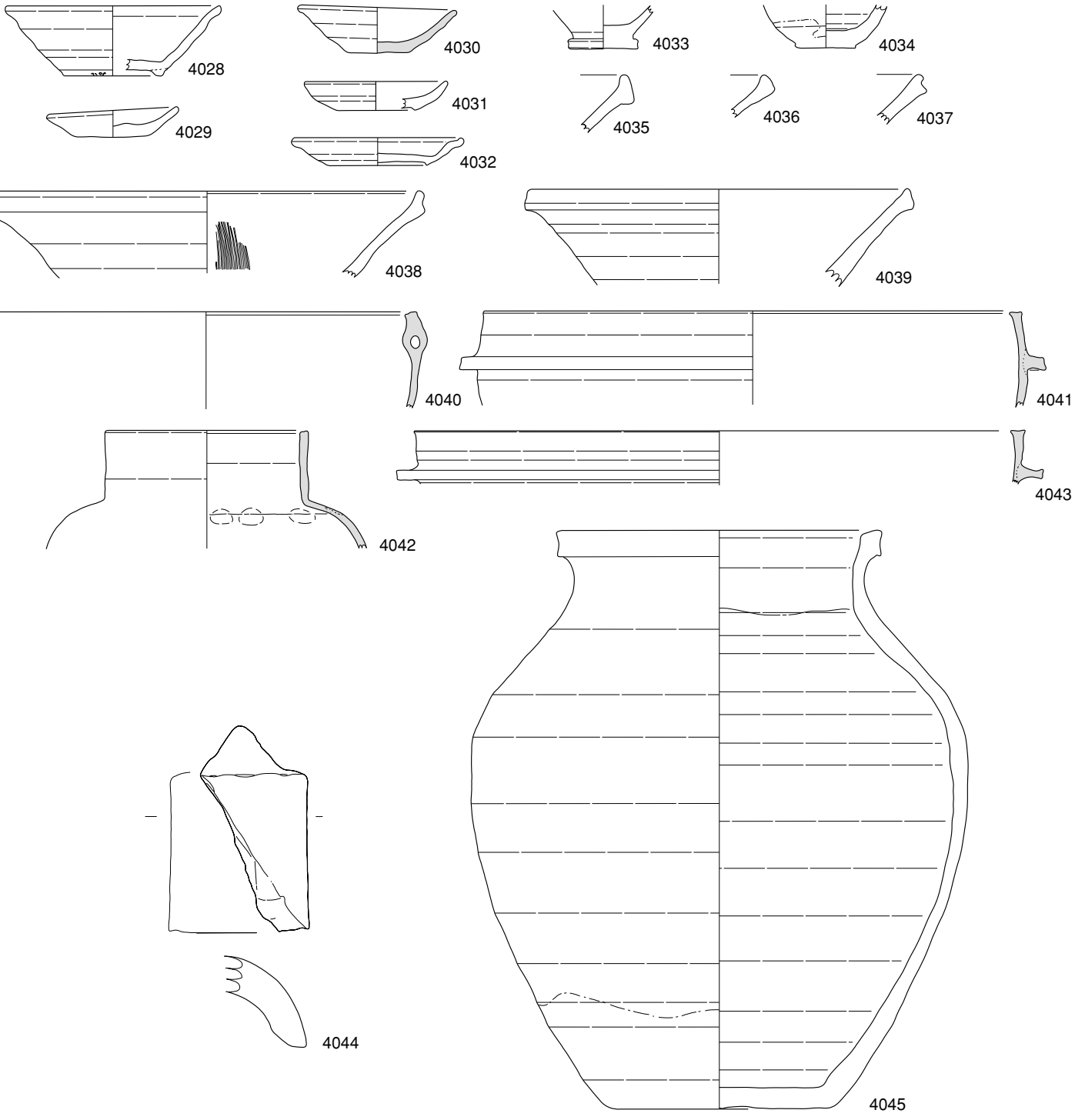
SX01
1 10YR8/8黄褐色地山粒～ブロック、黒色土ブロックわずかに入る、礫なし。
2 10YR8/8黄褐色地山粒～ブロックと10YR3/1黒褐色粘質シルトの混合、やや黒の方が多い。
3 2より10YR3/1シルトが多い。
4 10YR8/8黄褐色地山粒～ブロック（5cm以下）と10YR3/1黒褐色粘質シルトが5:5で混合、礫若干入る。
5 地山粒～ブロック（2cm以下）が主体で黒褐色土が入る。
6 地山粒～ブロック（2cm以下）と黒褐色の混合で、黒褐色土が5より多い。
7 10YR5/1褐灰色粘質強いシルト、小礫若干入る、灰釉系陶器が入る。
8 10YR3/1黒粘質強いシルト、しまりなし、5cm以下の円礫若干入る、自然堆積土、遺物はほとんどなく土師質のものが中心。
SX02
9 10YR2/1黒色粘質シルト、8に似るが、15cm以下の円礫多い。
10 10YR3/1黒褐色粘質シルト主体に、10YR8/8黄褐色地山粒が若干入る、礫なし。
11 10YR8/8黄褐色地山主体、10YR3/1黒褐色土が若干入るが縦方向に細長く入る、1の方が圧倒的に地山土の純度高い。
12 10YR3/1黒褐色粘質シルト、8よりやや明るい、色調、礫ほとんどない他は、8とあまり変わらない。

層序関係
SX01
1層：1
2層：2～7
3層：8

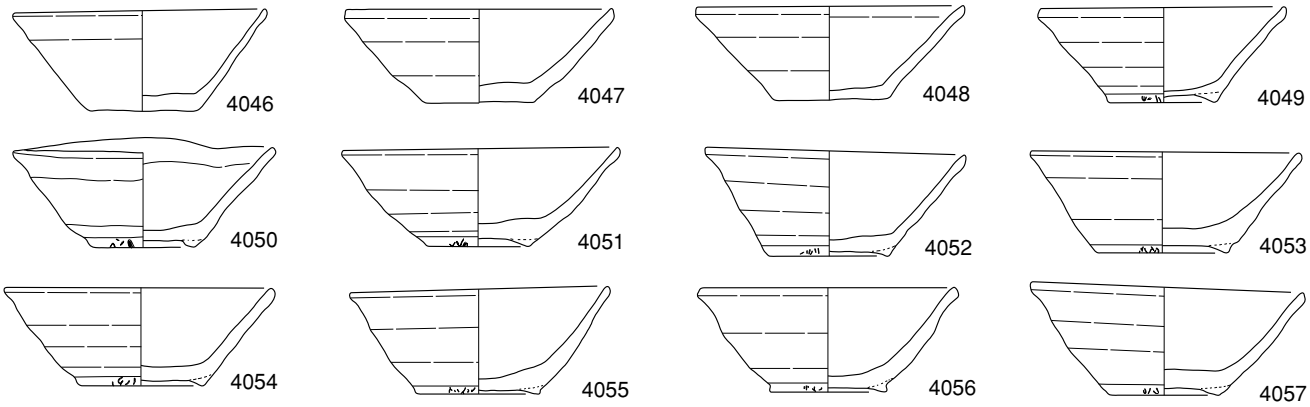
SX02
黒礫層：9.10（8の一部）
1　層：11
2　層：12

第515図　土塁（１）（平面図1:600、断面図1:50、99BSD03は1:100）

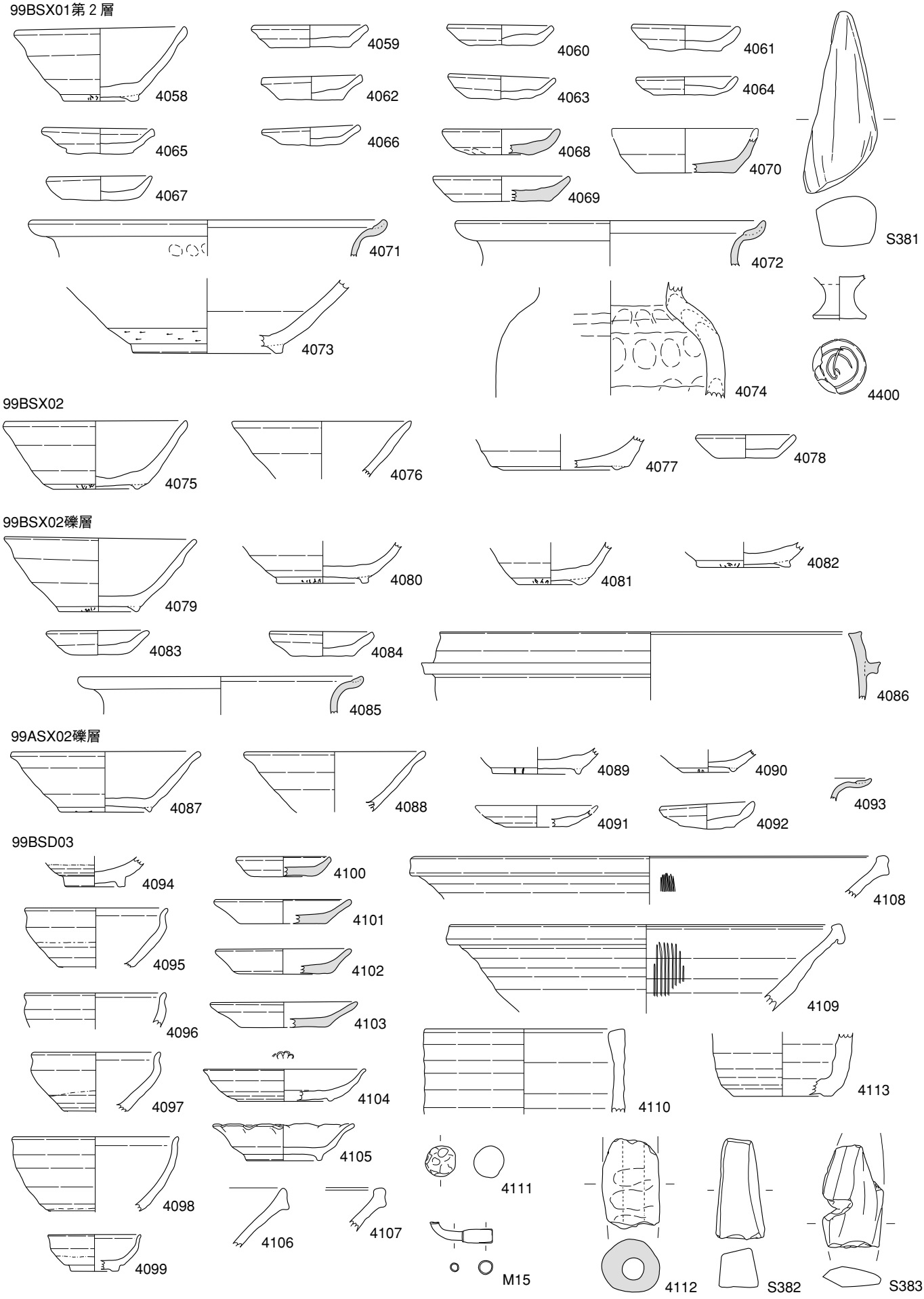
99BSX01第１層



99BSX01第２層

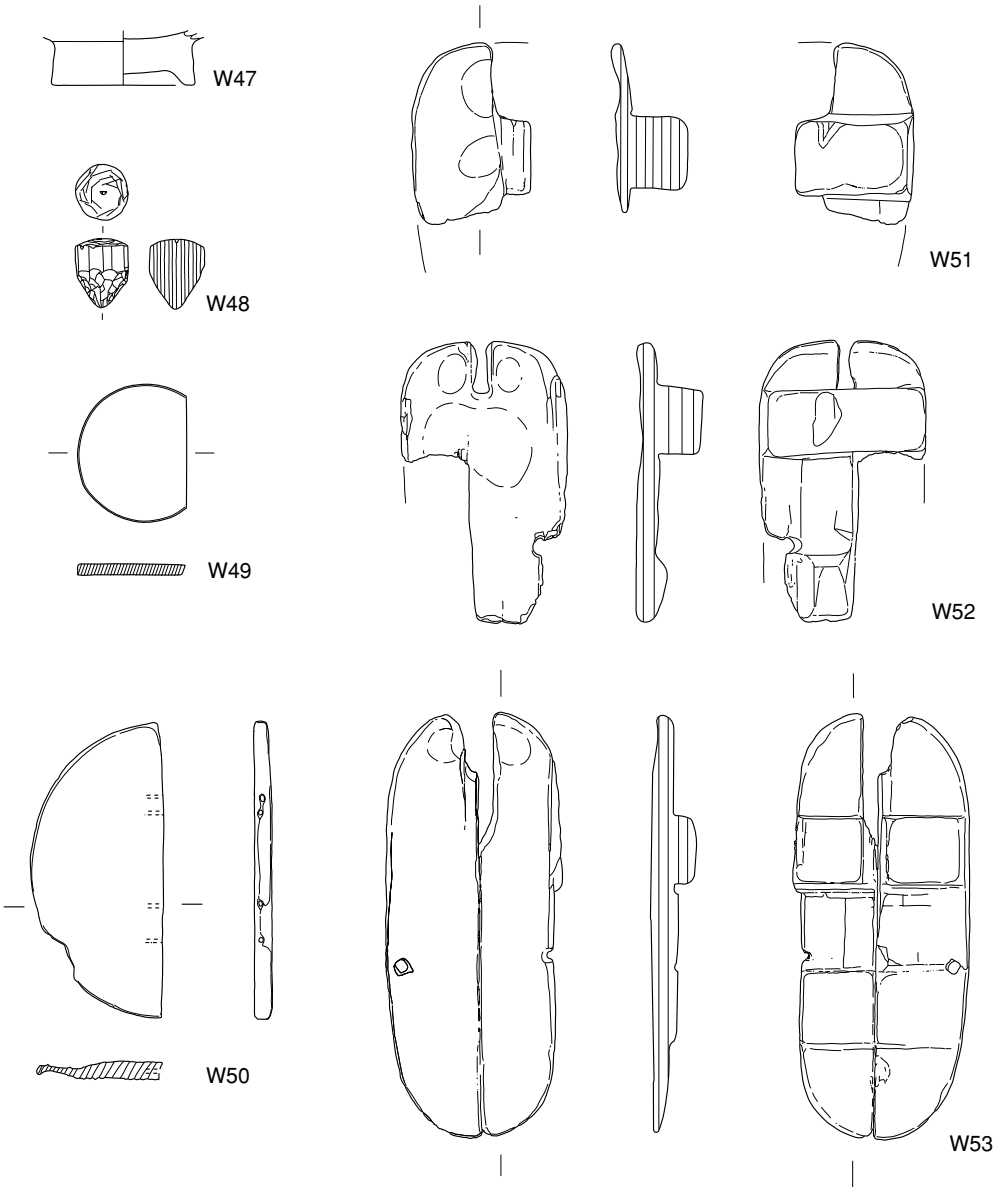


第516図　土塁（２）（実測図1:4）



第517図　土塁（３）・99BSD03（実測図1:4）

4070は土師器皿。4068は出土例の少ない非ロクロ成形による皿。内面及び外面口縁部周辺には成形後にナデ調整が施されるが、体部下半には成型時の指押さえの痕跡が観察できる。4071・4072は「伊勢型鍋」。4074は常滑産の壺。Sは砥石。4075～4093は大溝と並行する堤状遺構99BSX02からの出土遺物。4086・4091以外は灰釉系陶器、伊勢型鍋など中世前半に該当する遺物群であり、大溝周辺の改変事業に際し混入したと考えられる一群である。次は大溝に直交し、矢作川方向へ延びる溝99BSD03からの出土遺物を掲示する。4100～4103は土師器皿。4100はロクロ成形、その他の皿は非ロクロ成形。4094～4099、4104～4113は瀬戸美濃産の施釉陶器。4094～4098は鉄釉天目茶碗。4098が大窯1段階、その他は大窯4段階に相当する。4099は鉄釉が掛けられた小天目茶碗。時期は大窯4段階前半。4104は大窯1段階の灰釉端反皿。見込みに印花が施されている。4105は灰釉稜花皿で大窯1段階の遺物である。4106～4109は鉄釉擂鉢。4106が大窯1段階に該当し、他の擂鉢は大窯4段階に相当する。4110は窯道具であるエンゴロ。大窯から連房第1・2小期に使用されたタイプである。4113は連房第1・2小期の徳利底部。4112



第518図　99BSD03出土遺物実測図（1:4）

は土錘、S382・S383は砥石。W47～W53は木製品。W47は漆椀の高台部。内・外面ともに黒漆、高台内に漆で文様が描かれているが、描かれた文様は不明。W48は独楽か。但し、軸をはめ込むための穴は浅く、未製品の可能性も考えられる。W49・W50は曲物の底板。W50には底板を接合するため側面に4ヶ所の木釘が打ち込まれていた。W51～W53は一木作りの下駄。（川井）

補足：水入遺跡出土の銭貨　水入遺跡では古代の土器に銭貨が共伴する事例はなかったが、中・近世の銭貨が多数出土した。出土銭貨に特徴的なものはなかったが、出土状況に特徴的なものとして62枚が出土した99GSK54を挙げておきたい。この土坑は長軸径88cm最深部38cmの柱掘形の可能性が高く、柱を据え掘形を埋める段階で埋納したとみられる。この一群には藁とみられる紐が穴に残っていた。他に銭貨が5枚以上出土した例は99BSK158（6枚）、99ISK875（9枚）があるが、前者は94×70cmの方形土坑で、中世後半の土坑墓の可能性が高い。（永井邦仁）

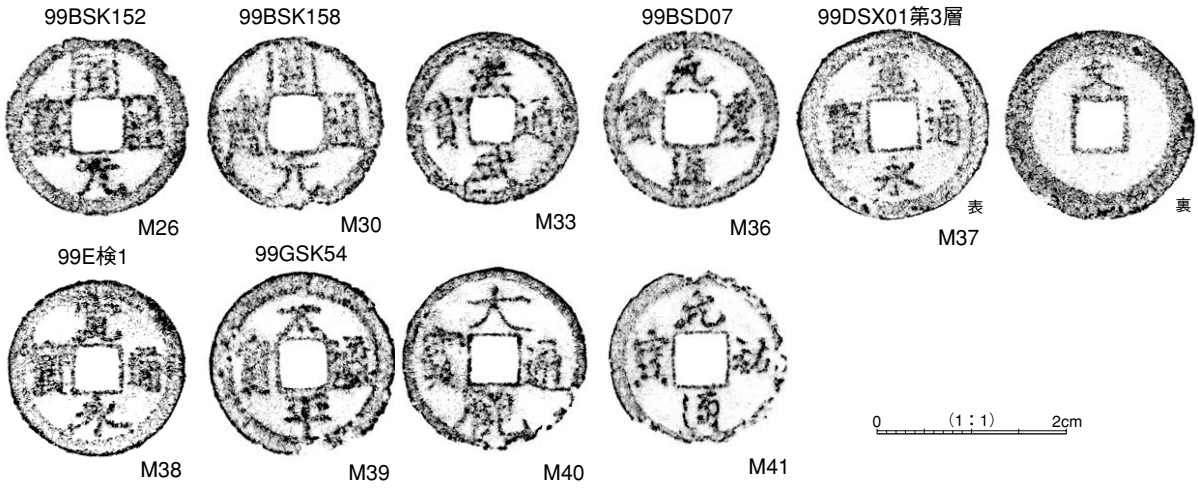


写真　99GSK54土層断面と銭貨出土状況（上：↓の位置）と99BSK158銭貨出土状況（下）

第21表　水入遺跡出土の銭貨一覧

番号	種類	区	遺構	直径(cm)	重量(g)
M26	開元通寶	99B	SK152	2.4	2.8
M27	古銭（不明）	99B	SK152	2.4	2.2
M28	皇宋通寶（篆書）	99B	SK152	2.4	2.8
M29	□□通寶	99B	SK152	2.5	2.6
M30	開元通寶	99B	SK158	2.3	1.9
M31	天聖元寶	99B	SK158	2.5	3.3
M32	古銭（不明）	99B	SK158	2.4	3.2
M33	洪武通寶	99B	SK158	2.3	2.6
M34	古銭（不明）	99B	SK158	2.4	1.9
M35	祥符元寶	99B	SK158	2.6	2.8
M36	元豊通寶（草書）	99B	SD07	2.4	2.7
M37	寛永通寶（「文」）	99E	検出面	2.5	3.4
M38	寛永通寶	99D	SX01第3層	2.4	3.8
M39	太平通寶	99G	SK54	2.5	2.7
M40	大観通寶	99G	SK54	2.5	—
M41	元祐通寶	99G	SK54	2.4	—
M42	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M43	開元通寶	99G	SK54	2.5	2.3
M44	開元通寶	99G	SK54	2.5	—
M45	古銭（不明）	99G	SK54	2.5	—
M46	古銭（不明）	99G	SK54	2.5	—
M47	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M48	□□元寶	99G	SK54	2.4	2.9
M49	政和通寶	99G	SK54	2.4	2.6
M50	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M51	□宋□□	99G	SK54	2.5	—
M52	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M53	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M54	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M55	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M56	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M57	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M58	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M59	古銭（不明）	99G	SK54	2.3	—
M60	古銭（不明）	99G	SK54	2.5	—
M61	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M62	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M63	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M64	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M65	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M66	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M67	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M68	古銭（不明）	99G	SK54	2.5	2.6
M69	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M70	開元通寶	99G	SK54	2.4	—

番号	種類	区	遺構	直径(cm)	重量(g)
M71	古銭（不明）	99G	SK54	2.6	3.2
M72	□□元寶	99G	SK54	2.4	—
M73	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M74	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	3.3
M75	元豊通寶	99G	SK54	2.4	—
M76	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M77	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M78	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M79	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M80	古銭（不明）	99G	SK54	2.5	3.0
M81	大観通寶	99G	SK54	2.3	—
M82	皇宋通寶	99G	SK54	2.5	2.5
M83	皇宋通寶	99G	SK54	2.4	—
M84	古銭（不明）	99G	SK54	2.4	—
M85	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M86	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M87	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M88	皇□通寶	99G	SK54	—	—
M89	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M90	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M91	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M92	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M93	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M94	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M95	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M96	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M97	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M98	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M99	古銭（不明）	99G	SK54	—	—
M100	祥符元寶	99G	SK54	—	—
M101	古銭（不明）	99D	SX01第3層	—	—
M102	寛永通寶	99A	表土	2.3	1.9
M103	古銭（不明）	99 I	SK875	2.4	3.8
M104	□永通寶	99 I	SK875	2.4	3.1
M105	□□通寶	99 I	SK875	2.4	2.3
M106	古銭（不明）	99 I	SK875	2.4	2.8
M107	古銭（不明）	99 I	SK875	2.5	4.4
M108	古銭（不明）	99 I	SK875	2.5	2.2
M109	古銭（不明）	99 I	SK875	2.6	2.7
M110	寛永通宝	99 I	SK875	2.4	2.7
M111	古銭（不明）	99 I	SK875	—	—
M112	古銭（不明）	99J	SK116	—	—
M113	元豊通寶	99C	SX01 1層		
M114	寛永通寶	99I	検出面	2.3	2.4
M115	古銭（不明）	99K	P280	—	—



第519図　水入遺跡出土の銭貨拓影図

第２節　区画溝

99A･B･C区および98･99D区において検出された溝状遺構は、一定の空間を区画するために掘削された溝であると思われる。そこで、区画を構成すると考えられる溝群を同一遺構とし、以下の記述を行う。なお記述に際し、“区画溝”は１条もしくは複数の溝の集合体を、“区画”は区画溝によって囲い込まれる空間を意味している。

区画溝Ａ　99ASD14～19、99BSD8022で構成される区画溝。区画四辺のうち北西辺を限る溝は調査区外のため検出されていない。区画の規模は、南東－北西方向は18m以上、北東－南西方向は28～36mを測る。いずれの溝も掘形は浅く、水流・滞水の痕跡は認められなかった。検出された区画溝のうち、南西辺及び南東辺を限る溝は複数条の溝が掘削されていることから、区画成立後少なくとも２度の掘り直しが行われている。また、99BSD8022も断面観察の結果、最低２度掘り直しされていることが確認された。最大規模となる区画溝は99BSD8022－99ASD14－99ASD19で構成され、区画の規模は北東－南西方向で36mを測る。次いで規模の大きな区画は北東－南西方向で30mを測る99BSD8022－99ASD15－99ASD17の区画溝で構成される。最も小さな区画は北東－南西方向が28mを測る99BSD8022－99ASD14(15)－99ASD16の区画溝である。

尚、99ASD19南西側に検出された99ASD22も区画溝の一部であると思われるが、大半が調査区外となるため規模や内部構造は不明であるが、ここではその可能性を指摘するに留めておきたい。

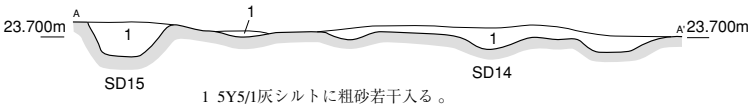
第22表　区画溝Ａ

	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
99ASD14	4	0.5	4～29	Ｕ字型	北東→中央←南西
99ASD15	1.6	0.5	14～30	Ｕ字型	ほぼ水平
99ASD16	2.1	0.8	18～33	Ｕ字型	北西→南東
99ASD17	1.6	0.3	10～12	Ｕ字型	ほぼ水平
99ASD19	3.3	2.2	16～51	Ｕ字型	ほぼ水平
99BSD8022	3.2	0.6	9～60	Ｕ字型	ほぼ水平，IG1fは浅い

4114～4127は瀬戸美濃産施釉陶器で藤澤編年の古瀬戸後期から連房初頭までの遺物が出土している。4114・4115は鉄釉天目茶碗。前者が連房第１小期、後者が大窯１段階に該当する。4116～4110は長石釉丸皿。時期は4116が連房第１・２小期その他は大窯４段階後半。4118は口縁部が輪花状となっている。4119は内面無釉、外面鉄釉が施された筒型香炉。古瀬戸後ⅢまたはⅣ期の遺物である。4120～4126は鉄釉擂鉢。大窯３段階から連房第１・２小期までの遺物が出土している。4128～4131は土師器鍋。いずれの遺物も外面にススが付着する。4131はいわゆる内彎鍋。4132は鉄釉天目茶碗、時期は大窯４段階前半。4133は建水。内外面ともに鉄釉が施されている。大窯３段階後半の遺物。4137は鉄釉腰折皿、古瀬戸後Ⅳ新期。4139・4140は鉄釉天目茶碗、共に大窯４段階後半。4141・4143は灰釉丸皿、4145は灰釉内禿皿。見込み部分の釉が丸くふき取られている。大窯３段階前半。4142は長石釉の施されたいわゆる志野丸皿で、時期は連房第１・２小期。4144は大窯３段階前半に属する鉄釉稜皿。4146は灰釉折縁皿。内面は鎬による削りが施され、見込みの釉はふき取られている。大窯４段階前半に相当する。4147～4151

区画溝A

99ASD14.15



1 5Y5/1灰シルトに粗砂若干入る。

99ASD16



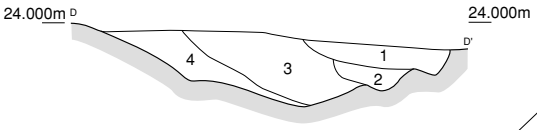
1 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト、地山土、礫なし。
2 10YR4/1褐灰色シルト、地山粒、炭化物若干。

99ASD19



1 10BG5/1青灰シルト。
2 10YR4/1褐灰シルト（炭化物入る）。
3 2に10cm以下の円礫入る。

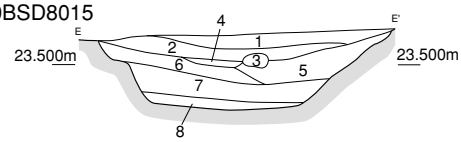
99BSD8022



1 10YR3/2黒褐色粘質シルト（ベースブロック若干）。
2 10YR2/2黒褐色粘質シルト
（炭化物含む、ベースブロック若干）。
3 10YR3/3暗褐色シルト（礫若干）。
4 10YR4/4褐色シルト（植物、2mm大の礫）。

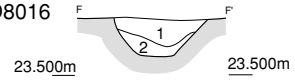
区画溝B

99BSD8015



1 7.5YR4/4褐色シルト（ベースブロック含む）。
2 7.5YR4/3褐色シルト（植物含む）。
3 7.5YR3/4暗褐色細粒砂。
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。
5 10YR3/4暗褐色極細粒砂。
6 10YR4/4褐色細粒砂（中粒砂若干）。
7 10YR3/2黒褐色シルト（礫若干、植物含む）。
8 10YR2/3黒褐色シルト（ベースブロック30%、中粒砂50%）。

99BSD8016



1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト。
2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質シルト。

区画溝D

99ASD05

1 10YR5/1褐灰色極粗粒砂とシルトのラミナ。
2 5B4/1暗青灰色シルト、炭化した植物質を多く含む。

99BSD05

1 2.5GY5/1オリーブ灰砂質シルト、ラミナみえず、植物質・小礫若干入る、
炭化物なし。
2 10YR3/2黒褐色粘質シルト、ラミナみえず、炭化物粒多く、
ベルト付近で遺物（戦国期）多い、小礫若干。
3 2に地山粒（1cm）多く入る。

区画溝C

99ASD03

1 5Y4/3暗オリーブ砂質シルト、地山粒多く、
円礫含む木根など植物質含む。
2 5Y5/1灰砂質シルト、炭化物若干、地山土なし木根など植物質含む。
3 7.YR3/2黒褐シルト、地山土なし。
4 7.5Y3/2黒褐シルトに7.5YR7/6橙地山粒多く含む。

第520図　区画溝（１）（平面図1:1000、断面図1:50）

は土師器皿。4147・4149・4151は非ロクロ成形。4148・4150・4152はロクロ成形。ロクロ成形の土師器皿は、大・中・小の3法量が認められる。このうち出土量が多い法量は中に該当する土師器皿である。4142は古瀬戸後期後半の小壺。4155・4156は龍泉窯系の青磁碗。時期的にはかなり古く、13世紀代の遺物である。4155は口縁がやや外側へ外反し、見込みには双魚が貼付されている。4157～4161は土師器の鍋と釜。

区画溝Ｂ　99BSD8015･8016によって構成される区画溝。区画四辺のうち北西辺は調査区外となり、北東辺は南東辺から鈍角に北へ向かって開いている。このことは区画溝Ｂより北東側は遺構検出面が谷地形へ向かって緩やかに落ち込んでいることから、自然地形が少なからず影響したと思われる。区画の規模は北東－南西方向は30m、南東－北西方向は15m以上を測る。区画溝の埋土は99BSD8015では砂層や植物遺体を含む層位が観察されているが、99BSD16では砂層は確認されず、最下層埋土は粘質シルトであった。

第23表　区画溝Ｂ

	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
99BSD8015	3.5	(0.9)	34～70	U字型	南西→東角←北
99BSD8016	0.9	0.6	21～29	U字型	南西→北東
99BSD8002	3.4	2.2	34～56	U字型	北西→南東
99BSD8003	3.2	1.8	36～62	U字型	北西→中央←南東
99ＣSD04	2.8	1.2	11～73	U字型	ほぼ水平

4162は瀬戸美濃産の鉄釉擂鉢で時期は連房第１・２小期。4163はいわゆる半球型の土師器鍋の口縁部片。外面にはススが付着する。擂鉢とほぼ同時期か。

なお、区画Ｂの北東側に区画溝99BSD8002－99BSD8003－99CSD04で構成される区画が確認されている。南西を限る溝が２条確認されており、区画の拡大または縮小が行われた可能性を持っている。区画の規模は北東－南西方向が30mまたは41m、南東－北西方向は18m以上を測る。また、北東を限る溝は区画溝Ｂ同様99C区北東部で検出された谷地形(99CSX01)に沿うように屈曲している。この区画については、区画溝から近世後半の遺物が出土していることから、当該期の区画溝および区画ではない可能性が高い。このことは区画Ｂと異なり、区画内に居住域である痕跡を示す遺構が全く検出されていないことからも裏付けられる。

区画溝Ｃ　99ASD02･03･04で構成される区画溝。区画溝が確認されたのは四辺のうち北西と北東を限るこの２条のみで、南東と南西を限る溝は確認されていない。南東を限る区画溝は調査区外に掘削されていた可能性が考えられるが、南西を限る溝は98B2区でこれに相当する溝が検出されていないことから判断すると、もともと掘削されていなかったと思われる。区画Ｃの南西側に相当する98B2区ではこの時期に該当する遺構は確認されていないことや、98B2区南西端に向かって地形が徐々に下がってゆくことから、区画Ｃの南西側は空閑地で、地形の落ち込みを区画溝のかわりに利用していたと考えられる。北東を限る99ASD03は調査区南西端部で99B区から伸びてくる99BSD04と直交する様に検出されている。しかし、99BSD04は基本的に区画Ｅの北西及び南西を限る区画溝であり、区画Ｃ内に入り込む部分は99ASD03の一部と理解することが妥当であろう。また、99Ａ区内で検出されている99ASD04は、深さ

が10cm前後であり、99B区へ伸びてゆく部分と比較するとかなり浅く、双方の区画の出入口であった可能性が考えられる。

第24表　区画溝Ｃ

	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
99ASD02	2.1	0.7	15～43	Ｕ字型	ほぼ水平
99ASD03	3.3	1.3	24～64	Ｕ字型	北西→南東
99ASD04	3	ー	7～18	皿状	ほぼ水平

区画溝Ｃによって囲い込まれる空間の規模は、北東－南西方向は34m、南東－北西方向は27m以上を測る。この区画の調査区南側への広がりについてであるが、99ASX01と呼ばれる谷地形（第７章第５節（３）参照）は、断面観察および出土遺物から判断すると、その大半は埋没し矢作川に向かって居住可能な空間が広がっていた可能性が高い。但し、仮に区画の規模が隣接する区画Ｄと同程度であったとするならば、その範囲は調査区南西壁付近までと考えることが妥当であろう。

4166は鉄釉天目茶碗、4167は鉄釉擂鉢。ともに大窯３段階に相当する。S384は砥石。4169は灰釉系陶器の胎土で製作された蓋。4170は瀬戸美濃産の鉄釉天目茶碗、大窯４段階後半。8164は灰釉端反皿。見込みに印花が施される大窯１段階の遺物である。4172・4173は鉄釉擂鉢。

区画溝Ｄ　99A･BSD05で構成される区画溝。今回検出された区画溝のうち唯一全域を確認し得た。区画の規模は、北東－南西方向37m、南東－北西方向が27mを測る。この区画溝は東コーナー部分から南東溝にかけて区画内に向かって溝幅が拡幅されている。区画溝Ｄの溝底レベルを比較すると、この拡幅部分は溝底レベルが最も低く、溝幅の拡張には滞水時の水溜めの役割が担わされていたことも想定できる。さらに、そのすぐ南西側には幅1.5m、長さ2.5mの突出部が掘削されており、この部分は区画溝のうちで最も溝幅が狭く、掘削深度も10cm前後と浅くなっている。また、区画の北西側と北東側には堤状遺構(99BSX01･02）が存在し、区画溝Ｃに面する区画溝Ｄの掘削深度は50cmと深くなっている。このことから区画Ｃの出入口を考えた場合、先の拡幅部と突出部付近に存在していた可能性が高い。

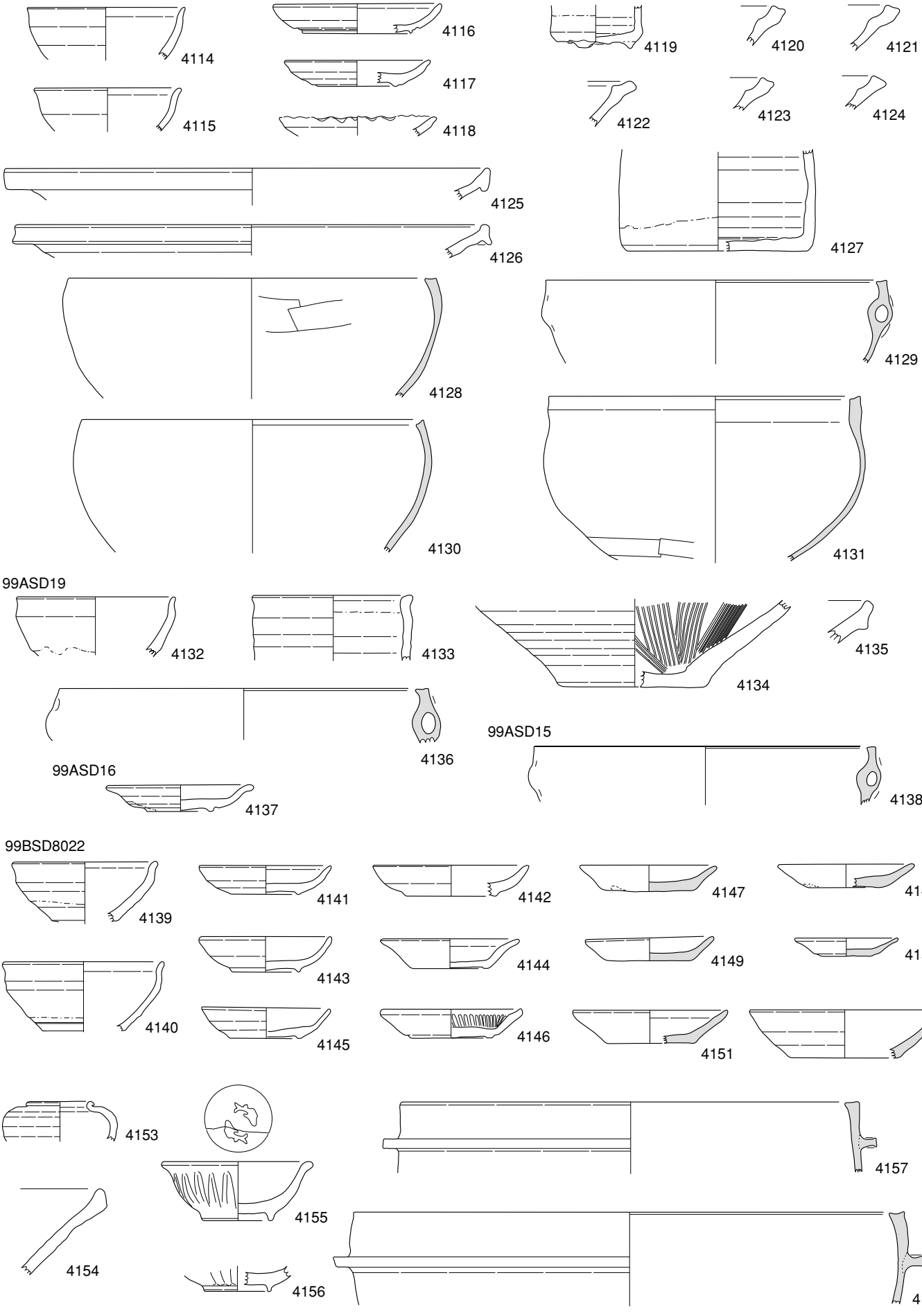
第25表　区画溝Ｄ

	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
99A・BSD05	7	1.1	21～59	Ｕ字型	全体に北西→南東、拡張部が最も低い

4176・4177は鉄釉天目茶碗。前者は大窯１段階、後者は大窯３段階前半に該当する。4178は長石釉が施された丸皿。時期は近世中期と考えられ、区画廃絶後の遺物の可能性が高い。4179は灰釉折縁皿で、時期は大窯４段階前半。4180～4190は土師器皿。4180・4181・4184・4185・4188はロクロ成形、4182・4183・4186・4187・4189・4190は非ロクロ成形。4180・4184の底部には回転糸切りによる切り離し痕が観察される。また、4181・4185の底部には指押さえによる調整痕と板目の圧痕が認められる。4191～4193は瀬戸美濃産の施釉陶器で、擂鉢と建水。4194～4203は土師器鍋・釜。4194は内彎鍋、4195は茶釜型羽釜、4196～4198は半球型鍋。4198にはおそらく３ヶ所に粘土を指で摘んで張り付けた簡単な足がつけられている。4199～4203は羽釜。いずれの鍋・釜にも外面にススが付着する。4204は常滑産甕

区画溝A

99ASD14



99ASD19

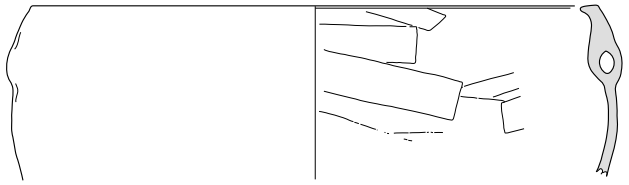
99ASD16

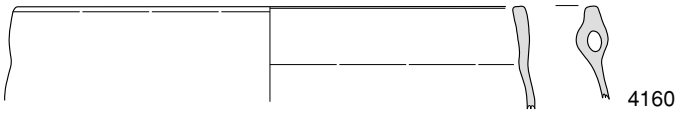
99ASD15

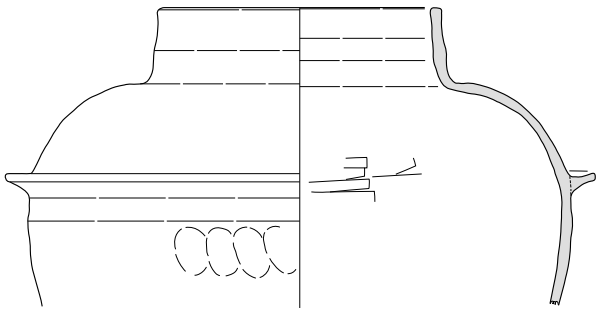
99BSD8022

第521図　区画溝（２）（1:4)

区画溝A
99BSD8022

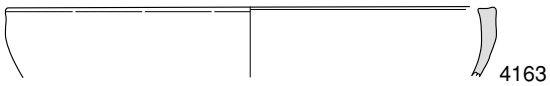




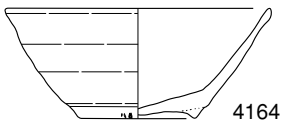


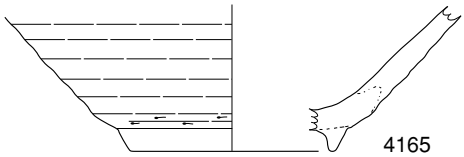
区画溝B
99BSD8016



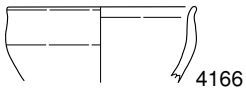


99BSD8002

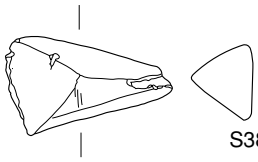


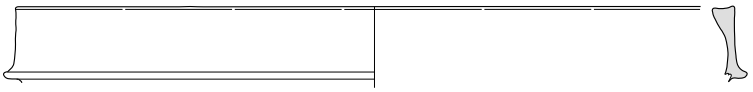


区画溝C
99ASD02

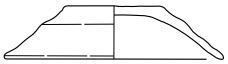


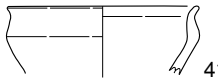


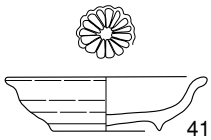


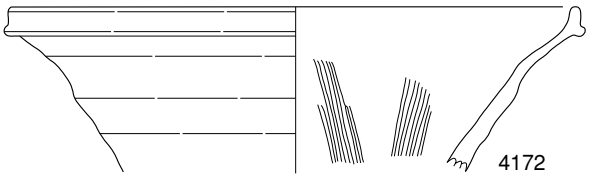


区画溝C
99ASD03



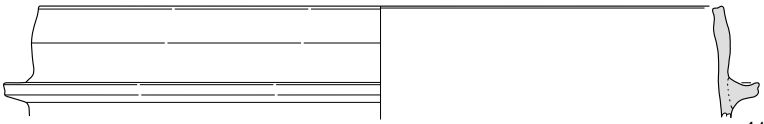


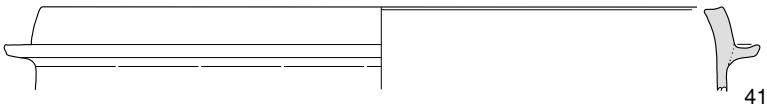




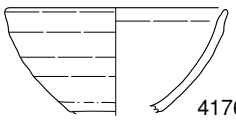


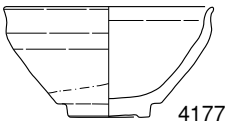
区画溝D
99ASD05

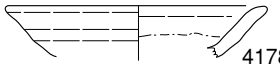


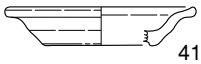


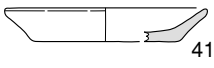
99BSD05

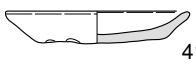


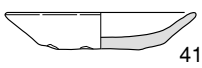


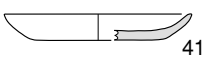


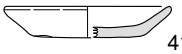


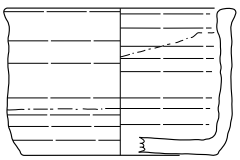


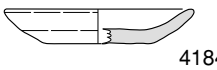


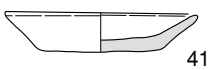


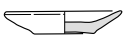


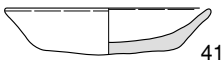


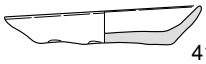


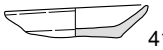






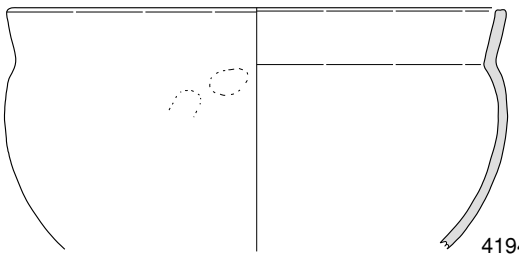


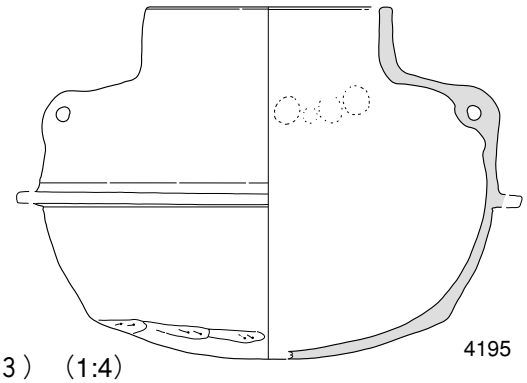




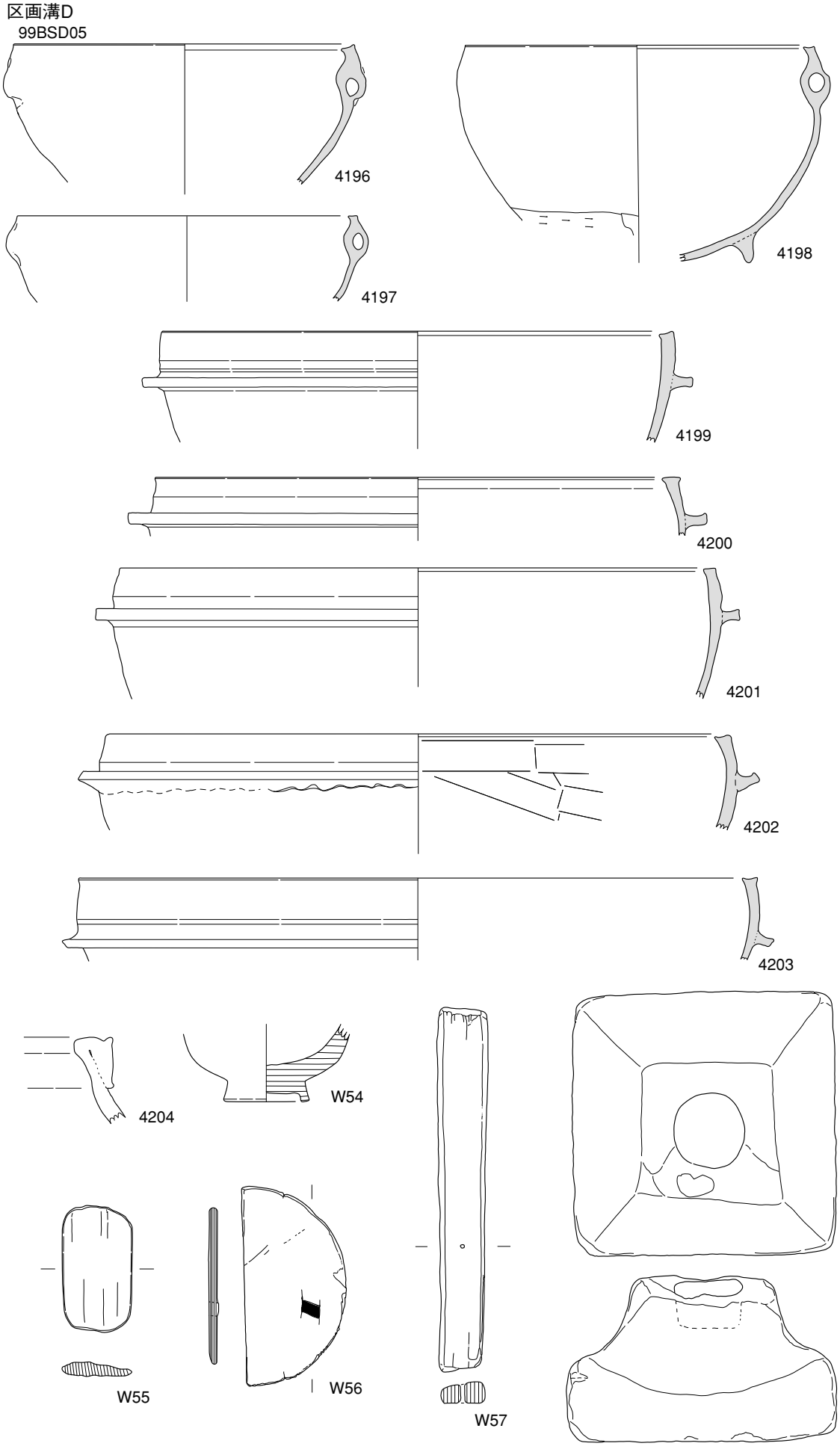








第522図　区画溝（３）（1:4）



第523図　区画溝（４）（土・陶器、木製品、石製品とも1:4）

の口縁部。中野編年の 9 型式。W54 ～ W57 は木製品。W54 は外面黒漆、内面赤漆。W55 は板状木製品。端面を丸くカットし、小判形に仕上げている。用途は不明。W56 は曲物の底板。板周縁部に桜の樹皮がはめ込まれている。側面に接合用の木クギや穿孔などの加工痕は認められない。W57 は棒状の木製品。断面は比較的平らで、角を面取りした角材に近い形状を呈する。中央部に 1 ヶ所穿孔されている。用途不明。S385 は五輪塔の火輪。99DSX01 から出土している火輪に類似する。

区画溝 E　北西辺及び南西辺を限る溝である99A･BSD04、99ASD06を検出。北東を限る溝は99BSD03が該当すると考えられる。区画の規模は確認し得たエリアが狭小であるため不明な点が多いが、北に位置する区画Dと同規模であったと仮定すると、北東溝－南西溝45m前後、北西溝－南東溝25m程度となる。99A･BSD04 と 99ASD03 は 2 条が交差する地点付近からともに溝底の掘削レベルが高くなっており、土橋状の高まりが調査区壁付近で確認されている。また、99ASD03 南西側に構築されていた堤状遺構(99BSX01)も区画D北東端で収束することが明らかになっており、区画Eの出入口（区画E⇔区画F）が設定されていたことが想定される。但し、先述した様に、区画溝Eは西コーナー部分も溝の掘形が浅くなっている個所が認められることから、複数個所の出入口を備えていたことも考えられる。

第26表　区画溝 E

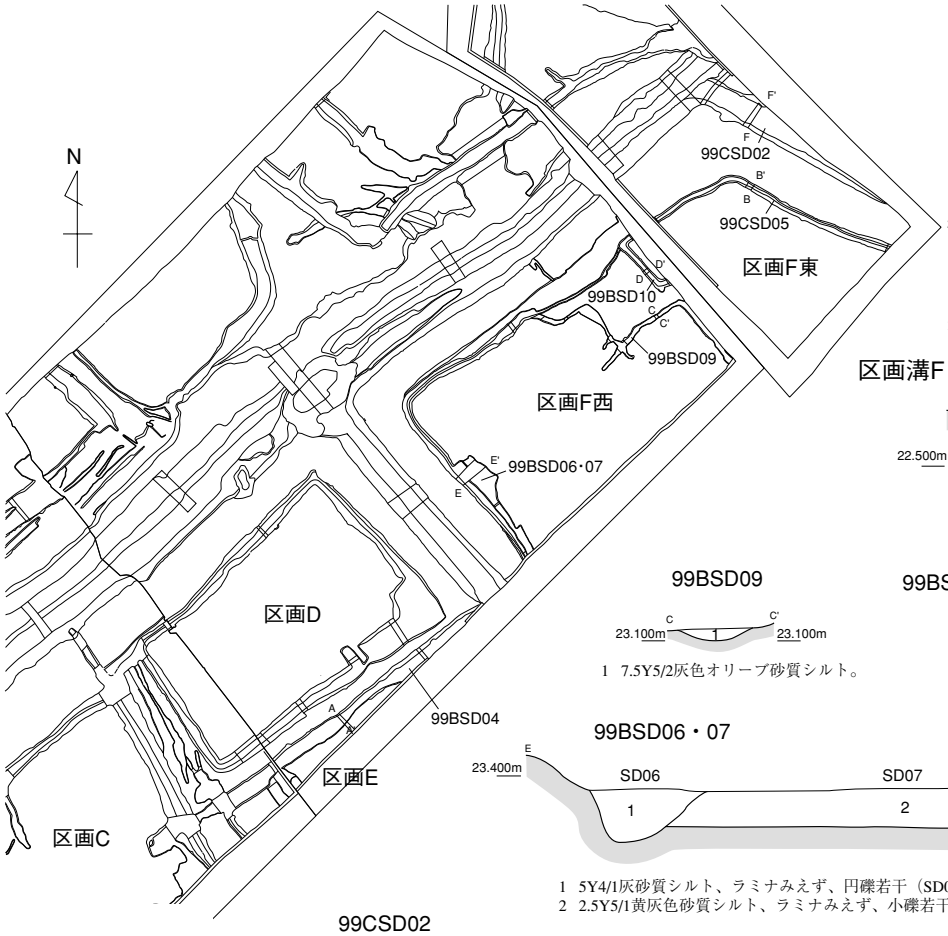
	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
99ASD04	2.6	1.1	36～66	U字型	ほぼ水平
99ASD06	1	ー	40	U字型	ほぼ水平

4205 は瀬戸美濃産の鉄釉天目茶碗。時期は藤澤編年の大窯 4 段階後半に位置づけられる。4206 は内外面ともに灰釉の施された丸碗。近世中期に位置づけられる。4208 は長石釉が掛けられた志野丸皿。4205 の天目茶碗同様大窯 4 段階後半の遺物である。4209は灰釉の施された丸皿。外面高台周辺は露胎であり、その周辺にはススが付着している。時期は近世中期であり、丸碗同様溝廃絶後の遺物である可能性が高い。4210・4211 は土師器羽釜。ともに外面にススが付着している。

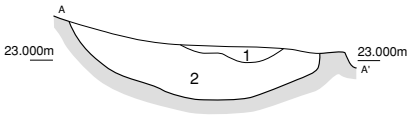
区画溝 F　99BSD03 北東側に展開する堤状遺構（99BSX01）により囲い込まれる区画。区画の南東部は調査区外となるために正確な規模は不明。検出された区画は、北東溝－南西溝65m、北西溝－南東溝45mである。この区画溝は99BSD06･07･08･09･10、99CSD05により構成される。これらの溝のうち、99BSD08･09・10の関係については、区画F内を更に北東部・南西部に小区画に分割するための溝であった可能性を持つ。その場合、区画の北東部にはあまり遺構の集中がみられないことから空閑地であったと考えられる。これに対し南西部は柱穴と思われる土坑が密集して検出されており、建物エリアとして長期間利用されていたと思われる。この区画溝及び区画の出入口に関しては、南東辺以外は堤状遺構(99BSX01）

第27表　区画溝 F

	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
99BSD06	1.4	0.4	22～59	U字型	ほぼ水平
99BSD07	3.1	0.6	16～30	皿状	ほぼ水平
99BSD08	0.7	0.4	6～12	皿状	北西→南東
99BSD09	1.1	0.5	12～14	皿状	ほぼ水平
99BSD10	1.2	0.8	31～36	U字型	ほぼ水平
99CSD05	1.3	0.7	26～43	U字型	南東→北西

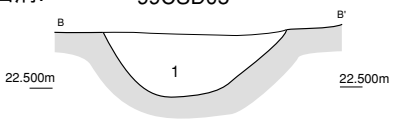


区画溝E 99BSD04



1 7.5Y5/1灰砂質シルト細粒砂がラミナ状に入る。
2 7.5Y4/1灰砂質シルト、ラミナ見えず、炭化物粒入る 。

区画溝F 99CSD05

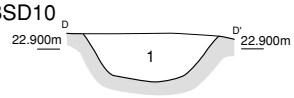


1 10BG4/1暗青灰シルト、植物質若干含む
小礫ほとんど入らない、ラミナは形成されない。

99BSD09

1 7.5Y5/2灰色オリーブ砂質シルト。

99BSD10

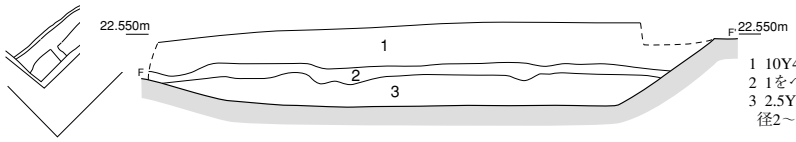


1 10YR4/1灰色粘質のかなり強いシルト
炭化物・植物質入る、礫なし、ラミナみえず。

99BSD06・07

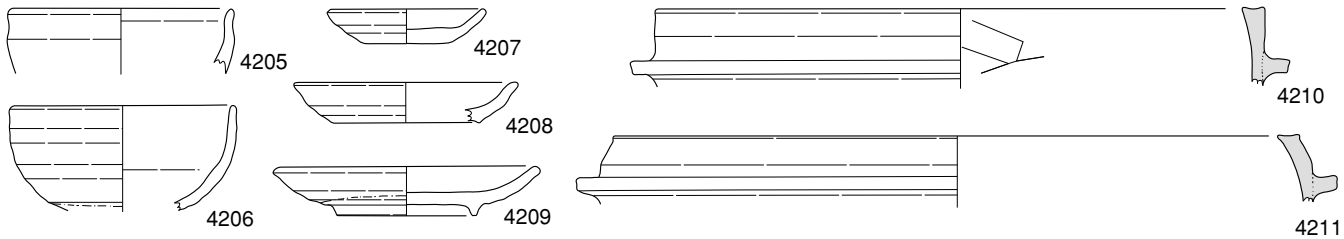
1 5Y4/1灰砂質シルト、ラミナみえず、円礫若干（SD06）。
2 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト、ラミナみえず、小礫若干、地山粒若干入る（SD07）。

99CSD02

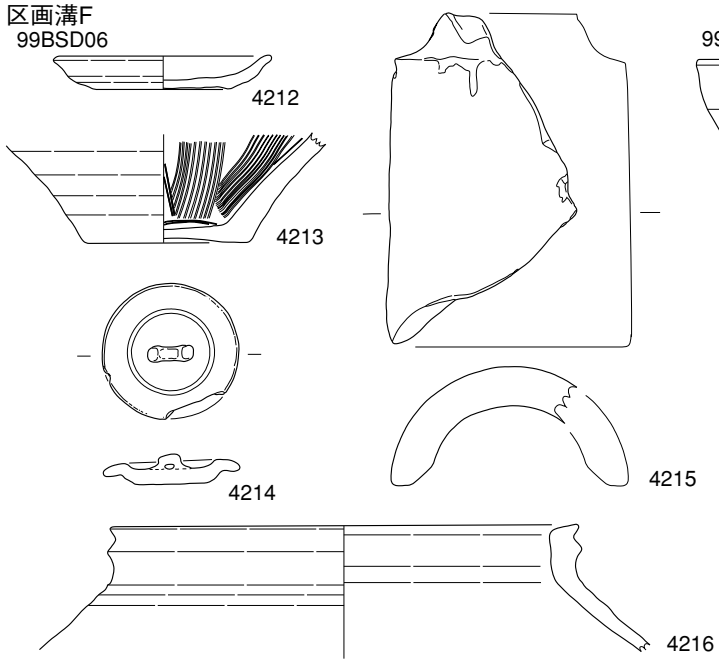


1 10Y4/1灰色シルト、径5mm以下の小礫わずかに含む、植物質含む。
2 1をベースとし、2.5Y7/3浅黄色極粗粒砂が多く入る。
3 2.5Y4/1黄灰色知ると、炭化した植物質含み、粘性あり
径2～5cm大の円礫入る 。

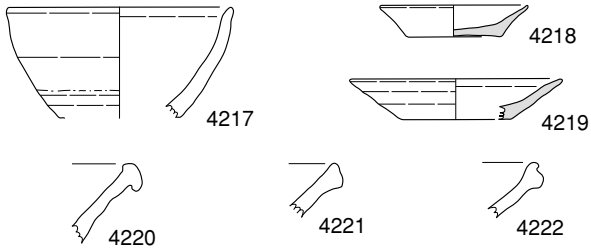
区画溝E
99BSD04



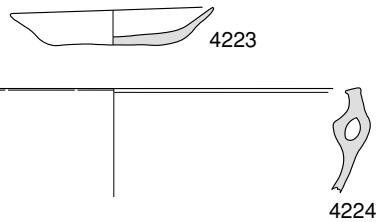
区画溝F
99BSD06



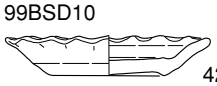
99BSD07



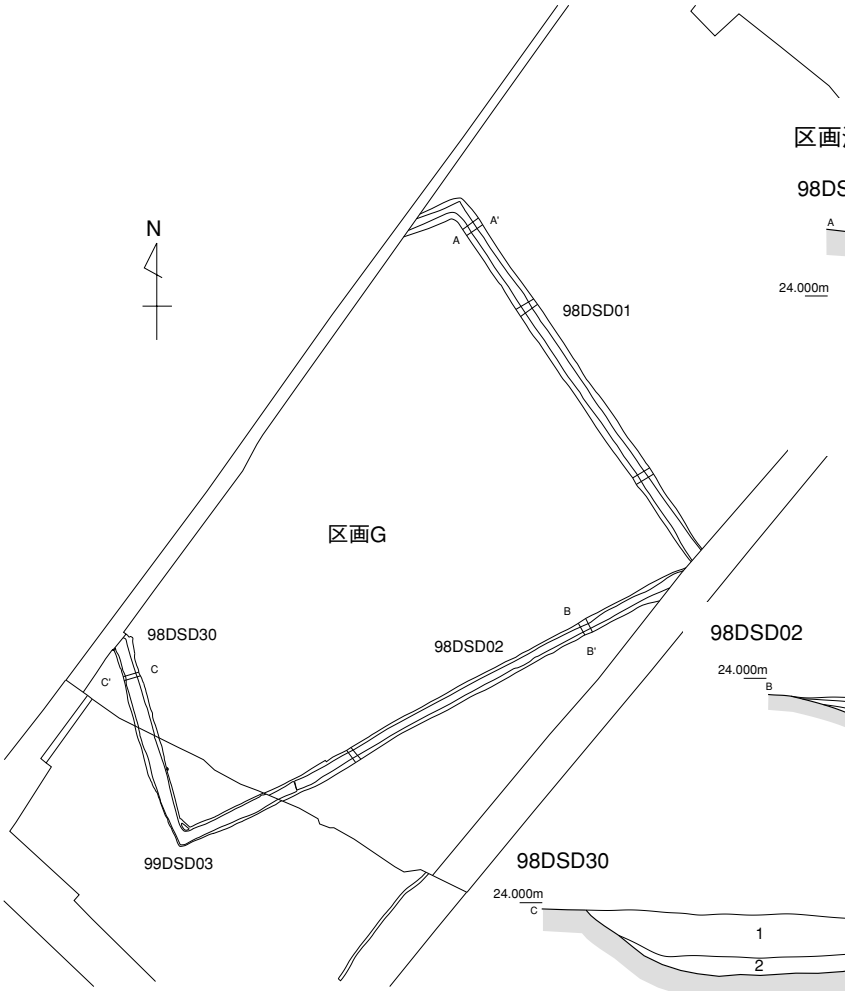
99BSD08



99BSD10

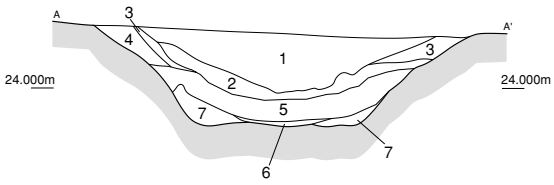


第524図　区画溝（５）（平面図1:1000、断面図1:50）



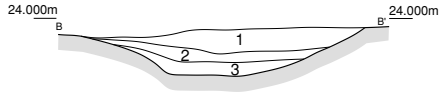
区画溝G

98DSD01



1 斑土（一括して埋め戻した土）→１７Ｃ初頭。
10ＹＲ4/2灰黄褐色砂質シルト＋7.5ＹＲ3/3暗褐色砂質シルト
＋7.5ＹＲ3/1黒褐色粘質シルトブロック。
2 7.5ＹＲ3/1黒褐色粘質シルト。
3 10ＹＲ3/4暗褐色砂質シルト。
4 7.5ＹＲ3/1黒褐色砂質シルト。
5 2.5Ｙ3/3暗オリーブ褐色粘質土（炭化物を微量に含む）。
6 7.5ＹＲ3/3暗褐色粘質シルト。
7 5ＹＲ4/3にぶい赤褐色砂質シルト。

98DSD02



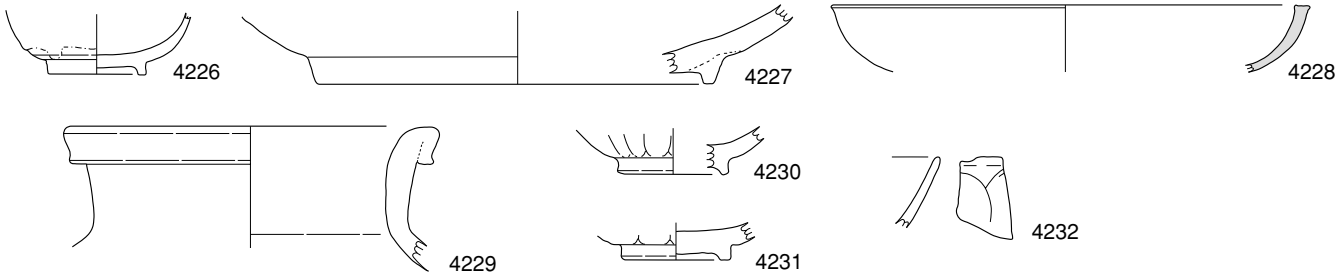
1 10ＹＲ3/2黒褐色シルト。
2 2.5Ｙ3/3暗オリーブ褐色粘質土（炭化物を微量に含む）。
3 5ＹＲ4/3にぶい赤褐色砂質シルト。

98DSD30

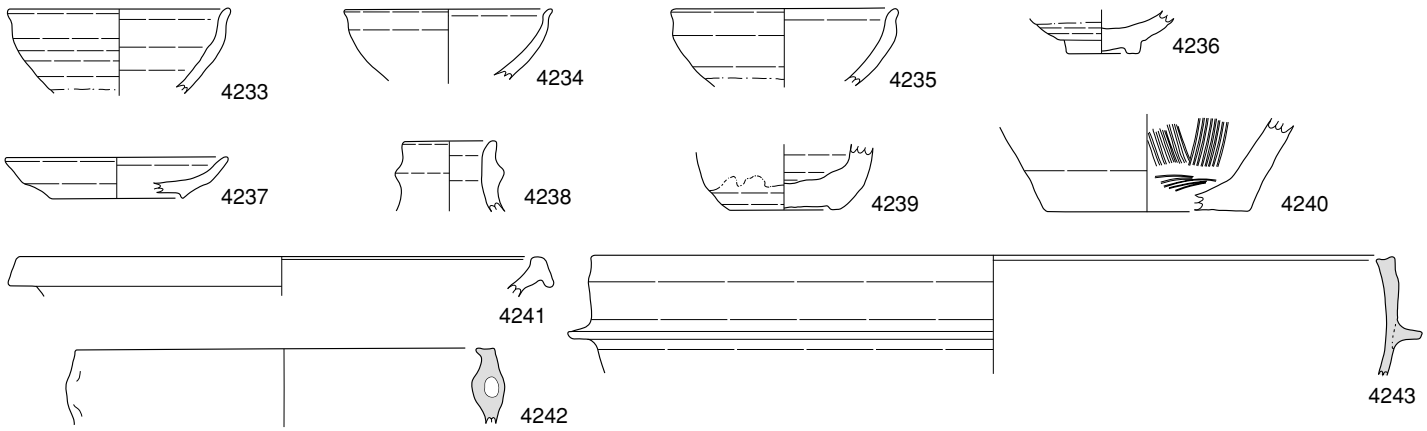
1 10ＹＲ3/2黒褐色粘質シルト（径１～２㎜の砂粒含む）。
2 10ＹＲ4/1褐灰色粘質土（炭化物を微量に含む）。

区画溝G

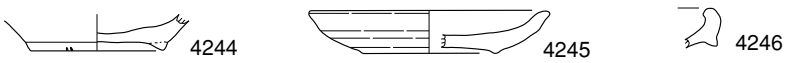
98DSD01



98DSD02



99DSD03



第525図　区画溝（６）（平面図1:1000、断面図1:50、実測図1:4）

によって囲い込まれていることから、南東方向に開いていたとすることが妥当であろう。但し、区画溝Ｅで述べたように、南西側を限る堤状遺構に出入口が設定されていた可能性も考えられる。

4212～4214・4216は瀬戸美濃産施釉陶器。古瀬戸後Ⅳ期から近世後期までと遺物に時期幅が認められる。4215は灰白色を呈する丸瓦であり、堤状遺構から出土したものと類似する。4217は大窯１段階の鉄釉天目茶碗、4220～4222は鉄釉擂鉢で4220が大窯４段階後半、その他は大窯１段階に位置づけられる。4218・4219は底部に回転糸切りによる切り離し痕が観察されるロクロ成形の土師器皿。これに対し4223は非ロクロ成形による土師器皿。内面および体部中央付近まではナデ調整が施されている。水入遺跡で出土する非ロクロ成形の土師器皿同様、体部周辺は指押さえによる成形がなされていると思われるが、明確な痕跡は観察し得なかった。4225は大窯３段階に相当する鉄釉稜皿。見込みは釉がはぎ取られ、口縁部は輪花状に仕上げられている。

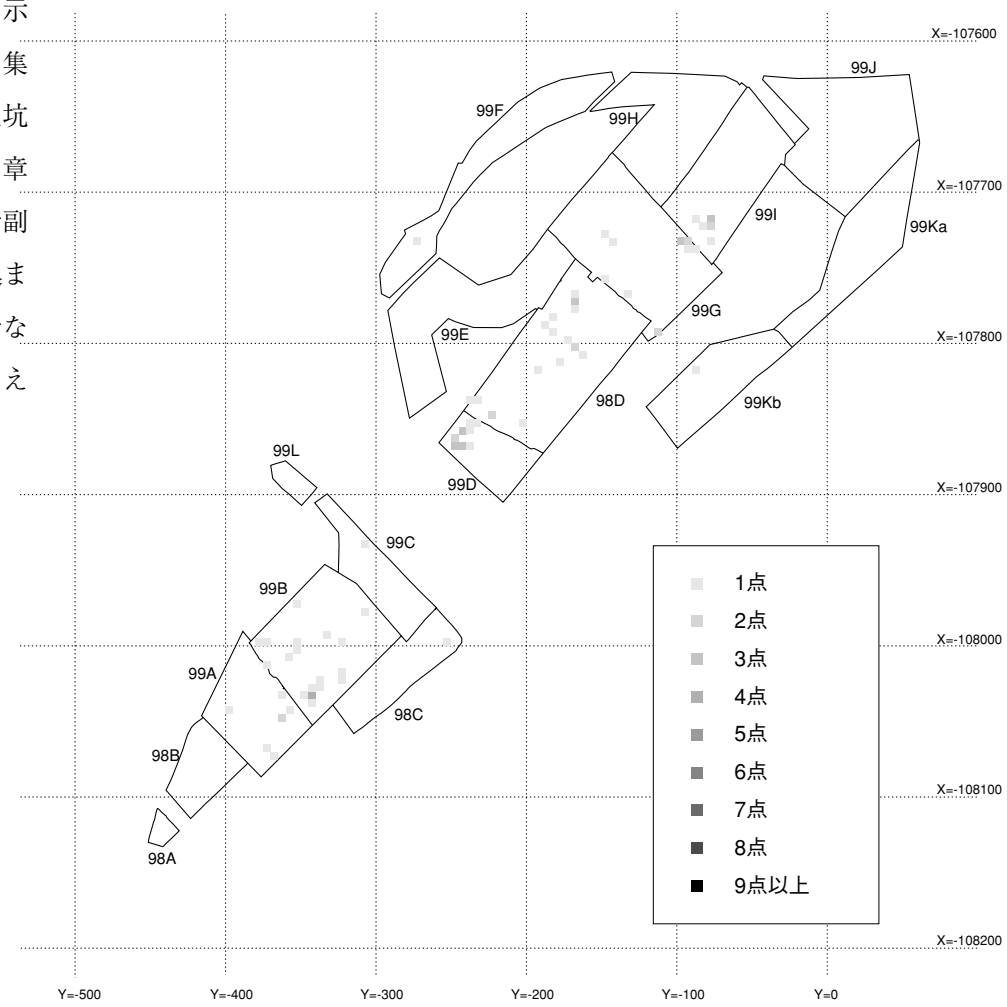
区画溝Ｇ　98・99Ｄ区で検出された区画溝。98DSD01・02・30・99DSD03により構成される。北西隅部分は調査区外のため確認できていない。区画の規模は、北東溝－南西溝70m、北西溝－南東溝55mを測る。溝を充填する埋土の最上層は、斑土状の堆積状況が観察され、遺構廃絶時に短期間に埋め戻されたと考えられる。この廃絶時に周囲に存在していたのであろう拳大の円礫と灰釉系陶器が斑土中に大量に投棄されていた。これに対し、下層の埋土はおもに粘質土もしくは粘質シルトであり、溝が機能していた段階では滞水状態にあったと思われる。また、最下層埋土中からは獣骨が出土しており、何らかの祭祀が行われた痕跡が確認された。区画の出入口については、北西隅が確認されていないので定かではないが、98DSD02 Ⅸ I19e グリッド周辺と98DSD01北コーナー部分の掘形が浅くなっており、この近辺に想定することができる可能性がある。

第28表　区画溝G

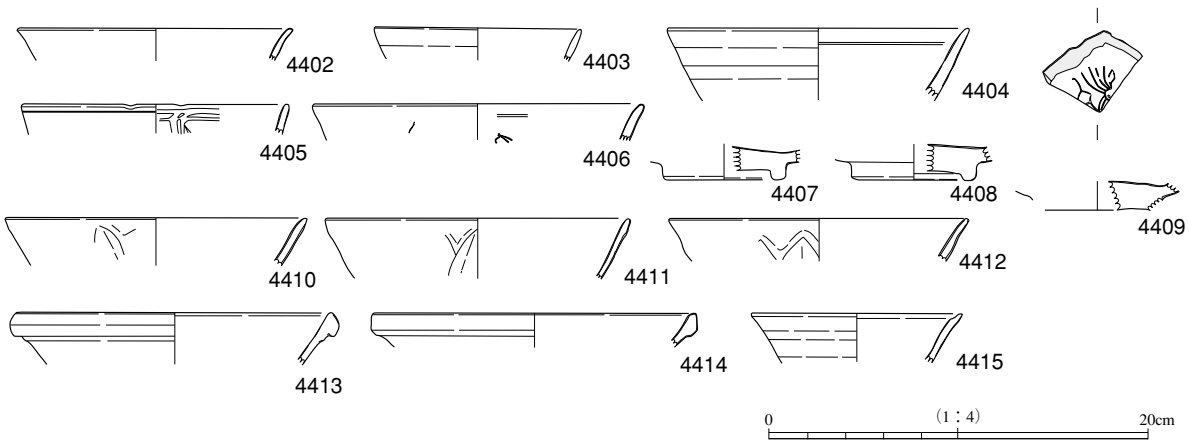
	幅（最大/m）	幅（最小/m）	深さ(cm)	掘形	底部レベル
98DSD01	2.8	2.2	25～70	U字型	北西→南東
98DSD02	2.4	1.6	37～63	U字型	北東→南西
98DSD30	2.6	2.2	33～42	U字型	やや北→南
99DSD03	2.6	1.6	30～47	U字型	北西→南角←北東

大屋敷地区の区画溝同様、古瀬戸後期から大窯の遺物が中心に出土している。4226は内面および外面ともに鉄釉が施され、高台周辺には錆釉が掛けられている丸碗。時期は近世中期。4227は連房第２小期に位置づけられる鉄絵鉢。外面は灰釉のハケ塗り、内面にも灰釉が掛けられ、鉄釉で絵が描かれている。但し、絵柄は破片のため詳細不明。4229は常滑産焼き締めの壺。4230～4232は13世紀代と思われる龍泉窯系青磁碗。中世前半の土坑墓に埋納された遺物が混入したものと考えられる。4233は灰釉浅碗。全面に灰釉が施され体部の形状は天目茶碗に酷似している。時期は古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期に属する。4234・4235は鉄釉天目茶碗。前者が大窯２段階、後者が大窯４段階前半に位置する。4236は内外面ともに緑釉が施された丸碗の高台部。高台は削り出しによる輪高台であり、形状は天目茶碗に類似している。時期は連房第１小期。4237は志野丸皿、連房第１・２小期。4238は灰釉瓶子で時期は古瀬戸後Ⅳ期。4239は鉄釉瓶類、4241は鉄釉擂鉢でともに近世以降の遺物である。4245は志野丸皿、大窯４段階後半。

（補足）水入遺跡出土の青磁・白磁　水入遺跡では、鎌倉・戦国時代の遺構および包含層中から青磁および白磁が出土しており、主要なものについては本文中でふれている。しかしながら出土資料のほとんどがごく小片にとどまっていることもあって紹介しきれていない。ここでは平成14年度の整理作業で新たに確認できたものの実測図を提示する。青磁はそのほとんどが椀で、4410～4412は鎬蓮弁である。出土地点は第526図に示した通りで、特に集中地点はなく、土坑墓での出土も第7章に提示した程度で副葬品として持ち込まれたものばかりでないことがうかがえる。（永井）



第526図　青磁・白磁の出土分布図



第527図　青磁・白磁実測図（1:4）

第 3 節　掘立柱建物

(1) 概要

この時期に属すると思われる掘立柱建物は66棟確認できた(掘立柱建物の推定復元の方法については第 7 章第 2 節を参照)。鎌倉時代を含む中世前期では掘立柱建物は下糟目地区を中心に展開していたが、この時期にはいると大屋敷地区に63棟、下糟目地区に 3 棟とその様相は逆転する。掘立柱建物以外の遺構の展開状況と比較しても、このことは妥当であると思われる。

この時期の建物規模は大きく 2 つに区分することが可能である。まずひとつは前段階同様掘形が20～30cm前後の柱穴により構成される建物群である。この建物は大屋敷・下糟目両地区に展開するが、特に大屋敷地区に展開する大溝よりも北西側の区画内部に顕著にみられる。柱間や梁行・桁行の規模もほぼ中世前期と同様である。これに対し、大屋敷地区の大溝南東側に展開する区画内を中心に、大型の柱穴(掘形1m前後)を持ち、版築状に突きかためられた柱穴により構成される建物が確認された。いわゆるこの大型建物は基本的に梁行は 1 間であるが、柱間は広く残存していた柱の部材も太くて丈夫なものが使用されていた。これらの建物も区画内で東西棟と南北棟の変化はあるものの、同一個所で複数回の建て直しが行われている。これに類する大型建物は下糟目地区でも区画内に 1 棟(98DSH08)ではあるが確認することができた。

大型建物の中でも特に注目される建物が、矢作川方向に正面を向けて構築されている 3 面庇の建物(99BSH46)である。梁行 2 間、桁行 3 間の主屋にほぼ 1 間分の庇が北側を除いた 3 面に取り付けられている。このタイプの建物は水入遺跡では 1 棟のみであり、当時の中心的建物であるとすることが可能であろう。この建物の主屋は同規模の建物として99BSH47・48が想定されており、庇を構成する柱穴も複数が切り合っていたり、建物として使用できなかった柱穴が近接して認められることからすれば、少なくとも同位置で 3 回の建て直しが行われた可能性を考えることができる。

次に建物の軸線についてであるが、これについてはこの時期も前段階同様、大屋敷地区はN40EとN40W周辺にまとまりがみられる。このことは遺跡が継続する間存続していた大溝(SD01)により規制されているといえる。この地区に展開した掘立柱建物は中世前期と異なり、溝と土塁により区画された空間に展開している。建物を取り込む区画溝のあり方にも大溝が影響を与えていることを考えれば、建物が大溝によって規制されるということも当然の結果であるといえる。これに対し、下糟目地区は建物数が 3 棟と少ないため、何によって規制されていたかは判然としないが、建物はいずれも区画内で確認されていることから、当然その溝の方位に規制されているといえる。この 3 棟を取り囲む区画溝は方形ではあるが微妙な歪みがみとめられ、台形状の区画となっている。この歪みはおそらく周辺に入り込んでいた谷地形との関連で生じたものと思われる。とすれば、98D区で確認されているこれら掘立柱建物は前代同様谷地形に規制されていると考えてもよいのかも知れない。(川井)

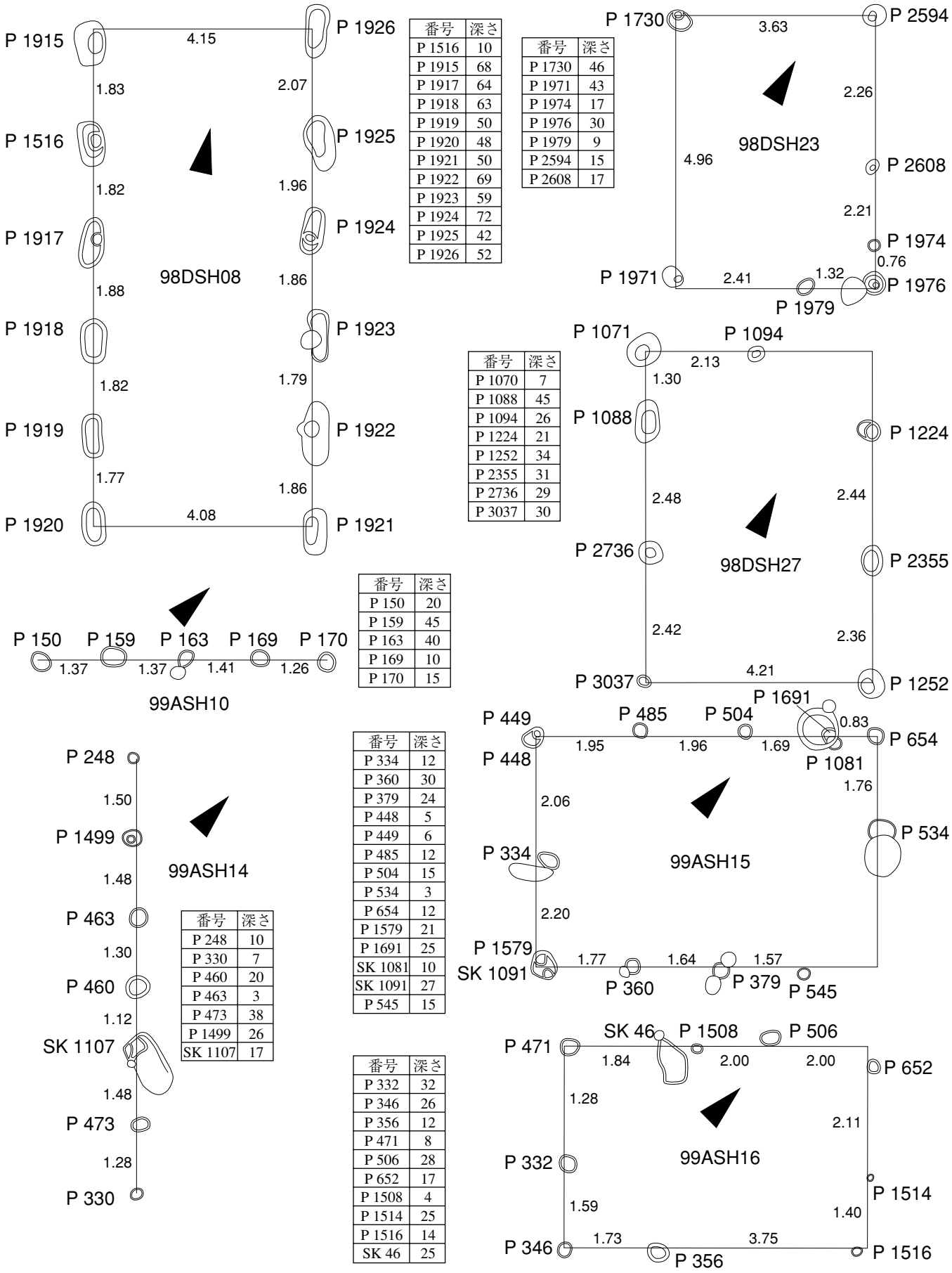
なお、99B区では約10本の柱根が出土したが、なかでも99BSK42の柱根は残存する部分だけでも最大径約15cmを測る。SK42は大型建物99BSH33の一角をなす柱掘形である。また大型建物の掘形底部からは直径20cmの礎板石を据える事例(99BSH47の柱掘形99BSK13など)もある。(永井追記)

遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　考
98DSH08	N13W	1 × 5	戦国か	単独棟、中世方形土坑と重複。柱穴の堆積状況から戦国と判断
98DSH23	N28W	2 × 3	戦国か	単独棟、土坑墓を切る。98DSH27との軸線が一致することから戦国の可能性を考慮
98DSH27	N27W	2 × 3	戦国か	98DSB46（戦国期竪穴建物）の上屋の可能性あり。
99ASH10	N45E	×		4 間分の柵列。SH21と重複、SH20・22とセットか？
99ASH14	N43W	×	中世後期、戦国か	6 間分の柵列。SH15・16と重複、SH17・18と並行。セットか？
99ASH15	N45E	2 × 4	中世後期、戦国（土師器鍋）	土坑墓・99ASH16～18と重複。切合い関係から最も新しい建物。規模拡大による99ASH17との建替えの可能性あり。
99ASH16	N50E	2 × 3	中世後期、戦国か	土坑墓・99ASH15・17・18と重複。SH15との建替えか。新旧関係は不明。
99ASH17	N44W	2 × 4	中世後期、戦国（灰釉系陶器）	土坑墓と重複する。SH18との建替え、SH14とのセット関係の可能性あり。
99ASH18	N46W	2 × 3	中世後期、戦国（13後半～）	土坑墓と重複。SH17を 1 間分縮小。但し、新旧関係は不明
99ASH20	N42E	3 × 3	中世後期、戦国（灰釉系陶器）	99ASH21と重複、新旧関係不明。99ASH22とセット関係の可能性あり。99ASB07に隣接。
99ASH21	N49E	2 × 3	中世後期、戦国（13後半～）	99ASH10・20と重複。99ASH09とセット関係か。99ASB07に隣接。
99ASH22	N40W	2 × 4	中世後期、戦国か	99ASH36と重複、新旧関係不明。99ASB07を切る。
99ASH23	N53E	×	戦国（灰釉系陶器）	6 間分の柵列。区画溝内に構築。99BSH01との対で機能を果たす？
99ASH26	N35E	2 × 3	戦国（灰釉系陶器）	やや小型の建物。99ASH27・28、99BSH56と重複、SH27・28との建替えの可能性あり。
99ASH27	N39E	2 × 3	戦国（灰釉系陶器）	99BSH44・45とのセット関係の可能性あり。重複はしないが99BSH56との同時存在は柱間から不可。
99ASH28	N34E	1 × 3	戦国（灰釉系陶器）	99BSH44・45・56とのセット関係の可能性あり。99BSH56との同時存在が可能。
99ASH29	N43E	3 × 4	戦国（大窯）	99ASH30・31と重複、新旧関係は不明。建物規模が異なり、建替え等は想定しにくい。
99ASH30	N40E	2 × 2	戦国（灰釉系陶器）	99ASH29・31と重複、新旧関係は不明。99ASD24にともなう方形土坑の上屋の可能性あり、作業小屋的性格か。
99ASH31	N41E	1 × 3	戦国か	区画溝との切合いから、2条に分岐する99ASD14の南東側の溝と同時期か。
99ASH33	N44W	3 × 3	近世か	切合い関係から区画溝よりも新しいと思われる。
99BSH01	N55E	×	戦国（灰釉系陶器）	区画溝内の柵列。99ASH23とセットで機能を果たしていた可能性あり。
99BSH08	N48E	2 × 5	戦国か	99BSH09・SH58と重複。SH58との建替えか(新旧関係不明）。SH08→SH09
99BSH09	N45E	1 × 3	17前半～	SH08と重複、新旧関係は切合いからSH08→SH09。柱穴の掘形が大きく、大型建物の可能性大。
99BSH10	N43W	1 × 2	戦国（灰釉系陶器）	大型建物の 1 棟、99BSH15～17と重複する。新旧はSH10→SH15・16。
99BSH11	N50E	1 × 4	戦国（土師器鍋釜）	大型建物。99BSH12と重複、建替えの可能性あり。新旧関係はSH11→SH12。
99BSH12	N40W	1 × 4	戦国（大窯）	99BSH11・13・14の大型建物と重複。新旧関係はSH13→SH14→SH12。
99BSH13	N43W	1 × 4	16後半～	大型建物の 1 棟、SH11・12・14と重複。
99BSH14	N51W	1 × 4	戦国（大窯）	大型建物の 1 棟、SH11～13と重複。
99BSH15	N48E	1 × 3	戦国（大窯）	99BSH16・17と重複。99BSH09と同規模で、セット関係が想定される。
99BSH16	N47E	1 × 4	16後半～	99BSH17との建替えの可能性あり。SH08とのセット関係が想定される。
99BSH17	N46E	1 × 3	戦国（灰釉系陶器）	99BSH16と同規模、建替えか。新旧はSH17→SH16。SH58とセットか？
99BSH18	N55E	2 × 3	戦国（灰釉系陶器）	単独棟、SK142により一部削平。区画の出入口（推定位置）横に立地。
99BSH19	N37W	×	戦国か	区画溝内に構築された 4 間の柵列。99BSH20とセットで機能を果たしていた可能性あり。
99BSH20	N37W	×	戦国か	L 字状の 2 × 5 間の区画溝に伴う柵列。建物の一部と考えるには柱間が狭い。

第29表　掘立柱建物一覧（1）

遺構番号	軸線	梁行×桁行	時期	備　　考
99BSH21	N48E	2 × 3	戦国か	大型建物と重複。切合いから大型建物構築以前の可能性高い。SH09・15・16とセットか。
99BSH22	N43E	2 × 3	戦国か	99BSH21と重複。柱穴掘形は小さく、SH59とセットである可能性が高い。
99BSH27	N47W	2 × 3	戦国（大窯）	区画のｺｰﾅｰに立地。99BSH28との建替えか。新旧はSH28→SH27。大型建物とも重複。新旧関係はSH27→大型建物。
99BSH28	N47W	1 × 3	戦国か	中世土坑墓、SH27と重複、南→北方向への建替えか。
99BSH30	N41W	2 × 4	中世後期、戦国か	単独棟、大型建物の裏手にあたる。土坑墓と重複する。
99BSH33	N35W	1 × 3	戦国（灰釉系陶器）	大型建物。SH34・35と重複、新旧関係はSH34→33、SH35とは不明。
99BSH34	N35W	1 × 3	16前半～	SH33・35・37と重複する大型建物。SH33との建替えの可能性が高い。
99BSH35	N48W	2 × 2	戦国（灰釉系陶器）	複数の大型建物と重複。南西面に１間の庇を持つ２×２間の建物。切合いからSH34→35の新旧関係。
99BSH36	N40W	1 × 3	16前半～	SH09と同規模の建物。SH38・68と重複し、SH68→SH36の建替えか。
99BSH38	N42W	2 × 3	16後半～	SH36・68と重複。出土遺物はこの建物が最も新しい。区画溝脇に立地。
99BSH39	N42E	2 × 3	戦国（土師器鍋釜）	区画ｺｰﾅｰ付近に立地し、井戸とも近接する。SH40・42と重複し、SH40との建替えが想定可能。SH41とのセットか。
99BSH40	N44E	2 × 3	戦国か	区画ｺｰﾅｰ付近に立地し、井戸とも近接する。SH39・42と重複。SH39・41がセットであるとすれば、切合いからSH42→SH41の新旧関係となる。
99BSH41	N42E	2 × 3	戦国か	SH42と重複。区画ｺｰﾅｰ付近に立地し、井戸とも近接する。
99BSH42	N39E	3 × 3	戦国か	区画ｺｰﾅｰ付近に立地。井戸とも近接する。SH39～41と重複。建物規模・方向とも3棟と異なる。
99BSH43	N42W	2 × 2	戦国か	総柱建物。SH44・45と重複。99ASH26～28、SH56とのセット関係も想定される。但し、性格は異なる可能性が高い。
99BSH44	N54W	2 × 2	16後半～	SH45・56と重複。切合いからSH45→SH4４への建替えが想定される。99ASH26～28とのセット関係が想定できる。
99BSH45	N55W	2 × 2	戦国か	SH44・56と重複。切合いからSH45→SH44への建替えが想定される。
99BSH46	N43W	2 × 3	16前半～	２×３間の主屋に１間の庇が北西以外の３面につく。主屋がSH47･48と重複する。主屋の建替えの可能性も考えられる。庇の建替えは想定できなかったが、柱穴の掘形が複数認められることから、建替えられていたことも想定できる。
99BSH47	N44W	1 × 3	17前半～	大型建物。倉庫もしくは主殿主屋部の建替えか。建替えの場合には99BSK20・32を使用。
99BSH48	N44W	1 × 3	戦国（土師器鍋釜）	大型建物。倉庫もしくは主殿主屋部の建替えか。建替えの場合には99BSK20・P388・389を使用。新旧関係はSH48→SH46→SH47となる。
99BSH49	N46E	1 × 2	16前半～	大型建物。SH50と重複し、建替えの可能性が高い。新旧関係は不明。
99BSH50	N50E	1 × 2	戦国（土師器皿）	大型建物。SH49と重複し、建替えの可能性が高い。新旧関係は不明。
99BSH51	N45W	2 × 2	戦国（13後半～）	北側に１間の庇がつく２×２間の建物。土坑墓と重複。SH27・28、SH53・54とのセット関係が想定可能。
99BSH52	N35W	2 × 3	15後半～	SH53・54と重複。周囲の建物と軸線が異なることからやや時期を異にする可能性あり。
99BSH53	N40W	2 × 3	戦国（灰釉系陶器）	SH52・54と重複。建物の軸線、規模からSH54との建替えが推定される。
99BSH54	N38W	2 × 3	16前半～	SH53と重複、建替えの可能性が高い。
99BSH56	N45W	2 × 3	戦国か	99ASH26・27、99BSH44・45と重複。99ASH28を含め、2棟1セットの建替えが3回行われていることが想定される。
99BSH57	N36W	3 × (2)	戦国（大窯）	主殿（SH46）と重複。新旧関係は不明。
99BSH58	N42E	1 × 3	17前半～	SH08・09と重複。SH08・09・58、SH15～17で2棟1セットの建替えが想定される。
99BSH59	N45W	1 × 4	戦国（土師器皿）	複数の建物と重複。SH12～14の大型建物またはSH22とのセット関係が想定される。
99BSH68	N40W	1 × 3	戦国（土師器鍋釜）	SH36と重複、建替え。新旧関係は切合いからSH68→SH36
99CSH04	N44W	1 × 6	戦国（灰釉系陶器）	梁行狭く桁行が長い、厩の可能性が考えられる建物。
99KSH25	N65E	1 × 3	近世か（近世陶磁）	単独棟。柱穴から近世陶磁器が出土。

第30表　掘立柱建物一覧（２）



番号	深さ
P 1516	10
P 1915	68
P 1917	64
P 1918	63
P 1919	50
P 1920	48
P 1921	50
P 1922	69
P 1923	59
P 1924	72
P 1925	42
P 1926	52

番号	深さ
P 1730	46
P 1971	43
P 1974	17
P 1976	30
P 1979	9
P 2594	15
P 2608	17

番号	深さ
P 1070	7
P 1088	45
P 1094	26
P 1224	21
P 1252	34
P 2355	31
P 2736	29
P 3037	30

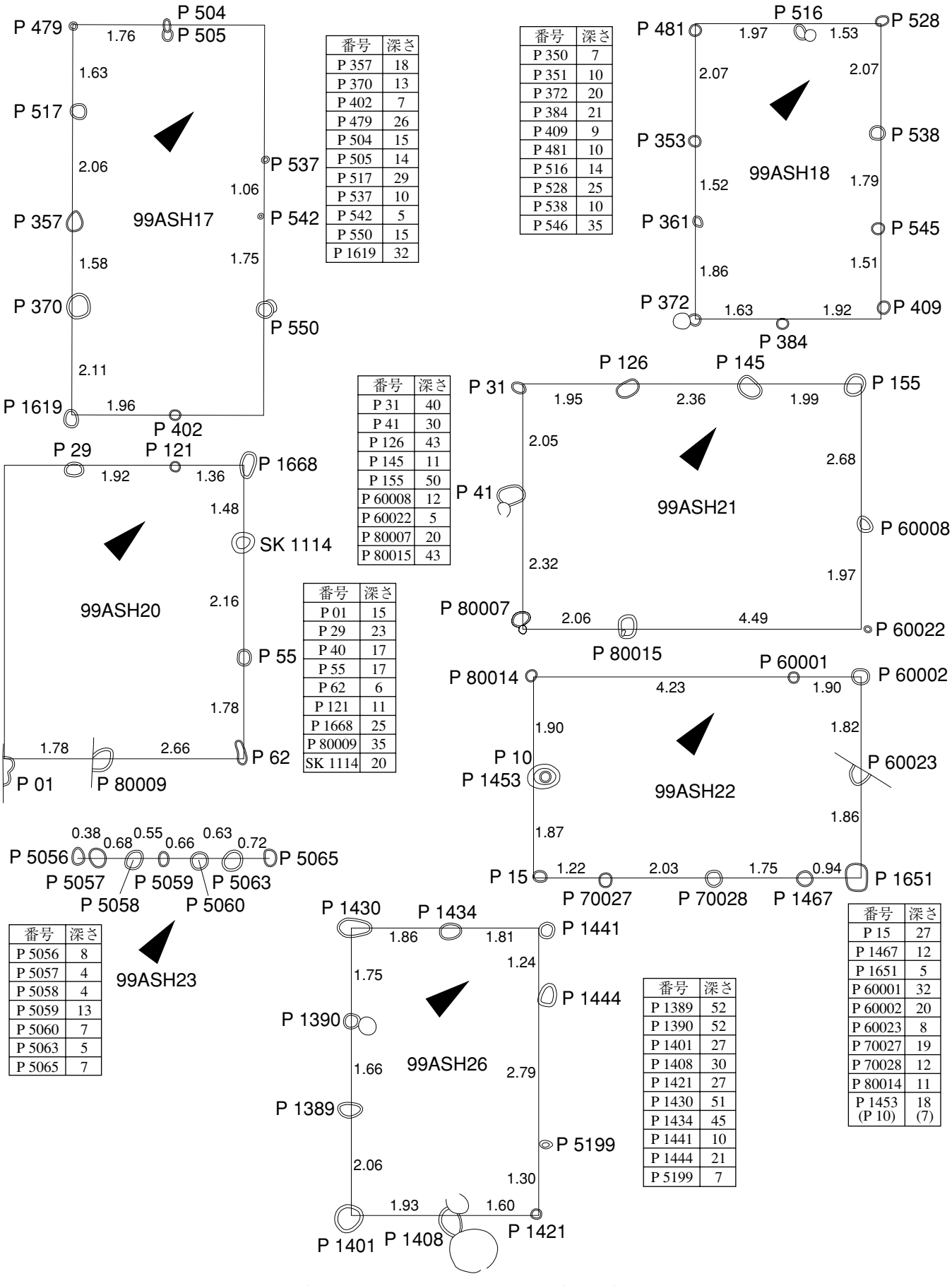
番号	深さ
P 150	20
P 159	45
P 163	40
P 169	10
P 170	15

番号	深さ
P 248	10
P 330	7
P 460	20
P 463	3
P 473	38
P 1499	26
SK 1107	17

番号	深さ
P 334	12
P 360	30
P 379	24
P 448	5
P 449	6
P 485	12
P 504	15
P 534	3
P 654	12
P 1579	21
P 1691	25
SK 1081	10
SK 1091	27
P 545	15

番号	深さ
P 332	32
P 346	26
P 356	12
P 471	8
P 506	28
P 652	17
P 1508	4
P 1514	25
P 1516	14
SK 46	25

第 528 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 357	18
P 370	13
P 402	7
P 479	26
P 504	15
P 505	14
P 517	29
P 537	10
P 542	5
P 550	15
P 1619	32

番号	深さ
P 350	7
P 351	10
P 372	20
P 384	21
P 409	9
P 481	10
P 516	14
P 528	25
P 538	10
P 546	35

番号	深さ
P 31	40
P 41	30
P 126	43
P 145	11
P 155	50
P 60008	12
P 60022	5
P 80007	20
P 80015	43

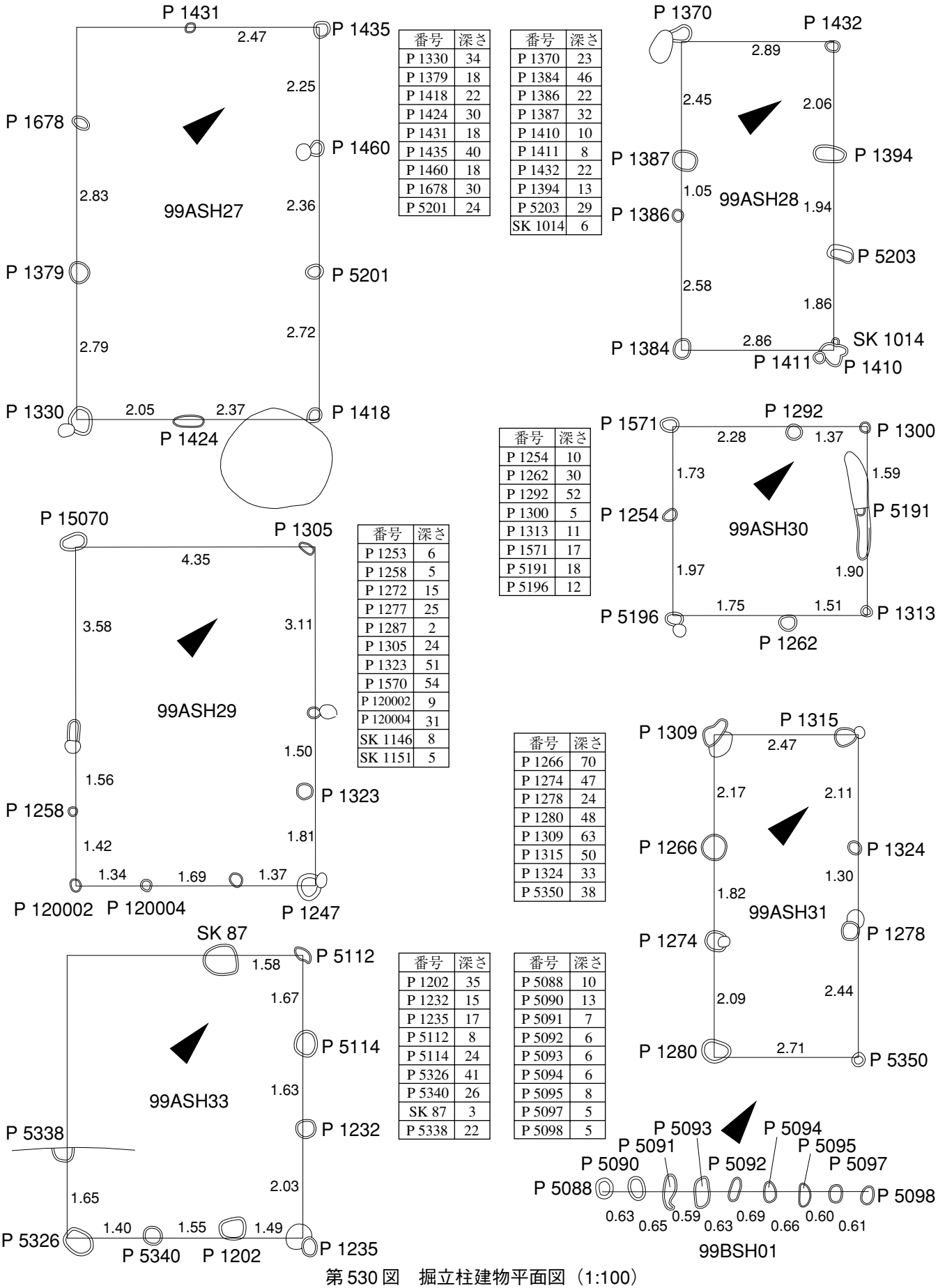
番号	深さ
P 01	15
P 29	23
P 40	17
P 55	17
P 62	6
P 121	11
P 1668	25
P 80009	35
SK 1114	20

番号	深さ
P 5056	8
P 5057	4
P 5058	4
P 5059	13
P 5060	7
P 5063	5
P 5065	7

番号	深さ
P 1389	52
P 1390	52
P 1401	27
P 1408	30
P 1421	27
P 1430	51
P 1434	45
P 1441	10
P 1444	21
P 5199	7

番号	深さ
P 15	27
P 1467	12
P 1651	5
P 60001	32
P 60002	20
P 60023	8
P 70027	19
P 70028	12
P 80014	11
P 1453 (P 10)	18 (7)

第 529 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 1330	34
P 1379	18
P 1418	22
P 1424	30
P 1431	18
P 1435	40
P 1460	18
P 1678	30
P 5201	24

番号	深さ
P 1370	23
P 1384	46
P 1386	22
P 1387	32
P 1410	10
P 1411	8
P 1432	22
P 1394	13
P 5203	29
SK 1014	6

番号	深さ
P 1254	10
P 1262	30
P 1292	52
P 1300	5
P 1313	11
P 1571	17
P 5191	18
P 5196	12

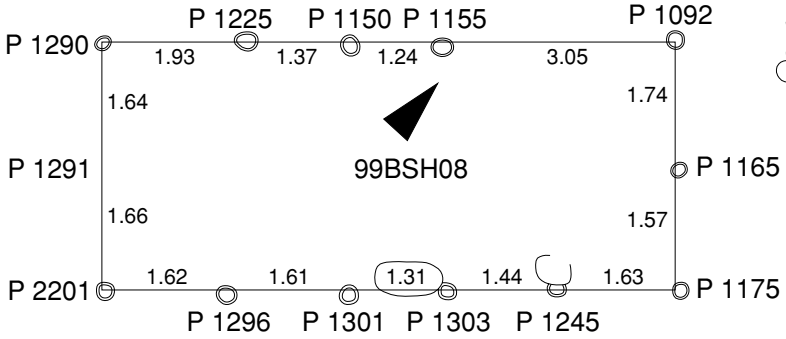
番号	深さ
P 1253	6
P 1258	5
P 1272	15
P 1277	25
P 1287	2
P 1305	24
P 1323	51
P 1570	54
P 120002	9
P 120004	31
SK 1146	8
SK 1151	5

番号	深さ
P 1266	70
P 1274	47
P 1278	24
P 1280	48
P 1309	63
P 1315	50
P 1324	33
P 5350	38

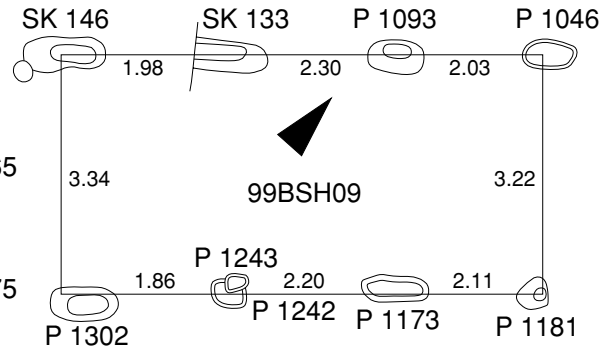
番号	深さ
P 1202	35
P 1232	15
P 1235	17
P 5112	8
P 5114	24
P 5326	41
P 5340	26
SK 87	3
P 5338	22

番号	深さ
P 5088	10
P 5090	13
P 5091	7
P 5092	6
P 5093	6
P 5094	6
P 5095	8
P 5097	5
P 5098	5

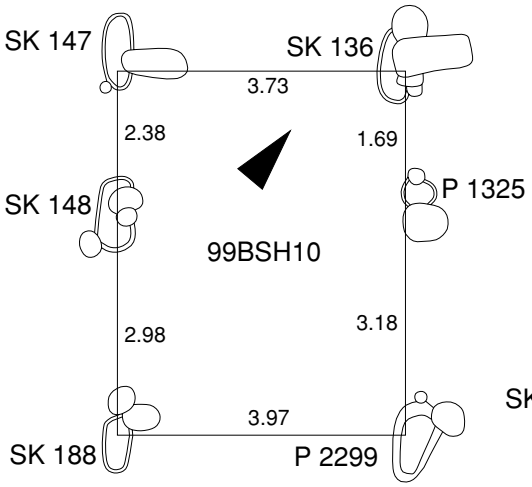
第 530 図　掘立柱建物平面図（1:100）



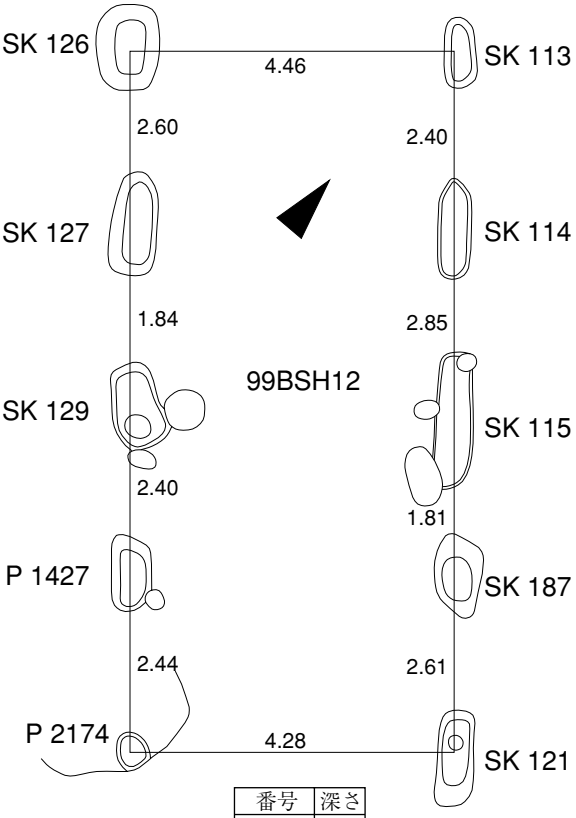
番号	深さ
P 1092	32
P 1150	29
P 1155	32
P 1165	35
P 1175	24
P 1225	35
P 1245	23
P 1290	36
P 1291	26
P 1296	19
P 1301	27
P 1303	28
P 2201	25



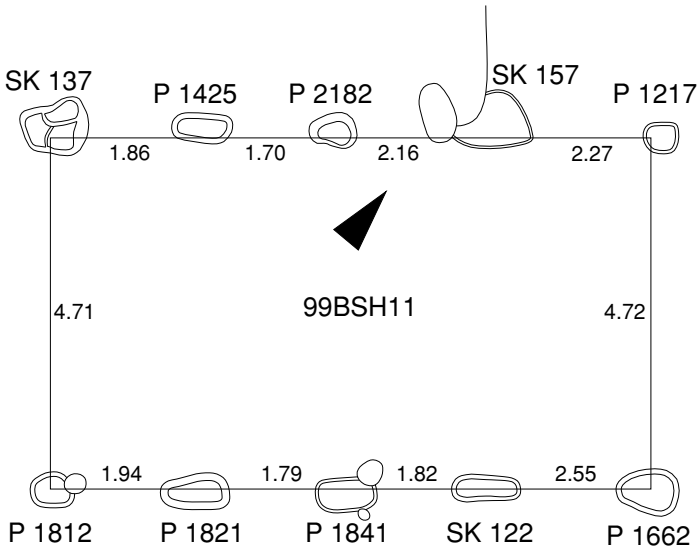
番号	深さ
P 1046	42
P 1093	40
P 1173	55
P 1181	39
P 1242	45
P 1243	37
P 1302	33
SK 133	57
SK 146	37



番号	深さ
SK 136	22
P 1325	20
P 2299	49
SK 147	26
SK 148	22
SK 188	63

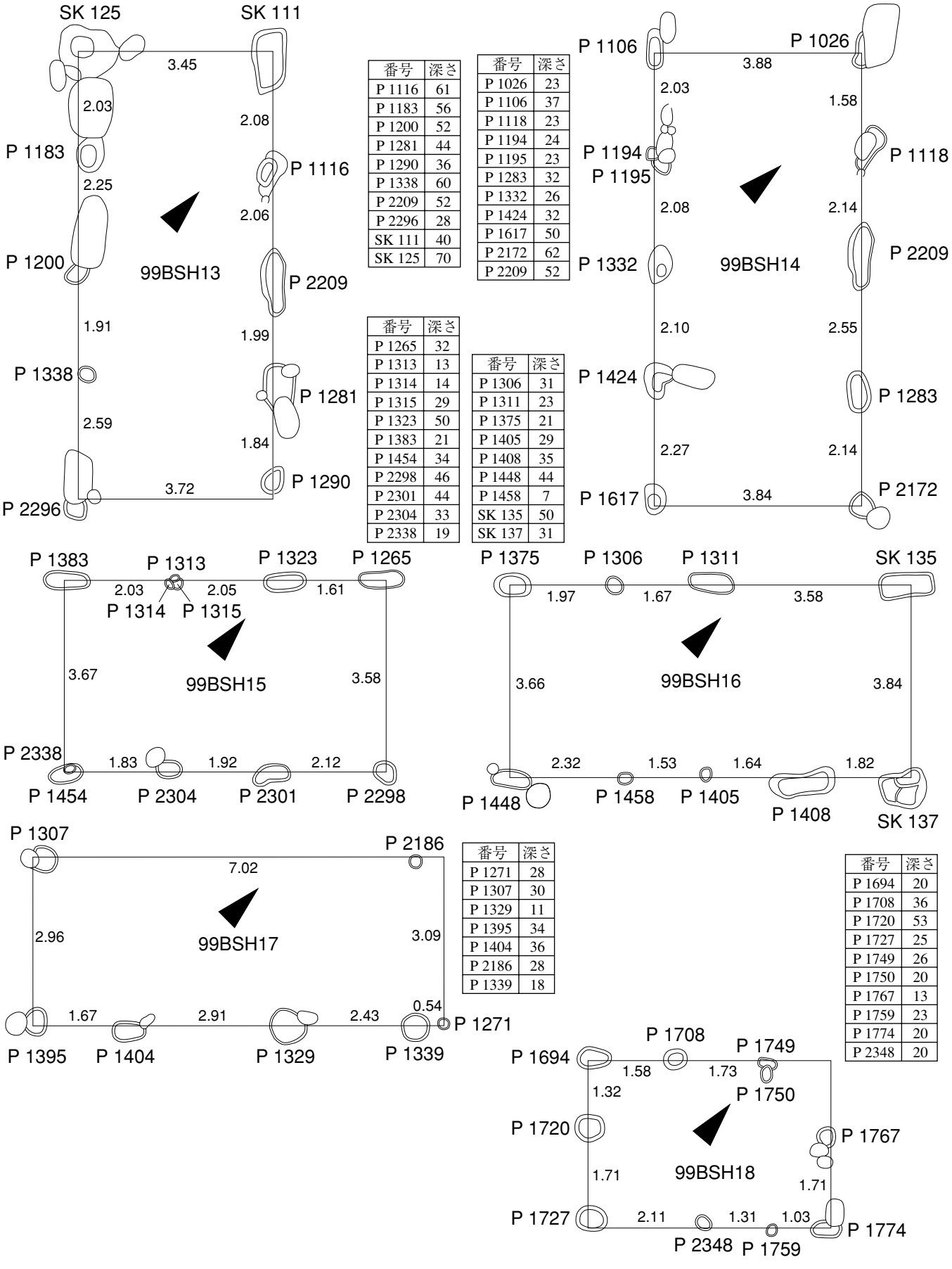


番号	深さ
P 1427	52
P 2174	43
SK 113	41
SK 114	38
SK 115	13
SK 121	48
SK 126	45
SK 127	52
SK 129	48
SK 187	13



番号	深さ
P 1217	45
P 1245	42
P 1662	31
P 1812	42
P 1821	40
P 1841	47
P 2182	66
SK 122	46
SK 137	31
SK 157	10

第 531 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 1116	61
P 1183	56
P 1200	52
P 1281	44
P 1290	36
P 1338	60
P 2209	52
P 2296	28
SK 111	40
SK 125	70

番号	深さ
P 1026	23
P 1106	37
P 1118	23
P 1194	24
P 1195	23
P 1283	32
P 1332	26
P 1424	32
P 1617	50
P 2172	62
P 2209	52

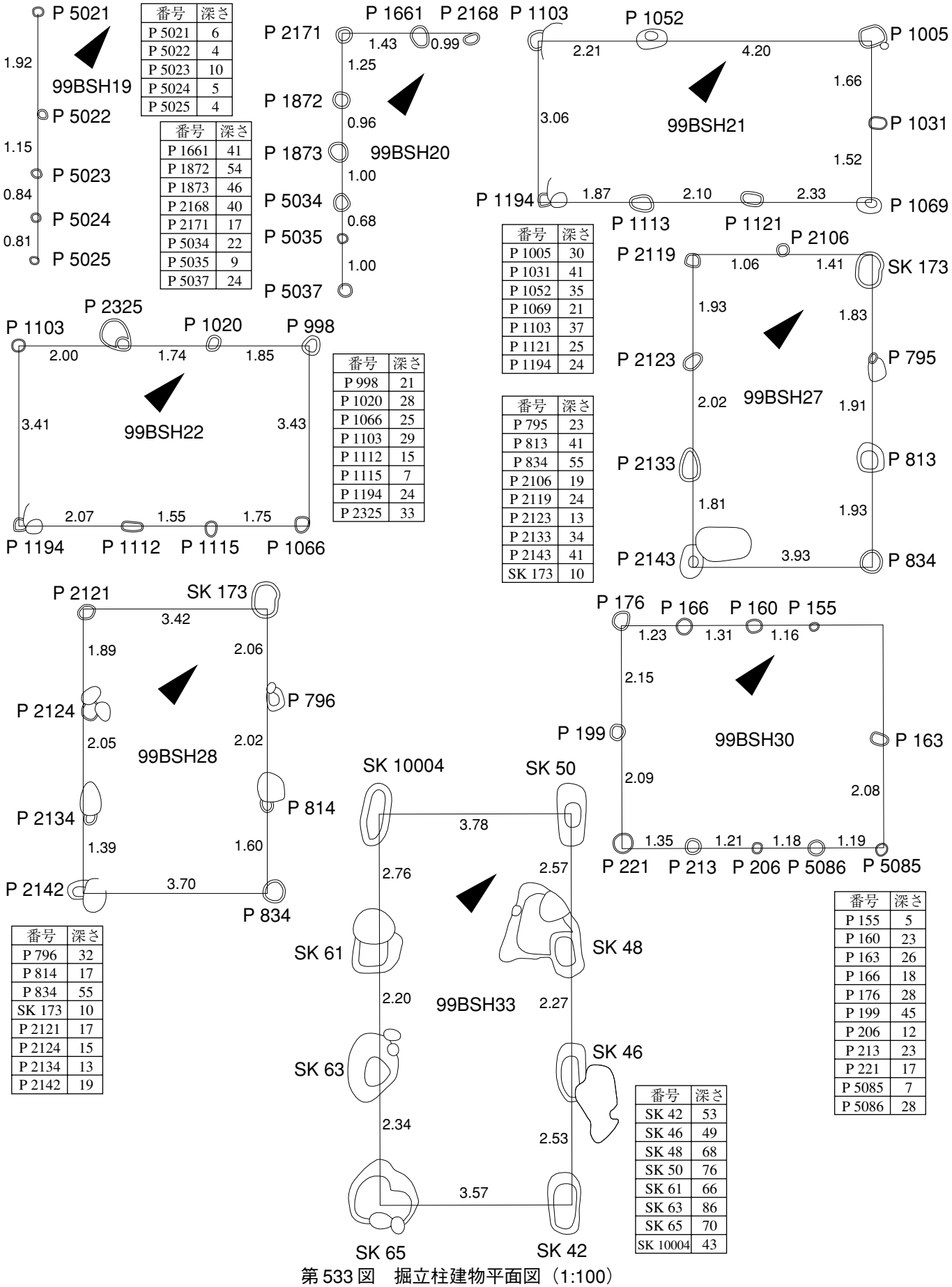
番号	深さ
P 1265	32
P 1313	13
P 1314	14
P 1315	29
P 1323	50
P 1383	21
P 1454	34
P 2298	46
P 2301	44
P 2304	33
P 2338	19

番号	深さ
P 1306	31
P 1311	23
P 1375	21
P 1405	29
P 1408	35
P 1448	44
P 1458	7
SK 135	50
SK 137	31

番号	深さ
P 1271	28
P 1307	30
P 1329	11
P 1395	34
P 1404	36
P 2186	28
P 1339	18

番号	深さ
P 1694	20
P 1708	36
P 1720	53
P 1727	25
P 1749	26
P 1750	20
P 1767	13
P 1759	23
P 1774	20
P 2348	20

第 532 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 5021	6
P 5022	4
P 5023	10
P 5024	5
P 5025	4

番号	深さ
P 1661	41
P 1872	54
P 1873	46
P 2168	40
P 2171	17
P 5034	22
P 5035	9
P 5037	24

番号	深さ
P 1005	30
P 1031	41
P 1052	35
P 1069	21
P 1103	37
P 1121	25
P 1194	24

番号	深さ
P 795	23
P 813	41
P 834	55
P 2106	19
P 2119	24
P 2123	13
P 2133	34
P 2143	41
SK 173	10

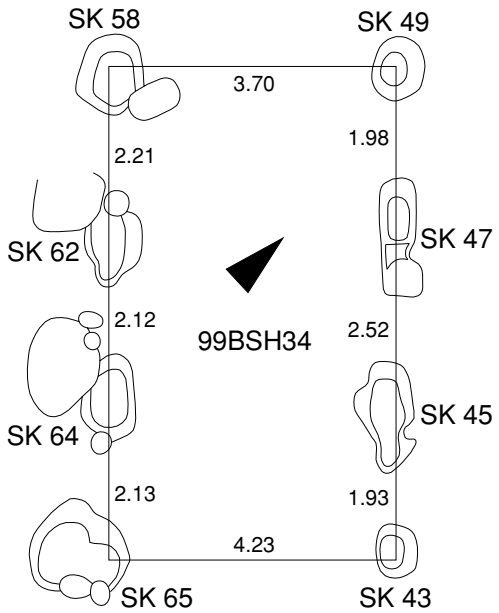
番号	深さ
P 998	21
P 1020	28
P 1066	25
P 1103	29
P 1112	15
P 1115	7
P 1194	24
P 2325	33

番号	深さ
P 796	32
P 814	17
P 834	55
SK 173	10
P 2121	17
P 2124	15
P 2134	13
P 2142	19

番号	深さ
SK 42	53
SK 46	49
SK 48	68
SK 50	76
SK 61	66
SK 63	86
SK 65	70
SK 10004	43

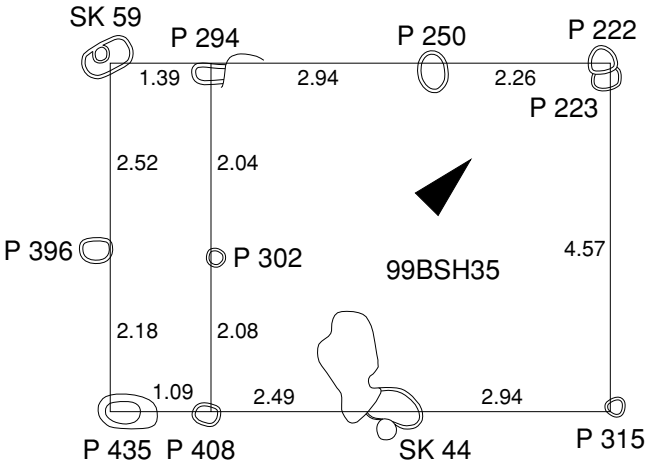
番号	深さ
P 155	5
P 160	23
P 163	26
P 166	18
P 176	28
P 199	45
P 206	12
P 213	23
P 221	17
P 5085	7
P 5086	28

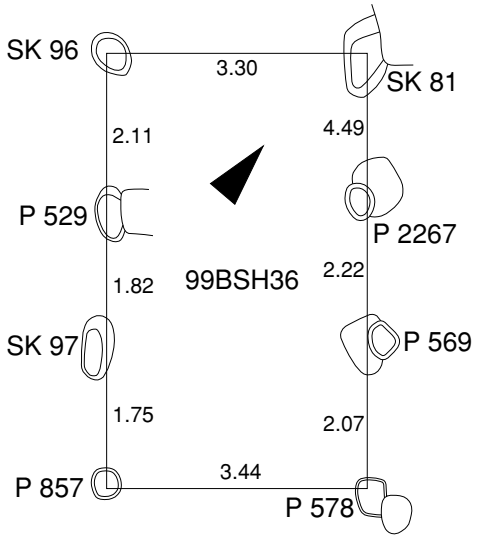
第 533 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
SK 43	38
SK 45	49
SK 47	49
SK 49	59
SK 58	55
SK 62	70
SK 64	70
SK 65	70

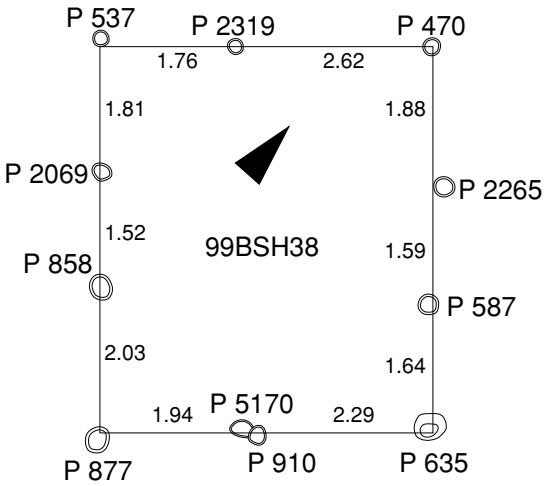
番号	深さ
P 222	19
P 223	22
P 250	12
P 294	34
P 302	6
P 315	33
P 396	40
P 408	10
P 435	52
SK 44	5
SK 59	28

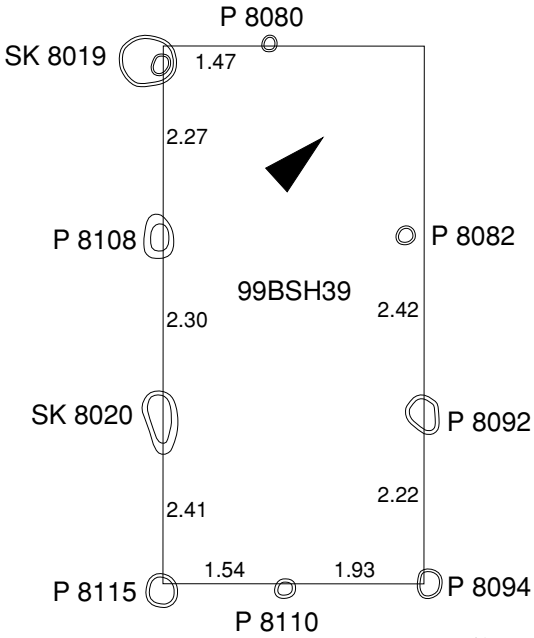




番号	深さ
P 857	47
P 529	30
P 569	25
P 578	73
P 2267	58
SK 81	39
SK 96	44
SK 97	45

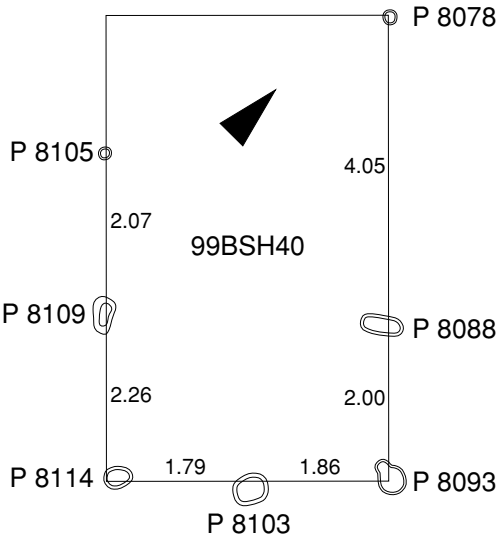
番号	深さ
P 470	10
P 537	17
P 587	23
P 635	27
P 858	30
P 877	29
P 910	28
P 2069	19
P 2265	10
P 2319	25
P 5170	35



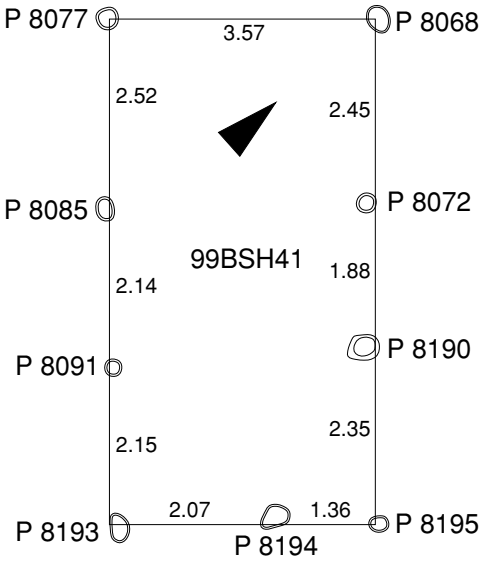


番号	深さ
P 8080	16
P 8082	16
P 8092	23
P 8094	28
P 8108	42
P 8110	33
P 8115	21
SK 8019	24
SK 8020	43

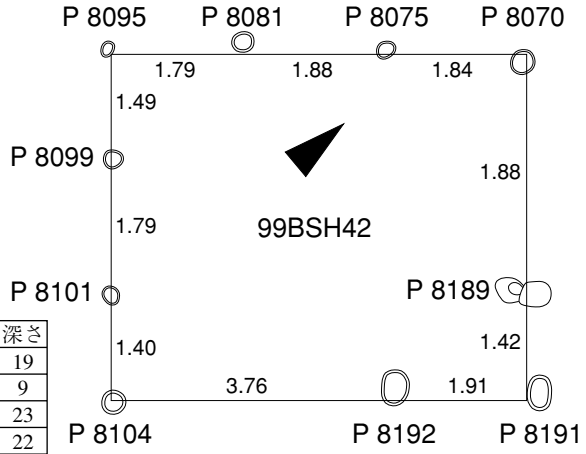
番号	深さ
P 8078	10
P 8088	26
P 8093	22
P 8103	22
P 8105	14
P 8109	26
P 8114	18



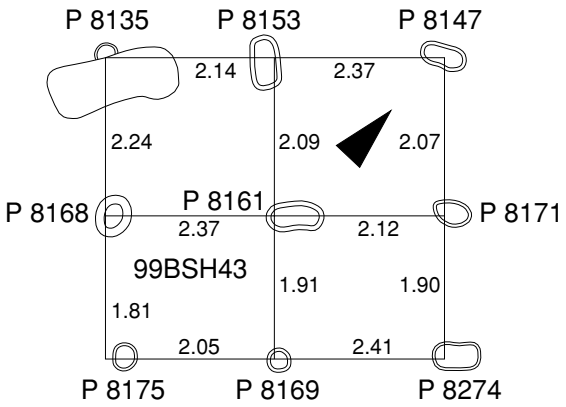
第 534 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 8068	9
P 8072	18
P 8077	30
P 8085	32
P 8091	23
P 8190	30
P 8193	33
P 8194	6
P 8195	16

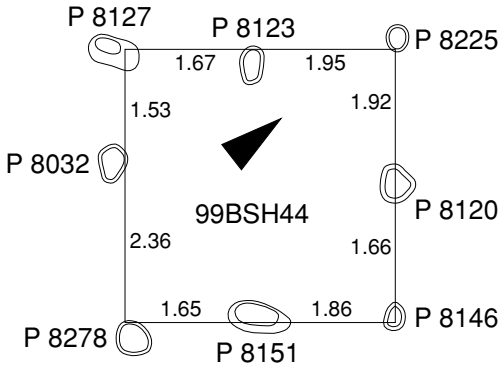


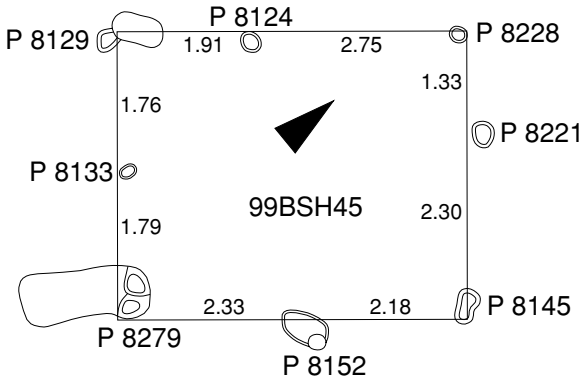
番号	深さ
P 8070	19
P 8075	9
P 8081	23
P 8095	22
P 8099	15
P 8101	33
P 8104	38
P 8189	35
P 8191	23
P 8192	6



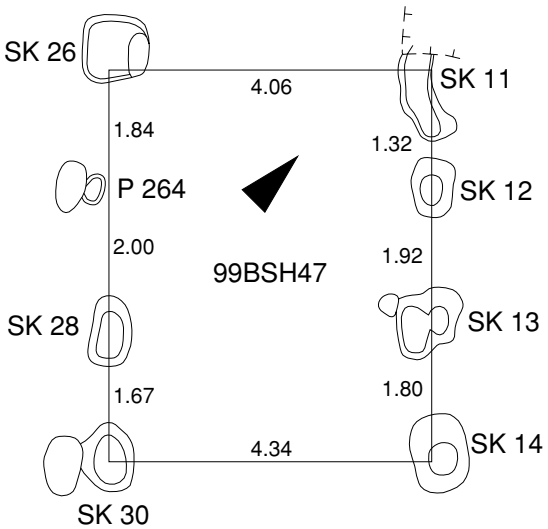
番号	深さ
P 8135	35
P 8147	32
P 8153	60
P 8161	52
P 8168	33
P 8169	24
P 8171	32
P 8175	26
P 8274	12

番号	深さ
P 8032	10
P 8120	53
P 8123	37
P 8127	60
P 8146	43
P 8151	58
P 8278	48
P 8225	32



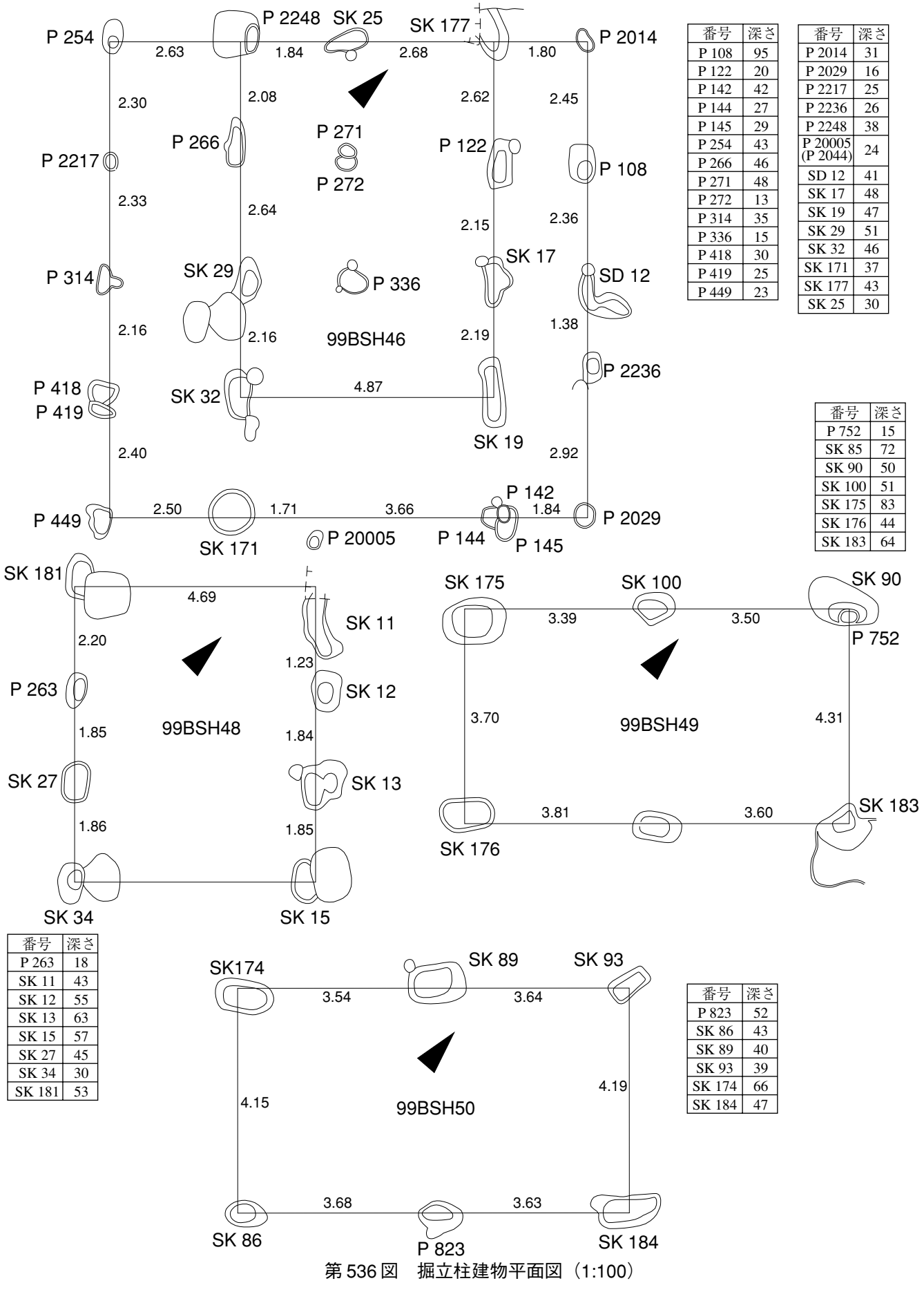


番号	深さ
P 8124	39
P 8129	38
P 8133	6
P 8145	46
P 8152	35
P 8221	40
P 8228	17
P 8279	20



番号	深さ
P 264	36
SK 11	43
SK 12	55
SK 13	63
SK 14	66
SK 26	62
SK 28	50
SK 30	67

第 535 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 108	95
P 122	20
P 142	42
P 144	27
P 145	29
P 254	43
P 266	46
P 271	48
P 272	13
P 314	35
P 336	15
P 418	30
P 419	25
P 449	23

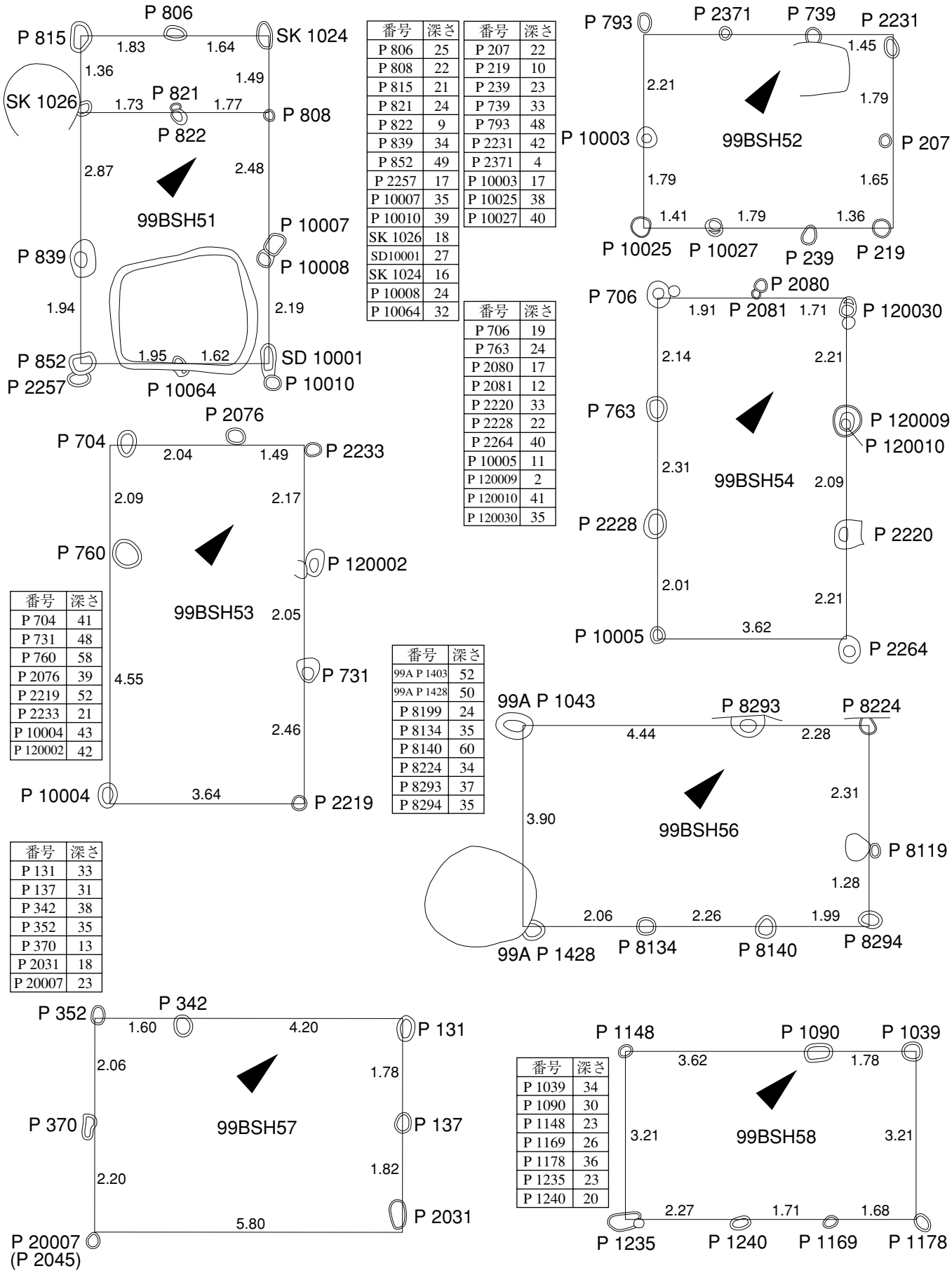
番号	深さ
P 2014	31
P 2029	16
P 2217	25
P 2236	26
P 2248	38
P 20005 (P 2044)	24
SD 12	41
SK 17	48
SK 19	47
SK 29	51
SK 32	46
SK 171	37
SK 177	43
SK 25	30

番号	深さ
P 752	15
SK 85	72
SK 90	50
SK 100	51
SK 175	83
SK 176	44
SK 183	64

番号	深さ
P 263	18
SK 11	43
SK 12	55
SK 13	63
SK 15	57
SK 27	45
SK 34	30
SK 181	53

番号	深さ
P 823	52
SK 86	43
SK 89	40
SK 93	39
SK 174	66
SK 184	47

第 536 図　掘立柱建物平面図（1:100）



番号	深さ
P 806	25
P 808	22
P 815	21
P 821	24
P 822	9
P 839	34
P 852	49
P 2257	17
P 10007	35
P 10010	39
SK 1026	18
SD10001	27
SK 1024	16
P 10008	24
P 10064	32

番号	深さ
P 207	22
P 219	10
P 239	23
P 739	33
P 793	48
P 2231	42
P 2371	4
P 10003	17
P 10025	38
P 10027	40

番号	深さ
P 706	19
P 763	24
P 2080	17
P 2081	12
P 2220	33
P 2228	22
P 2264	40
P 10005	11
P 120009	2
P 120010	41
P 120030	35

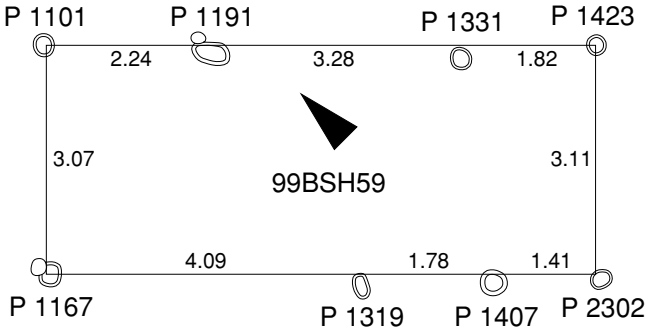
番号	深さ
P 704	41
P 731	48
P 760	58
P 2076	39
P 2219	52
P 2233	21
P 10004	43
P 120002	42

番号	深さ
99A P 1403	52
99A P 1428	50
P 8199	24
P 8134	35
P 8140	60
P 8224	34
P 8293	37
P 8294	35

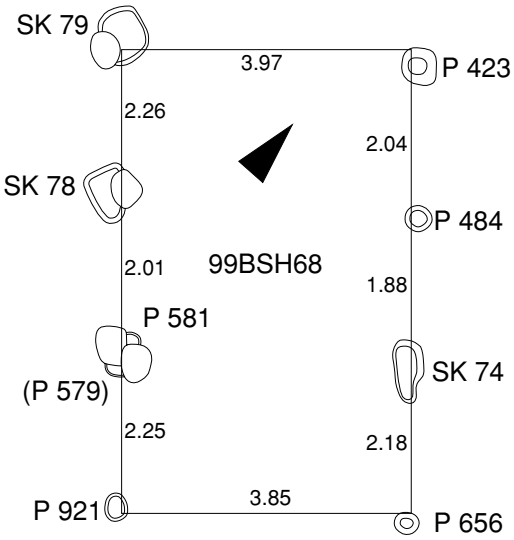
番号	深さ
P 131	33
P 137	31
P 342	38
P 352	35
P 370	13
P 2031	18
P 20007	23

番号	深さ
P 1039	34
P 1090	30
P 1148	23
P 1169	26
P 1178	36
P 1235	23
P 1240	20

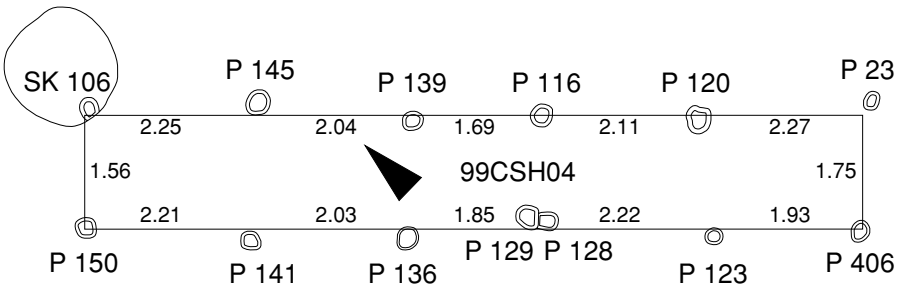
第 537 図　掘立柱建物平面図（1:100）



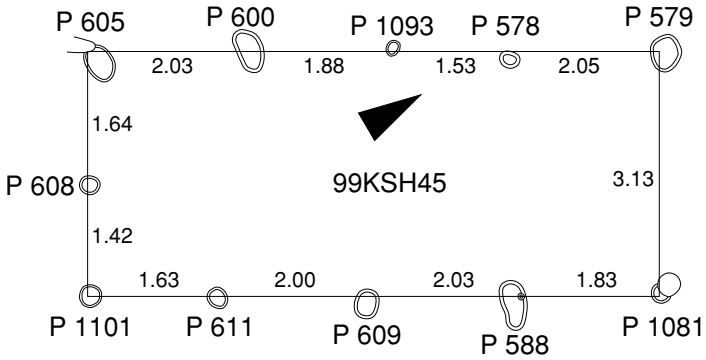
番号	深さ
P 1101	36
P 1167	39
P 1191	25
P 1319	25
P 1331	27
P 1407	19
P 1423	25
P 2302	18



番号	深さ
P 423	60
P 484	43
P 656	19
P 921	35
P 581 (P 579)	16 (24)
SK 74	45
SK 78	34
SK 79	58

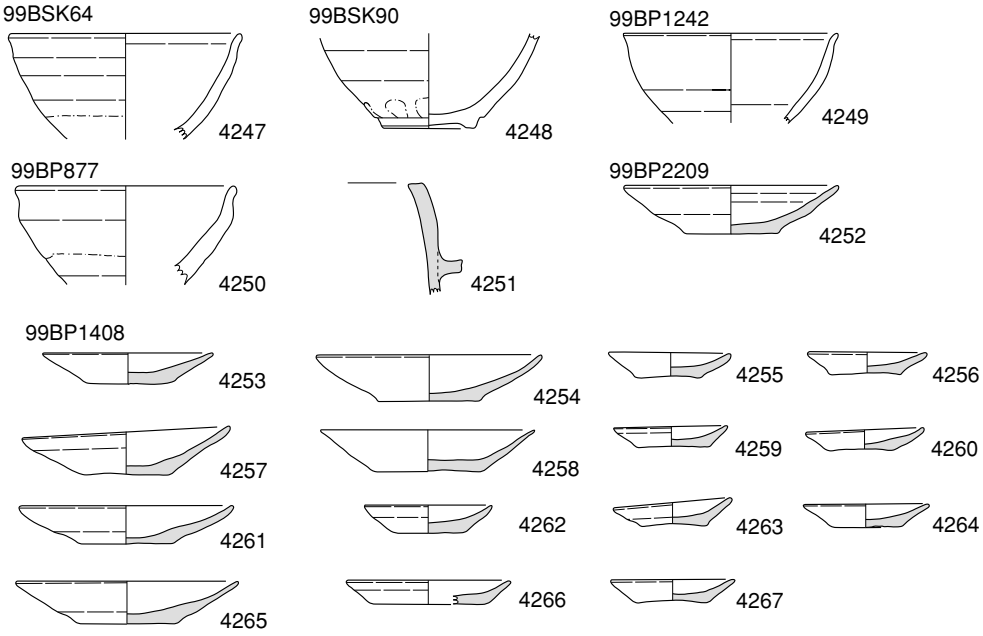


番号	深さ
P 23	13
P 116	17
P 120	30
P 123	6
P 128	7
P 129	8
P 136	21
P 139	24
P 141	20
P 145	42
P 150	31
P 406	11
SK 106	39



番号	深さ
P 578	16
P 579	21
P 588	10
P 600	14
P 605	20
P 608	12
P 609	13
P 611	12
P 1081	12
P 1093	14
P 1101	9

第 538 図　掘立柱建物平面図（1:100）



第539図　柱穴出土遺物実測図（1:4）



写真　99B区屋敷地区画F西での遺構確認状況（東から）

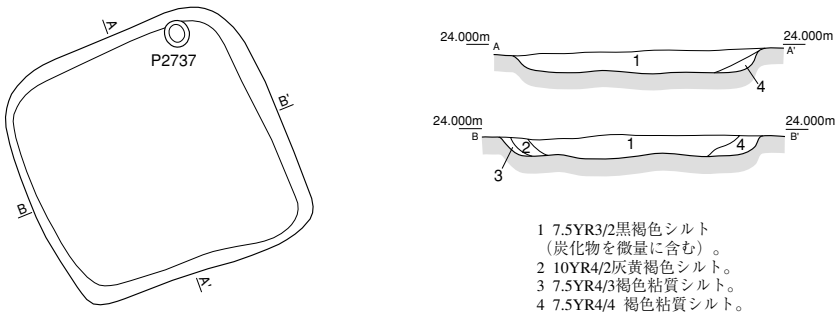


写真　99BSH48北辺の柱掘形99BSK12（左）・13（右）土層断面（南西から）

第 4 節　竪穴建物

98DSB46　調査区中央部南東よりIXI7cグリッドで検出された竪穴建物。南北軸1.7m、東西軸1.8m、深さ15cmを測る隅丸方形状のプランを呈する竪穴建物。南北軸はN -26°- Wを示す。埋土は黒褐色シルトの単一層で、微量に炭化物を含んでいた。床面には柱穴と思われるピットや土坑、カマド跡は確認されなかった。但し、この竪穴建物を取り込んだ状態で、2 × 3 間の掘立柱建物が構築されており、単独の竪穴建物と考えるよりは掘立柱建物にともなう竪穴状遺構と理解することが妥当かもしれない。

土師器内耳鍋が出土したが、小片により図化不能であった。

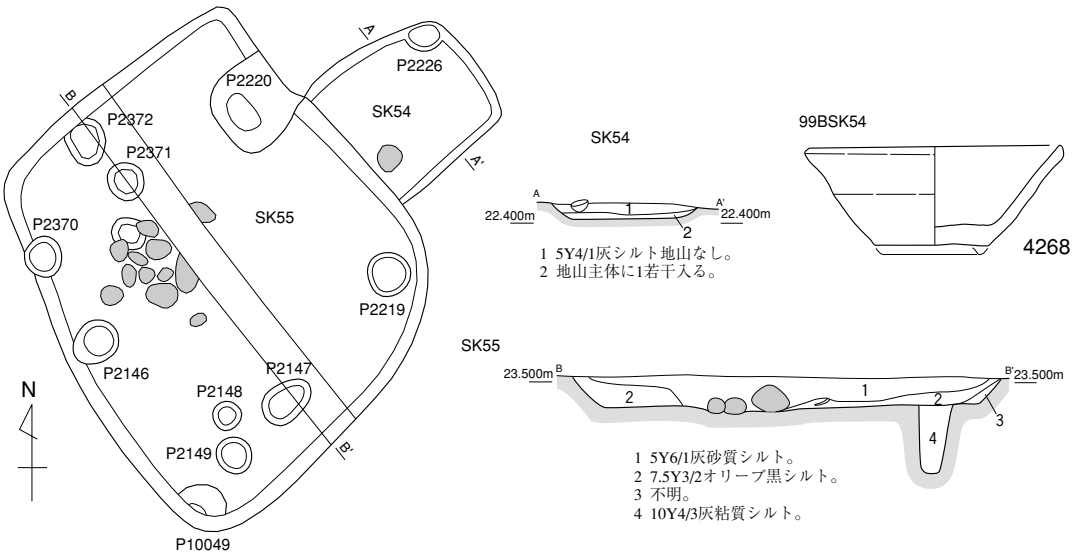


第540図　98DSB46（平面・断面図1:50）

99ASK55　調査区中央部、大溝南東側XG20rグリッドで検出された、長軸2.8m、短軸2.4mを測る南西辺がややふくらみを持つ隅丸長方形の竪穴建物。長軸の方位はN -37°- Wを示す。深さは20cm前後と浅く、灰色砂質シルトで大半が充填されていた。また、床面直上からは少量であるが径10 ～ 20cm程度の円礫が出土している。この竪穴状遺構からは床面で柱穴と思われるピットが検出されているが、この建物に伴う柱穴であるかは判然としない。

瀬戸美濃産のすり鉢の小片などが出土している。

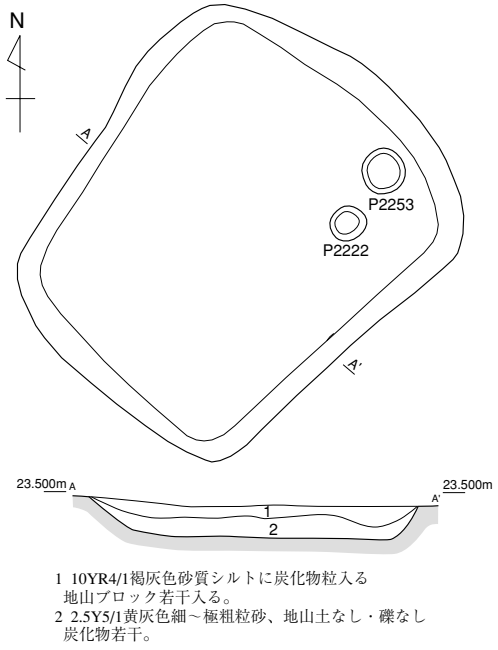
99BSK82　99BSK55南西側、IG1qグリッドで検出された竪穴建物。全体に隅丸長方形のプランを呈するが、北東辺は北方向に緩やかに湾曲している。規模は、長軸2.8m、短軸2.1m、深さ20cm前後を測り、



第541図　99BSK55（遺構図1:50、実測図1:4）

長軸の方位はN-43°-Wを示す。床面からはピットが2基検出されているが、建物規模を判明しうる状況にはない。99BSK55同様、掘立柱建物の内部施設の可能性も考えられる。

出土遺物は土師器小片が若干出土するのみであり、明確な時期決定は困難であるが、古代の竪穴建物を切っていること、規模・形状が当該期の竪穴建物と類似することなどから、この時期の遺構と判断した。

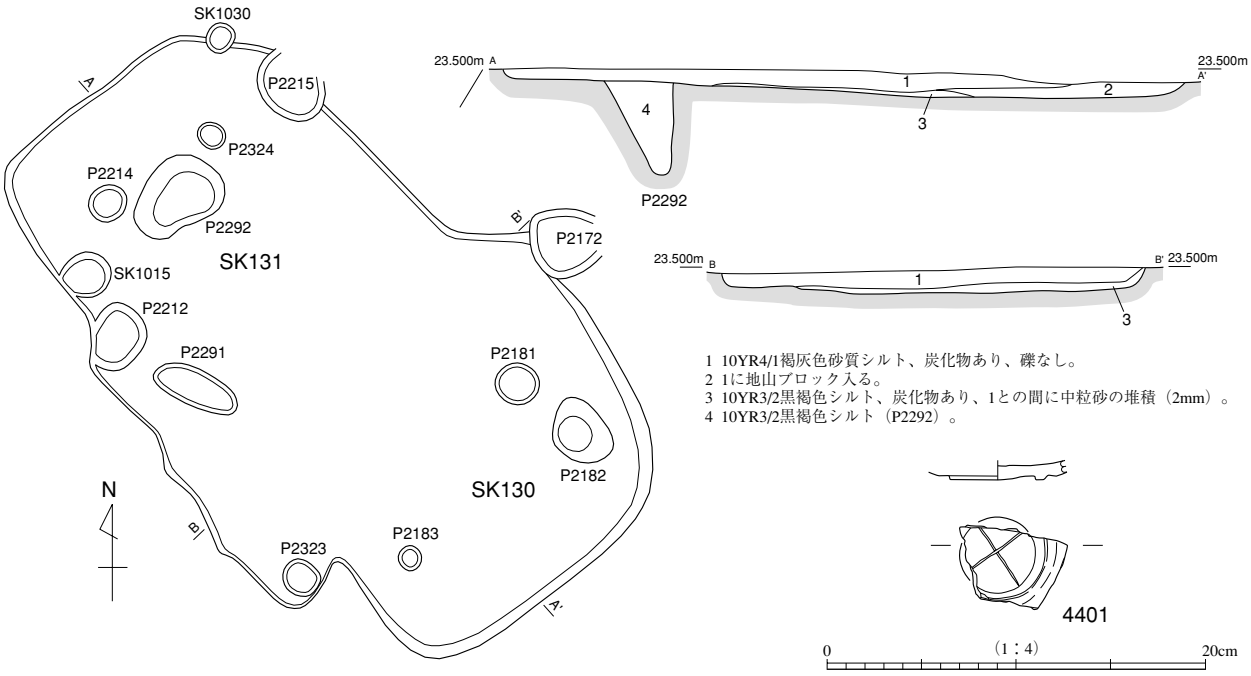


1 10YR4/1褐灰色砂質シルトに炭化物粒入る地山ブロック若干入る。
2 2.5Y5/1黄灰色細～極粗粒砂、地山土なし・礫なし炭化物若干。

第542図　99BSK82（1:50）

99BSK130・131　調査区南西部、IG5mグリッドで検出された竪穴建物。南西方向に張り出し部がともなう不整形なプランを呈し、断面観察で中粒砂が間層として確認されていることから、2基の竪穴建物が重複していると考えられる。重複する2基の前後関係については、南東部(99BSK130)が洪水等により廃絶した後、北西側に移動して99BSK131が新たに構築されたと考えられる。床面から柱穴と思われるピットが数基確認されているが、竪穴建物に伴う遺構であるかは不明である。

中世の掘立柱建物同様、柱穴からの出土遺物は少なく、建物の明確な時期を決定することは難しい。



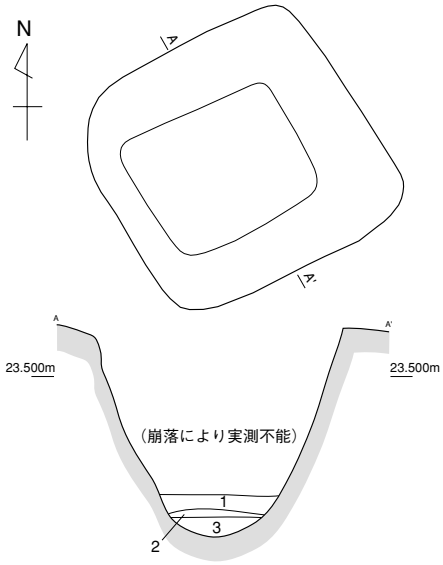
1 10YR4/1褐灰色砂質シルト、炭化物あり、礫なし。
2 1に地山ブロック入る。
3 10YR3/2黒褐色シルト、炭化物あり、1との間に中粒砂の堆積（2mm）。
4 10YR3/2黒褐色シルト（P2292）。

第543図　99BSK130・131（1:50）

第5節　その他の遺構

（1） 井戸

戦国時代から近世初頭の時期に属する井戸は、7基検出されている。いずれの井戸も掘形が深く、作業員による人力での掘削は危険であったため、調査最終段階において重機による断ち割りを実施した。その際確認された共通事項として、1基（98DSK368）に構造物の痕跡が確認された以外は、構造物を伴わない素掘りであった。また掘形については、上部が開き気味の円筒状に掘削され、断面は擂鉢状を呈していた。また、これらの井戸は調査区内で確認されている区画に含まれる位置に構築されており、生活用水確保のために利用されていたと考えられる。



1 5YG5/1暗オリーブ灰色粗粒砂。
2 N2/黒色粘土（粗粒砂を含む、竹材片多い）。
3 7.5Y7/1灰白色粗粒砂。

第544図　98DSK368（1:50）

98DSK368　98D区南西部、区画G南西部XH9rグリッドで検出。遺構検出時には平面形が径1.7mの隅丸方形とやや小型であったため、土坑と認識し、SK番号を用いて掘削を行った。深さは遺構検出面から1.4m、断面形は上部がやや開き気味の円筒状を呈する。掘削途中降雨による崩壊のため、土層観察は最下層のみに止まった。今回確認された井戸のうち、構造物をともなう可能性が考えられた唯一の井戸であり、最下層に桶物のたがのみが残存していた。

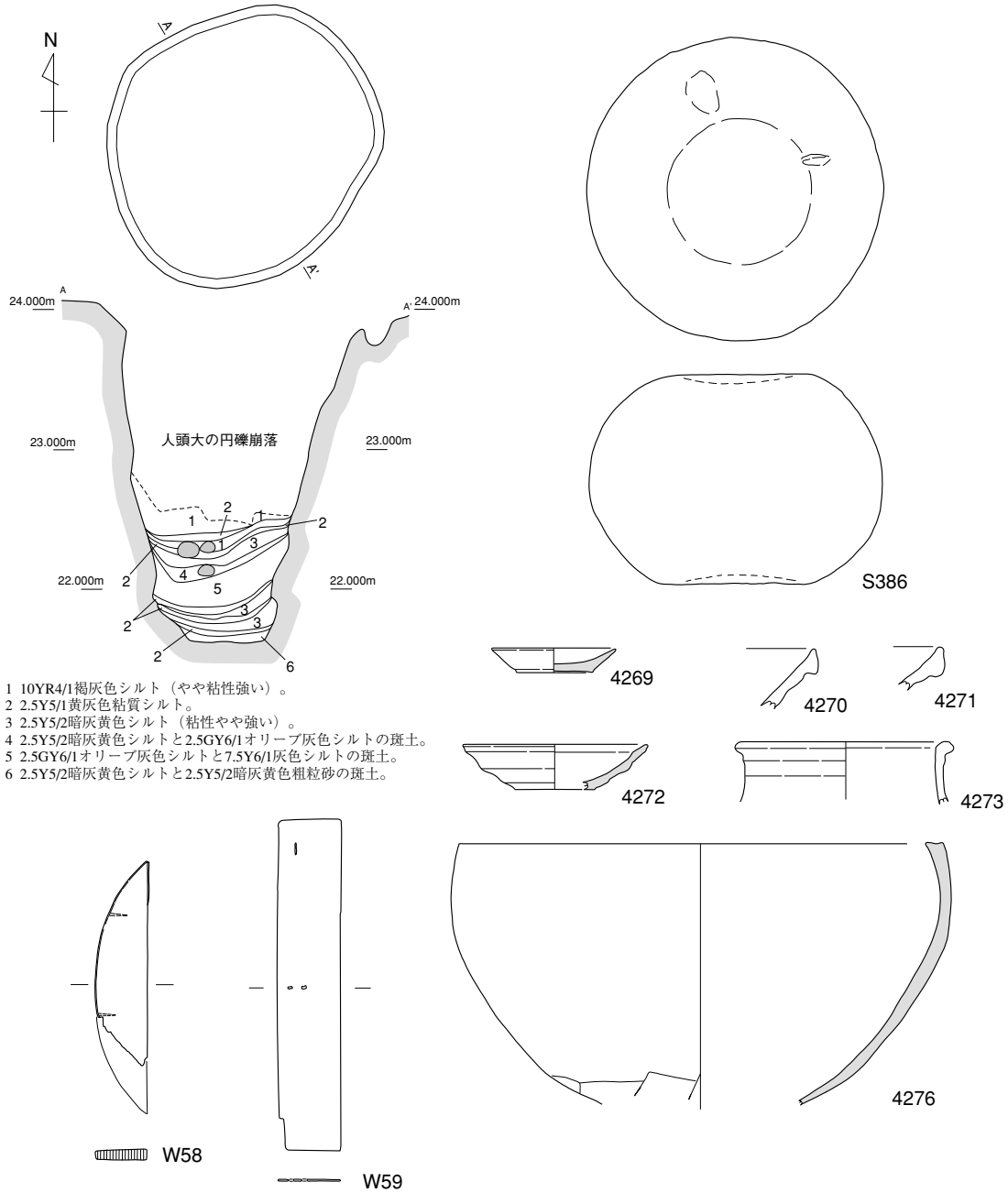
99ASE01　99A区北端部、区画AIG1dグリッドで検出された長径2.2m、短径1.8mの平面円形を呈する井戸。断面はほぼ円筒形に近く、深さは遺構検出面から2.5mを測る。井戸の埋土のうち、上部三分の二には人頭大の円礫が充填されており、井戸廃絶時に地固めの目的で投棄されたと考えられる。

S386は五輪塔の水輪。材質は花崗岩。4269・4272はロクロ成形による土師器皿。4269には底部に回転糸切りによる切り離し痕が観察される。4270は大窯2段階、4271は大窯3段階前半の鉄釉擂鉢。4273は灰釉広口瓶子、時期は古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ古期。4276は半球型内耳鍋。外面にはススが付着する。外面底部はヘラ削りによる調整が認められる。内面はハケによる調整が行われているが、摩滅により詳細は不明。W58は曲物底板。曲物の体部を構成する側板を止めるための木クギを打ち込むための穴が2ヶ所観察された。W59は器壁の薄い板状木製品。用途は定かではないが、曲物の側板の可能性が考えられる。

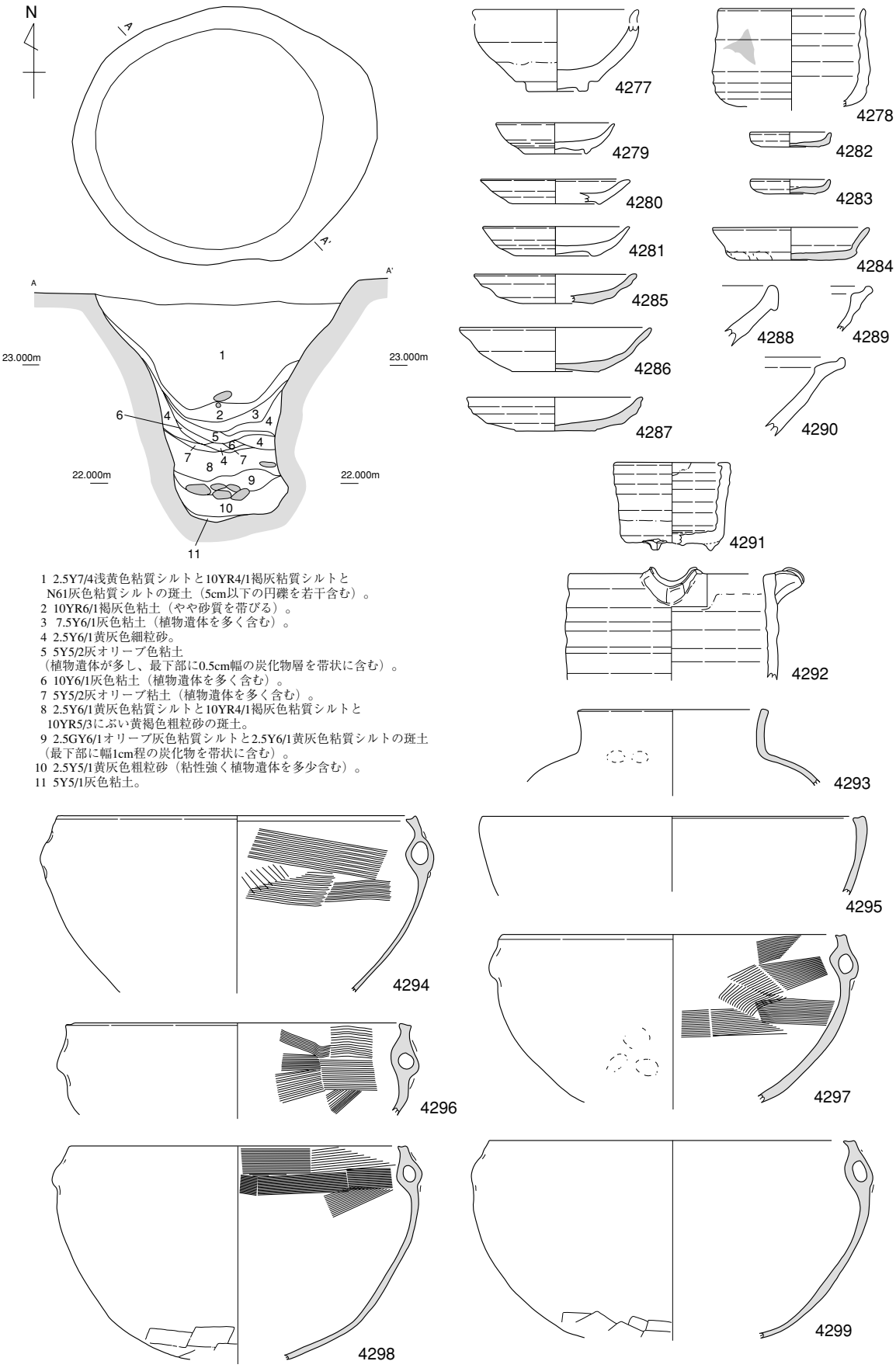
99ASE02　99A北半部、99ASE01南側IG3dグリッドで検出。平面形は長径2.6m、短径2.2mを測る楕円形を呈し、深さは遺構検出面から2.1mを測る。他の井戸に比べて断面上部がかなり幅広に掘削されており、円筒状よりも漏斗状に近い形状を呈している。検出されたの位置が区画Aの南東を限る溝と重複するが、南東区画溝は2～3回の掘り直しが考えられるため、重複する区画溝とは同時存在していないと考えることが妥当であろう。

4277は大窯4段階後半に位置づけられる鉄釉天目茶碗。4278は内外面ともに灰釉が掛けられている碗。

外面には鉄釉による施文が施されているが、詳細は不明。時期は近世中期にまで下がる。4280は灰釉丸皿。器面全体に灰釉が掛けられているが、高台内は無釉となっている。時期は大窯3段階前半。4279は大窯4段階後半に属する長石釉の掛けられたいわゆる志野丸皿。4281は高台内の釉がはぎ取られている灰釉内禿皿。時期は大窯3段階後半。4282～4287は土師器皿。4287が非ロクロ成形である以外はロクロ成形である。4287は底部および見込みに指押さえによる圧痕が観察される。また、平らに調整された底部が体部へと立ち上がる位置に明瞭な稜線が認められる事から、型作りの可能性が考えられる。特にこの土師器皿は、内外面ともに灰黒色を呈し、ススが付着することから、他の土師器皿とは用途等を異にしている可能性が考えられる。4291は筒形香炉。体部下半から底部にかけては無釉であり、断面が台

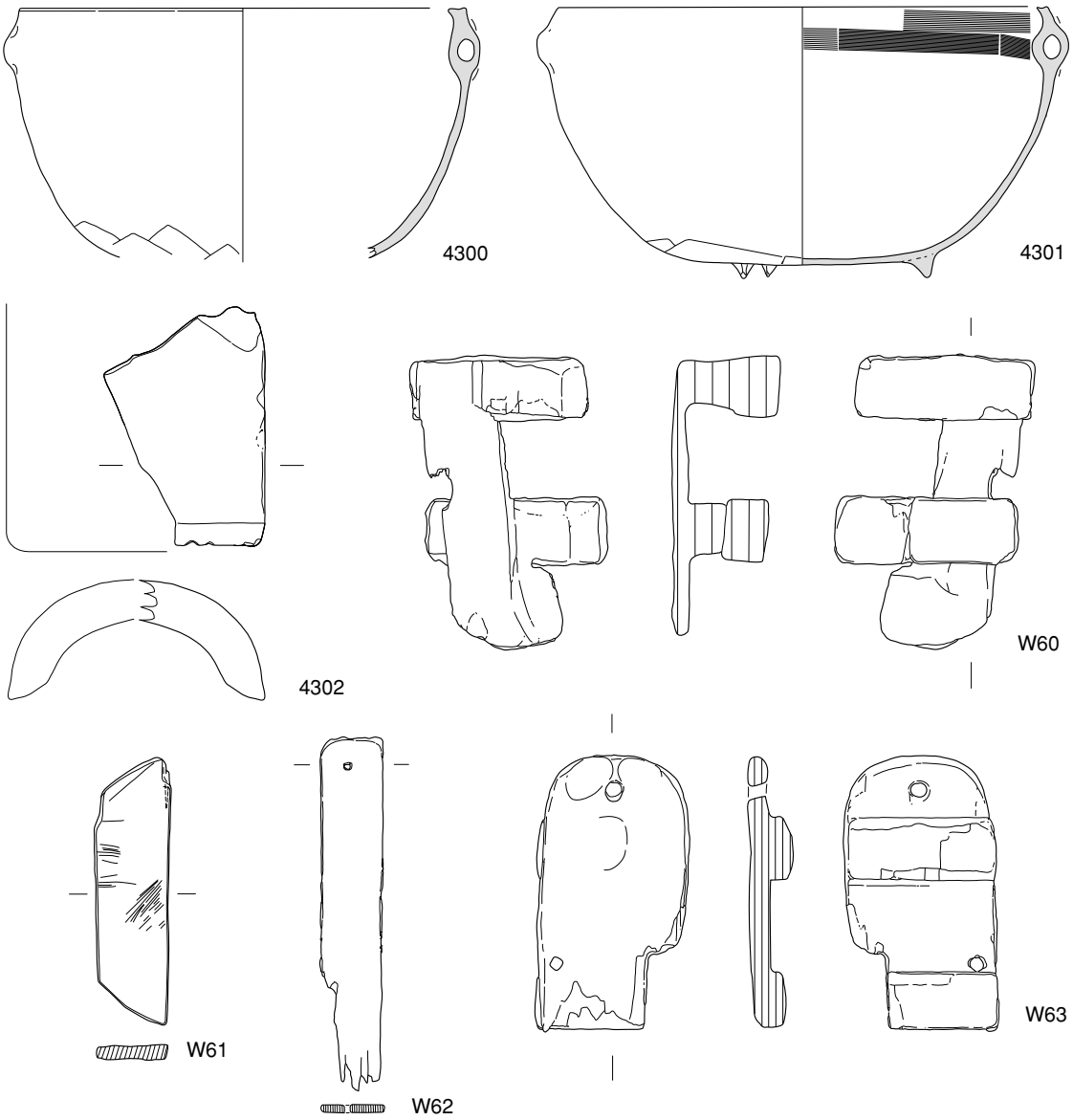


第545図　99ASE01（遺構図1:50、実測図1:4）



1 2.5Y7/4浅黄色粘質シルトと10YR4/1褐灰粘質シルトと
N61灰色粘質シルトの斑土（5cm以下の円礫を若干含む）。
2 10YR6/1褐灰色粘土（やや砂質を帯びる）。
3 7.5Y6/1灰色粘土（植物遺体を多く含む）。
4 2.5Y6/1黄灰色細粒砂。
5 5Y5/2灰オリーブ色粘土
（植物遺体が多し、最下部に0.5cm幅の炭化物層を帯状に含む）。
6 10Y6/1灰色粘土（植物遺体を多く含む）。
7 5Y5/2灰オリーブ粘土（植物遺体を多く含む）。
8 2.5Y6/1黄灰色粘質シルトと10YR4/1褐灰色粘質シルトと
10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂の斑土。
9 2.5GY6/1オリーブ灰色粘質シルトと2.5Y6/1黄灰色粘質シルトの斑土
（最下部に幅1cm程の炭化物を帯状に含む）。
10 2.5Y5/1黄灰色粗粒砂（粘性強く植物遺体を多少含む）。
11 5Y5/1灰色粘土。

第546図　99ASE02（１）（遺構図1:50、実測図1:4）



第547図　99ASE02（２）（1:4）

形状を呈する脚がおそらく３個所に貼付されている。古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期。4292は連房第１小期の鉄釉片口。4293 ～ 4301は土師器鍋と釜。いずれの遺物も外面にススが付着する。4301は底部に、断面三角形を呈する脚が３個所貼付されている。W61 ～ W63は木製品。W61は曲物の底板であったものを転用したと思われ、刃物によると考えられる細かな傷が多数残されている。また、木クギを固定するためと思われる穿孔が１ヶ所残存していた。W60・W63は一木造の下駄。

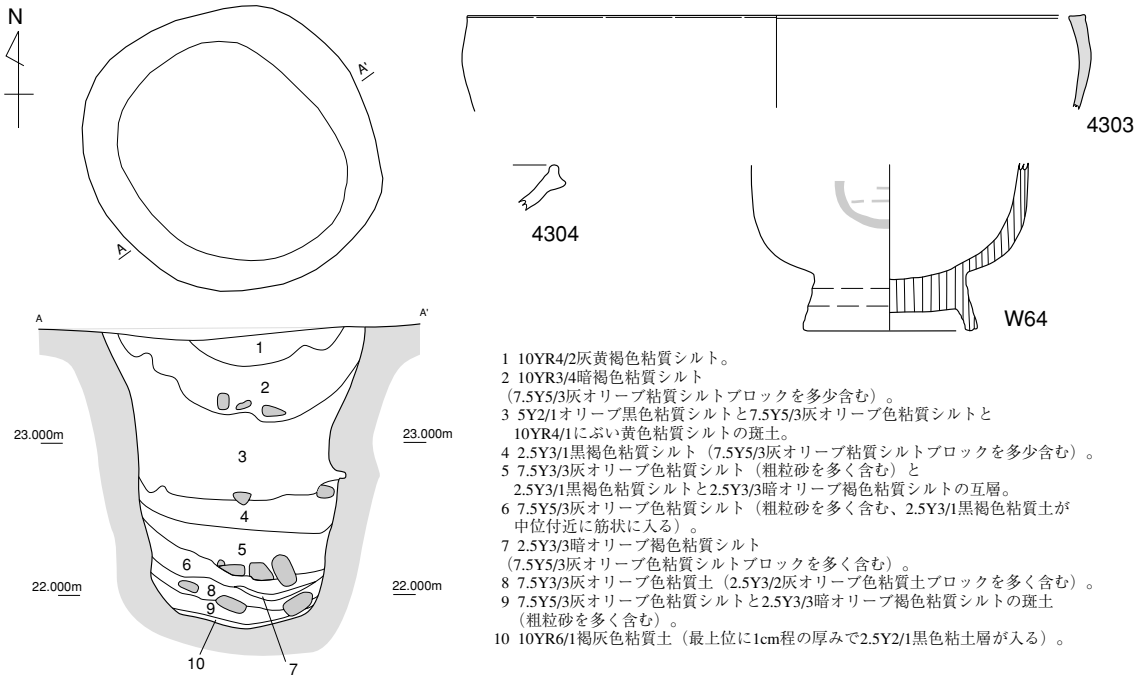
99BSE8001　99B区大溝北西側、XG18iグリッドで検出。区画Ｂ南東溝近くに位置し、径1.9mのほぼ円形に近いプランで、断面は円筒状を呈す。深さは遺構検出面から2.0mを測る。埋土中に人頭大から拳大の円礫が若干混入していたが、99ASE01のように礫が充填されている様子は観察されなかった。

4303は半球型の土師器鍋。4304は大窯１段階の鉄釉擂鉢。W64は内外面ともに黒漆椀。体部に文様が描かれており、丸文は認識可能であるがその内部の文様は識別不能であった。

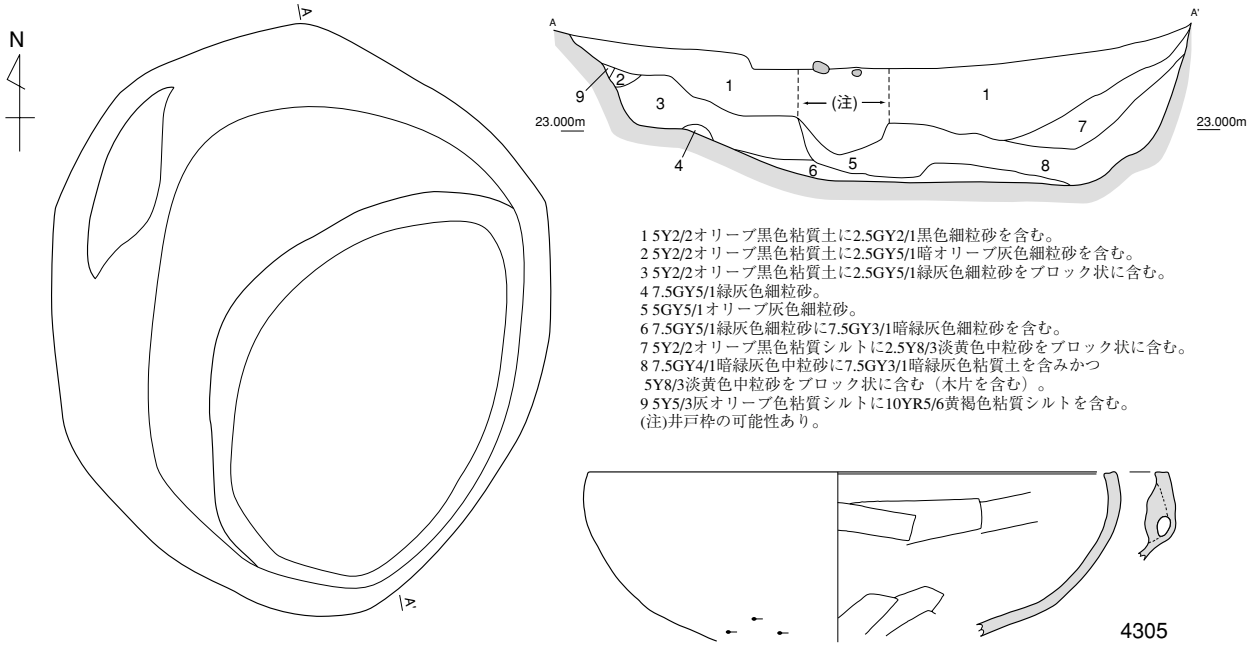
99BSE8002　99B区大溝北西側、XG20hグリッドで検出。区画Ｇ南端に構築されていた。不整形な円形

状のプランを呈し、径は1.0mを測る。断面は掘形中央部がややふくらみを持つ円筒形で、深さは遺構検出面から2.0mを測る。重機による断ち割り途中での崩落により埋土の精査は行なえなかったが、井戸内は人頭大の礫でほぼ充填されていた。99ASE01同様、廃絶時に地固めなどの目的で投棄されたと考えられる。

4306は土師器釜。外面には使用された際に付着したススが観察される。

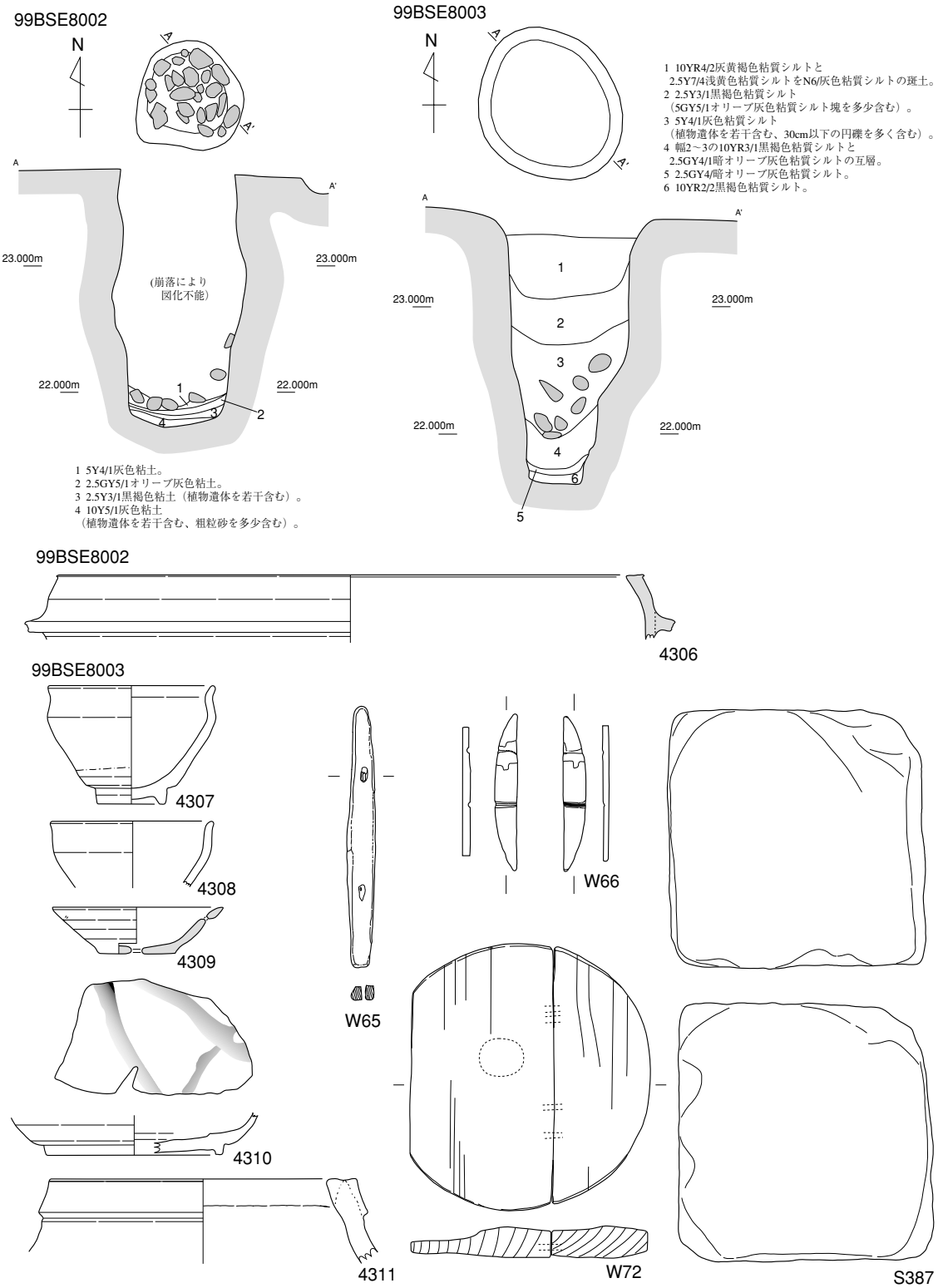


第548図　99BSE8001（遺構図1:50、実測図1:4）



第549図　99ESE02（遺構図1:50、実測図1:4）

99BSE8003　99B 調査区北西端、IG1e グリッドで検出された径 1.2m を測る円形プランの井戸。深さは 2.2mで、断面は上部幅広、掘形中央部から幅狭となり、大小 2 基の円筒形を重ね合わせた形状であった。埋土中央に観察された層序中には径 30cm 前後の円礫が大量に混入していた。この井戸は区画Ａ南東溝付近、99ASE01・02 の中間に掘削されていた。



第550図　99BSE8002・8003（遺構図1:50、実測図1:4）

4307・4308はともに連房第2小期に位置する鉄釉天目茶碗。それ以前の天目茶碗と比べ体部中央の屈曲部から口縁部までの立ち上がりが長くなっている。4309はロクロ成形による土師器皿。底部及び体部に焼成後の穿孔がなされている。4310は中皿。全面灰釉がかけられ、見込みに鉄釉による施文が行われている。4311は常滑産焼き締めの壺。W65・W66は木製品で、前者は柄杓の柄であり、後者は曲物底板の一部。W66は別々に出土したが、形状や刻みの位置などから同一個体であると判断しうる。

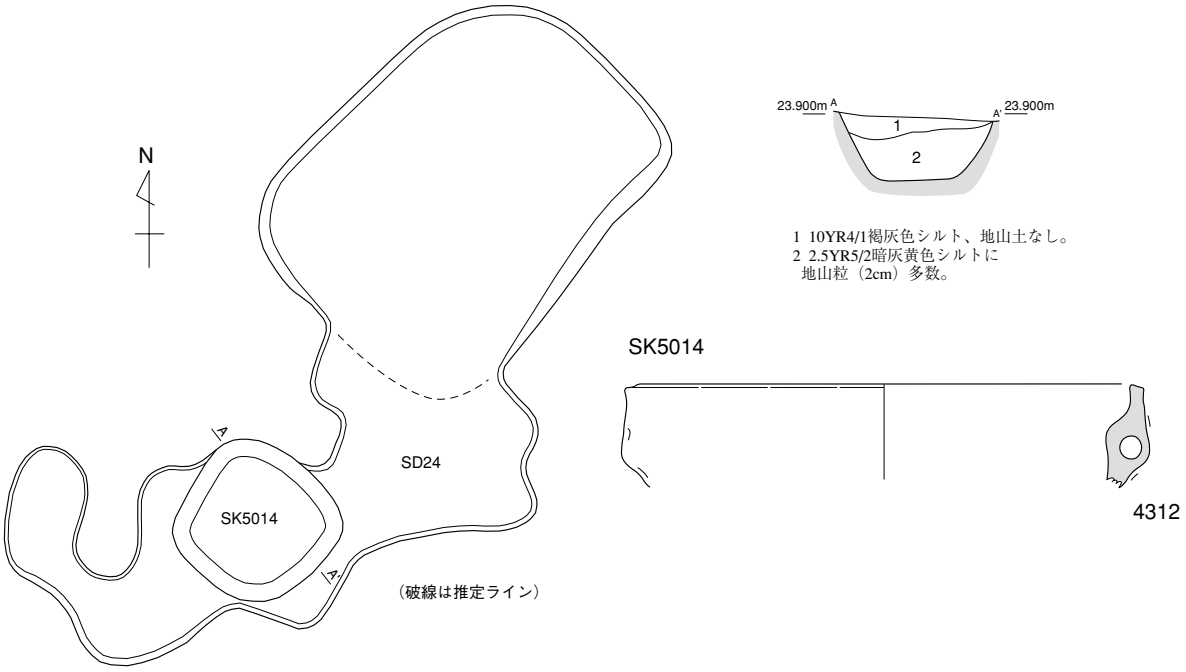
99ESE02　99E区谷A落ち際、VIIIH20gグリッドで検出。プランは楕円形を呈し、一段テラス状の平坦面を造り出した後、現況での湧水層まで掘削されていた。規模は長径3.9m、短径3.3m、深さ1.1mを測る。明確な構造物は遺存していなかったが、断面観察では構造物の存在を想定しうる堆積が確認されており、井戸廃棄時に抜き取られた可能性が考えられる。

中世前半の可能性を示す遺物も出土しているが、桶などによる井戸枠が存在した可能性がある点や4305の半球型鍋が出土している点から当該期の遺構と判断した。

（2）土坑

土坑として記述する遺構は、柱穴と思われる遺構よりもやや大きめで竪穴住居や竪穴建物ではないと判断したものを対象とした。この時期に該当する土坑は、他の遺構同様大屋敷地区にまとまってみられたが、いずれもやや大型ではあるものの出土遺物量は少なく、時期決定は小片に拠らざるを得なかった。また、遺物が出土しなかった土坑については、埋土の堆積状況などから類似する遺構の時期と同時期であると判断した。ここでは特徴的な遺構についてのみ記述し、その他については一覧表を参照されたい。

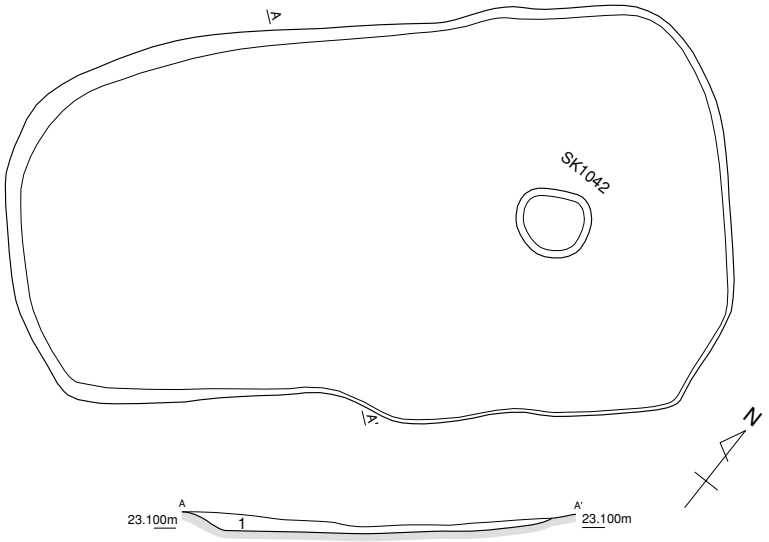
99ASD24　調査区北西壁際、IG3cグリッドで検出。遺構検出段階では不定型なプランであったためSD番号を適用したが、掘削の結果、隅丸長方形の土坑と不整形な落ち込みを同一遺構と認識していたことが判明した。隅丸長方形土坑の規模は、2.5m×2.0m、深さ10cmを測る。長軸の方位はN-46°-Eを示



第551図　99ASD24・SK5014（遺構図1:50、実測図1:4）

す。床面に柱穴と思われるピットも確認されておらず、他の竪穴建物と比較した場合、やや規模が小型であるが、堆積埋土の状況や軸線が区画溝と一致する点などから、竪穴建物である可能性も考えられる。

4312は半球型内耳鍋。出土遺物はこの１点のみであった。



1 2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト、混入物なし。

第552図　99BSK01（1:50）

99ASK5014　99ASD24とした遺構の不整形な落ち込み部で検出された隅丸台形状のプランを呈する土坑。規模は1.1m×1.1m、深さ0.3mを測り、北東−南西軸は99ASD24と同じN°-46- Eを示す。遺構の性格は不明。

出土遺物は戦国期と考えられるものが出土しているが、いずれも小片のため図化はできなかった。

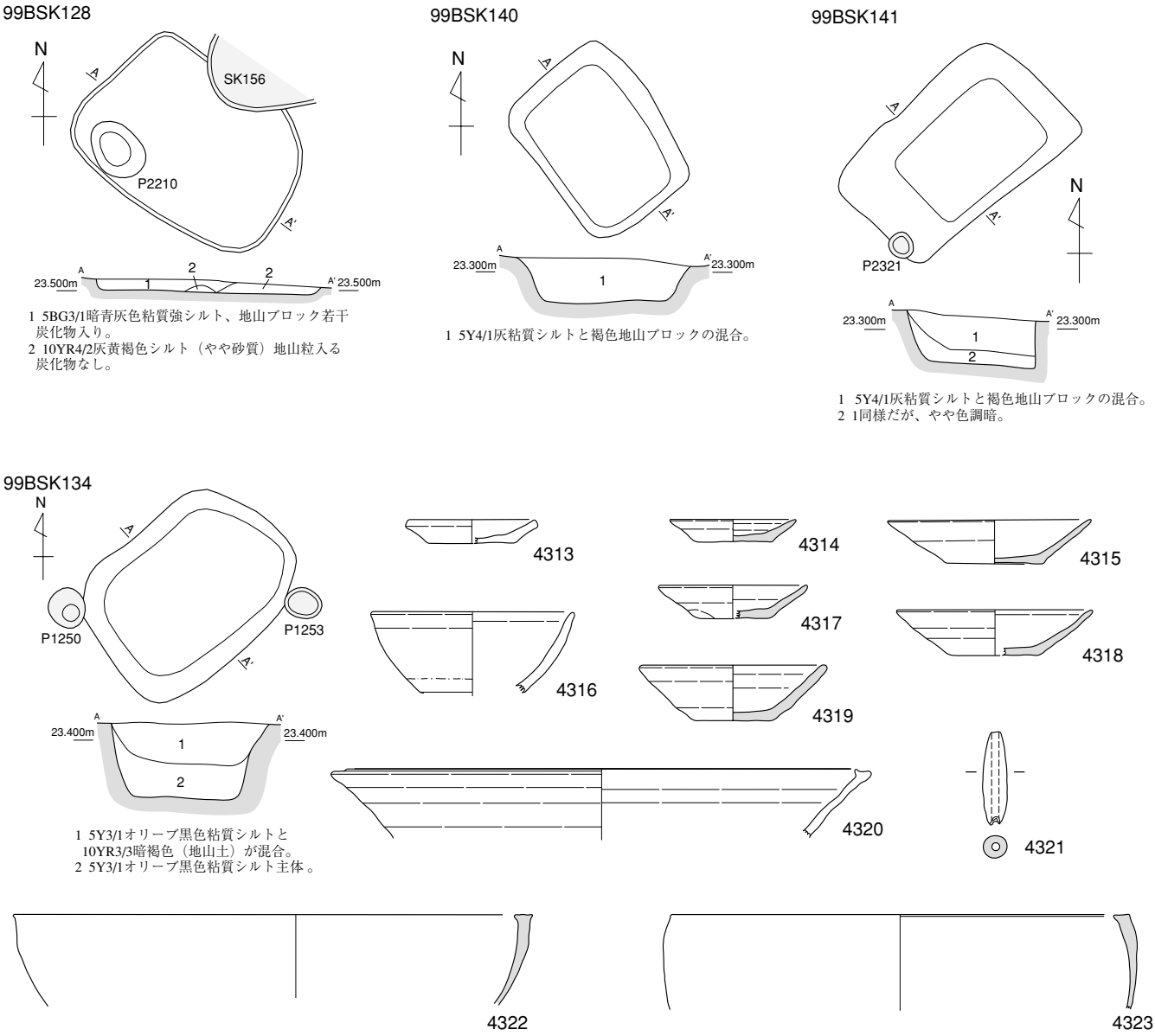
99BSK01　XG18sグリッドで確認された大型土坑。深さは10cm以下と浅いが、長軸4.8m、短軸2.4mを測る。長軸はN -46°- Eを示し、埋土は砂質シルトが充填されていた。区画溝と思われる99BSD06や99BSD09と同じ軸線方向に掘削されており、先に竪穴建物とした99BSK55や99BSK82と堆積埋土の状況が同一であることから、大型の竪穴建物であった可能性も考えられる。

出土遺物がなく時期決定は困難であるが、遺構の切合い関係や軸線方位からこの時期の遺構であると判断した。

方形土坑群　99B区で大溝を挟んで２ヶ所で土坑群が確認されている。まず１ヶ所は、大溝南西側IG6lグリッドを中心に検出された。該当する遺構番号は99BSK128・134・140・141・142・143の６基。いずれの土坑も隅丸長方形のプランを呈するが、長軸が北東－南西となるグループ（SK134・141・142・143）と北西－南東となるグループ（SK128・140）に区分される。大型建物エリアに掘削されており、掘形はそれらの柱穴と同規模であるが、柱痕等は確認されず、埋土の堆積状況も異なっている。

２ヶ所目は、大溝北西側IG11グリッド周辺で確認されたSK8023・8024・8025・8026の４基である。先の土坑群同様隅丸長方形のプランを呈し、長軸方向も北東－南西グループ（SK8026）と北西－南東グループ（SK8023・8024・8025）に区分される。出土遺物はみられなかった。（規模や埋土は遺構一覧参照）

4316は鉄釉天目茶碗。大窯１段階。4314・4315・4317～4319は土師器皿。4314が底部に指押さえによる調整が認められる非ロクロ成形の皿である以外は、いずれも底部に回転糸切りによる切り離し痕が観察されるロクロ成形の皿。4320は古瀬戸後Ⅳ古期に属する鉄釉擂鉢。4321は土製の錘。4322・4323は半球形の土師器内耳鍋。いずれも99BSK134からの出土遺物である。

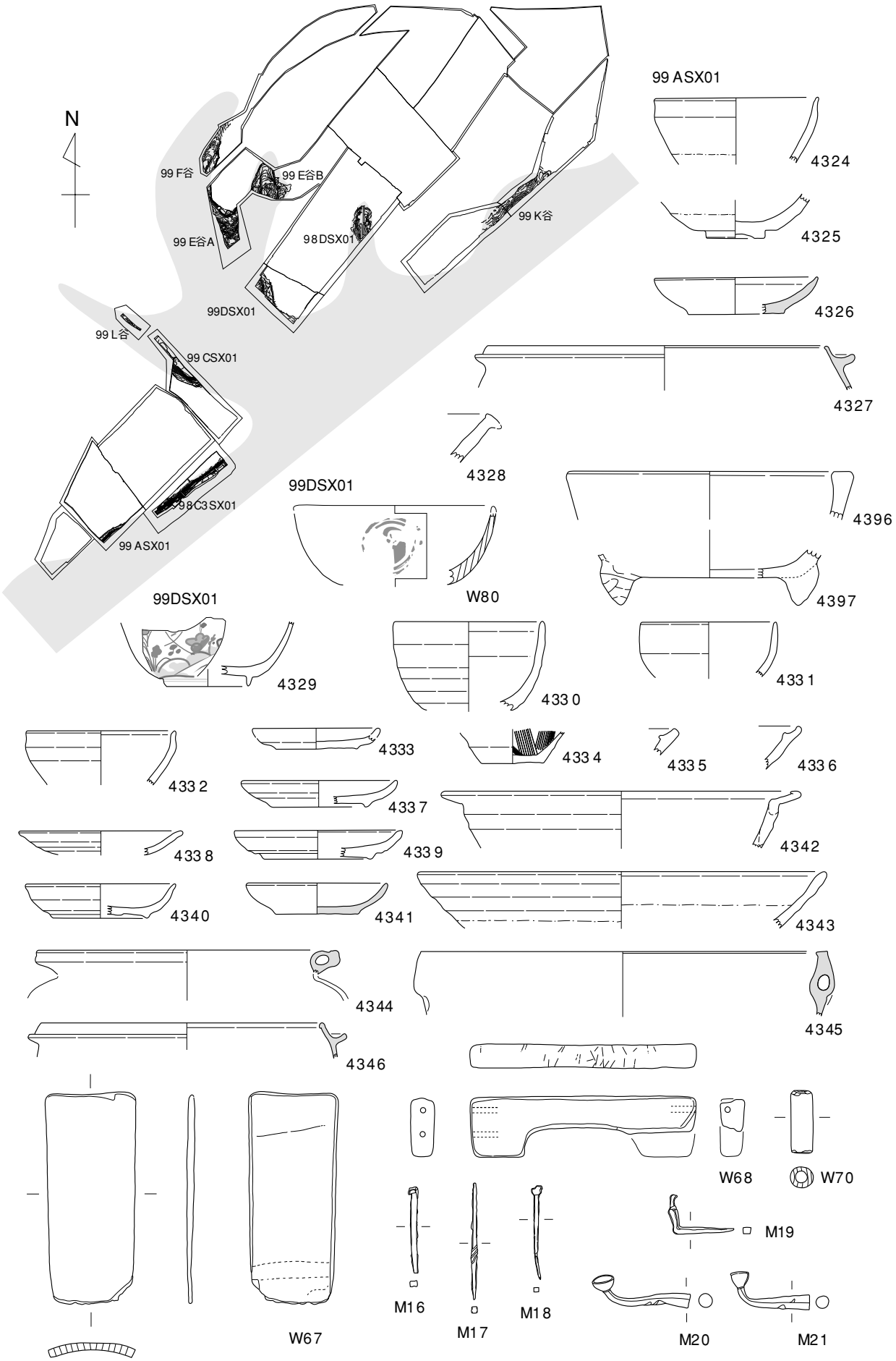


第553図　方形土坑（遺構図1:50、実測図1:4）

（3） 谷地形

水入遺跡南東側を流れる矢作川と、大屋敷地区と下糟目地区の間を流れる宝蔵川の影響で形成されたと考えられる自然地形である。前章で述べた通り、中世前期にはかなりの部分が埋没し、大半は陸地化していたと考えられ、“谷”的景観は失われつつあったと思われる。この状況は中世後期に入ると一層すすみ、地域によっては居住域へと変化したと考えられる場所も出現する。

99ASX01　99A区南端部で確認された矢作川際の落ち込み。発掘調査時は“ガケ”として掘削したが、中世前期段階で遺構面から急激に落ち込む“ガケ”はすでに埋没しており、地山の緩やかな落ち込みが矢作川方向へ伸張する様相へと変化していた。この段階には更に陸地化が進み、区画Cのエリア内に取り込まれていることから、人々が活動することに支障がない程度に乾地化が進行していたと考えられる。



第554 図　谷地形（遺構図1:5000 、実測図1:4）

但し、98B2区で当該期の遺構が確認されていないことから、居住域として活用されていた可能性は低く、活動可能な空閑地といった様相を呈していたと考えることが妥当であろう。

99CSX01　99C区北東端部で検出された谷地形。調査区の北東側を流れる宝蔵川に向かって落ち込んでゆく。中世前期段階で宝蔵川により形成されたと考えられる台地の急傾斜部分はすでに埋没し、検出面から70cm程度の浅い落ち込みとなっている。中世後期では更に埋没が進行し、出土遺物から第1層がこの時期の堆積層と考えられ、検出面から40cm程度の落ち込みとなっていた。99CSX01第1層の堆積土は、灰色極粗砂を中心とし、1cm以下の小礫が多く含まれていることから、浅い落ち込みではあるものの水流があったことが推定される。

99DSX01　99D区調査区南西部に展開する谷地形。調査区南西側を流れる宝蔵川方向へ落ち込んでゆく。層位的に出土遺物を見た場合、中世以降の遺物は第1層から第5層で確認されている。各層序の堆積時期はいずれの層位も遺物が混在し、遺物の新旧関係が逆転している層序関係もあり、決定は困難であるが、出土量的観点から判断すれば、1～3層が中世後期以降、4・5層が中世前期に相当すると思われる。したがって、区画Gが成立していた段階で99DSX01は検出面から60cm程度の落ち込みであったと考えられる。また堆積埋土が灰色粘土であることから判断すれば、99DSX01は谷地形的景観ではなく、宝蔵川に向かって広がる沼沢地であったと思われる。

なお、この第1層から現地表面までの堆積は砂層とシルト層の互層状堆積であり、近世以降頻繁に発生した洪水により形成された層位である。

99E谷A・B　99DSX01と一連の遺構で、宝蔵川左岸の谷地形は上流域で二股に分岐し、99E区西端部で確認された谷地形が“谷A”、調査区中央部で確認された遺構が“谷B”となる。谷Aに連続する地形は99F区でも認められている。この谷地形からは遺物が出土しないため、中世後期の状況は定かではないが、他の谷地形の状況から判断しても、おそらく堆積が進み、浅い落ち込みとして旧状を留める程度ではなかったかと思われる。

99K谷　調査区中央部で確認された矢作川方向への落ち込み。この地形も中世後期にはほぼ堆積が終了していたと考えられ、このことは谷地形内に溝状遺構が掘削されていたことからも理解される。

W80は漆椀。内面赤漆、外面黒漆で覆われ、体部中央に文様が描かれている。但し、遺存状態が悪いことから、文様は丸文以外は明らかではない。4324・4325は鉄釉天目茶碗。前者が大窯3段階、後者が大窯4段階前半に該当する。4326は底部に糸切り痕が残るロクロ成形の土師器皿。4327はいわゆる内鬱羽釜。鍔は付けられているが、体部の最大径が鍔よりも大きいため、鍔は本来の役割を果たしていない。4328は常滑産のこね鉢。4329は肥前系の磁器碗で、梅文の施された「くらわんか椀」。4330は鉄釉丸碗。体部の立ちが高く、比較的深い碗である。連房第1・2小期に該当する。4331は灰釉碗。時期は近世後期。この谷地形は後世水田として利用されるため、その頃の遺物が沈み込み、当該期の層序へ混入したと思われる。4332は鉄釉天目茶碗。古瀬戸後Ⅲ期。4333・4337・4338・4339・4340は瀬戸美濃産の皿。4338は近世中期、4340は端反皿で大窯1段階、その他は志野丸皿でありいずれも連房第1・2小期である。4341は底部に糸切り痕が観察されるロクロ成形の土師器皿。4342は灰釉の折縁深皿。口縁直下で体部は外側へ大きく屈曲し、端部は内側へ折り返えされている。時期は古瀬戸中Ⅲ期に相当する。4343は

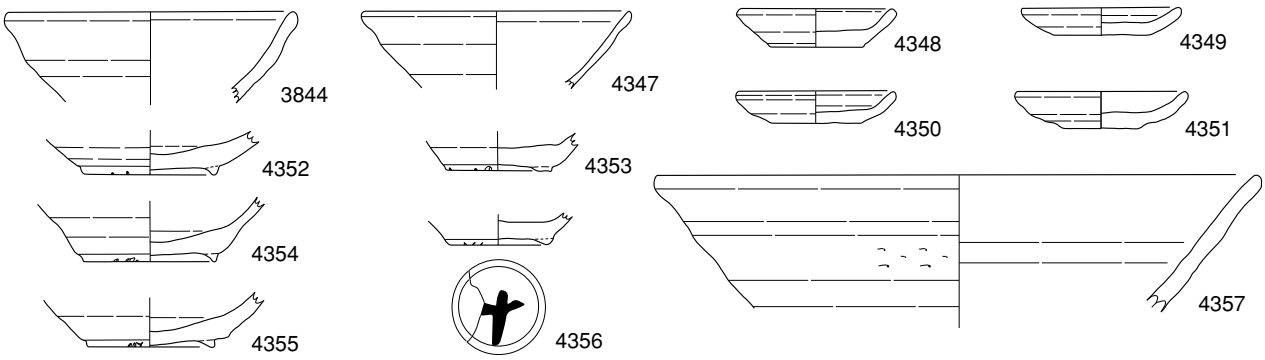
口縁から体部上方まで灰釉がかけられている古瀬戸後Ⅲ期の直縁大皿。4344はいわゆるくの字口縁鍋。口縁部のみが出土しているため、体部の詳細は不明である。W67は小型桶の側板。内面には底板がはめられていた位置に圧痕が認められる。W68は桶の把手か。横断面に木クギをとめるための穿孔が2ヶ所観察される。M16～M19は金属製品のクギ。M20・M21はキセル雁首。

（4）その他の遺構

98B2SX01　大溝に接するようにして古代に構築された平場状の遺構である（第6章第2節）。奈良時代末～平安時代前～中期とみられる覆土下層からは遺物の出土が少なかったが、上層は大溝第2層に共通し灰釉系陶器主体の出土があり、古代の遺物の大半はここからから中世の遺物と混在して出土した。ちなみに当該期（戦国時代）に属する遺物は出土していない。しかし、屋敷地区画群の南端に位置しており、そこへの入口の位置としては申し分ない。したがって大溝改作以降も船着き場としての機能が継続あるいは復活していた可能性は残る。

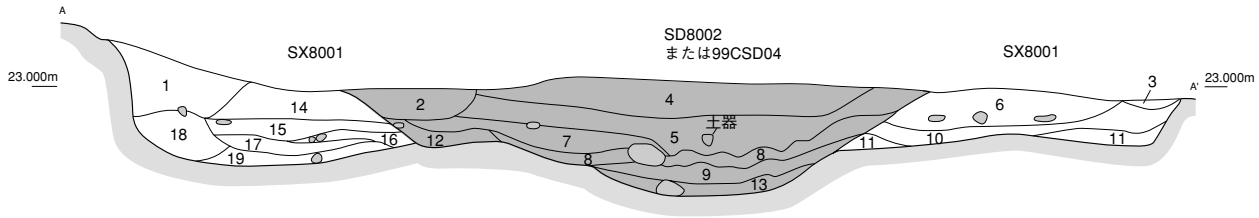
99BSX8001～8004　大溝北西側で検出された、大溝拡幅に関連する遺構。遺構のプランが不整形であるため洪水等により大溝北西肩が破壊されたとも考えられるが、断面観察によれば、その掘形は人工的であり、自然による破壊では無いと判断した。但し、99BSX8001の様に大溝に直行し北へ溝状に延びている目的は明らかではない。

出土物遺物は灰釉系陶器が大半で、当該期の遺物はほとんど確認されない。しかし、これらの遺構は、中世前半の遺構を削平し、近世後期の遺構により破壊されていることから、当該期に含めて考えることとした。

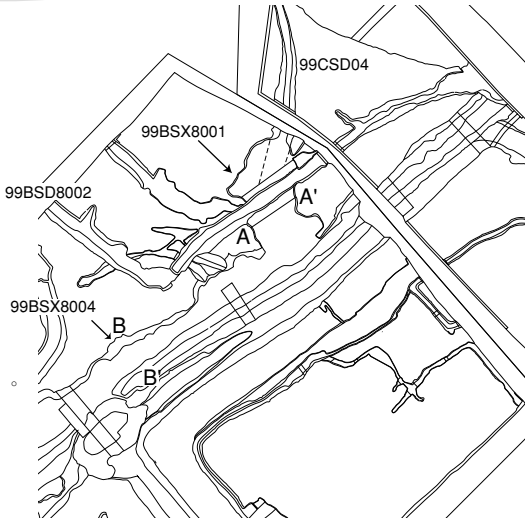


第555図　98B2SX01（平面図1:200、断面図1:100、実測図1:4）

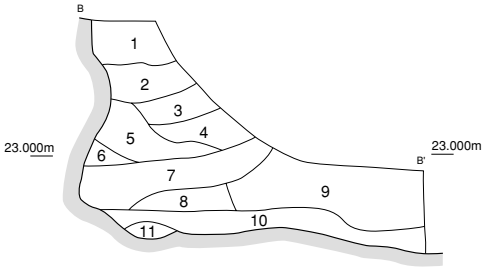
99BSX8001



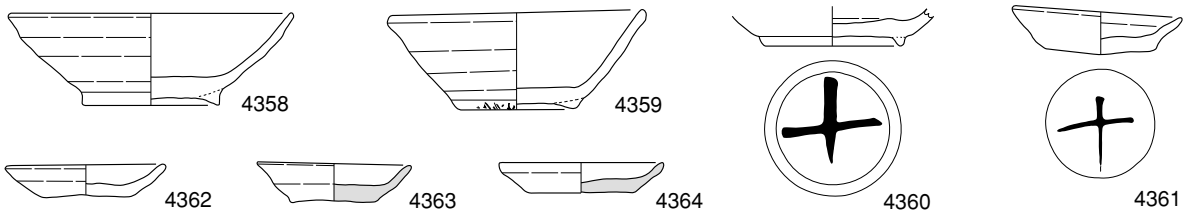
1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（円礫を含む）。
2 10YR4/1褐灰色粘質シルト
（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックこぶし大の円礫を多く含む）。
3 10YR3/1黒褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルト（5cm以下の小礫を含み炭化物を少量含む）。
5 10YR3/2黒褐色粘質シルト（砂礫を多く含み、炭化物、山茶碗片を含む）。
6 10YR3/2黒褐色粘質シルト
（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロック、15cm以下の礫を含む）。
7 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物、砂礫を少量含む）。
8 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
9 10YR3/1黒褐色粘質シルト
（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロック、砂礫を含む）。
10 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
11 10YR3/2黒褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
12 10YR2/1黒褐色粘質シルト（礫を少量含む）。
13 2.5Y2/1黒褐色粘質シルト（炭化物、礫少量含む）。
14 10YR3/2黒褐色粘質シルト（小礫、土器を含む）。
15 10YR3/1黒褐色粘質シルト。
16 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロック、礫を含む）。
17 10YR3/1黒褐色粘質シルト
（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを多く含み礫を少量含む）。
18 10YR3/2黒褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
19 2/5Y4/1黄灰色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを多く含む）。



99BSX8004



1 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（礫を少量含む）。
3 2.5Y5/4黄褐色粘質シルト。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
5 10YR5/6黄褐色粘質シルト（礫を少量含む）。
6 5Y6/4オリーブ黄色粘質シルト
（2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト、炭化物を少量含む）。
7 10YR5/6黄褐色粘質シルト（10YR4/2灰黄褐色粘質シルト小礫を含む）。
8 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルトブロック
＋2.5Y4/1黄褐色粘質シルトブロック（3cm以下の礫を多く含む）。
9 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
（10YR5/6黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
10 5Y6/4オリーブ黄色粘質シルトブロック
（10YR3/2黒褐色粘質シルトブロックを含む）。
11 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。

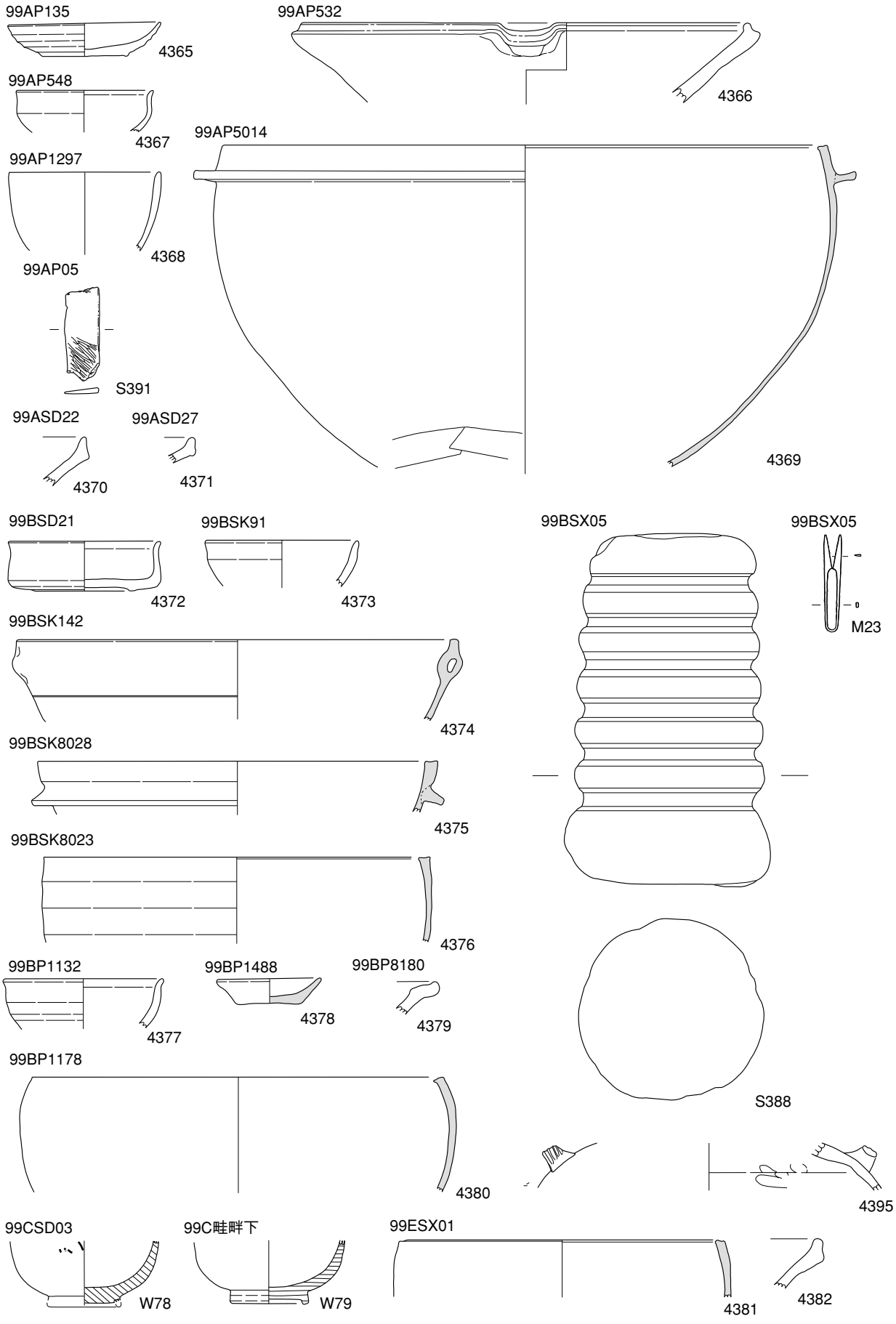


第556図　99BSX8001（平面図1:1000、断面図1:50、実測図1:4）





写真
98C区土塁
断割り状況
（左）とその
断面（右）



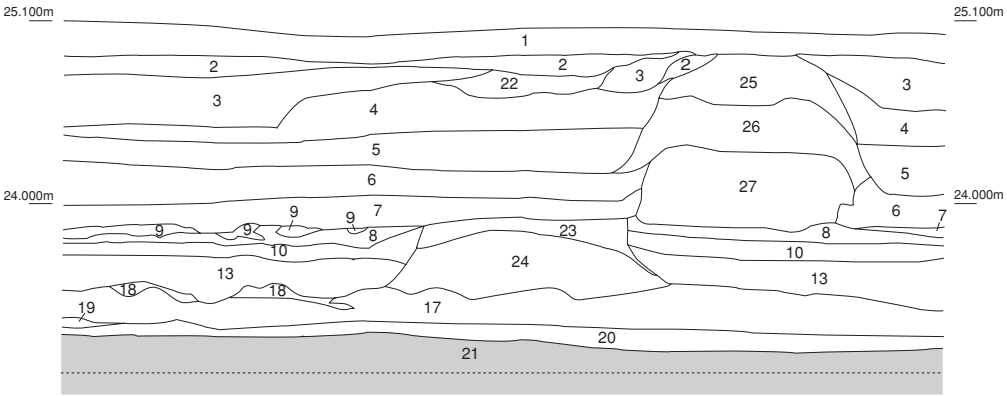
第557図　その他の出土遺物（1:4）

第９章　江戸時代後半の遺構・遺物

本章では、水入遺跡の最終段階である江戸時代後半以後の遺構・遺物を取り上げる。この時期に入ると、水入遺跡はその象徴であった大溝（大屋敷地区 SD01）が埋没し、景観や土地利用が大きく変化する。このことに影響を与えたのが矢作川の氾濫であると思われ、遺構面から現地表面までの４ｍの堆積層がそれを物語っている。近世後半以降現代にいたるまでの間に水入遺跡は、遺跡南東を流れる矢作川の堆積作用により地表下約４ｍに遺跡全体が埋没してゆく。その間人々は洪水の被害を繰り返しうけながらも水田や畑を復旧させ、耕地として利用してゆく。

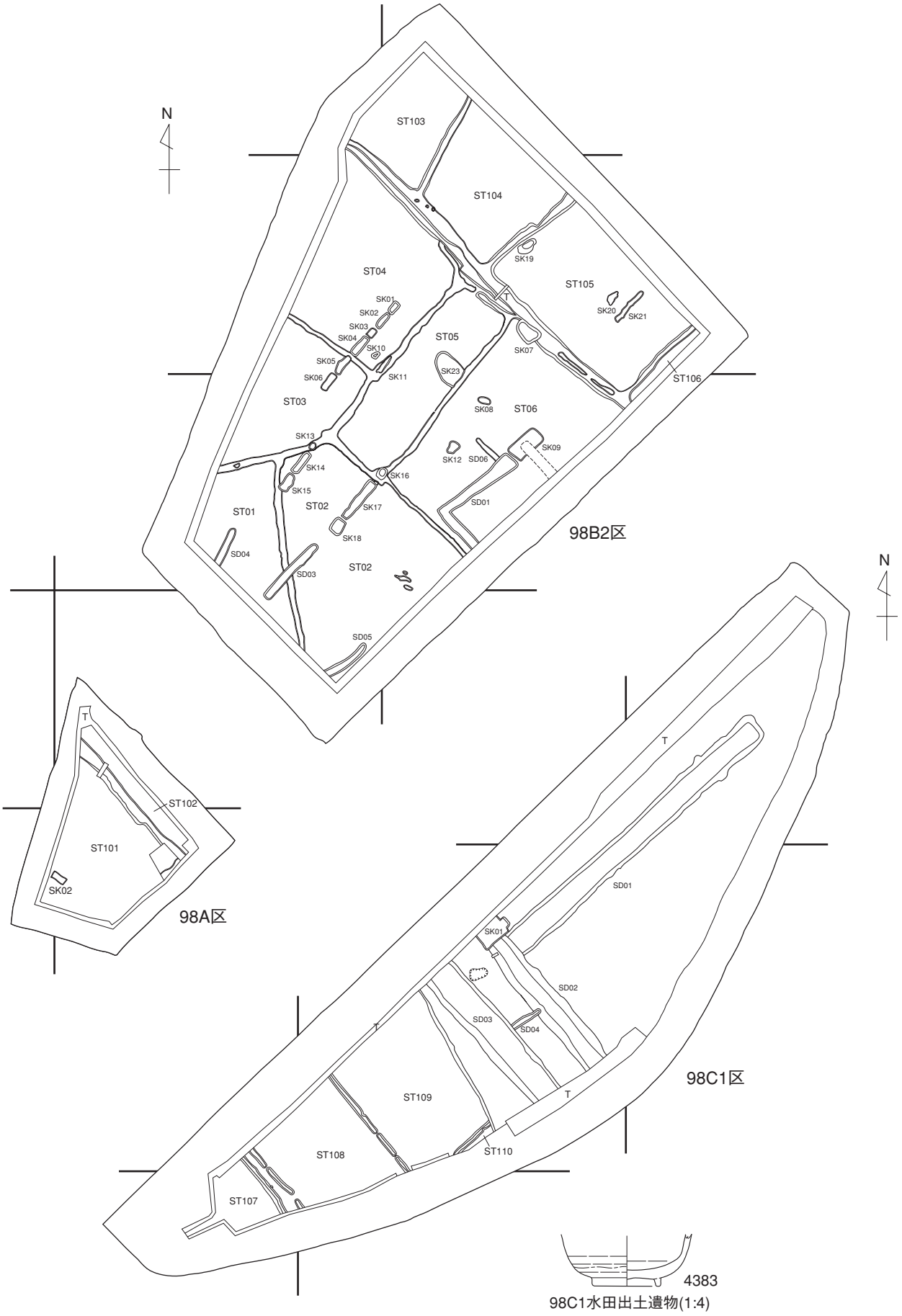
第１節　水田

98A 区で２区画(ST101,102)、98B 区で 10 区画(ST01 ～ 06,103 ～ 106)、98C 区で４区画(ST107 ～ 110)の水田が確認された。全体が確認できたのはST05のみであり、それ以外の水田に関しては、一部が調査区外へと展開している（第 31 表参照)。いずれの水田も田面を洪水性の粗砂が覆っており、洪水砂を取り除くと畦畔をが検出された。断面観察の結果、98A 区で８回以上、98B 区では 10 回以上のかさ上げによる作り替えが行われており、その原因となったのは、先述の通り矢作川による頻繁な洪水である。



1 5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト。
2 5Y4/3暗オリーブ色砂質シルト（中粒砂混じる）。
3 2.5Y5/4黄位褐色中・粗粒砂。
4 10GY5/1緑灰色砂質シルト、細粒砂がやや混じる。
5 10Y4/1灰色粘質シルトに10GY6/1緑灰色粘質シルトがブロック状に混入。
6 10Y4/1灰色粘質シルト。
7 7.5GY5/1緑灰色シルト、10YR4/4褐色中粒砂混じる。
8 10GY5/1緑灰色粘質シルト。
9 10YR4/褐色極粗・粗粒砂。
10 7.5GY5/1緑灰色粘質シルト、10YR4/4褐色中粒砂、7.5GY8/1明緑灰色粘質シルト。
11 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂
12 7.5YR3/1明緑緑灰色粘質シルト、7.5GY5/1緑灰色粘質シルト、10YR4/4褐色中粒砂。
13 10GY5/1緑灰色粘質シルトに2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルトが混入。
14 5BG5/1青灰色粘質シルトに10YR5/3にぶい黄位褐色極細粒砂が混入。
15 5Y5/3灰オリーブ色極細粒砂に5BG5/1青灰色粘質シルトが混入。
16 5Y5/3灰オリーブ極細粒砂と10GY5/1緑灰色極細粒砂。
17 10GY5/1緑灰色粘質シルトに7.5GY8/1明緑灰色粘質シルトが混入。
18 10GY6/1緑灰色細粒砂。
19 10Y4/1灰色粘質シルトに10GY5/1緑灰色粘質シルトが混入。
20 10GY6/1緑灰色細・中粒砂、炭化物混入。
21 10Y3/2オリーブ黒色粘質シルト。
22 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト、4がやや混じる。
23 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂に10GY5/1緑灰色粘質シルトが混じる、炭化物あり。
24 10GY5/1緑灰色粘質シルト、10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂がやや混じる。
25 10GY6/1緑灰色砂質シルトと10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂が堆積、下方に極粗粒砂が混じる。
26 10Y4/1灰色粘質シルトと10GY6/1緑灰色粘質シルトと10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂が堆積。
27 2.5Y5/4黄褐色極粗粒砂、上方に10GY5/1緑灰色細粒砂が堆積。

第558図　98A区南壁断面図（1:50)



第559図　98A・B・C区遺構全体図（1：500）

また、98B区では水田面に溝や土坑が掘削されており、一部の遺構は切合い関係等から後世に掘削された溝や土坑であるが、畦畔沿いに掘削されている土坑（98BSK07,23など）は何らかの目的で水田耕作用に構築されたものと考えられる。具体的な機能を示すものは発掘調査では確認されなかったが、堆肥貯蔵用土坑等が推定される。98C区では近世後半の時期に水田から畑地への転換が行われており、耕作に伴うと考えられる溝や土坑が検出された。

4383は水田を構成する青灰色シルト層から出土した瀬戸美濃産の碗。内・外面共に灰釉がかけられている。時期は江戸時代後半。この遺物以外にも多時期にわたる遺物が確認されたが、小片のため図化不能であった。その多くは洪水砂中からの出土であり、水田にともなうものとは考えられない。98CSD03から18世紀後半以降の瀬戸美濃産陶磁器類、常滑産土樋が出土していること、断面観察による畦畔の新旧関係から判断すれば、今回の調査で確認された水田は水入遺跡が耕地化する初期に形成されたものといえる。

第31表　水田一覧

遺構番号	長　辺	短　辺	面　積	平面形	備　　考
98AST101	(13.3m)	(12.4m)	(164.9㎡)	長方形？	
98AST102	(14.5m)	(1.9m)	(27.6㎡)	長方形？	
98B1ST01	–	–	(83.74㎡)	台形？	
98B1ST02	–	–	(173.5㎡)	台形？	
98B1ST06	19.8m	(12.3m)	(243.5㎡)	長方形？	
98B1ST03	–	–	(106.7㎡)	台形？	
98B1ST04	(16.0m)	15.7m	(251.2㎡)	長方形？	
98B1ST05	18.9m	6.2m	117.2㎡	長方形	水口北東畦畔部
98B1ST103	(10.3m)	(7.0m)	(72.1㎡)	長方形？	
98B1ST104	(13.0m)	9.5m	(123.5㎡)	台形？	
98B1ST105	15.3m	(10.5m)	(160.7㎡)	長方形？	
98B1ST106	(9.4m)	(1.1m)	(10.34㎡)	長方形？	
98C1ST107	(8.7m)	(6.1m)	(53.1㎡)	長方形？	
98C1ST108	(10.3m)	(9.8m)	(100.9㎡)	長方形？	水口南西畦畔部2ヶ所
98C1ST109	(10.3m)	(11.2m)	(115.36㎡)	長方形？	水口南西畦畔部2ヶ所

長・短辺は畦畔の中央部にて計測。カッコは調査区内での長さを表す。

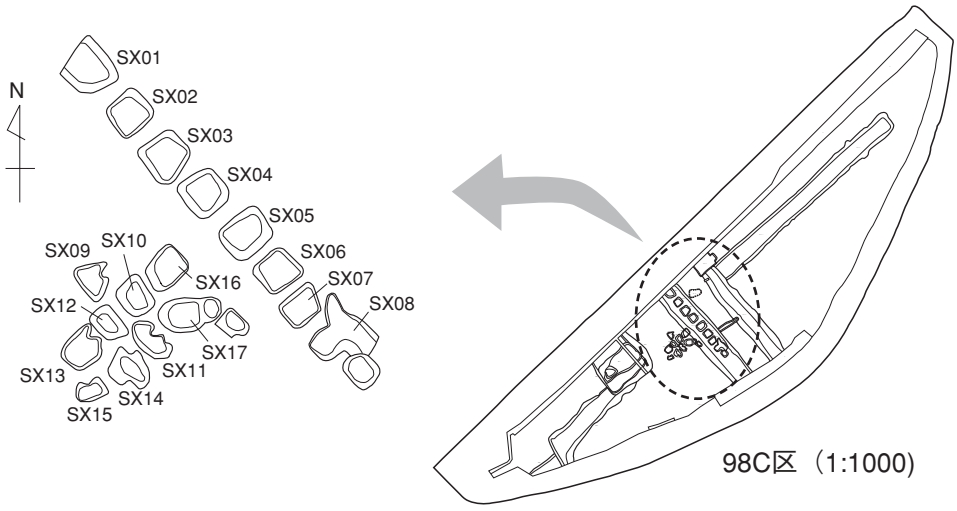
第2節　土坑

（1）方形土坑群

同一規模の土坑が狭い範囲に集中して掘削され、埋土には中粒砂が充填される土坑群。98A、98C、99I区で確認された。98A区は調査区南壁断面で確認されたにとどまるが、ほぼ同一レベルから5基以上が掘削されていた。98C区では水田上層で17基（SX01～SX17）確認された。規模は一辺約1m、深さ0.3mを測り、ほぼ同一規模であった。埋土はこの土坑群の特徴である均質な中粒砂が充填されており、ラミナ等水性堆積の痕跡は確認されなかった。99ISK791～SK796はやや大型の土坑であり、長辺を揃えるように6基が掘削されていた。

遺構の性格については、今回の調査では明らかにしえなかったが、同様な遺構が水入遺跡周辺に展開する天神前や郷上遺跡でも確認されている。

遺物の出土はほとんど認められず、99ISK791から常滑産の「赤もの」とよばれる甕の体部が出土したのみである。

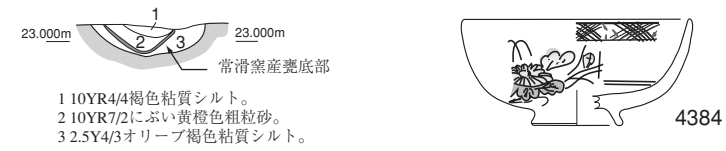


第560図　方形土坑群平面図（1:200）

（2）埋め甕を伴う土坑

2～3基単位で隣接して土坑を掘削し常滑産の甕を埋設している土坑群が確認されている。多くの土坑が後世の削平により、掘形は本来の深さよりもかなり浅く、甕自体も押し潰された状態で底部付近が残存したにとどまる。出土した甕内面の状態から判断すれば、耕作用の水甕として用いられていたと思われる。該当する遺構は、99FSK181・182・183・186・187・202・314、99GSK179・180、99JSK115・116、99KSK149などであり、これ以外にも99Hからは数個体分の甕が包含層中から出土している。

いずれの土坑からも常滑産「赤もの」の甕が出土している。しかし、その大半は後世の削平により底部周辺が残存するのみで、口縁部周辺は欠損または一部が内部へ崩落した状態で残存する程度であった。甕以外の出土遺物としては4384がある。磁器碗で、内面割小菱、外面草花文が呉須により描かれている。産地は肥前系か。時期は江戸時代後半。



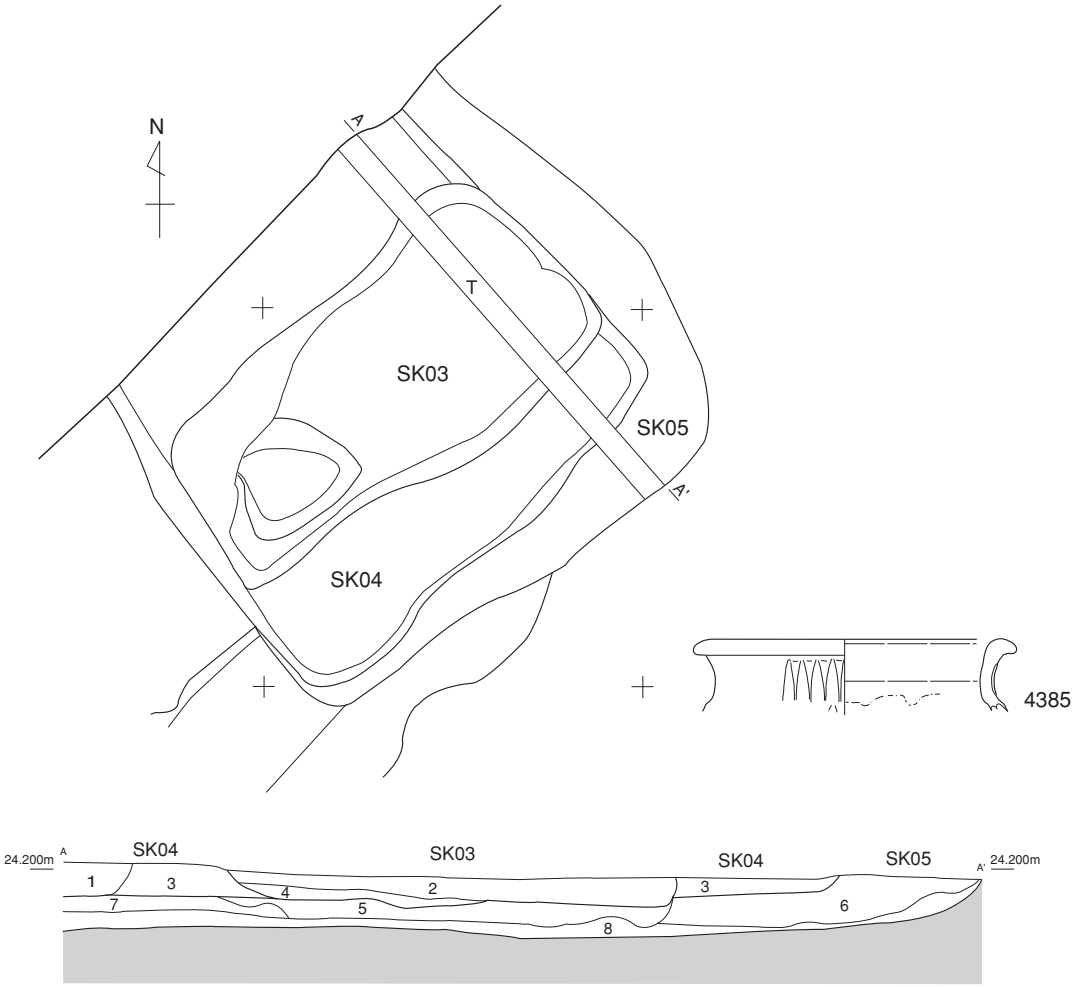
第561図　埋め甕を伴う土坑　(断面図1:50、実測図1:4)

（3）その他の土坑

98CSK05　方形土坑群西側で検出された土坑。平面形は隅丸方形状を呈し、長径7.2m、短径6.0m、深さ0.4mを測り、南西端は調査区外へ続く。この土坑内に98CSK03、98CSK04が掘削されており、都合3基の土坑が重なり合う状況で検出された。性格は判然としないが、周辺の状況から耕作に関連して何らかの機能が与えられていたと思われる。

4385は瀬戸美濃産広口の壺。内外面共に鉄釉がかけられている。江戸時代後半。

99GSK422　調査区北西部VIIII4hグリッドで検出。平面形はほぼ円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ7cmの浅い土坑である。土坑底部に桶物の底板のみが残存していた。本来は堆肥貯蔵もしくは貯水のための桶が埋設されていたと考えられるが、廃絶時に側板のみ抜き取られたと思われる。底板以外の遺物の出土は見られなかった。



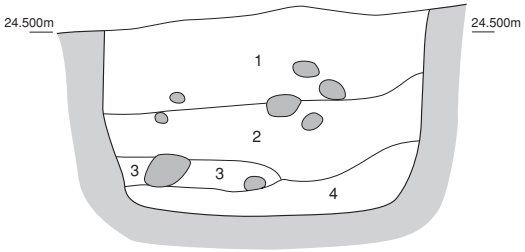
1 2.5Y5/4黄褐色中粒砂に7.5GY5/1緑灰色粘質シルトがブロック状に混入、5と境目のブロック大。
2 7.5GY5/1緑灰色砂質シルトに2.5Y5/4黄褐色中粒砂が混じる。
3 7.5GY4/1暗緑灰色砂質シルト。
4 10GY5/1緑灰色砂質シルト。
5 5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルト、植物遺体が一部混入。
6 10GY5/1緑灰色砂質シルトに2.5Y5/4黄褐色粗粒砂が混じる。
7 10Y5/2オリーブ灰色粘質シルト。
8 7.5Y5/3灰オリーブ色粘質シルト。

第562図　98C 1 区SK05平面・断面図（平面1:100、断面1:50)

99GSK295　調査区北東部VIIII7Sグリッドで検出。平面形は隅丸長方形を呈し、長径3.9m、短径0.9m、深さ0.6mを測る。埋土に拳大の円礫を多く含み、土坑底部には小礫が人為的に敷き詰められていた。用途は不明であるが、耕作に関連するものと考えることが妥当であろう。同様の性格を持つであろう遺構として、99G区ではSK79・86・153・186・421・424が確認されている。

いずれの土坑からも常滑窯産「赤もの」甕片が出土している。

99ISK918・931　調査区北東端VIIJ14o、VIIJ12iグリッドで検出。平面形はともに不整形で、SK918は

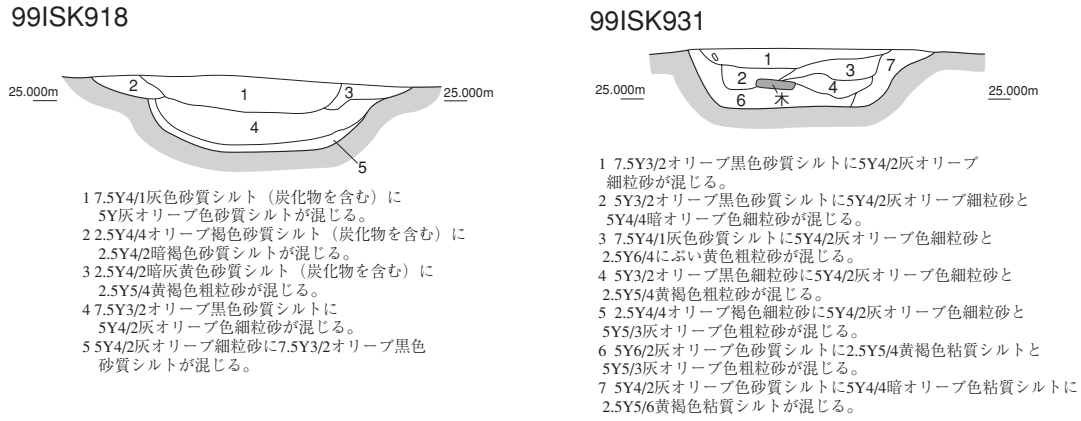


1　7.5YR4/4褐色粘質シルト＋2.5YR2/3暗オリーブ褐色砂質シルト。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルト。
3　7.5YR4/6褐色粘質土
（2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトブロックを少量含む）。
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐砂質シルト
（7.5YR4/6褐色粘質土ブロックを少量含む）。

第563図　99GSK295断面図（1:50）

一部が調査区外北東へ続いている。埋土はいずれも青灰色粘土で、検出時点では井戸と考えたが、湧水層に達しておらず構造物も認められなかったため井戸ではないと判断した。SK918 からは常滑窯産の「赤もの」甕片と共に柱材や杭と思われる木製品が、SK931 からは常滑産の「赤もの」甕片と共に板材が出土している。

99JSK29・36・37　調査区西端部 VIIJ13r、VIIJ17r、VIIJ17s グリッドで検出された隅丸長方形の土坑。黒色粘質土または粘質シルトの埋土とともに多量の炭化物が土坑内に充填されていた。土坑掘形の一部が被熱により赤く変色していた。明確な時期決定は困難であるが、炭化物の分析から耕作に伴う野焼き用の土坑であると判断し、遺跡の変遷から当該期であると判断した。遺物は 1 点も出土していない。



1 7.5Y4/1灰色砂質シルト（炭化物を含む）に
5Y灰オリーブ色砂質シルトが混じる。
2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト（炭化物を含む）に
2.5Y4/2暗褐色砂質シルトが混じる。
3 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト（炭化物を含む）に
2.5Y5/4黄褐色粗粒砂が混じる。
4 7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトに
5Y4/2灰オリーブ色細粒砂が混じる。
5 5Y4/2灰オリーブ細粒砂に7.5Y3/2オリーブ黒色
砂質シルトが混じる。

1 7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトに5Y4/2灰オリーブ
細粒砂が混じる。
2 5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトに5Y4/2灰オリーブ細粒砂と
5Y4/4暗オリーブ色細粒砂が混じる。
3 7.5Y4/1灰色砂質シルトに5Y4/2灰オリーブ色細粒砂と
2.5Y6/4にぶい黄色粗粒砂が混じる。
4 5Y3/2オリーブ黒色細粒砂に5Y4/2灰オリーブ色細粒砂と
2.5Y5/4黄褐色粗粒砂が混じる。
5 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂に5Y4/2灰オリーブ色細粒砂と
5Y5/3灰オリーブ色粗粒砂が混じる。
6 5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトに2.5Y5/4黄褐色粘質シルトと
5Y5/3灰オリーブ色粗粒砂が混じる。
7 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトに5Y4/4暗オリーブ色粘質シルトに
2.5Y5/6黄褐色粘質シルトが混じる。

第564図　99ISK918・931断面図(1:50)

第 3 節　堤状遺構

99K 区で 4 基（99K 堤 1 ～ 99K 堤 4 ）確認された。99K 堤 1・2 は調査区北半部 VIIA19h から VIIA20k グリッドにかけて 2 基並行に構築されていた。方位は 2 基共に N-65°-W を示し、断面形は台形状を呈している。99K 堤 1 は上底 0.6 ～ 1.1m、下底 2.8 ～ 1.9m、高さ 0.4 ～ 0.6m、99K 堤 2 は上底 0.6 ～ 1.5m、下底 2.6m、高さ 0.5 ～ 0.8m を測る。 2 基の堤の間には 99KSD01 が、99K 堤 1 の北東側には 99KSD05、99K 堤 2 の南東側には 99KSD07 が掘削されている。調査区外への伸張については、北西側は 99J 区で一部が確認されており、99K 堤 2 は本来 99JSD21 に沿って 99I 区にまで続いていたことが 99J・I 区調査区壁の断面観察によって確認されている。また、99K 堤 1 に関しては、99JSD27 と 99JSD21 に挟まれた空間に若干痕跡が確認されたが、延長部分は明確にし得なかった。南東方向、すなわち矢作川方向への伸張は確実と思われるが、調査区外であるため川との関係は不明である。

99K 堤 3・4 は 99K 区中央部に入り込む谷地形北東肩部に並行して構築されていた。形状は 99K 堤 1・2 と類似しており、堤両側と中央部に溝をともない N-55°-W の方位に 2 基がほぼ並行に構築されていた。99K 堤 3 は上底 0.6 ～ 2.6 m、下底 3.1 ～ 5.1 m、高さ 0.1 ～ 0.5 m、99K 堤 4 は上底 1.4 ～ 2.1 m、下底 2.5 ～ 2.8 m、高さ 0.3 ～ 0.6 m を測る。99K 堤 3 は北西部では北側に、南東部では南側にテラス状の平坦面が造り出されている。また、99K 堤 4 は 99K 調査区南西壁付近で収束し、調査区外へは 1 基の堤状

遺構として続いてゆくと思われる。

4386は瀬戸美濃産梅文皿。内外面共に灰釉で、内面見込みには呉須絵と鉄釉によって梅文が描かれている。4387は常滑産「赤もの」の甕口縁部。ともに時期は近世後半。

第4節　溝状遺構

今回の発掘調査で確認された溝状遺構の大半が、近世後半以降の水入遺跡の耕作地化に関連して掘削されたものと考えられる。なかでも99H･I･J区においてまとまりを持って検出された。また、明確な遺構としては確認し得なかったが、99G区において見られるような幅広で浅い掘形の落ち込みが前代の遺構を破壊しており、耕作のための地形改良が大規模に行われていた様子がうかがわれた。

98CSD03　98Ｃ区１面で確認された、北西から南東に調査区を横断する溝。北東側にSD02が同規模で掘削されており、２条並列に掘削されることにより、機能を果たしていた可能性も考えられる。方位はN-40°-Wをとり、断面形は箱型にちかく、幅3.3m、深さ0.5～0.7mを測る。溝底部のレベルはやや南東方向が低くなっている。

Sは砥石。両面共に使用痕が認められる。4388は瀬戸美濃産の広東碗。4389は瀬戸美濃産丸碗。内外面共に鉄釉。4390は常滑産の土管。「赤もの」の甕と同じ胎土を用いて、輪積み手法によって作られている。常滑産の土管は、知多地域では「土樋」と称される。時期は19世紀前半、明治以前の幕末に比定される。

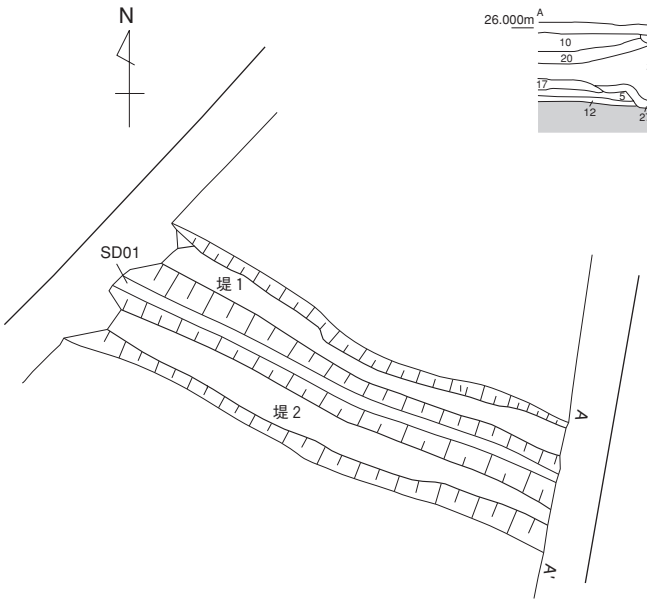
99BSD8004・99CSD03　99B区北東端から99C区ほぼ中央部を横断する溝。幅7.7～1.4m、深さ0.3～0.5mを測る。方位はＮ-55°-Ｅを示し、99C区中央部で更に東へ振れる。溝の方位が東へ振れ始める位置から土坑状の落ち込みを伴い溝幅が広くなってゆく。土坑状の落ち込み周辺の埋土には15cm前後の円礫が混入し、特に99C区北東壁付近では密集した状態が確認された。溝底部のレベルは宝蔵川（99B区→99C区）に向かって低くなる。

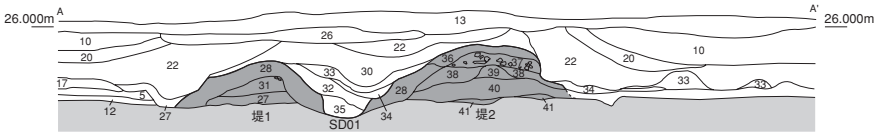
遺物の出土はほとんど認められなかったが、大溝(SD01)埋没後に掘削されていることから、当該期の遺構であると判断した。

99DSD02　調査区南西部に展開する谷地形沿いに掘削されている溝状遺構。掘形は不整形で、幅は0.5m前後だが、調査区南西壁に向かって地山が傾斜しているため、深さは溝東側上端からは約40cm、西側上端からは約10cmを測る。調査区北端で99DSK02･03に連結しており、谷地形に水田が広がっていた可能性が考えられるため、双方で一連の遺構として捉えることが妥当と思われる。

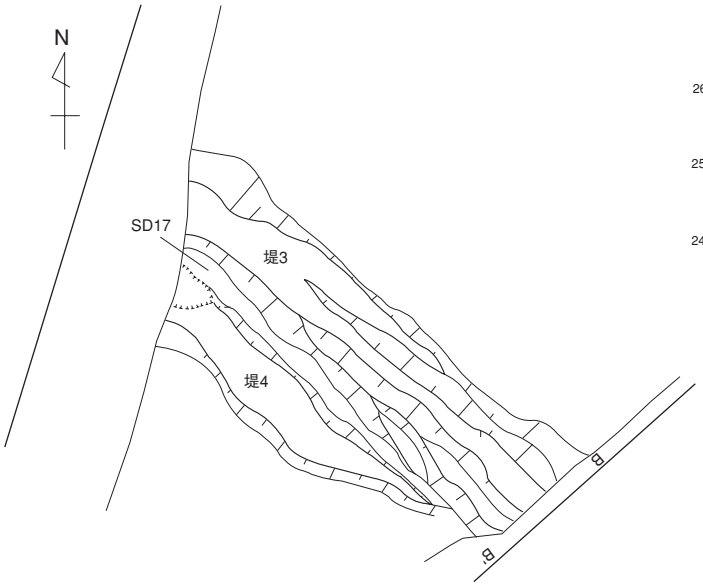
この99DSD02同様に99ESD01、99FSD14･15･17･25･27は谷地形に沿う形で掘削されており、谷地形と耕作地、もしくは水田と畑地との境界に掘削された溝である可能性が高い。

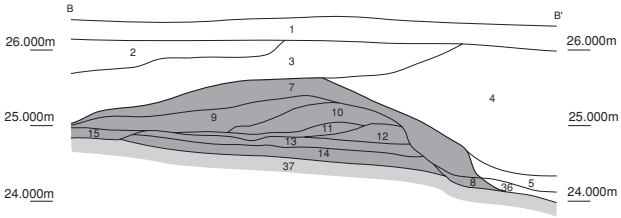
99JSD24　99J区中央部を横断するように掘削された溝。調査区東半部でSD24に切られる形で重複し、石組みを持つSD29と並行する。また、調査区西半部では北方向へSD25が分岐している。方位はN-60°-Ｅを示し、断面Ｕ字型、幅3.0～0.3m、深さ0.3～0.6mを測る。土質は粘質シルトまたはシルト質で水流の痕跡は認められない。また、埋土中位から15cm前後の円礫が集中して出土しており、溝が埋没す



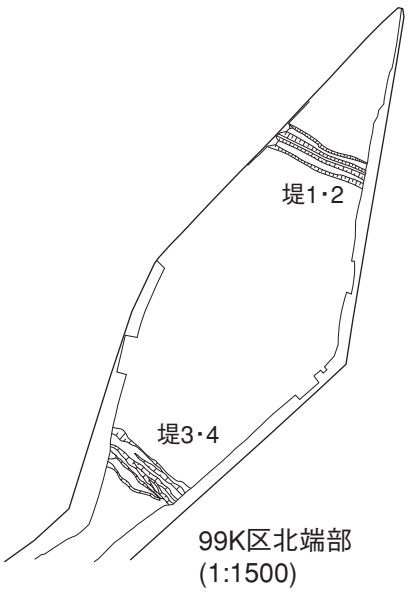


5 7.5YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト（沈鉄を含み、粘性強い）。
10 10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂と10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂などの堆積（2cm以下の礫が混じり、下層に10YR5/3にぶい黄褐色シルトが多く混じる）。
12 10YR5/3にぶい黄褐色シルト（沈鉄含む）。
13 10YR4/1褐灰色シルト。
17 不明。
20 10YR4/2灰黄褐色シルト（沈鉄含む）。
22 7.5YR5/8明褐色粗粒砂、10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂、7.5YR5/3にぶい褐色シルトなど堆積層（上層との境に鉄分非常に多い）。
27 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。
26 10YR4/4褐色砂質シルト。
28 10YR5/2灰黄褐色シルト。
29 10YR3/4暗褐色粘質シルト。
30 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトと10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂の斑土（0.5cm以下の礫を多量に含む）。
31 104/2灰黄褐色粘質シルト（20cm以下の円礫などを含む）。
32 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト（沈鉄を多く含む）。
33 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト（沈鉄を多く含む）。
34 2.5Y5/2暗灰黄色シルト。
35 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂。
36 10YR3/4暗褐色シルトと10YR6/4にぶい黄橙色シルトの斑土。
37 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（こぶし大の円礫を多数含む）。
38 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
39 10YR3/3暗褐色粘質シルトと0YR4/2灰黄褐色粘質シルトの斑土。
40 10YR3/3暗褐色粘質シルト（5cm以下の礫を含む）。
41 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。



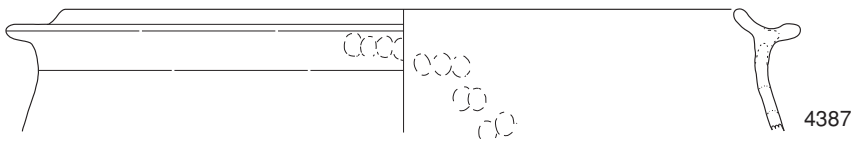


1 7.5ＹＲ3/1黒褐色シルト（やや砂粒を多く含む。旧耕作土）。
2 10ＹＲ7/1灰白色砂質シルト（小石を含む）。
3 10ＹＲ5/2灰黄褐色粗砂（小石を含む）。
4 2.5Ｙ7/2灰黄色粗砂（小石を含む層も見られ全体を通して一様でなく、幾層も水平に縞状になる。洪水性堆積）。
5 10ＢＧ2/1青黒色粘土（下位にわずかに小石を含む）。
6 2.5Ｙ4/1黄灰色粘質シルト（わずかに砂含む）。
7 2.5Ｙ5/1黄灰色シルト。
8 2.5Ｙ6/2灰黄色粗砂（わずかに小石を含む）。
9 10ＹＲ2/1黒色粘質シルト（砂含む）。
10 10ＹＲ4/2灰黄褐色粘質シルト。
11 7.5ＹＲ4/1褐灰色粘質シルト。
12 7.5ＹＲ3/1黒褐色粘質シルト。
13 10ＹＲ4/1褐灰色粘土。
14 10ＹＲ2/1黒色粘土（小石をわずかに含む）。
36 7.5ＹＲ3/2黒褐色粘土（拳大の礫を多量に含む）。
37 10ＹＲ5/8黄褐色粘質シルト（拳大から人頭大の礫を多量に含む、地山）。



99K区北端部
(1:1500)

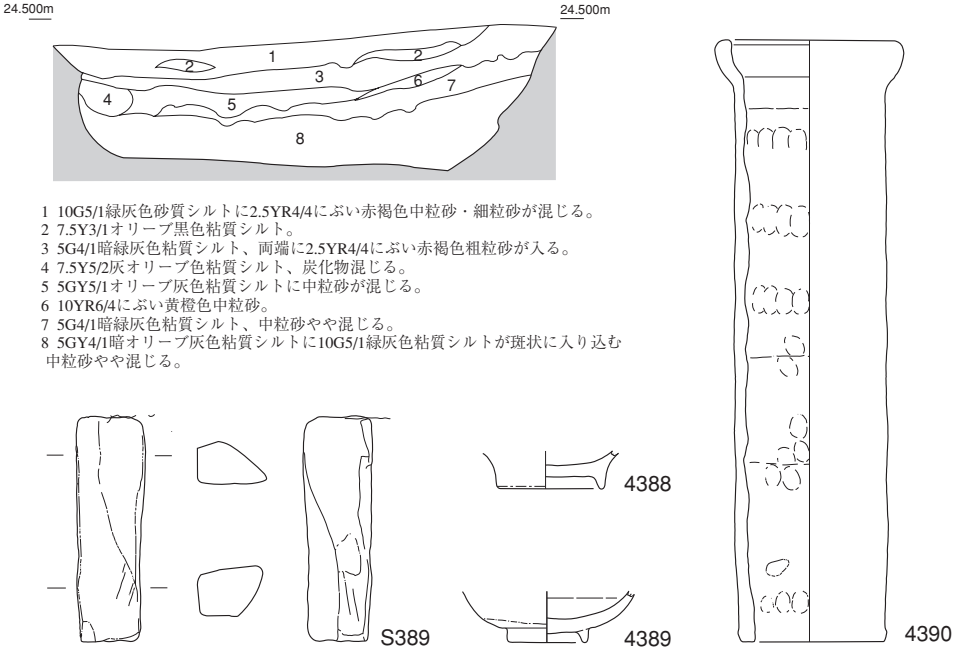




第565図　99K堤状遺構(平面図1:300、断面図1:50、実測図1:4)

る過程で 廃棄されたと推定される。

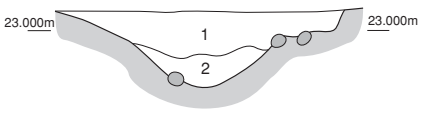
遺物の帰属時期は中世から近世にまで及ぶが、量的には少なく、時期決定の根拠としてはやや不確定である。発掘調査当初は中世の遺構と考えたが、SD24 に切られている SD35 から近世後半の陶磁器類が出土していることから、この時期に属するものと判断した。4391 は灰釉系陶器の椀。体部は直線的に開き、高台は認められない。底部には板目状の圧痕が観察された。藤澤編年第 8 型式。4392 は瀬戸美濃産の鉄釉擂鉢。江戸時代後半。



1 10G5/1緑灰色砂質シルトに2.5YR4/4にぶい赤褐色中粒砂・細粒砂が混じる。
2 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト。
3 5G4/1暗緑灰色粘質シルト、両端に2.5YR4/4にぶい赤褐色粗粒砂が入る。
4 7.5Y5/2灰オリーブ色粘質シルト、炭化物混じる。
5 5GY5/1オリーブ灰色粘質シルトに中粒砂が混じる。
6 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂。
7 5G4/1暗緑灰色粘質シルト、中粒砂やや混じる。
8 5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルトに10G5/1緑灰色粘質シルトが斑状に入り込む 中粒砂やや混じる。

第566図　98C1SD03（断面図1:50、実測図1:4)

99KSD01　99K区北半端部で確認された堤状遺構に伴う断面U字型の溝で、99JSD21、99ISD25･41 と一連の遺構である。99K区と 99J 区中央部までは方位N65°W、そこから 99I 区に向けて西へ屈曲し、99I区ではほぼ東西方向に走る溝となる。溝幅は1.5 m、堤状遺構上端からの深さ 1.0m を測る。溝底部のレベルは 99I･K 区が高く、99J 区中央部の屈曲部が最も低くなっている。



1 10BG5/1青灰シルト
ベース7.5Y8/1灰白粗粒～中粗粒砂含む、植物質含む。
2 10BG5/1青灰シルト
粗粒の混入はない。但し、10～20cm大の円礫入り、特に谷（SX01）に近い低いところでは密集している。

第567図　99CSD03断面図（1:50）

（5）井戸

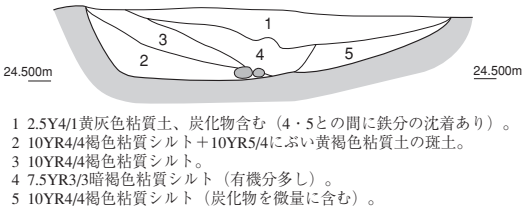
この時期に属する井戸は、99BSK5001 の 1 基である。遺構検出段階では土坑として認識したが、遺構掘削の結果、井戸であることが判明した。戦国期の区画溝内から検出され、出土遺物中に近世後期の瀬戸美濃製品が含まれていることから、この時期と判断した。井戸の規模は、平面形は径1.3m の円形、断面は円筒形、深さは遺構検出面から 80cm を測る。

近世後期では、大屋敷地区もすでに耕作地化しており、この井戸も耕作に関連する目的で構築されたものと思われる。

4393 は瀬戸美濃産の小瓶。内面無釉、外面灰釉で底部は糸切り痕が観察される。近世後半。4394 は瀬戸美濃産天目茶碗。内外面に鉄釉が施される。時期は連房第 2 小期。W69 は棒状木製品。容器を構成した柄の一部か。

（6）小結

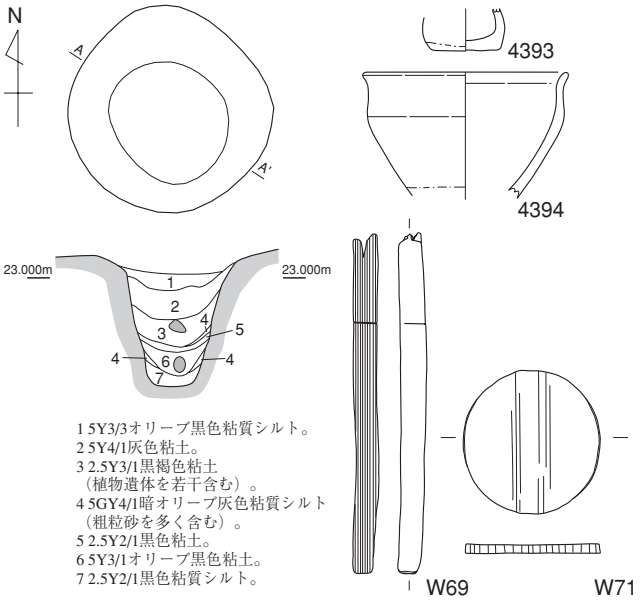
今回の発掘調査で確認された水田及び耕作関連の遺構の時期については、近世後半の遺構として考えてきたが、いま少し時期幅を限定して考える得る資料がある。検出遺構と明治期に作成された地籍図との対比である。比較に使用した地籍図は明治14年作成のもので、現在は愛知県公文書館で閲覧することができる。それに拠れば、先ず大屋敷地区に掘削されていた大溝（SD01）、大屋敷地区と下糟目地区とを分離していた谷地形の痕跡は全く認められない。一般的に堀跡や旧河川などは後世水田として利用されることが多い。しかし、明治14年作成の地籍図で見る限りその痕跡は全く認められず、むしろ明治用水から分岐した用水沿いに水田が展開していることが分かる。このことは、近世後半からの矢作川の堆積作用が往時の痕跡をもとどめない程激しいものであったと推測される。そのために、土地利用の点で前代とは全く異なる状況になっていったものと思われる。次いで、今回検出された溝と地籍図の地割りとの関係であるが、この点についても相関関係は全くうかがうことはできない。この理由は先述の矢作川による堆積作用であろう。参考までに昭和初期に作成された土地法典に示される地割りとも異なっている。以上の点から、今回確認された遺構群は明治14年以前には埋没していた遺構と考えることができる。なお、上限に関しては第八章に示した遺構群が廃絶される17世紀後半と捉えることが妥当であろう。



1 2.5Y4/1黄灰色粘質土、炭化物含む（4・5との間に鉄分の沈着あり）。
2 10YR4/4褐色粘質シルト＋10YR5/4にぶい黄褐色粘質土の斑土。
3 10YR4/4褐色粘質シルト。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（有機分多し）。
5 10YR4/4褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。



第568図　99JSD24（断面図1:50、実測図1:4）



1 5Y3/3オリーブ黒色粘質シルト。
2 5Y4/1灰色粘土。
3 2.5Y3/1黒褐色粘土（植物遺体を若干含む）。
4 5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルト（粗粒砂を多く含む）。
5 2.5Y2/1黒色粘土。
6 5Y3/1オリーブ黒色粘土。
7 2.5Y2/1黒色粘質シルト。

第569図　99BSK5001（遺構図1:50、実測図1:4）





写真　98C2区北壁での近世以降の堆積状況（左：南西から）と98A・B区水田面（右：北東から）

第10章　環境・年代・胎土の科学分析

第1節　水入遺跡の堆積環境

鬼頭　剛（愛知県埋蔵文化財センター）
古澤　明（有限会社　古澤地質調査事務所）

(1) はじめに

岡崎平野北部、豊田市渡刈町の水入遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、テフラ分析、放射性炭素年代測定および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する。

(2) 試料および分析方法

水入遺跡の地下層序解析のため、調査区全体の15地点において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からはテフラ分析や放射性炭素年代測定用試料を採取した。テフラ試料の採取は古澤が、他は鬼頭が行なった。

テフラ分析の試料は洗浄・篩別し、極細粒砂サイズ（1/8～1/16）に粒度調整し、この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した。粒子組成の把握には通常の200粒子の観察とともに、微量含まれる特徴的なテフラ起源鉱物を識別するため、1000粒子中のテフラ起源鉱物含有量も把握した。屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置MAIOT(古澤, 1995)を使用した。測定精度は火山ガラスで±0.0001、斜方輝石および角閃石で±0.0002程度である。分析は古澤が行なった。

放射性炭素年代測定はガス比例計数管（GPC）法と加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。ガス比例計数管法の試料はアルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。測定はラドン崩壊のために約1ヶ月放置した後、精製したアセチレンを容量400ccのガス比例計数管に充填し、β-線を計数して14C濃度を算出した。14C濃度について同位体分別効果の補正後、補正した14C濃度を用いて14C年代を算出した。14Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。ガス比例計数管法の測定はパリノ・サーヴェイ株式会社（Code No.: PLD）に依頼した。加速器質量分析法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された14C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した14C濃度を用いて14C年代を算出した。14C年代値の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。14C年代の暦

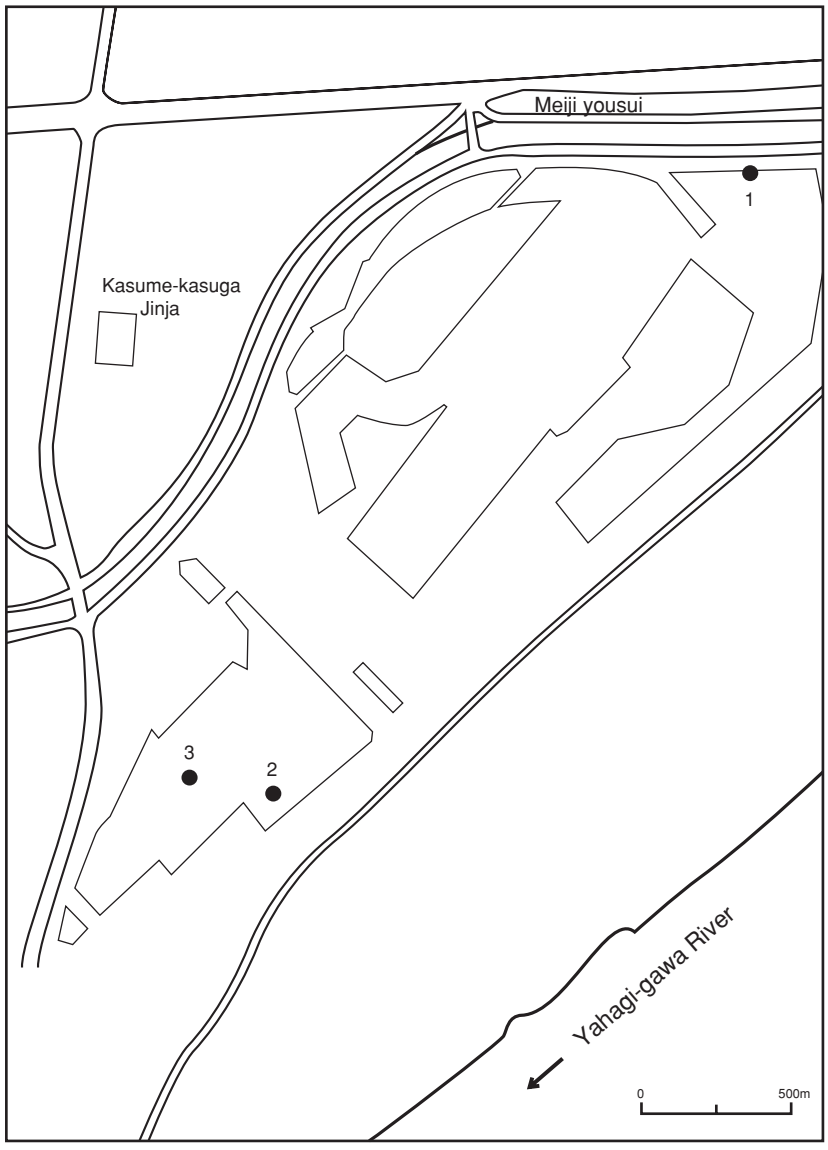
年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD)に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県豊田市発行の1/2,500「都市基本図」にプロットされた標高値を用いた。標高値は1971年（昭和46年）に測図されたものである。等高線図上には水入遺跡の調査地点のほかに、樋上ほか編(2003)を参考にして調査地周辺の主要な遺跡をプロットした。等高線図の作成および解析は鬼頭が行なった。

（3）分析結果

水入遺跡の深掘層序　調査区全体で15地点の層序断面を得ているが、それらの層序のうち主要な3地点（第570図）について各地点ごとに述べる。

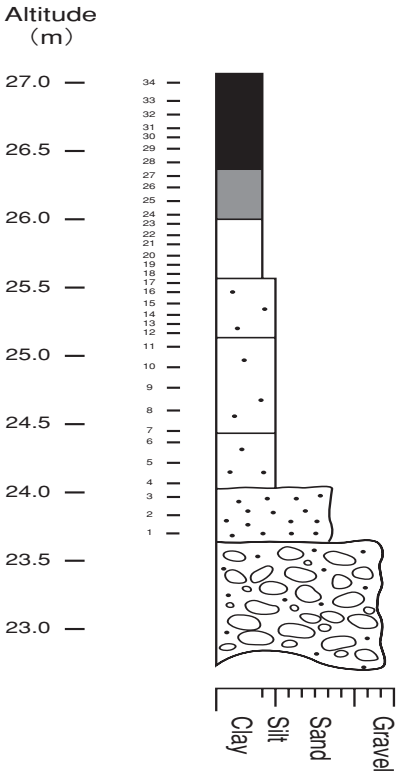
調査区最北端の地点1では地表面（標高27.05m）から深度約4mの深掘断面を得た（第571図)。下位層より、標高22.80～23.70mまでは大礫層からなる。極粗粒砂を基質とする礫支持礫層である。礫は円～亜円礫からなる。標高23.70～24.09mはシルト成分の混じる極粗粒砂層である。標高24.09～24.47mは砂質シルト層からなり、上位層に比べて含まれる砂成分の割合が多いため区別される。標高24.47～25.16mは灰色を呈する砂質シルト層からなる。全体にシルト成分が優勢である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。固結度が高い。標高25.16～25.56mもシルト成分が優勢な砂質シルト層であるが、下位層に比べて色調がより黄褐色を帯びるようになる。標高25.56～26.03mは全体に橙色を呈する塊状な粘土層である。堆積物中には砂粒子が分散し、いわゆるローム層状を呈する。標高26.03～26.37mは下位層に比べてさらに赤色を帯びた橙色の粘土層である。本層もローム層状を呈する。標高26.37～26.82mは全体に濃い赤褐色を示す粘土層からなる。本層も砂粒子が分散し、全



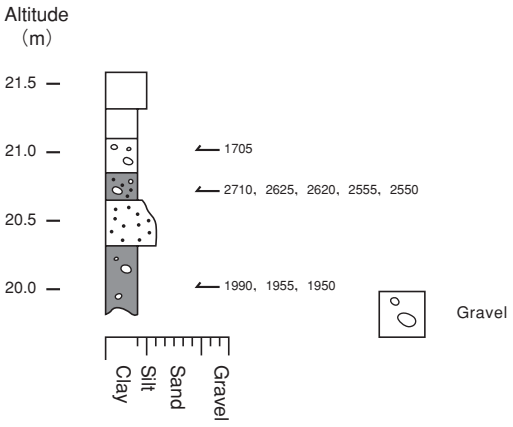
第570図　深掘り地点図

体にローム状を呈する。標高26.82～27.05mは黄褐色の粘土層からなる。標高25.56～27.05mまでの地層の色調は、下位層から上位層にむけて黄褐色から濃赤褐色へとしだいに赤色の度合いが多くなる傾向がみられる。なお，標高およそ26mが石器などが確認される検出面であり、標高26mよりも下位が遺跡の基盤層と考えられる。

地点2は、遺構の堆積状況確認のために掘り残されたベルト部分に露出した層序断面である（第572図）。下位層でみられる大礫を含む礫層が特徴的である。下位層より、標高19.83～20.33mは黒褐色を呈する粘土層である。下位でみられる大礫層を覆う。粘土層の中には大礫サイズの礫が含まれる。標高20.33～20.65mは灰色を呈するシルト質極細粒砂層である。平行葉理がみられ、植物片を含む。標高20.65～20.86mは黒褐色粘土層である。粘土層の中には大礫や、極細粒砂層のブロックを混在する。標高20.86～21.11mは褐色粘土層からなる。礫を混在する。標高21.11～21.31mは塊状・均質な灰色粘土層からなる。堆積構造はみられない。炭化物が含まれる。標高21.31～21.59mは灰白色を呈する粘土質シルト層である。

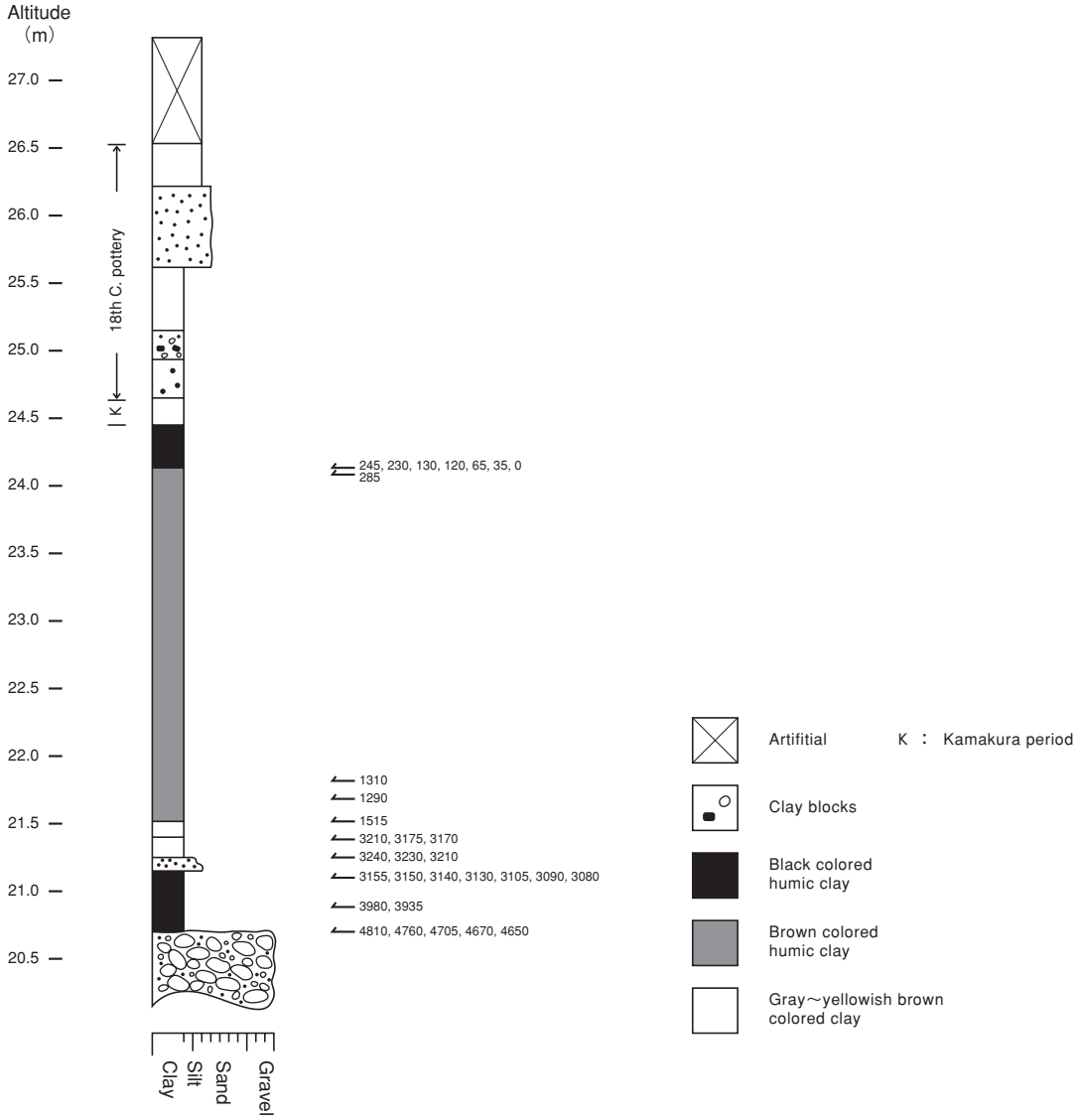


第571図　第1地点土層柱状図



第572図　第2地点土層柱状図

地点3では地表面（標高27.30m）から深度約7mの層序断面を得た（第573図）。なお、標高24mよりも下位の部分は、日本道路公団により掘削されたトレンチにおいて作成した。下位層より、標高20.15～20.70mは大礫層である。基質は極粗粒砂からなり、礫の割合が多い礫支持礫層である。円～亜円礫よりなる。標高20.70～21.15mは礫層を覆う黒褐色の腐植質粘土層である。粘土層全体には極粗粒砂サイズの砂粒子の分散がみられる。堆積構造はみられない。標高21.15～21.25mは淘汰良好な極細粒砂層からなる。標高21.25～21.40mは灰色を呈する粘土層からなる。塊状・均質で、堆積構造はみられない。標高21.40～21.51mは灰黒色の粘土層である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。標高21.51～24.14mは褐色の腐植質混じり粘土層である。植物質の分解は進んでおり、塊状・均質で、堆積構造はみられない。標高24.14～24.48mは黒褐色粘土層である。標高24.48～24.66mは黄褐色を呈する粘土層である。標高24.66～24.94mは灰褐色を呈する粘土層からなる。径2～3cmの黒褐色粘土層のブロックが含まれる。標高24.94～25.18mは黒褐色粘土層や灰褐色粘土層の径2～3cmのブロックが混然一体と堆積した混在層である。基質はシルト質粘土からなる。標高25.18～25.60mは灰褐色粘土層である。標高25.60～26.20mは細粒砂層からなる。淘汰良好であるが、塊状・均質で堆積構造はみられない。標高26.20



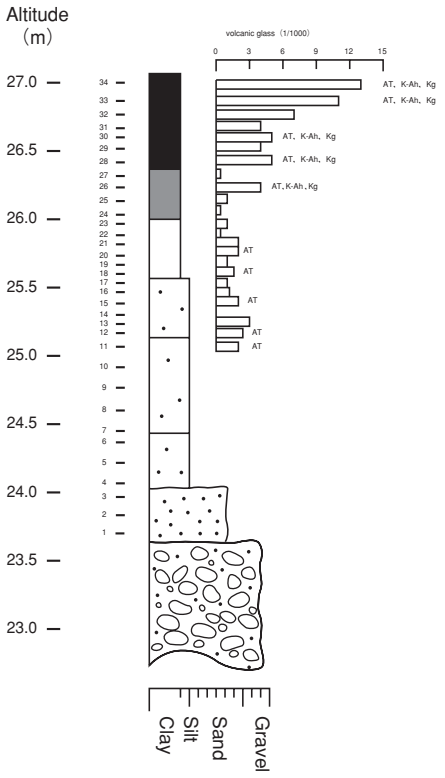
第 573 図　第 3 地点土層柱状図

～ 26.52m は灰褐色を呈する砂質シルト層である。標高 26.52 ～ 27.30m は灰色を呈するシルト質な極細粒砂層である。標高 24.48 ～ 24.66m の黄褐色粘土層からは鎌倉時代の、標高 24.66 から 27.10m までにみられる各地層からは 18 世紀以降の遺物が検出されている。

テフラ分析　調査区北端の地点 1 において、最下位層の大礫層を覆う極粗粒砂層から上位層までに計 34 試料を採取した。分析結果を第 32 表および第 574 図に示す。深掘層序断面下部の標高 23.70 ～ 24.09m 極粗粒砂層から採取した試料 1 ～ 3、標高 24.09 ～ 24.47m の砂質シルト層から採取した試料 4 ～ 6、標高 24.47 ～ 25.16m の砂質シルト層から採取した試料 7 ～ 10 からはテフラ起源の火山ガラスはまったく検出されなかった。いっぽう、試料 11（標高 25.11m）より上位では火山ガラスを検出できた。これらのうち、姶良 Tn（AT）テフラ起源のガラスは試料 11 より上位から産出した。産出率のモードは不明瞭であるが、生物撹乱等を考慮すれば、試料 18（標高 25.63m）の層準を基底とする粘土層最下部ないしはその直下のシルト層が、姶良 Tn（AT）テフラの降灰層準と考えられる。鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラ起源のガラスは試料 26（標高 26.25m）付近から産出しはじめる。その上位層からも多く産出するが、試料 28（標

高 26.42m）より上位層では伊豆カワゴ平（Kg）テフラ起源の火山ガラスが産出することから、鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラは試料26層準付近に降灰したと考えられる。試料28より上位には伊豆カワゴ平（Kg）テフラ起源の火山ガラスが多く含まれる。この層準付近に本テフラが降灰した可能性が高い。

放射性炭素年代測定　地点2の深掘層序断面で3試料（表2）、地点3で10試料（表3）の放射性炭素年代値を得た。地点2における深掘層序の最下位層である礫混じりの黒褐色粘土層（標高19.83～20.33m）から採取した有機質土壌（標高20.03m）で1990、1955、1950 cal yrs BP(Gak-20584)、礫の混じる褐色粘土層（標高20.86～21.11m）の有機質土壌（標高21.03m）で1705 cal yrs BP (Gak-20586)の数値年代を得た。地点3では最下位の大礫層を覆う極粗粒砂混じりの黒褐色腐植質粘土層（標高20.70～21.15m）の有機質土壌（標高20.70m）で4810、4760、4705、4670、4650 cal yrs BP(PLD-2942)、灰黒色粘土層（標高21.40～21.51m）の有機質土壌（標高21.41m）で3210、3175、3170 cal yrs BP(PLD-2946)と、層厚およそ70cmの間に約4800年前から約3100年前にいたる数値年代が得られた。標高21.51mから標高24.14mまでには層厚約2.6mと厚い褐色腐植質粘土層はみられる。本層の最下部で採取したピート（標高21.52m）で1515 cal yrs BP(PLD-2947)、標高21.83mで採取したピートが1310 cal yrs BP(PLD-2949)と、約1500年前から約1300年前の値を示した。いっぽう、この褐色腐植質粘土層の最上部で採取した木片（標高24.10m）では285 cal yrs BP(PLD-2940)と比較的新しい数値年代であった。その褐色腐植質粘土層を覆う黒褐色粘土層（標高24.14～24.48m）の標高24.16mから採取した木片は約250年前からほぼ現在までと新しい年代値を示した。



第574図　テフラ分析結果（地点1）

調査地周辺の等高線図　古地形解析のための、より詳細な等高線図を得るため愛知県豊田市発行の1/2,500「都市基本図」を用い、等高線図を作成した（第575図）。東西約2.3km、南北約3.5kmの等高線図全体では標高20mから標高42mまでの等高線が描かれ、北および北西側で標高が高く、南へ向かいしだいに低くなる傾向がある。標高26～30m付近には急傾斜をなすところもみられ、地形の傾斜変換点となっている。ちょうどこの変換点範囲を明治用水が北東から南西方向に流下する。図の北東にあたる豊田市渡刈町や同市鴛鴨町北部にかけては地形的に高くなっており、標高26m以上のこの範囲は地質学的にちょうど上部更新統の碧海層の露出地域となっている。標高26～30mよりも低い等高線図の北東から南にかけては、標高20m程度まで徐々に標高を減じていく。それは北東にある水入遺跡調査地点から豊田市幸町、同市鴛鴨町南部、隣松町、永覚町、配津町、畝部西町にあたる。

標高26～30mの傾斜変換点を境として地形を概観すると、それよりも標高の高い地域である図北西の鴛鴨町には、標高30～36mにかけて東から西へのびる幅約700mの谷地形が認められる。図の北東側にも軽微な谷や尾根地形がみられるものの、全体に等高線の間隔は広く、傾斜は緩やかである。そのよう

第32表　第1地点におけるテフラ鉱物組成

AWT

No.	火山ガラス 無色 P	Bl	Tl	Bm	Tm	Bs	Ts	O	火山ガラス 有色 P	Bl	Tl	Bm	Tm	Bs	Ts	O	無色多種 Opx付着	Cpx付着	Ho付着	Fl付着	無色多種 鉱物付着	有色多種 鉱物付着	石英・長石	重鉱物 Opx	Cpx	GHo	BHo	Bi	Opq	OTH	火山岩片	岩片・風化粒	生物遺骸 珪藻	有孔虫	ウニ	その他	合計	
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	168	0	0	2	0	11	2	0	0	17	0	0	0	0	200	glass:0/1000
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	162	0	0	3	0	13	2	0	0	20	0	0	0	0	200	glass:0/1000
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	161	0	0	10	0	9	0	1	0	19	0	0	0	0	200	glass:0/1000
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	164	0	0	1	0	8	1	3	0	23	0	0	0	0	200	glass:0/1000
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	163	0	0	2	0	15	0	1	0	19	0	0	0	0	200	glass:0/1000
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	167	0	0	2	0	13	0	1	0	17	0	0	0	0	200	glass:0/1000
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	177	0	0	2	0	4	0	2	0	15	0	0	0	0	200	glass:0/1000
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	174	0	0	2	0	11	0	0	0	13	0	0	0	0	200	glass:0/1000
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	170	0	0	2	0	4	3	1	0	20	0	0	0	0	200	glass:0/1000
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	180	0	0	1	0	5	1	1	0	12	0	0	0	0	200	glass:0/1000
11	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	174	0	0	3	0	7	1	1	0	12	0	0	0	0	200	glass:2/1000
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	175	0	0	0	0	6	1	0	0	18	0	0	0	0	200	glass:2.5/1000
13	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	177	0	0	2	0	1	2	1	0	15	0	0	0	1	200	glass:3/1000
14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	181	0	0	2	0	3	0	1	0	12	0	0	0	1	200	glass:0/1000
15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	185	0	0	2	0	4	0	1	0	8	0	0	0	0	200	glass:2/1000
16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	186	0	0	0	0	3	1	1	0	9	0	0	0	0	200	glass:1.3/1000
17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	187	0	0	1	0	0	2	1	0	9	0	0	0	0	200	glass:1/1000
18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	184	0	0	2	0	4	2	1	0	7	0	0	0	0	200	glass:1.5/1000
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	182	0	0	2	0	4	1	1	0	10	0	0	0	0	200	glass:1/1000
20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	188	0	0	3	0	1	1	1	0	6	0	0	0	0	200	glass:2/1000
21	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	179	0	0	0	0	3	0	0	0	17	0	0	0	0	200	glass:2/1000
22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	187	0	0	1	0	2	1	0	0	9	0	0	0	0	200	glass:0.5/1000
23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	185	0	0	1	0	1	1	1	0	11	0	0	0	0	200	glass:1/1000
24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	183	0	0	1	0	2	1	1	0	12	0	0	0	0	200	glass:0.5/1000
25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	186	0	0	1	0	2	1	0	0	10	0	0	0	0	200	glass:1/1000
26	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	182	0	0	1	0	2	0	1	0	13	0	0	0	0	200	glass:4/1000
27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	182	0	0	1	0	1	1	1	0	14	0	0	0	0	200	glass:0.5/1000
28	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	179	0	0	4	0	2	2	0	0	12	0	0	0	0	200	glass:5/1000
29	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	191	0	0	1	0	0	0	1	0	6	0	0	0	0	200	glass:4/1000
30	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	181	0	0	1	0	0	1	1	0	15	0	0	0	0	200	glass:5/1000
31	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	179	0	0	1	0	1	2	0	0	14	0	0	0	0	200	glass:4/1000
32	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	187	0	0	2	0	0	1	0	0	8	0	0	0	0	200	glass:7/1000
33	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	179	0	0	1	0	0	2	0	0	14	0	0	0	0	200	glass:11/1000
34	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	177	0	0	2	0	0	3	2	0	13	0	0	0	0	200	glass:13/1000

第33表　第2地点における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	暦年代較正値 (1σ, BC/AD)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	1σ暦年代範囲 (BC/AD, probability)	Lab code No.(method)
20.03	黒褐色礫混じり粘土層	有機質土壌	2040±70	-29.8	1990, 1955, 1950	BC45, 5, 0	2105-2080(10.4%) 2065-1925(86.2%) 1910-1900(3.4%)	BC155-130(10.4%) BC115-AD25(86.2%) AD40-50(3.4%)	Gak-20584(GPC)
20.73	黒褐色粘土層	有機質土壌	2510±80	-28.3	2710, 2625, 2620, 2555, 2550	BC760, 680, 670, 605, 600	2740-2690(19.7%) 2675-2485(77.0%) 2480-2470(3.3%)	BC790-740(19.7%) BC725-535(77.0%) BC530-520(3.3%)	Gak-20585(GPC)
21.03	褐色粘土層	有機質土壌	1780±60	-28.9	1705	AD245	1815-1790(12.2%) 1780-1755(12.6%) 1740-1685(35.5%) 1675-1610(39.8%)	AD135-160(12.2%) AD170-195(12.6%) AD210-265(35.5%) AD275-340(39.8%)	Gak-20586(GPC)

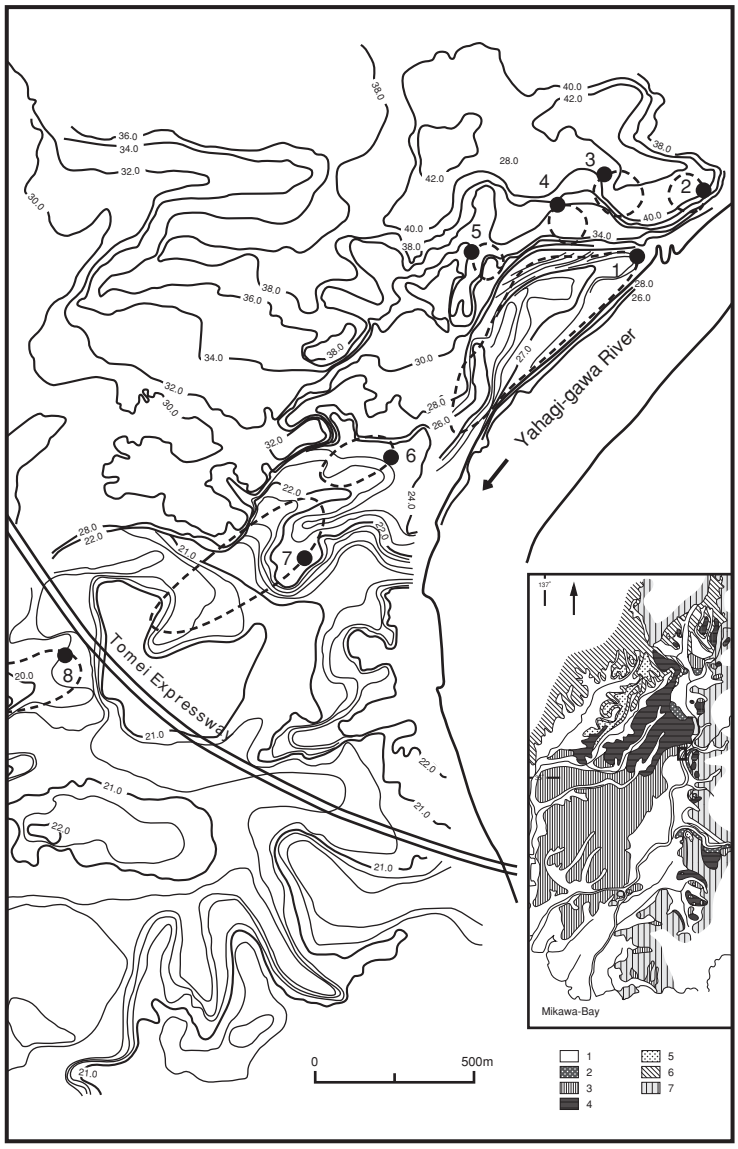
目次
終了

第 34 表　第 3 地点における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	暦年代較正値 (1σ, BC/AD)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	1σ暦年代範囲 (BC/AD, probability)	Lab code No.(method)
20.70	極粗粒砂混じり黒褐色腐植質粘土層	有機質土壌	4165±50	-30.8	4810, 4760, 4705, 4670, 4650	BC2860, 2810, 2755, 2720, 2705	4740-4620(69.6%) 4825-4790(19.1%) 4765-4745(11.3%)	BC2875-2845(18.5%) BC2815-2795(11.4%) BC2795-2670(70.0%)	PLD-2942(AMS)
20.90	極粗粒砂混じり黒褐色腐植質粘土層	有機質土壌	3665±45	-27.0	3980, 3935	BC2031	4085-4030(39.3%) 4000-3955(31.3%) 3950-3910(29.5%)	BC2135-2080(41.0%) BC2055-2010(34.3%) BC2005-1975(20.8%) BC1970-1960(3.9%)	PLD-2943(AMS)
21.10	極粗粒砂混じり黒褐色腐植質粘土層	有機質土壌	2950±50	-27.9	3155, 3150, 3140, 3130, 3105, 3090, 3080	BC1205, 1200, 1190, 1180, 1155, 1140, 1130	3165-3055(64.7%) 3050-3020(16.6%) 3205-3185(12.7%)	BC1260-1230(14.8%) BC1220-1110(66.4%) BC1100-1075(13.3%) BC1060-1050(5.4%)	PLD-2944(AMS)
21.25	灰色粘土層	有機質土壌	3020±45	-28.0	3240, 3230, 3210	BC1290, 1280, 1260	3270-3205(50.3%) 3325-3285(23.9%) 3190-3160(21.1%)	BC1375-1340(22.3%) BC1320-1255(48.8%) BC1245-1210(22.6%) BC1200-1195(3.4%) BC1140-1135(2.9%)	PLD-2945(AMS)
21.41	灰黒色粘土層	有機質土壌	3005±40	-28.1	3210, 3175, 3170	BC1260, 1225, 1220	3265-3160(76.3%)	BC1370-1360(3.8%) BC1315-1210(78.6%) BC1200-1190(5.5%) BC1175-1165(6.4%) BC1140-1130(5.6%)	PLD-2946(AMS)
21.52	褐色腐植質粘土層	ピート	1590±40	-28.3	1515	AD435	1470-1420(55.3%) 1525-1480(44.7%)	AD425-445(18.5%) AD445-470(25.7%) AD480-530(55.9%)	PLD-2947(AMS)
21.68	褐色腐植質粘土層	ピート	1380±40	-27.8	1290	AD660	1310-1265(93.8%)	AD625-630(6.2%) AD640-685(93.8%)	PLD-2948(AMS)
21.83	褐色腐植質粘土層	ピート	1435±40	-30.6	1310	AD640	1350-1295(100%)	AD600-655(100%)	PLD-2949(AMS)
24.10	褐色腐植質粘土層	木片	220±45	-28.9	285	AD1660	190-145(47.1%) 305-270(38.5%)	AD1645-1680(38.9%) AD1740-1750(5.7%) AD1755-1805(46.1%) AD1935-1945(9.3%)	PLD-2940(AMS)
24.16	黒褐色粘土層	木片	105±35	-29.2	245, 230, 130, 120, 65, 35, 0	AD1705, 1720, 1820, 1830, 1880, 1915, 1950	140-55(61.9%) 260-225(27.4%)	AD1690-1725(27.8%) AD1810-1890(62.1%) AD1910-1920(9.3%) AD1950-1950(0.7%)	PLD-2941(AMS)

目次
終了

な場所に大明神A遺跡、大明神B遺跡、西糟目遺跡などが位置することがわかる。いっぽう、標高の低い地域では、等高線間隔の狭いところと広いところとが明瞭に区別でき、谷や尾根地形を確認できる。水入遺跡の調査地点では標高26～27mにかけて北から南へしだいに標高を減じる軽微な谷地形がみられる。また、ちょうど矢作川の屈曲部、攻撃斜面にあたる標高21～22mにかけて北東から南西ないし南にのびる尾根地形が確認できる。対照的にこの尾根地形の北側には標高22～22.8mにかけて北東から南西方向にのびる谷地形がみられる。これよりも南にも東から西方向へのびる尾根地形とそれらの間にみられる谷地形とが確認される。また、図の中央部にあたる東名高速道路が通る地域付近には、相対的に地形の高い部分が島状に確認できる。



第575図　遺跡周辺等高線図

(4) 考察

調査区北部の堆積環境　矢作川沿いには新生代新第三系と第四系が分布し、下位より新第三系中新統～鮮新統の瀬戸層群、第四系中部更新統の三好層、同じく中部更新統の挙母層、上部更新統の碧海層、最上部更新統の越戸層・第一礫層、第四系完新統に分けられる（町田ほか1962; 牧野内・小井土 1988）。このうち完新統は下位より基底砂礫層・下部泥層・下部砂層・上部泥層・上部砂層・頂部泥層・頂部砂（礫）層に区分されている（松沢ほか 1965; 森山・小沢 1972; 森山・浅井 1980）。水入遺跡で確認された深掘層序の特徴は、その堆積相やテフラ分析、放射性炭素年代測定から得られた結果から、調査区北側の更新統と南側の完新統とに大きく2分される。

調査区北端の地点1では標高25.11mの層準を境にして、その上位層から姶良Tn(AT)テフラ、鬼界アカホヤ(K-Ah)テフラ、伊豆カワゴ平(Kg)テフラが検出された。標高25.11mよりも下位層からテフラ鉱物が検出されなかったのは、下位層が極粗粒砂層や砂質シルト層からなり、テフラ鉱物よりも粗粒な砕屑粒子から構成されるため、本地点には堆積できなかったためと考えられる。また、姶良Tn(AT)テフラは標高25.11mから標高25.76mまでに分散するが、生物撹乱などを被った影響を考慮すると標高25.63m（試

料18）の粘土層最上部ないしはその直下のシルト層が降灰層準と推定できた。水入遺跡の調査区北側からは後期旧石器時代と考えられる石器類が出土しており（佐藤ほか2000）、地点1の近傍におけるその検出面は標高26m付近にある。ところで、姶良Tn(AT)テフラの噴出年代は村山ほか(1993)により24,330 yrs BPとされている。地点1の標高25.63m（試料18）の層準付近に姶良Tn(AT)テフラの降灰が推定されたことにより、約2万4千年前以降に堆積したことがわかった。また、降灰層準よりも約40cm上位にあたる標高26m付近には後期旧石器時代の石器類が出土した。このことから姶良Tn(AT)テフラの降灰後、調査地点は離水域であり、その上に人類の生活活動が行なわれたことがわかる。

地点1の深掘層序全体は、下位層の大礫層からはじまり、極粗粒砂層、砂質シルト層、粘土層へと次第に砕屑物の粒径が細かくなる明瞭な上方細粒化傾向を示す。これは、堆積物を運搬する水理エネルギーが高い状態から次第に低くなっていったことを示す。最下位でみられる礫層は大礫サイズの礫からなり、淘汰はよく、インブリケーションもみられる。また、その上位の極粗粒砂層も砂粒子の大きさがそろい、淘汰が良好である。このことから大礫層と極粗粒砂層は礫質河川の堆積物であると考えられる。それらの上を覆う砂質シルト層や粘土層は、本地点の河谷が低い水理エネルギー環境へと移り変わった結果である。深掘層序上部の粘土層からは約6300年前の噴出年代を示す鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラや、約3000年前の噴出年代を示す伊豆カワゴ平(Kg)テフラが検出された。それらのテフラが検出される粘土層は赤色化の著しい色調を有する。これは調査地点よりも上流部あるいは高所に降灰した鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラや伊豆カワゴ平(Kg)テフラが、洪水等によって調査地点に間欠的に運搬され、堆積した結果であり、赤色化は堆積後に離水し、大気中に長期間さらされて酸化が進んだ結果であると推定される。

調査区南部の堆積環境　調査区北部の地点1ではテフラ分析から姶良Tn(AT)テフラが検出でき、地下には上部更新統である碧海層が分布することがわかった。いっぽう、調査区南部の地点2、地点3でみられる深掘層序は全体に粘土粒子に富む細粒堆積物から構成される。地点2の深掘層序の最下位層である礫混じりの黒褐色粘土層（標高19.83～20.33m）から採取した有機質土壌（標高20.03m）で1990, 1955, 1950 cal yrs BP(Gak-20584)の、礫の混じる褐色粘土層（標高20.86～21.11m）の有機質土壌（標高21.03m）で1705 cal yrs BP(Gak-20586)の数値年代が得られた。対して地点3ではほぼ同様な標高にあたる、最下位の大礫層を覆う極粗粒砂混じりの黒褐色腐植質粘土層（標高20.70～21.15m）の有機質土壌（標高20.70m）で4810, 4760, 4705, 4670, 4650 cal yrs BP(PLD-2942)を、灰黒色粘土層（標高21.40～21.51m）の有機質土壌（標高21.41m）で3210, 3175, 3170 cal yrs BP(PLD-2946)と、地点2よりも古い数値年代を示した。これは調査地点において肉眼では一様にみられる堆積物が一様に水平に堆積したわけではなく、側方に堆積場が移動しつつ、上方へ累積したことを示す。地点3ではインブリケーションがみられる大礫層がみられた。本礫層からは堆積年代を推定できる試料が得られず、堆積した時期が不明である。しかし、地点1でみられた大礫層を構成する礫よりは風化が進んでおらず、より新鮮である。よって、礫質河川が流下していた場所が、河川流路の移動により低エネルギー環境へと変化した。それが約4800年前から約3100年前に堆積物が累積したのがわかった。このような年代値に関して、水入遺跡から約1.4km南西にいった本川遺跡では、標高14.65～15.50mに粘土層が認められ、この粘土層の標高14.65mから得

た木片は 3360-3320, 3310-3265 cal yrs BP(Beta-143646)（鬼頭ほか 2003）、水入遺跡から約 2.2km 南西の川原遺跡では標高 15.40 ～ 16.10m に黒褐色粘土曽層の標高 15.50m で 3010 ± 60(Gak-20196)、標高 16.10m で 2850 ± 70(Gak-20195)を示した（鬼頭ほか 2001）。

地点 3 では層厚約 6m におよぶ厚い粘土層が堆積しており、かつ、粘土層には砂層が挟まれなかった。標高 21.51m から標高 24.14m までの褐色腐植質粘土層の最下部で採取したピート（標高 21.52m）で 1515 cal yrs BP(PLD-2947)、この褐色腐植質粘土層で約 200 年前の数値年代が得られている。少なくともこの褐色粘土層の堆積時には、当時、調査地を流下していた主要な河川を古矢作川とよぶならば、古矢作川は調査地近傍にはなく、長期間細粒堆積物を堆積させるような環境であったことがわかった。

（5）謝辞

本論を作成するにあたり、日本道路公団名古屋建設局豊田工事事務所（調査当時）の秀島哲雄氏には調査地周辺地域の地盤ボーリング資料を供与していただいた。豊田市郷土資料館の森泰通氏には豊田市発行の都市基本図の入手に際したいへんお世話になった。名古屋大学文学部地理学教室の海津正倫氏と愛知県立明和高等学校の森勇一氏には碧海層についてご教示を賜った。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の永井邦仁氏・川添和暁氏には水入遺跡および周辺遺跡に関する考古学的情報を教えていただいた。名古屋工業大学大学院生（調査当時）の服部陽介氏には現場での試料採取をお手伝いいただいた。図面の整理では愛知県埋蔵文化財センター元研究補助員の尾崎和美氏にお世話になった。図面のトレース作業は同研究補助員の山口典子氏にお願いした。分析試料の整理・保管と原図の作成では元整理補助員の服部恵子氏・宇佐美美幸氏・山口きみ代氏、整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

参考・引用文献

古澤　明 , 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析 , 地質学雑誌 , 101, 123-133.
樋上　昇ほか編 , 2003, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 100 集「本川遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 160p.
鬼頭　剛・堀木真美子・上田恭子 , 2003, 矢作川沖積低地北部 , 本川遺跡における古環境変遷 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 100 集「本川遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 50-62.
鬼頭　剛・尾崎和美・小野映介 , 2001, 矢作川沖積低地北部, 川原遺跡における古環境復元 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集「川原遺跡　第三分冊」, 愛知県埋蔵文化財センター , 1-16.
町田　貞・太田陽子・田中真吾・白井哲之 , 1962, 矢作川下流地域の地形発達史 , 地理評 , 35, 10, 505-524.
牧野内　猛・小井土由光 , 1988, 第 5 章　第四系 , 山下　昇・紺野義夫・糸魚川淳二編日本の地質 5「中部地方。」, 共立出版 , 144-177.
松澤　勲・嘉藤良次郎・北崎梅香・進藤義武 , 1965, 衣浦地区の地質構造および地盤地質 , 都市地盤調査報告書 , 9, 建設省計画局・愛知県 , 16-31.
森山昭雄・小沢　恵 , 1972, 矢作川流域の沖積平野の地形と沖積層について , 第四紀研究 , 11, 193-207.
森山昭雄・浅井道広 , 1980, 矢作川河床堆積物と供給岩石の造岩鉱物との粒度組成関係 , 地理評 , 53, 557-573.
佐藤公保・永井邦仁・中野良法・成瀬友弘・川井啓介・皆見秀久・鈴木達也・小嶋廣也 , 2000, 水入遺跡 , 愛知県埋蔵文化財センター平成 11 年度「年報」, 愛知県埋蔵文化財センター , 56-65.

第２節　放射性炭素年代測定（1）

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

(1) ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定について

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析器(AMS)にて測定し、yrBP 年代値(AD1,950 年から何年前かを示した値)を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には 14 Ｃの半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用して年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料の 14 Ｃ計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の 14 Ｃ計数率の比が 14 Ｃ(Sample) /14 Ｃ(Modern)≧ 1 の時は、Modern と表示する。

表示した同位体比(‰)は標準からのずれを示し、δ 13 Ｃの値は、試料炭素の 13 Ｃ /12 Ｃ原子比を質量分析器で測定し、標準に PDB を用いて、δ 13 Ｃ =[{(13 Ｃ /12 Ｃ)(sample)-(13 Ｃ /12 Ｃ)(PDB)}／(13 Ｃ / 12 Ｃ)(PDB)]× 1000 によって算出された値である。このδ 13 Ｃの値を用いて補正 14 Ｃ年代値を算出した。したがって、補正 14 Ｃ年代値は同位体効果による測定誤差を修正した年代値である。

(2) ガス比例計測管法による放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理をして不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら 800℃まで加熱して炭化リチウム(カーバイド)を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管(400cc)を用いてβ-線を計数し、yrBP 年代値(AD1,950 年から何年前かを示した値)を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には 14 Ｃの半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用して年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料のσ以下の時は、3σに相当する年代を下限の年代値として表示し、試料のβ-線計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の計数率との差が 2σ以下の時は、Modern と表示し、14 Ｃ (Sample) /14 Ｃ(Modern) <1 であれば、yrBP の値を付記する。

表示した同位体比(‰)は標準値からのずれを示し、δ 14 Ｃの値は、測定で求めた試料炭素中の 14 Ｃ濃度Ａ(sample)と現在の炭素の標準の濃度Ａ(std)を用いてδ 14 Ｃ =[(Ａ(sample)－)/Ａ(std)]× 1000 によって算出された値である。Δ 14 Ｃの値は、試料炭素がδ 13 Ｃ =-25.0 ‰とした時の 14 Ｃ濃度(δ 14 Ｃ)に対して、測定したδ 13 Ｃの値を用いて補正した 14 Ｃ濃度の値である。したがって、補正 14 Ｃ年代値は同位体効果による測定誤差を補正した年代値である。

(3) 暦年代補正について

暦年代の補正は、大気中の 14 Ｃ濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された 14 Ｃ年代値(yrBP)に

対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の 14 C の濃度の変動および半減期の違い（14 C の半減期 5,730 ± 30 年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の 14 C 年代の詳細な測定値を用い、さらに、珊瑚の U-TH 年代と 14 C 年代の比較により、補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出に Radiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1 {Reference for datasetsused: Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B.,McCormac,F.G., v.d.Plicht,J.,and Spurk,M.(INTCAL98:Stuive et al.,1998a).Radiocarbon 40:1041-1083} を使用した。なお、交点年代値は 14 C 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、1 σ 年代幅は 14 C 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68% の確率で 1 σ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約二万年前から AD1,950 年までが有効である。

暦年代補正に関しては、あくまで測定年代値の参考として記載しているものである。

引用文献

Radiocarbon Calibration Program 1999*REV4.1,Copyright 1999 Quaternary Isotope Lab University of Washington.*To be used in conjunction with:

Stuiwer,M.and Reimer,P.J.(1993).Radiocarbon,35,P.215-230.

第 35 表　放射性年代測定結果

測定No.（測定方法）	試料データ	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代値（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-601 (AMS)	炭化物 99B P135	-25.8	9390±50	cal BC 8685 cal BC 8675 cal BC 8630	cal BC 8735－8730 cal BC 8725－8705 cal BC 8695－8600 cal BC 8570－8560
PLD-608 (GPC)	炭化物 99K SB1075 炉内	-26.0	3710±100	cal BC2120 cal BC 2095 cal BC 2040	cal BC 2200－1940 cal BC 1925
PLD-498 (GPC)	炭化物 99C SK09	—	9250±150	cal BC 8525 cal BC 8510 cal BC 8475	cal BC 8720－8710 cal BC 8690－8660 cal BC 8645－8640 cal BC 8635－8285

第 3 節　放射性炭素年代測定（2）

パリノ・サーヴェイ株式会社

（1）測定（その 1）

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室と（株）地球科学研究所の協力を得た。なお、計算には、放射性炭素の半減期として、LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。また、付記した誤差は β 線の計測値の標準偏差 σ に基づいて産出した年代で、標準偏差に相当する年代（真の値が 66.7% の割合でこの範囲内にあること）である。

同位体比は標準からのずれをパーミルで表した年代で産出した値である。δ 13C の値は、試料炭素の

13C/12C 原子比を質量分析器で測定し、標準に PDB を用いて産出した値である。

また、測定方法は、学習院大学放射性炭素年代測定質が行った測定については β 線計数法、（株）地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社（BETA ANALYTIC INC.）が行った測定については、加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定を実施した。

99DSB10 から出土した炭化材は約 27870 年前、99DSB21 西カマドから出土した炭化材は約 1230 年前であり、年代値に大きな差が認められる。今後は、遺構・遺物の出土状況などと併せて検討する必要があると思われる。なお 99GSK352 では土坑の下部から土壌を採取している。

第 36 表　放射性年代測定結果（その 1）

測定No. (測定方法)	試料データ	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代値 yrBP±1σ	較正年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
Beta-145586 (AMS)	炭化材 99D SB20カマド西 D	910±50	-25.9	－	－
Beta-145585 (AMS)	炭化材 99D SB10カマド	27870±230	-26.7	－	－
Beta-145587 (AMS)	炭化材 99D SB21カマド西	1230±40	-26.4	－	－
Gak-20593 (GPC)	暗褐色粘土 99G SK352	1020±60	-27.9	－	－
Beta-145584 (AMS)	炭化材 99H SK62	1640±40	-27.8	－	－

（2）測定（その 2）

試料は、99J 区から採取した放射線炭素年代測定用の土壌 2 点である。

乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に塩酸を加え、煮沸した。煮沸後、塩酸を水で充分洗い流し、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で 400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。そして前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン 5ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して5mlとした）にシンチレイターを0.075g加えたものを測定試料とした。測定は、1 回の測定時間 50 分間を繰り返し行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。放射性炭素の半減期として LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。

第 37 表　放射性年代測定結果（その 2）

測定No. (測定方法)	試料データ	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代値 (yrBP±1σ)	較正年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PAL-688 (GPC)	炭化物 99J SK29	－	1110±120	－	－
PAL-689 (GPC)	炭化物 99J SK36	－	1030±60	－	－

第4節　竪穴建物竈焼土の焼成年代推定

藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）

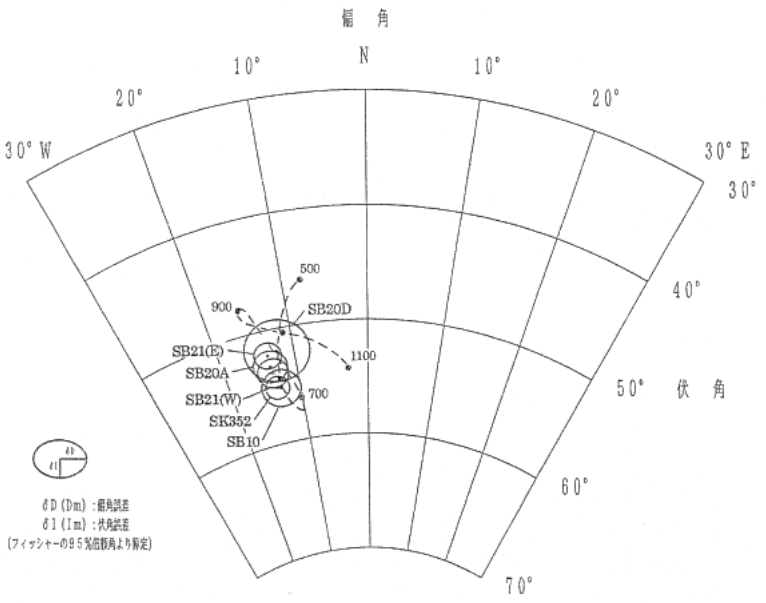
(1) はじめに

水入遺跡では、竈を伴った8世紀頃の住居跡や焼土を伴った土坑が検出されている。ここでは、これら住居竈あるいは土坑焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から焼成年代を推定した。

(2) 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面ないで自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約48.21°、全磁力（水平分力）は、約30892.1(nT)である（理科年表、1993;いずれも1990年値）。これらの地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は、少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2.000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べ



第576図　遺構焼土の磁化方向とShibuya（1980）による地磁気永年変化曲線の一部

られている（広岡、1977、Shibuya, 1980;第 1 図）。

こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは異なった方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、14 C 年代測定法など他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、土器等の遺物の年代が参考となる。

(3) 試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算を行い、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a)測定用試料の採取および整形　試料は、住居竈焼土（99DSB10、99DSB20 の竈 A および 99DSB21 の竈東側および西側）および土坑焼土（99GSK352）を対象とした。採取作業は、（１）床面焼土において、その周辺に一辺3㎝角の浅い溝を掘った。（２）薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強した。（３）やや固め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺 5 ㎝の正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置した。（４）石膏が固まった後アルミ板を剥がし、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に基準となるマークと番号を記入した。％試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強して持ち帰る。（５）持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺 3.5 ㎝・厚さ 1 ㎝程度の立方体に切断した。焼土は、切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強した。

b)段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果　熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85: (株)夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意 1 試料（D 区 SB10 竈 No.2、D 区 SB20 竈 No.3、D 区 SB20 竈 No.5、D 区 SB21 竈 W 西側 No.3、G 区 SK352No.5）について交流消磁装置（DEM-8601: (株)夏原技研製）を用いて段階的に消磁を行いその都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は 10-3emu と比較的強いことが分かり、NRM（自然残留磁化）に対する 75 0e あるいは 150 0e 消磁の相対強度は、D 区 SB10 竈 No.2 が 74.9%、D 区 SB20 竈 ANo.3 が 61.8%、D 区 SB20 竈 DNo.5 が 89.0%D 区 SB21 竈 E(東側)No.5 が 80.5%、D 区 SB21 竈 W(西側)No.3 が 86.4%、G 区 SK352No.5 が 59.9% と高い値であった。さらに磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録していることが分かった。

以上の理由から、75 0e あるいは 150 0e 消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、75 0e あるいは 150 0e 消磁した後に残留

第 38 表　熱残留磁気年代測定結果

遺 構 名	試料No.	偏角(° E)	伏角(°)	強度(x10⁻³ emu)	備　　考	統計処理項目	統計値
D区ＳＢ１０ (150 0e消磁)	1	-9.6	56.4	5.780		試料数 (n)	7
	2	-7.9	54.6	31.700	段階交流消磁		
	3	-6.5	56.6	0.803		平均偏角Ｉｍ(° E)	-6.01
	4	-3.5	56.7	0.412			
	5	-3.9	54.5	19.600		平均伏角Dm (°)	55.21
	6	-2.6	55.1	5.440			
	7	-22.4	-3.1	0.882	計算から除外	誤差角δD (°)	2.84
	8	-45.5	1.2	0.036	〃		
	9	-8.0	52.4	1.760		誤差角δＩ (°)	1.62
	１０	6.6	69.6	0.597	計算から除外		
	１１					信頼度計数 (k)	1392.18
	１２						
	１３					平均磁化強度 (x10⁻³ emu)	9.36
	１４						
D区ＳＢ２０竈A (150 0e消磁)	1	-3.5	52.9	2.660		試料数 (n)	7
	2	-6.6	53.3	5.360			
	3	-7.4	51.7	5.270	段階交流消磁	平均偏角Ｉｍ(° E)	-6.80
	4	-7.0	52.9	1.780			
	5	-12.1	53.1	1.130		平均伏角Dm (°)	53.18
	6	-4.8	54.9	0.375			
	7	-6.1	53.3	0.131		誤差角δD (°)	2.34
	8						
	9					誤差角δＩ (°)	1.40
	１０						
	１１					信頼度計数 (k)	1867.63
	１２						
	１３					平均磁化強度 (x10⁻³ emu)	2.39
	１４						
D区ＳＢ２０竈D (75 0e消磁)	1	-7.4	58.5	4.050		試料数 (n)	8
	2	-6.8	52.5	10.600			
	3	-8.4	54.3	11.600		平均偏角Ｉｍ(° E)	-5.46
	4	-6.6	46.2	3.640			
	5	-4.2	53.0	10.500	段階交流消磁	平均伏角Dm (°)	51.93
	6	-4.2	51.9	0.776			
	7	-4.3	50.7	5.690		誤差角δD (°)	4.39
	8	-2.4	48.2	6.310			
	9					誤差角δＩ (°)	2.71
	１０						
	１１					信頼度計数 (k)	419.54
	１２						
	１３					平均磁化強度 (x10⁻³ emu)	6.65
	１４						
D区ＳＢ２１竈E (東側) (75 0e消磁)	1	-9.6	53.1	2.140		試料数 (n)	8
	2	-7.2	53.1	13.700			
	3	-7.4	51.1	4.270		平均偏角Ｉｍ(° E)	-6.79
	4	-8.8	52.3	4.610			
	5	-5.5	51.9	5.230	段階交流消磁	平均伏角Dm (°)	52.20
	6	-1.6	52.8	7.730			
	7	-6.8	51.5	15.200		誤差角δD (°)	1.86
	8	-7.4	51.6	20.700			
	9					誤差角δＩ (°)	1.14
	１０						
	１１					信頼度計数 (k)	2355.69
	１２						
	１３					平均磁化強度 (x10⁻³ emu)	9.20
	１４						
D区ＳＢ２１竈W (西側) (75 0e消磁)	1	-2.7	51.4	15.200		試料数 (n)	9
	2	-4.8	53.1	17.600			
	3	-6.6	53.4	11.400	段階交流消磁	平均偏角Ｉｍ(° E)	-6.63
	4	-7.9	53.9	6.340			
	5	-3.8	56.9	3.440		平均伏角Dm (°)	53.79
	6	-8.7	53.7	3.470			
	7	-8.2	54.9	1.670		誤差角δD (°)	2.17
	8	-8.3	53.5	8.750			
	9	-8.7	53.1	7.810		誤差角δＩ (°)	1.28
	１０						
	１１					信頼度計数 (k)	1607.28
	１２						
	１３					平均磁化強度 (x10⁻³ emu)	8.41
	１４						
G区ＳＫ３５２ (150 0e消磁)	1	-6.9	56.1	1.690		試料数 (n)	11
	2	-8.4	56.6	2.310			
	3	-8.7	53.2	2.860		平均偏角Ｉｍ(° E)	-6.51
	4	-7.3	53.9	1.870			
	5	-5.3	55.4	2.880	段階交流消磁	平均伏角Dm (°)	55.12
	6	-3.3	57.6	3.210			
	7	-8.5	55.7	3.040		誤差角δD (°)	1.75
	8	-4.5	53.6	4.220			
	9	-6.3	56.1	2.250		誤差角δＩ (°)	1.00
	１０				破　損		
	１１	-7.0	54.7	2.850		信頼度計数 (k)	2081.22
	１２	-5.3	53.3	0.797			
	１３					平均磁化強度 (x10⁻³ emu)	2.54
	１４						

磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角（Di）、伏角（Ii）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（Dm、Im）を求めた。求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した6.78°Wを使用した。その結果は、Shibuya（1980）による地磁気変化曲線とともにプロットした（第576図）。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

第39表　考古地磁気による年代

遺構	考古地磁気による年代
99D SB10	A.D.615$^{+35}_{-25}$年、A.D.730±30年
99D SB20A	A.D.585±15年、A.D.765±25年
99D SB20D	A.D.565±35年、A.D.780$^{+40}_{-50}$年
99D SB21E	A.D.575±15年、A.D.780±20年
99D SB21W	A.D.590$^{+15}_{-20}$年、A.D.750±20年
99G SK352	A.D.610±20年、A.D.740±20年

（4）焼成年代値の推定

第1表に、各古窯の磁化測定および統計結果を示した。磁化方向は、平均偏角が－6.01～6.80°平均伏角が51.93～55.21°を示し、誤差は99DSB20竈D以外の焼土では非常に小さい。

第2図には、Shibuya（1980）による地磁気永年変化（破線）の一部曲線とともに各焼土の磁化方向を示した。いずれもA.D.500年～900年の標準曲線付近にプロットされる。

推定年代は、第2図において各焼土磁化方向の近傍に位置する標準曲線に移動して年代およびその誤差を算出した。各焼土の推定された焼成年代は第2表の通りである。なお、出土遺物あるいは層位から、推定年代の候補は、いずれも後者の年代が有力である。

引用文献

Fisher、R.A.（1953）Disparsion on a sphere.Proc.Roy.Soc.London、A、217、295-305.
広岡公夫（1977）考古学地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203.
Hyodo,M.,C.Itota and K.Yaskawa（1993）Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetization of wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan,J.Geomag.Geoelectr.,45,669-696
理科年表（1993）国立天文台編, 丸善,952p
Shibuya、H.（1980）Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000years by means of archaeomagnetism.大阪大学基礎工学部修士論文,54p

第 5 節　水入遺跡出土木材の樹種同定

佐々木由香・松葉礼子・植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）

(1) はじめに

愛知県豊田市渡刈町字下糟目及び大屋敷に所在する水入遺跡から出土した木材の同定を行った。遺跡は矢作川右岸、標高 23m の低位段丘上に立地している。樹種同定の対象は古墳時代中期中葉～後半（松河戸Ⅱ式～宇田Ⅰ式併行段階）の木製品および自然木と、中近世の木製品である。

古墳時代の木製品（以下未成品を含む）は、矢作川に面する高さ約 2.5m の崖(98C2SX01)と、崖に平行に掘削された全長約 230m、幅 5m、深さ 4m の大溝(99A ～ CSD01)から出土した。また、崖と大溝からは大量の松河戸Ⅱ式段階を主体とする土師器や祭祀関連遺物が出土し、祭祀的性格の強い特殊な場であったと考えられている（樋上ほか, 2000）。自然木（以下自然木？を含む）は大溝から出土した。中近世の木製品は溝、井戸、柱穴、土坑から出土した。

水入遺跡出土の木製品および自然木の樹種を同定したのち、製品ごとの樹種選択や、木製品と自然木の樹種構成の比較を行った。また水入遺跡で木製品が多く検出される古墳時代中期を中心に、周辺遺跡から出土した木材の樹種と花粉分析結果を基に本遺跡の特徴を検討した。なお、同定は松葉が、本文は佐々木・松葉・植田が担当した。

(2) 試料と方法

試料は合計 92 点で、自然木（自然木？ 4 点を含む）は古墳時代 35 点、木製品は古墳時代が 45 点と中近世が 12 点である。古墳時代の木製品は曲柄鍬や木錘、棒、板、杭などで、中近世の木製品は柱根が中心である。同定には、木製品から直接片刃剃刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の 3 方向作成した。これらの切片はガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定はこれらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して行った。主要な分類群を代表する標本については写真図版に示し、同定根拠は後述する。なお、同定に用いた標本はプレパラート番号を付し愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

(3) 結果

92 点を同定した結果、針葉樹 6 分類群、広葉樹 12 分類群が確認された（第 40 表）。古墳時代の製品についてはこの結果に、元興寺文化財研究所によって同定された 18 点（第 41 表）を加え、計 110 点について結果を述べる。

古墳時代では針葉樹 6 分類群、広葉樹 8 分類群の 98 点が確認された（第 42 表）。木製品では、63 点中ヒノキが最も多く 36 点を占めた。次に多い樹種はアカガシ亜属とクリの 7 点、モミ属の 4 点で、その他の樹種は 1 点か 2 点の検出数であった。

古墳時代の自然木（自然木？を含む）は、35 点中コナラ属コナラ節が 23 点を占めた。コナラ属クヌギ節が 4 点、その他の樹種は 1 点か 2 点の検出数であった。コナラ属コナラ節が大部分を占めており、製

第 40 表　樹種同定結果

登録番号	調査区	区	遺構	No.	ｸﾞﾘｯﾄ	層位	遺物No.	種別	器種	樹種	時期	同定者
-	99	A	SD	01	IG8 c		336	木製品	建築部材（板）	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10 t		466	木製品	鋤？未製品?	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10 t	杭 2	473	木製品	杭	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6e		350	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7 d		347	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5 f		348	木製品	角材？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG10a		286	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		330	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		329	木製品	角棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10t	Aﾄﾚﾝﾁ	2	木製品	板	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10t	Aﾄﾚﾝﾁ	(6)	自然木？	自然木？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01		Aﾄﾚﾝﾁ	(6)	自然木？	自然木？	モミ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01		Aﾄﾚﾝﾁ	(6)	自然木？	自然木？	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10 t	杭3	474	木製品	杭	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9 b		320	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		325	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF 7 c		343	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		331	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG 7 d		345	木製品	板	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01		杭4	475	木製品	杭	モミ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		335	木製品	角棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		334	木製品	角棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		333	木製品	角棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 c		322	木製品	杭	広葉樹	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 b		321	木製品	角材？	カヤ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5 f		357	木製品	建築部材（板）	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF0t	杭1	472	木製品	杭	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7c		340	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8c		328	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8 b		326	木製品	平棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7 d		366	木製品	板材	モミ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	北ベルト	6層	-	木製品	棒	モミ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7 c		337	木製品	平棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9b		320	木製品	建築部材（板）	モミ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
W16	98	B2	SD	01		下層	20	木製品	建築部材（板）	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	B2	SD	01	IF12s		114	木製品	建築部材（板）	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	B2	SD	01	IF14 q		113	木製品	棒	ヒノキ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	B2	SD	01	IF12r	下層ﾄﾚﾝﾁ	-	木製品	棒	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
W15	98	B2	SD	01			22	木製品	角材？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	B2	SD	01			26	木製品	角材？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	C	SD	01	XH11b		37(上)	木製品	農耕具の柄？	クリ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	C	SD	01	XH11b		37(下)	木製品	農耕具の柄？	クリ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	C	SD	01		深堀		木製品	角材？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	C	SD	01(4)	XH11b	(4)		木製品	自然木？	コナラ属クヌギ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	C2	SX	01	IH7a	下層	3	木製品	杭	クリ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	C2	SX	01	IH7a	下層	4	木製品	杭	散孔材	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	C2	SX	01	IH7a	下層	2	木製品	杭	クリ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	C2	SX	01	IH6a	下層	1	木製品	杭	カエデ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	98	C2	SX	01	IH7a	下層	1	木製品	杭	針葉樹	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	B	SD	03	IG4 p		2	木製品	漆小片	ヒノキ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	257No.1	XG20s			木製品	柱根	クリ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	383No.1	XG20t		5	木製品	柱根	ヤナギ属	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	SK	42No.2	IG1P			木製品	柱根	ナシ亜科	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	322No.1	XG20t			木製品	柱根	コナラ属コナラ節	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	2291No.1	IG5m			木製品	柱根	クリ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	1617No.1	IG5m			木製品	柱根	クリ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	A	P	1172No.1	IG5k			木製品	柱根	クリ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	1427No.1	IG5l			木製品	柱根	ケヤキ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	P	2172No.1	IG5m			木製品	柱根	クリ	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	B	SK	5001	IG3m		6	木製品	板状	アカガシ亜属	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	A	SE	02	IG3d		20	編組製品	竹？編み物	タケ亜科	中世～近世（17世紀）	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10t		292	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10t		293	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10t		294	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10t		295	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IF10a		296	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9a		297	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9a		298-1	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9a		298-2	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9a		298-3	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9a		298-4	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG9a		299	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8b		359	自然木	自然木	コナラ属クヌギ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG8b		360	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7c		361	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7c		362	自然木	自然木	コナラ属クヌギ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7c		363	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG7c		364	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6d		369	自然木	自然木	アカマツ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6d		370	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6d		371	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6d		372	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6e		373	自然木	自然木	コナラ属クヌギ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5e		374	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5f		375	自然木	自然木	モミ属	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5f		376	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5f		377	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5f		378	自然木	自然木	アカマツ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5f		379	自然木	自然木	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG6d		405	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5e		406	自然木	自然木	コナラ属コナラ節	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
-	99	A	SD	01	IG5f		407	自然木	自然木	ハリギリ	古墳時代中期中葉～後半	パレオ・ラボ
											計92点	

第 41 表　樹種同定結果（元興寺文化財研究所実施分）

登録番号	調査区	区	遺構	No.	ｸﾞﾘｯﾄ	層位	遺物No.	種別	器種	樹種	時期	同定者
W28	98	C2	SX	01	IG7s	上層	373	木製品	矢板？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W30	98	C2	SX	01	IG7s	上層	375	木製品	木樋？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W24	98	C2	SX	01		中層	169	木製品	建築部材？	クリ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W25	98	C2	SX	01		草本砂層	70	木製品	円柱	マキ科？	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W31	98	B2	SD	01	IF13g		93	木製品	祭祀具？	カヤ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W14	98	B2	SD	01	IF14p		111	木製品	建築部材	針葉樹	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W1	98	B2	SD	01	IF13r		52	木製品	鍬未製品	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W29	98	C2	SX	01	IG7s	崖	257	木製品	木樋？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W23	98	C2	SX	01		中層	241	木製品	扉または楯の取手	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W9	98	C	SX	01		表土除去中		木製品	横槌	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W12	98	B2	SD	01	IF12r		16	木製品	木錘	クリ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W13	98	C2	SX	01	IH1g	上層(6)		木製品	木錘	クリ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W7	98	B2	SD	01			44-A	木製品	農耕具の柄	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W5	98	B2	SD	01			44-B	木製品	農耕具の柄	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W2	98	C2	SX	01		中層	75	木製品	曲柄鍬	アカガシ亜属	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W34	98	C2	SX	01		中層	73	木製品	箱(の一部)	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W27	98	C2	SX	01		中層	74	木製品	ねずみ返し？	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
W33	98	C2	SX	01	IH2e	中層	66	木製品	盤	ヒノキ	古墳時代中期中葉～後半	元興寺文化財研究所
											計18点	

品と自然木では樹種に異なる傾向が見られた。

中近世と考えられる木製品は、柱に利用されていた9点中クリが最も多く5点を占め、その他はヤナギ属を除けばコナラ属コナラ節、ケヤキ、ナシ亜科などの硬い広葉樹が用いられていた。一般的に中世になると柱材の樹種は多様化し、針葉樹も広葉樹もさまざまな樹種が利用される傾向があり、水入遺跡でも同様な傾向が見られた。

他に漆製品の小片にはヒノキ、板状製品にはアカガシ亜属が確認された。また編組製品 1 点はタケ亜科であった（第 40 表）。

第 42 表　時期別樹種

時期	古墳時代中期中葉～後半			中近世		計
分類群	木製品	自然木？	自然木	木製品	編組製品	
アカマツ			2			2
ヒノキ	36	1	1	1		39
ヒノキ属	1					1
モミ属	4	1	1			6
カヤ	2					2
マキ科？	1					1
針葉樹	2					2
クリ	7			5		12
アカガシ亜属	7	1		1		9
カエデ属	1					1
広葉樹	1					1
散孔材	1					1
コナラ属コナラ節			23	1		24
コナラ属クヌギ節		1	3			4
ハリギリ			1			1
ヤナギ属				1		1
ケヤキ				1		1
ナシ亜科				1		1
タケ亜科					1	1
合計	63	4	31	11	1	110
時期別合計	98			12		

同定根拠

(1) カヤ　*Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc.　イチイ科　写真図版 1a ～ 1c : SD-1 IG8b No.321 角材？

軸方向・放射方向両細胞間道をもたない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は緩やかであるが、成長輪界は明瞭である。樹脂細胞は持たない。仮道管に顕著な螺旋肥厚がある。放射組織はすべて放射柔細胞からなり、単列である。分野壁孔はヒノキ型が 1 分野あたり 2 個前後ある。

(2) モミ属　*Abies*　マツ科　写真図版 2a ～ 2c:SD-1 IG7d N0.366 板材

軸方向・放射方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材の移行は緩やかで、成長輪界は明瞭である。晩材部の量は多い。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。その軸方向壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1 分野に 1 ～ 4 個程度ある。

(3) アカマツ　*Pinus Denshiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科　　写真図版 3a ～ 3c: SD-1 IG6d No.369 自然木

軸方向・放射方向両細胞間道を共に持つ針葉樹材。細胞間道の周囲にはエピセリウム細胞がある。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管と放射細胞間道からなり、単列と紡錘形がある。放射仮道管は放射組織の上下端に位置し、その放射方向壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1 分野に 1 ～ 2 個ある。

(4) ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　写真図版 4a ～ 4c: SD-1 IF10t No.(6) 自然木?

軸方向・放射方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭。晩材部の量は少ない。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、その放射方向壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり単列である。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で 1 分野に 2 個程度ある。

(5) ヤナギ属　*Salix*　　ヤナギ科　　写真図版 5a ～ 5c:P383 No.1 XG20t 柱根

小型で丸い道管が単独あるいは 2 ～ 3 個放射方向に複合して密に散在する散孔材。道管の直径は徐々に減少する。道管は単穿孔板をもつ。軸方向柔組織は散在している。放射組織は単列で平伏細胞と 1 細胞高の直立細胞からなる縁辺部から構成されている。道管放射組織間壁孔は壁孔縁が狭く密であるため蜂の巣状に見えるが、腐朽のため明瞭ではない。

(6) コナラ属クヌギ節 *Quercus Sect. Aegilops*　ブナ科　写真図版 6a ～ 6c: SD-1(4) XH11b 自然木？

成長輪の始めに大型で丸い道管が1列に並ぶ環孔材。晩材部では径を減じた厚壁の道管が単独で放射方向に配列する。単穿孔板を持つ。放射組織は平伏細胞のみから構成され、大きさには明らかに 2 階級あり単列と 10 細胞幅前後に達する背の高い大型のものからなる。軸方向柔組織は晩材部で 3 細胞幅以下の帯状に分布する。

(7) コナラ属コナラ節 *Quercus Sect. Prinus*　　ブナ科　写真図版 7a ～ 7c: P322 No.1 XG20t 柱根

成長輪の始めに大型で丸い道管が1列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が火炎状に散在する。放射組織はすべて平伏細胞であるが、大きさは明らかに 2 階級あり単列と 10 列前後に達する大型のものから構成される。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状～柵状。軸方向柔組織は晩材部で 3 細胞幅以下の帯状に分布する。

(8) アカガシ亜属　*Quercus Subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　写真図版 8a ～ 8c :SD01 IF10t (6) 自然木?

中型で厚壁の丸い道管が単独で放射方向に配列する放射孔材。道管径は晩材部にむかって多少減少する。道管は単穿孔板をもつ。放射組織は平伏細胞のみから構成され、大きさには明らかに 2 階級あり、単列と 8 細胞幅前後に達する大型のものからなる。道管放射組織間壁孔は柵状。軸方向柔組織は晩材部で 3 細胞幅以下の帯状に分布する。

(9) クリ　*Castanea creneta* Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真図版 9a ～ 9c: P2172 No.1 IG5m 柱根

成長輪の始めに大型の丸い道管が 1 列に並ぶ環孔材。晩材部では徐々に径を減じた薄壁の角張った道管が火炎状に配列する。道管は単穿孔板を持つ。木部柔組織は晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列で平伏細胞のみからなる。

(10) ケヤキ *Zelkova serrata (Thunb.) Makino*　ニレ科 写真図版 10a ～ 10c: P1427 No.1 IG5l 柱根

成長輪の始めに大型で丸い道管が1列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた薄壁の多角形の道管が多数集合して接線方向に配列する。道管は単穿孔板を持ち、小道管内部には螺旋肥厚がある。放射組織は1～8列程度で平伏細胞と1細胞高の方形細胞からなる縁辺部から構成されている。時に縁辺部の方形細胞に結晶が含まれていることがある。

(11) ナシ亜科　*Subfam. Maloideae*　バラ科　　写真図版 11a ～ 11c: SK42 No.2 IG1P 柱根

小型で丸い道管がほぼ単独で散在する散孔材。道管の直径は成長輪界付近で減少する。道管は単穿孔板を持つ。軸方向柔組織は独立散在状である。放射組織は1～3列で平伏細胞のみからなる。

(12) カエデ属 *Acer*　　カエデ科　写真図版 12a ～ 12c:SX01 IH6a No.1 杭

小～中型の丸い道管が単独もしくは複合して成長輪内に均一に散在する散孔材。道管の直径はあまり変化しない。道管は単穿孔板をもち、内壁には微細な螺旋肥厚を持つが見えない。放射組織は1～6列で平伏細胞のみからなる。

(13) ハリギリ *Kalopanax pictus (Thunb.) Nakai*　ウコギ科　写真図版 13a ～ 13c: SD01 IG5f No.407 自然木

大型で丸い道管が成長輪に沿って1列に並び、小型で薄壁の道管が斜め接線状に配列する環孔材。道管は単穿孔板を持つ。放射組織は1～6列で多列部の平伏細胞と1細胞高の方形細胞からなる縁辺部から構成されている。道管放射組織間壁孔は大型の円形である。

(14) タケ亜科　*Subfam. Bambusoideae*　　イネ科　　写真図版 14a:SE02 IG3d No.20 竹？編み物

原生木部の小道管の左右外方に大型の道管が一対あり、その外側には師部がある。それら全体を厚壁の繊維からなる維管束鞘が取り囲んでいる。そのような維管束が、柔組織中に散在し不斉中心柱を為している。

(4) 考察

古墳時代の木製品と樹種の対応関係　製品と樹種の対応関係を第43表に示す。また木製品に使用された樹種の割合を第577図に示す。

製品の約6割はヒノキ・ヒノキ属が占めた。ヒノキ・ヒノキ属以外のモミ属などの針葉樹を含めると、

第43表　製品と樹種の対応関係

器種	農具・工具							容器		祭祀具	建築材・土木用材								その他			自然木		
樹種	曲柄鍬	鍬未製品	鋤？未製品？	柄	柄？	木錘	横槌	箱	盤	祭祀具？	建築部材	建築部材？	円柱	ねずみ返し？	扉もしくは桶把手	木樋？	矢板？	杭	角材？	角棒・平棒・棒	板・板材	自然木？	自然木	合計
アカマツ																							2	2
マキ科？													1											1
モミ属											1							1		1	1	1	1	6
ヒノキ							1	1	1		4			1	1	2	1	3	4	17		1	1	38
ヒノキ属																				1				1
カヤ										1									1					2
針葉樹											1							1						2
クリ					2	2						1						2						7
コナラ属コナラ節																							23	23
コナラ属クヌギ節																						1	3	4
アカガシ亜属	1	1	1	2																	2	1		8
カエデ属																		1						1
ハリギリ																							1	1
広葉樹																		1						1
散孔材																		1						1
合計	1	1	1	2	2	2	1	1	1	1	6	1	1	1	1	2	1	10	5	19	3	4	31	98

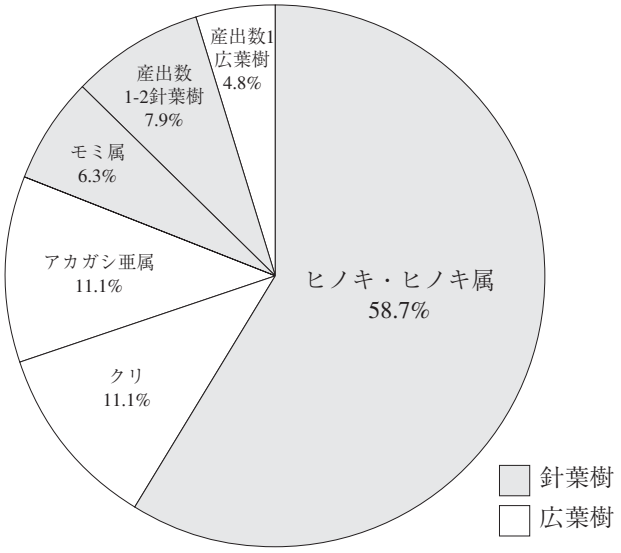
針葉樹は全体の7割強を占めた。ヒノキを中心とする針葉樹は、主に角棒、平棒などの棒類に使用され、他には角材や建築部材、杭などの建築材・土木用材、容器（盤や箱の一部）、横槌に使用されていた。それに対して広葉樹は、鍬や柄などの農耕具や板・板材、杭などに使用されており、杭や板以外は　針葉樹製と広葉樹製の用途に差異がみられた。

農耕具である曲柄鍬、曲柄鍬未成品、鋤？の未成品？、柄にはアカガシ亜属が利用されていた。曲柄多又鍬や鋤？、柄にアカガシ亜属が利用されることは、同時期の他遺跡の例と共通する。曲柄鍬は刃部の幅が広いことから、薄く幅広の柾目材を利用しても強度が高いアカガシ亜属が選択利用されたと考えられる。

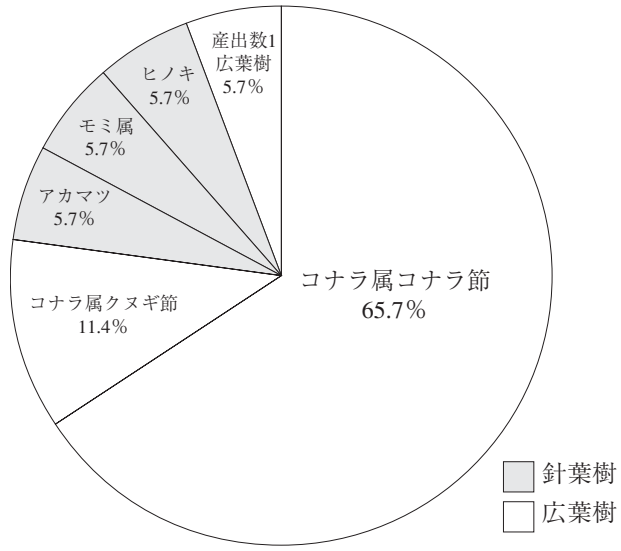
木錘にはクリが使用されていた。クリは加工性が良く、耐朽性が高い樹種である。また横槌には比較的軽いヒノキが使用されていた。これら器種の樹種は愛知県内では

第44表　樹種別点数

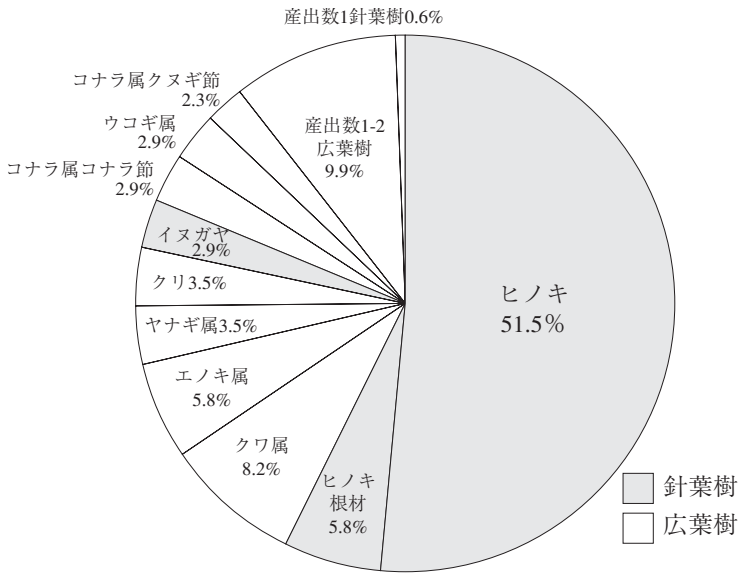
樹種	点数
イヌガヤ	5
ヒノキ	88
ヒノキ　根材	10
ヤナギ属	6
オニグルミ	1
コナラ属コナラ節	5
コナラ属クヌギ節	4
クリ	6
ケヤキ	2
エノキ属	10
ムクノキ	2
クワ属	14
カツラ	2
サクラ属	2
サクラ属　根材	1
カマツカ	2
アカメガシワ	1
カエデ属	1
トチノキ	1
ウコギ属	5
その他	3
合計	171



第577図　木製品の樹種組成(n=63)



第578図　自然木・自然木？の樹種組成(n=35)



第579図　本川遺跡自然木の樹種組成(n=35)

遺跡ごとに異なる傾向がある（樋上, 2002）。特定の樹種が用いられたというよりも、入手しやすく、ある程度強度のある樹種が利用されたことが考えられる。

容器（盤・箱の一部）にはヒノキが使用されていた。方形刳物容器や指物にはヒノキが多く、特に古墳時代以降になるとヒノキ属の使用が指摘されている（樋上, 2002）ことと一致する。

遺構は祭祀的な性格が推定されているが、木製品の主体は日常生活の道具であり、農耕具や容器の樹種は他の集落遺跡内出土の製品と類似していた。

古墳時代の自然木の樹種と周辺植生の対応関係　自然木の樹種はコナラ属コナラ節が最も多く65％を占め、次いでクヌギ節が多く、両樹種あわせて約8割弱を占めた。針葉樹はアカマツ、モミ属、ヒノキあわせて2割弱であり、木製品に利用された針葉樹中心の樹種構成と差異がみられた（第578図）。広葉樹は遺跡周辺の潜在植生に多いと考えられる常緑広葉樹は少なく、落葉広葉樹が主体であった。出土点数の多いコナラ属コナラ節やクヌギ節は2次林を構成する樹種であるため、遺跡付近に何らかの2次林があることが想定される。検出数は少ないが、アカマツも2次林を構成する樹種であることから、遺跡周辺は人間活動の影響を受けた植生が広がっていた可能性がある。

水入遺跡に近接する川原遺跡で、古墳時代中期に相当する深堀トレンチの層や溝（SD08）の花粉分析が行われ、コナラ節とクヌギ節に対応するコナラ亜属が多い結果が得られており、自然木にコナラ節やクヌギ節が多い傾向は、当時の植生を反映した結果と考えられる(鬼頭ほか, 2001b)。

古墳時代における矢作川中流域の周辺遺跡との比較　水入遺跡の位置する矢作川中流域右岸には、直径約3km圏内に古墳時代の遺跡がまとまって分布しており、上流から水入遺跡、天神前遺跡、郷上遺跡、川原遺跡、本川遺跡がある。

このうち、古墳時代に相当する花粉分析の結果は天神前遺跡（鬼頭ほか, 2001a）、郷上遺跡（鬼頭ほか, 2002）、川原遺跡（鬼頭ほか, 2001b）、本川遺跡（鬼頭ほか, 2003）から得られている。また、古墳時代中期の樹種同定は、本川遺跡（植田, 2003）と川原遺跡（樋上, 2001）で実施されている。

本川遺跡は碧海台地の段丘崖から南へのびる低い尾根上の微高地に立地し、古墳時代中期（5世紀前葉～中葉）の時期に、竪穴住居約100棟が重複して構築された集落遺跡である。川原遺跡は古墳時代中期の時期に、墳墓を中心として竪穴住居・掘立柱建物・溝などが配置された墓域の様相が確認された遺跡である。これら遺跡に対し、水入遺跡はやや時期が新しく中期中葉～後半を主体とした遺跡で、検出遺構は竪穴住居や掘立柱建物が数棟あるのみで、大溝や崖への遺物の大量投棄から祭祀的性格の強い特殊な場と推定されており（樋上ほか, 2000）、3遺跡共に遺跡の性格が異なっている。

本川遺跡では松河戸Ⅰ式併行段階で、木製品91点と自然木（自然木には低加工の板・棒状具なども含む）171点が樹種同定された。木製品は建築・土木用材が約6割、板が約2割、棒が約1割弱、その他が約1割を占めている（樋上, 2003）。木製品の樹種には、針葉樹11分類群58点（63％）と広葉樹9分類群33点（36％）、自然木には針葉樹3分類群104点（61％）と広葉樹17分類群67点（39％）が検出された（植田, 2003）。木製品・自然木共に針葉樹、特にヒノキが最も多く、自然木にはヒノキの根材10点も含まれていた。自然木の組成は、ヒノキが根材をあわせると約6割弱を占め、ヒノキの少ない水入遺

跡と異なっていた。ただし広葉樹に落葉広葉樹が多い点は水入遺跡と共通する（第 579 図）。

川原遺跡では松河戸Ⅰ式新段階から松河戸Ⅱ式古段階併行期の窪地（NR01）から筑状弦楽器と作業台が出土しているが、いずれもスギ製であった（樋上 , 2001）。

以上のように、樹種同定が行われた遺跡数は多くはないが、当地域の古墳時代中期の木製品には、鍬鋤などの特定の樹種選択がなされた製品以外は、ヒノキを中心とした針葉樹を利用する割合が高いという傾向がみられる。また本川遺跡では自然木においてもヒノキなどの針葉樹の占める割合が高い。

水入遺跡の自然木のヒノキは、2 点の出土であったことから、組成のみに着目すると木製品の樹種は周辺の植生を直接反映していないことが考えられる。水入遺跡では花粉分析は行われていないが、古墳時代中期にあたる川原遺跡の溝（SD08）の花粉分析では、溝が使用されている期間は、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科の花粉量に比べて 2 次林要素の強いマツ属の花粉が多産するが、溝が使用されなくなるとマツ属がやや減少しイチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科の花粉が増加する傾向がみられた（鬼頭ほか , 2001）。これを人間関与の度合いに即して考えると、植生への人間関与が高くなるとイチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科が伐採され少なくなり、人間関与が低くなると次第に潜在植生へ戻り、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科の割合が高くなったと読みとれる。樹木ごとの花粉生産量や花粉の飛来距離、堆積物の来歴の問題もあるが、遺構の使用時期と連動したこの花粉分析の結果は、川原遺跡周辺の植生を反映した結果と捉えることができる。水入遺跡の自然木にはコナラ節やクヌギ節、アカマツが検出され遺跡周辺にこれらの 2 次林的な植生が広がっていたと推定できることから、ヒノキの一部は人間によって伐採等が行われたために、遺構構築後の遺構内に自然木として混入する範囲にはほとんど生育していなかった可能性が考えられる。ただし、遺構構築後の水入遺跡周辺のヒノキの資源量については、水入遺跡の自然木の同定点数が 35 点と少ないこともあり、可能性を示唆するに留めたい。

しかし、少なくとも水入遺跡の大溝掘削前もしくは掘削時には、遺跡周辺にヒノキが生育していた可能性が、水入遺跡の大溝の掘削期にあたる本川遺跡で検出されたヒノキが優占する自然木の組成から推定できる。ヒノキの生育地は、現在の植生と地形からみると矢作川右岸の岡崎市に位置する比較的高い山地が想定されよう。しかし、本川遺跡の自然木にはヒノキが最も多く根材が出土したことを考慮すると、水入遺跡周辺にも遺構構築前あるいは構築時にはヒノキが生育していたことが推察される。ヒノキは現在の低地部にはほとんどみられないが、過去においては沖積低地でもヒノキが生育していたことが樹種同定や花粉分析結果から明らかとなっている。たとえば、日本海側では福井県三方町の江端遺跡の縄文時代後晩期頃において低地の縁辺部よりスギ、クロベ（ヒノキ科）、ヒノキ属などの幹・枝材のほかに根材も出土しており、この低地縁辺部ではスギやヒノキ科も主要素に加わった森林が復元されている（辻ほか ,1995）。こうしたことから水入遺跡周辺の低地部（微高地を含む）にもヒノキが生育していたことが十分予想され、遺跡周辺の木材資源を利用して木製品が製作されたことが想定される。

アカガシ亜属の製品の原材と周辺植生との関係　水入遺跡からは 1 点ずつの出土であるが、アカガシ亜属の曲柄鍬の製品および未成品が出土した。このほか、アカガシ亜属は鋤？未成品？に 1 点、柄に 2 点、板・板材に 2 点、自然木?に 1 点検出された。曲柄鍬の製品および未成品は、近接する川原遺跡でも川原上層Ⅲ式併行段階で出土したが、樹種はコナラ節である。川原遺跡では、川原上層Ⅰ・Ⅱ式段階と比較

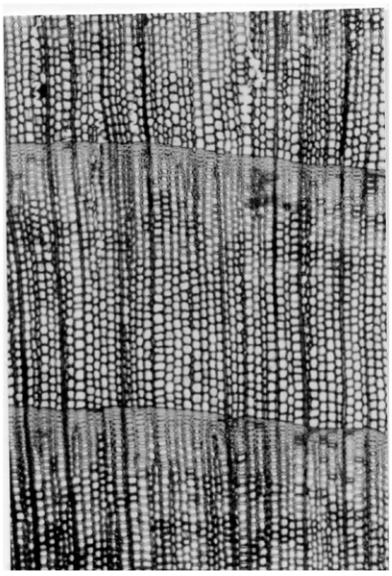
してこの時期にアカガシ亜属製の曲柄鍬が利用されなくなった要因に、アカガシ亜属が伐採されて減少したため、代用材としてコナラ節が用いられた可能性が指摘されている（樋上, 2001）。同遺跡の花粉分析の結果では（たとえば97BCD区西壁P-1）、次の松河戸Ⅱ式併行段階になると、アカガシ亜属はコナラ亜属と並んで多産している（鬼頭ほか, 2001）。水入遺跡出土の樹種からみるとアカガシ亜属の検出点数は全体的にみると少ないが、松河戸Ⅱ式併行段階では水入遺跡周辺を含めた当地域にはアカガシ亜属が普通に生育し、周辺からアカガシ亜属の原材を入手可能であったと考えられる。ただし、花粉分析の結果からは樹木の形態、たとえば曲柄鍬を製作可能な径をもつ木が生育していたかは不明である。

(5) おわりに

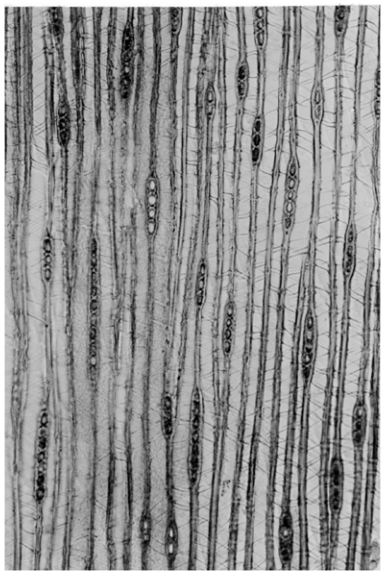
水入遺跡で確認された古墳時代中期中葉～後半80点の木製品・自然木、中近世12点の木製品に関して樹種同定を行った。また、古墳時代中期の木製品に関してはすでに同定済みの製品をあわせて110点に関して樹種からみた検討を行った。その結果、古墳時代中期では木製品にはヒノキを中心とした針葉樹利用の割合が高く、自然木にはコナラ節を主体とした落葉樹の割合が高い様相がみられ、木製品と自然木の組成とは一致しなかった。しかし、遺構掘削時期にあたる周辺遺跡の自然木の樹種同定結果や花粉分析等で得られた植生の情報から、当遺跡の木製品は遺跡周辺の近場で入手可能な樹種を用いて自給自足的な木製品生産がされていた可能性を示した。また、遺構構築後には、水入遺跡周辺では人為的関与の高い植生が広がっていたことが推察された。

引用文献

樋上　昇・永井邦仁・木川正夫．2000．豊田地区の木製品について．愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第1号，19-28．
樋上　昇．2001．川原遺跡出土の木製品群について．「川原遺跡第一分冊」（愛知県埋蔵文化財センター編）．財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，100-112．
樋上　昇．2002．樹種からみた尾張地域の木製品．考古学フォーラム15，2-28．考古学フォーラム．
樋上　昇．2003．出土木製品からみた本川遺跡．「本川遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター編）財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，132-160．
鬼頭　剛・小野映介・尾崎和美．2001a．矢作川沖積低地，天神前遺跡地域の層序と古環境．「天神前遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター編）．財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，41-46．
鬼頭　剛・尾崎和美・小野映介．2001b．矢作川沖積低地北部，川原遺跡における古環境の復元．「川原遺跡第三分冊」（愛知県埋蔵文化財センター編）．財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，1-16．
鬼頭　剛・堀木真美子・上田恭子．2002．矢作川沖積低地北部，郷上遺跡における古環境解析．「郷上遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター編）．財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，333-338．
鬼頭　剛・堀木真美子・上田恭子．2003．矢作川沖積低地北部，本川遺跡における古環境変遷．「本川遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター編）．財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，50-62．
辻誠一郎・植田弥生・木村勝彦．1995．福井県三方低地帯南部における完新世湿地林の復元と古生態．植生史研究3-2：61-70．
植田弥生．2003．本川遺跡出土木製品の樹種同定結果．「本川遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター編）財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター，104-117．



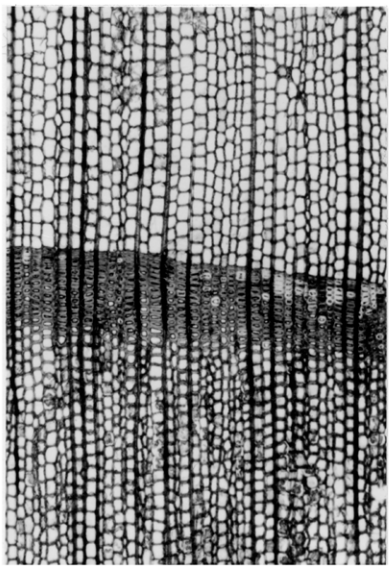
1a カヤ　SD-1 IG8b No.321 角材？



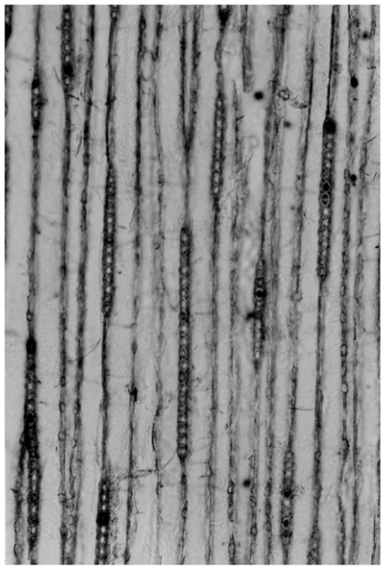
1b　同



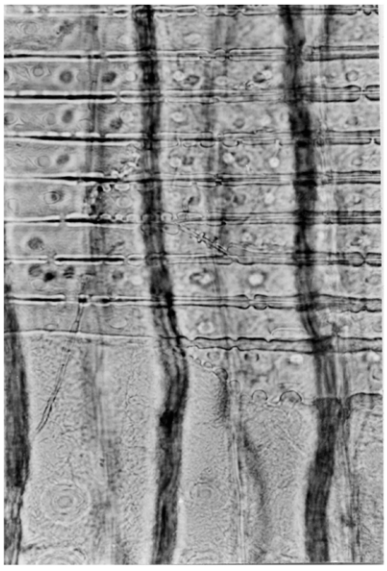
1c　同



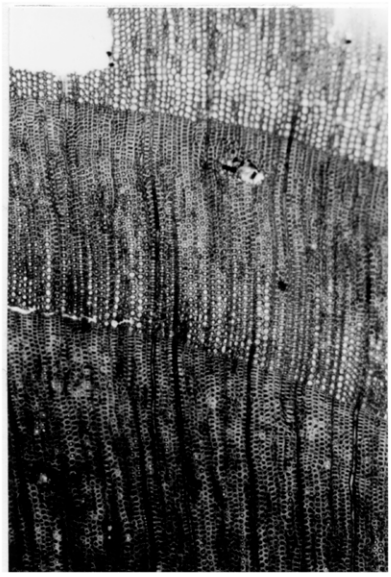
2a モミ属　SD-1 IG7d NO.366 板材



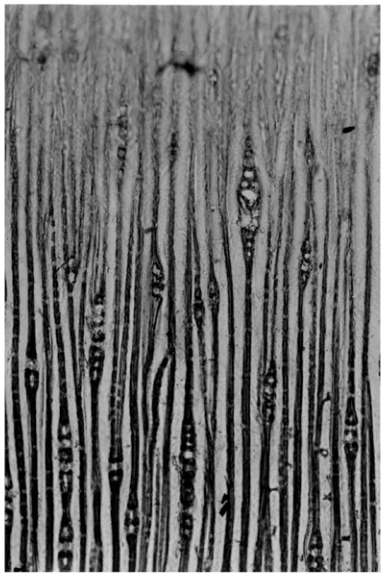
2b　同



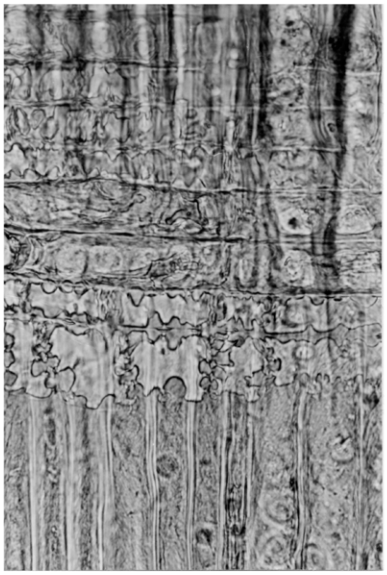
2c　同



3a アカマツ　SD-1 IG6d No.369 自然木



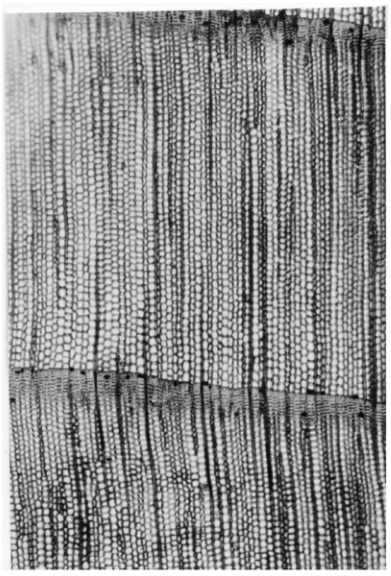
3b　同



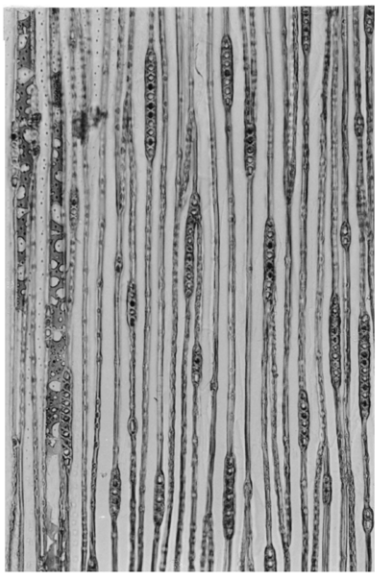
3c　同

1-3a（横断面）bar:1 mm、1-3b（接線断面）bar:0.4 mm、1-3c（放射断面）bar:0.1 mm

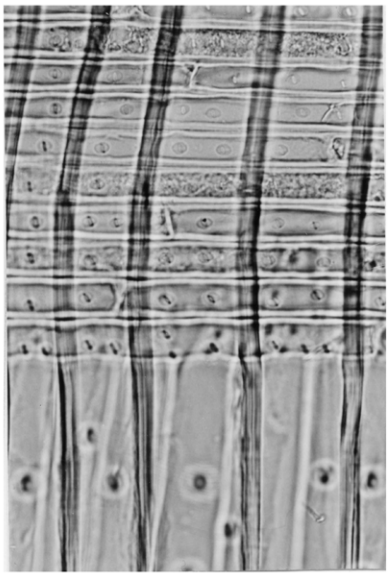
写真図版 1　水入遺跡出土木材組織光学顕微鏡写真



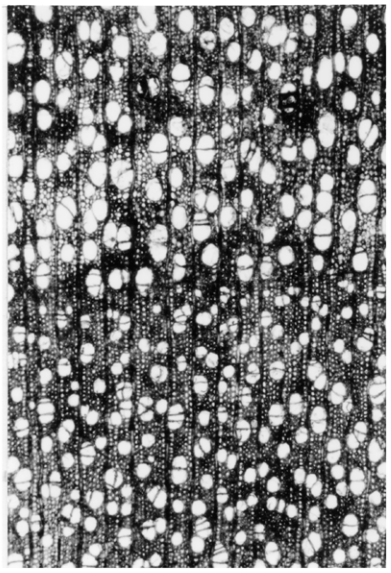
4a ヒノキ　SD-1 IF10t No.(6) 自然木？



4b　同



4c　同



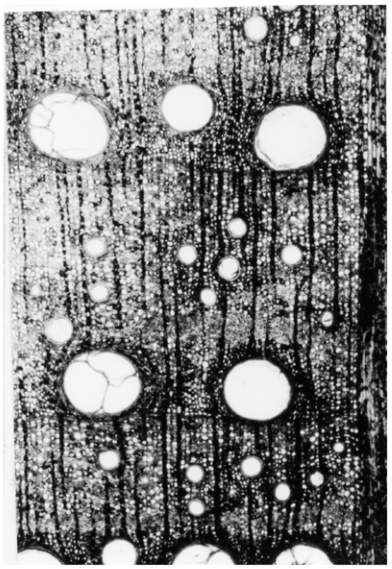
5a ヤナギ属　P383 No.1 XG20t 柱根



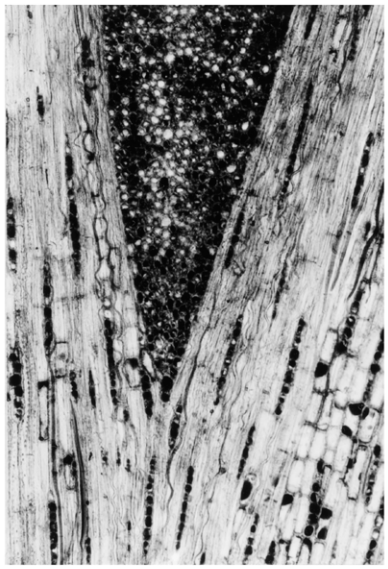
5b　同



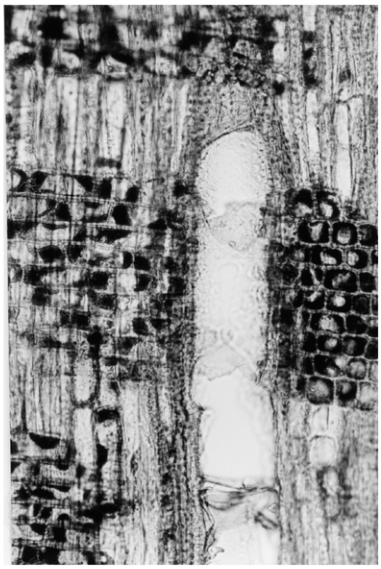
5c　同



6a コナラ属クヌギ節　SD-1(4) XH11b 自然木？



6b　同



6c　同

4a（横断面）bar:1 mm、4b（接線断面）bar:0.4 mm、5c 放射断面）bar:0.1 mm
5-6a（横断面）bar:1 mm、5-6b（接線断面）bar:0.4 mm、5-6c（放射断面）bar:0.2 mm

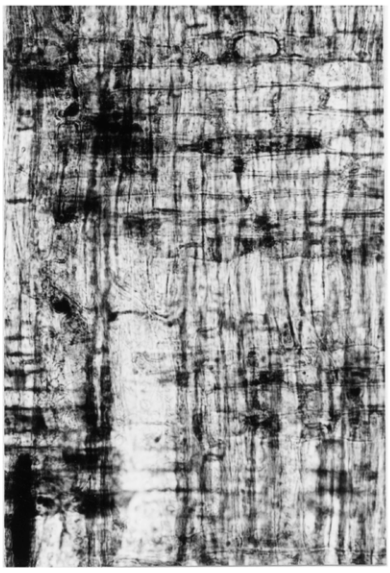
写真図版 2　水入遺跡出土木材組織光学顕微鏡写真



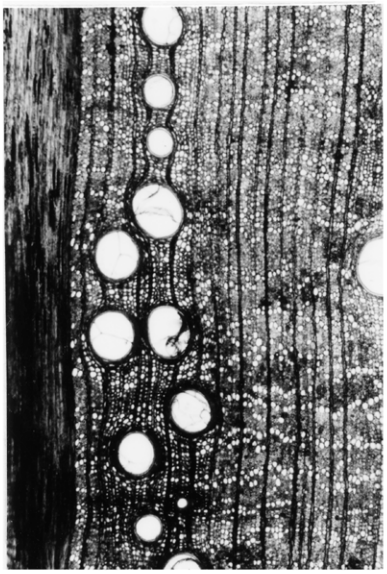
7a コナラ属コナラ節　P322 No.1 XG20t 柱根



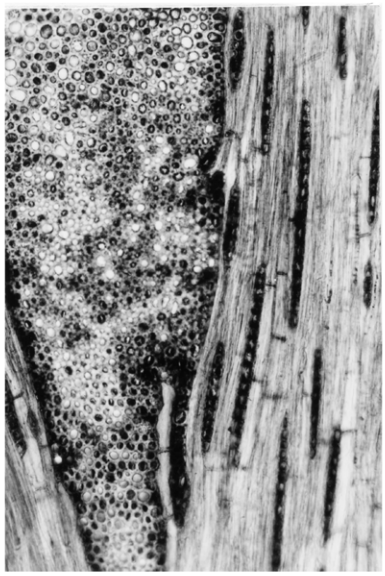
7b　同



7c　同



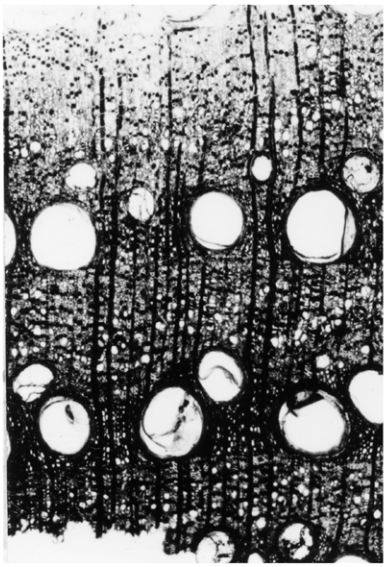
8a アカガシ亜属　SD-1 IF10t No.(6) 自然木？



8b　同



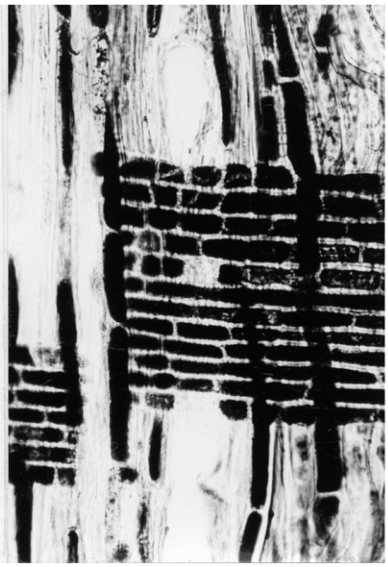
8c　同



9a クリ　P2172 No.1 IG5m 柱根



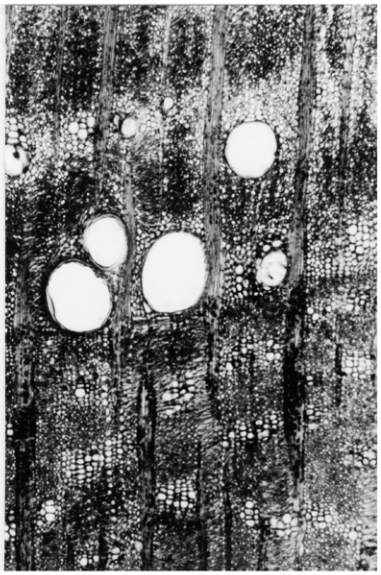
9b　同



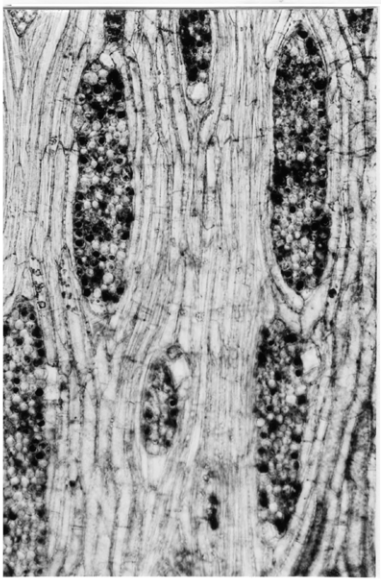
9c　同

7-9a（横断面）bar:1 mm、7-9b（接線断面）bar:0.4 mm、7-9c（放射断面）bar:0.2 mm

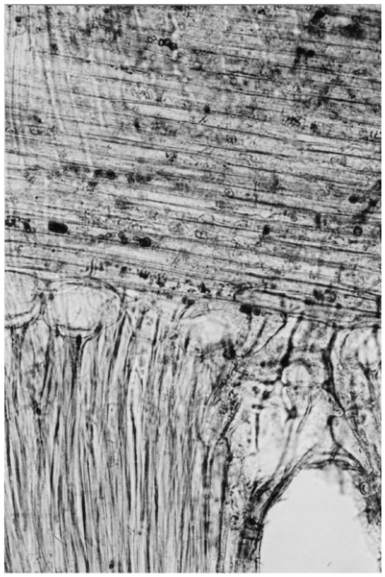
写真図版 3　水入遺跡出土木材組織光学顕微鏡写真



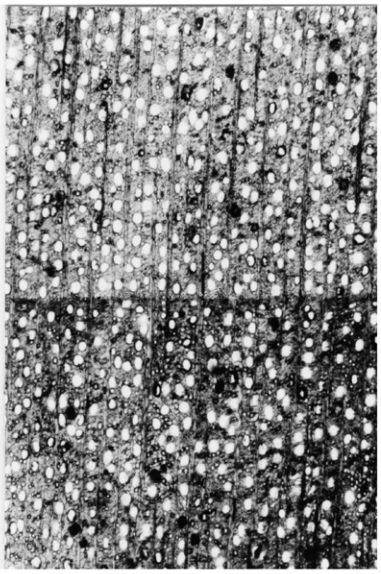
10a ケヤキ　P1427 No.1 IG5I 柱根



10b　同



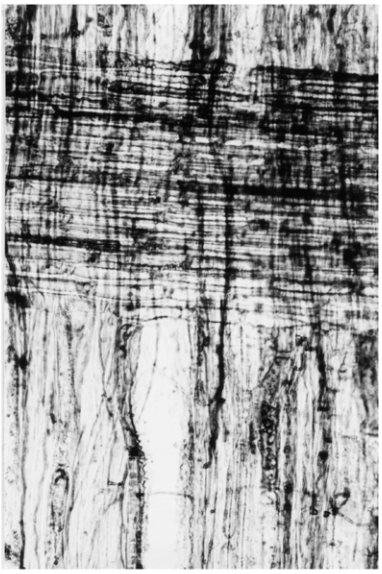
10c　同



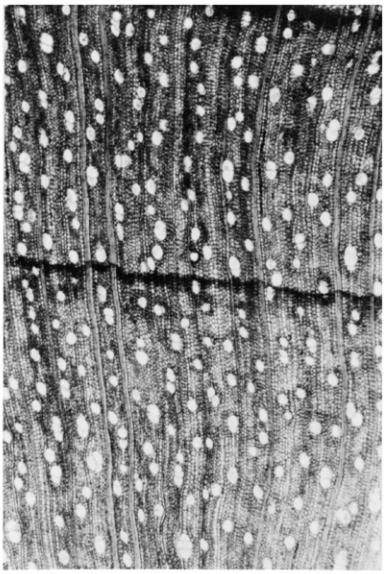
11a ナシ亜科　SK-42 No.2 IG1P 柱根



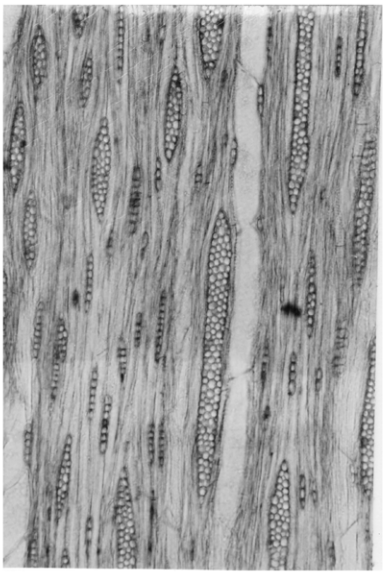
11b　同



11c　同



12a カエデ属　SX-1 IH6a No.1 杭



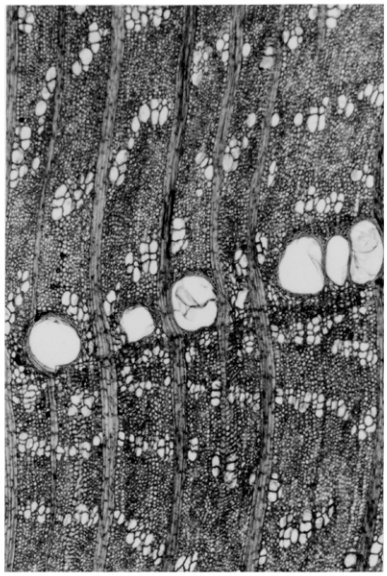
12b　同



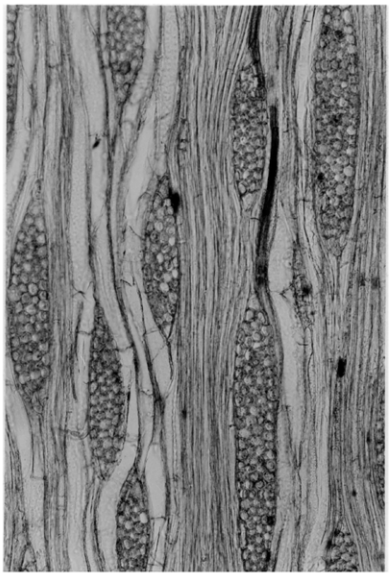
12c　同

10-12a（横断面）bar:1 mm、10-12b（接線断面）bar:0.4 mm、10-12c（放射断面）bar:0.2 mm

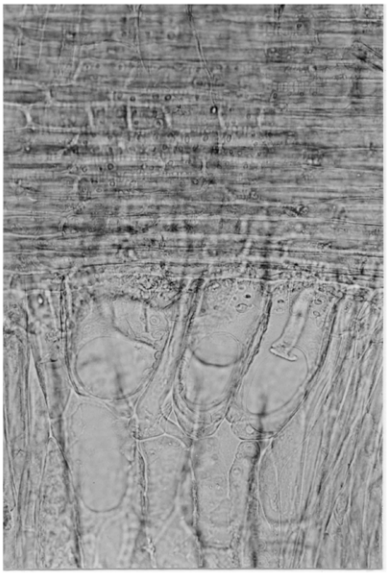
写真図版 4　水入遺跡出土木材組織光学顕微鏡写真



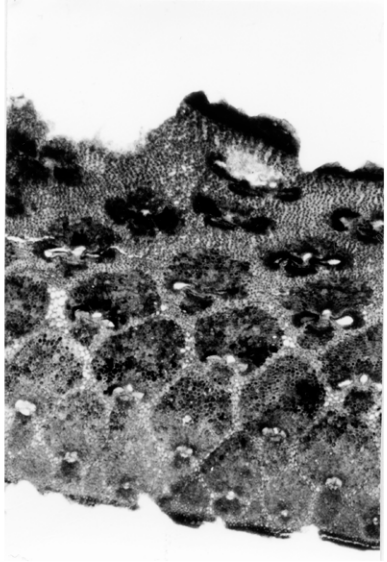
13a ハリギリ　SD-1 IG3f No.407 自然木



13b　同



13c　同



14a タケ亜科　SE-2 IG3d No.20 竹？編み物

13-14a（横断面）bar:1 mm、13b （接線断面）bar:0.4 mm、13c （放射断面）bar:0.2 mm

写真図版 5　水入遺跡出土木材組織光学顕微鏡写真

第 6 節　矢作川流域古代遺跡出土の土師器甕の胎土分析

藤根　久・今村美智子（株式会社パレオ・ラボ）

(1) 分析の目的と試料の抽出

分析の目的　本節では水入遺跡を中心とした矢作川流域古代遺跡出土土師器甕の胎土分析の結果とそれに基づいた若干の考察をおこなう。執筆は永井と分析を実施した藤根久氏（㈱パレオ・ラボ）で分担し、文末に文責名を記した。

さて、水入遺跡では古墳時代中期～平安時代前期、暦年代にして概ね 5 世紀代～ 9 世紀代の土師器が出土した。このうち 6 世紀後半を中心としてややその量が減少する時期があるものの、ほぼ全時期を通じて一定量の土師器甕が確認される。したがって一遺跡における土師器甕各属性の時間的変化を検証するにはまたとない機会であった。そこで土師器甕の胎土分析をおこなうにあたり、この変化を見いだすことを第一の目標に設定した。

第二の目標は、古代三河型土師器甕（以下、三河型甕と略）の空間的変化について設定した。三河型甕は 8 世紀後半～10世紀代にかけて三河国域で主体を占めるナデ調整仕上げの甕であるが、形態や色調が極めて統一されており、各集落で生産されたのではなく、1 ～数カ所で一括生産されている可能性が考えられた。今回は、矢作川流域の代表的集落遺跡 5 遺跡から提供された資料を加えて、胎土の視点からその可能性に解答をえることを目標とした。

分析試料　水入遺跡出土土師器のうち、古代土師器甕（三河型甕を含む）は No.30 ～を付して試料を抽出した。特に三河型甕が出現以前となる 7 世紀代のものについては形態・調整の異なる複数のタイプから抽出した。古墳時代の土師器については、廻間 1 式後半併行期以降のもので各期の土師器甕と高杯を 3 点ずつ抽出した。番号は No.122 ～ 127 である。

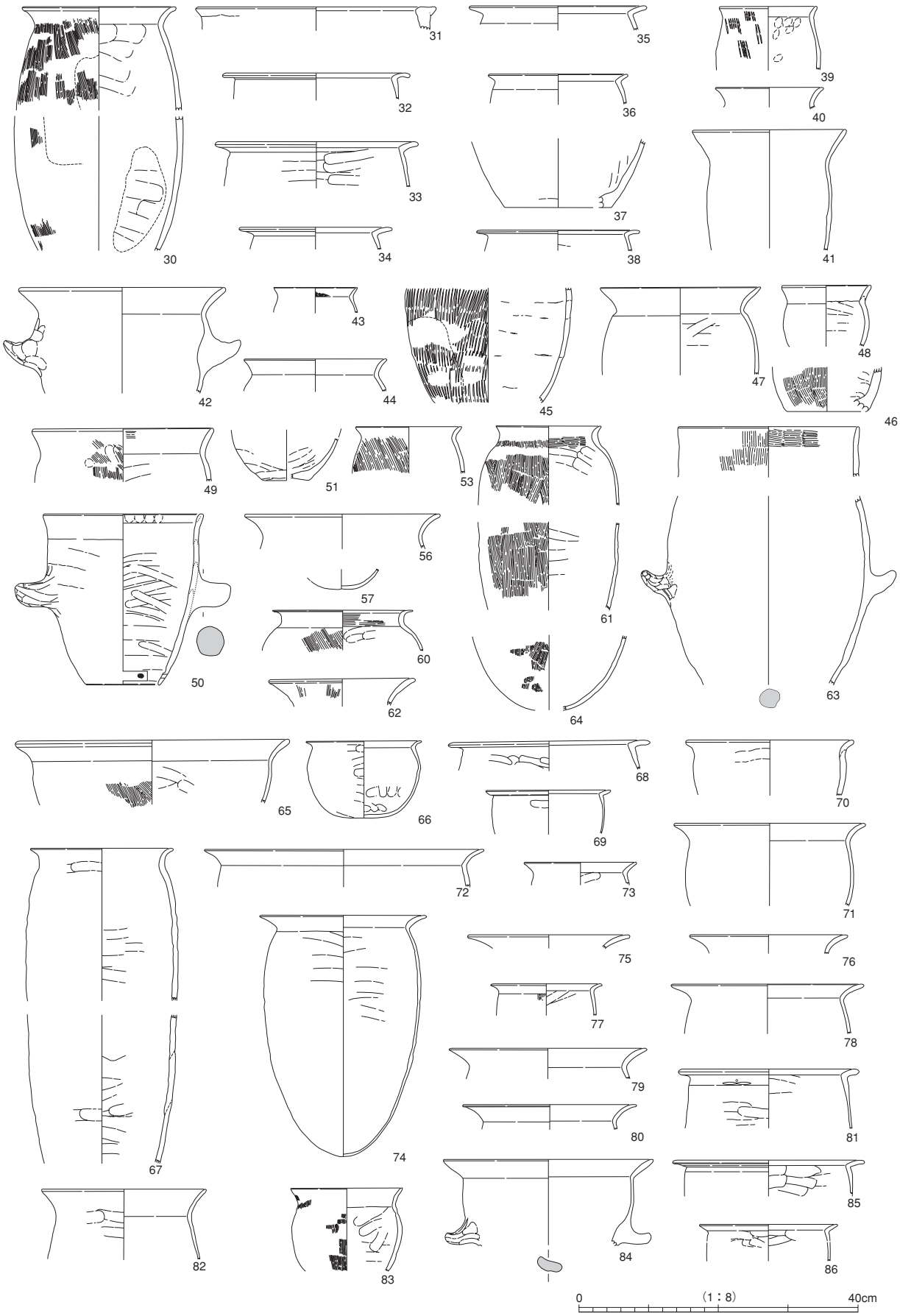
三河型甕については、豊田市梅坪遺跡、岡崎市ハサマ遺跡、安城市御用地遺跡、刈谷市中条遺跡、西尾市八ツ面山北部遺跡群の資料中から、共伴遺物によって時期が特定できるものを中心に 5 点ずつを目安に抽出した。結果、梅坪遺跡、ハサマ遺跡、中条遺跡は概ね 8 世紀後半、御用地遺跡は 8 世紀前半～中葉、八ツ面山北部遺跡群は 9 世紀～ 10 世紀前半の時期を中心とした試料が得られた。番号は No.1 ～ 29 である。（永井邦仁）

(2) 土師器胎土の材料分析

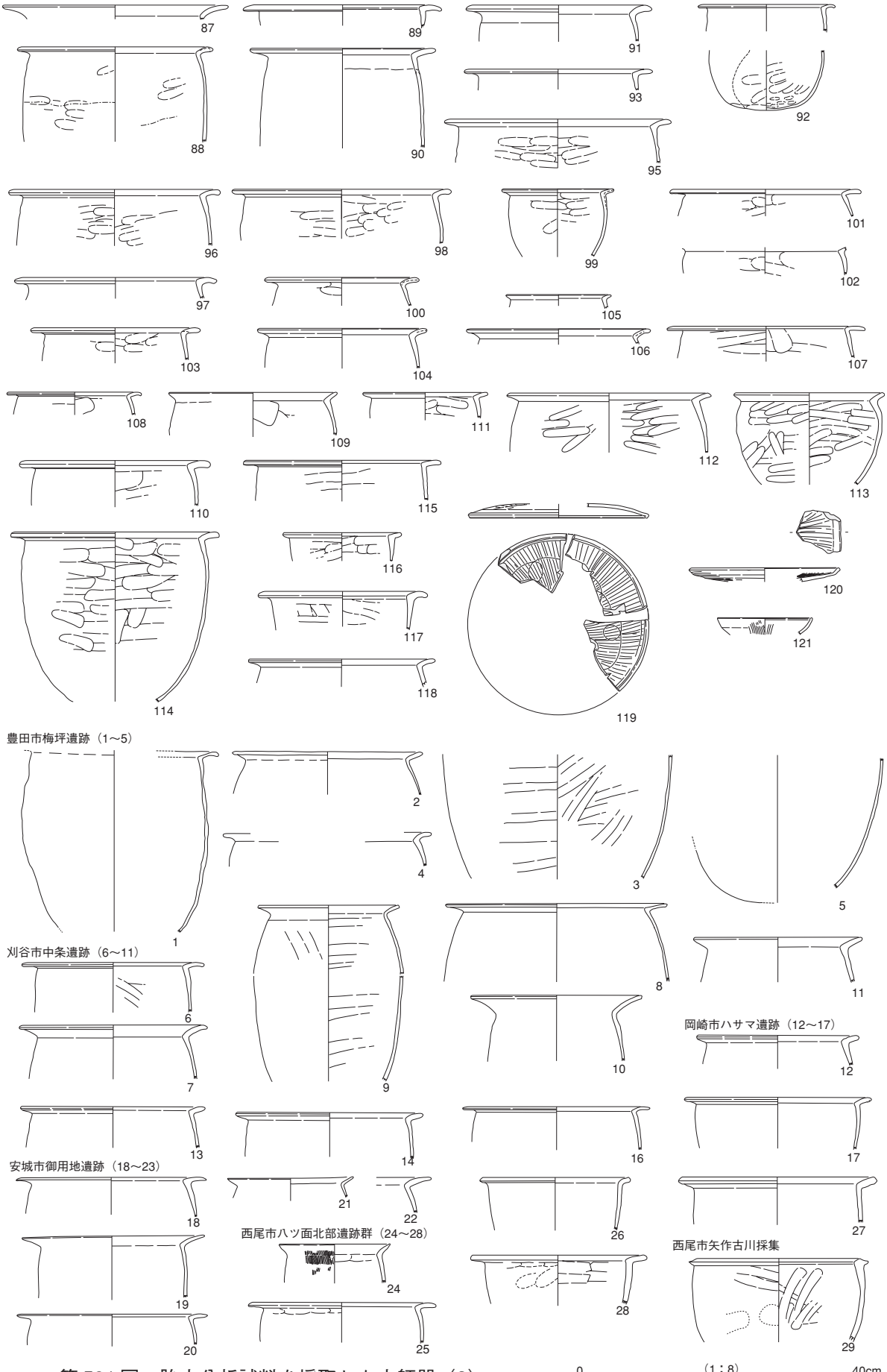
はじめに　土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

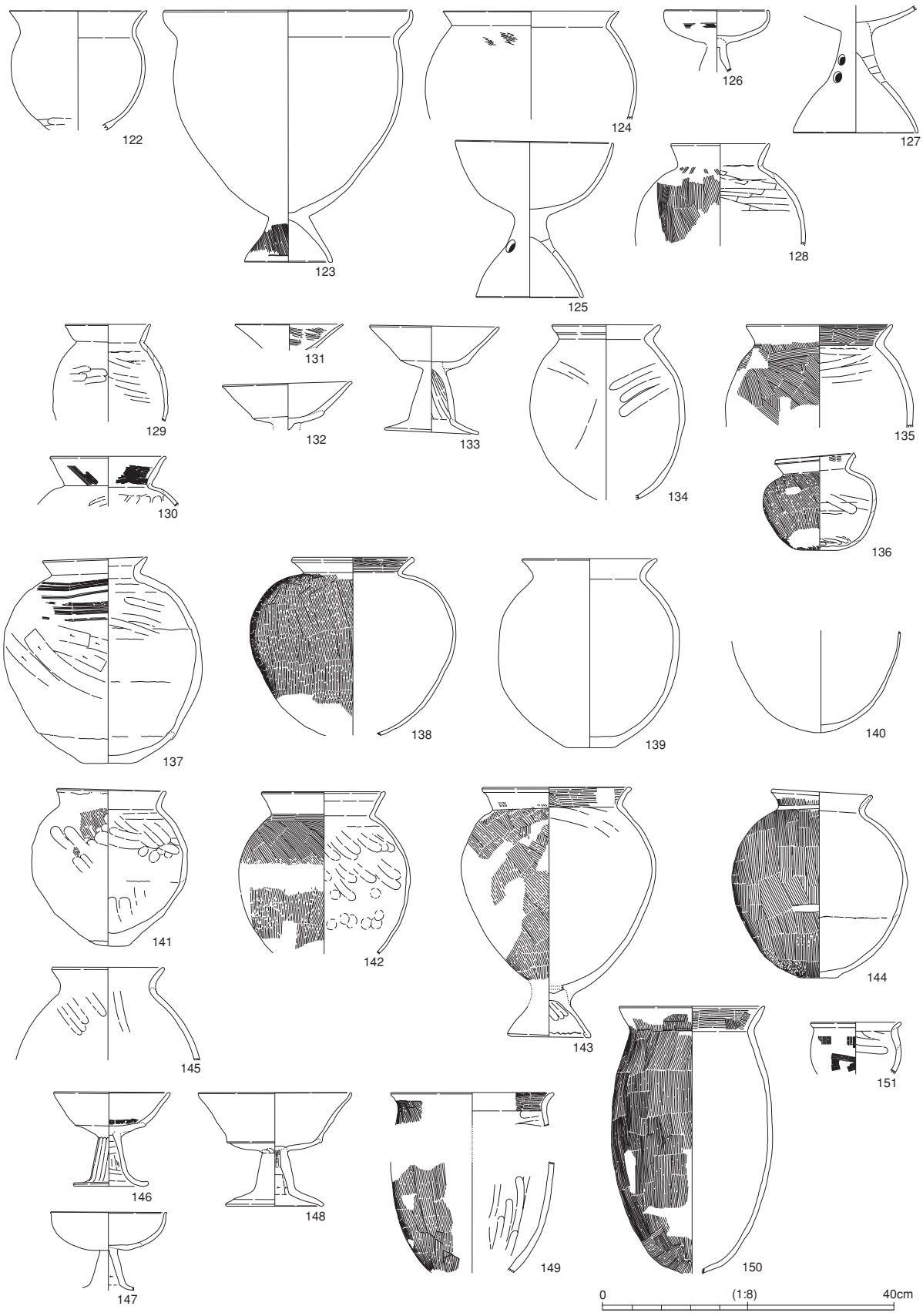
一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、



第 580 図　胎土分析試料を採取した土師器（1）



第 581 図　胎土分析試料を採取した土師器（2）



第 582 図　胎土分析試料を採取した土師器（3）

これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1996；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

ここでは、水入遺跡から出土した土師器甕などについて、これら胎土の粘土あるいは砂粒物の特徴について調べた。

試料と方法　試料は、水入遺跡から出土した土師器甕82試料、その他の甕や高杯など30試料、比較試料として周辺の6遺跡から出土した土師器甕29試料の合計151試料である（第45～46表）。

これら土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（不明種）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

第 45 表　試料および肉眼観察一覧（1）

	遺跡所在地	遺跡名			図版番号	色相 明度/彩度	色	中黒層の有無	混入粒子の肉眼的特徴						
									白色結晶	白色粒子	透明粒子	雲母類	ガラス	赤色粒子	黒灰色粒子
1	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	P.51 639-1	7.5Y 8/2	灰白	なし			○	銀色○			
2	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	P.72 2770	2.5Y 8/2	灰白	なし			○	銀色○			
3	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	新規図化	10YR 7/3	にぶい黄橙	なし			○	銀色○			
4	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	P.134 2067	10YR 6/4	にぶい黄橙	なし			○	銀色○			
5	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	P.134 2424	10YR 7/3	にぶい黄橙	なし			○	銀色○			
6	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	新規図化	2.5Y 8/2	灰白	有			○	銀色△			
7	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	新規図化	10YR 6/3	にぶい黄橙	なし			◎	銀色○			
8	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	新規図化	5YR 6/6	橙	なし			○	銀色△	△		△
9	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	新規図化	10YR 7/2	にぶい黄橙	なし	△		△	銀色△			
10	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	新規図化	10YR 7/3	にぶい黄橙	有			○	銀色○	△		△
11	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	新規図化	10YR 8/3	浅黄橙	なし			○	銀色○			△
12	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	11	2.5Y 8/2	灰白	なし			△	銀色△			
13	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	14	10YR 7/3	にぶい黄橙	有			◎	銀色△			
14	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	15	10YR 7/3	にぶい黄橙	有			○	銀色△			
15	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕		2.5Y 8/2	灰白	なし			◎	銀色△			
16	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	新規図化	10YR 7/3	にぶい黄橙	有	△		◎	銀色△			
17	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	新規図化	2.5Y 8/2	灰白	有			◎	銀色△			
18	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	304	2.5Y 8/1	灰白	有			○	銀色△			
19	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	307	10YR 7/4	にぶい黄橙	なし			◎	銀色△			△
20	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	372(1)	7.5Y 8/1	灰白	なし			◎	銀色△			
21	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	373	10YR 8/2	灰白	有			○	銀色△			
22	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	555	10YR 4/2	灰黄褐	なし			◎	銀色○			
23	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	372(2)	5Y 8/2	灰白	なし			○	銀色△			△
24	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	P.72 179	10YR 6/3	にぶい黄橙	なし	△		◎	銀色△			
25	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	P.49 40	10YR 8/2	灰白	有			○	銀色△			△
26	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	P.58 175	10YR 5/2	灰黄褐	なし			○	銀色△			
27	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	P.58 178	10YR 8/3	浅黄橙	なし			◎	銀色△			
28	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	P.60 210	10YR 4/3	にぶい黄褐	淡く有			○	銀色○			
29	西尾市	矢作古川	11世紀前半	後期三河型甕	新規図化	10YR 3/2	黒褐	なし	△		○	金色○			
30	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	2935	2.5Y 7/3	淡黄	なし	◎		◎				
31	豊田市	永入	11世紀前半	後期三河型甕	1250	7.5YR 6/3	にぶい褐	なし	◎		△				○
32	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2907	2.5Y 8/2	灰白	有	◎		◎				
33	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2908	2.5Y 8/1	灰白	なし			◎	銀色△	△		
34	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2918	2.5Y 7/1	灰白	有			◎	銀色○			
35	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2917	2.5Y 8/2	灰白	なし			◎				○
36	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2920	2.5Y 6/1	黄灰	なし	○		◎	銀色△			△
37	豊田市	永入	奈良～平安時代	甑	1764	2.5Y 8/3	淡黄	有	○		△	黒色◎			
38	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	1436	2.5Y 8/2	灰白	有	○			金色△			
39	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ小甕	2012	5YR 6/4	にぶい橙	なし	◎		○	金色○			
40	豊田市	永入	奈良～平安時代	小甕	2038	7.5YR 7/2	明褐灰	有			◎	銀色○	△		
41	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2041	7.5YR 8/1	灰白	なし			○	金色△			
42	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ鍋	2040	10YR 7/2	にぶい黄橙	なし			◎	金色△			
43	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ・ナデ小甕	2062	2.5YR 6/6	橙	なし	○		◎	銀色○			△
44	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2075	10YR 7/2	にぶい黄橙	有	○		◎	黒色○			
45	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	2076	7.5YR 7/3	明褐灰	有	△		◎	銀色○			
46	豊田市	永入	奈良～平安時代	甕（古代）	—	10YR 8/2	灰白	有	◎		◎	細粒△			
47	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2141	10YR 8/1	灰白	なし	△		◎	金色△			
48	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ小甕	2149	10YR 6/2	灰黄褐	なし	○		○	金色○			
49	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	2142	2.5Y 7/2	灰黄	なし	○		◎	銀色○			△
50	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ甑	2157	5YR 4/4	にぶい赤褐	有	△		○	銀色△			
51	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ小甕	2154	5YR 6/1	褐灰	有	○		◎	黒色○			△
52	豊田市	永入	奈良～平安時代	甕（古代）	—	5Y 8/1	灰白	有			◎	黒色・金色△			
53	豊田市	永入	奈良～平安時代	長胴ハケ小甕	2171	10YR 5/2	灰黄褐	有	○		◎	金色△			△
54	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	—	10YR 7/2	にぶい黄橙	有	◎		○	黒色・金色○			
55	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	—	2.5Y 6/1	黄灰	なし	○		◎	銀色△			
56	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2711	2.5Y 8/4	淡黄	なし			○	細粒△			△
57	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2719	2.5Y 6/2	灰黄	有	△		△	金色△	△		
58	豊田市	永入	奈良～平安時代	—	—	10YR 5/3	にぶい黄褐	なし	△		◎	金色△			
59	豊田市	永入	奈良～平安時代	—	—	10YR 7/2	にぶい黄橙	なし			△	金色△			
60	豊田市	永入	奈良～平安時代	遠尾型甕	2741	10YR 3/1	黒褐	なし	△		△	金色△			
61	豊田市	永入	奈良～平安時代	遠尾系ハケ長胴甕	3182	10YR 7/2	にぶい黄橙	有	△		△	金色△			
62	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	2763	10YR 6/2	灰黄褐	有	△		○	銀色△	△		
63	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ甑	2789・2790	10YR 8/2	灰白	なし	△		△	金色△			
64	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ甕（丸底）	2788	2.5Y 8/2	灰白	なし			○	銀色△	△		
65	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ鍋	2793	2.5Y 8/1	灰白	なし			○	細粒△	△		
66	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2803	7.5YR 7/1	明褐灰	有			△	細粒△			
67	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2813	10YR 8/2	灰白	なし	△		◎	黒色◎		△	
68	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2846	2.5Y 8/1	灰白	有			○	黒色○			
69	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2843	2.5Y 5/1	黄灰	有			△	金色△			
70	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2392	10YR 7/4	にぶい黄橙	なし	◎			金色△			△
71	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2410	2.5Y 8/4	淡黄	なし	◎		△				
72	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ鍋	2469	2.5Y 8/3	淡黄	なし	○		○	黒色△			△
73	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ小甕	2495	2.5Y 5/1	黄灰	有			◎				
74	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2498	10YR 7/3	にぶい黄橙	なし	△		○	黒色○			
75	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2507	2.5Y 7/1	灰白	有	○		○	銀色○	△		
76	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2516	10YR 7/2	にぶい黄橙	有	△		○	銀色○			△

第 46 表　試料および肉眼観察一覧（2）

	遺跡所在地	遺跡名			図版番号	色相 明度/彩度	色	中黒層の有無	混入粒子の肉眼的特徴						
									白色結晶	白色粒子	透明粒子	雲母類	ガラス	赤色粒子	黒灰色粒子
77	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ小甕	2573	10YR 6/1	褐灰	なし	△		◎	銀色○			
78	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2611	5Y 7/1	灰白	有	△		○	金色△			
79	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2631	2.5Y 8/2	灰白	なし	△		◎	白色○			△
80	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2660	2.5Y 7/3	淡黄	なし	△		◎	白色○			△
81	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2671	2.5Y 8/2	灰白	なし			○				
82	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2698	10YR 8/3	浅黄橙	なし	○		○	金色△			
83	豊田市	永入	奈良～平安時代	ハケ小甕	3095	2.5Y 8/2	灰白	有	○		○				
84	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ鉢	3100	2.5Y 8/2	灰白	なし			○	金色△			△
85	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	3155	2.5Y 8/1	灰白	なし			○	銀色△			
86	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2190	2.5Y 8/1	灰白	なし			○				△
87	豊田市	永入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	2196	2.5Y 8/2	灰白	なし	△		○	黒色△			
88	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2203	7.5Y 8/1	灰白	なし			△	銀色△	△		
89	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2206	5YR 6/1	灰	有	△		△	銀色△			
90	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2220	2.5Y 7/1	灰白	なし	△		◎				
91	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2219	5Y 8/1	灰白	なし	○		○				
92	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2249	10YR 7/2	にぶい黄橙	なし	△		△		△		
93	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2250	2.5Y 7/1	灰白	なし			◎				
94	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	―	2.5Y 8/2	灰白	なし			○		△		
95	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2303	7.5YR 7/1	明褐灰	なし			◎	銀色△			
96	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2302	2.5Y 8/2	灰白	有			◎	銀色△			
97	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2296	2.5Y 8/2	灰白	なし			○	白色△			
98	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2301	2.5Y 8/2	灰白	なし			△	白色△			
99	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2351	2.5Y 7/2	灰白	なし	△		○	白色△	△		
100	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2350	2.5Y 8/1	灰白	なし	△		○	白色△	△		
101	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2316	2.5Y 7/2	灰白	なし	△		△	銀色△			
102	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2317	5YR 6/1	褐灰	有	△		○	金色△			
103	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2361	7.5Y 6/1	灰	有			△	金色△			△
104	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2368	10Y 8/1	灰白	なし			△	銀色△			
105	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2366	7.5Y 8/2	灰白	有	△		○	銀色△			
106	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2367	2.5Y 8/2	灰白	有			◎		△		○
107	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	3035	7.5Y 8/2	灰白	有			◎	銀色△			
108	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2327	10YR 5/1	褐灰	有			○	銀色△			
109	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2333	10YR 3/1	黒褐	有			○	銀色△			
110	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2331	7.5YR 8/3	浅黄橙	有			○		○		
111	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2336	5YR 6/3	にぶい橙	有	△		○	金色△	△		
112	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2342	7.5Y 7/1	灰白	なし			○		△		
113	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	2343・2344	2.5Y 7/2	灰黄	なし			◎	銀色△	△		
114	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2345	2.5Y 8/1	灰白	有			○	金色△	◎		
115	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	3053	2.5Y 8/2	灰白	なし			○		△		
116	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型小甕	3064	2.5Y 7/1	灰白	なし			○	黒色△	△		
117	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	1974	10YR 6/2	灰黄褐	有			○		△		
118	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	2475	2.5Y 7/1	灰白	有	△		○		△		
119	豊田市	永入	奈良～平安時代	蓋（頭被あり）	1896	7.5YR 6/6	橙	なし			△		△		
120	豊田市	永入	奈良～平安時代	皿（頭被あり）	1897	7.5YR 6/4	にぶい橙	有	△		○		△		
121	豊田市	永入	奈良～平安時代	椀（頭被あり）	1435	2.5YR 6/8	橙	なし	△		○		△		
122	豊田市	永入	弥生時代末	台付甕	917	10YR 6/3	にぶい黄橙	なし	△	○	△	金色○			
123	豊田市	永入	弥生時代末	台付甕	107	10YR 7/4	にぶい黄橙	なし	△	○	○	金色○			△
124	豊田市	永入	弥生時代末	甕	101	10YR 7/3	にぶい黄橙	なし		◎		金色◎			
125	豊田市	永入	弥生時代末	高杯	65	7.5YR 7/4	にぶい橙	なし		○	◎	黒色◎			
126	豊田市	永入	古墳中期の混入？	高杯	76	7.5YR 7/6	橙	なし	△	○		金色○			
127	豊田市	永入	弥生時代末	高杯	79	7.5YR 8/4	浅黄橙	なし		○	△	△			
128	豊田市	永入	古墳中期	甕（貼塗条痕）	708	10YR 8/2	灰白	なし		△	○	金色△			
129	豊田市	永入	古墳中期	ナデ小甕	695	10YR 6/2	灰黄褐	なし	粗粒○	粗粒○	△	金色･黒色△			粗粒△
130	豊田市	永入	古墳中期	ハケ・ナデ甕	693	2.5Y 7/1	灰白	有	△				△		△
131	豊田市	永入	古墳中期	高杯	657	10YR 8/1	灰白	なし				金色△	◎		
132	豊田市	永入	古墳中期	高杯	659	10YR 5/2	灰黄褐	有		△		金色△	△		
133	豊田市	永入	古墳中期	高杯	653	10YR 5/2	灰黄褐	有		△		金色△	◎		
134	豊田市	永入	古墳中期	ナデ鉢	372	7.5YR 4/2	灰褐	なし	△	◎	△	金色◎			△
135	豊田市	永入	古墳中期	ハケ甕	981	7.5YR 6/4	にぶい橙	なし		○	◎	金色△			△
136	豊田市	永入	古墳中期	ハケ小甕（職式影響）	363	10YR 6/3	にぶい黄橙	なし	粗粒△						
137	豊田市	永入	古墳中期	板ナデ甕	993	2.5Y 8/3	淡黄	なし		粗粒◎		金色○			
138	豊田市	永入	古墳中期	ハケ台付？甕	986	5YR 6/6	橙	なし		○	○	銀色△			
139	豊田市	永入	古墳中期	ナデ甕	623	10YR 7/3	にぶい黄橙	なし	△	○	◎				
140	豊田市	永入	奈良～平安時代	三河型甕	1797	7.5YR 6/6	橙	なし		◎	○	細粒銀色△			
141	豊田市	永入	古墳中期	ハケ・ナデ甕	982	10YR 7/3	にぶい黄橙	なし		○	○	細粒金色△			
142	豊田市	永入	古墳中期	ハケ甕（布留系）	644	10YR 3/2	黒褐	有	△	△		金色○			
143	豊田市	永入	古墳中期	ハケ台付甕	619	7.5YR 6/3	にぶい褐	なし	△	◎	○	銀色△			
144	豊田市	永入	古墳中期	ハケ甕	645	10YR 5/3	にぶい黄褐	なし		◎	△				
145	豊田市	永入	古墳中期	ナデ甕	371	10YR 5/3	にぶい黄褐	なし		△	○		◎		
146	豊田市	永入	古墳中期	有稜杯部高杯	750	10YR 7/3	にぶい黄橙	有		△	◎	細粒金色△	△		△
147	豊田市	永入	古墳中期	椀状杯部高杯	451	2.5Y 8/3	淡黄	なし		○	○	細粒金色△			○
148	豊田市	永入	古墳中期	大型高杯	604	10YR 8/3	浅黄橙	なし		○	○	細粒金色△	△		△
149	豊田市	永入	7世紀	ハケ長胴甕	1461	7.5YR 7/3	にぶい橙	なし		◎	○	金色･黒色○	△		△
150	豊田市	永入	7世紀	ハケ長胴甕	1870	10YR 6/2	灰黄褐	なし	△	○	◎	金色△			△
151	豊田市	永入	7世紀	ハケ小甕	1866	10YR 6/3	にぶい黄橙	有		◎	◎		△		

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[胞子化石]

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO 2 %の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO 2 %の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO 2 %が少ない深成岩、SiO 2 %が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO 2 %が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO 2 %の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO 2 %が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産す

る。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの､完晶質は､ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類)、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。
なお、粒子が片理状に配置した岩石群は、片理複合石英類とした。これらは、片岩類起源の岩石群と思われる。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

(3) 結果

胎土中の粒子組成は、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。第47～50表には、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

第47表　微化石・鉱物組成一覧（1）

分析|	遺跡所在地	遺跡名	時　期	器種 および型式分類	粒　度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	60～280 μm	1.8mm	珪藻化石（沼沢湿地Pinnularia gibba　、Stauroneis phoenicenteron　　、淡水種Eunotia biareofera　、Diploneis 属、Pinnularia 属、Eunotia 属、Cymbella 属、Melosira 属多い、不明種、陸域Pinnularia borealis　）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン、ガラス質
2	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	50～300 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属、Diploneis 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》角閃石類、雲母類、ガラス質、斜方輝石、ジルコン
3	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	80～600 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属多い、Pinnularia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、雲母類、角閃石類、ジルコン
4	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	60～500 μm	1.8mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Pinnularia 属、Eunotia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、角閃石類、雲母類、ジルコン
5	豊田市	梅坪	奈良～平安時代	三河型甕	50～750 μm	2.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属多い、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》単斜輝石、斜長石（双晶）、ガラス質、雲母類、ジルコン
6	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	80～750 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、雲母類、角閃石類、ジルコン多い
7	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	60～700 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属、不明種、陸域Hantzschia amphioxys　）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、斜長石（双晶）、斜方輝石、ガラス質
8	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	50～800 μm	2mm	骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、角閃石類、雲母類、ジルコン多い
9	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	80～700 μm	1.8mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia 属多い、Pinnularia 属、Cymbella 属、不明種多い）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、角閃石類、雲母類
10	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	140 μm～1.3mm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》角閃石類、雲母類、ガラス質多い、ジルコン
11	刈谷市	中条	奈良～平安時代	甕	80～800 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、角閃石類、雲母類
12	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	110～800 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Diploneis 属、Pinnularia 属、Eunotia 属、Cymbella 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン、ガラス質、角閃石類
13	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	80～750 μm	2.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》斜長石（双晶）、ジルコン、雲母類、ガラス質、角閃石類、単斜輝石
14	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	80～750 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia monodon　、Pinnularia 属、Eunotia 属、Cymbella 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ガラス質、ジルコン、角閃石類
15	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	90～700 μm	1.9mm	珪藻化石（海水種Coscinodiscus 属/Thalassiosira 属、淡水種Eunotia biareofera　、Pinnularia 属、Eunotia 属、Cymbella 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン、ガラス質、斜方輝石、斜長石（双晶）、角閃石類
16	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	80～600 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン、角閃石類、斜方輝石
17	岡崎市	ハサマ	奈良～平安時代	三河型甕	90～800 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Navicula americana　、Pinnularia 属、Eunotia 属多い、Cymbella 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ガラス質、斜方輝石、ジルコン
18	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	90～600 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia 属、Eunotia 属）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、ガラス質、雲母類、角閃石類
19	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	60～600 μm	2.2mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》雲母類、角閃石類、ジルコン多い、ガラス質
20	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	70～700 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Pinnularia 属、Eunotia 属多い、Cymbella 属、不明種多い）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、角閃石類、ジルコン多い
21	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	90～350 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia 属、Cymbella 属、Diploneis 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石
22	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	70～750 μm	3.1mm	珪藻化石（沼沢湿地付着生Pinnularia viridis　、淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia 属多い、Cymbella 属、不明種多い）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》［片理複合石英類］、ジルコン、ガラス質、雲母類、角閃石類、ジルコン、ザクロ石類
23	安城市	御用池	奈良～平安時代	甕	70～500 μm	1.4mm	珪藻化石（湖沼浮遊生Melosira granulata　、淡水種Eunotia 属、Pinnularia 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》斜長石（双晶）、雲母類、ガラス質、ジルコン、角閃石類、斜方輝石
24	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	90～800 μm	2mm	珪藻化石〈不明種〉、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》雲母類、角閃石類、ジルコン多い、単斜輝石、ザクロ石類
25	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	50～700 μm	1.4mm	珪藻化石（海水種Coscinodiscus 属/Thalassiosira 属、淡水種Eunotia biareofer　a、Eunotia 属）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、ザクロ石類、［複合石英類（微細）］
26	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	90～900 μm	2.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Pinnularia 属、Eunotia 属、Cymbella 属、Melosira 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、単斜輝石
27	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	60～750 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia 属、Eunotia 属、Melosira 属）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》斜方輝石、ガラス質、角閃石類、ジルコン、斜長石（双晶）、雲母類
28	西尾市	八ッ面山	奈良～平安時代	三河型甕	60～700 μm	2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属多い、不明種多い）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン多い
29	西尾市	矢作古川	11世紀前半	後期三河型甕	80 μm～1.1mm	1.7mm	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》雲母類》斜長石（双晶）》角閃石類、斜方輝石、ジルコン、［複合石英類（微細）］
30	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	60～750 μm	2.1mm	骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類、斜方輝石
31	豊田市	水入	11世紀前半	後期三河型甕	60～800 μm	2.5mm	植物珪酸体化石（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》［複合石英類（微細）、砂岩質］、雲母類、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン
32	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～400 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属多産、Diploneis 属、Pinnularia 属、Cymbella 属、不明種多い）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、ジルコン
33	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～650 μm	1.2mm	珪藻化石（湖沼浮遊生Melosira granulata　、淡水種Eunotia 属多い、Cymbell a属、Diploneis 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ガラス質、ジルコン多い
34	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	70～900 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属多産、Pinnularia 属、Cymbella 属、不明種多産）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》斜長石（双晶）、ガラス質
35	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	50～500 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia 属多い、Cymbella 属、不明種多い）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い
36	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～700 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia 属、Cymbella 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、雲母類、ガラス質、角閃石類
37	豊田市	水入	奈良～平安時代	甑	120 μm～1.1mm	1.8mm	珪藻化石（淡水種Cymbella 属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》斜長石（双晶）》複合石英類》雲母類》複合石英類（微細）、角閃石類、ガラス質、ジルコン
38	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	70～700 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia 属）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、角閃石類、ジルコン多い

第 48 表　微化石・鉱物組成一覧（2）

分析」	遺跡所在地	遺跡名	時　期	器種 および型式分類	粒　度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
39	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ小甕	60～800 μm	1.7mm	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類〉斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン
40	豊田市	水入	奈良～平安時代	小甕	70 μm～1.0mm	2.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、Diploneis　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉ジルコン、ガラス質、斜方輝石、雲母類
41	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	50～600 μm	2.5mm	植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類〉雲母類、ジルコン多い
42	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ鍋	50～900 μm	2.5mm	骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、斜方輝石、ザクロ石類、角閃石類
43	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ・ナデ小甕	60～800 μm	4.2mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》斜長石（双晶）〉複合石英類、複合石英類（微細）、カリ長石（ﾊﾟｰｻｲﾄ）、雲母類、角閃石類、ガラス質
44	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	60 μm～1.0mm	3.2mm	骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）	石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン、ガラス質、雲母類
45	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	80 μm～1.1mm	2.1mm	脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類、ザクロ石類
46	豊田市	水入	奈良～平安時代	甕（古代）	90～900 μm	4.7mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン多い、雲母類、ガラス質
47	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	60～700 μm	2mm	骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉雲母類〉複合石英類〉斜長石（双晶）、ジルコン
48	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ小甕	300～600 μm	2.1mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン、角閃石類、［ガラス質］
49	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	50～700 μm	4.2mm	植物珪酸体化石	石英・長石類〉雲母類〉複合石英類〉ジルコン多い、斜長石（双晶）
50	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ甕	80～500 μm	2.2mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉斜長石（双晶）〉雲母類〉複合石英類、ジルコン、斜方輝石、単斜輝石、［複合石英類（微細）］
51	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ小甕	100～750 μm	3.1mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia　属）、脆子化石、骨針化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）	石英・長石類〉複合石英類〉斜長石（双晶）、斜長石（双晶）、ジルコン、雲母類、［片理複合石英類］
52	豊田市	水入	奈良～平安時代	甕（古代）	100 μm～1.2mm	2.6mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、ジルコン、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、［片理複合石英類、ガラス質］
53	豊田市	水入	奈良～平安時代	長胴ハケ小甕	100～900 μm	2.3mm	珪藻化石（陸域Pinnularia borealis　）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、単斜輝石、角閃石類、［ガラス質］
54	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	110 μm～1.0mm	2.1mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、［ガラス質］
55	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	80～500 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン
56	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	60～700 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、［ガラス質］
57	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	50～600 μm	2.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、Cymbella　属、Surirella　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ガラス質、斜長石（双晶）、ジルコン多い
58	豊田市	水入	奈良～平安時代	–	80～700 μm	2.3mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia　属、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉ジルコン多い、雲母類、角閃石類、［ガラス質］
59	豊田市	水入	奈良～平安時代	–	70～750 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、角閃石類、ザクロ石類、［複合石英類（微細）］
60	豊田市	水入	奈良～平安時代	濃尾型甕	110～800 μ	1.2mm	脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、雲母類、ジルコン、黒色粒子
61	豊田市	水入	奈良～平安時代	濃尾系ハケ長胴甕	60～800 μm	1.6mm	珪藻化石（海水種Coscinodiscus　属/Thalassiosira　属、淡水種Cymbella　属、Rhopalodia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）、雲母類、斜長石（双晶）、カリ長石（ﾊﾟｰｻｲﾄ）、角閃石類、ジルコン
62	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ長胴甕	80～800 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、Cymbella　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類〉ガラス質
63	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ甕	50～300 μm	2.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、斜長石（双晶）
64	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ甕（丸底）	90～800 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、［ガラス質］
65	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ鍋	90～900 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、角閃石類、単斜輝石、［ガラス質］
66	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	100 μm～1.0mm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類
67	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	100 μm～1.2mm	1.7mm	珪藻化石（海水種Coscinodiscus　属/Thalassiosira　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン多いジルコン、単斜輝石、角閃石類
68	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～800 μm	950 μm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Cymbella　属、Diploneis　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類〉複合石英類〉ガラス質、雲母類、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン
69	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	60～600 μm	1.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類〉ジルコン多い、ガラス質、角閃石類
70	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	70～600 μm	4.8mm	植物珪酸体化石	石英・長石類》斜長石（双晶）〉複合石英類、ジルコン、雲母類、角閃石類、単斜輝石、［凝灰岩質］
71	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	90～800 μm	1.6mm	骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類〉複合石英類〉ジルコン多い、角閃石類
72	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ鍋	90～900 μm	1.8mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類〉単斜輝石、ジルコン、角閃石類、雲母類
73	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ小甕	80～900 μm	2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類〉斜長石（双晶）、斜方輝石、ジルコン、角閃石類、雲母類
74	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	80～750 μm	3mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石多い	複合石英類〉石英・長石類〉雲母類、ジルコン、斜方輝石、角閃石類、ガラス質
75	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	100～600 μm	1.6mm	骨針化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、角閃石類、ジルコン多い、［ガラス質］
76	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	100～600 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Cymbella　属、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、脆子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類〉複合石英類〉雲母類、ジルコン多い、角閃石類、［ガラス質］

第 49 表　微化石・鉱物組成一覧（3）

分析	遺跡所在地	遺跡名	時　期	器種 および型式分類	粒　度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
77	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ小甕	60～650 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属、Diploneis　属、不明種）、骨針化石、胞子化石多い、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類、［ガラス質］
78	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	70～500 μm	2.5mm	珪藻化石（不明種）、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》角閃石類、単斜輝石、ジルコン、ザクロ石類、雲母類、ガラス質
79	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	110～750 μm	2.1mm	珪藻化石（淡水種Diploneis　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》角閃石類、単斜輝石、ジルコン、ザクロ石類、ガラス質、雲母類
80	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	90～750 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ガラス質、角閃石類、ジルコン
81	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～750 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》雲母類》斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類、単斜輝石、［複合石英類（微細）］
82	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	80～750 μm	1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、雲母類、角閃石類
83	豊田市	水入	奈良～平安時代	ハケ小甕	80～750 μm	1.8mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類
84	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ鍋	100～800 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》角閃石類、ジルコン多い、雲母類、［ガラス質］
85	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～750 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、［ガラス質］
86	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	70～700 μm	1.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、角閃石類、雲母類、ガラス質
87	豊田市	水入	奈良～平安時代	ナデ長胴甕	60～750 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、角閃石類、斜長石（双晶）、［ガラス質］
88	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～750 μm	1.3mm	珪藻化石（不明種）、植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類》雲母類、角閃石類、単斜輝石、ザクロ石類、ジルコン多い、斜長石（双晶）、［ガラス質］
89	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	110～700 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、角閃石類、単斜輝石、［ガラス質］
90	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	100～800 μm	1.4mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》雲母類、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、［ガラス質］
91	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～750 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、Diploneis　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、角閃石類、雲母類、ガラス質
92	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	100～600 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》単斜輝石、雲母類、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類
93	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	90～600 μm	1.1mm	珪藻化石（湖沼浮遊生Melosira granulata　、淡水種Synedra　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、［ガラス質］
94	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	90～700 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、陸域Pinnularia borealis　、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類
95	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～750 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、ジルコン多い、雲母類
96	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～750 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》斜長石（双晶）、雲母類、ガラス質多い、ジルコン多い、角閃石類
97	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	70～500 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多産、Pinnularia　属、Cymbella　属多い、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン
98	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～700 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多産、Pinnularia　属、Epithemia turgida　、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》雲母類、角閃石類、ジルコン、ガラス質
99	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	50～700 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、雲母類、角閃石類、ガラス質
100	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	70～750 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類、［ガラス質］
101	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	50～500 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多産、Cymbella　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、単斜輝石、雲母類、角閃石類
102	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	90～800 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ガラス質、ジルコン、雲母類
103	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～500 μm	1.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類
104	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	80～700 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類、［ガラス質］
105	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	90～400 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、Cymbella　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類、ガラス質
106	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～700 μm	2.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属多い、Cymbella　属、Diploneis　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類、ザクロ石類、［ガラス質］
107	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～600 μm	1.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Cymbella　属、Pinnularia　属、Diploneis　属、Melosira pensacolae　、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、角閃石類、雲母類、単斜輝石、［ガラス質］
108	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	60～500 μm	1.9mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Cymbella　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、角閃石類、雲母類、ガラス質
109	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～500 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン、角閃石類、ガラス質
110	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	90～700 μm	2.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多産、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ジルコン、ガラス質
111	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	70～600 μm	1.3mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》複合鉱物類、雲母類、ジルコン、角閃石類、［ガラス質］、微細黒色粒子高密度
112	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	100 μm～1.0mm	2.2mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》ジルコン多い、角閃石類、雲母類、単斜輝石、［ガラス質］
113	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	80～750 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》ジルコン、角閃石類、雲母類、斜方輝石、ガラス質、微細黒色粒子高密度
114	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	100～700 μ	1.7mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類》複合石英類》雲母類、ガラス質、斜方輝石、単斜輝石、ジルコン

第 50 表　微化石・鉱物組成一覧（4）

分析]	遺跡所在地	遺跡名	時　期	器種 および型式分類	粒　度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
115	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	750～750 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類）複合石英類）雲母類、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類
116	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型小甕	90～700 μm	1.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Melosira　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類）複合石英類）雲母類、斜長石（双晶）、ジルコン、ガラス質、角閃石類
117	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	60～700 μm	1.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Cymbella　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）複合石英類）雲母類、ガラス質、ジルコン、角閃石類
118	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	100～600 μm	1.7mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属多い、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類）複合石英類）雲母類、ジルコン、角閃石類、［ガラス質］
119	豊田市	水入	奈良～平安時代	蓋（暗紋あり）	70～300 μm	750 μmm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類）複合石英類）雲母類、ジルコン、角閃石類、［ガラス質］、黒色粒子高密度
120	豊田市	水入	奈良～平安時代	Ⅲ（暗紋あり）	70～600 μm	1mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）複合石英類）複合石英類（微細）〉角閃石類、ジルコン多い、雲母類、ガラス質
121	豊田市	水入	奈良～平安時代	椀（暗紋あり）	50～300 μm	1.9mm	骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）ジルコン多い、角閃石類、雲母類、ガラス質、微細黒色粒子高密度
122	豊田市	水入	弥生時代末	台付甕	110～800 μm	3.6mm	珪藻化石（胚域Pinnularia borealis　）、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）ジルコン多い、角閃石類、斜長石（双晶）
123	豊田市	水入	弥生時代末	台付甕	100～700 μm	3.2mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）ジルコン多い、角閃石類、斜長石（双晶）
124	豊田市	水入	弥生時代末	甕	120～700 μm	2.3mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）ジルコン多い、角閃石類、斜長石（双晶）
125	豊田市	水入	弥生時代末	高杯	90～750 μm	2.9mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）ジルコン、角閃石類、斜長石（双晶）
126	豊田市	水入	古墳中期の混入？	高杯	50～300 μm	600 μm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類、複合石英類（微細）、角閃石類、斜方輝石、単斜輝石、斜長石（双晶）、ジルコン
127	豊田市	水入	弥生時代末	高杯	100～700 μm	2mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）雲母類）斜長石（双晶）〉角閃石類、単斜輝石、［片理複合石英類］
128	豊田市	水入	古墳中期	甕（貝殻条痕）	80～350 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　多い、Eunotia　属多い、Pinnularia　属、Cymbella　属、Diploneis　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）複合石英類、複合石英類（微細）、雲母類、ジルコン、角閃石類、［ガラス質］
129	豊田市	水入	古墳中期	ナデ小甕	50～300 μm	4.1mm	珪藻化石（淡水種Eunotia biareofera　、Eunotia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類）複合石英類、［複合石英類（微細）］、雲母類、ジルコン、角閃石類、斜方輝石、ガラス質
130	豊田市	水入	古墳中期	ハケ・ナデ甕	70～350 μm	1.2mm	珪藻化石（淡水種Cymbella　属、Diploneis　属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）複合石英類）斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン多い、雲母類、角閃石類
131	豊田市	水入	古墳中期	高杯	50～240 μm	850 μm	珪藻化石（沼沢湿地付着生Eunotia praerupta　v.bidens　、淡水種Cymbella　属、Diploneis　属、Pinnularia　属、Melosira　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）複合石英類（微細）、ジルコン、角閃石類、ガラス質
132	豊田市	水入	古墳中期	高杯	50～400 μm	650 μm	珪藻化石（沼沢湿地付着生Eunotia praerupta　v.bidens　、Stauroneis phoenicenteron　多い、淡水種Eunotia　属、Diploneis　属、Pinnularia　属、Melosira　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（ヨシ属含む）	石英・長石類）斜長石（双晶）、複合石英類（微細）、複合石英類、ジルコン、角閃石類、ガラス質
133	豊田市	水入	古墳中期	高杯	80～300 μm	900 μm	放散虫化石（1個体）、珪藻化石（淡水種Cymbella　属、Diploneis　属、Pinnularia　属、Melosira　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン、角閃石類、［凝灰岩質］
134	豊田市	水入	古墳中期	ナデ甑	100～700 μm	2.9mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、イネ頴珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン
135	豊田市	水入	古墳中期	ハケ甕	80～700 μm	2.4mm	珪藻化石〈不明種〉、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）斜長石（双晶）、単斜輝石、角閃石類、ジルコン、雲母類
136	豊田市	水入	古墳中期	ハケ小甕（韓式影響）	100～700 μm	1.6mm	珪藻化石（淡水種Cymbella　属、Pinnularia　属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類）複合石英類）斜長石（双晶）、ガラス質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン
137	豊田市	水入	古墳中期	板ナデ甕	60～700 μm	2.5mm	珪藻化石（淡水種Eunotia　属）、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）斜長石（双晶）〉複合石英類）複合石英類（微細）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類、雲母類
138	豊田市	水入	古墳中期	ハケ台付？甕	70～750 μm	1mm	骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン、角閃石類、［ガラス質］
139	豊田市	水入	古墳中期	ナデ甕	70 μm～1.0mm	2.5mm	珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）複合石英類（微細）、ジルコン、角閃石類
140	豊田市	水入	奈良～平安時代	三河型甕	100～600 μm	2.6mm	胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）角閃石類、単斜輝石、ジルコン
141	豊田市	水入	古墳中期	ハケ・ナデ甕	80～700 μm	3.1mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、ジルコン
142	豊田市	水入	古墳中期	ハケ甕（布留系）	110～500 μm	3.9mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）角閃石類）複合石英類、雲母類、ガラス質、ジルコン
143	豊田市	水入	古墳中期	ハケ台付甕	120～500 μm	1.2mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）斜長石（双晶）〉複合石英類）カリ長石（ﾊﾟｰﾃｲﾄ）、ジルコン
144	豊田市	水入	古墳中期	ハケ甕	80～700 μm	1.5mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）斜長石（双晶）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類
145	豊田市	水入	古墳中期	ナデ甕	80～700 μm	1.4mm	珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）ガラス質）複合石英類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン
146	豊田市	水入	古墳中期	有稜杯部高杯	60～500 μm	2mm	胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン、［ガラス質］
147	豊田市	水入	古墳中期	椀状杯部高杯	70～500 μm	1.3mm	放散虫化石（1個体）、珪藻化石（淡水種Pinnularia　属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石やや多い	石英・長石類）複合石英類、複合石英類（微細）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類
148	豊田市	水入	古墳中期	大型高杯	70～400 μm	900 μm	骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類）斜長石（双晶）〉ガラス質、ジルコン、角閃石類
149	豊田市	水入	7 世紀	ハケ長胴甕	100～900 μm	1.4mm	骨針化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）雲母類）複合石英類）ジルコン、角閃石類
150	豊田市	水入	7 世紀	ハケ長胴甕	100 μm～1.0mm	2.2mm	放散虫化石（2個体）、珪藻化石（海水種Coscinodiscus　属/Thalassiosira　属、不明種）、骨針化石多い、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）複合石英類（微細）、角閃石類、雲母類、［ガラス質］
151	豊田市	水入	7 世紀	ハケ小甕	120～900 μm	2.2mm	珪藻化石（淡水種Cymbella　属、Pinnularia　属、Eunotia　属など多い、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類）ガラス質、角閃石類、雲母類

（4）考察

A）微化石類による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度）、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれている場合のほか、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a)海成粘土を用いた胎土、b)淡水成粘土を用いた胎土、c)水成粘土を用いた胎土、d)その他の粘土、に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。なお、水成を指標する珪藻化石が少ない場合には（淡水成）とした（第51～52表）。なお、同表に示した出現の凡例は、△が検出、○が多い、◎が多産、ナシが検出されない、である。

a)海成粘土を用いた胎土（1胎土）

この胎土中には、放散虫化石や海水種珪藻化石が特徴的に含まれ、淡水種珪藻化石は全く含まれていなかった。ただし、No.61やNo.21あるいはNo.25の胎土中には、同様に放散虫化石または海水種珪藻化石が含まれていたが、淡水種珪藻化石を伴うことから淡水成としたことから、材料としては同様の粘土である可能性が高いと思われる。

b)淡水成粘土を用いた胎土（102胎土）

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。特に、多くの土師器甕胎土中には、Eunotia biareoferaやEunotia属などの珪藻化石が特徴的に多く含まれていたことから、これら珪藻種は粘土の材料に関する重要な要素と考えられる。これらの胎土は、粘土中の微化石類の特徴から極めて類似した材料と言える。

なお、No. 1 No.22、No.33、No.131、No.132の胎土では、沼沢湿地環境で堆積したことを指標する沼沢湿地付着生指標種群Eunotia praerupta var.bidensなどが含まれていた。

c)水成粘土を用いた胎土（38胎土）

これらの胎土中には、骨針化石や不明種珪藻化石が含まれていた。

d)その他粘土を用いた胎土（10胎土）

これら胎土中には、水成起源を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

第51表　粘土・砂粒・鉱物一覧（1）

番号	器　種	遺跡	粘土の特徴									砂粒の特徴								鉱物の特徴					その他の特徴
			分類	種　類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	植物珪酸体化石	分類	堆積岩類	深成岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	片岩類	テフラ	角閃石類	輝石類	ジルコン	ザクロ石類	雲母類	
1	三河型甕	梅坪	○	淡水成			○	○	△	○	◎	B g		+++					+			++		++	
2	三河型甕	梅坪	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+		+		++	
3	三河型甕	梅坪	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B g		+++					++	+		++		+	
4	三河型甕	梅坪	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+			+		+	
5	三河型甕	梅坪	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B g		++					＋	+	(+)	+		+	
6	甕	中条	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		+					＋	+		++		+	
7	甕	中条	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+	(+)	++		++	陸生珪藻化石
8	甕	中条	□	水　成					△	△	△	B		++							(+)	+		+++	褐鉄鉱が多い
9	甕	中条	○	淡水成			◎	○		○	◎	B g		++					+	+				++	
10	甕	中条	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B g		++					+	+		+		++	
11	甕	中条	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
12	三河型甕	ハサマ	○	淡水成			○	○	△	△	◎	B g		++					+	+		+		+	
13	三河型甕	ハサマ	○	淡水成			○	○	△	◎	◎	B g		++					+	+	+	+		+	
14	三河型甕	ハサマ	○	（淡水成）			△	△	△	○	◎	B g		++					+	+		++		++	
15	三河型甕	ハサマ	○	淡水成		(+)	○	○	△	△	◎	B g		++					+	+	(+)	+		+	
16	三河型甕	ハサマ	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++						+	(+)	++		+	
17	三河型甕	ハサマ	○	淡水成			○	○	△	○	◎	B g		++					+	+	(+)	+		+	
18	甕	御用池	○	（淡水成）			△		△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
19	甕	御用池	□	水　成					△		△	B		++					(+)	+		++		++	
20	甕	御用池	○	淡水成			○	○	△	○	◎	B g		++					+	+	(+)	++		+	
21	甕	御用池	○	（淡水成）	(+)		△		△	△	◎	B g		+					+	+		++		+	砂粒少ない
22	甕	御用池	○	淡水成			○	○	△	◎	○	B g		++				(+)	+	+	+	+	+	++	
23	甕	御用池	○	（淡水成）			△		△	△	○	B g		++					+	+	+	+		+	
24	三河型甕	八ッ面山	○	（淡水成）			△		△	△	○	B g		++					+	+	+	++	+	+	
25	三河型甕	八ッ面山	○	（淡水成）		(+)	△		△	△	○	B g	(+)	++					+	+	(+)	++	+	++	
26	三河型甕	八ッ面山	○	淡水成			○	△	△	○	○	B g		++					+		(+)	++		++	
27	三河型甕	八ッ面山	○	（淡水成）			△		△	△	○	B g		++					+	+	(+)	++		+	
28	三河型甕	八ッ面山	○	淡水成			○	○	△	○	○	B g		++					+	+		++		++	
29	後期三河型甕	矢作古川		その他							△	B		+++						++	++	+		+++	尖った砂粒目立つ、断層粘土？
30	ハケ長胴甕	水入	□	水　成					△	△	○	B g		++					+	+	+	++		++	
31	後期三河型甕	水入		その他							△	B		++					(+)	++	+	+		+	
32	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	○	△	△	◎	B g		++					+	+		+		+	砂粒少ない
33	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	△	○	B g		++					+	+		++		+	
34	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	◎	△	◎	◎	B g		++					+	+		+		+	砂粒ややや少ない
35	三河型甕	水入	○	淡水成			○	○	△	△	◎	B g		++					+	+	(+)	++		+	
36	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+		++		++	
37	甑	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B g		++					+	+		+		+	
38	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	砂粒ややや少ない
39	ハケ小甕	水入		その他							△	B		++						+		+		+	褐鉄鉱が多い
40	小甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B g		++					+	+	(+)	+		++	
41	ナデ長胴甕	水入		その他							△	B		++						+		+		++	褐鉄鉱が多い
42	ナデ鍋	水入	□	水　成					△	△	○	B g		++					+	+	(+)	++	+	++	
43	ハケ・ナデ小甕	水入	□	水　成				△	△	△	△	B c	+	++					+	+				+	細粒褐鉄鉱が多い
44	ナデ長胴甕	水入	□	水　成					△	△	△	B c	+	++					+	+		+		+	
45	ハケ長胴甕	水入		その他						△	△	B		++						+		++	+	++	
46	甕（古代）	水入	□	水　成				△	△	△	○	B c	+	++					+	+		++		+	
47	ナデ長胴甕	水入	□	水　成					△	△	△	B		++					(+)	+		+		+	
48	ナデ小甕	水入	□	水　成					△		△	B		++					(+)	+		+		++	
49	ハケ長胴甕	水入		その他							－	B		++								++		+++	ガウジ？
50	ナデ甑	水入	□	水　成					△		△	B	(+)	+							+	+		++	
51	ナデ小甕	水入	○	（淡水成）			△		△		△	B c	+	++				(+)	(+)			+		+	
52	甕（古代）	水入	□	水　成				△	△	△	△	B c	+	++				(+)	(+)	+		+		+	
53	長胴ハケ小甕	水入	□	水　成					△		△	B c	+	++					(+)	+	+			+	陸生珪藻化石
54	ハケ長胴甕	水入	□	水　成					△		△	B c	+	++					(+)	+				+	
55	ナデ長胴甕	水入	○	淡水成			○	△		△	○	B		++					(+)	+		+		+	
56	ナデ長胴甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	○	B		++					(+)	+		++		+	
57	三河型小甕	水入	○	淡水成			○	○		△	◎	B g		++					+	+		++		++	
58	－	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++					(+)	+		++		++	
59	－	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++					(+)	+		++	(+)	++	
60	濃尾型甕	水入		その他							－	C b	++	+								(+)		+	微細黒色粒子高密度出現
61	濃尾系ハケ長胴甕	水入	○	（淡水成）		(+)	△		△	△	△	B c	+	++					(+)	+		+		+	
62	ハケ長胴甕	水入	○	淡水成			○	○	△	○	○	B g		++					+	+		++		+	
63	ハケ甑	水入	○	（淡水成）			△				△	B		++						+	+	++		+	
64	ハケ甕（丸底）	水入	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B		++					(+)	+		++		++	
65	ハケ鍋	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++					(+)	+	+	++		+	
66	三河型小甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	○	B		++					(+)	+		++		++	
67	ナデ長胴甕	水入	□	水　成		(+)		△	△	△	◎	B g		++					+	+	+	+		+	
68	三河型甕	水入	○	淡水成			○	○	△	△	◎	B g		++					+	+		+		+	
69	三河型小甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
70	ナデ長胴甕	水入	□	水　成					△		△	B		++		(+)				+	+	+		+	
71	ナデ長胴甕	水入	□	水　成					△	△	○	B		++					(+)	+		++		+	
72	ナデ鍋	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++					(+)	+	+	+		+	
73	ナデ小甕	水入	○	（淡水成）			△			△	○	B		++					(+)	+	+	+		+	
74	ナデ長胴甕	水入	□	水　成				△	△		○	B		++					(+)	+	+	+		++	
75	ナデ長胴甕	水入	□	水　成					△		○	B		++					(+)	+		++		++	
76	ナデ長胴甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++					(+)	+		++		++	

目次
終了

第 52 表　粘土・砂粒・鉱物一覧（2）

番号	器　種	遺跡	粘土の特徴									砂粒の特徴								鉱物の特徴					その他の特徴
			分類	種　類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	植物珪酸体化石	分類	堆積岩類	深成岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	片岩類	テフラ	角閃石類	輝石類	ジルコン	ザクロ石類	雲母類	
77	ハケ小甕	水入	○	淡水成			○	△	△	◎	◎	B		++					(+)	+		+		++	
78	ナデ長胴甕	水入	□	水　成				△	△	△	○	B		++					(+)	+		+		++	
79	ナデ長胴甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	△	B		++					(+)	+		+		++	
80	ナデ長胴甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	△	B g		++					+	+		+		+	
81	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	△	B	(+)	++					(+)	+	+	++		+++	
82	ナデ長胴甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B		++					(+)	+		++		+	
83	ハケ小甕	水入	○	（淡水成）			△	△		△	○	B		++					(+)	+		++		++	
84	ナデ鍋	水入	○	淡水成			○	△	△	△	○	B		++					(+)	+	+	++		+	
85	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B		++					(+)	+		++		+	
86	三河型小甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B		++					(+)	+		++		+	
87	ナデ長胴甕	水入	○	（淡水成）			△		△		○	B		++					(+)	+	+	++		+	
88	三河型甕	水入	□	水　成				△			△	B		++					(+)	+		++		+	
89	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B		++					(+)	+	+	++		+	
90	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B		++					(+)	+	+	+		++	
91	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+	+	++		+	
92	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
93	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	◎	B		++					(+)	+		++		++	
94	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B		++					(+)	+		++		+	
95	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
96	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	○	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
97	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	○	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
98	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
99	三河型小甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B g		++					+	+		++		+	
100	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B		++					(+)	+		+		+	
101	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	○	△	○	◎	B		++					(+)	+	+	++		+	
102	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	△	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
103	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B		++					(+)	+		++		+	
104	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B		++					(+)	+		+		++	
105	三河型小甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
106	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	○	B		++					(+)	+		+	+	++	
107	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	○	△	◎	◎	B g		++					+	+	+	++		+	
108	三河型小甕	水入	○	淡水成			○	△	△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
109	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	○	○	B g		++					+	+		+		+	
110	三河型甕	水入	○	淡水成			◎	△	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
111	三河型小甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	○	B		++					(+)	+		+		+	微細黒色粒子高密度出現
112	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	○	B		++					(+)	+	+	++		++	
113	三河型小甕	水入	□	水　成				△	△	△	○	B g		++					+	+	+	+		++	微細黒色粒子高密度出現
114	三河型甕	水入	□	水　成				△	△	△	○	B g		++					+	+	+	+		++	
115	三河型甕	水入	○	（淡水成）			△		△	△	○	B g		++					+	+		+		++	
116	三河型小甕	水入	○	淡水成			○		△	△	○	B g		++					+	+		+		++	
117	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	B g		++					+	+		+		+	
118	三河型甕	水入	○	淡水成			○	△	△	○	○	B		++					(+)	+		+		+	
119	蓋（暗紋あり）	水入	○	（淡水成）			△		△	△	○	B		+					(+)	+		+		+	黒色粒子多産
120	皿（暗紋あり）	水入	○	（淡水成）			△		△	△	◎	B c	+	+					+	+		++		+	
121	椀（暗紋あり）	水入	□	水　成					○	△	○	B g		+					+	+		++		+	微細黒色粒子高密度出現
122	台付甕	水入		その他							△	B		++						+		++		+++	
123	台付甕	水入	□	水　成					△		△	B		++						+		++		+++	
124	甕	水入	□	水　成					△		△	B		++						+		++		+++	
125	高杯	水入	□	水　成					△		△	B		++						+		+		+++	
126	高杯	水入	□	水　成					△		△	B c	+	+						+	+	+		+++	
127	高杯	水入	□	水　成					△		△	B		++				(+)		+	+	+		+++	
128	甕（貝殻条痕）	水入	○	淡水成			○	○	△	○	○	B c	+	++					(+)	+		+		+	植物珪酸体化石高密度出現
129	ナデ小甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	○	◎	B g	(+)	+					+	+	+	+		+	
130	ハケ・ナデ甕	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	◎	B g		++					+	+		++		+	
131	高杯	水入	○	淡水成			○		△	△	◎	G b	+	+					++	+		+		+	
132	高杯	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	G b	+	+					++	+		+		+	
133	高杯	水入	○	淡水成			○	△	△	○	◎	G b	+	+		(+)			++	+		+		+	
134	ナデ甑	水入	○	（淡水成）			△		△	△	△	B c	+	++					(+)	+		+		++	陸生珪藻化石
135	ハケ甕	水入	□	水　成				△			△	B		++					(+)	+		+		++	
136	ハケ小甕（韓式影響）	水入	○	（淡水成）			△	△	△	△	○	B g		++					+	+		+		+	
137	板ナデ甕	水入	○	（淡水成）			△		△		△	B		+						+	+	+		++	
138	ハケ台付？甕	水入	□	水　成					△		△	B c	+	+					(+)	+		+		+	
139	ナデ甕	水入	□	水　成				△		△	△	B c	+	++					(+)	+		+		++	
140	三河型甕	水入		その他						△	△	B		+					(+)	+		+		++	
141	ハケ・ナデ甕	水入	□	水　成					△		△	B		+					(+)	+		+		++	
142	ハケ甕（布留系）	水入	□	水　成					△		△	B		+					(+)	+		+		++	
143	ハケ台付甕	水入	□	水　成					△	△	△	B		+					(+)	+		+		++	
144	ハケ甕	水入	□	水　成					△		△	B		++						+	+	+		+	
145	ナデ甕	水入	□	水　成					△	△	△	G b		+					+++	+		+		(+)	
146	有稜杯部高杯	水入		その他						△	△	B c	+	+					(+)			+		++	
147	椀状杯部高杯	水入	○	（淡水成）	(+)		△		△	△	△	B c	+	+					+	+	+	+		+	
148	大型高杯	水入	□	水　成					△	△	△	B g		+					+	+		+		+	
149	ハケ長胴甕	水入	□	水　成					△		△	B		++						+		+		+++	
150	ハケ長胴甕	水入	☆	海　成	(+)	△		△	○		○	B c	+	++					(+)	+				+	
151	ハケ小甕	水入	○	淡水成			○	△	△	△	○	B g		++					+	+				+	砂粒付着珪藻化石密集

目次
終了

B）胎土中の砂粒組成による分類

本節で設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第52～53表）。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類や複合鉱物類が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、片理複合石英類が片岩類、ガラス質がテフラ(火山噴出物)である。なお、表3に示した出現の凡例は、＋が検出、＋＋が多い、＋＋＋が多産、ナシが検出されない、鉱物の特徴も同様に示した。さらに、推定した起源岩石は、第54表の組み合わせに従って分類した。

最も多く見られた組成は、深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群（65胎土）、深成岩類を主体としたＢ群（64胎土）、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群（17胎土）、テフラを主体として深成岩類を伴うＧｂ群（8胎土）、堆積岩類を主体として深成岩類を伴うＣｂ群（1胎土）である。ただし、深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群では、テフラ（ガラス質）が必ずしも多く含まれている訳ではなく、これらガラス質が粘土に伴うことを考慮すると、ほぼＢ群に近い組成と考えられる。

なお、全体的には、深成岩類を主体とした砂粒組成が大半を占め、全体で164胎土に達する。

C）胎土の粘土材料と砂粒組成

粘土材料は、その種類が海成、淡水成、水成、その他の4種類に分類された。また、砂粒は、Ｂｇ群、Ｂ群、Ｂｃ群、Ｇｂ群、Ｃｂ群の5群に分類された。

このうち淡水成粘土は、深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群において最も多く、次いで深成岩類を主体としたＢ群である（表5）。特に、淡水種珪藻化石のEunotia biareofera やEunotia属などを特徴的に含む淡水成粘土は、同様にＢｇ群やＢ群の砂粒組成を伴っていることから、矢作川流域に堆積した粘土層と考えられる。

D）各地域の土師器の特徴

豊田市梅坪遺跡出土甕　対象とした甕は三河型の甕であるが、粘土は、淡水種珪藻化石Eunotia biareofera

第53表　胎土中岩石片の分類と組み合わせ

			第2出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg	

第54表　粘土材料と砂粒組成

		砂粒組成					合計
		B	Bc	Bg	Gb	Cb	
粘土の種類	海水成		1				1
	淡水成	15	1	31	3		50
	（淡水成）	20	5	27			52
	水　成	21	9	7	1		38
	その他	8	1			1	10
合計		64	17	65	4	1	151

やEunotia属を特徴的に含む典型的な淡水成粘土を用いている。砂粒は、深成岩類主体でありテフラを伴うＢｇ群に属する。なお、これらの粘土中には、ヨシ属をはじめとしてイネ科植物の珪酸体化石を多量に含んでいる。

刈谷市中条遺跡出土甕　対象とした甕はこの地域を代表する甕であるが、粘土は、珪藻化石の少ない概ね淡水成粘土を用いている。これら粘土中には淡水種珪藻化石Eunotia biareoferaやEunotia属を含む胎土もある。砂粒は、深成岩類主体でありテフラを伴うＢｇ群に属する。試料No. 8の甕は、粘土が水成、砂粒組成が深成岩類を主体としたＢ群である。なお、これらの粘土中には、ヨシ属をはじめとしてイネ科植物の珪酸体化石を多量に含んでいる胎土が多い。

岡崎市ハサマ遺跡出土甕　対象とした甕は三河型の甕であるが、粘土は、淡水種珪藻化石 Eunotia biareofera や Eunotia 属を特徴的に含む典型的な淡水成粘土を用いている。砂粒は、深成岩類主体でありテフラを伴うＢｇ群に属する胎土を主体とする。試料No.16の甕は、粘土が淡水成、砂粒組成が深成岩類を主体としたＢ群である。なお、これらの粘土中には、ヨシ属をはじめとしてイネ科植物の珪酸体化石を多量に含んでいる。

安城市御用池遺跡出土甕　対象とした甕はこの地域を代表する甕であるが、粘土は、淡水成粘土および水成粘土を用いている。これら粘土中には淡水種珪藻化石Eunotia biareoferaやEunotia属を含む胎土もある。砂粒は、深成岩類主体でありテフラを伴うＢｇ群に属する。試料No.19の甕は、粘土が水成、砂粒組成が深成岩類を主体としたＢ群である。なお、これらの粘土中には、ヨシ属をはじめとしてイネ科植物の珪酸体化石を多量に含んでいる胎土が多い。

西尾市八ツ面山北部遺跡群・矢作古川遺跡出土甕　対象とした甕は三河型の甕と後期三河型の甕であるが、粘土は、三河型甕が淡水成粘土、後期三河型甕がその他粘土を用いている。これら粘土中には淡水種珪藻化石Eunotia biareoferaやEunotia属を含む胎土もある。砂粒は、三河型甕が深成岩類主体としてテフラを伴うＢｇ群、後期三河型甕がＢ群に属する。

なお、三河型甕胎土中には、ヨシ属をはじめとしてイネ科植物の珪酸体化石を多量に含んでいる。

豊田市水入遺跡出土甕　以下では、主な器種について粘土と砂粒組成の特徴について述べる。

a.三河型甕（No.140を含む）　三河型甕は、35試料である。砂粒組成は、深成岩類を主体としたＢ群と深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群からなる。Ｂ群では淡水成粘土を使用した胎土が13胎土、

水成粘土を使用した1胎土、その他粘土を使用した1胎土（No.140）である。また、Ｂｇ群では淡水成粘土を使用した19胎土と水成粘土を使用した1胎土である。なお、これら粘土中には淡水種珪藻化石Eunotia biareofera やEunotia属を含む胎土が多い。

b.三河型小甕　三河型小甕は、10試料である。砂粒組成は、三河型甕と同様、深成岩類を主体としたＢ群と深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群からなる。Ｂ群では3胎土とも淡水成粘土を使用した胎土である。Ｂｇ群では淡水成粘土を使用した6胎土、水成粘土を使用した1胎土である。なお、これら粘土中には淡水種珪藻化石Eunotia biareofera やEunotia属を含む胎土が多い。

c.ナデ長胴甕　ナデ長胴甕は、16試料である。砂粒組成は、深成岩類を主体としたＢ群と深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群からなる。Ｂ群では淡水成粘土を使用した6胎土、水成粘土を使用した7胎土、その他粘土を使用した1胎土である。Ｂｇ群では淡水成粘土を使用した1胎土、水成粘土を使用した2胎土である。Ｂｃ群は水成粘土である。

d.ハケ長胴甕　ハケ長胴甕は、5試料である。砂粒組成は、深成岩類を主体としたＢ群と深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群からなる。Ｂ群ではいずれもその他粘土を使用した2胎土である。Ｂｇ群では淡水成粘土と水成粘土を使用した各1胎土である。Ｂｃ群は水成粘土である。

e.弥生末の台付甕・甕・高杯（No.122～No.127）　試料は、台付甕が2試料、甕が1試料、高杯が2試料である。砂粒組成は、深成岩類を主体としたＢ群が多く、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群からなる。粘土は、微化石類の少ない水成粘土またはその他粘土を使用している。

f.古墳中期の甕・高杯（No.128～No.133）　試料は、貝殻条痕の甕が1試料、ナデ小甕が1試料、ハケ・ナデ甕が1試料、高杯が3試料である。砂粒組成は、貝殻条痕の甕が深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群、ナデ小甕およびハケ・ナデ甕が深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群、高杯がいずれもテフラを主体として深成岩類や堆積岩類を伴うＧｂ群である。これらの胎土は、淡水成粘土を使用している。なお、いずれの胎土もヨシ属をはじめとしてイネ科植物の珪酸体化石を多量に含んでいる。

g.古墳中期の甕類および高杯（No.134～No.139、No.141～No.148）　試料は、ハケあるいはナデ甕など14試料である。砂粒組成は、深成岩類を主体としたＢ群、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群、深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群、テフラを主体として深成岩類などを伴うＧｂ群からなる。粘土は、いずれも微化石類の乏しい粘土を使用しており、三河型甕などの材料とは明らかな違いを示している。

h.7世紀の甕類（No.149～No.151）　試料は、ハケ長胴甕など3試料である。砂粒組成は、深成岩類を主体としたＢ群、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うＢｃ群、深成岩類を主体としてテフラを伴うＢｇ群からなる。粘土は、海成粘土、淡水成粘土、水成粘土である。

（6）おわりに

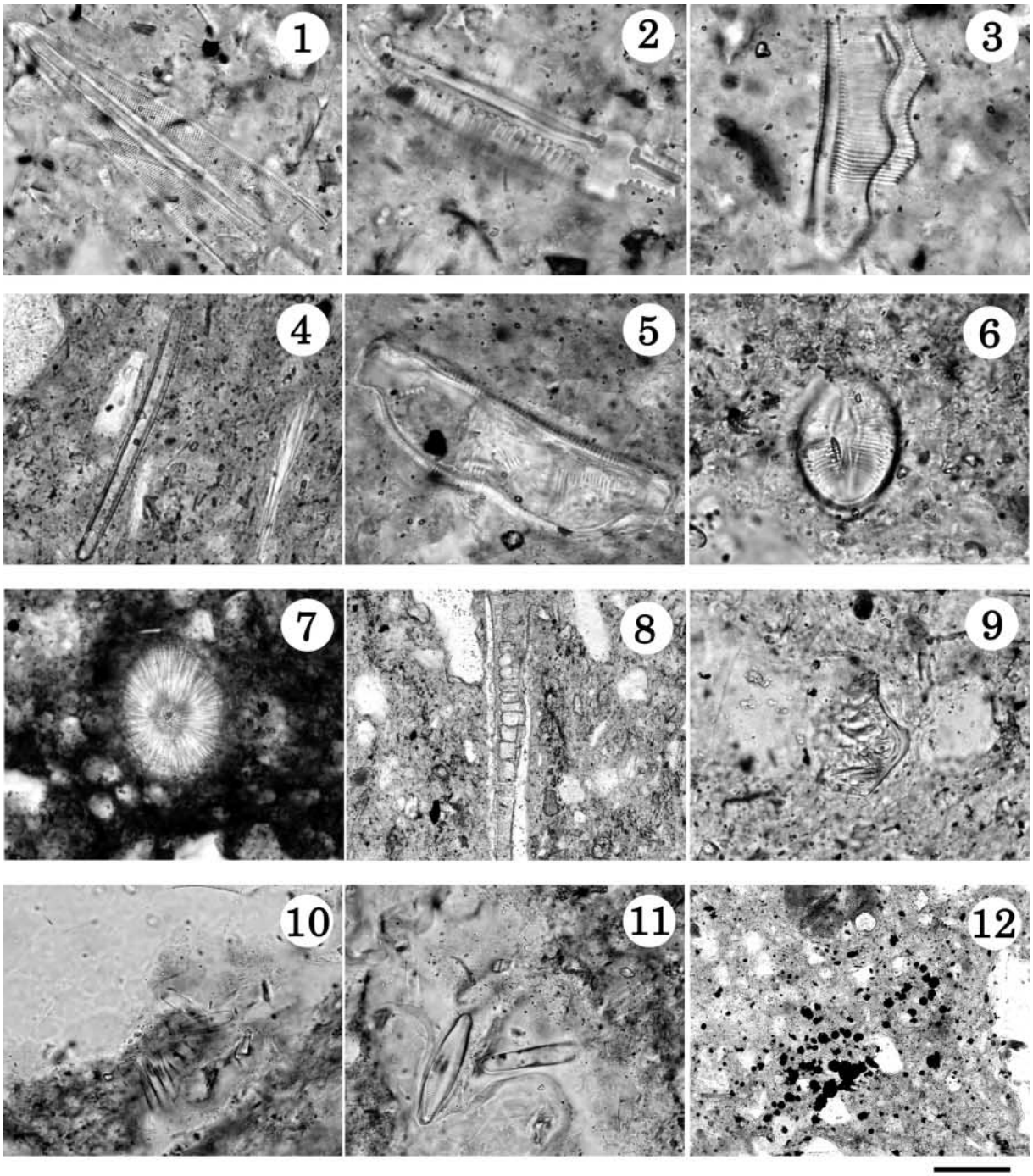
本節では、水入遺跡から出土した三河型甕を中心として、その胎土材料の粘土および砂粒組成について検討した。その結果、比較試料を含めてこの地域周辺（矢作川流域）の基盤岩類の特徴を反映して深

成岩類を主体とした砂粒組成であることが理解された。また、粘土材料では、沼沢地などを指標すると思われる珪藻化石あるいはヨシ属などのイネ科植物の珪酸体化石を特徴的に多く含むことが理解され、粘土材料としてかつて沼沢地で堆積した有機質で良質の粘土を利用したものと推定される。これら胎土中の微化石類の特徴や砂粒組成が類似した胎土は、極めて限られた材料を使用した可能性の高いことを示していると考える。

謝辞　今回、水入遺跡出土土師器の胎土分析を行うに当たり、周辺遺跡の土師器試料を提供していただきました。豊田市郷土資料館天野博之氏、刈谷市教育委員会鵜飼堅証氏、岡崎市郷土館伊藤久美子氏、安城市教育委員会岡安雅彦氏、西尾市教育委員会鈴木とよ江氏、にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42,2,73-88.
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』，平凡社，1612p.
藤根 久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第 6 回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108 － 117.
藤根　久・今村美智子（2001）第 3 節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴.「波志江中宿遺跡」、日本道路公団・伊勢崎市 ･(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.262-277.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27,1-20.
車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39)土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－．日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨、153-156.



図版　土器胎土中の微化石類

（ｽｹｰﾙ；1-7, 11, 12 が 20 μｍ、7, 9 が 50 μｍ、12 が 100 μｍ、8 が 200 μｍ）

1. *Stauroneis phoenicenteron* №107　2. *Pinnularia* 属 №98　3. *Eunotia monodon* №98

4. *Eunotia biareofera* №5　5. *Eunotia praerupta* var. *bidens* №131　6. *Diploneis* 属 №79

7. 放散虫化石 №150　8. 植物珪酸体 №95　9. イネ頴珪酸体 №84

10. 砂粒表面付着珪藻化石群 №151　11. 砂粒表面付着珪藻化石群 №151　12. 胎土中黒色粒子群 №119

第７節　水入遺跡の遺物包含層中より産出した昆虫化石について

森　勇一（愛知県立津島東高等学校）

(1) はじめに

先史～歴史時代の遺物包含層から見いだされた昆虫化石を用い，植生や古環境，人為による自然改変などについての情報を得るための研究は，これまでに多数行われてきた（森 1994,1997,1999）。本論は，愛知県水入遺跡の遺物包含層より産出した昆虫化石とその意義について述べる。

(2) 試料および分析方法

水入遺跡は、矢作川左岸の豊田市渡刈町字下糟目・大屋敷地内に立地する縄文時代早期より中・近世に至る複合遺跡である。遺跡は中央部に矢作川と直交する谷地形が入り込んでいて、しばしば矢作川の氾濫を蒙っていたと考えられるきわめて不安定な場所に位置している。遺跡の名称に、水害の直接の影響を物語る「水入り」の名が認められるのはそのためである。にもかかわらず、遺跡内からは，古墳時代中期（５世紀後半）に掘削された大溝のほか、縄文時代早期および古墳時代・古代・中世・江戸時代など多くの時代の遺構が検出され、これに伴う各期の遺物が出土している。だが、発掘面積に比して、水入遺跡における遺物検出量は決して多いとはいえない状況であった。

昆虫分析試料は、５世紀後半に掘削され 13 世紀前半に埋積が完了したとされる大溝（98 Ｂ区 SD01）内の試料 1、および近世の堆積層（99L 区 SX01）内の試料 2 の計 2 試料であった。これらは、いずれも愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏により遺跡調査の過程で採取され、同科学分析室の作業員の皆さんの努力で抽出されたものである。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で１点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

(3) 昆虫化石群集

水入遺跡の分析試料より抽出された昆虫化石は、現時点での集計で計 154 点であった（第 56 表）。うち、試料 1 から産出した昆虫化石は 93 点、試料 2 からは 61 点が見いだされた。なお、試料 1 および試料 2-1 はいずれもブロック割り法で検出した昆虫化石、試料 2-2 は試料 2-1 を検出したのちの試料を用い水洗浮遊選別法にて抽出したものである。

昆虫化石を分類群ごとにみると、試料 1 および 2 を合わせ目レベルまで分類できたもの 2 目 2 点、科レベル 12 科 89 点、亜科レベル 2 亜科 3 点、族レベル 1 族 3 点、属レベルは 5 属 12 点、種まで同定できたものは 19 種 35 点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が 10 点存在する。検出部位別では、鞘翅（Elytron）が最も多く、続いて腿脛節（Legs）・前胸背板（Pronotum）・胸部（Thorax）などであった。

生態別では、食肉性ないし雑食性の地表性歩行虫を中心に、食糞性や食屍性の歩行虫、陸生の食植性昆虫および食肉性の水生昆虫をまじえる昆虫群集であった。

特徴的な種についてみると、古墳時代中期に開削された大溝の堆積物中（試料1）からは、地表性昆虫では、人糞や大型草食獣の糞に来集する食糞性のセンチコガネ *Geotrupes laevistriatus*（5点）、同じく人糞に多いコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*（2点）、ほぼ同種と考えてよいエンマコガネ属 *Onthophagus* sp.（2点）、オオマグソコガネ *Aphodius haroldianus*（1点）などのほか、食屍性昆虫では、生ゴミや獣糞に集まるハエのウジなどを食するエンマムシ科 Histeridae（3点）が認められた。一方、同一試料中より自然度の高い林床内を徘徊する夜行性のミカワオサムシ *Carabus arowianus*（1点）、同じような環境に生息しカタツムリを捕食することで知られるマイマイカブリ *Damaster blaptoides*（1点）、およびキマワリ属 *Plesiophthalmus* sp.（1点）などが検出されている。

これ以外の地表性昆虫では，湿潤地表面を好むミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.（1点）・ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.（1点）・ヒラタゴミムシ族 Platynini（1点）などが見いだされた。これらはいずれも水辺に多い歩行虫である。一方、2点確認されたセアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* は，乾燥した地表面上や畑作地・人家周辺に生息し、撹乱環境を示唆する地表性歩行虫であるといえる。

試料1から検出された陸生の食植性昆虫は、人が植栽した畑作物や果樹、二次林の樹葉や花粉などに集まるドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（2点）・コガネムシ *Mimela splendens*（2点）・サクラコガネ属 *Anomala* sp.（3点）・クワハムシ *Fleutiauxia armata*（1点）などであった。食植性昆虫の中に、森林性で樹液に集まるカナブン *Rhomborrhina japonica*（6点）や同じく森林性と考えてよい大型のハナムグリ亜科 Cetoniinae（1点）が確認されたことは重要である。

食肉性の水生昆虫では中型のキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis*（1点）や種が特定できていないゲンゴロウ科 Dytiscidae（1点），および食植性の水生昆虫であるガムシ科 Hydrophilidae（1点）が検出されたものの，大型のゲンゴロウやクロゲンゴロウなどは見いだされていない。

近世以降の堆積物とされる試料2からは、稲作害虫（森，1996）として著名なイネネクイハムシ *Donacia provosti* がブロック割り法で1点、また水洗浮遊選別で1点検出されたことが特筆される。また、同じ試料から、水田指標昆虫（森，1996）として知られるヤマトトックリゴミムシ *Lachnocrepis japonica*（2点）が確認された。本試料からは、これ以外に水生・食肉性のヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus*（1点）のほか，食糞性の歩行虫であるコブマルエンマコガネ（1点）・カドマルエンマコガネ *O. lenzii*（1点）、同じく人糞に多いマグソコガネ *Aphodius rectus*（1点）などが発見され、種や属などが特定できていない地表性のオサムシ科 Carabidae（14点）、同じく種や属について決定することが困難なコガネムシ科 Scarabaeidae（3点）が見いだされた。また食植性昆虫で、草本類の葉上に生息することが多いゾウムシ科 Curculionidae（11点）なども確認されている。

（4）昆虫群集が示す古環境とその意義

水入遺跡の分析試料より得られた昆虫化石群集をみると、2試料ともにオサムシ科を中心とした地表性昆虫の出現率が高いことがわかる。この結果は、水入遺跡をめぐる地表環境を考えるうえで興味深い。なかでも、5世紀後半に掘削された大溝中の分析試料（試料1）では、人間生活に伴う周辺環境の汚染を示す食糞性昆虫が多数認められた。人為度の高い環境下の乾燥した地表面上を好むコブマルエンマコガ

ネや、人糞に多く集まるセンチコガネ・オオマグソコガネなどの存在は、時代を特定することはできないものの大溝周辺に活発な人間活動があったことを示している。畑作地や人家周辺の撹乱環境の乾燥した地表面上を徘徊するセアカヒラタゴミムシの産出も、同様の推定を可能にする地表性歩行虫と考えられる。

また，コガネムシやドウガネブイブイ・サクラコガネ属・クワハムシといった食植性昆虫の発見は、昆虫化石を産出した大溝周辺の植生に由来するものと考えられる。ドウガネブイブイやサクラコガネ属はブドウ・カキなどの果樹や各種畑作物を加害する畑作害虫として知られる。コガネムシは、サクラやクヌギなど多くの広葉樹の葉を食する食葉性昆虫であるが、人が植栽した果樹や畑作物の葉を食害することも多い。ハムシ科のクワハムシは、カイコの食草である桑の葉を加害する昆虫として有名なものの一つである。

昆虫分析の結果は、矢作川の氾濫の影響を強く受け地形のうえではほぼ河道内と考えてよいきわめて不安定な場所に人間が何度も進出し、生活拠点を構築して活発に生産活動を行ったことを示している。水流を制御するすべのなかった時代における人の営みのたくましさには、感動するほかない。

同一試料に、ミカワオサムシやマイマイカブリなど森林性の地表性歩行虫や、カナブン・ハナムグリ亜科など自然度の高い林内の樹液に集まる昆虫が含有されるのは、遺跡の後背地にこうした森林が存在したことを示している。

近世に埋積が進行したとされる谷地形堆積物に、稲作害虫であるイネネクイハムシが含有され、水稲を加害するウンカや鱗翅目の幼虫を捕食するヤマトトックリゴミムシの存在は、江戸時代から明治にかけてのころ、水入遺跡周辺に水田があったことを示していると考えられる。なおこうした推定は、発掘調査によって得られた成果とも矛盾しない。

(5) まとめ

水入遺跡の遺物包含層より産出した昆虫化石を同定･分析し，その群集組成から当時の古環境を復元した。昆虫群集には、コガネムシ・サクラコガネ属・クワハムシなどの畑作害虫と、人の居住に伴う環境汚染を示すコブマルエンマコガネ・センチコガ・オオマグソコガネなどのほか、撹乱環境の乾燥した地表面を好むセアカヒラタゴミムシなどの地表性歩行虫が認められた。この結果、古墳時代から中世にかけてのころ、水入遺跡一帯で活発な人の営みがあったことを示している。

また、近世以降の土坑内堆積物に稲作害虫のイネネクイハムシ、稲作指標昆虫のヤマトトックリゴミムシが発見されたことより、遺跡周辺に水田が存在したことが考えられる。

参考文献

森　勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究，33(5)，331-349.

森 勇一（1996）稲作農耕と昆虫．季刊考古学第 56 号，特集・稲作の伝播と長江文明，雄山閣，59-63.

森　勇一（1997）虫が語る日本史－昆虫考古学の現場から．インセクタリウム，34(1)･ 34(2)，18-23，10-17.

森　勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史．国立歴史民俗博物館研究報告第 81 集「歴博国際シンポジウム論文特集号」，311-342.

第55表　水入遺跡から産出した昆虫化石

生態		和　名	学　名	試料1	試料2－1	試料2－2	小計	
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	A1			1	3
		ヒメゲンゴロウ	*Rhantus pulverosus* (Stephens)			E1	1	
		キベリクロヒメゲンゴロウ	*Ilybius apicalis* Sharp	E1			1	
	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	L2			2	6
		ネクイハムシ亜科	Donaciinae		E1	T1	2	
		イネネクイハムシ	*Donacia provosti* Fairmaire		E1	E1	2	
地表性	食糞・食屍性	エンマコガネ属	*Onthophagus* sp.	E1 A1			2	16
		コブマルエンマコガネ	*Onthophagus atripennis* Waterhouse	E2		L1	3	
		カドマルエンマコガネ	*Onthophagus lenzii* Harold			L1	1	
		センチコガネ	*Geotrupes laevistriatus* Motschulsky	P1 E1 L3			5	
		マグソコガネ	*Aphodius rectus* (Motschulsky)			E1	1	
		オオマグソコガネ	*Aphodius haroldianus* Balthasar	E1			1	
		エンマムシ科	Histeridae	A2 L1			3	
	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae	H2 P2 E1 T1 A1 5 L4	E1	H3 E2 T1 A5 L3	38	58
		ミカワオサムシ	*Carabus arrowianus* Breuning	E1			1	
		ヤマトトックリゴミムシ	*Lachnocrepis japonica* Bates			E2	2	
		ミズギワゴミムシ属	*Bembidion* sp.	E1			1	
		ツヤヒラタゴミムシ属	*Synuchus* sp.	E1			1	
		ヒラタゴミムシ族	Platynini	P1		P2	3	
		セアカヒラタゴミムシ	*Dolichus halensis* (Schaller)	E2			2	
		ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae	P1			1	
		マイマイカブリ	*Damaster blaptoides* Kollar	E1			1	
		キマワリ属	*Plesiophthalmus* sp.	L1			1	
		ハネカクシ科	Staphylinidae	P2		H1 P2 E1 A1	7	
陸生	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae	H1 E1 L2		H1 E1 L1	7	50
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.	E2 L1		P1 E3	7	
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea* Hope	P1 E1			2	
		コガネムシ	*Mimela splendens* Gyllenhal	E2			2	
		カナブン	*Rhomborrhina japonica* Hope	E2 A4			6	
		ハナムグリ亜科	Cetoniinae	E1			1	
		アオハナムグリ	*Eucetonia roelofsi* (Harold)	E1			1	
		コメツキムシ科	Elateridae	E2		E1	3	
		ハムシ科	Chrysomelidae	E4		E2 L1	7	
		クワハムシ	*Fleutiauxia armata* Baly	E1			1	
		ゾウムシ科	Curculionidae	E1		H3 E8	12	
		サビキコリ	*Agrypnus binodulus* Motschulsky	P1			1	
その他		カメムシ目	Hemiptera	T1			1	20
		ツチカメムシ	*Macroscytus japonensis* Scott	A1			1	
		テントウムシ科	Coccinellidae	E1			1	
		アリ科	Formicidae	H3 T2 A1		H1	7	
		双翅目	Diptera			C1	1	
		不明甲虫	Coleoptera	E1 O2	E1	H1 E1 A2 O2	10	
合　計				93	4	57	154	

（検出部位凡例）

H(Head):頭部　**An**(Antenna):触角　**M**(Mandible):大腮　**S**(Scutellum):小楯板　**P**(Pronotum):前胸背板　**C**(Chrysalis):囲蛹
E(Elytron):鞘翅　**W**(Wing):上翅　**T**(Thorax):胸部　**A**(Abdomen):腹部　**L**(Leg): 腿脛節　**O**(Others):その他

第 8 節　水入遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）

（1）試料と方法

水入遺跡における古植生および古環境を明らかにする一端として大型植物化石の検討を行った。

大型植物化石の検討は、以下の試料について行った。同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。堆積物試料については、0.25mm 目の篩で水洗洗浄し、回収した残渣から実体顕微鏡下で拾い上げた。

コンテナ No.45（98C2 区）　試料は堆積物試料であり、98C2SX01 の埋土およびそこから出土した土器内に溜まった埋土である。試料数は No.1 ～ 34（26 は欠番）の合計 33 試料であるが、No.28 は 3 試料あったため、便宜的に 28-1 ～ 3 の枝番号を付した。SX01 は、祭祀にも関わるゴミ捨て場と考えられており、上層・中層・下層・下黒色層に層位区分される。上層は古墳時代後期以降～戦国時代、中層・下層は古墳時代中期、下黒色層は古墳時代中期初めである。ただし、ここで扱った上層試料は、中層相当期の土器内埋土であるため、古墳時代中期として捉えられる。なお、中央ベルト 5 層（No.33）、中央ベルト 7 層（No.34）は中層相当層であり、ガケ礫直上、ガケ（No.30 ～ 32）は相当層位を確定できない（時期不明）。処理量は 98C2SX01 埋土が 1cm3 ～ 5000cm3、土器内埋土が 5cm3 ～ 450cm3。

コンテナ No.47（99A 区）　抽出済み試料であり、No.1 ～ 136（79、80 は欠番）の合計 134 試料。99ASD01（大溝）を主体とした試料である。SD01 の時期は、第 1 層が戦国時代～近世、第 2 層が鎌倉時代、第 3 層が平安時代、第 4 層が奈良時代、第 5 層が古墳時代中期～後期、第 6 層が古墳時代中期（第 6 層砂直上・砂上・砂層とあるのは第6層下部に相当）、第7～9層が古墳時代中期初めである。なお、No.122（99ASD01 A トレンチ 6 層；古墳時代中期）を除く、A トレンチと書かれた試料（No.16、17、72、73、124 ～ 127）および No.128（SD01 南ベルト 5 層）は層位不明である。SD01 の性格は、下位の第 7 ～ 9 層は灌漑のための導水および祭祀が行われた時期であり、第 6 ～ 5 層以降は、ゴミ捨て場の様相を呈する。SD01 以外の試料の時期は、No.129 ～ 133（99ASD02、99ASD03；屋敷の区画溝）が戦国時代、No.136（レキ中；大溝東土塁）が中世以降であるが、その他は不明である。

コンテナ No.48　抽出済み試料であり、98C2 区（No.1 ～ 33）、99B 区（No.1 ～ 19）、99C 区（No.1 ～ 20）、99D 区（No.1 ～ 56）、その他（98C 区、98D 区、99G 区）の合計 131 試料。98C2 区の試料は SX01 の試料であり、コンテナ No.45 の 98C2SX01 と同一遺構である。ただし、コンテナ No.45 の上層試料が中層相当期の土器内埋土であるのに対して、本試料は堆積物からの抽出試料であるため、上層試料は純粋に古墳時代後期以降～戦国時代である。なお、各層位の後ろの（）内の数字は、大まかな深度を示すものではあるが、厳密な区分ができるものではなく、各層位とも一括試料として捉えられる。99B 試料は、SD01 を主体としており、コンテナ No.47 の 99ASD01 と同一遺構である。No.17（SD01TO2）は層位不明、No.18（99BSD03；屋敷の区画溝）および No.19（99ASK5001）は戦国時代である。なお、注意されたいのは、SD01 のみ調査区が異なっていても同一遺構であるが、他の遺構(SD02、SD03 など)は同一遺構名であっても調査区が異なる場合、別遺構である。99C 試料は、様々な遺構の試料が含まれる。主要なものについて記すと、SD01♯～&は層位不明、　SD03 は戦国時代の区画溝、99CSX13 は 99CSD01 内の土器溜まり

（第5層相当）、他のSX遺構はSD01構築前の旧表土で検出されており、古墳時代中期初め（99A・BSD01の第7～9層）より前と考えられる。99D区試料は、99DSX01を主体としている（先述したように98C2SX01とは別遺構）。第1～7層まであるが、厳密な層位区分ではなく、大まかな深度を示すものであり、戦国時代として一括で捉えられる。残りの試料は、99DSX02（No.51）は戦国時代（99DSX01の一部分）、99DSE03（No.54）は鎌倉時代の井戸、SD02（No.55）は戦国時代の区画溝、その他は不明である。No.なしの98CSD01は近代の溝、98DSB14は古代（8世紀前半）の住居、99GSX01第6層は中世以降である。

コンテナNo.50　抽出済み試料であり、調査区99A区（No.1、2）、99B区（No.3～16）の合計16試料。いずれの調査区もSD01（No.1～9）は、コンテナNo.47、48のSD01と同一遺構である。99BSD03（No.10～14）は戦国時代の区画溝、99BSX02礫層（No.15）は中世（コンテナNo.48の99D SX02（No.51）とは別遺構）、検Ⅰ IG3P（No.16）は時期不明である。

（2）出土した大型植物化石

上記した試料について、大型植物化石の一覧をコンテナNo.45は第1表、コンテナNo.47は第2表、コンテナNo.48は第3表、コンテナNo.50は第4表にそれぞれ示した。主要遺構である99A～99CSD01、98C2SX01、99DSX01については、調査区・層位別に集計して第6表にまとめた。また、時期・遺構別に集計したものを第3表に示し、これを基に時期別のみで集計したものを第7表に示した。なお、第6表、第7表において、時期不明や982SX01上層（古墳時代後期以降～戦国時代）のようにあまりにも時期幅のある試料は割愛した。これによる各時期・遺構の大型植物化石の解釈に大きな影響はないと考える。以下には、まず99A～99CSD01、98C2SX01、99DSX01の大型植物化石を記載し、これら以外の遺構は時期別に概略を示す。

1）99A～99CSD01、98C2SX01、99DSX01

99A～99CSD01　検討された層準は第1層、第4～8層である。古墳時代中期初めの第7、8層は、第7層ではモモ、エゴノキが僅かに得られたのみであったが、第8層では多産した。コナラ幼果・殻斗が非常に多産し、エゴノキもやや目立った。他は、カシワ殻斗・幼果、コナラ属果実、アカメガシワ、クサギ、不明芽が僅かに得られた。古墳時代中期の第6層では非常に多産したが、特に99ASD01で多かった。エゴノキが夥しい量であり、ブドウ属、モモに次いでヤマモモ、カシワ殻斗・炭化殻斗・幼果、サクラ節、アカメガシワ、ヤマブドウ、不明芽も比較的多産した。他は、コナラ殻斗・幼果、アカガシ亜属殻斗、クスノキ、スモモ、カラスザンショウ、ゴンズイ、カキノキなどが僅かに得られた。草本は、ミクリ属、メロン仲間がやや目立ち、カナムグラ、ノブドウ、ヒョウタン仲間種子のほか、虫えい、菌核も得られた。古墳時代中期～後期の第5層も99A区で特に多産し、エゴノキに次いでアカメガシワも多量であった。他は、ブドウ属、モモも比較的多産し、ヤマモモ、クスノキ、ゴンズイ、ヤマブドウ得られた。草本はミクリ属のみが僅かであった。第5層相当の99CSX13は、草本のミクリ属核・炭化核が多産し、木本のカシワ殻斗、クヌギまたはアベマキ果実・炭化果実、モモ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ブドウ属、エゴノキ、草本のジュンサイ、ノブドウが僅かに得られた。奈良時代の4層は、99Aでエゴノキが多産するものの、コナラ幼果、アラカシ果実、サクラ節、虫えいが僅かに得られたのみであった。戦

第56表　コンテナNo.45（調査区98C2）の大型植物化石出土一覧表（数字は個数、0内は半分ないし破片の数を示す）

	No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
	グリッド	IH3d	IH4d	XH20i	XH20i	IH1h	IH1h	IH3e	IH3e	IH3d	XH20h	XH20h	IH1h	IH1h	IH1g	IH4d			
	遺構	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01
	層位			上層	上層	上層	上層	上層	上層	上層	上層	上層	上層	上層	中層	中層	中層	中層	中層(1)
	土器No.			No.322	No.334	No.385	No.413	No.425	No.431	No.435	No.444	No.445	No.447	No.449	No.29	No.65	No.130	No.159	No.160
分類群・部位	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期
ブドウ属	種子							1										(1)	
不明	芽						1												
オモダカ科	種子						1												
カナムグラ	種子															(1)			
カラムシ属	種子									1									
シロザ近似種	種子						1			1								1	
ムラサキケマン	種子																1		
ﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ属,ｵﾗﾝﾀﾞｲﾁｺﾞ属,またはｷｼﾞﾑｼﾛ属	核																		1

	No.	19	20	21	22	23	24	25	27	28-1	28-2	28-3	29	30	31	32	33	34
	グリッド							IH4d	IH6a	IH6a	IH6a	IH6a	IH7a		XH19i		IH5b	IH5b
	遺構	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	中央ベルト	中央ベルト
	層位	中層	中層	中層(1)	中層	中層	中層	中層(2)	下層	下黒色層	下黒色層	下黒色層	下黒色層	ガケレキ直上	ガケ	ガケ	5層	7層
	土器No.	No.164	No.165	No.170	No.182	No.221	No.286							No.11	No.229	No.250		
分類群・部位	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期初め	古墳時代中期初め	古墳時代中期初め	古墳時代中期初め	不明	不明	不明	古墳時代中期	古墳時代中期
ヒノキ	小枝								1									
クワ属	炭化種子											1						
カジノキ	種子													1				
モモ	核															1		
	炭化核											(1)						
キイチゴ属	核	1																
サンショウ	炭化?種子											1						
イヌザンショウ	炭化?種子											(1)						
アカメガシワ	種子													(1)				
	炭化種子										1							
サルナシ	種子											1				2(3)		
ニワトコ	種子									1								
不明	芽					1						1						
ミクリ属	核					1												
	炭化核											1						
イネ	穎								(1)									
	炭化胚乳											2(1)						
キビ	炭化胚乳											1						
ヒエ	炭化胚乳											1						
アワ	炭化胚乳											2						
スゲ属	果実					1												
アサ	炭化種子										1(2)	8(5)						
カナムグラ	果実					2(2)												
	種子			(2)	(2)	(1)					1							
クワクサ	種子		1	1		1												
カラムシ属	種子					3						1				1	2	
ミズ属	種子					2												
サデクサ	果実					(1)												
サナエタデ近似種	果実					1												
タデ属	果実	1							1									
	炭化果実											1						
シロザ近似種	種子				1	1						2					1	
ムラサキケマン	種子																(1)	
マメ科	炭化種子											1						
カタバミ属	種子													1				
エノキグサ	種子			1(1)														
シソ属	炭化果実				1							1						
キランソウ属	果実															2		
ナス属	種子		1	1														
メロン仲間	種子								5(11)									
虫えい														2				
菌核												1						

目次
終了

第57表　コンテナNo.47（調査区99A）の大型植物化石出土一覧表（数字は個数、0内は半分ないし破片の数を示す）

	No.	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
	グリッド	IG6e	IG7d	IG6d	IG6e	IG8b	IG8b	IG9a	IG7dc	IG10a	IG5e	IG5f	IG4f	IG4f	IG8b	IF10t	IF10t	IG6d	IG6e	IG7d	IG8b	IG8b	IG8c	IG8c	IG7c	IG5f	IG5e	IG5e
	遺構	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01
	層位	4層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	5層	Aトレンチ	Aトレンチ(8)	5層 遺物下	5層 遺物下	5層 遺物下	5層 遺物下	5層 遺物下	5層 遺物下	5層 遺物下	6層	6層	6層	6層
分類群・部位	時期	奈良時代	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	不明	不明	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期
ヤマモモ	核					1	(1)				2	1												1				
コナラ	幼果	2																										
エノキ属	核																						1					
クスノキ	種子													1														
モモ	核			1(2)						5(6)			3			1			(1)									
	炭化核									(1)							1											
サクラ属サクラ節	核	3																							1		1	
アカメガシワ	種子			7		28(2)	1		9			12(2)	11(4)					7(4)	1(1)	2		8	86(19)	53(1)		1		
ゴンズイ	種子					1																	1	1				
ヤマブドウ	種子					1					1		1															
ブドウ属	種子					11					10	1	12(1)										2	2	1			
エゴノキ	種子	215(10)	31(8)	48(5)	13(1)		188(13)	8(1)	23(10)	3	35(4)	4		54(3)		1		7(2)	75(18)	108(7)	102(7)			632(72)	230(7)	265(4)		
不明	芽																									1		
ミクリ属	核					1								1										1			1	
ブドウ属	種子																								1			
メロン仲間	種子																											2
ヒョウタン仲間	種子																											1
虫えい		1																					1					

	No.	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
	グリッド	IG5e	IG5e	IG9a	IG9a	IG9a	IG9a	IG9a	IF10t	IF10t	IF10t	IF10a	IF10a	IF10a	IG9a	IF10t	IG7c	IG7d	IG6e	IG6d	IG5f	IF10t	IG10a	IG8b	IG8b	IG6e	IG6e	IG6e
	遺構	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01
	層位	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層 砂直上	6層	6層	6層	6層	6層	6層
分類群・部位	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期
ヤマモモ	核		1												1				4									
カシワ	殻斗				(1)	3(17)			1(13)				1(5)										(1)		2	(2)		
	炭化殻斗																								11			
	幼果					3			1				3		1					2					(1)			
コナラ	殻斗																	(1)										
	幼果																			3								
コナラ属アカガシ亜属	殻斗		(1)																									
コナラ属	果実		(1)																							(1)		
クスノキ	種子										1																	
モモ	核				1		13			8		2											1				6(2)		
サクラ属サクラ節	核										1				1			1	3	2								
サンショウ	種子																								1			
カラスザンショウ	種子										2				2		1											
アカメガシワ	種子			1											3				2	3	1			7	5			
ヤマブドウ	種子	4																	2									
ブドウ属	種子	53	8(1)	1							5								22	2								8
クマノミズキ	核														1		1											
カキノキ	種子																		1									
エゴノキ	種子		1127(48)	2				491(32)			735(35)			402(32)	7(1)	44(13)	2(1)	9(1)	17(2)	10	12(1)	4	2	1	1050(50)			
不明	芽		3					5(1)			1							1		2					3			
ミクリ属	核	1	2													1		2		2				1	1			
カナムグラ	種子																		2									
ブドウ属	種子		1								1								2						1			1
メロン仲間	種子							1											5		4							8(1)
菌核																					1							

	No.	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	81	82	83	84
	グリッド	IG6e	IG6d	IG6d	IG6d	IF10t	IF10t	IF10t	IF10t	IF10t	IF10t	IF11t	IG5e	IG6e	IG6d	IG7c	IG7d	IF10t	IF10t	IG8g	IG8f	IG10h	IG13f	IG9b	IG5e	IG6e	IG7c	IG8b
	遺構	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD02	SD02	SD03	P265	SP01	SD01	SD01	SD01	SD01
	層位	6層	6層	6層	6層	6層 砂上	6層 砂上	6層 砂直上	6層 砂直上	6層 砂直上	6層 砂直上	6層	8層	8層	8層	8層	8層	Aトレンチ(8)	Aトレンチ(8)					6層	6層	6層	6層	6層
分類群・部位	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	不明	不明	戦国時代	戦国時代	戦国時代	不明	不明	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期
アカマツ	維果																			2	3							
ヤマモモ	核	6																										
カシワ	殻斗		1(1)			2(3)					2(2)				1(1)		2	(2)	13(57)									
	幼果					1										(1)	1		21									
コナラ	殻斗														(7)	12(21)	8(8)											
	幼果				1								3	4	24(7)	47(6)	87(5)					(3)						
クヌギまたはアベマキ	果実																											
コナラ属	果実																(1)	(1)	(5)									
ムクノキ	核	1																										
スモモ	核	1																										
モモ	核			(1)		(1)		4		1																	1(1)	
サクラ属サクラ節	核	3			1																							
センダン	核																					(1)						
アカメガシワ	種子	3												2														
ゴンズイ	種子							1																				
ヤマブドウ	種子	4																										
ブドウ属	種子	21																										
エゴノキ	種子	1776(94)			195(6)			32(3)		95(11)			6					(1)	1					33(1)	10(1)	1(1)	9(4)	(3)
クサギ	核												2				(1)											
不明	芽	4			2(4)			1(2)		1					1(2)	1	1							3(4)				
ミクリ属	核	3			2																							
メロン仲間	種子	3																										
ヒョウタン仲間	種子																											
虫えい					1														2									
菌核													5	1	3	1	1											

	No.	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111
	グリッド	IG8b	IG9b	IF10t	IG10a	IG9b	IG10a	IG5e	IG6d	IG7d	IF10t	IG9a	IF10t	IG6e	IG10a	IG6e	IG8c	IG9f	IG9f	IG7c	—	IG8b	IG10a	IG6d	IF10t	IF10t	IG10a	IG9a
	遺構	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01
	層位	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層
分類群・部位	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期
モモ	核									(1)	(1)			1(2)	1			1							(1)	1	2	2
アカメガシワ	種子															9												
エゴノキ	種子	1	5	3(2)	3	3	2	23(4)	22(18)	2	18	2	16(2)	23(15)	56(4)	131(44)	12(3)	18	2	44(1)	9	2		3	34(3)		30	

	No.	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136
	グリッド	IG9a	IG9a	IF10t	IG10a	IF10t	IG8c	IG9a	IF10t	IG10a	IG9b	IF10t	IF10t	IF10t	IF10t	IF10t	IF10t	—	IG9e	IG9e	IG9f	IG10h	IG10h	IG13f	—	IG7g
	遺構	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD02	SD02	SD02	SD03	SD03	P5003	大ミゾ	レキ中
	層位	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層 砂層	7層	8層	Aトレンチ 6層	Aトレンチ	Aトレンチ(6)	Aトレンチ(6)	Aトレンチ(7)	Aトレンチ(8)	南ベルト 5層							上層(1層)	
分類群・部位	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	不明	不明	不明	不明	不明	不明	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	不明	戦国～近世	中世以降
アカマツ	維果																		3	1	2		1		1	1
ヤマモモ	核																					2				
クヌギまたはアベマキ	果実・殻斗																					2				
	果実																1(1)									
コナラ属	果実											1														
モモ	核	2	2	14	1	1		1	1	2			1	4	4	1		1								
エゴノキ	種子			9			1			2	10			7			2							1		

目次
終了

第58表　コンテナNo.48の大型植物化石出土一覧表（数字は個数、0内は半分ないし破片の数を示す）

	調査区	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2
	No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
	グリッド	IH1h	IH1g	IH2f	IH3d	IH3e	IH3e	IH4c	IH4c	IG8r	IG8r	XH20h	IH1h	IH1h	IH1h	IH3d	IH4c	XH20i	IH6a	IG7s	IG8g	IG8r	IG5b	IH3d	IG5c	IG8r	IG8s	IH1g
	遺構	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	中央ベルト	ベルト	SX01	SX01	SX01	SX01
	層位	上層(?)	上層(3)	上層(5)	上層	上層(6)	上層(3)	上層(3)	上層(5)	上層	上層(4)	上層(4)	中層(1)	中層(2)	中層(3)	中層(1)	中層(1)	中層(1)	中層(1)	中層(2)	中層(3)	中層(2)	5層	C層	上層	ガケれき直上	ガケれき直上	ガケ直下
分類群・部位	時期	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳後期2段～横田	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	不明	不明	古墳後期2段～横田	不明	不明	不明
モモ	核	1	1	1	(1)	2	(1)	1	1	1	1	2	2(2)	(1)	2(1)	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	2(2)	1	1
トチノキ	種子																			(5)								

	調査区	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	98C2	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99C	99C
	No.	28	29	30	31	32	33	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1	2
	グリッド	IH1g	IH6a	IH8q	IG7s	IH2e	IH5c	XG19l	IG4g	IG3h	IG3h	XG17o	XG14s	XG16p	XG16p	XG15r	XG15r	XG16p	Ig2i	Ig2i	Ig2i	Ig4g	XG15r	XG20k	IG3o	IG3m	XG7s	XG9s
	遺構	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD03	SK5001	SD01	SD01
	層位	ガケ直下	ガケ直下	ガケ(4)	ガケ(3)	ガケNo.81	中層(1)	4層	5層	5層	5層	5層	5層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	6層	8層	TO2			#	S
分類群・部位	時期	不明	不明	不明	不明	不明	古墳時代中期	奈良時代	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳中期初め	不明	戦国時代	戦国時代	不明	不明
イヌガヤ	種子																								1			
アカマツ	毬果																								1	1		
クリ	果実																									3		
モモ	核	(2)	1	3	1	4	1						1							6(3)		1		1			(1)	1
アカメガシワ	種子																2											
ブドウ属	種子			8																								
チョウセンゴヨウ	種子																											
エゴノキ	種子									1											1	14(2)		1				
不明	芽												(10)					1										
	葉								1																			
ミクリ属	核																	1										
カナムグラ	種子			2																								

	調査区	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99C	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D
	No.	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	グリッド	XH13a	XH1a	XH12a	XH10b	XH13c			XH11a	XH12a	XH12a	XH12a					XH12a	XH12a		ｳH15m	ｳH15n	ｳH13l	ｳH13n	ｳH16m	ｳH19q	ｳH11m	ｳH13l	ｳH13l
	遺構	SD01	SD03	SD01	SD03	SK23	近世あぜ	あぜ上面	SD03	SX13	SX13	SD01	SX07	SX09	SX11	SX11	SX13	SX13	SX14	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01
	層位	畝		&																第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第2層	第2層	第2層
分類群・部位	時期	不明	戦国時代	不明	戦国時代	不明	近世	近世	戦国時代	古墳中期～後期	古墳中期～後期	不明	古墳中期より前	古墳中期より前	古墳中期より前	古墳中期より前	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳中期より前	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代
アカマツ	毬果		1		3		1		2											1		1	1	1	1		1	(2)
オニグルミ	核																				(1)	(1)						
ヒメグルミ	核							(1)																		1		
クルミ属	炭化核												(7)			(1)			(2)									
カシワ	果実・殻斗	(1)																										
	殻斗	(1)									1																	
	幼果	1																										
クヌギまたはアベマキ	果実	1(8)		1(4)							(1)	(4)					(1)											
	炭化果実										(1)																	
モモ	核									3							2											
カラスザンショウ	種子																	1										
アカメガシワ	種子																3											
トチノキ	種子																								(1)			
ブドウ属	種子																3											
エゴノキ	種子					1											(1)											
不明	芽																	1										
ミクリ属	核																69	46										
	炭化核																2	1										
ジュンサイ	種子																1	2										
ノブドウ	種子																1											
虫えい											1						1	1										

	調査区	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D
	No.	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
	グリッド	ｳH13l	ｳH14l	ｳH14l	ｳH14m	ｳH15n	ｳH19q	ｳH11l	ｳH11m	ｳH12k	ｳH12m	ｳH13k	ｳH13l	ｳH13l	ｳH13m	ｳH13n	ｳH14k	ｳH14l	ｳH14m	ｳH14m	ｳH14n	ｳH14n	ｳH15m	ｳH15m	ｳH19q	ｳH11l	ｳH12l	ｳH13k	ｳH13l
	遺構	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01
	層位	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第4層	第4層	第4層	第4層
分類群・部位	時期	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代
アカマツ	毬果	2	2	1		1	1	1	1	1	1	1	1	2(1)	3	1	2		2(1)		2		1(1)	(1)	5(1)	1		1
オニグルミ	核										(1)				(1)			(1)		(1)					(1)		1	
ヒメグルミ	核					1																						
モモ	核																						(1)				(1)	
トチノキ	幼種子				1																							
ハクウンボク	種子																											1

	調査区	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	99D	98C	98D	99G
	No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56				
	グリッド	ｳH13m	ｳH14l	ｳH14l	ｳH14k	ｳH15n	ｳH13l	ｳH13k	ｳH13k	ｳH14k	ｳH14l	ｳH15m	ｳH14l	ｳH14l	ｳH14l	ｳH13o	ｳH14l	ｳH14k	ｳH11l·12l	ｳH13n	ｳH14l				ｳH13k
	遺構	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01	SX02	TO2	TO2	SE03	SD02	P02	SD-01-68	SB14	SX01	
	層位	第4層	第4層	第4層	第4層	第4層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第6層	第6層	第7層									第6層	
分類群・部位	時期	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	不明	不明	鎌倉時代	戦国時代	不明	近代	古代	中世以降	
アカマツ	毬果	1	1(2)	1	1		1	1												1	1				
オニグルミ	核	1	(1)			(1)			(4)					(1)											
スモモ	核											1													
モモ	核							1			1		4	1				(2)	2					1	
エゴノキ	種子											1		8(4)	2	1	11(2)								
ミクリ属	核																					4			

目次
終了

第 59 表　コンテナ No.50 の大型植物化石出土一覧表（数字は個数、0 内は半分ないし破片の数を示す）

分類群・部位	調査区	99A	99A	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B	99B
	No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
	グリッド	IG5e	IG10t	IG1m	XG20k	XG15r	XG15r	IG1j	XG20k	IG4g	IG2m	IG2n	IG3p	IG4p	IG4o	XG17r	IG3p
	遺構	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD01	SD03	SD03	SD03	SD03	SD03	SX02	検。
	層位	6層	6層		4層	5層	5層	6層	6層	7層						礫層	
	時期	古墳時代中期	古墳時代中期	不明	奈良時代	古墳中期～後期	古墳中期～後期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳中期初め	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	中世	不明
アカマツ	毬果												1	2			1
アラカシ	果実										1						
コナラ属	果実			(3)												(1)	
ウメ	核													1			
スモモ	核	1															
モモ	核					2	1		2	1		2		1	1		
エゴノキ	種子		(2)														

国時代～近世の第 1 層は、アカマツ毬果が 1 個体得られたのみであった。

98C2SX01　古墳時代中期初めの下黒色層は、木本ではクワ属炭化種子、モモ炭化核、サンショウ･イヌザンショウの炭化？種子、アカメガシワ炭化種子、サルナシ、ニワトコが僅かであった。草本は、アサ炭化種子がやや目立ち、ミクリ属炭化核、イネ･キビ･ヒエ･アワの炭化胚乳、カナムグラ、タデ属炭化果実、シロザ近似種、マメ科炭化種子、シソ属炭化果実などが得られた。古墳時代中期の下層は、メロン仲間がやや目立つ他は、木本のヒノキ小枝、草本のイネ穎、タデ属が僅かであった。同じく古墳時代中期の中層は、木本ではモモがやや目立ち、キイチゴ属、トチノキ種子、ブドウ属、不明芽が僅かであった。草本は多産する分類群はないが、ミクリ属、オモダカ科、カナムグラ果実･種子、クワクサ、カラムシ属、ミズ属、タデ属、シロザ近似種、エノキグサ、シソ属炭化果実などが得られた。なお、これらは、モモ、トチノキを除き、土器内埋土から得られた種実類である。土器内に残存する可能性があるのは、炭化種実であり、未炭化であれば、モモ核、大型堅果類などだと予想される。上層出土の中期相当層土器には、未炭化微小種実しか含まれていないので、土器内に含まれていたものではなく、上層堆積物が後世に混入した可能性が高いと予想される。中層出土土器は、炭化していたNo.22のシソ属は土器(土器No.182)内に含まれていた可能性があるが、その他はいずれも未炭化であり、土器内に中層堆積物が混入したと予想される。古墳時代後期以降～戦国時代の上層は、モモのみが得られた。時期不明のガケ関連(ガケ礫直上など)は、木本はカジノキ、モモ、アカメガシワ、ブドウ属、サルナシ、草本はカナムグラ、カラムシ属、カタバミ属、キランソウ属が得られた。

99DSX01　アカマツ毬果が多産し、モモ、エゴノキもやや目立つ。他はオニグルミ、ヒメグルミ、スモモ、トチノキ種子･幼種子、ハクウンボクが僅かに得られた。本遺構の層位区分は大まかな深度を示すものであるが、下部ではモモ、エゴノキ、中･上部ではアカマツが多い傾向がある。

2）その他の遺構

古墳時代中期初めより前　検討されたのは、SD01 構築前の旧表土で検出された SX 遺構である。SX07、11、14 でクルミ属炭化核の微小片が少量得られた。

古墳時代中期初め　98C2SX01 下黒色層と SD01 の第 7、8 層が対象であり、詳細は先述した。両者を比較すると、98C2SX01 下黒色層は、栽培植物など人と関わりの深い分類群の炭化種実が目立つ。これは、SX01 が祭祀の要素を伴うゴミ捨て場であったことに関連するであろう。一方、SD01 の組成は、主に大溝周辺の植物相を反映したものと予想される。SD01 も祭祀が行われる場であったと考えられているが、それを示唆するものが余り得られず、草本類も得られない。これは、SX01 が細かい篩目を使用した堆積物試料であるのに対して、SD01 が現地抽出試料であるか、洗い出したにしても篩目が大きかったなど、

第 60 表　SD01、SX01（98C2）、SX01（99D）の大型植物化石集計表（数字は個数、0 内は半分ないし破片の数を示す）

	遺構	SD01					SX13(SD01内土器溜り)	SD01					SX01					SX01							SX02(SX01の一部分)
	調査区	99A	99A	99B	99A	99B	99C	99A	99B	99A	99B	99A	98C2					99D							
	層位	1層	4層	4層	5層	5層	5層相当	6層	6層	7層	7層	8層	上層	中層	下層	下黒色層	ガケ関連	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	第7層	
分類群・部位	時期	戦国時代～近世	奈良時代	奈良時代	古墳時代中期～後期	古墳時代中期～後期	古墳時代中期～後期	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期初め	古墳時代中期初め	古墳時代中期初め	古墳時代後期以降～戦国	古墳時代中期	古墳時代中期	古墳時代中期初め	不明	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代	戦国時代
アカマツ	毬果	1																15	8(2)	19(4)	11(3)	2			
ヒノキ	小枝														1										
ヤマモモ	核				5(1)			25																	
オニグルミ	核																	(2)	1	(4)	2(3)	(4)	(1)		
ヒメグルミ	核																		1						
カシワ	殻斗						1	10(45)				3(1)													
	炭化殻斗							(1)																	
	幼果							12				1(1)													
コナラ	殻斗							(1)				20(36)													
	幼果		2					4				165(18)													
クヌギまたはアベマキ	果実						(6)																		
	炭化果実						(1)																		
アラカシ	果実			1																					
コナラ属アカガシ亜属	殻斗							(1)																	
コナラ属	果実							1(2)				(1)													
エノキ属	核				1																				
ムクノキ	核							1																	
クワ属	炭化種子															1									
カジノキ	種子																1								
クスノキ	種子				1			1																	
スモモ	核							2														1			
モモ	核				12(13)	4	5	65(5)	7(3)	2	1		12(2)	14(4)			14(4)			(1)	(1)	2	6		
	炭化核															(1)									
サクラ属サクラ節	核		3					14																	
キイチゴ属	核													1											
サンショウ	種子							1																	
	炭化?種子															1									
イヌザンショウ	炭化?種子															(1)									
カラスザンショウ	種子						1	5																	
アカメガシワ	種子				234(33)		3	26	2			2					(1)								
	炭化種子															1									
ゴンズイ	種子				3			1																	
トチノキ	種子													(5)											
ヤマブドウ	種子				3			10																	
ブドウ属	種子				38(1)		3	121(1)						1(1)			8								
サルナシ	種子															1	2(3)								
クマノミズキ	核							2																	
カキノキ	種子							1																	
エゴノキ	種子		215(10)		1711(242)	1	(1)	6392(340)	15(2)	2		16										1	8(4)	2	1
ハクウンボク	種子																				1				
クサギ	核											2(1)													
ニワトコ	種子															1									
不明	芽					(10)	1	22(3)	1			3(2)		2		1									
	莉					1																			
ミクリ属	核				3		115	16	1					1											
	炭化核						3									1									
オモダカ科	種子													1											
イネ	籾														(1)										
	炭化胚乳															2(1)									
キビ	炭化胚乳															1									
ヒエ	炭化胚乳															1									
アワ	炭化胚乳															2									
スゲ属	果実													1											
アサ	炭化種子															9(7)									
カナムグラ	果実													2(2)											
	種子							2						(6)		1	2								
クワクサ	種子													3											
カラムシ属	種子													6		1	1								
ミズ属	種子													2											
サデクサ	果実													(1)											
サナエタデ近似種	果実													1											
タデ属	果実													2	1										
	炭化果実															1									
シロザ近似種	種子													6		2									
ジュンサイ	種子						3																		
ムラサキケマン	種子													1(1)											
ﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ属,ｵｵｲﾇﾉﾌｸﾞﾘ属,またはｷｼﾞﾑｼの属	核													1											
マメ科	炭化種子															1									
カタバミ属	種子																1								
エノキグサ	種子													1(1)											
ノブドウ	種子						1	7																	
シソ属	炭化果実													1		1									
キランソウ属	果実																2								
ナス属	種子													2											
メロン仲間	種子							23(1)							5(11)										
ヒョウタン仲間	種子							1																	
	虫えい		1				3	1									2								
	菌核							1				11				1									

目次
終了

第 61 表　時期・遺構別の大型植物化石集計表（数字は個数、0 内は半分ないし破片の数を示す）

	時期	近代	近世	戦国時代～近世	戦国時代						鎌倉時代	奈良時代	古墳時代中期～後期	古墳時代中期		古墳時代中期初め		古墳時代中期初めより前
	調査区	98C	99C	99A	99A	99A	99B	99B	99D	99D	99D	99A･99B	99A･99B･99C	98C2	99A･99B	98C2	99A･99B	99C
	遺構	SD-01-68	近世あぜ・あぜ上面	SD01	SD02	SD03	SD03	SK5001	SX01（含SX02）	SD02	SE03	SD01	SD01（含SX13）	SX01	SD01	SX01	SD01	SX07･09･11･14
分類群・部位	層位			1層					第1～7層			4層	5層	中・下層	6層	下黒色層	7・8層	
アカマツ	毬果		1	1	11	1	10	1	55(9)	1								
イヌガヤ	種子						1											
ヒノキ	小枝													1				
ヤマモモ	核					2							5(1)		25			
オニグルミ	核								3(14)									
ヒメグルミ	核		(1)						1									
クルミ属	炭化核																	(10)
カシワ	殻斗												1		10(45)		3(1)	
	炭化殻斗														(1)			
	幼果														12		1(1)	
コナラ	殻斗														(1)		20(36)	
	幼果											2			4		165(18)	
クヌギまたはアベマキ	果実・殻斗					2												
	果実					(3)							(6)					
	炭化果実												(1)					
アラカシ	果実						1					1						
コナラ属アカガシ亜属	殻斗														(1)			
コナラ属	果実														1(2)		(1)	
クリ	果実							3										
エノキ属	核												1					
ムクノキ	核														1			
クワ属	炭化種子															1		
カジノキ	種子																	
クスノキ	種子												1		1			
ウメ	核						1											
スモモ	核								1						2			
モモ	核						4		8(2)		2		21(13)	14(4)	72(8)		3	
	炭化核															(1)		
サクラ属サクラ節	核											3			14			
キイチゴ属	核													1				
センダン	核					(1)												
サンショウ	種子														1			
	炭化種子															1		
イヌザンショウ	炭化種子															(1)		
カラスザンショウ	種子												1		5			
アカメガシワ	種子												237(33)		28		2	
	炭化種子															1		
ゴンズイ	種子												3		1			
トチノキ	種子								(1)					(5)				
	幼種子								1									
ヤマブドウ	種子												3		10			
ブドウ属	種子												41(1)	1(1)	121(1)			
	炭化種子																	
サルナシ	種子															1		
チョノキ	種子						1											
クマノミズキ	核														2			
カキノキ	種子														1			
エゴノキ	種子								12(4)			215(10)	1712(243)		6407(342)		18	
ハクウンボク	種子								1									
クサギ	核																2(1)	
ニワトコ	種子															1		
不明	芽												1(10)	2	23(3)	1	3(2)	
	刺												1					
ミクリ属	核	4											118	1	17			
	炭化核												3			1		
オモダカ科	種子													1				
イネ	籾													(1)				
	炭化胚乳															2(1)		
キビ	炭化胚乳															1		
ヒエ	炭化胚乳															1		
アワ	炭化胚乳															2		
スゲ属	果実													1				
アサ	炭化種子															9(7)		
カナムグラ	果実													2(2)				
	種子													(6)	2	1		
クワクサ	種子													3				
カラムシ属	種子													6		1		
ミズ属	種子													2				
サデクサ	果実													(1)				
サナエタデ近似種	果実													1				
タデ属	果実													3				
	炭化果実															1		
シロザ近似種	種子													6		2		
ジュンサイ	種子												3					
ムラサキケマン	種子													1(1)				
ﾍﾞﾆｲﾁｺﾞ属ｶﾞﾝｸﾞﾍｲﾁｺﾞ属またはｵﾝﾌﾞﾗﾝ属	核													1				
マメ科	炭化種子															1		
カタバミ属	種子																	
エノキグサ	種子													1(1)				
ノブドウ	種子												1		7			
シソ属	炭化果実													1		1		
キランソウ属	果実																	
ナス属	種子													2				
メロン仲間	種子													5(11)	23(1)			
ヒョウタン仲間	種子														1			
	虫えい											1	3		1			
	菌核														1	1	11	

第 62 表　時期別の大型植物化石集計表（数字は個数、0 内は半分ないし破片の数を示す）

分類群・部位＼時期		近代	近世	戦国時代～近世	戦国時代	鎌倉時代	奈良時代	古墳時代中期～後期	古墳時代中期	古墳時代中期初め	古墳時代中期初めより前
アカマツ	毬果		1	1	79(9)						
イヌガヤ	種子				1						
ヒノキ	小枝								1		
ヤマモモ	核				2			5(1)	25		
オニグルミ	核				3(14)						
ヒメグルミ	核		(1)		1						
クルミ属	炭化核										(10)
カシワ	殻斗							1	10(45)	3(1)	
	炭化殻斗								(1)		
	幼果								12	1(1)	
コナラ	殻斗								(1)	20(36)	
	幼果						2		4	165(18)	
クヌギまたはアベマキ	果実・殻斗				2						
	果実				(3)			(6)			
	炭化果実							(1)			
アラカシ	果実				1		1				
コナラ属アカガシ亜属	殻斗								(1)		
コナラ属	果実								1(2)	(1)	
クリ	果実				3						
エノキ属	核							1			
ムクノキ	核								1		
クワ属	炭化種子									1	
カジノキ	種子										
クスノキ	種子							1	1		
ウメ	核				1						
スモモ	核				1				2		
モモ	核				12(2)	2		21(13)	86(12)	3	
	炭化核									(1)	
サクラ属サクラ節	核						3		14		
キイチゴ属	核								1		
センダン	核				(1)						
サンショウ	種子								1		
	炭化?種子									1	
イヌザンショウ	炭化?種子									(1)	
カラスザンショウ	種子							1	5		
アカメガシワ	種子							237(33)	28	2	
	炭化種子									1	
ゴンズイ	種子							3	1		
トチノキ	種子				(1)				(5)		
	幼種子				1						
ヤマブドウ	種子							3	10		
ブドウ属	種子							41(1)	122(2)		
	炭化種子										
サルナシ	種子									1	
チャノキ	種子				1						
クマノミズキ	核								2		
カキノキ	種子								1		
エゴノキ	種子				12(4)		215(10)	1712(243)	6407(342)	18	
ハクウンボク	種子				1						
クサギ	核									2(1)	
ニワトコ	種子									1	
不明	芽							1(10)	25(3)	3(2)	
	刺							1			
ミクリ属	核	4						118	18		
	炭化核							3		1	
オモダカ科	種子								1		
イネ	穎								(1)		
	炭化胚乳									2(1)	
キビ	炭化胚乳									1	
ヒエ	炭化胚乳									1	
アワ	炭化胚乳									2	
スゲ属	果実								1		
アサ	炭化種子									9(7)	
カナムグラ	果実								2(2)		
	種子								2(6)	1	
クワクサ	種子								3		
カラムシ属	種子								6	1	
ミズ属	種子								2		
サデクサ	果実								(1)		
サナエタデ近似種	果実								1		
タデ属	果実								3		
	炭化果実									1	
シロザ近似種	種子								6	2	
ジュンサイ	種子							3			
ムラサキケマン	種子								1(1)		
ﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ属,ｵﾝﾝﾀﾞｲﾁｺﾞ属,またはｷﾝﾑｼﾛ属	核								1		
マメ科	炭化種子									1	
カタバミ属	種子										
エノキグサ	種子								1(1)		
ノブドウ	種子							1	7		
シソ属	炭化果実								1	1	
キランソウ属	果実										
ナス属	種子								2		
メロン仲間	種子								28(12)		
ヒョウタン仲間	種子								1		
	虫えい						1	3	1		
	菌核								1	12	

試料の性質による差であると思われる。

古墳時代中期　98C2SX01 中･下層と 99A・BSD01 第 6 層が含まれ、詳細は先述した。

古墳時代中期～後期　99A・BSD01 第 5 層であり、先述した。

奈良時代　99A・BSD01 第 4 層であり、先述した。

鎌倉時代　99DSE03 のみであり、モモ核が 2 個体のみであった。

戦国時代　99A 区の SD02、SD03、99B の SD03、SK5001、99D の SX01、SD02 が含まれ、SX01 については先述した。全体としてはアカマツが目立つ傾向があるが、99A の SD03 ではヤマモモ、クヌギまたはアベマキ、センダン、99B の SD03 ではイヌガヤ、アラカシ、ウメ、チャノキ、SK5001 ではクリといった希少なものも含まれていた。

戦国時代～近世　99A・BSD01 第 1 層のみであり、先述した。

近世　99C 区「近世あぜ」と「あぜ(上面)」の 2 試料である。前者はアカマツ、後者はヒメグルミであった。

近代　98CSD01 のみであり、ミクリ属 4 個体であった。

(3) 主な大型植物化石の形態記載

主な大型植物化石については、以下に形態記載を示し、写真図版にも示した。なお、写真図版のキャプションには、出土試料としてコンテナ No.- 試料 No. を付した。例えば、45-No.27 はコンテナ No.45 の試料 No.27 ということである。また、48(99C)-No.5 のように、コンテナ No. の後ろに()が記されたものは、コンテナ No.48 の中に No.5 という試料が複数あるため、()内に調査区を記して区別している。

(1)アカマツ　*Pinus desnsiflora* Sieb. et Zucc.　毬果

卵形～円錐状卵形。毬果鱗片は楔型で中央に鋭い顕著な突起がある。表面の風化が著しく、厳密にはマツ属複維管束亜属にとどめた方が良いものも稀にあったが、明らかにアカマツと同定できるものが多いのに対して明らかなクロマツはないことから全てアカマツとした。

(2)オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核

灰褐色ないし茶褐色。側面観は卵形、卵円形、楕円形などで先端は鋭頭。表面には縦に不規則な浅い溝状の彫紋があり、明瞭な 1 本の縫合線が縦に走る。99D の SX01 第 1 層(No.2)、第 3 層(No.19)、第 4 層(No.38)は人による打撃(利用)痕を受けており、縫合線部が欠損して半分に割れていた。

(3)ヒメグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr. var. *cordiformis* (Maxim.) Rehder　核

側面観は卵円形で先端が細長く伸びて特徴的に尖る。オニグルミに比べて表面は平滑で厚さが薄い。なお、細かい破片はオニグルミとヒメグルミとの識別が困難なためクルミ属にとどめた。

(4)カシワ　*Quercus dentata* Thunb.　果実･殻斗、殻斗、炭化殻斗、幼果

果実･殻斗としたものは殻斗内に果実の一部が残存したもの。殻斗としたものは、果実が残っていないが、本来は入っていたものが抜け落ちたか欠損したと思われる。殻斗と幼果は厳密な区分ではないが、明らかに小さなものは幼果とした。幼果は、殻斗鱗片が殻斗上部を包み込むように細長く伸びている。No.73(99A/IF10t/SD01A トレンチ(8))の幼果は割れており、内部に首から上の花被や花柱が見える。カシワの殻斗鱗片は、本来細長い披針形であるが、鱗片の先端は傷みやすいので欠損している。鱗片の断面

は薄く扁平である。殻斗径は 18 ～ 26mm 程度。

(5)コナラ　*Quercus serrata* Murray　殻斗、幼果

殻斗鱗片は卵形で覆瓦状に並ぶ。殻斗上端はやや内側を向き、基部は鋭脚。殻斗径は 9.0 ～ 13.5mm。

(6)クヌギまたはアベマキ　*Quercus acutissima* Carruth. and/or *Quercus variabilis* Blume　果実･殻斗、果実、炭化果実

99A の SD03(No.132)に殻斗の付いた果実があった。風化が著しく状態はあまり良好ではない。殻斗鱗片は本来細長い線形ないし針形であるが、先端は欠損している。断面は三角状を呈する。果実は尻(殻斗との付着部)が残っており、瘤状の膨らみが散在する。

(7)アラカシ　*Quercus glauca* Thunb.　果実

アラカシの果実は、本来太くて短い花柱と急に舌状に開く柱頭を持つが、欠損して残っていない。しかし、果実上部の輪状紋が突出せず、薄く肩に広がることからアラカシと同定できる。なお、アカガシ亜属の殻斗は輪層を持つが、殻斗のみでは種までの同定は困難である。

(8)コナラ属　*Quercus*　果実

果実の断片(果皮片)やほぼ完形でも頂部が保存されていないもの。また、クヌギやアベマキなどの特徴的なものを除き、尻のみでは亜属や種までの同定は困難である。

(9)クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　果実

99B の SK5001(No.19)は、長さ - 幅が 30-31mm、28-30mm 程度の大型の果実を含んでおり、栽培品種と考えられる。

(10)モモ　*Prunus persica* Batsch　核、炭化核

側面観は楕円形、卵円形、卵形などが含まれる。上面観は両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則に流れるような溝と穴がある。げっ歯類による食害痕を受けたものや炭化したものが稀に見られた。長さ 16 ～ 30mm 程度。

(11)ブドウ属　*Vitis*　種子、炭化種子

側面観は卵形、上面観は楕円形。背面には匙状の臍があり、腹面には穴が 2 つある。長さ 3.5 ～ 4.8mm。長さが 5.0mm 以上に達する 5.0 ～ 5.2mm のものはヤマブドウ，*Vitis coignetiae* Pulliat ex Planch. とした。

(12)エゴノキ　*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.　種子

広卵形で頂部から 3 本の縦溝が走る。表面には細かな網目紋がありざらつく。

(13)ハクウンボク　*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.　種子

エゴノキ比べて大型の傾向があり、溝ではなく 3 本の稜が目立つ。また、表面は鈍い光沢があり滑らかなである。

(14)キビ　*Panicum miliaceum* Linn.　炭化胚乳

胚は不鮮明であるが、臍はうちわ型なのでキビないしヒエである。長さ 1.8mm、幅 1.3mm 程度と大きく、厚みもあり、先端がやや鋭角気味であるのでキビとした。

(15)ヒエ　*Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin.　炭化胚乳

胚の長さは胚乳の長さの 2/3 程度を占めて長い。臍はうちわ型。長さ 1.2mm、幅 1.0mm 程度で扁平。

(16)アワ　*Setaria italica* Beauv.　炭化胚乳

胚の長さは胚乳の長さの2/3程度を占めて長い。背面の先端には穎が少し付着する。長さ1.3mm、幅1.2mm程度で厚みがある。

(17)アサ　*Cannabis sativa* Linn.　炭化種子

種子はやや光沢のある楕円状レンズ形。下端には楕円形の臍がある。98C2のSX01下黒色層(No.28-3)は未炭化であるが、炭化した果皮が剥がれてしまったと思われる。

(18)ジュンサイ　*Cannabis sativa* Linn.　種子

灰褐色で卵形。表面には微細な星状様紋があり、種皮の断面は柵状。長さ3.0～3.2mm、幅2.3～2.5mm。

(19)マメ科 Leguminosae 炭化種子

臍が保存されていないのでこれ以上の同定には至らない。長さ3.9mm、幅3.2mm、厚さ3.1mmで大きさと厚みの点からササゲ属，Vignaの可能性がある。

(20)シソ属 *Perilla* 炭化果実

側面観は円形、上面観は楕円形。表面には大きく浅い網目紋がある。長さ1.8～2.0mm程度。

(21)メロン仲間 *Cucunis melo* Linn. 種子

古墳時代中期の試料のみから出土した。変形や欠損をしていないものは長さの計測を行った。その結果、98C2のSX01(中･下層)は約7.3～9.1mmであり、藤下(1984)による6.1～8.0mmの中粒種子(マクワ･シロウリ型)が2個、8.1mm以上の大粒種子(モモルディカメロン型)が3個であった。SD01(6層)は約6.9～8.8mmであり、中粒種子が12個、大粒種子が6個であった。全体としては、中粒種子が約6割、大粒種子が約4割であり、6.0mm以下の小粒種子(雑草メロン型)は全く含んでいなかった。平均約7.8mmであり、大型の種子が目立つように思われた。

(4) 考察

古墳時代中期初めより前　99A～99CSD01（大溝）構築前の旧表土で検出されたSX遺構(99C)からクルミ属炭化核の微細破片が出土した。クルミ属は食用として有用であり、炭化した破片であることから、人が利用後に投棄した残滓と推定される。

古墳時代中期初め　99ASD01の8層堆積期には、落葉広葉樹のコナラが多く生育しており、カシワ、アカメガシワ、エゴノキ、クサギなども混じっていたと予想される。これらは二次林的要素を持つ分類群なので、付近の森林が人による強い干渉を受けていた可能性が考えられる。利用植物については、SD01の7層から栽培植物のモモ、98C2SX01下黒色層から栽培植物のモモ、イネ、キビ、ヒエ、アワ、アサ、シソ属が出土した。また、栽培種か野生種かは不明であるがマメ科、漿果が食用可能なクワ属のほか、炭化していたタデ属なども何らかの形で利用されていた可能性が考えられる。SX01から出土したこれらの栽培･利用植物は、いずれも炭化していたので、栽培地からの流入ではなく、遺構の性格も考慮すれば、祭祀に関わる植物であった可能性が考えられる。

古墳時代中期　99ASD01からは照葉樹林要素のヤマモモが比較的多産した。ヤマモモは可食植物であるが、人が周辺から持ち込んで利用後に投棄したとしても、そう遠くはない場所に照葉樹林が成立してい

たと予想される。しかし、照葉樹林の主要構成種であるアカガシ亜属は殻斗片が1点出土したのみであり、シイノキ属も全く出土しない。コナラ属としては、カシワ、コナラといったむしろ落葉(コナラ亜属)が目立ち、カラスザンショウ、アカメガシワ、ゴンズイ、ブドウ属などの二次林的要素や林縁に生える分類群が目立つ。以上のことから、本来遺跡付近には照葉樹林が成立していたが、人の強い干渉により、二次林化が進行していたのではないだろうか。他に、SD01付近にはエゴノキが多く生育しており、サクラ節なども混じっていたと思われる。非常に多産するエゴノキは、果皮に有毒なサポニンを含むため、漁労に用いられることがあるというが、出土種子がそのような目的で使用されたのか明確な根拠はない。草本類については、SD01内の水深の浅い場所に抽水植物のミクリ属が生育していたか、近接した場所に水位の低い湿地的環境が存在していたと予想される。利用植物については、SD01からは栽培植物のモモが多産したほか、スモモ、カキノキ、メロン仲間、ヒョウタン仲間が出土した。これらは、付近で栽培されていたか、人が投棄したものと予想され、祭祀に関連したものも含まれるかもしれない。SX01下層からはイネ穎片、メロン仲間、中層からはモモ、トチノキ種子片が出土し、シソ属炭化果実は土器(土器No.182)内に含まれていた可能性が考えられた。このことから、ゴミとして投棄されたものや祭祀に関わるものを含むと考えられる。中層出土の草本類(未炭化)は、付近の植物相と予想され、水位の低い湿地的環境にミクリ属、サデクサ、サナエタデ近似種、幾分乾き気味の場所にカナムグラ、クワクサ、シロザ近似種、エノキグサなどが生育していたであろう。

古墳時代中期～後期　SD01の第5層の木本組成は、第6層と概ね類似し、同様の理由で二次林の成立が予想される。コナラ属については、第6、8層で多産していたカシワないしコナラがあまり見られなくなった可能性があり、クヌギまたはアベマキが混じるようになったであろう。利用植物としてはモモが出土し、99CSX13（99CSD01内土器溜まり）でも出土したことから、祭祀に関わっていた可能性が考えられる。また、SX13からは、炭化したクヌギまたはアベマキ(果実破片)やミクリ属が出土したが、おそらく火を使う行為をしていたために付近に生育していたミクリ属の果実が焼けて出土したのであろう。SD01の堆積環境については、浮葉植物のジュンサイが生育するような底に有機物の溜まる幾分水深のある環境であっただろう。

奈良時代　情報量は乏しい。引き続きエゴノキが多く生育しており、落葉のコナラ、サクラ節、常緑のアラカシが混じっていたであろう。

鎌倉時代　99DSE03（井戸）からモモが出土した。付近に栽培地が存在していたか、人が投棄したものであろう。

戦国時代　戦国時代に入って初めてアカマツが出土するようになり、多産する傾向が見られるので、人の活動がより活発化し、二次林化が更に進行した可能性が考えられる。99ASD03付近にはヤマモモ、クヌギまたはアベマキ、センダン、99BSD03付近にはイヌガヤ、アラカシ、99DSX01付近にはエゴノキ、ハクウンボクなども生育していたであろう。なお、SD03は屋敷の区画溝であることから、一部には植栽されたものも含む可能性があろう。利用植物については、99BSD03からは、ウメ、モモ、チャノキが出土し、利用後に投棄されたか屋敷地付近で栽培されていた可能性がある。なお、ウメの利用については、スモモが古墳時代中期、モモが古墳時代中期初めより利用されていたのに対して遅れていたのであろう。

99BSK5001からは、栽培品種と考えられる大型のクリが出土し、概ね完形であることから、付近で栽培されていたか貯蔵などされていたものであろう。SX01からは、打撃痕を受けたオニグルミ、ヒメグルミ、スモモ、モモ、トチノキ種子片が出土し、利用後の残滓を含むことが伺える。

戦国時代～近世　情報量に乏しい。SD01付近にもアカマツが生育するようになった。

近世　アカマツとヒメグルミが出土した。ヒメグルミは縫合線に沿って半分に割れた1/2片であるので、利用されたものではなく、発芽か堆積物の圧力により自然に半分に割れたものである可能性もある。

近代　98CSD01から草本のミクリ属が出土した。溝内か近接した場所に生育していたのであろう。

(5) おわりに

大型植物化石から見た古植生および古環境は、以下のように考えられた。

古墳時代中期初めより前　クルミ属が食用とされていた。

古墳時代中期初め　99ASD01第8層堆積期には、コナラをはじめとした二次林的要素を持つ分類群が多く生育していた。利用植物は、クワ属、モモ、イネ、キビ、ヒエ、アワ、アサ、タデ属、マメ科、シソ属であり、98C2SX01から出土したことから、祭祀に関わっていた可能性が考えられた。

古墳時代中期　99ASD01周辺には、エゴノキが多く生育していた。付近の森林は、本来は照葉樹林であったが、二次林化が進行しており、カシワ、アカメガシワ、ブドウ属などが目立っていた。利用植物は、スモモ、モモ、トチノキ、カキノキ、イネ、シソ属、メロン仲間(マクワ・シロウリ型ないしモモルディカメロン型)、ヒョウタン仲間であった。これらの中には、土器(土器No.182)内埋土から出土したシソ属など祭祀に関わるものを含んでいる可能性が考えられた。

古墳時代中期～後期　99A～99CSD01周辺にはエゴノキが多く生育しており、アカメガシワ、ブドウ属などから成る二次林が成立していた。SX13(SX01内土器溜まり)付近では、火を使う祭祀行為が行われ、モモが関連していた可能性が考えられた。SD01内には、水深の浅い場所にミクリ属が、深い場所にはジュンサイが生育していた。

奈良時代　99A～99CSD01周辺にはエゴノキが多く生育し、コナラ、アラカシ、サクラ節が混じる。

鎌倉時代　モモが利用されていた。

戦国時代　二次林化が更に進行し、アカマツが多く生育するようになった。屋敷地付近にはイヌガヤ、ヤマモモ、クヌギまたはアベマキ、アラカシが生育ないし植栽されていた。利用植物は、オニグルミ、ヒメグルミ、クリ、ウメ、スモモ、モモ、トチノキ、チャノキであった。クリは栽培品種であり、ウメはスモモ、モモに遅れて利用されるようになった。

戦国時代～近世　99A～99CSD01付近にもアカマツが生育するようになった。

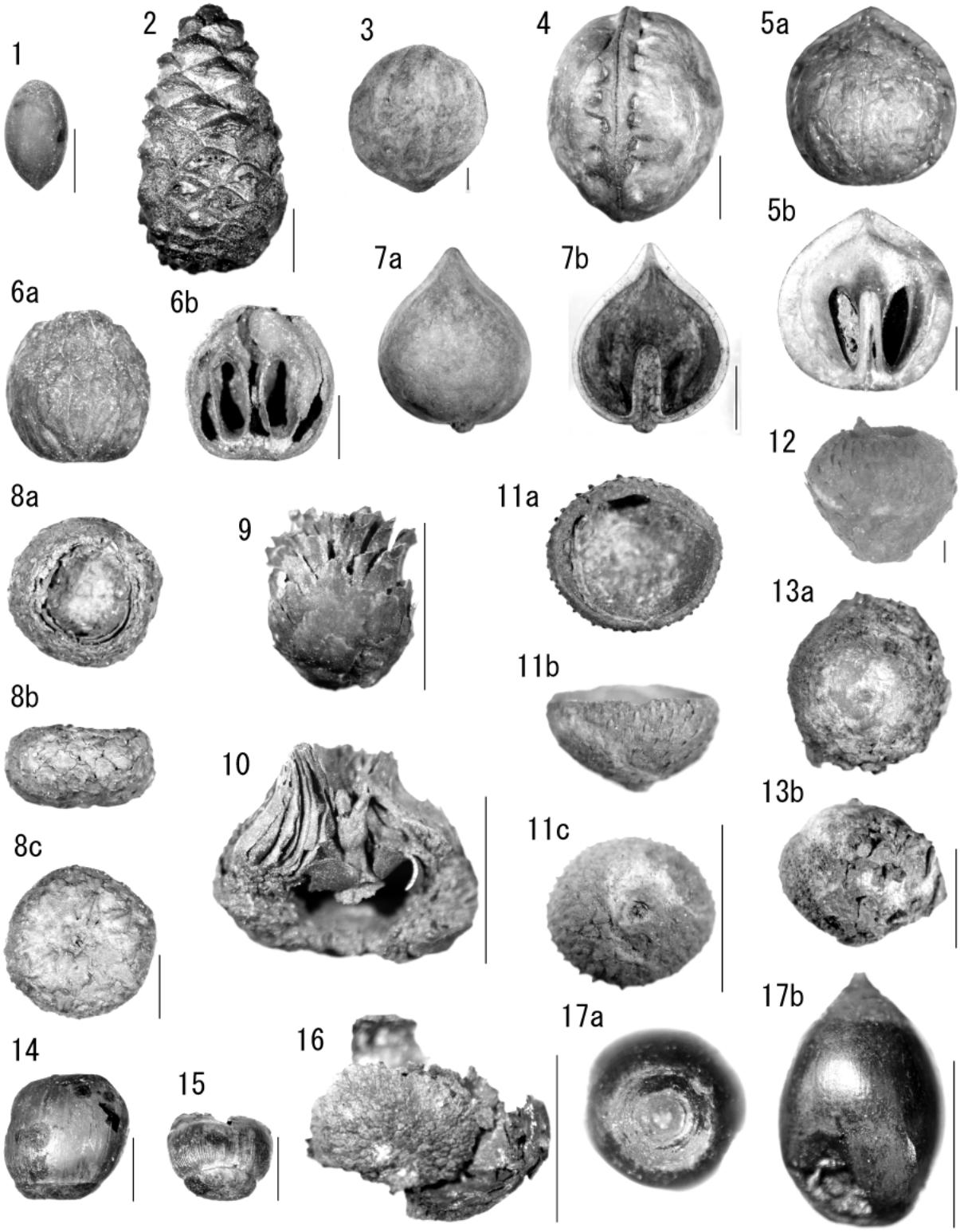
近世　アカマツが生育し、ヒメグルミが利用されていた。

近代　98CSD01内あるいは近接した場所にミクリ属が生育していた。

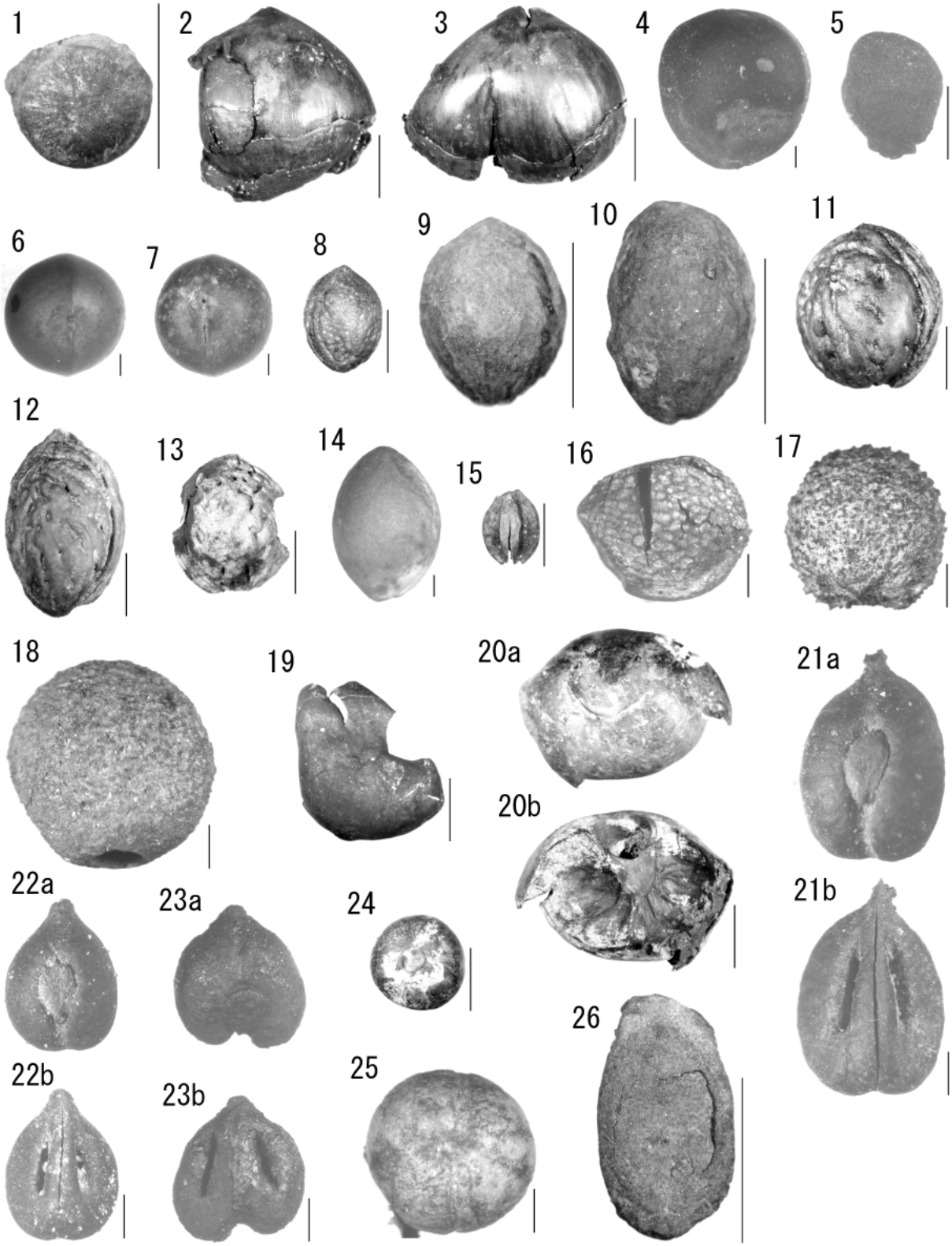
引用・参考文献

北村四郎・村田　源(1971)原色日本植物図鑑・木本編。.453p, 保育社.

藤下典之(1984)出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 ― 総括報告書,638-654, 同朋社.

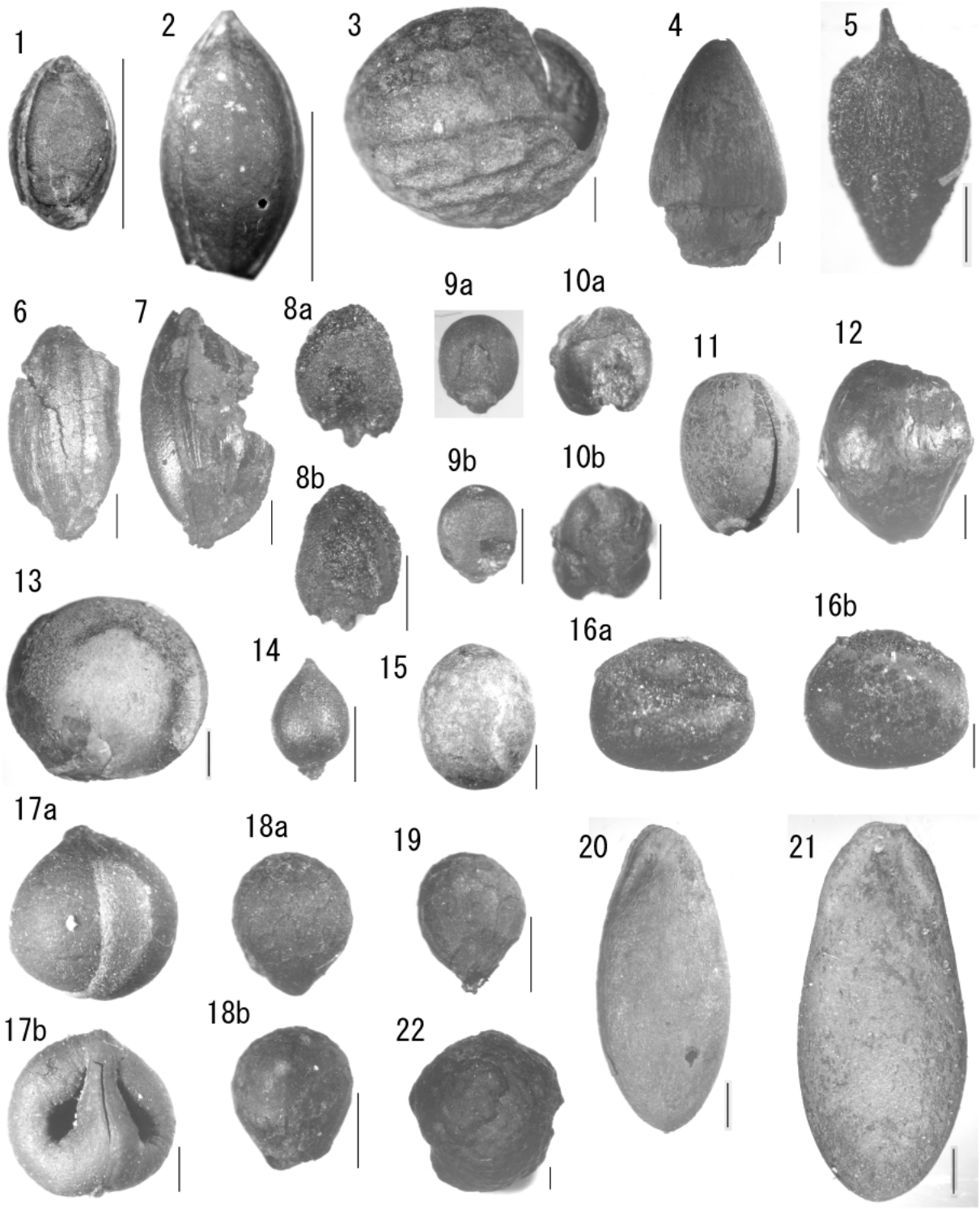


図版１　出土した大型植物化石（スケールは 1､2､4～11､13～17 が 1cm、3､12 が 1mm）
1. イヌガヤ、種子、48(99B)-No. 18　2. アカマツ、毬果、50-No. 12　3. ヤマモモ、核、47-No. 30　4. オニグルミ､核､48(99D)-No. 35　5. オニグルミ､核､48(99D)-No. 26　6. オニグルミ、核、48(99D)-No. 19　7. ヒメグルミ、核、48(99C)-No. 9　8. カシワ、殻斗、47-No. 73　9. カシワ、幼果、47-No. 47　10. カシワ、幼果、47-No. 73　11. コナラ、殻斗､47-No. 71　12. コナラ､幼果､47-No. 71　13. クヌギまたはアベマキ､果実･殻斗、47-No. 132　14､15. クヌギまたはアベマキ、果実、48(99C)-No. 5　16. クヌギまたはアベマキ、果実、47-No. 76　17. アラカシ、果実、50-No. 10



図版２　出土した大型植物化石（スケールは 1～3、8～13、15、19、20、24、26 が 1cm、4～7、14、16～18、21～23、25 が 1mm）

1. コナラ属、果実(尻)、47-No. 71　2、3. クリ、果実、48(99B)-No. 19　4. ムクノキ、核、47-No. 56　5. クワ属、炭化種子、45-No. 28　6. クスノキ、種子、47-No. 38　7. クスノキ、種子、47-No. 14　8. ウメ、核、50-No. 13　9. スモモ、核、48(99D)-No. 47　10. スモモ、核、47-No. 56　11. モモ、核、50-No. 8　12. モモ、核、50-No. 11　13. モモ、核、48(98C2)-No. 1　14. サクラ属サクラ節、核、47-No. 42　15. センダン、核、47-No. 76　16. サンショウ、種子、48(98C2)-No. 30　17. アカメガシワ、種子、47-No. 42　18. ゴンズイ、種子、47-No. 23　19. トチノキ、種子、48(98C2)-No. 19　20. トチノキ、種子、48(99D)-No. 6　21. ヤマブドウ、種子、47-No. 46　22. ブドウ属、種子、47-No. 46　23. ブドウ属、炭化種子、45-No. 28　24. チャノキ、種子、48(99B)-No. 18　25. クマノミズキ、核、47-No. 42　26. カキノキ、種子、47-No. 46



図版３　出土した大型植物化石（スケールは 1､2 が 1cm、3～22 が 1mm）
1. エゴノキ、種子、47-No. 41　2. ハクウンボク、種子、48(99D)-No. 36　3. クサギ、核、47-No. 67　4. 不明、芽、47-No. 70　5. ミクリ属、炭化核、45-No. 28　6､7. イネ、炭化胚乳、45-No. 28　8. キビ、炭化胚乳、45-No. 28　9. ヒエ、炭化胚乳、45-No. 28　10. アワ、炭化胚乳、45-No. 28　11. アサ、種子、45-No. 28　12. アサ、炭化果実、45-No. 28　13. カナムグラ、種子、47-No. 46　14. タデ属、炭化果実、45-No. 28　15. ジュンサイ、種子、48(99C)-No. 19　16. マメ科、炭化種子、45-No. 28　17. ノブドウ、種子、47-No. 46　18. シソ属、炭化果実、45-No. 28　19. シソ属、炭化果実、45-No. 22　20. メロン仲間、種子、45-No. 27　21. メロン仲間、種子、47-No. 46　22. 菌核、47-No. 70

第 11 章　考察

第 1 節　水入遺跡出土の古墳時代中期の土器

（1）はじめに

「神明式」とその前後　水入遺跡の南西2km地点の台地縁辺に神明遺跡がある。この遺跡は昭和41（1966）年と平成 6（1994）年、平成 10（1998）年の数次にわたって発掘調査がおこなわれ、古墳時代中期の集落遺跡が確認された。昭和 59（1984）年に川崎みどりは、昭和 41 年に調査された 31 号住居出土土器の一群をもって 5 世紀後半の土器様式「神明式」を提唱した（加納・都築 1984）。これは当時大参義一によって設定されていた「元屋敷期」（大参 1968）という濃尾平野 4 世紀後半の土器群の後に位置づけるべく、須恵器と椀状杯部高杯の出現に画期を見いだし設定されたものである。その後川崎は「元屋敷期」と「神明式」の間を埋めるべく岡崎市高木遺跡 7 号住居や同神明遺跡 1 号周溝墓出土土器群などを用いて編年の見通しを述べたが（川崎 1988）、その後しばらく当該期の土器編年に関わる議論は深まることはなかった。そして平成 8（1996）年になって、川崎は再び神明遺跡出土土器による 5 世紀代の土器編年の提示した（川崎 1996）。それは高杯の形態変化を編年の中心軸に据えた作業で、尾張平野の廻間編年（赤塚 1990）に後続させるかたちで 5 世紀前半代を古相・新相に区分し杯類（椀）の出現をもって「神明式」への画期とした。また須恵器の出現については 5 世紀前半代に遡る可能性を示した。その後神明遺跡における土器編年は、森泰通によって 4 世紀後半～ 6 世紀中葉のものとしてさらに詳細な提示がなされた（森 2001）。ここでも高杯の系統設定と形態変化に着目した作業がなされた。

これら一連の作業は常に、尾張平野で設定された松河戸・宇田式編年（赤塚 1996、赤塚・早野 2001）に相対すべき矢作川流域すなわち西三河地域の土器編年構築を念頭においていた。川崎が指摘しているように、矢作川中流域ではＳ字状口縁台付甕（以下Ｓ字甕）やその後継たる宇田型甕は土器群の主体ではなく、全く含まれない事例がほとんどである（川崎 1996）。その意味も問われるべきではあるがそれはさておき、土器群の主体もしくは様式編年の軸となる器種が異なる以上、まずは当該地域独自の編年を構築したうえで尾張平野との対応関係を検討するという立場は筆者も同じである。

中地域としての西三河地域　さて、これまでにも「地域」という用語を頻出させてきたが、ある程度ここで整理しておきたい。まずは極大地域としての東日本あるいは東海道を想定する。大地域は伊勢湾岸地域や駿河湾地域などの律令制度下で数カ国程度の地域、中地域は同じくその 1 国または三河のように東と西に区分される場合（東・西三河）を想定し、小地域は郡単位の地域、そして極小地域は 2 ～ 3 郷程度の集まりを想定する。本章での関心は専ら中地域としての西三河地域であるが、その範囲は碧海郡を中心に賀茂・額田・幡豆の諸郡域によって占められる三河平野を念頭に置く。したがって賀茂郡東部～北部地域は矢作川流域の範囲ではあるが三河平野からすると縁辺の地の扱いとなる。

水入遺跡の土器編年　以上の研究成果および地域認識を前提として本節ではかかる作業の基礎となる水入遺跡における古墳時代中期の土器編年を考察し、それが中地域の土器編年に援用できるか若干の見通しを述べることにする。

（2）水入遺跡における古墳時代中期土器群の設定

土器群の設定　様式編年を考えるにあたっては、土器群の設定およびそれらの時間的先後関係を明らかにする必要がある。水入遺跡では段丘崖と大溝から大量の土器が出土したが、第5章で詳述したようにそれらは出土層位や土器の集中廃棄によって細分される。すなわち段丘崖は下位から下黒色層、中層、上層とされ、大溝は第7・8層、第6層、第5層、そして第5層中に存在する土器集中遺構99CSX13である。そしてこれらの土質と堆積標高の比較によって段丘崖下黒色層と大溝第7・8層、段丘崖中層と大溝第6層が対応することは既述のとおりである。また段丘崖上層については中世までの遺物が混在し、単独の土器群とするにはやや抵抗がある。したがってこれらをまとめると4つの時間的先後関係にある土器群を設定することが可能である。以下、土器群とそれを構成する各器種の分類を提示する。

水入第1群　段丘崖下黒色層と大溝第7・8層の土器群であるが、大溝出土分についてはごく少量で小型壺と台付甕に限定される。口径の大きな（16.5～18cm）の有稜杯部の屈折脚高杯（有稜杯部高杯A）が主体である。そして同じ屈折脚高杯には杯部全体が丸みをおびる皿状杯部が存在する。これまで有稜杯部の亜種のように扱われていたが654のように稜を全く作らないものは別タイプとすべきである。そして有稜杯部と皿状杯部の「合の子」とでもいうべき折衷タイプも存在する。これを有稜杯部高杯Bとする。西三河地域ではこのような「合の子」がいわば不規則的に登場する傾向が古墳時代中期を通じて見られ、典型的なタイプを設定する障害にもなっている。しかし「合の子」をあらかじめ抽出することによって典型的なタイプが見えてくると考え、以下でもこの視点をとる。そして有稜杯部Aタイプは脚柱部内面の調整手法によって区分される。すなわち縦方向に指ナデするもの（脚部縦指ナデ）と横方向にへらを一周させて削るもの（脚部横へら）である。水入遺跡に先行するとみられる豊田市本川遺跡出土土器群では脚部縦指ナデが主体的で、伝統的な製作手法であったことがわかる。一方脚部横へらは本川遺跡例では部分的に入れることが多いが、水入遺跡出土例ではほぼ全体を一気に削る。器壁をより薄く仕上げるための作業工程としてより効率的な手法が広まったと考えられる。鉢は平底で内面ハケ調整である。ごく少数でかつ個体差があるが、平底の壺・甕の底部と形状は共通する。

ミニチュア土器は丸底である。大溝第6層からの出土であるが、本川遺跡SD2001下層出土例を考慮すると第1群に含まれよう。小型壺は口縁が長く口縁径が胴部最大径を凌駕する。比較的整った形状である。歪に有段口縁で胴部に磨きが入るもの、平底が存在するが、球胴丸底のものが主体である。同様に通常サイズの壺（直口壺）にも球胴丸底タイプがある。典型的な直口壺はやや扁平な球胴（直口壺A）で、これと区分する（直口壺B）。貯蔵・煮炊具では指ナデ調整仕上げの有段口縁壺と指ナデ調整甕が主体である。後者は球胴で口縁形状が直立するものと外傾するもの、さらにやや細身のもの（瓜胴タイプとする）とがある。これらを大きく凌駕する超大型も少数存在する。ところでハケ調整甕は少数派である。あっても132のように指ナデ調整が混在する。

土師器高杯脚部の製作手法について　脚柱部内面の調整については先述したとおりだが、それ以外の製作手法について付言しておく。時間軸にそった変化をみせるのが脚柱部上端の形状である。ここでは上端が閉じるものを「傘型」とし、脚柱部が筒状に抜けるものを「筒型」と呼ぶ。水入第１群では傘型と筒型が半々である。その後第２群になるとほとんどが筒型になる。次に杯部の接合にかかわる点である。まず傘型の場合、上端周囲に付加するようにして杯部を接合するが、筒型の場合は上端を塞ぐ必要がある。本川遺跡例や第1群では詰め物となる別の粘土塊で塞ぎ、それ以外は傘型と同じである。一方第２群以降は杯部底面を直接脚柱部上端にあてて補強粘土を付加する事例が増加する。ところが高杯脚部短小化が進行すると再び傘型が増えてくる。

水入第２群　段丘崖中層と大溝第6層の土器群である。有稜高杯が主体であるが、新登場の大型高杯と椀状杯部高杯がある。大型高杯は杯部稜線に貼付突帯がめぐる。これは前代の在地土器群にはないもので、大型高杯と一体で外来した要素と考えられる。椀状杯部高杯はこれまでこの地域での自生的なものと解するむきがあったが、この土器群では典型的な椀状杯部高杯（椀状杯部高杯Ａ）も共伴しており、むしろこれと皿状杯部・有稜杯部高杯Ａ・Ｂとの「合の子」が発生したと考えるべきであろう。ここでは明瞭な底面を有するものを椀状杯部Ａ、ほぼ全体に内湾する浅めのものを椀状杯部Ｂと区分する。これらの影響下にある有稜杯部高杯Ａ･Ｂは杯部上半の立ち上がりが急になり口径減少という方向にある。もともと「合の子」であった有稜杯部Ｂは新要素が加わりやがてとらえどころのない形状へと「進化」する。新要素が加わる度合いはじつに個体によってさまざまであり一定の方向はうかがえるものの、現状で「合の子」を細分するのは生産的でないように思える。そして椀状杯部高杯と同時に椀も登場する。椀は丸底が基本であるが前代の鉢の影響を受けたのか平底も存在する。

第２群にはミニチュア土器が最も多く含まれる。丸底から平底へと変化したコップ形を基軸とし、甕や高杯などをイメージしたものが出現する。廃棄状態で出土したのでこれらがどのようなセット関係で使用されたのかは明確でない。小型壺も増加する。その形状は前代からの伝統的な丸底・大きな口縁部を残したものに加えやや扁平な胴部に短めの口縁部が付くものがあらわれる。しかしこれらはほとんどが「合の子」で占められ、明確な区分にはならない。ただ傾向としては胴部偏平化・平底化が進行する。特徴的なのは胴部穿孔小型壺の登場であるが水入遺跡では焼成後穿孔の事例はない。直口壺は前代からの変化が少ないが、直口壺Ｂはやや粗雑化が進む。一方で直口壺Ａはハケ調整を部分的に採用しながら比較的整った形状で仕上げる。

大型壺は指ナデ調整有段口縁壺に加えてハケ調整有段口縁壺が存在する（537）。ただこれの系譜を第１群にたどれるかどうかは不明である。本川遺跡SB2083でも確認できるがいずれも丁寧な仕上げであり、製作者の系譜が注目されよう。煮炊具は指ナデ調整甕が主体である。指ナデ調整甕は球胴タイプと瓜胴タイプが存在するが、いずれも胴部半ばに屈曲部があって均一な丸みをもっているわけではない。本川遺跡出土の球胴甕でもこの屈曲部を解消し切れていないものも多数みられる。このことは形状変化を遂げながら在地の伝統的な土師器甕製作工程が変化していないことを示している。いわば第１群から第２群への指ナデ調整甕の変化は、整った球胴・瓜胴へのこだわりが薄れたことの明示でもある。

ところで第２群においてハケ調整甕は少数派である。段丘崖中層出土の894は内外面にハケ目調整痕

があって在地のものとしては異質でもあるが、前代からの系統で考えてみた。しかしこれに続く甕は見当たらない。代わって整った形状の胴部半ばよりやや上位に最大径をもつハケ調整甕が登場する。口縁端部を面取りするかのように指ナデし丁寧に作り込む。その調整は口縁端部を上方へつまみ上げるようにもみえる。あるいは548のように尾張地域の宇田型甕に類似する口縁形状も看取できる。これらハケ調整甕には平底と台付甕がある。平底甕をベースに台部を付属品的に接合しており、指ナデ調整甕より規格性の高い甕である。216と同型は郷上遺跡SD208でも出土しており、尾張地域は名古屋台地に所在する伊勢山中学校遺跡出土甕にも通ずるものがある。これら分布の特徴から「尾張東部・西三河型甕」とも呼称される（早野2003）。本節ではこれを略して尾東・西三型と呼称する。

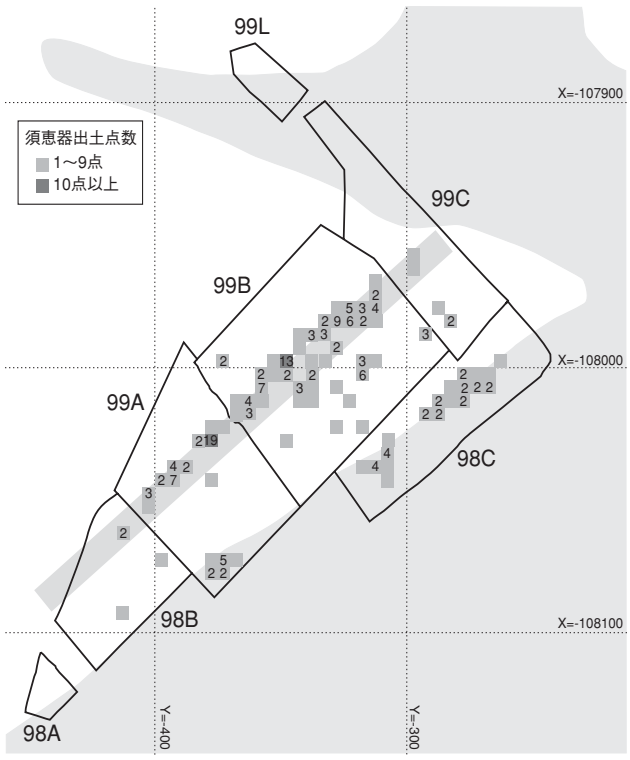
この土器群には須恵器はほぼ含まれていないと考える。ただし373（99BSD01）は確実に第6層から出土しており、東山産須恵器とは異質な焼成で注目される。

水入第3群　大溝第5層の土器群である。高杯は椀状杯部が主体である。しかもその脚部は短小化傾向にあって脚部屈折も甘く、脚端部全体が接地するものもあらわれ、ほとんどが脚部横へらである。椀状杯部の影響によって有稜杯部の椀状化が進行する。それと併行して椀状杯部そのものも変化し、第2群では口縁端部をやや玉縁ふうに成形していたものがやがて外反するだけとなる。西三河地域より東方の東日本でよくみられる有段脚部高杯も、第3群では椀状杯部高杯の脚部として退化しつつも確認できる。大型高杯は伝統的な有稜杯部高杯をイメージした形状であるが微細な要素は椀状杯部高杯から得ている。祭祀具という伝統的行為に供する道具としての認識があるためであろうか。椀は個体差が大きいが口縁端部の変化は椀状杯部高杯と同じである。

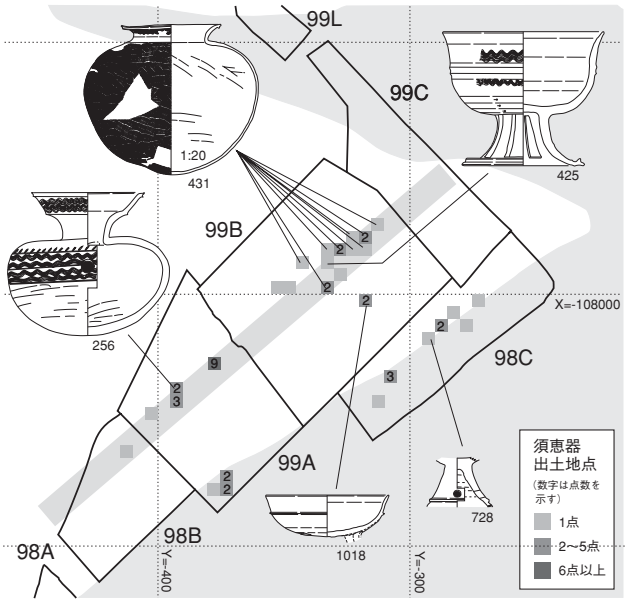
この土器群にはミニチュア土器はごくわずかしか含まれない。小型壺は減少傾向にはあるが平底で口縁部の短いものがみられる。324は胴部穿孔タイプであるが、おそらく須恵器瑞をイメージしたものであろう。直口壺は多いがA・Bともに形状が崩れてくる。特にBタイプは球胴の肩部に屈曲が生じてくる。ハケ調整甕は尾東・西三型甕が主体である。この土器群には伊勢型長胴甕も含まれる。そしてこれを受けて在地で生産したと考えられる長胴甕（565）がある。

須恵器は東山111号窯式～6世紀後半代を含む。したがって各窯式に区分される須恵器にある程度対応する土師器の区分も予想される。これについては後述する。

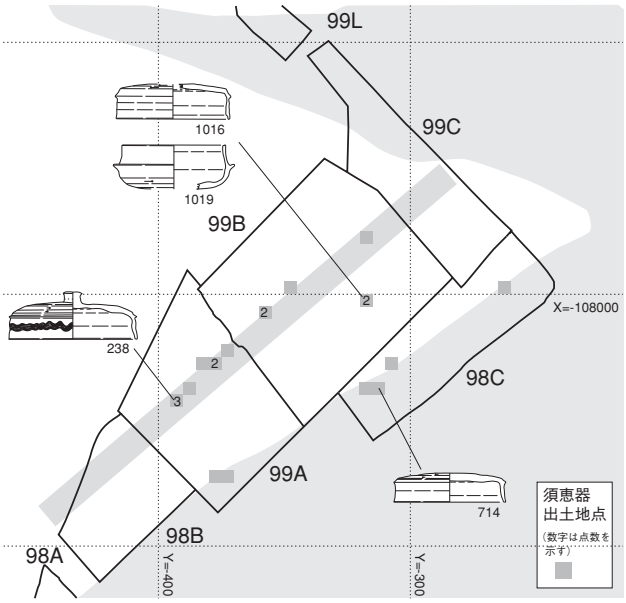
水入第4群　集中廃棄遺構99CSX13の土器群である。大溝第5層中に含まれるが、出土状況から一括性の高い土器群としてみなしうる。高杯は椀状杯部で占められ、有稜杯部はその屈曲部に



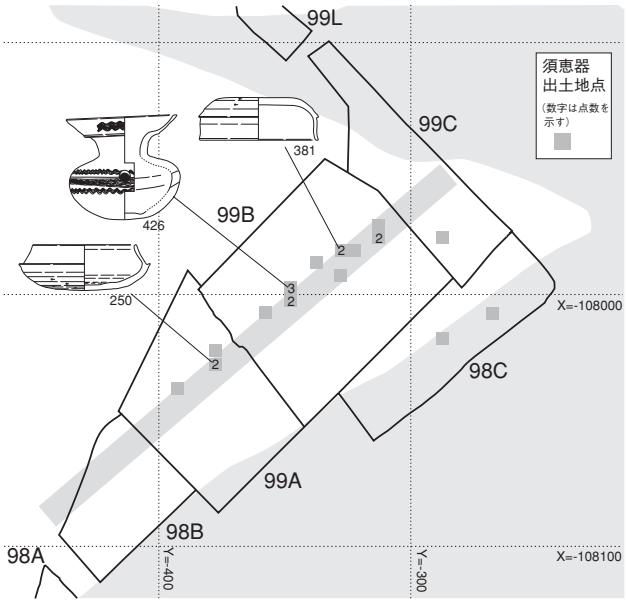
第583図　古墳時代中期の須恵器出土分布図



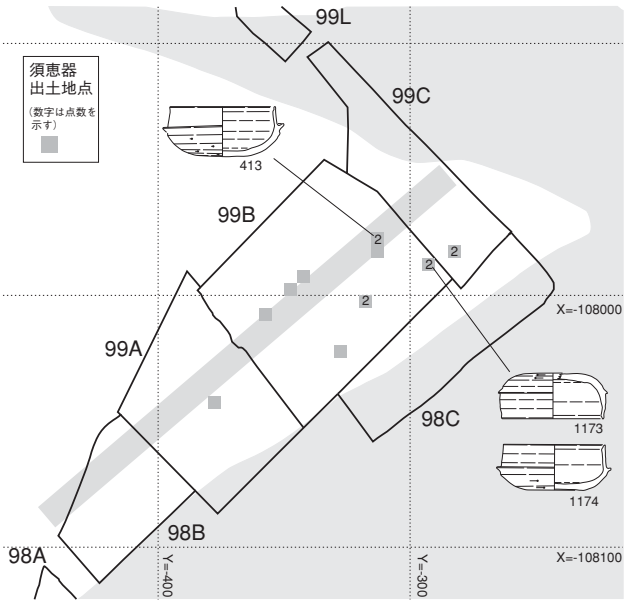
古墳時代須恵器時期別分布図 1（H-111）



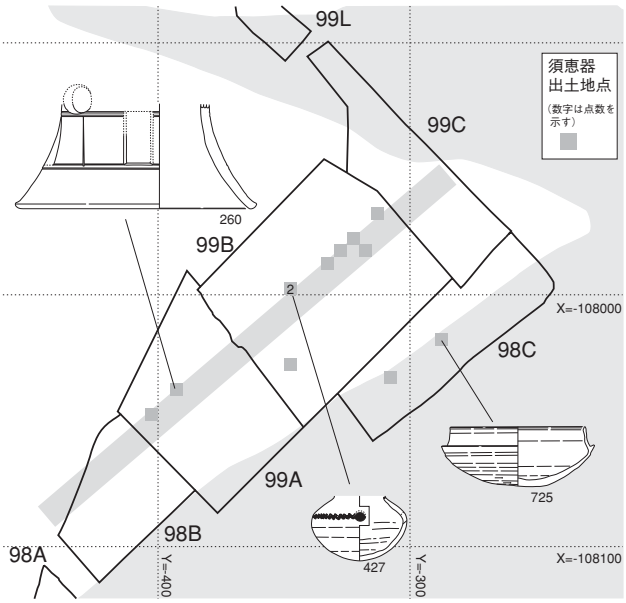
古墳時代須恵器時期別分布図 2（H-218 I ）



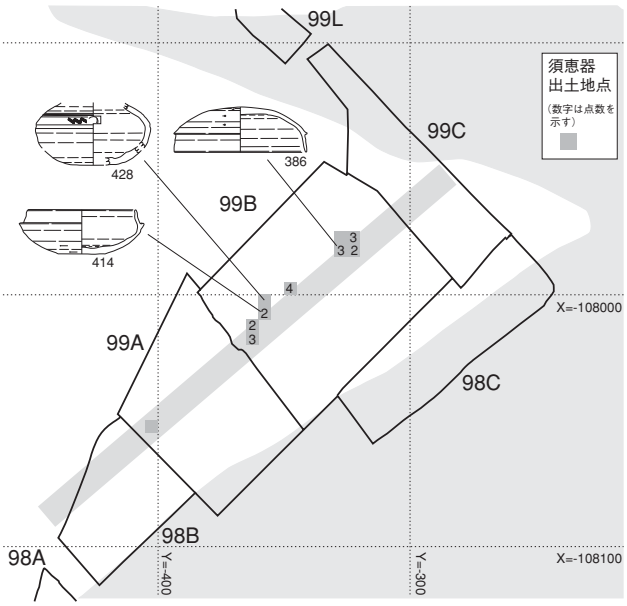
古墳時代須恵器時期別分布図 3（城山2・3号窯）



古墳時代須恵器時期別分布図 4（H-11）



古墳時代須恵器時期別分布図 5（ H-61）



古墳時代須恵器時期別分布図 6（6世紀後半）

第 584 図　古墳時代中期の須恵器窯式別出土分布図

わずかな痕跡をとどめるにすぎない。指ナデ有段口縁壺の口縁部は単なる屈曲に過ぎなくなる。指ナデ調整甕に大きな変化はない。底部残存例（649）などをみると平底でかつ緩い丸みのある立ち上がりがみられる。また球胴甕（641・579）は直口壺Bと同じ変化をしていることがわかる。ハケ調整甕では尾東・西三型甕が引き続き確認される。そしてこれとは別に韓式系土器の影響を受けた甕や布留系甕が含まれる。須恵器は城山2・3号窯式を中心に一部東山218号Ⅰ窯式と考えられる。

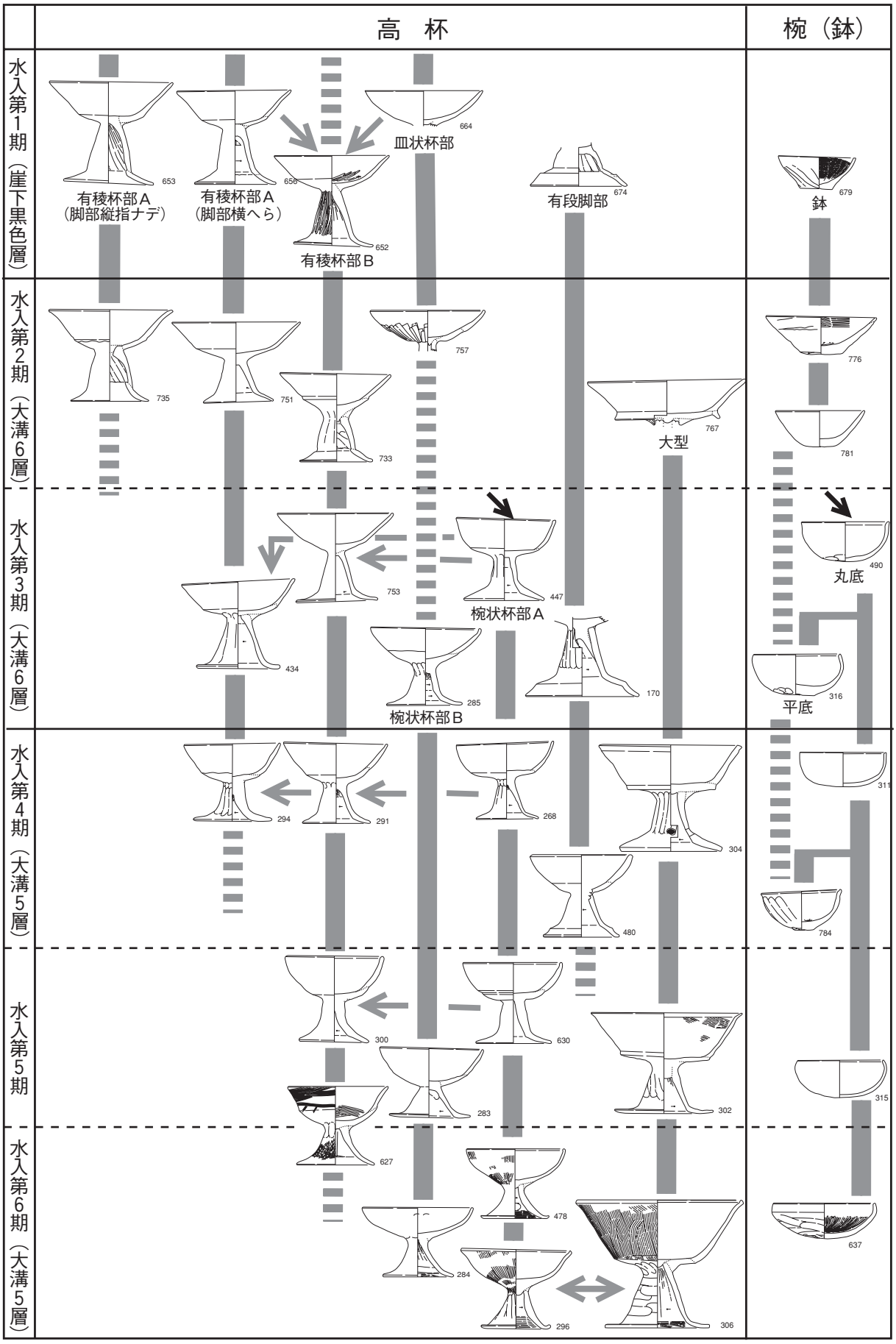
須恵器の出土分布と水入第3群の分割　したがって水入第3群のうち第4群に該当する土器群を中期とすると、その前後となる須恵器窯式すなわち（前期）東山111号窯式～東山218号Ⅰ窯式と（後期）東山11号窯式～6世紀後半にそれぞれ対応する土師器群が存在することになり、第3群が3つに分割できる。須恵器の出土量からしておよそ前者が中心と考えられるが、それら各窯式別の須恵器出土分布をみると（第584図）、99ASD01では東山111号窯式の時期を中心としてあまり窯式の広がりはみえないが、99BSD01ではほぼ全窯式が出土していることがわかる。このことから99ASD01はおよそ第3群前期土器群に絞り込まれ、99BSD01の土器群から前～中期の様相を除外したものが第3群後期土器群と設定しうる。すると高杯では明瞭な底面のない口縁内湾傾向で短脚の椀状杯部高杯（478～479）、甕では先述した伊勢型長胴甕やその模倣品が後期土器群に該当すると考えられる。土師器の器種構成としては前期に比べて貧弱になる。

（3）水入遺跡における古墳時代中期土器の編年

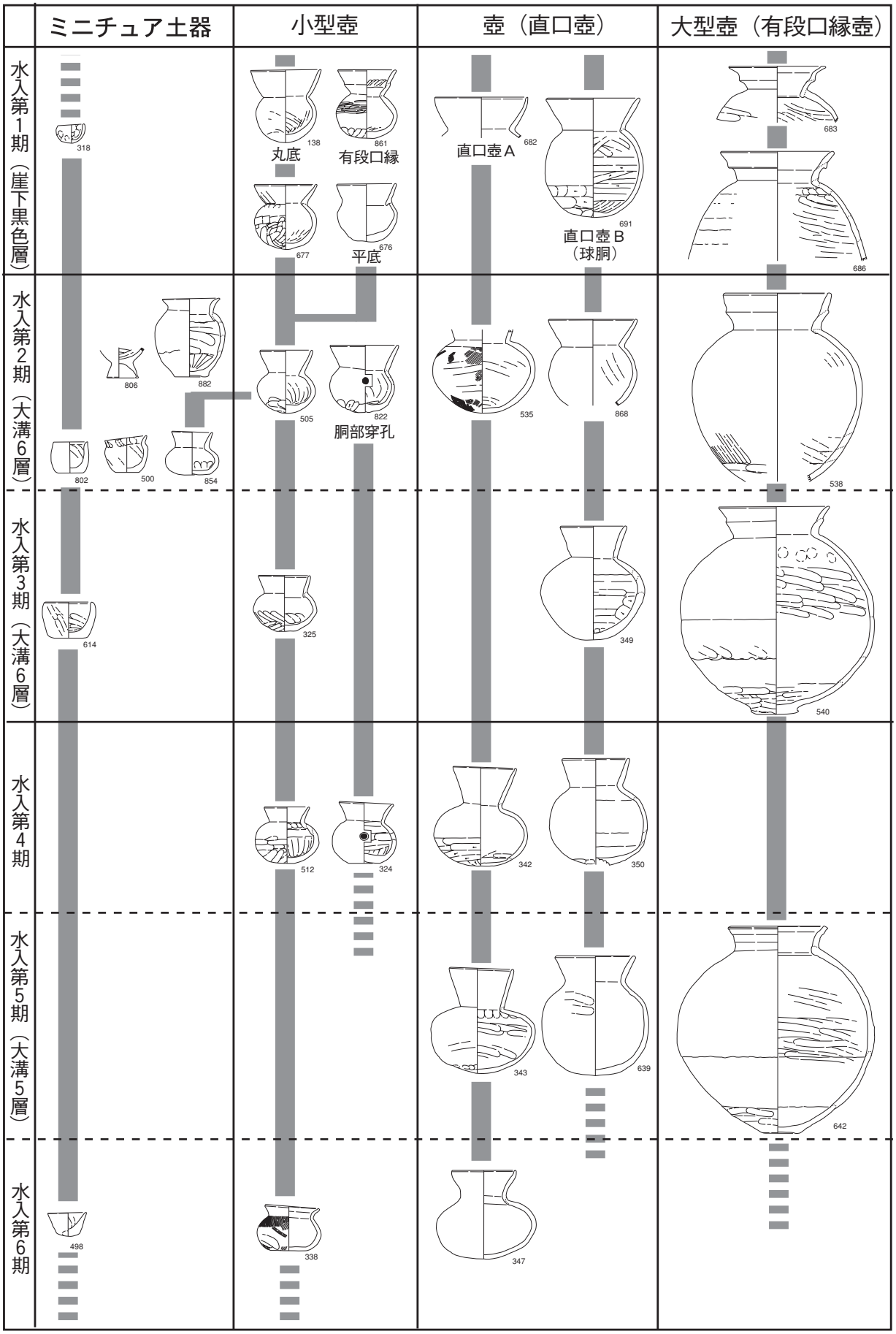
土器編年案の提示　前項で提示した時間軸上で先後関係にある各土器群を基準資料として水入遺跡における古墳時代中期土師器編年の輪郭がみえてくる。すなわち水入第1群→第2群→第3群前期→第4群（第3群中期）→第3群後期である。そして第2群における椀および椀状杯部高杯の登場から在来の有稜杯部高杯との「合の子」が発生する過程をその後期段階としてみなしてこれを前・後期に区分することで6段階が想定可能となる。これを図式化したのが第585～588図である。土師器高杯の系統と画期を中心に、それに伴出する壺・甕類を併置したが、壺・甕類についても若干の系統設定と形態的変化を考慮した。

土師器高杯の流れ　高杯形態的変化の全体的な流れは有稜杯部から椀状杯部へという日本列島各地域で同時代にみられる流れに合致する。ただ水入遺跡を念頭においた西三河地域では、後者が前者を駆逐するというより両者の融合が加速度的に進行した、という表現の方が妥当かもしれない。その「合の子」発生過程については前項で述べたとおりだが、そのような個性的な「合の子」たちを発生させしかもそれらが大多数を占める状況になった要因として、土器作りにおける規格化を指向しない動きあるいは専業性の低さが考えられよう。壺・甕とは異なり、各ムラ単位で土器作り手個人またはそれに対する発注者個人の意識・記憶が顕著に現れる器であったといえる。

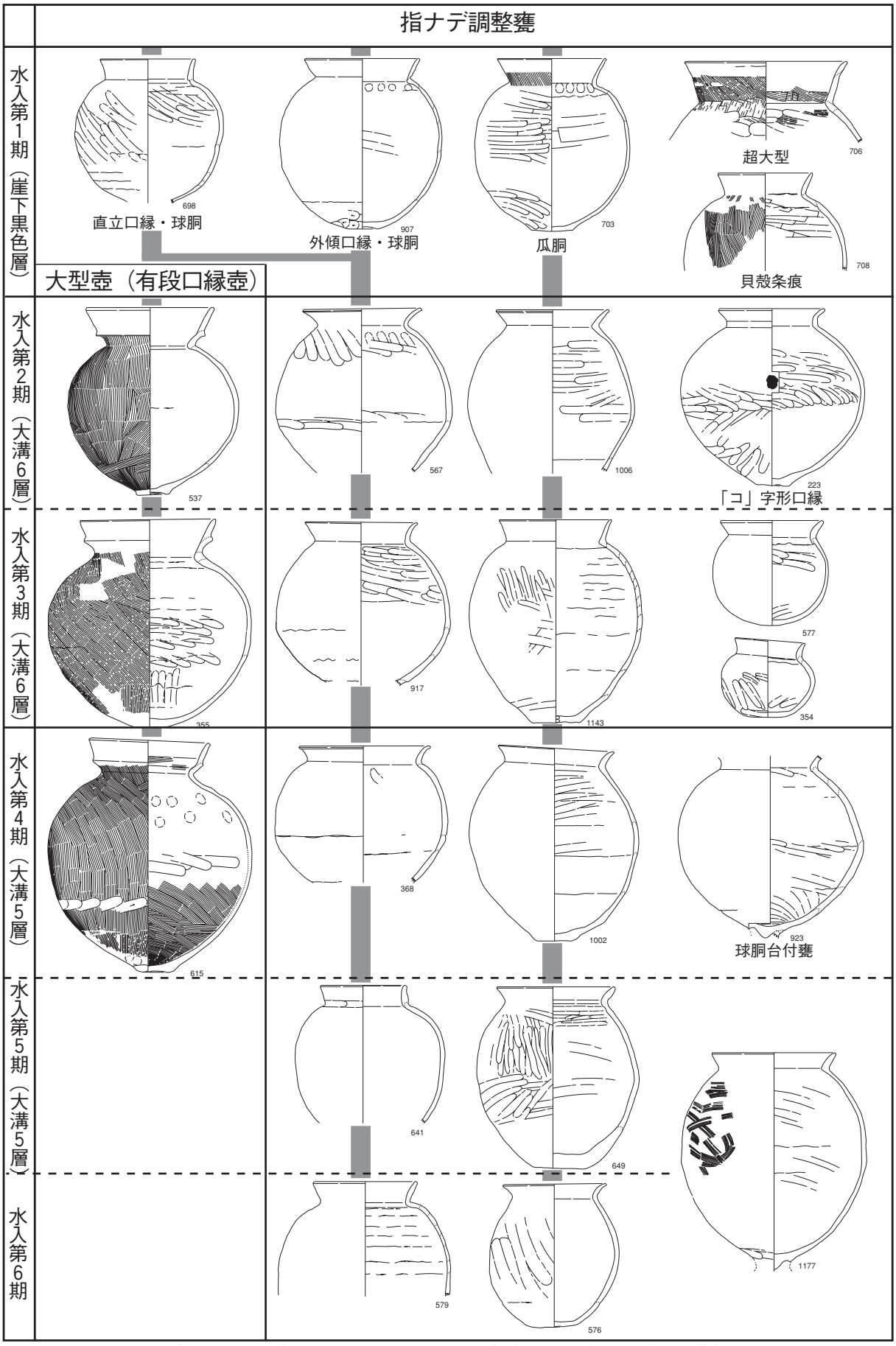
指ナデ調整甕の伝統　高杯と同様に各期にわたって確認される器種として指ナデ調整甕があり、基本的に胴部球形（球胴）、胴部瓜形（瓜胴）の系統が続いたと考えられる。その伝統的な製作工程は大まかに3段階となる（第589図）。第1工程は鉢・椀状の底部の成形、第2工程はそれに上のせする胴部下半の成形である。ここまでで大型の鉢状物体が出来上がり、ある程度乾燥させたものと考えられる。その後



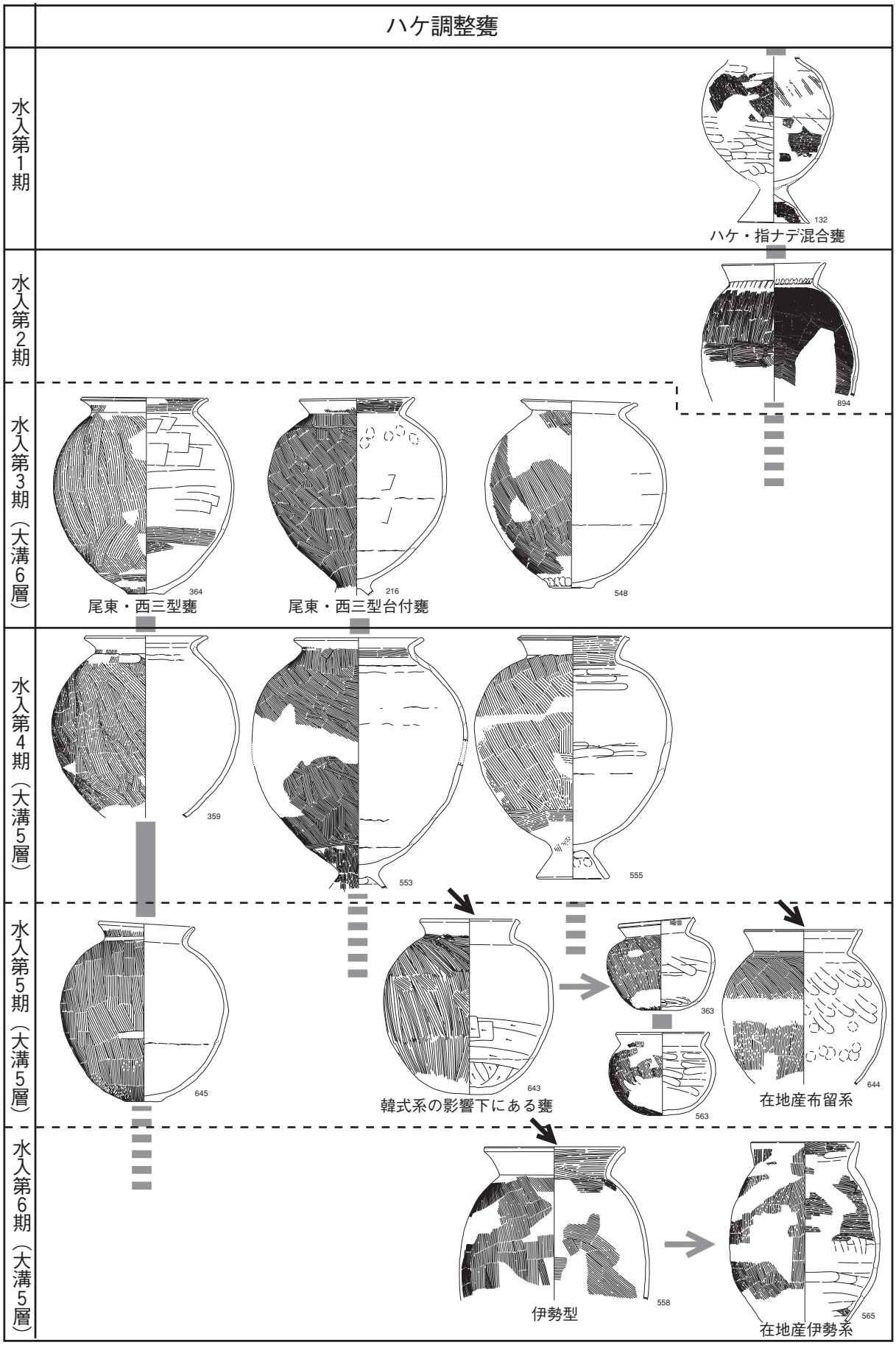
第585図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（1）



第586図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（2）



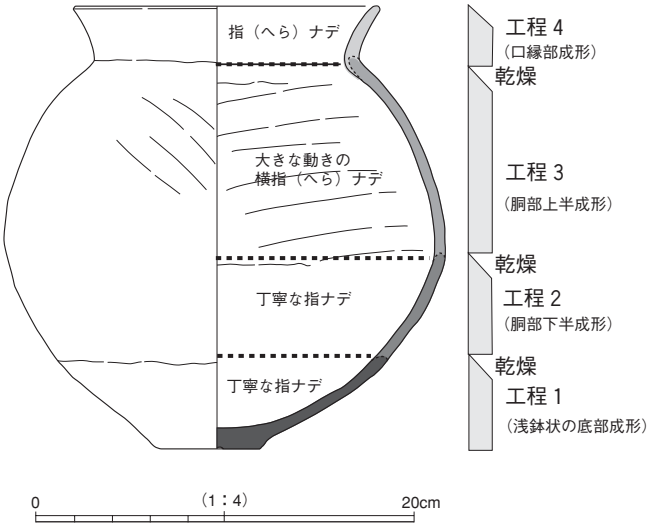
第 587 図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（3）



第 588 図　水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年図（4）

上半部を粘土帯で積み上げる。この製作工程は長らく採用され、6世紀代の在地産長胴甕でも確認できる。

尾東・西三型甕　ナデ甕に対してハケ調整甕は一系統が続くことはない。第1群ではハケ・指ナデ調整が混合しており、ハケ調整が主体となることはない。これと入れ替わりに第3群から登場する尾東・西三型甕は特徴的な口縁をしており、水入遺跡近隣の郷上遺跡でも確認されている（酒井編2001）。指ナデ調整甕に比べて器壁が薄く整った器面調整であり、より高い規格と専業性でもって製作されたことが想定されよう。この甕には平底タイプと台付タイプが存在するが、その製作手法からは平底甕を基本形とし台部の装備が選択可能という作り手の考え方がみえてくる。すなわち台付甕が主体的煮炊具である尾張地域低地部にもそうでない西三河地域にも適応可能な甕であったといえる。残念ながらその生産地は不明とせざるを得ないが、椀状杯部高杯やこれに続いて猿投窯東山地区産須恵器を供給してくる尾張台地部がその候補となるであろう。だが尾東・西三型甕も長くは続かない。水入第5期ではハケ調整甕の中にも雑多な口縁形状のものが登場する。韓式系土器の影響下にある643は類似のものが近隣の神明遺跡で出土している。このような新要素をもった甕と入れ替わりにそれまでの規格性のある甕は目立たなくなってしまう。以上のように、ハケ調整甕の「繁栄」は長くは続かず、西三河地域でも矢作川中流域では外来的存在に終始し在地の土器様式の中になかなか定着しないのである。



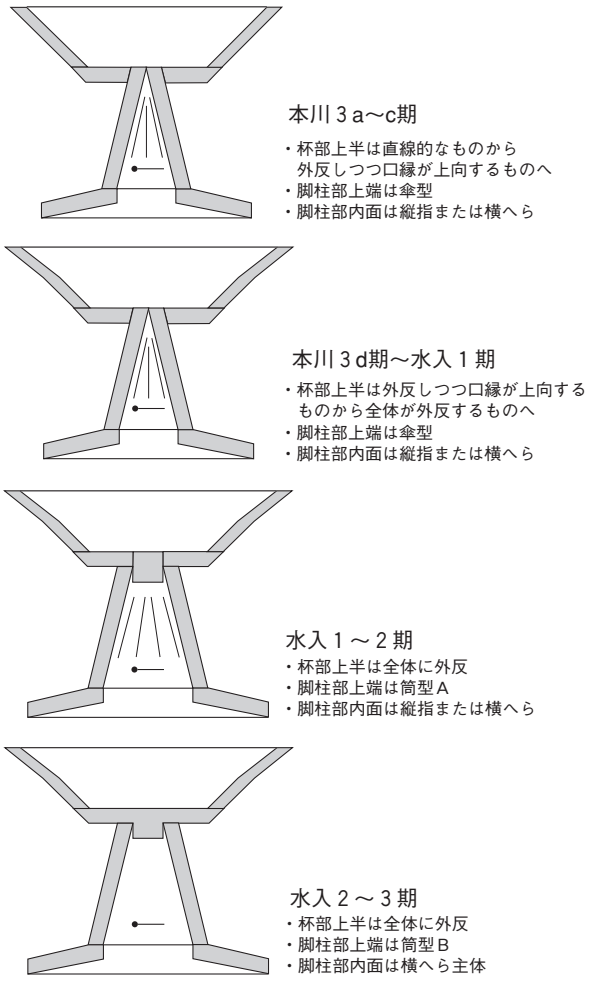
第589図　水入遺跡出土指ナデ調整土師器甕の一般的な製作工程図

「本川式」との関係　ところで本川遺跡出土の古墳時代（Ⅲ期）土器群については、赤塚次郎によってa～eの小期区分がなされ、矢作川中流域の古墳時代前期後半「本川式」の流れが示されている（鬼頭・赤塚2005）。そこでは詳細に触れられてはいないが、竈のある竪穴建物SB2067出土の椀状杯部高杯などをe期とし、それに先行する屈折脚高杯主体の土器群をa～d期としている。前項でも時折ふれたように水入遺跡出土土器群よりは時間軸上では一部重複しながら古く位置付けられることが想定できるようであるが、ここで若干補足しておきたい。

水入第1期では、有稜杯部高杯Aに関して口縁が外反するものがほとんどである。この杯部形状に対応するのは本川Ⅲd期のもので、Ⅲc期では杯部が外反傾向にあるものの口縁端部は上向きである。したがって本川Ⅲc期→Ⅲd期・水入第1期という変遷がたどれよう。これに対して本川Ⅲd期とⅢe期の間はやや断絶の感もある。そこで水入遺跡第1～2期を参照することによって2小期を加えて両者の併行関係を想定したい。まずSB2081では水入第1期に該当する有稜杯部高杯2382～2384、水入第2期に該当する杯部突帯のめぐる高杯2387があり、SB2082でも外反口縁の高杯2409の存在からⅢd期よりは新しく位置付けられる。以上を水入第1～2期併行とみる。次にSB2083出土の高杯は水入第2期該当資

料で占められ、水入第2期の有段口縁壺と同型となる2427がある。ちなみに建物跡の重複関係ではSB2081・2082→SB2083であり、周辺の建物も含めてもSB2083は最も新しく位置付けられる。これらの追加によって水入遺跡第4期併行と考えられる本川Ⅲe期（SB2067）まで集落が継続していたことが確認されるのである。

有稜杯部高杯の変遷　これまで部分的に「本川式」から水入第4期に至る土師器有稜杯部高杯（有稜杯部A類）についてふれてきたが、ここで形態変化と製作手法をまとめてその変遷を提示する。変化する要素の一つは杯部口縁の形態で、直線的なものから外反傾向にあるものへという流れがある。脚部の短小化も水入第1期以降顕著になる。次に製作手法の変化をみると、脚部上端が傘型から筒型へと変化する。筒型は本川Ⅲc期に登場する。これは成形時に脚柱部上端を絞って細くするその度合いによっても違いが生じるが、上端をソケット状に仕上げる意図が重要になる。その「ソケット」部に詰め物をすることで杯部との連結部品の役割を持たせようとしたのではないだろうか。やがてこの連結部品は独立したもの（筒型A）から杯部下端の突起となっていく（筒型B）。しかし高杯の小型化が進むとこれも省略されるようになり、脚部上端は再び傘型になってしまう。脚柱部内面調整は縦指ナデと横へらナデが共存するが、縦指ナデは水入第3期には完全に失われてしまう。



第590図　屈折脚高坏の製作技術変遷図

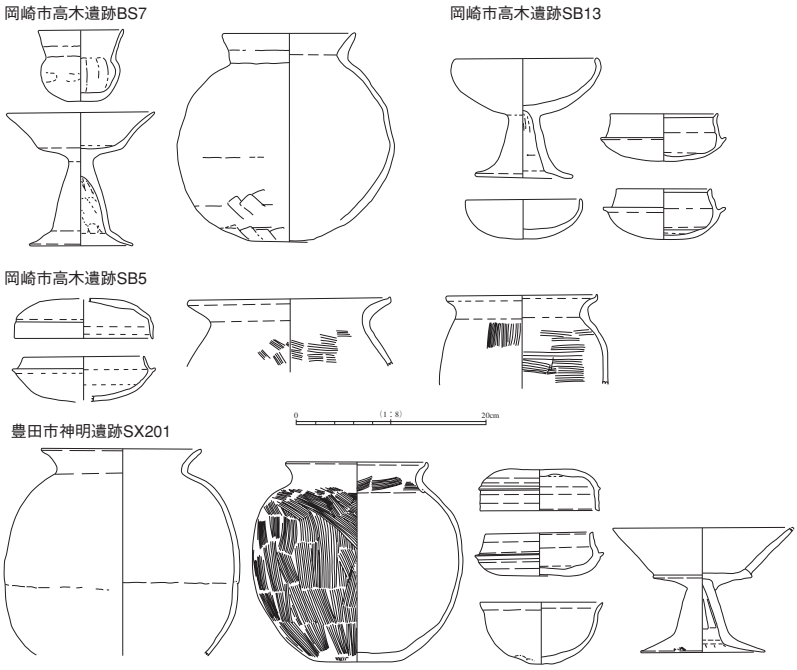
岡崎市高木・神明遺跡　以上、水入遺跡における古墳時代中期の土師器編年にかかる作業をおこなったが、少しずつ範囲を広げて小地域内から中地域内における位置付けを試みておきたい。そこで「神明式」設定にかかる豊田市神明遺跡と岡崎市高木・神明遺跡出土土器のいくつかとの比較をおこなう。

高木・神明遺跡は、岡崎市南部に位置する古墳時代中期の集落遺跡である。矢作川東岸にあることから一般的には古代額田郡に属すると考えられる。高木SB7出土の土師器は有稜杯部屈折脚高杯と小型壺、指ナデ調整丸胴甕で構成される。高杯は口縁外反、脚柱部内面縦指ナデである。ややくずれた小型壺の形状、椀類が含めれない点を考慮すると水入第2期に併行するであろう。次に高木SB13をみる。ここでは須恵器杯身が土器群に含まれていて猿投窯東山地区の製品とは異質だが窯式では東山11号窯式である。これに共伴するのが口縁内湾志向の椀状杯部高杯と椀である。この特徴は水入第5期～第6期に該当する。水入第5期では99CSX13土器群に含まれる須恵器把手付椀と鼈の時期が特定しがたく、東山111号窯式～城山2・3号窯式とせざるを得なかった。これにより水入第5期から第6期へ移る頃に東山11号

窯式が併行すると考えられる。最後は高木SB5であるが、ここでは東山61号窯式の須恵器杯身・有蓋高杯が出土し、これに土師器伊勢型甕が共伴する。土師器供膳具は不明であるが、水入第6期に併行するといえよう。

これら3つの土器群を中心に高木・神明遺跡の動向をみるといくつか注目される点がある。一つは須恵器の産地で、東山11号～61号窯式に併行するとはいえるものの全体に崩れた形状や胎土の状況からみて東山産とは判じがたい。これは水入遺跡出土の須恵器とは異質な展開である。二つ目は土師器伊勢型甕の多さである。水入遺跡では第6期は集落そのものが縮小傾向にあるので単純に比較しづらいが、伊勢型甕は数個体分にとどまる。しかし高木遺跡ではSB5の他にも伊勢型甕が出土する竪穴建物跡が複数ある。6世紀代も集落の繁栄が続くとともに、その根源として碧海郡北部とは対称的に三河湾沿岸部からの物資搬入が頻繁であったことがうかがえる。

豊田市神明遺跡　神明遺跡で注目されるのは、三味線塚古墳という直径27mの円墳が集落の南に近接して造られることである。古墳築造時期は限定しがたいが、その周溝になされた土器廃棄（SX201）は、韓式系土器の影響を受けたとみられるハケ甕や肩の張った球胴ナデ甕に大型高杯と椀がセットとなる。これに共伴する須恵器は東山111号窯式～東山218Ⅰ号窯式である。土師器の構成は水入第5期ないしは第4期でも新しい段階に該当するであろう。このことから水入遺跡を含む小地域において、韓式系土器あるいはその影響下にある土器が登場するのは、尾張地方からの須恵器搬入が画期となると考えられる。また神明遺跡SX201と水入遺跡99CSX13はいずれも大量の石製模造品・臼玉を含むだけでなく、在地系や異系統など各タイプの甕が雑多に混合している点が共通している。当時の祭祀の内容を考えるうえで重視すべき点であろう。



第591図　岡崎市高木・神明遺跡および豊田市神明遺跡出土土器実測図

本川	水入	神明	尾張平野	猿投窯須恵器
3a期		1-1	松河戸1式	
3b期		1-2		
3c期				
3d期	第1期	1-3		
3d+期			松河戸2式	
	第2期	2-1		
3d++期		2-2		
3e期	第3期	3-1	宇田式	
	第4期			東山111・東山218
		3-2		
	第5期	3-3		城山2·3
		神明式		東山11
	第6期	4-1		東山10
		4-2		東山61

第592図　編年対照図

第２節　水入遺跡の古代の土器について

（１）はじめに

本節では、水入遺跡で出土した古代の土器のうち特に土師器甕について考察する。第６章で提示したように、竪穴建物跡出土土器のうち重量換算で土師器の占める比率は58％であった。この比率と比較できる他遺跡のデータはないが、各時期にわたって一定量の土師器甕が集落に供給されていたことは確実で、生活財として大きな位置を占めていたことは想像に難くない。したがって土師器甕の変遷を考察することは古代の集落の推移を知る上で欠かせない作業であるといえる。

三河型土師器甕　８～10世紀代にかけて、より統一された形状の、指ナデ調整仕上げで灰白～明褐色の色調となる土師器甕が、三河国域を中心に分布する。この甕については1990年代から「三河型甕」と呼称され、尾張・美濃国域で主体を占める「濃尾型甕」、伊勢国域で主体を占める「伊勢型甕」と対比する概念として用いられてきた。ただ「三河型甕」そのものの研究は他２者に比べてさほど長くはなく、その概念も８世紀後半～９世紀代のものに対して使用することが多かった。これには、同じナデ甕でありながら10世紀～11世紀前半に広く東海道諸国域に分布するものについては、「清郷型甕（鍋）」と呼称されてきた経緯がある（佐野1990・永井1995）。このように時期の新古によって別概念で扱われた背景に、10世紀代以降のナデ甕分布域の中心が明瞭でなかった点と、この甕が長胴形から丸底の鍋形への急激ともいえる形態変化を遂げた点が挙げられる。しかし北村和宏は2001年に、これら新古のナデ甕は一つの系統として捉えるべきであり、これらの総称としての「三河型甕」を提唱しその変遷を示した（北村2001）。そしてその初現を豊橋市公文遺跡SX01出土甕に求め、共伴する須恵器から鳴海32号窯式（８世紀中葉）と考えた。

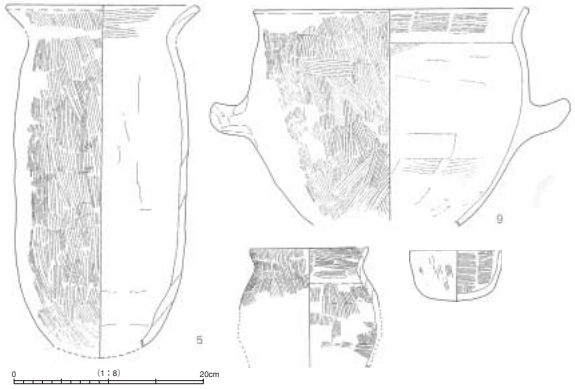
本節では北村2001と基本的には同じ理解をするが、その分類のＥ類以降すなわちこれまで「清郷型甕（鍋）」と呼んでいた一群については後期三河型甕と呼称する。これは先述のように、器壁が厚くなり長胴形を指向しなくなるなど、大きな画期が認められるからである。これに対して薄い器壁と丸底の長胴形、指ナデ調整仕上げという要素でそれ以前の三河型甕（前期三河型甕）を定義する。

（２）水入遺跡出土の三河型土師器甕

水入遺跡の古代土師器甕　水入遺跡出土の古代土師器甕を最終器面調整手法によって分類する。理由は、三河型甕がそのナデ調整によって他の甕と区分されるからである。そして前節で述べたように、在地の伝統的手法としての指ナデ調整と外来的要素の強いハケ調整の相克ともいえる状況が、西三河地域特に碧海郡域の古墳時代中期土師器甕において看取される。そこで古代においても同様の視点をもってハケ調整を抽出することは、当該地域と外部地域との交流を考えるうえで有効と予測されるからである。

器種は長胴甕と小型甕（小甕）で構成される。長胴甕は外面と口縁部内面をハケ調整仕上げする甕（長胴甕Ａ類）、外面ハケ調整の後に（部分的に）指ナデ調整をおこなう甕（長胴甕Ｂ類）、内外面ともに指ナデ調整仕上げする甕（長胴甕Ｃ類）に分けられる。小型甕も同様にＡ～Ｃ類に区分できるが、実質小型甕Ａ類についてはほとんど確認されなかった。

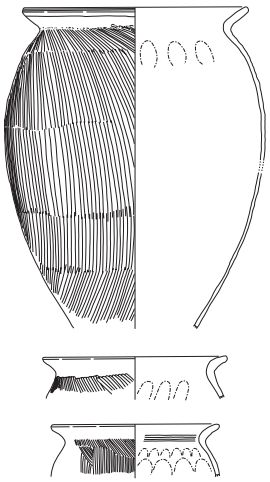
長胴甕Ａ類は段丘崖98C2SX01のグリッドIH 7ａで集中的に出土した。詳細な出土層位は不明だが上層下部に多い。近くから出土した須恵器はないが暗文土師器（1896・1897）と近い地点であることは留意しておきたい。とはいえ時期を特定するには至らないので周辺遺跡で類似の甕を探すと、岡崎市真宮遺跡K2土坑出土の甕・鍋がある（第593図）。岩崎17号窯式の須恵器杯身と共伴しており、7世紀後半代を中心とした時期が想定できよう。ちなみに同じ額田郡域の岡崎市ハサマ遺跡竪穴建物SI4では口縁内面横ハケのない長胴甕Ａ類が出土しており、額田郡ではこのタイプが比較的定着していたといえよう。



第593図　真宮遺跡出土土師器実測図

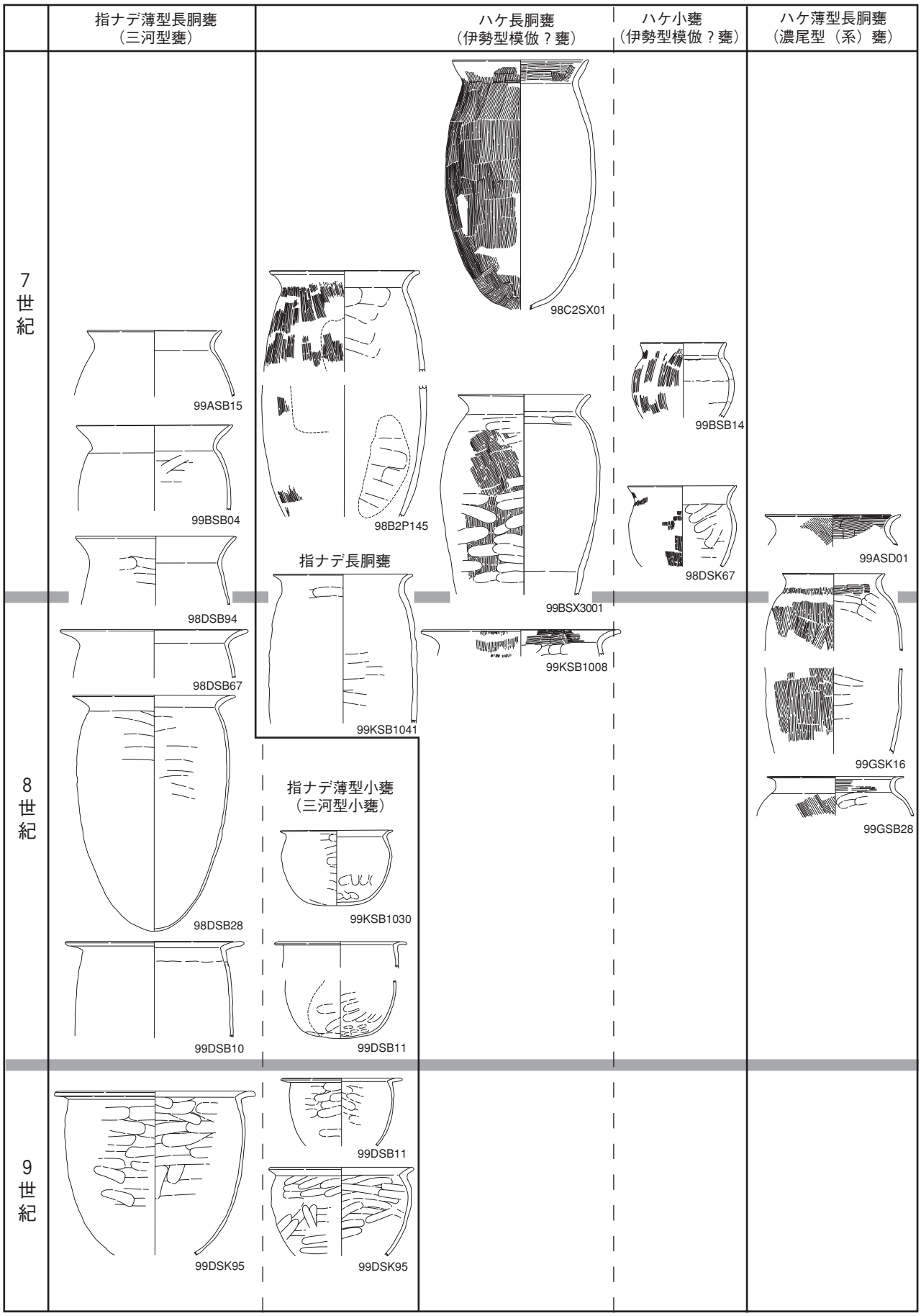
長胴甕Ｂ類は98B2P145（2935）や99KSB1008（2784）など、大屋敷・下糟目両地区でみられる。共伴する須恵器から7世紀中葉から8世紀前葉に限定されよう。ハケ調整後の指ナデが徹底したものや器面劣化が進んでハケ調整痕跡が観察されなかったりするとＣ類に含まれてしまうこともあり、実際はもっと多かったかもしれない。長胴甕Ｃ類もＢ類と同じ分布であるが、数量的には前2者を圧倒している。特に遺跡中央の谷地形99DSX01で目立つ。共伴する須恵器から8世紀後葉～9世紀前葉のものが主体で、屈曲する口縁部をもつ典型的な三河型甕である。それに対して竪穴建物跡出土のＣ類のなかには口縁が外反あるいは外傾するものも含まれる。ちなみに小型甕の分布をみるとＢ類は大屋敷地区を中心にみられる。Ｃ類については長胴甕Ｃ類と対しては少数にとどまりそうである。

濃尾型（系）長胴甕　長胴甕Ａ類は98C2SX01以外に大溝99ASD01や99G区などで出土している。ところで長胴甕Ａ類とした特徴は、濃尾型あるいはその系統にあって各在地で生産された濃尾系長胴甕の特徴にも当てはまる。そこで水入遺跡における濃尾型（系）長胴甕を抽出しその出土状況をみておく。大溝99ASD01出土のもの（1458）は外反口縁の端部に向かって器厚が薄くなる。これは典型的な濃尾型が登場する直前の一形態で、7世紀後葉～8世紀初頭と考えられる。99GSK16出土のもの（3182）は肩に張りのある胴部が特徴である。また99GSB28（98DSB95）出土のもの（2741）は肩の張りから口縁部のくびれが明瞭になり典型的な濃尾型長胴甕となる。このタイプの登場は8世紀前葉と考えられており、99GSB28での共伴須恵器からもそれが肯定されよう。



第594図　梅坪遺跡出土の濃尾型甕実測図（報告書掲載図再トレース）

以上のように7世紀後葉～8世紀前葉の濃尾型（系）甕が水入遺跡の古代集落にもたらされた（搬入・在地生産ともに）ことが確認できる。しかしその後の濃尾型（系）長胴甕は皆無である。この動向は三河型長胴甕の量産開始とも関わって注目すべき事実であろう。これに関して付言しておくと、水入遺跡より北に位置する賀茂郡の梅坪遺跡竪穴建物跡SB1104（豊田市）や旧足助町・旭町域では9世紀後半段階の濃尾型長胴甕が一定量出土している（永井2005）。8世紀中葉以降の水入遺跡を始めとする碧海郡内の集落遺跡で



第595図　水入遺跡における古代の土師器甕編年図

は全くといっていいほど出土しないので、西三河地域でもその展開は一様でなかったことが指摘しうる。

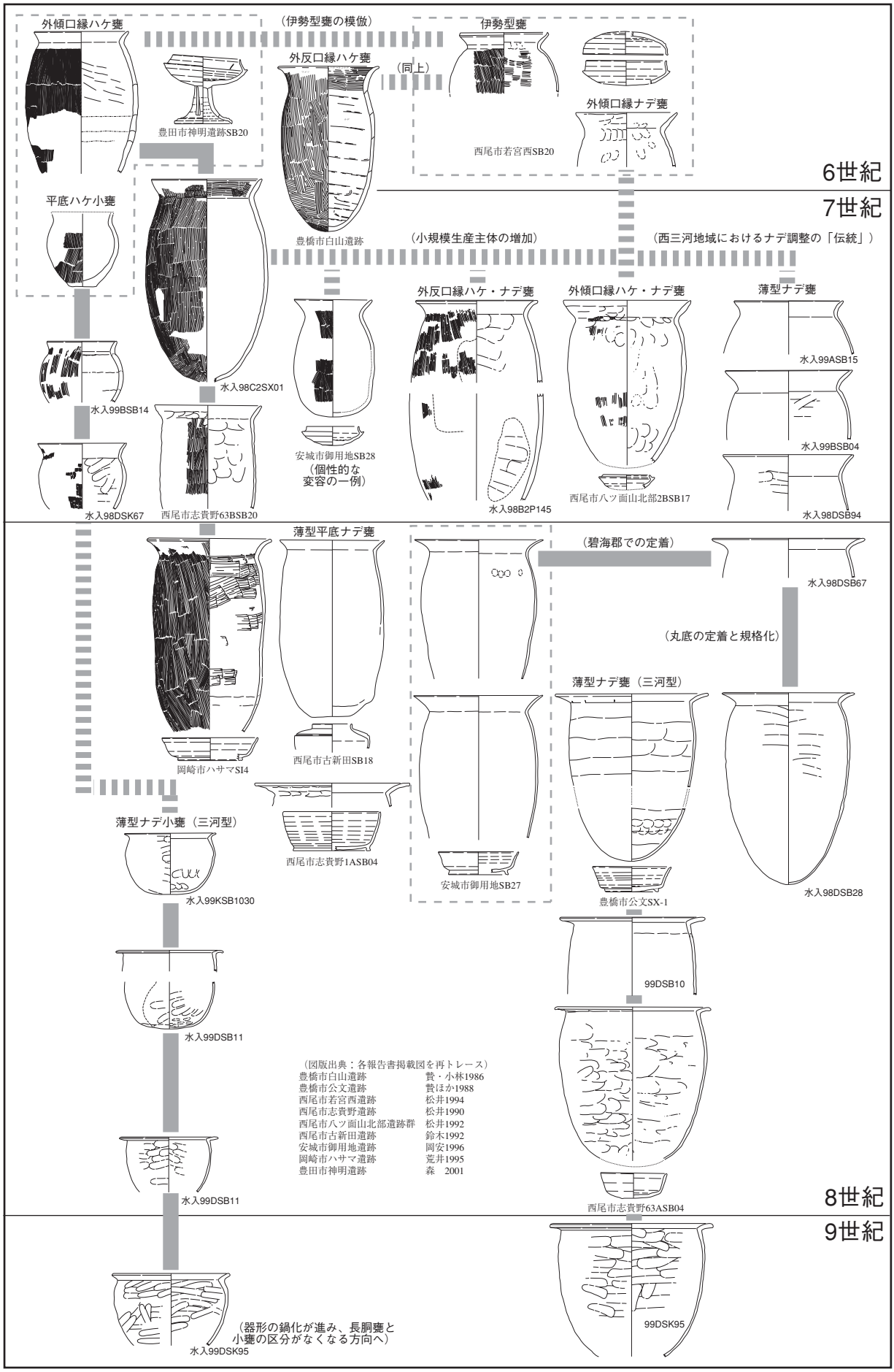
ハケ甕からナデ甕へ　7世紀後半と想定された長胴甕B類は長胴甕A類の後継という可能性、つまりハケ調整甕からハケ調整＋ナデ調整甕という流れの可能性も考えられるのだが、そう単純ではなさそうである。というのも98C2SX01の長胴甕A類一群には丸底と平底が共伴しており、そういった点でみると複数の系統がからみあった状況が予想される。前節でもみた「合の子」の発生にも似た状況がこの時期の甕にも言えるのではないだろうか。

長胴甕B類については、99BSB14での多数の平底底部出土をもって平底であったと推測する。問題はハケとナデの関係であるが、長胴甕B類の場合ハケ調整工程の一部を省略するのではなく、ハケ調整痕を上からナデ消すという作業である。したがって「ハケを捨てる」という表現は妥当ではなく、最終調整としての指ナデを重視する古墳時代からの伝統がこの時期に顕現してきたというべきである。

水入遺跡における薄型長胴甕の登場　複雑な状況の中から、西三河産と考えられる指ナデ調整の薄型長胴甕が登場する。99ASB15は東山50号窯式（7世紀中葉）を中心とする土器群であるが、この中に器厚の薄い甕（薄型甕）がみられる（2103）。次いで99BSB04（99BSB06・99BSB14）には口縁が大きく外反する薄型甕（2141）がある。これにはおよそ岩崎17号窯式の須恵器が共伴する。この薄型甕は98DSB94、98DSB67と時期が下るに従って胴部肩の張りが少なくなり口縁が長く外反が強くなる。ただ残念ながらこれらの全形は復元できていない。そして98DSB28出土例（2498）は、須恵器鳴海32号窯式一括資料と共伴し、時期・全形ともに判明する薄型長胴甕である。口縁下部～胴部外面に明瞭な屈曲部があって口縁断面が草刈鎌形となり、本資料では胴部径がやや細身であるが北村A類に該当する。口縁部形態の変化に注目すると以上の甕は一つの型式変化の組列として把握される。

その後典型的な三河型長胴甕（北村B・C類）が展開する。須恵器折戸10号窯式併行期のもの（99DSB10など）はほぼ直角に折れる口縁部にくびれのない胴部～丸底という形状が多数を占める。三河型甕は長胴甕と小甕があり、そして形状は確認されていないが、初期段階には大きな口径の鍋もあったと考えられる。その後井ヶ谷78号窯式併行期（99DSK95）には口縁がやや上向きさらに一部では短小化が進み胴部も短くなる傾向がある。

鍋形化する三河型甕　後期三河型甕への変化は一見唐突ではあるが、こうしてみると鍋形化の進行は漸次的であったようである。特に三河型甕の場合、もともと丸胴であった小甕が鍋へと変化する過程が明瞭である。99DSB10段階では直角に折れる口縁に対し胴部最大径はやや低い位置にあるが、99DSB11・99DSK95段階を経て胴部最大径はやや高い位置になり、底部がよりすぼまった形状になる。これは口縁部の肥厚がない点を除けばほとんど後期三河型甕の特徴を先取りしていると言ってよいが、一方で共伴する長胴甕はそこまでは至っていない。長胴甕は造付け竈に設置するという前提があって、器形がそれに規制されるからとも考えられるが、いずれにせよ鍋としての後期三河型甕の誕生には小甕の存在が大きかったのではないだろうか。しかし水入遺跡では9世紀後半以降の資料が激減し、その後の後期三河型への道程が詳細にたどることはできない。ちなみに98B2SD01などで10世紀以降の後期三河型甕がわずかにみられる。



(図版出典：各報告書掲載図を再トレース)

豊橋市白山遺跡	贄・小林1986
豊橋市公文遺跡	贄ほか1988
西尾市若宮西遺跡	松井1994
西尾市志貴野遺跡	松井1990
西尾市八ツ面山北部遺跡群	松井1992
西尾市古新田遺跡	鈴木1992
安城市御用地遺跡	岡安1996
岡崎市ハサマ遺跡	荒井1995
豊田市神明遺跡	森　2001

第596図　西三河地域を中心とした三河型甕の成立過程図

（3）三河型甕の初現

8世紀中葉の三河型甕　したがって問題となるのは、7世紀中葉～8世紀中葉の薄型長胴甕のどの時点を三河型甕の成立とするかである。そこで碧海郡内の古代集落遺跡出土長胴甕を瞥見する。まず安城市御用地遺跡SB27出土例が注目される（第596図掲載の上下2点）。ここでは高蔵寺2号窯式～鳴海32号窯式の須恵器に共伴して2つの指ナデ調整薄型長胴甕が出土している。下の甕は草刈鎌形口縁であるが水入遺跡98DSB67と比べてやや上向き、上の甕は屈曲部のない外反口縁でいずれもやや古相を示している。甕の底部については不明であるが、北村A類の指標となる豊橋市公文遺跡SX01出土例に比べて胴部下半のカーブが少なく寸胴な印象があることから平底の可能性もある。ここで平底の例を挙げると、碧海郡南部の西尾市古新田遺跡SB18出土例がある（第596図）。共伴する短頸壺から8世紀初頭まで下る可能性が考えられる。平底は三河型甕の定義にはないので、この段階では三河型甕の成立とはならない。ただ、水入遺跡・御用地遺跡・古新田遺跡の事例からは、8世紀前葉の碧海郡域に、規格性は低いながら類似する薄型ナデ甕が分布する状況が知られ、それが西三河地域で定着しつつあったことがわかる。

もうひとつは碧海郡南端もしくは近世以降の幡豆郡北端に位置する西尾市志貴野遺跡の竪穴建物1ASB04である。ここにも、高蔵寺2号窯式～鳴海32号窯式の須恵器が共伴する指ナデ調整薄型長胴甕があり、口縁の形状から北村A類と考えられるが底部については不明である。ただ、水入遺跡98DSB28や豊橋市公文遺跡SX01での事例から、鳴海32号窯式でも古い段階に東・西三河を通じて丸底薄型ナデ甕が登場することは確実視され、志貴野1ASB04もそのひとつである可能性は高い。

三河型甕成立前　次にこれを遡る須恵器岩崎17号窯式段階（7世紀後半）の事例をみる。幡豆郡北端の八ツ面山北部遺跡群竪穴建物2BSB17にはハケ・ナデ長胴甕がある（第596図）。この甕は、外傾する直線的な口縁が特徴で、水入遺跡1870の口縁にも通ずるものがあり、さらにこれのルーツは神明遺跡竪穴建物SB20の甕（東山61号窯式併行）に求められよう。しかし外傾口縁のみでみると西尾市若宮西遺跡竪穴建物SB20出土の指ナデ甕にもあり、ここからの系統とも考えられる。これは先述した「合の子」の一例であるともいえるが、そもそものルーツは6世紀代に伊勢から搬入された伊勢型甕と想定され、これの在地における模倣品が7世紀代に個性的な変容をみせると予察される。

以上のことから、指ナデ調整薄型長胴甕の大量供給開始以前の西三河地域においては、小地域（およそ郡単位）ごとに個性のある、しかも個体差の大きい長胴甕が生産・供給されていた様子が垣間見える。それぞれの集落（遺跡）独自の甕があるといっても過言ではなく、小規模な土師器甕生産主体が小地域ごとに存在したと推察される。しかしながらそれは、中～小地域どうしが複雑な交流のなかで甕作りの技術あるいは製品そのものを入手した結果であり、複雑な系統を整理することで、よりリアルな地域間交流の一端を知ることができるのではないだろうか。

三河型長胴甕の祖型となる指ナデ調整薄型長胴甕もそのような小地域に流通する甕のひとつであったと考えられる。その発展型に規格性をもたせて大量生産への道筋をつけたのは他ならぬ三河国域を統括する三河国衙の働きが大きかったことは想像に難くない（北村2001）。しかし何故碧海郡の指ナデ調整甕が採用されたのかについては検討を続ける必要があろう。碧海郡が、北野廃寺や寺領廃寺の瓦に代表される7世紀後半～8世紀代にかけての三河国域における瓦生産の一拠点であったことを想起すると、瓦

を含めた窯業において先導的な立場であったとも考えられる。今後はさまざまな視点から碧海郡（を中心とする一定地域）の西三河地域あるいは三河国域における個性あるいは優位性を抽出する作業も必要になるだろう。

胎土分析の成果　第10章第6節にあるとおり、水入遺跡をはじめとする西三河地域の前期三河型長胴甕の胎土には、淡水性粘土をベースとし特定の淡水性珪藻化石が突出して含まれる事実が提示された。器形に加えて粘土素材に関しても重要な共通点をもつ甕が広範に分布することが確認されたのである。つまり三河型甕の統一性は、いくつかある生産拠点もしくは集落に対して共通の「設計図」がもたらされたことによって生じたのではない。粘土採取地点を含めたある特定の生産拠点が存在したことを予想させるものである。ただ特定の珪藻が多数を占めるということが、即その珪藻種が生息するような環境を粘土採掘場所としていたことにはならない。例えば水溜状の施設に採掘してきた粘土を一定期間貯蔵すれば、ある特定種の珪藻が増加し粘土中に混入しやすくなると考えられる。したがって今回の胎土分析結果は、可能性として特定の粘土採掘地点あるいは生産拠点（粘土貯蔵施設を伴う）を示唆するものとして重要であり、かつその場所が海岸部から離れた河川沿いの環境に求められる可能性が高いものとして評価されるのである。

加えて後期三河型甕について実施した分析結果は前期三河型甕との隔たりを強調するものとなった。粘土採掘環境は異なるが、これも特定の採掘場所に由来するとみられる共通性をみせている。今回は数量が少なくしかも西三河地域に限ったため、この型式の甕が尾張や遠江・駿河など広範に分布する事実が特定生産地からの供給によるものなのかどうかまでは言及できなかった。前期三河型についても東三河・尾張地域出土資料も加えて分析することが今後必要となってこよう。

第３節　水入遺跡の古墳時代中期から平安時代について

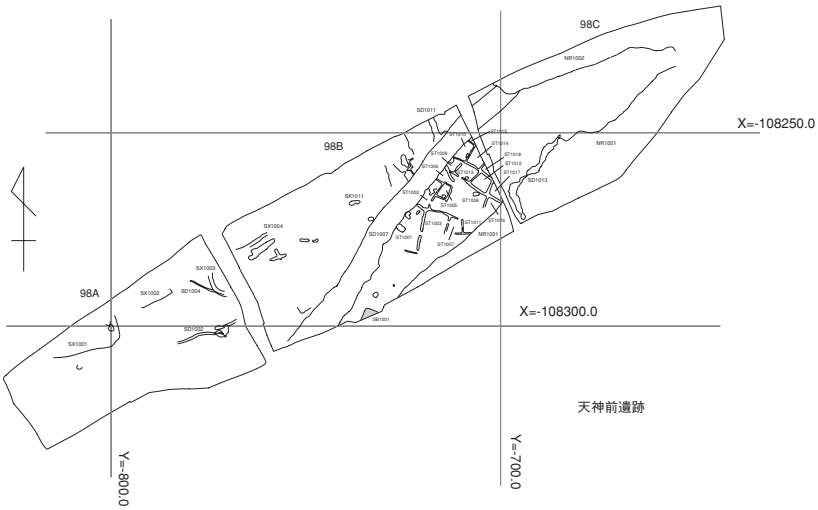
（１）はじめに

本節では古墳時代中期から平安時代における水入遺跡にかかる留意点をいくつか提示し、今後の議論を深める出発点としたい。水入遺跡における大画期の一つに古墳時代中期の大溝築造が挙げられる。それ以前は弥生時代末期（川原上層Ⅲ式）に、集落域としての段丘面上への進出が一時的になされた程度で、さらにそれ以前で明確な集落としての痕跡が認められるのは縄文時代中期末～後期初頭になってしまう。そのことを考えると、古墳時代中期から平安時代まで生活痕跡の濃淡は時期によって変化するけれども、初めてこの地に長期間の居住が続いたことの意義が問われるのはいわば必然といえよう。

（２）大溝について

大溝築造という画期　大溝は前々節における土器による時期区分で水入第１期に築造される。このことは大溝機能時の最下層出土土器がそれに該当することと、水入第１期直前の土器（本川Ⅲｃ期）が出土しないことから明らかである。つまり廃絶した川原上層Ⅲ式期の集落跡地に何の前触れもなく大規模な開発が実施されるのである。さらに、調査範囲では水入第１期の土器群は大溝と段丘崖下のそれぞれ一部でしか確認されておらず、段丘面上に集落を建設するのにさきがけて大溝が築造されている点も見逃すことができない。そのような事実から、大溝が弥生時代環濠集落のような集落を外部から囲ったり区画したりするために造られたものではないことがわかる。いわば「初めに大溝のみありき」の状態だったのである。

灌漑目的　したがって大溝築造の目的は、水入遺跡の分析のみでは何も見えてこない。周辺地域における古墳時代集落の分析を踏まえて始めて議論が可能になる。水入遺跡周辺には南西方向の沖積地上に天神前遺跡・郷上遺跡・本川遺跡、その先の台地上には神明遺跡という集落遺跡が列をなして展開する。特に本川遺跡は前々節でもふれたように水入遺跡に先行する型式の土師器が多数出土する集落遺跡で、その最盛期は水入第１期併行期とその前（Ⅲｂ・ｃ期）にあるとみられる。天神前遺跡では水入第２期に該当するとみられる水田・大溝・竪穴建物が確認された（天神前古墳時代中期1期）。このうち水田は幅約 6m の大溝（天神前 SD1007、以下天神前大溝と呼ぶ）に先行し、竪穴建物は状況からみて大溝と同時に存在したと推定される（鈴木2001）。天神前大溝出土の土師器台付「甕」は大型壺に台が付いたもので、本川遺跡 SB2083 でも同

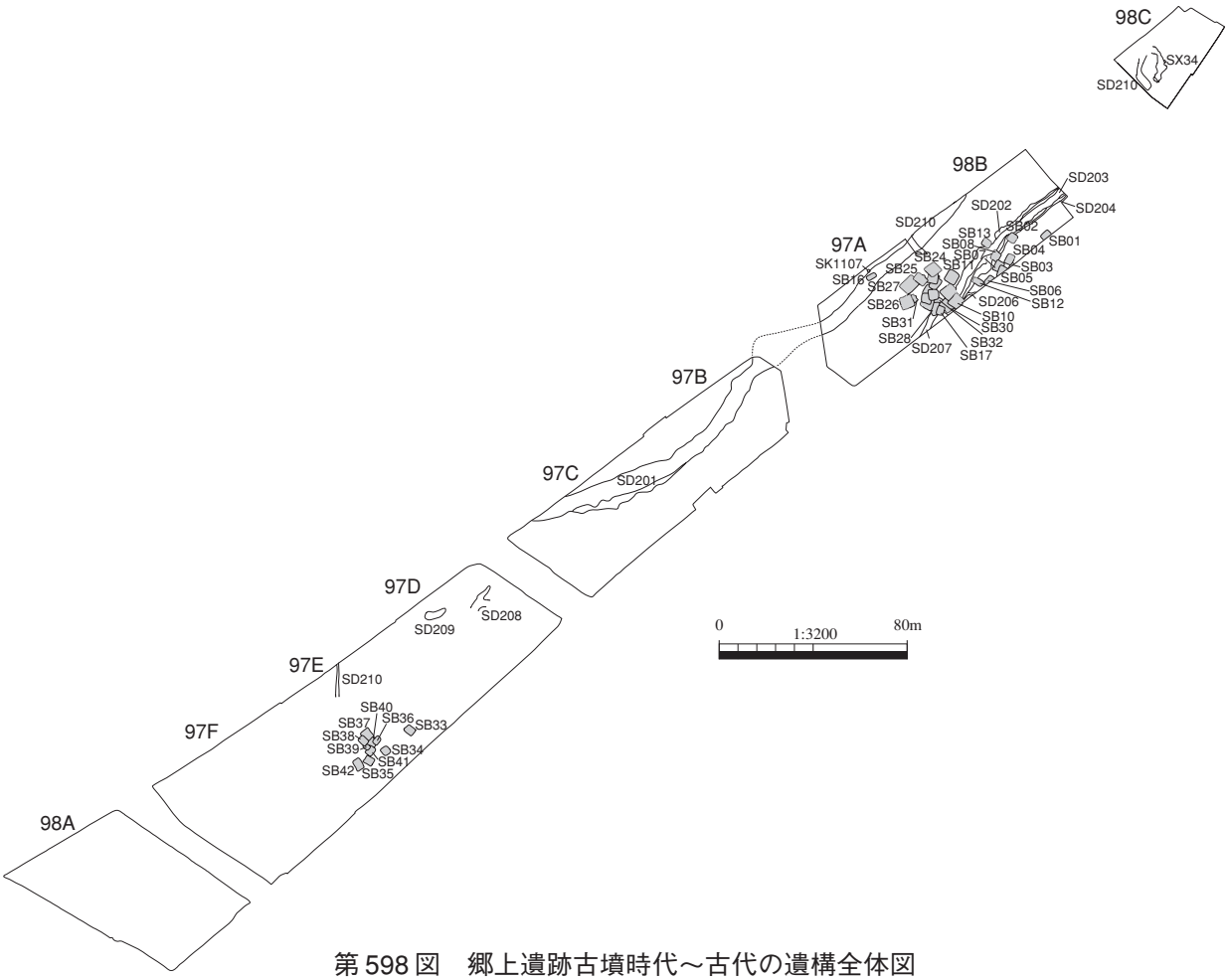


第 597 図　天神前遺跡古墳時代遺構全体図

様の台付「甕」が出土している。本川SB2083は共伴土器から水入第2期と考えられる。天神前例は下ぶくれな胴部に線刻があることからやや古くみることができよう。すると天神前大溝が水入第1期～第2期に当ると想定される。ここでは水田耕作が既に開始されているところに大溝が貫流することに注目しておきたい。この大溝の続きは郷上遺跡でも確認された（郷上大溝）。郷上遺跡では集落がのる自然堤防の西端を調査しており、大溝の東側に集落を画する小溝、次いで集落の順で確認されている。しかしこの遺跡で確認された遺構・遺物は水入第3期以降が中心で、大溝出土資料の中にも水入第1期にまで遡るものはないことが留意される。

以上、関連する周辺遺跡を概観したが、水入遺跡の大溝開削時期に近い天神前大溝の存在は大いに気になるところである（第597図）。両者を同一視するにはやや距離が開き過ぎるが、98B2区での状況をみても水入遺跡の大溝が遺跡南側の段丘崖から沖積地へと突き抜けるのは確実で、機能していた時期が近いことを考えると天神前大溝に繋がる可能性は高いといえる。そして天神前大溝は郷上大溝へ続く。郷上大溝の立地は自然堤防を避けた西側の後背湿地にある。郷上遺跡の主体がのる自然堤防が遺跡から北側へどの程度のびるのかは定かではないが、矢作川の分流がつくり出した段丘落ち際の後背湿地が天神前遺跡のように水田として開発されていたと考えられる。大溝はそこを通り水田に水を供給したのではないだろうか。すなわち灌漑である。

しかしこの灌漑事業は永続しなかった。まず天神前遺跡では大溝だけでなく遺跡北部が洪水痕跡と考



第598図　郷上遺跡古墳時代～古代の遺構全体図

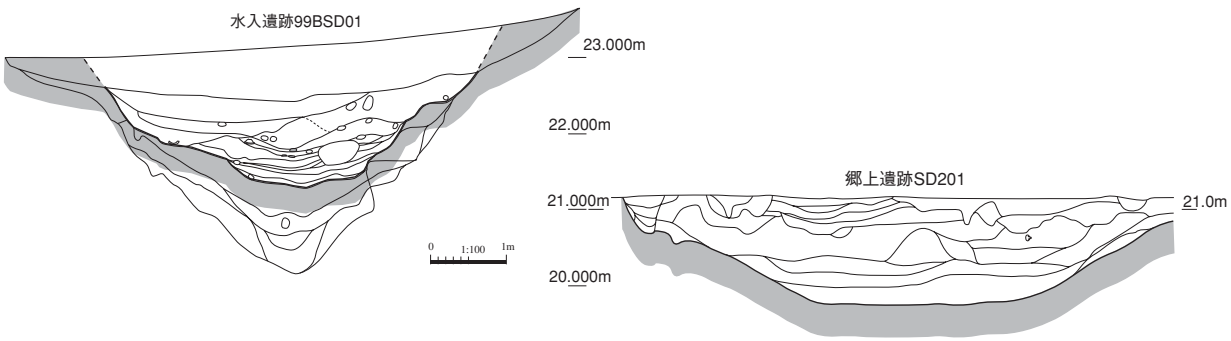
えられる自然流路に大きく侵食されてしまう。その後天神前遺跡では顕著な遺構の展開や遺物出土が認められず、半ば放棄されたような状況となる。そして水入遺跡の大溝第6層（水入第2～3期）は水が溜まったような状況で、その第7～9層で確認された水流は失われたようである。溝が埋もれたり水位が変化してしまうことで、ここに壮大な開発は頓挫した。

その後水入遺跡では、大溝の東側に集落が展開し、大溝は巨大な廃棄坑となる。天神前大溝は復活することはなかったが、その下流の郷上大溝は、自然流路など他の水源へ接続して溝としての機能は継続させていたようである。これには溝そのものが水入大溝よりも低位を流れていたことや集落がすぐ近くにあったことが関連する。すなわち矢作川もしくはその分流と結ぶ、交通機能をもたせた運河として再生したと想定されるのである。大溝の断面は幅広（約6m）で深さは約1mに抑えられている。この規模ならば運河として充分機能したと考えられる。郷上遺跡では7世紀前半まで集落が継続し、大溝からは7世紀以降の遺物も出土することから、幾度も掘り返しながら存続させていったと考えられる。

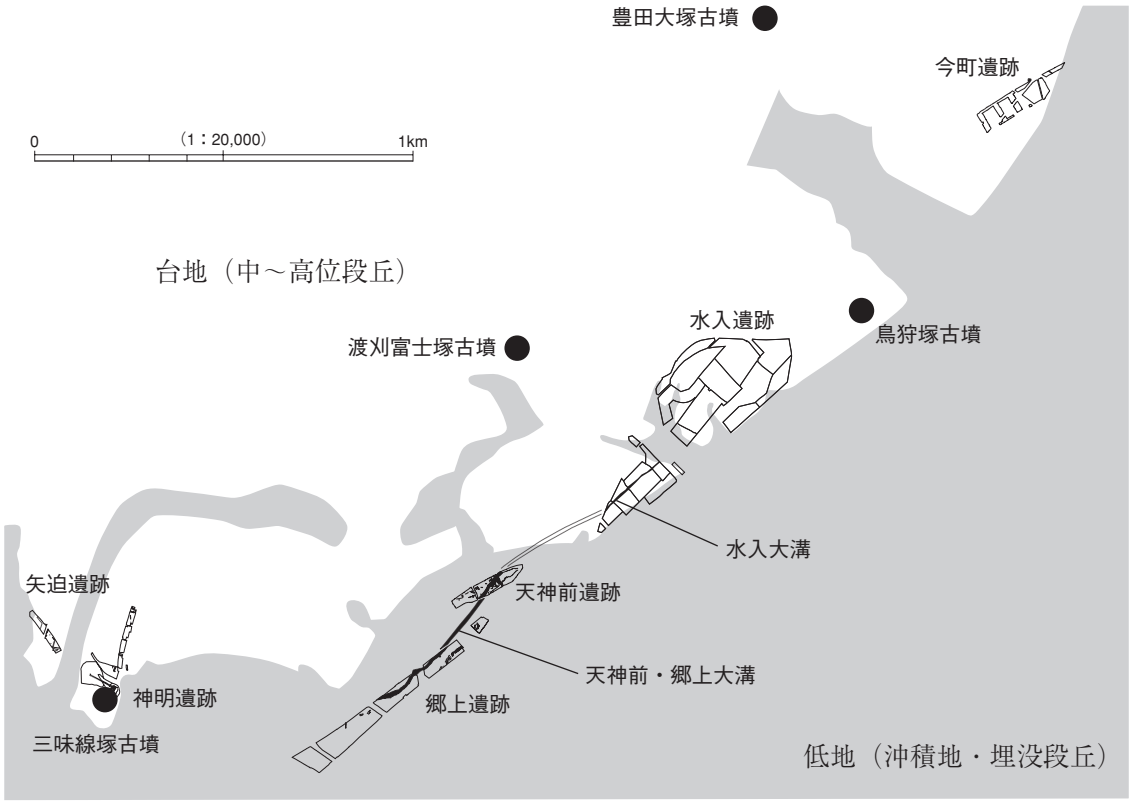
布留遺跡と「石上溝」　このような古墳時代中期の大溝灌漑の事例を畿内地方にひとつ求めると、奈良県天理市布留遺跡が挙げられる。布留遺跡は布留式土器の標識遺跡でもある古墳時代を代表する遺跡であるが、遺跡の立地は布留川周辺の谷地形とその南側に位置する細長い下位段丘で構成される。1980年の発掘調査で（杣之内木堂方地区）、大型掘立柱建物とその西を流れる大溝が確認された（置田1983）。置田雅昭によると大溝の規模は幅13m深さ3.2mで古墳時代後期には埋没していたという。

この大溝で最も注目されるのは、全長約300mにわたって下位段丘を開削して、北の布留川から水を引き下位段丘南側の谷地形へと灌漑している点である。数カ所の調査地点によって、水入大溝と同じく緩やかな傾斜がつけられていたことがあきらかとなっている。置田はこの大溝を『日本書紀』履仲天皇条にある「石上溝」と比定し、「石上溝」の開削は、布留川級の川がない下位段丘南側低地への灌漑をおこない水田開発を進行させる目的があったと考える。

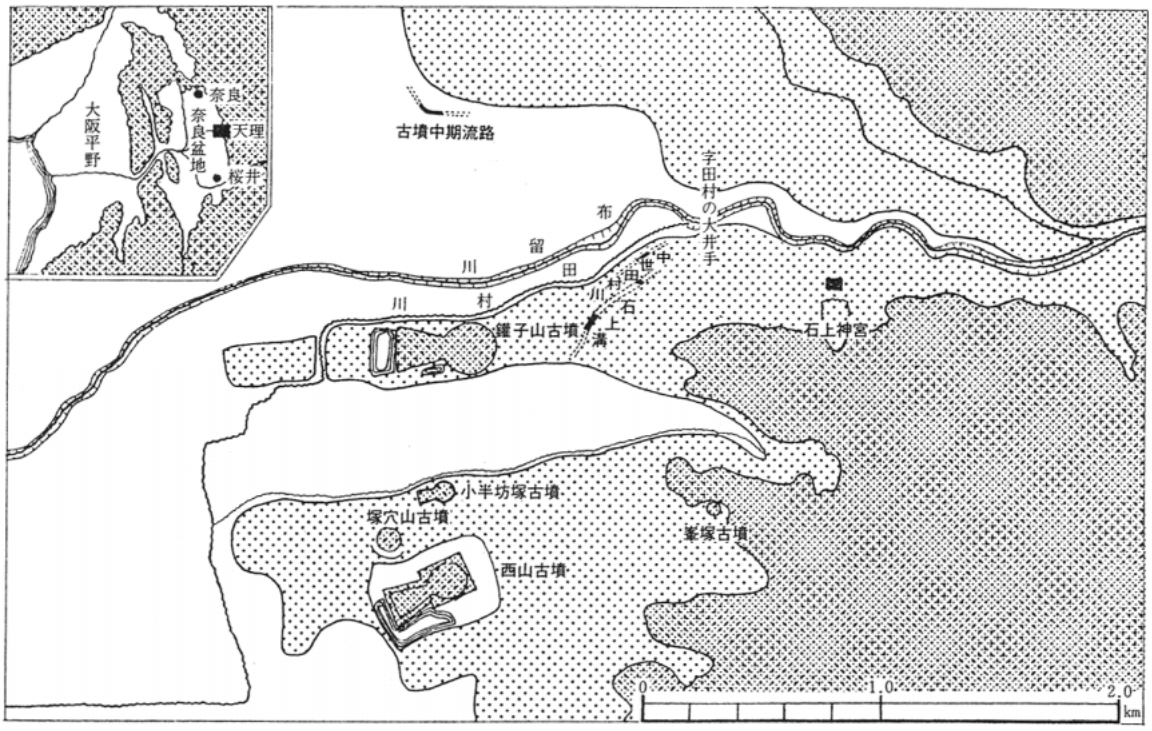
大溝周辺の地形と関連させて考えると、水入大溝においても似たような状況が想定できる。すなわち天神前、郷上遺跡北側に位置する開析谷は、ほとんど埋没谷に近い状態で、ここからの水量はさほど期待できない。さりとて沖積地上において矢作川級の河川から直接水を引くのは、当時の技術からするとリスクが大きかったと考えられる。広瀬和雄によると、弥生時代から古墳時代の灌漑技術は深さ1mの川から水を引く程度の技術であったとされる（広瀬1991）。そこで宝蔵川のある水入遺跡中央の谷地形を利用したのではないだろうか。すなわち水位上昇によって矢作川からの流れ込みもあるこの谷地形の



第599図　郷上遺跡大溝と水入遺跡大溝の断面比較図



第 600 図　鴛鴨・渡刈地区の遺跡と大溝の関係図



第 601 図　奈良県天理市布留遺跡における石上溝の位置図

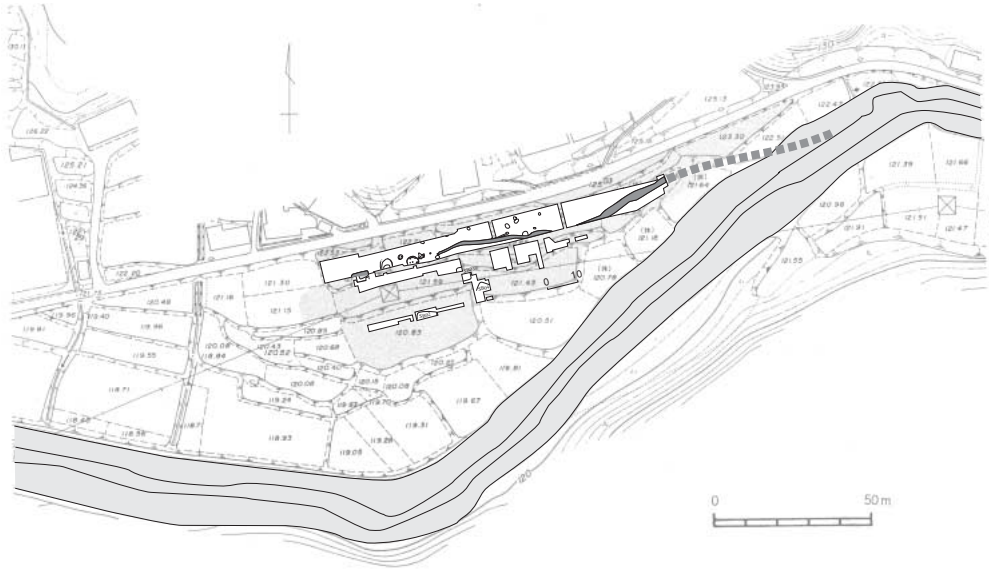
水資源を、段丘を開削しその南側に流すことで後背湿地の水田開発につなげたのではないだろうか。

豊田市寺ノ下遺跡　古墳時代中期の灌漑施設は西三河でも認められる。豊田市足助地区の寺ノ下遺跡は、賀茂郡東部の山間部にあって、矢作川支流の阿摺川がつくる谷地形に所在する。ここでは阿摺川と平行にのびる約80m幅1.3m深さ80cmの溝が確認されたが、その上流部には阿摺川との分岐点（堰）があると考えられる。阿摺川は下っていくが、分岐した溝はそれよりも高い位置をほぼ水平にいはしり、溝の末端付近には3棟の竪穴建物がある。この溝から分岐する小溝や水田の存在は確認されていないが、小規模河川から直接取水する灌漑が行なわれていたことを示す資料である。

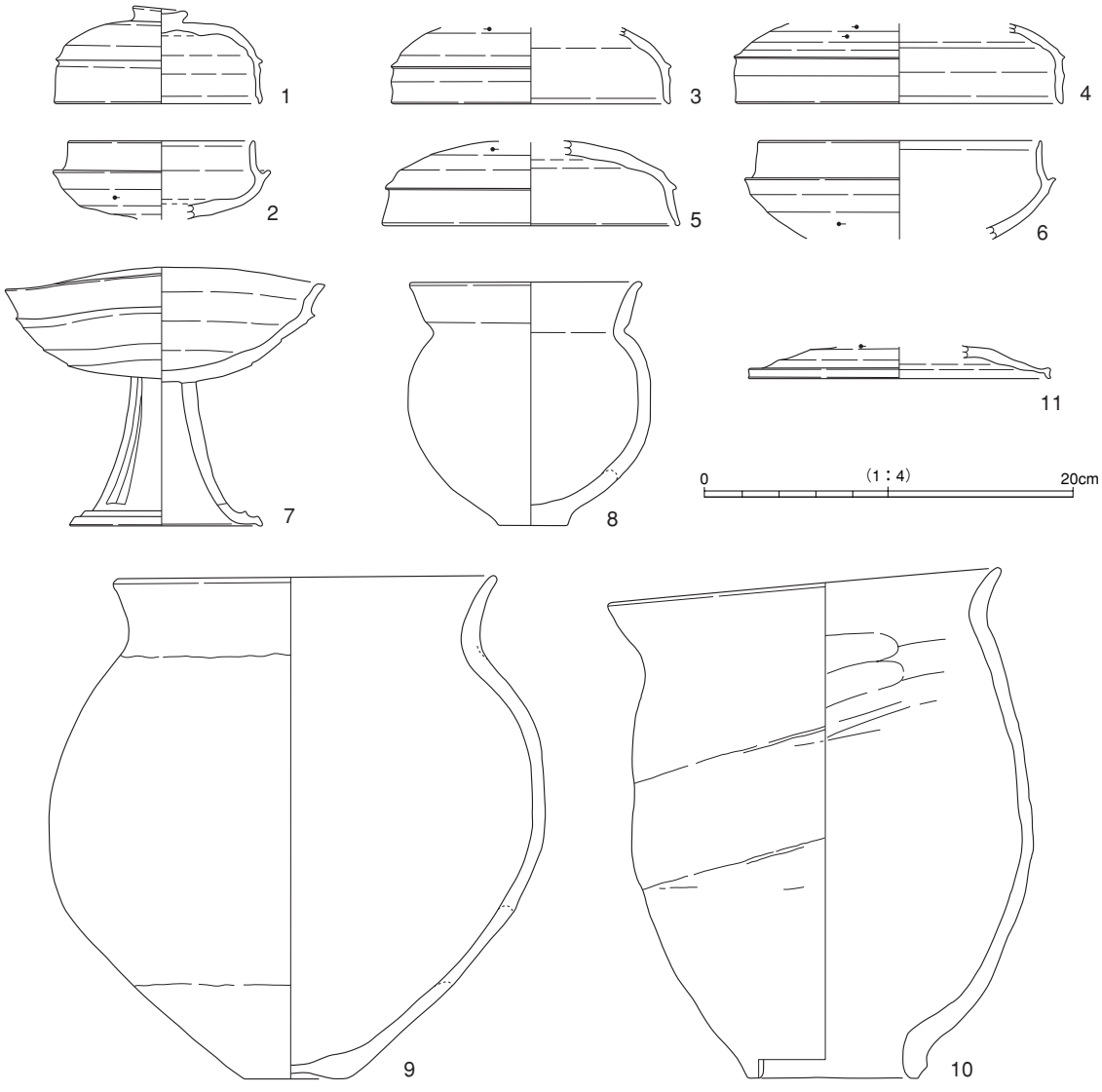
溝や竪穴建物跡からの出土遺物は、古墳時代中期の土器と井ヶ谷78号窯式の須恵器で、古墳時代中期の集落展開はさほど長期間ではなかったように思われる（第603図）。1と2は東山11号窯式の須恵器有蓋高杯とその蓋で、シャープな仕上がりと硬質な焼成で東山産と考えられる。一方須恵器の主体を占めるのは東山61号窯式併行期とみられる杯蓋（3～5）と杯身（6）であるが、これらは端部の調整が甘く、焼成も1とは全く異なる。東山産とは少々考えにくい一群である。7も同様にやや歪んだ無蓋高杯である。須恵器生産が東山地区から離れた所で始まっていたことを示す資料である。土師器はいずれも指ナデ調整で、小甕（8）と溝から出土した甕（9）と甕形の甑（10）がある。須恵器と併行期かやや古い時期のものと考えられる。いずれにせよ水入大溝から遅れた時期に山間部でもこうした取水技術が施行されたことを裏付けるのである。

大溝灌漑の持続性　水入大溝、「石上溝」、寺ノ下遺跡の溝のいずれにも共通するのが、その持続性の低さであろう。いずれも6世紀代には埋没あるいは機能停止している。灌漑施設を造作した集団ないしは権力が施設の補修や改作を断念した時点から溝は、土器廃棄の場と化してしまうのであるが、そのきっかけは個別の事情があるとは思われるものの、およそ時期が揃うところに、個別事情を超えた大きな衝撃や変化が感じられる。例えば水入大溝では6層上部なので埋没が進行してからのことであるが、粗～中粒砂のレンズ状堆積がいくつかある。この堆積は矢作川の洪水によると考えられる。当然この洪水砂が大溝を覆い尽くしてしまったわけではない。むしろ水入大溝にとってはそれほど大きな被害ではなかったかもしれない。しかし大溝が灌漑していた下流の低地では被害が甚大だったのではないか。そして流路の変化も起きたのではないだろうか。洪水という衝撃の後に大溝が全く無用の長物になってしまったとしてもおかしくはない。このような衝撃はなくとも気候変動による水位の変化は、井戸灌漑よりもさらに微妙なバランスで保たれていたと思われる大溝灌漑には大打撃となった可能性もあろう。いずれにせよ河川に頼る灌漑の難しさを思い知るのである。

神並・西之辻遺跡の導水施設　困難が多い大溝灌漑を、人々は技術とともに祭祀で乗り切ろうとしたと思われる。それに関して、水入大溝の粘質土による窪地や傾斜の造作の目的を探るうえで興味深い事例がある。大阪府東大阪市に所在する神並・西之辻遺跡は、東から西へ下る扇状地緩斜面に立地する。5世紀後半には流路底部を利用して、4つの貯水池、木樋、木管などを連続させた全長約100mにわたる導水施設をを造る。それらは互いに高低差約20～70cmをもってつながっており上部の貯水池から順次溢れた水を下部の貯水池へと送る仕組みになっている。貯水池は方形で側壁は石が貼付けられる。また最上流部の木樋には覆屋があったと推定されている。



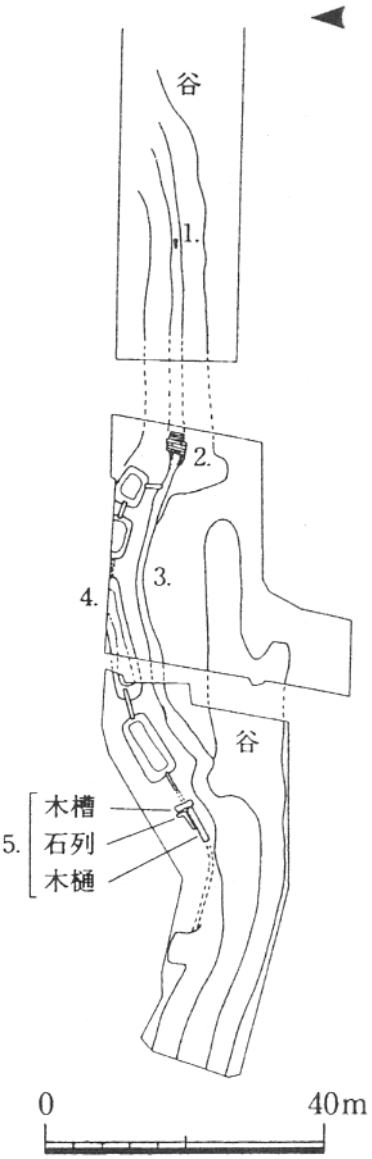
第 602 図　豊田市足助町寺ノ下遺跡遺構全体図



第 603 図　寺ノ下遺跡出土の古墳時代土器の実測図

これら一連の装置は水、特に上流から水を引いてくるところに重点を置いた導水の祭祀を行なうためのものと考えられ、奈良県御所市南郷大東遺跡でも同様の遺構が確認されている（青柳2005）。ここで注目されるのが複数の貯水池や水槽によって水の滞留をいくつかつくり出していることである。各貯水池の具体的な役割までは不明だが、水を汲み取ったり下流へ流すのに何らかの手順が必要なのであろう。

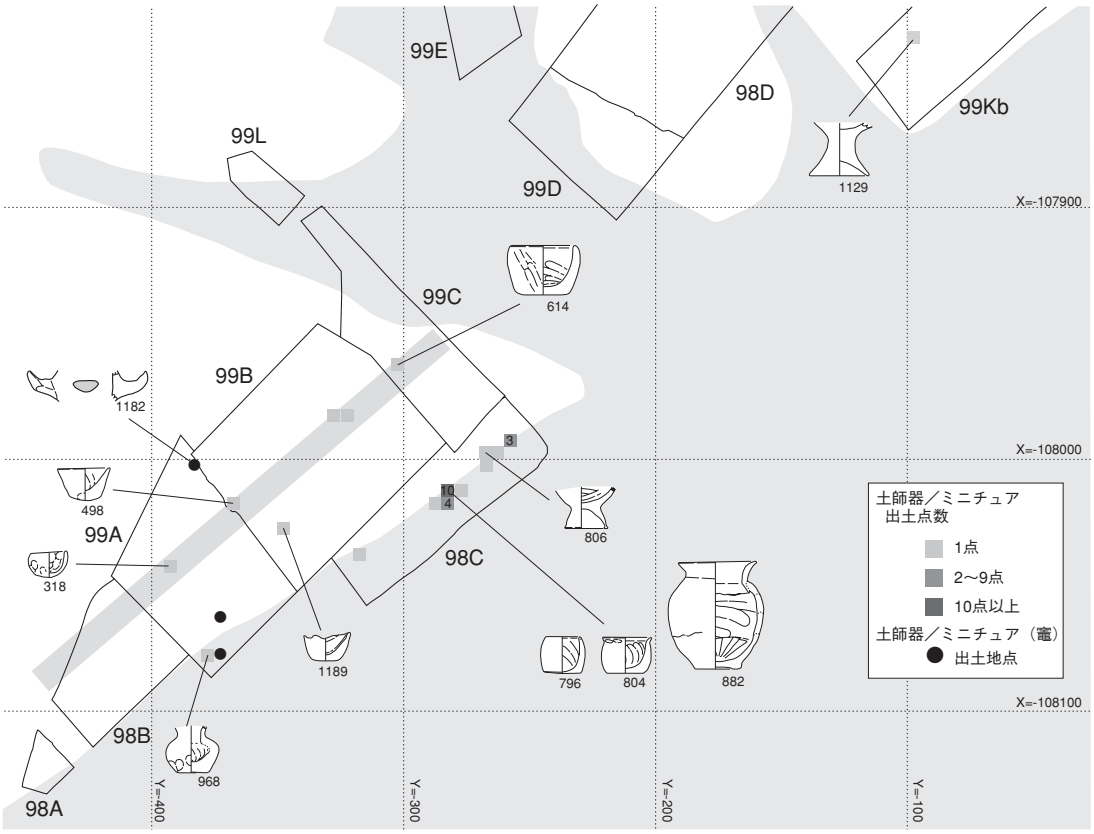
水入大溝の窪地や傾斜は神並・西之辻遺跡の貯水池に比べて形状がはっきりしないし木樋の痕跡もない。しかしながらそれは、水入大溝が灌漑という実用目的で造られたからなのではないだろうか。そのように考えると、河川あるいは湧水地からの導水施設には実用・祭祀用を問わず複数の窪地や貯水池が必要であったということになる。おそらくは水位調節機能が想定され、水入大溝の場合、99CSD01で確認された中央部が切れた土橋状施設は、堰の機能があったのかもしれない。



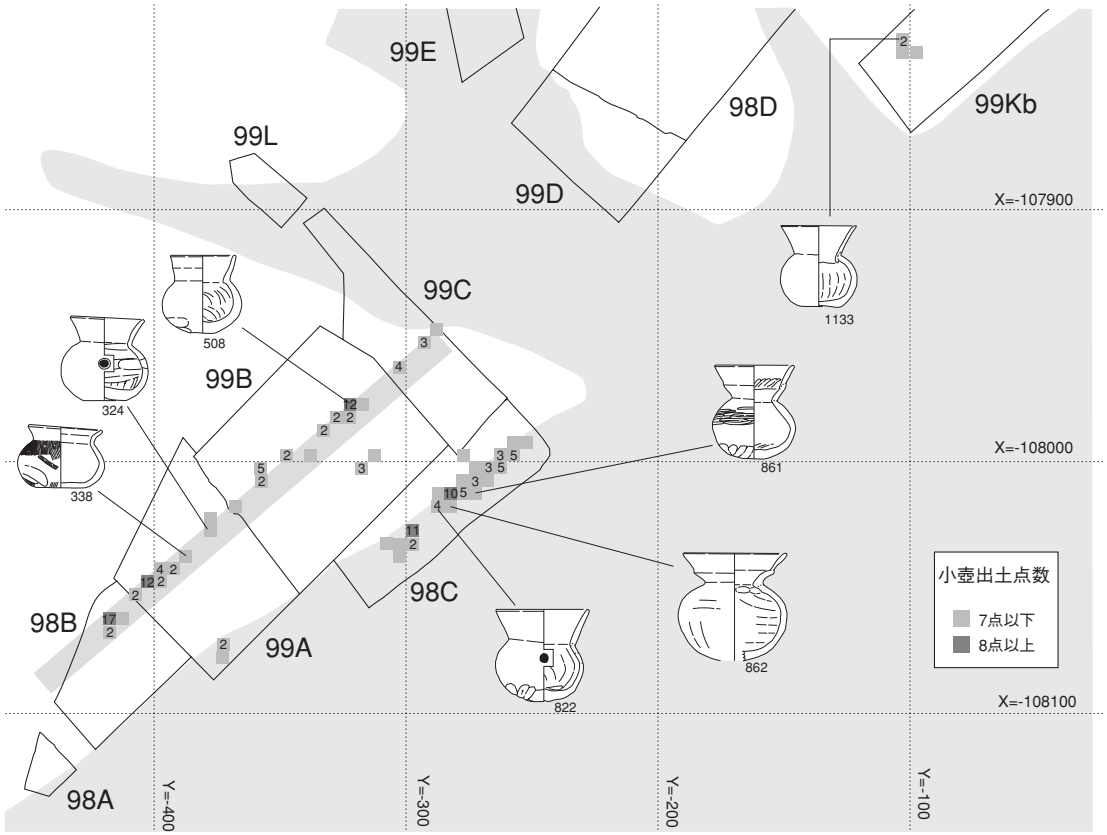
第604図　大阪府東大阪市神並・西ノ辻遺跡の祭祀遺構図（青柳2005より転載）

水入大溝の祭祀　第5章で述べたように水入遺跡の大溝南部（99A区）では石製模造品の集中や刀形木製品の出土が確認された。祭祀遺物の投げ込みは第6層下部つまり詳細にみると水流による堆積砂層の上面に対してなされている。言い換えるならば、大溝灌漑が機能していた時期（でも比較的最終に近い段階）に祭祀が実施されたことになる（水入第2～3期）。ただ祭祀具の投げ込みが祭祀後の行為（廃棄）かそれとも祭祀行為そのもの（供献）なのかは今回の出土状況では決しがたく、この付近で祭祀が実施された傍証にしかならないのである。しかしこの地点は、大溝底部にいくつかつくられた凹みや段差の中でも際立って大きな段差（傾斜C）の南側に位置する。またここから南の98B2区では凹みや段差は造られていないとみられ、いわば大溝底部に造作がなされた区間の最南端にあたる。まさにここから下流へ放水する場所でもあったと考えられ、祭祀場所としてふさわしいと思える（大溝祭祀地点）。

加えて祭祀遺物とされるのがミニチュア土器である。この分布をみると（第605図）、大溝祭祀地点からは丸底の1点がある。これは第1節でもふれたが第7～9層（水入第1期）に含まれるとみている。同地点で幾たびか行なわれた祭祀を想定しておきたい。大溝全体をみてもミニチュア土器の出土は少なく、大溝の水流に関わる祭祀にはあまり使用されなかったのかもしれない。ところが段丘崖ではミニチュア土器が大量にまとまって出土した地点がある。この地点での石製模造品の共伴は確認できなかったが、その崖上には小竪穴建物98C2SB01があり、関係があると思われる。なお、同地点は小型壺の大量出土地点でもある（第606図）。また、先の大溝祭祀地点やその若干下流、段丘崖で勾玉形石製模造品出土地



第 605 図　水入遺跡における古墳時代ミニチュア土器の出土分布図



第 606 図　水入遺跡における古墳時代小型壺の出土分布図

点での10点以上の大量出土が認められる。大溝祭祀地点のような祭祀具の構成については調査時の検討が不十分ではあるが、大溝・段丘崖ともに複数の祭祀場が存在したことを示している。

ところがミニチュア土器や小型壺があまり含まれない石製模造品の大量出土地点がある。それが大溝99CSX13である。ここでは水入第5期の廃棄土器群と混在した状況であったことから、石製模造品がここで供献された可能性は低く、土器とともに廃棄されたものと考えられる。99CSX13は多様な土師器甕、須恵器把手付椀と瑪が特徴的である。石製模造品との共伴から、これらが祭祀行為の一端で使用されたことと、時期が下ると祭祀具の構成にも変化が生じることを理解しておきたい。

加えて、大溝や段丘崖で出土した多数の植物種実の分析結果にも注目しておきたい。ただここで断っておかねばならないのは、種実は現場で視認できたものあるいは壺などの土器の中に入っていたものが中心になっていることで、特徴的なモモ種実などは取り上げられやすい傾向にある。そのうえで小型壺の中からモモ種実が多数出土した事実は、祭祀の場とモモの関わりを示す好資料となろう。

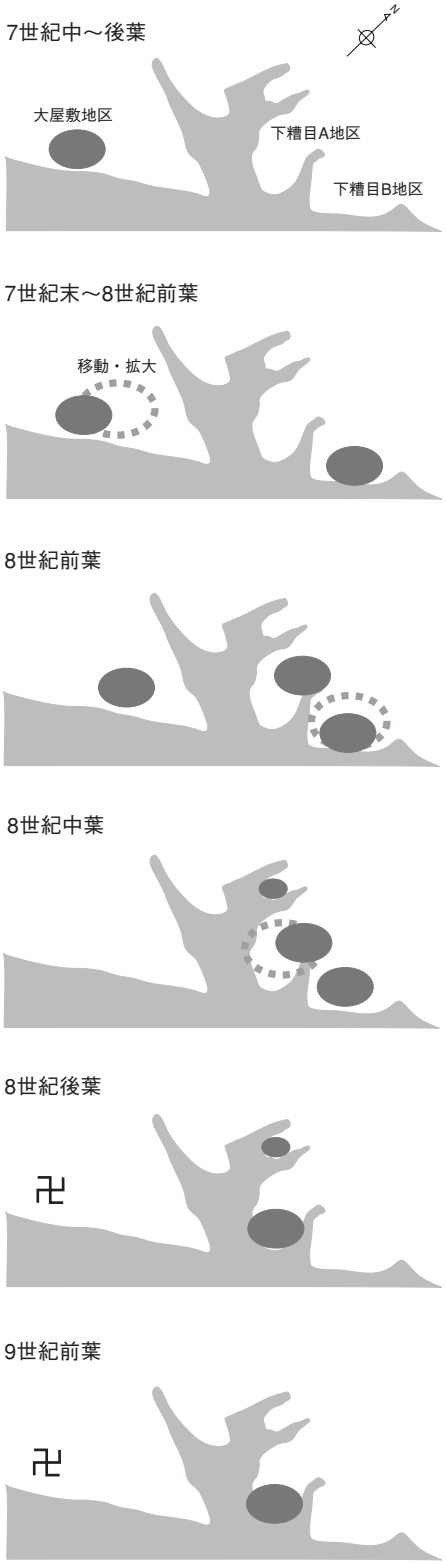
古墳時代集落の開始　大溝が機能停止するとそこに大量の樹木が投げ込まれる。その多くは樹皮の付いた枝や根に近い部分で、中には表面が焼けたものも含まれる。この樹木投げ込みは段丘崖の方が顕著で、状況からみて木製品加工に伴う貯木などではなく廃棄と考えられる。大溝に土砂は投げ込まれていないので埋め立てにはならないが、実質それに近い。これら樹木は第10章第5節にあるとおりクヌギやコナラを中心とする。佐々木由香によると、遺跡周辺に自生していたヒノキ科針葉樹が原材料として集中的に伐採されたために、大溝が機能時にはクヌギなどの樹木が残存していたと考えられるという。ともあれこれら大溝周辺（大屋敷地区）の残存林が徹底的に伐採され、集落を営む空間が整備されたのだと考える。したがって水入遺跡古墳時代中期の集落はここに始まると言ってもよい。

須恵器出土分布と古墳時代集落　当該期の集落については第5章で述べたように掘立柱建物を中心とした構成であったと想定する。掘立柱建物の時期は竪穴建物のそれよりはるかに根拠の弱く、そもそも全てを抽出しきれていないという根本的問題が残る。しかし大溝を中心に営々と土器の廃棄が続く以上何らかの集落を想定すべきである。したがって集落の建物については今後再検討すべきであることを付したうえで、大溝から出土した須恵器の時期別分布状況から集落の展開を素描すると以下のようになる。99B区の最高位と99A区に東山111号窯式の集中がみられる。99B区のそれは竪穴建物99BSB01に関わるとみられるが、99A区では竪穴建物はなく掘立柱建物が近くに想定される。ところで99BSB01は東山111号窯式の須恵器が建物跡に廃棄されていることからもわかるように、それ以前に機能していたものである。したがって大溝と同時期に機能した施設となる。この建物の性格は一概にできないが、大溝開削～管理に関わる施設であったとも考えられる。一辺約5m規模の竪穴建物を通常サイズと考えるとそれよりひと回り大きく、より多くの人を収容することができたであろう。

ただこのようにしてみると99K区にも1棟だけ存在する竪穴建物（99KSB1071）の位置付けが難しくなる。こちらは出土遺物から水入第1期となるが、この前後に建物やその他施設が展開した形跡がないのである。火処がなく土器器種構成にも特異な点がなく、一時的な居住が下糟目地区にもあったというほかない。

やがて時期が下ってくるとともにその分布域は99B区方向へと動く。そして東山11号窯式の須恵器は

99B区北部に展開する。99C区の掘立柱建物99CSH01は2間×3間とやや平面積が広いのが特徴であるが、99CSB01から直線で向かった先の大溝に土器廃棄99SX13があることは何か関わりがあるとみてもよいだろう。その後東山61号窯式～6世紀後半の須恵器は99B区を中心に分布しており、およそ集落はこのあたりに固定されたようである。



第607図　水入遺跡における古代集落の変遷図

（3）古代集落の変遷

竪穴建物からなる古代集落　5～6世紀代の集落は一部を除き大屋敷地区に限定した掘立柱建物群で構成されていた。この展開に変化が生じるのが7世紀前葉～中葉である。東山44号窯式の須恵器を多く出土する竪穴建物跡がないことから、この段階までは前代的な集落であったと考えられる。しかし東山50号窯式～同15号窯式の段階には竪穴建物からなる集落へと変貌したと考えられる。掘立柱建物から竪穴建物へという居住様式の変化は一見すると逆行現象のようにもみえる。これらの居住者同士に連続性が薄い、すなわち人々の入替が起こった可能性もある。

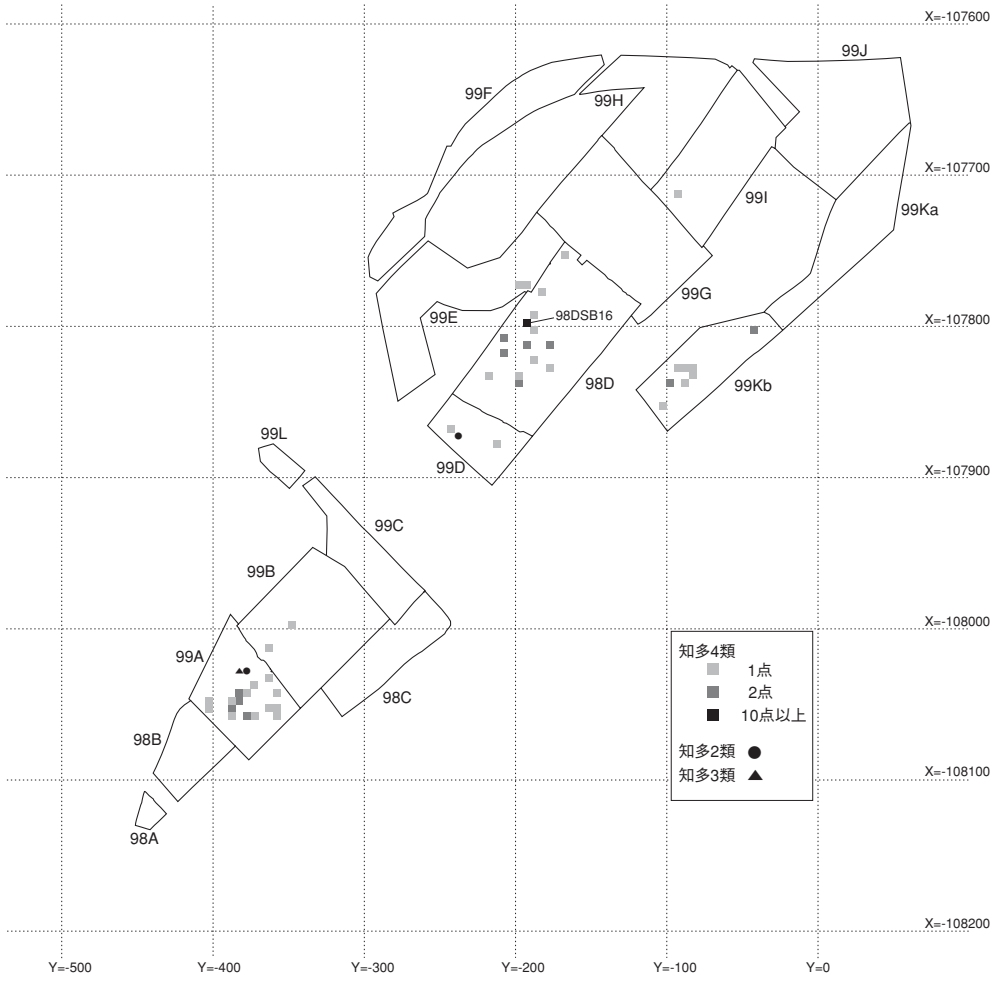
7世紀代集落の中心は99A区にある。ここでは竪穴建物が大溝と方向を揃えて建てられた。5～6世紀代の集落によって大溝と段丘崖の間は樹木の少ない緩傾斜地へと改変されていたであろうが、特に7世紀前葉～中葉の建物は低位に集中した。出土遺物の中でも漁網用土錘が前代に比べて格段に増加していることから、川漁が生業の大きな位置を占めるようになったことが指摘できる。居住者は漁場や水田があったと推測される沖積地により近い場所に集住することを選択したのであろう。

8世紀前葉の集落移転　ところが7世紀末～8世紀前葉にかけて新たな動きが始まる。それは大屋敷地区内でのより高位への集落移転であり、下糟目B地区への進出である。特に後者は谷地形を挟んでの動きである。しかし矢作川に面するという環境がほぼ変わらない点を考えると、人口増加や居住単位の分割による集落域の拡大という理解が妥当であろう。ただ8世紀前葉、さらに8世紀中葉になると谷地形のより奥まった下糟目A地区への集落建設が本格化する。特にこのエリアは縄文時代末期以来ほとんど開発がなされてなかったので「開拓」に近い状況であったろう。8世紀前葉の土器が出土する竪穴建物はエリアの比較的奥地にもみられるが、基本的には北西方向から谷

地形へ向かってのびる舌状台地の東側斜面を利用したためである。したがって舌状台地に立地する開拓当初の集落は南北に細長かったと考えられる。この開拓によって大屋敷地区の集落は大部分が移転したと思われる。集落域拡大であるならば大屋敷地区でも鳴海32号窯式の須恵器が多く出土してしかるべきなのであるが、その量は減少傾向にあるからだ。

したがって8世紀中葉の「水入」集落の中心は下糟目A・B地区であり、下糟目A地区の舌状台地ではより高位（台地尾根筋）への建物進出が目立つ。また98DSB39からは赤褐色の土師器皿や銙帯金具が出土しており、ムラの長がこの近辺、例えば南北棟の掘立柱建物に居住していた可能性が高い。このような特注品のひとつである暗文土師器は、7世紀後半代のものが大屋敷地区（98C2SX01）で出土しており、このことからもムラの中心が移転したことを物語っていよう。ところで竪穴建物の小型化はこの時期に始まっているが、98DSB28などをみると建物構造や規模による機能分化が進行したことをうかがわせる。これには掘立柱建物の充実も関わってくると考えられるが、建物配置や組み合わせの問題については機会をあらためて提示することにしたい。

当該期も製塩土器の搬入は引き続いており、土錘の量からも矢作川を主たる生業の場としていたことがうかがえる。7世紀代の中地域～小地域構造や小地域間どうしの物資交流はあまり変化してなかったと考えられる。律令制度という国家の仕組みが確立されても小地域は相変わらず独自の動きをとってい



第608図　水入遺跡における古代製塩土器の出土分布図

たようである。ただその分布は8世紀後葉以降が主体となる99D区では少なくなる（第608図）。

河川・水場を志向する8世紀後葉～9世紀初頭　やがて7世紀代に比べてより高位での居住を志向した集落に再び転機がおとずれる。8世紀後葉～9世紀初頭の竪穴建物はことごとく低位に立地し、その重複も激しくなる。竪穴建物の密集と建て替えサイクルの短期化がうかがえる。

この時期の変化は遺物によく現れている。一つは製塩土器の搬入がなくなったこと。二つ目は須恵器と三河型土師器甕の増加である。特に後者は須恵器供膳具の増加が著しい。土師器甕についてはこの場で使用されたものも多くみられることから消耗品であったとも考えられるが、大量の須恵器は豊田市梅坪遺跡での出土状況を彷彿とさせ、ここが製品輸送の中継地であったとも考えられる。すなわち製塩土器にみる海岸部からの物流が終ると同時に、猿投窯産須恵器が海岸部へ向かう新たな物流が確立したとも考えられ、この物流に対応した集落立地であったともいえる。なお併行して生産されていたとみられる灰釉陶器はほとんど出土しておらず、須恵器に偏った構成になっている点は要注意であろう。

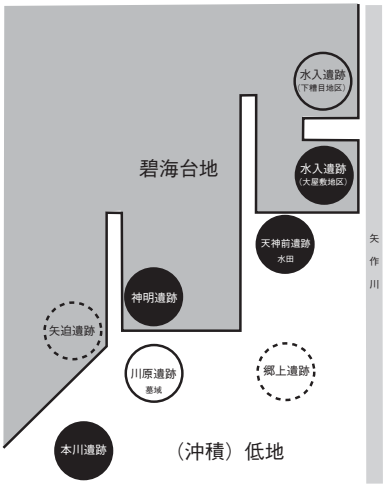
仏教施設「公寺」　8世紀後葉～9世紀初頭の集落は下糟目地区（特にA地区）の低位に展開する。ところが同様の環境にあるとみられる大屋敷地区南端（98B2区）にはこのような竪穴建物の重複や土器の大量出土はみられない。形状のはっきりした船着場が造られそこから「公寺」墨書土器が数点出土した。また船着場近くには大型の掘立柱建物（99ASH35）や並立する建物（98B2SH01・02）がある。出土遺物に注目すると鉄鉢・水瓶（98B2SD02）や緑釉陶器（98B2SX01）、瓦塔（99A区）といった仏教信仰に関わるものが集中していることに気付く。

以上の事実からここに仏教施設があったことを推測する。それは「公寺」と呼ばれ、先の掘立柱建物を「堂」とする程度でその南側に区画施設（98B2SD02）程度の規模であった。規模が小さいとはいえ「公寺」の墨書土器は寺であることを主張するとともにそこが管理する物品があったことを示している。つまり経営主体は不明ながらも仏寺があり、一定の空間を専有していたのである。ところで「公寺」付近や下糟目A地区の最奥部では黒色物質（漆の可能性）が付着した須恵器椀が出土した。これは作業用に用いられたパレットと考えられることから、一時的な工房があったかもしれない。

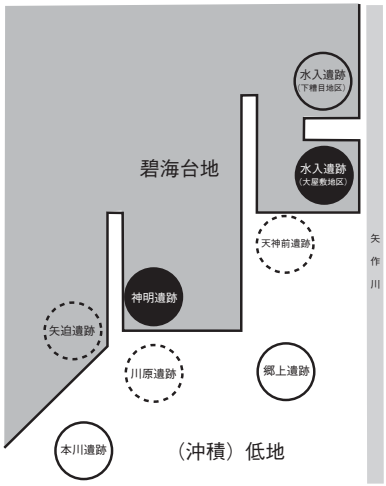
船着場に関しては、北陸地方の当該期における初期庄園遺跡でいくつか確認されているが、多くはその管理施設とみられる掘立柱建物の近くに位置する（宇野2001）。つまり中核的な場所に舟で直接アクセスできることが要点だったとみられる。ただこのアクセスは、物資の搬入出よりも重要人物の往来に関わるものと推察され、須恵器の輸送中継基地と推測する99D区で明確な船着場が見つかっていないことと対照的といえる。

集落地としての終末　下糟目A地区南端では南北棟と東西棟の掘立柱建物が組み合って配置され、その南方を区切るように東西方向の溝がのびる。建物と溝は9世紀初頭の竪穴建物跡の重複の上に建てられており、古代集落の末期に位置することはあきらかである。残念ながらこの建物の性格がわかるような成果はなく、区画溝からのほとんど遺物が出土しなかった。谷地形からは「安」と墨書された黒笹90号窯式の灰釉陶器椀がある以外遺物は少なく、他に「公寺」の南側でわずかにみられる程度である。

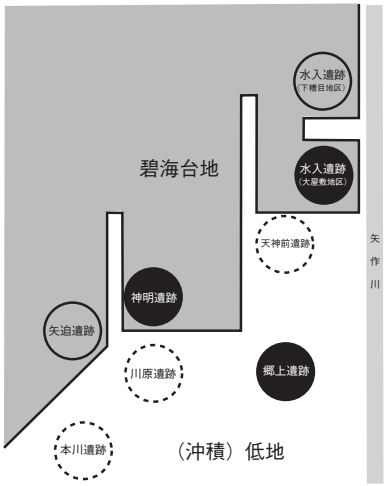
さらに折戸53号窯式の段階になると集落地としてはほとんど利用されず、ほとんどは耕作地になっていた可能性が高い。まず建物は細長い平面形のものが1棟だけというパターンがみられ、竪穴建物がそ



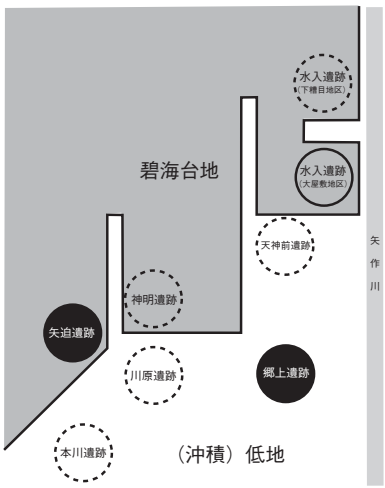
5 世紀前半



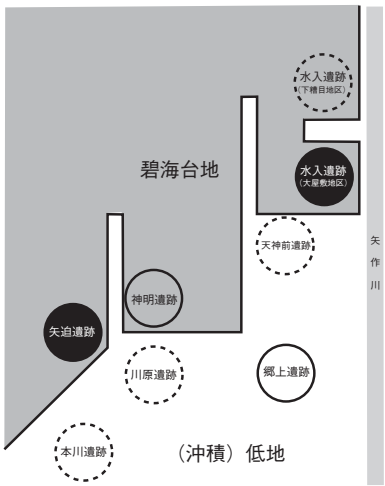
5 世紀後半



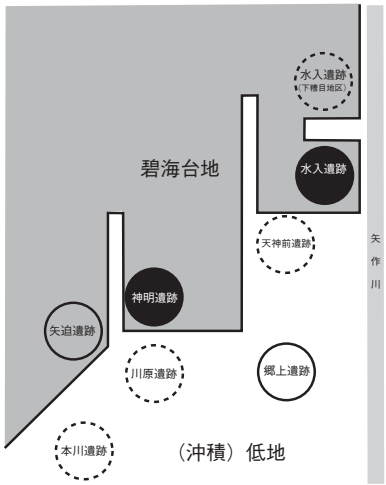
6 世紀前半



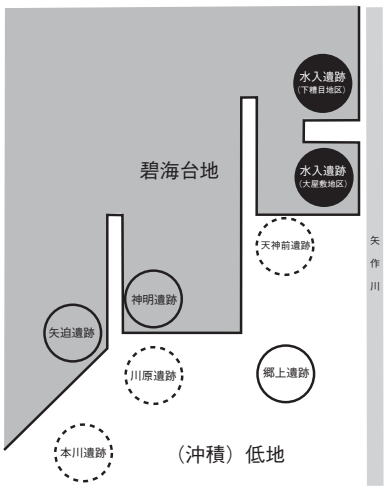
6 世紀後半



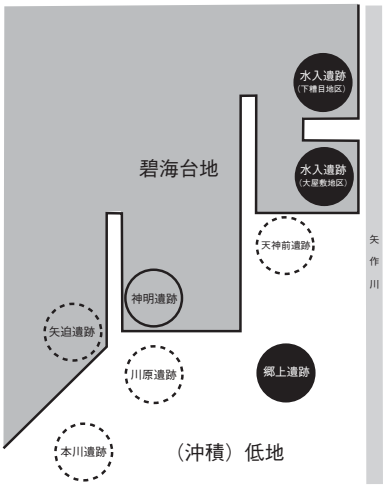
7 世紀前半



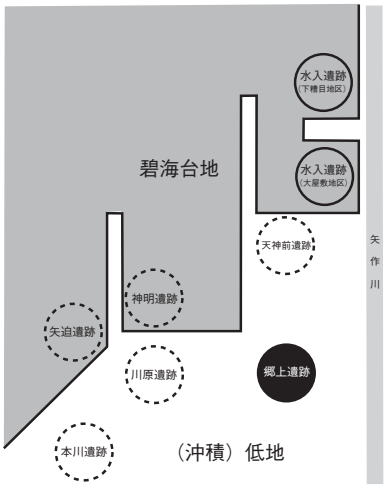
7 世紀後半



8 世紀前半



8 世紀後半



9 世紀前半

本川遺跡 ほぼ消滅状態

郷上遺跡 衰退途中あるいは増加途中

郷上遺跡 最盛期の状態

第 609 図　鴛鴨・渡刈地区の古墳時代～古代遺跡の動向図

れに附随するような位置関係にあるものがみられる（例：99BSH26と99BSK3014）。広大な段丘面にこのような建物が点在する景観が浮かんでくる。出土するのも灰釉陶器椀もしくは皿がわずかで後期三河型甕もごくまれにあるくらいである。当該期の遺構覆土は大溝のそれも含めてきわめて黒色度が強い。このような黒色土壌で畑作がなされていた可能性が考えられ、畑地の一角に農民の住居（もしくは仮廬）があったと推測される。当該期のムラの中心はこれまで移動を繰り返していた水入遺跡の範囲内を大きくはずれ何処かへと移ってしまったと考えられる。この断絶ともいえる状況が古代と中世の断絶としてクローズ・アップされるのである。

水入遺跡の地は、次に鎌倉時代（13世紀）の墓域として利用されることとなる。

（4）豊田市鴛鴨・渡刈地区遺跡群の動態

前項では水入遺跡における5世紀代～10世紀代の集落景観を中心とした変遷を述べてきた。このような景観復元を周辺遺跡の当該期においても試みる必要はあるだろうし実際おこなわれている。そこで概略的であるが遺跡地での人の集住をバロメータとしてその盛衰を表現してみたいと思う。そして遺跡を台地帯と沖積地帯で大別すると興味深い流れがみえてくる。

5世紀代、台地縁辺で大溝が掘削された頃（水入ほか）、集落の中心は沖積地帯の微高地にあった（本川・天神前）。その後集住地は台地へと移る。水入・神明では集落が拡大傾向にあり、神明遺跡では東山111号窯式頃に三味線塚古墳が築かれる。また渡刈塚古墳・渡刈富士塚古墳・車塚古墳（いずれも未発掘の円墳）などの三味線塚古墳と同規模の古墳が台地縁辺に立地する。これらの被葬者は台地の開墾を進めた指導者層であったと考えられる。川原ではこれらに先行する時期の墳丘墓が造られるが、墓域として後に続かず、かつての拠点であった本川では竈付き竪穴建物を最後に集落地として終焉を迎える。台地への集住地移動は環境変動によるものかどうかはわからない。ともあれ5世紀代にそれはほぼ完了する。

ところが5世紀末から6世紀前葉にかけて新たな動きがある。すなわち神明での集落規模縮小、郷上での拡大傾向である。水入では途絶えることはないようだが神明では6世紀後半にはほぼ完全撤退したと思われ、水入・郷上に比べてより高位にある神明は水場や河川からの距離がありすぎたのが弱点だったのであろう。その後6世紀末～7世紀前葉も似たような動向であるが、神明と谷を挟んだ矢迫で大壁建物からなる集落が建設される。建物構造からみて移住者のものとみられるが、このような移住者の存在が極小地域の再編にもかかわったと推測される。

7世紀中葉となると集落域は神明・水入で拡大する。およそ奈良時代に該当する集落の台地志向は、碧海郡南部の安城市域でもうかがえる（御用地遺跡や加美遺跡など）。この傾向は8世紀末まで続くため、例えば沖積地の郷上では8世紀前半代の集落については不明で遺物もほとんどない。その郷上では8世紀後葉に竪穴建物からなる集落が再び現れる。これは水入でより低位へ集落地が移動するのと対応し、より高位の神明ではことごとく集落は撤退してしまう。さらに9世紀中葉ともなると水入でも集落は縮小傾向にあるが郷上ではほぼ同じ規模を維持していたものと思われる。この状況は10世紀代まで続くとみられ、郷上遺跡SB16は百代寺72号窯式（10世紀後半）である。このことから平安時代前～中期の矢

作川中流域では沖積地にその生活域の中心があり、水入のような台地は畑作地となっていたのではないだろうか。しかし郷上遺跡でも11世紀代の様相は不明瞭となる。

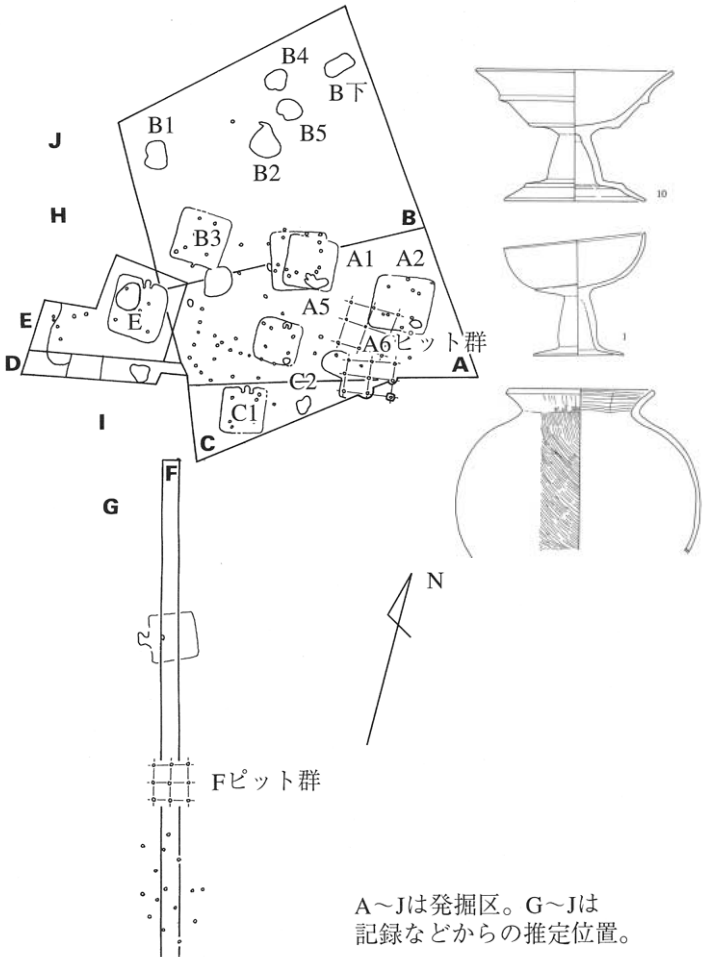
(5) 碧海郡と尾張東部地域の交流

豊明市若王子遺跡　最後に尾張東部地域と西三河地域の古墳時代～古代の交流について考察し、そこに水入遺跡がどのように位置付けられるか見通しておきたい。とかく西三河地域は矢作川という大河川の存在によって、あらゆるものが海（三河湾）から上ってくるものだと考えられがちである。そこで水入遺跡で大量に出土した猿投窯東山地区産とみられる須恵器の搬入ルートを想定してみよう。須恵器が知多半島を廻って海路運ばれてきたとするならば、三河湾沿岸地帯でもっと多くの東山産須恵器が確認されてもよさそうであるが、そうではない。海路よりも陸路での搬入が主だったのではないだろうか。

豊明市若王子遺跡は尾張三河国境の丘陵地帯に位置する古墳時代中期の集落である。水入第3期以降集落が展開するが、付近にはこれに前後する時期のムラがなく、唐突な印象がある。ところが竪穴建物や掘立柱建物が多数確認され、5～6世紀代に一定規模の集落が営まれていたことがあきらかとなっている。この遺跡で出土した高杯には三河より東方でよくみられる有段脚高杯があり、ある意味「三河的なもの」が尾張に食い込んでいる場所といってよい。そして最大の特徴はこの遺跡の位置が古代東海道沿いにあることである。ここを経由して尾張と西三河を結ぶ陸路が思い浮かぶ。

「前東海道」と碧海郡　一方で三河湾沿岸部（幡豆郡）では宇田型土師器甕などの濃尾平野に由来する土器が流入する（早野2005）。矢作川ルートによる交流が通説どおり盛んであれば、これら宇田型甕がそのまま上流に上ってきてもおかしくない。ところがそうはならず、碧海郡の土器様式は幡豆郡のそれとは異質で、尾東・西三型甕に代表される尾張東部地域との交流のなかから成立することは前節まで確認してきた事項である。一見海に開けたかのような環境ではあるが、海側との交流は限定的であったといえよう。

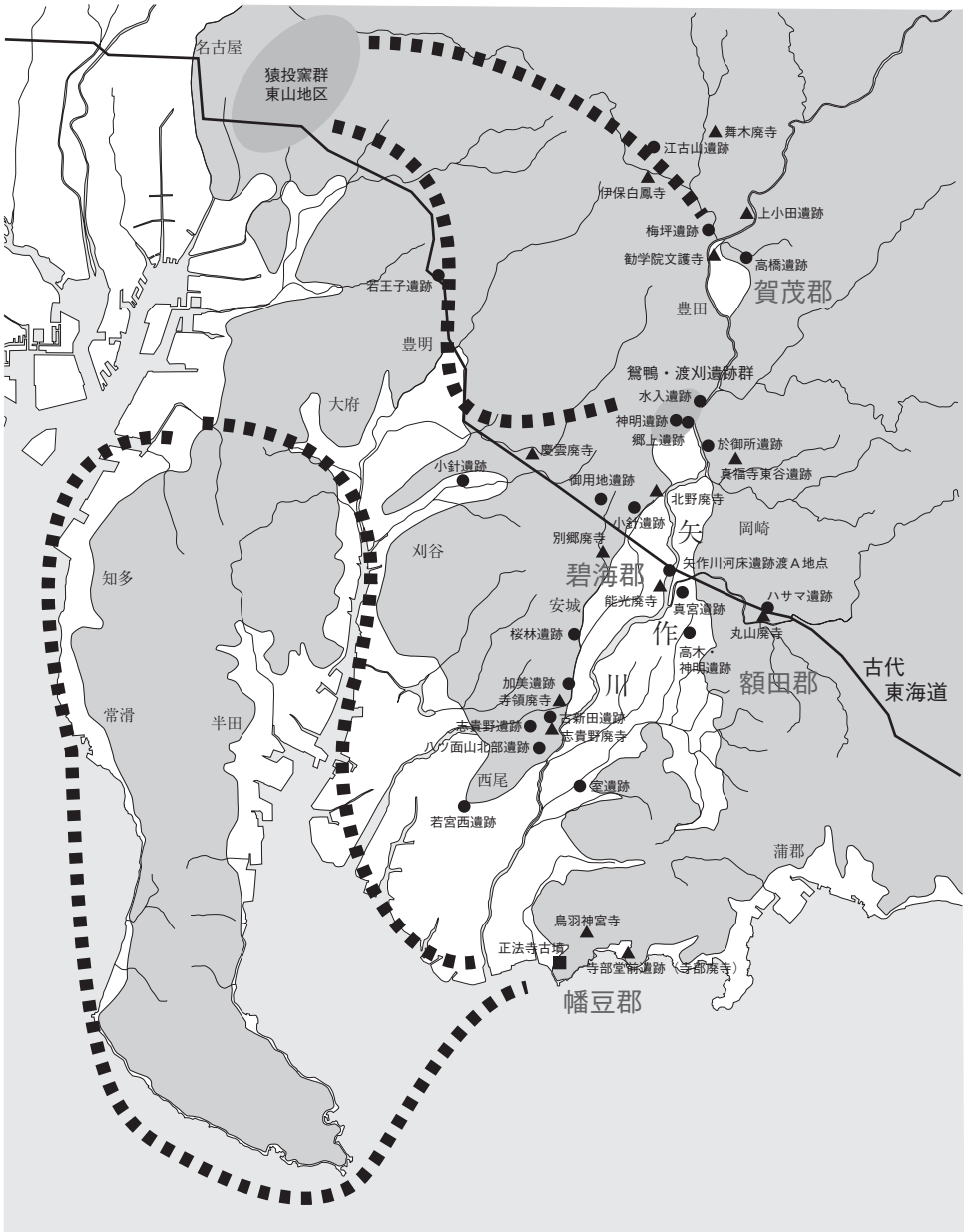
尾張地域との交流が若王子遺跡のような集落を生み出し、古代東海道の前提となる道を形成したと考える。こう



第610図　豊明市若王子遺跡遺構・土器実測図（川合2001より転載）

して5世紀代に成立した「前東海道」は、あくまで尾張と西三河を結ぶルートに過ぎなかったが、主に西から東へ文物や情報を送る役目を果たした。そのルートは官道のように固定したり一本化したりすることはなく、最終的に矢作川西岸の台地縁辺の各拠点へたどり着いたものと考えられる。そのひとつに水入遺跡を含む鴛鴨・渡刈地区遺跡群があったのである。

ただ鴛鴨・渡刈地区遺跡群は、矢作川東岸台地・丘陵地との距離が比較的短く、渡河点としてさらに東方世界への中継地点になっていた可能性が考えられる。そのことが当該遺跡群における古墳時代中期～奈良・平安時代の集落を充実させたと思われる。当然、碧海郡域に相当する範囲を往来する南北軸としての矢作川水運との結節点であったことは、矢作川流域での製塩土器の分布地の一つであることからも推測できよう。



第611図　古墳時代中期から古代の尾張東部地域と西三河地域の交流想定図

第4節　水入遺跡出土の金属関連遺物

(1) はじめに

水入遺跡から出土した金属関連遺物には、椀型鉄滓、流動滓、羽口、粘土塊、炉壁などが存在し、全部で121点を数える（ただしこの数値は金属製品を除いた数量である）。分析に際しては従来行ってきたような資料の基礎データを採取しながら分類を実施した。その詳細の方法については（鈴木・蔭山1999他）を参照されたい。

(2) 遺物各説

椀型鉄滓（第612図：1～5）　椀型鉄滓は全部で32点が出土した。多くは破割された分割椀型鉄滓であるが、完形の椀型鉄滓も7点含まれる。98Ｄ区と99Ａ区から約半数の椀型鉄滓が出土している。これらの椀型鉄滓を色調や質感などから3類に分類できる。

椀型鉄滓Ａ類　色調が灰色から灰黒色を呈し、気泡が少なく質感の重いものである。1は完形の椀型鉄滓Ａ類で、下部は炉壁が付着し、上面には白色の石や流動滓Ｂや炭化物が付着している。滓自身の厚さも3.5cmを測る厚手の椀型鉄滓である。2は2分の1分割重複椀型鉄滓Ａ類である。下部に炉壁がほぼ全面にわたって付着しており上面も平坦となっている。3は2分の1分割椀型鉄滓Ａ類で、下部は凹凸が比較的激しいが、上部は平滑なものである。上面に炭化物が付着している。

椀型鉄滓Ｂ類　色調が灰白色から灰色を呈し、質感がやや軽いものである。気泡がやや多く形状は扁平なものが多い。4は2分の1分割椀型鉄滓Ｂ類である。上部と下部に土砂が若干固着し、最厚部で椀型鉄滓が重複している状況が確認される。

椀型鉄滓Ｃ類　質感が非常に重く、表面に赤褐色の付着物が観察されるものである。5は8分の1分割椀型鉄滓Ｃ類で、上下両面とも平滑である。

流動滓（第612図：6・7）　椀型鉄滓とは分類できない小型の鉄滓を流動滓として報告する。流動滓は全部で10点出土し、質感が重く黒色から灰黒色の色調を呈する流動滓Ａが4点、質感が軽く灰白色から灰黒色の色調を呈する流動滓Ｂが6点に分けることができる。流動滓Ａは99Ａ区で、流動滓Ｂは99Ｄ区でそれぞれ多数出土している。

6は流動滓Ａで、一部が欠損している。7は流動滓Ｂで上面に灰白色の付着物が認められる。

鋳型片と推定される粘土塊（第612図：8～12）　鋳型片ではないかと思われる粘土塊は全部で56点が出土している。全て大きく破損した状態で出土しており原形を推測できない。真土や被熱部分が残存する資料が遺存しないことから鋳型片と評価するには怪しい資料群でもある。郷上遺跡（鈴木2002）で出土した同様の資料群と同様に、形状に一定の傾向が認められるため、ここに項目を設けて説明したい。こうした粘土塊の出土傾向は99Ａ区、99Ｂ区および99Ⅰ区で比較的多くの資料が出土しており、ここでは、遺物の残存状態が比較的良好な資料が多い99Ⅰ区出土資料を中心に取り上げる。

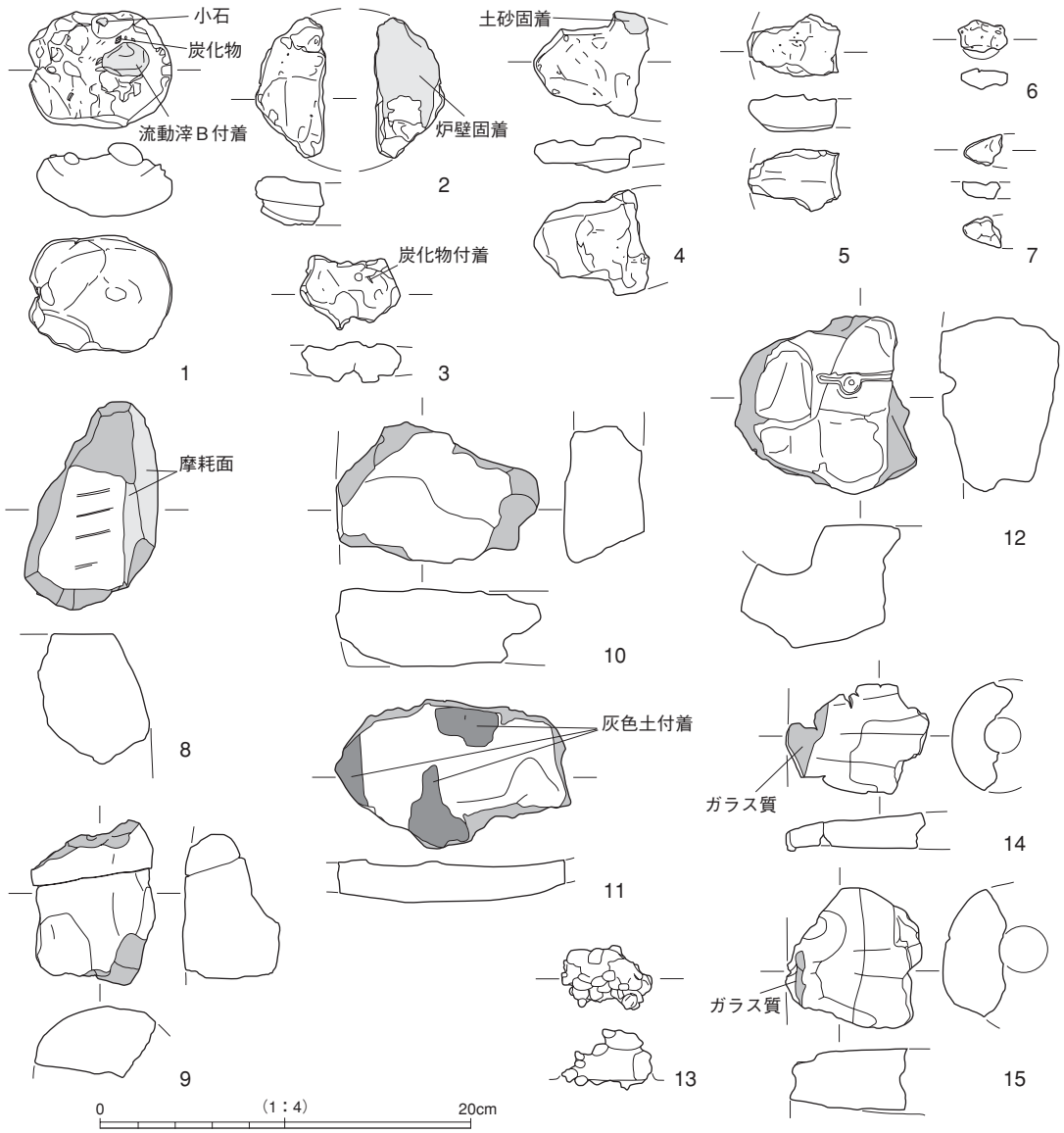
鋳型片と推定される粘土塊はその形状から大きく3類に分類できる。

粘土塊Ａ類　推定される全体の形状が多角柱状となるものである。8は全形が多角柱状に復元される粘

土塊で、大きく２面が残存している。このうち１面は本来の平坦面を残しているが、もう１面は後に摩耗された痕跡が認められる。9は円柱状または多角柱状に復元される粘土塊で、上下端部と側面の４分の３が欠損している。残存する表面は緩やかな平坦面を形成するものの熱を受けた痕跡は確認されない。

粘土塊Ｂ類　扁平な板状の形状となるものである。10は厚さ4cm弱の板状粘土塊で、残存する側端面は斜めに削られている。遺存する表面は荒く削られたままの状態で平滑な面とはなっていない。被熱痕は確認されない。11は厚さ約2cmのやや彎曲する面を持つ板状粘土塊である。一方の表面に部分的ではあるが、灰色土が薄く付着した箇所が認められ真土の一部である可能性が考えられる。

粘土塊Ｃ類　全体の形状は復元できないが、残存する面に凹部を持つものである。12は厚さ6cm以上の粘土塊の残存する１面に、深さ2.5cm程度の楕円形状凹部と沈線を持つもので、表面がやや黒褐色化している。真土などは確認されないが、金属製品の表面を装飾する部分の鋳型の可能性も捨てきれない資料である。



第612図　水入遺跡出土の金属関連遺物実測図

羽口（第612図：14・15）　羽口は全部で18点存在する。完形品は遺存しない。大部分は小片となっており、外径と内径は正確な数値は測定し得ないものが多い。羽口は98Ｂ区、98Ｃ区、98Ｄ区、および99Ａ区で多く出土している。

14は先端部が残存する羽口で、先端部分が赤褐色化している。外径は推定約6cm、内径推定約2.0cmとなっている。15は先端部に黒色滓が付着している羽口である。

炉壁（第612図：13）　炉壁は、熱を受けて表面が溶融した粘土片を指しており、全部で5点出土した。13は流動滓Ｂが付着した粘土による炉壁片である。粘土は砂礫を多く含むもので滓の表面は黒色を呈している。

第63表　金属関連遺物の出土点数

	椀型鉄滓	流動滓A	流動滓B	粘土塊	羽口	炉壁	合計
98B	0	0	0	2	5	1	8
98C	2	0	0	4	4	0	10
98D	11	1	0	1	4	2	19
98T	1	0	0	0	0	0	1
99A	6	3	1	7	4	0	21
99B	3	0	1	20	0	2	26
99D	5	0	4	5	1	0	15
99E	0	0	0	1	0	0	1
99G	1	0	0	1	0	0	2
99I	2	0	0	12	0	0	14
99K	1	0	0	3	0	0	4
合計	32	4	6	56	18	5	121

(3) 小結

これらの資料について、調査区別に出土傾向を検討すると3つのパターンに類別できる。

椀型鉄滓Ａ類Ｂ類と流動滓Ａが多い一群：98Ｄ区、99Ａ区

流動滓Ｂと粘土塊が多い一群：99Ｂ区、99Ｄ区

椀型鉄滓Ｃ類と粘土塊が多い一群：99Ⅰ区

これまでの愛知県下の金属関連遺物の検討の結果、流動滓Ａと椀型鉄滓（および含鉄遺物）が伴う資料群については、鍛錬鍛冶工程を主体とした金属製品製作が行われていた可能性を指摘してきた。このことから、98Ｄ区と99Ａ区の付近では鍛錬鍛冶工程が行われていたことが予測される。一方，流動滓Ｂについては、当初は精錬鍛冶工程が行われていたことが予測したが、その後の検討で鍛錬鍛冶工程の後半の作業を反映した資料と考え直すに至っている（蔭山・鈴木2005）。従って99Ｂ区と99Ｄ区付近では、鍛錬鍛冶工程後半が行われていたとみることは可能ではあるが、粘土塊が一定量存在することからみて鋳造工程の存在も視野に置かなければいけないものと考えられる。99Ⅰ区では粘土塊と赤褐色を呈する椀型鉄滓Ｃ類が伴うことからみて、付近で鋳造工程が営まれていた可能性を指摘できよう。しかし、明確な鋳型や甑炉などが存在しないことが鋳造工程の存在を断定するのを躊躇せざるを得ない要因となっている。（鈴木正貴）

参考・引用文献
蔭山誠一・鈴木正貴 1999「門間沼遺跡における鉄器生産を考える」『門間沼遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 2002「金属関連遺物」『郷上遺跡』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
蔭山誠一・鈴木正貴 2005「鍛冶滓の金属学的分析結果の検討―愛知県における金属器生産（８）―」『研究紀要第６号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

第5節　中世から近世後期の水入遺跡

ここでは発掘調査により確認された中世以降の水入遺跡の様相についてのまとめを行う。中世以降として確認できた遺構の時期は大きく13世紀代、16世紀代、18世紀以降を中心とする3時期に区分することができる。そこで、各時期を便宜的に中世前期、戦国期、近世後期とする。

（1）　遺構の変遷　ー発掘調査成果よりー

中世前期　この時期水入遺跡は、下糟目地区を中心として土坑墓が構築され、墓域が展開している（第613図参照）。土坑墓は大屋敷地区も含め377基が確認されおり、最も多く土坑墓が確認された調査区は98D区の168基、次いで99K区70基、99G区63基となっている（第65表参照）。このように、特定地域に多数の土坑墓が集中して長期間構築されるという集団墓地的あり方が水入遺跡の墓域のまず第一の特徴である。

水入遺跡に土坑墓が造られ始めるのは12世紀後半に入ってからであり、調査区内に広がる谷地形周辺を中心として構築される。その後、13世紀前半には98D区を中心に構築がされ、徐々にその数が増加し、13世紀後半にその構築数はピークを迎える。その後14世紀にはいると、それまで土坑墓が構築されていた98D区ではあまり土坑墓は認められず、谷地形よりやや奥に入った99G区や99I区にその中心が移動してゆく傾向が窺える。しかし、14世紀に入ってから造られる土坑墓の数は減少し、14世紀前半から墓域としての性格は徐々に薄れていったと思われる。

水入遺跡で確認された土坑墓のもう一つの特徴はその形状にある。今回検出された土坑墓はA：円形、B：楕円形、C：（隅丸）方形、D：（隅丸）長方形の4タイプに分類することができる。AとB、CとDの区分は、長軸を短軸で割り、その数値が1.2以下の場合が円形または方形、それ以上を楕円形もしくは長方形とした。またAとC、BとDの違いは平面形において直線で構成される辺が認められるか否かで判断した。

調査区	A	B	C	D	総計
98D	112	33	8	15	168
99A	9	2		2	13
99B	5	3	1	1	10
99D	3	1		1	5
99E	21	1	1		23
99F	3	1		1	5
99G	47	13	1	2	63
99H	4	1			5
99I	8	2		2	12
99J	1	1		1	3
99K	36	16	8	10	70
総計	249	73	19	35	377

第1表　調査区別タイプ別土坑墓出土一覧

この分類に基づいて今回の発掘調査で検出された土坑墓をみてみると、377基のうちAタイプが249基、Bタイプが73基あり、この両タイプで322基と全体の約9割を占めている（第2表参照）。東海地域で報告されている当該期の土坑墓の多くが方形または長方形のプランが中心であることを考えると、水入遺跡に構築された円形・楕円

調査区	12後半	13前半	13後半	14前半	14後半	不明	総計
98D	2	30	55	5		76	168
99A		2	1			10	13
99B		1	2			7	10
99D		1				4	5
99E		2	6	1		14	23
99F			1	1		3	5
99G		7	25	3		28	63
99H				1		4	5
99I		1	4	1	1	5	12
99J			1			2	3
99K	3	1	7	4		55	70
総計	5	45	102	16	1	208	377

第65表　調査区別時期別土坑墓一覧

形の土坑墓は特徴的であると思われる。円形のプランを持つ土坑墓の類例としては、岐阜県関市の重竹遺跡で同様の円形土坑墓が確認されており、形状だけでなく集団墓地である点も類似している。このタイプ別での構築エリアの違いや時期差についても見てみても、第２・３表に示した通り、調査区や時代による形態の変化や偏りは認められない。このことは水入遺跡では遺跡が墓域として機能している間、最も一般的な形状として円形または楕円形の土坑墓が作り続けられていたと考えられるのである。

土坑墓からは灰釉系陶器椀や皿を中心に遺物が出土しているが、大半が破片の状態で出土しており、円形土坑墓からは明らかに副葬されたと思われる遺物が出土した遺構はほとんどみられなかった。これに対し、一部の方形または長方形のプランを呈する土坑墓からは刀子や和鏡、完器の青磁碗や合子といった副葬品と考えられる遺物が出土している。このことは土葬という共通の埋葬形態における中での行われた被葬者に対する区別であり、土坑墓の被葬者を考える上での身分・階級差の判断材料と考えることができるであろう。

中世前期、土坑墓とともに墓域内に構築されていた遺構が竪穴建物である。今回検出された竪穴建物は、柱穴も不明確で、内部にカマド等生活の痕跡を示す遺構や遺物がほとんど確認されていない。このように墓域内に構築されているこうした建物の性格は、どの様に考えることが妥当なのであろうか。そのことが墓域内に展開した土坑墓をまとまりとして捉える上での重要なポイントとなると思われる。中世における竪穴建物は東日本で多く認められ、城館跡では掘立柱建物と並存し、「工房」または「倉庫」としての機能が考えられる場合が多い。しかし、水入遺跡の竪穴建物は墓域内で土坑墓と共存するという状況を考えた場合、東日本で考えられているような性格とすることは適当ではないと思われる。この場合は葬送に関する仮小屋的性格とすることが妥当ではなかろうか。

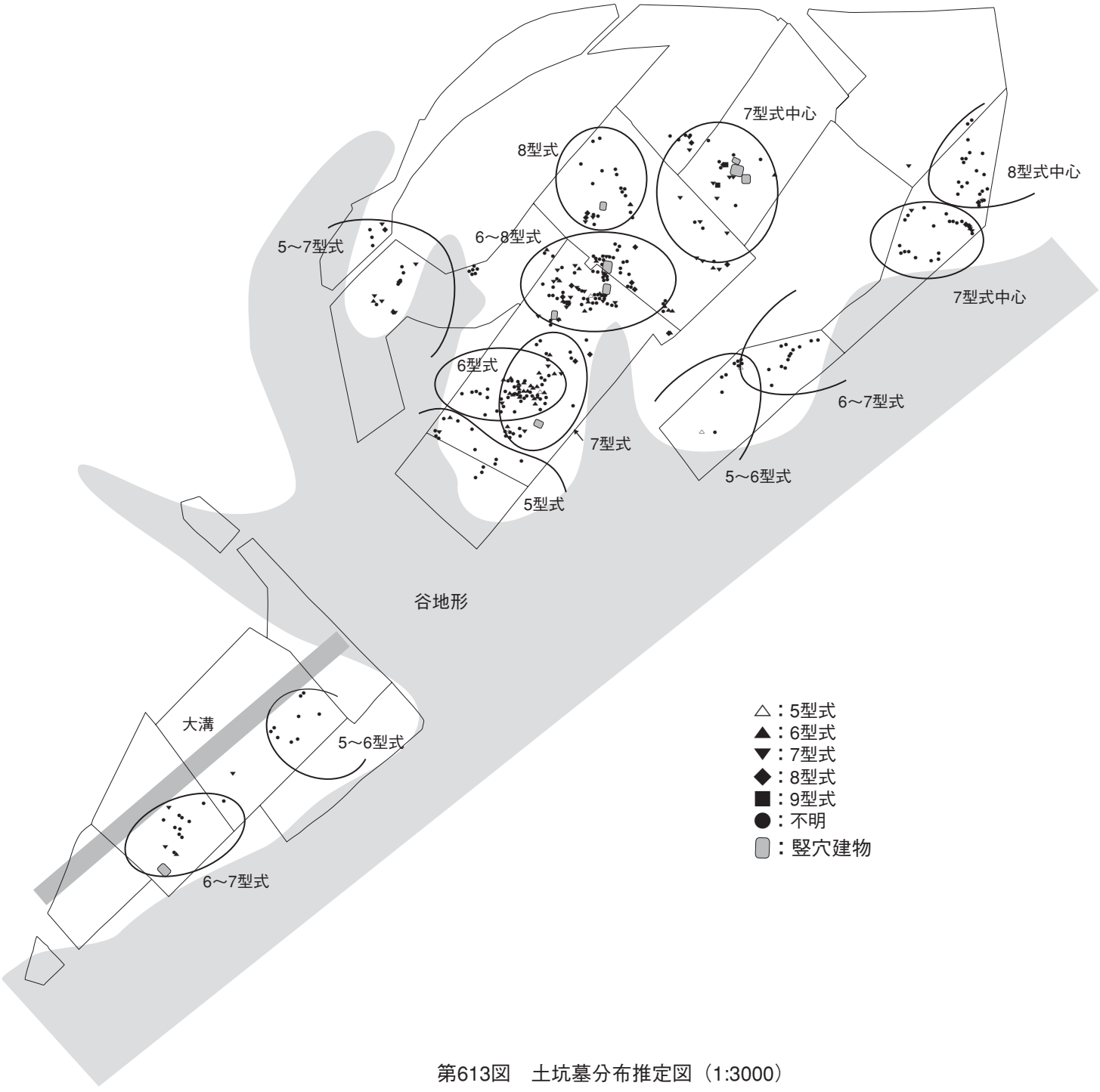
このように想定した上で、時期の判明した土坑墓・竪穴建物の時期と位置を基準として土坑墓のエリア的移動を推定したものが第２図である。また後述する出土遺物の分布もエリア移動の判断材料として利用した（２－（２）参照）。

最後に今回明らかにし得なかった点として、大屋敷地区の空間利用について若干述べておきたい。この時期大屋敷地区にも土坑墓が構築され、墓域であったことが確認されている。しかし、その数は23基と全体の１割にも満たないのである。また、土坑墓の構築エリアが大溝より矢作川（南東）方向に限定されている点も特徴的である。この様に、構築数も少なく、範囲も限定されているにもかかわらず、大屋敷地区からは多くの遺物が出土しているのである。この遺構の展開と比較した場合の遺物出土量の多さをどの様に理解するのかという点について、ここでは仮説として、大屋敷地区は後世の開発が下糟目地区よりも激しく、特に戦国時代には区画が展開するため、遺構が破壊され、大溝に遺物が廃棄されたとする考え方と、墓域とは別の性格を有した空間が存在していた可能性の２説を併記し、以下の分析により判断することとしたい。

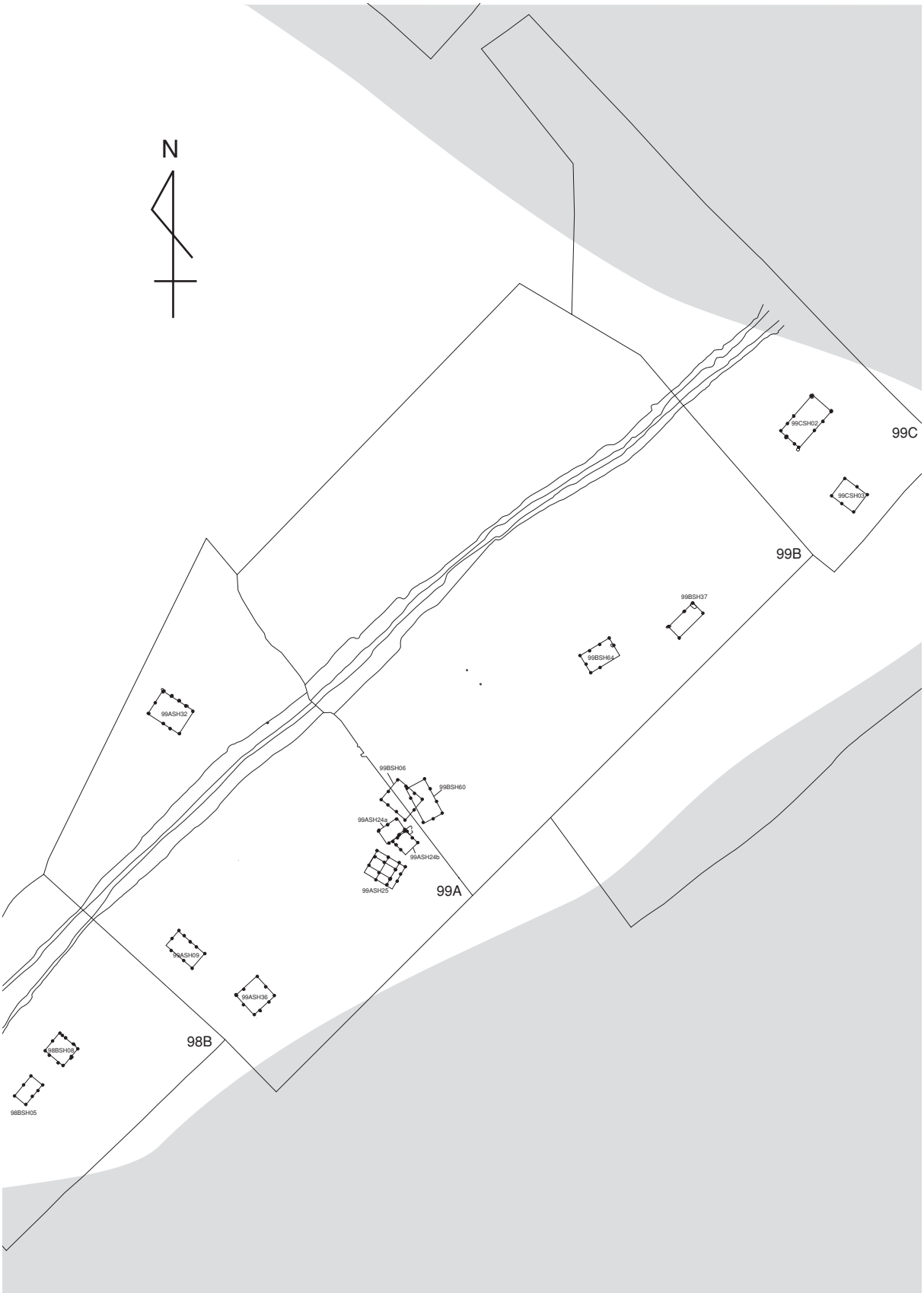
戦国期　この時期水入遺跡には溝により区画された空間が７区画展開する。中世前期に展開した集団墓地は14世紀前半にほぼその役割を終える。その後15世紀後半に入り、大屋敷地区に６区画、下糟目地区に１区画が成立し、17世紀前半までこの景観が継続する。両地区にはそれぞれ特徴的な区画がで展開し、大屋敷地区は地区の中央を大溝が横断し、その北西側には大溝沿いに土塁を伴わない小規模な区画

溝による空間が展開し、大溝南東側には区画周辺に土塁を巡らし、大規模な溝によって囲い込まれる空間に、大型建物・主殿・空閑地が配置されている。これに対し、下槽目地区では大規模な溝によって区画される空間が1区画存在するのみであり、その周囲に明確な当該期の遺構は確認されていない。さらに、区画内部も遺構密度が疎であり、空閑地を囲い込んだといった様相を呈している。以下、個別の区画について今少し詳細に検討してみたい。。

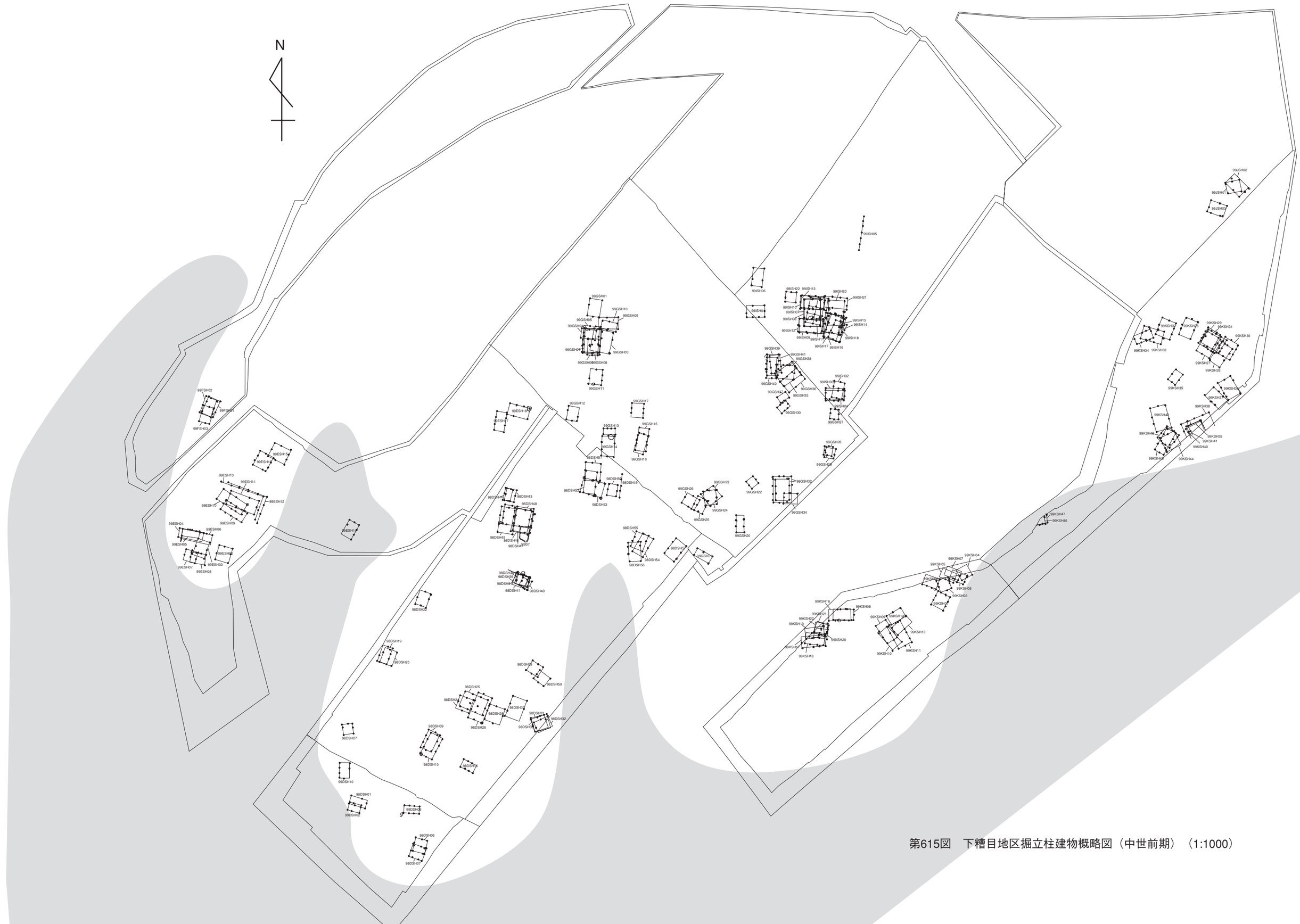
区画Aからは掘立柱建物、井戸3基（99ASE01・02、99BSE8003）が検出されている。区画は南東方向の区画溝が3条掘削されていることや北東方向の溝に掘り直しの痕跡が認められることから最低3度



第613図　土坑墓分布推定図（1:3000）



第614図　大屋敷地区掘立柱建物概略図（中世前期）（1:1000）



第615図　下糟目地区掘立柱建物概略図（中世前期）（1:1000）

区画の拡縮が行われている。検出された面積は、最大で740㎡、最小で467㎡である。建物は井戸周辺に2棟1セットで構築され、このセットによる建替えが3回行われている。また、検出された区画の南西側にも3回の掘立柱建物の建替えが確認されており、常時3棟の建物が存在した可能性も指摘できる。このように考えた場合、この掘立柱建物の組み合わせも3回の作り直しを想定することが可能となり、区画溝の拡縮と井戸の検出数との一致を見る。

区画Bも区画内から掘立柱建物、井戸2基（99BSE8001・8002）が検出されている。区画A同様井戸の周辺に掘立柱建物が構築されているが、2棟1セットという関係は1度で、あとは単独棟であった思われる。建物は3度の建替えが同一個所で行われているが、これに見合う区画溝の拡縮は確認されていない。同様に井戸も2基検出されていることから、区画溝の改修なしに建物・井戸が造り替えられたと考えることが妥当であろう。但し、この区画の北西側は遺構が希薄であり、区画内に空閑地が広がっていたと考えられる。今回検出された面積は495㎡である。

なお、この区画A・Bについては、区画溝の周囲に土塁は巡らされておらず、大溝対岸の区画とは大きく様相を異にしている。

区画Cについては、区画のほぼ全域を確認することができた。大溝側には土塁が巡らされ、区画の面積も1064㎡と、今回同様に全域を確認し得た区画Dよりも広い。しかし、区画内に井戸は検出されず、掘立柱建物についても、小型の掘立柱建物が数棟認められるのみで大型建物は存在しない。このような内部構造を道理解するかであるが、ここでは囲い込んだ空間を広く利用するためそこを管理するに必要な最小限の建物を構築するにとどめたと理解しておきたい。

区画Dも、前述の通り区画の全域を検出した。面積は888㎡である。区画は大規模な溝で区画され、大溝側と北東部分には土塁が巡らされている。さらに区画北東側には大型建物群が存在し、ほぼ同一の場所に、東西棟・南北棟という建物の方向変化を伴いながら、数度の建替えが行われている。建替えが行われた大型建物は2～3棟がセットとなり並存していた可能性が高くい。但し、この区画からも井戸は検出されていない。

区画Eはその大半が調査区外で、検出できた面積は301㎡にとどまった。区画溝の規模は大きく、区画Dの北西側に構築されていた土塁も一旦とぎれることが調査時に確認されており、区画Dまたは区画Cとの関連性も想定する必要があると思われる。

区画Fについては、99BSD09により区画が北東側と南西側に区分されていることから、以下の記述に際しては、北東側の区画を区画F東、南西側の区画を区画F西と表記する。　この区画は今回確認された大屋敷地区の6区画で最大規模を持ち、区画F東が563㎡、区画F西が1258㎡、合計面積は1820㎡となる。この西と東の区画は同一区画内ではあるものの、様相を大きく異にしている。まず、区画F東は掘立柱建物が1棟確認されたのみで、その他当該期の遺構はほとんど確認されなかった。その掘立柱建物も梁行1間、桁行6間という特殊な建物で、通常馬屋もしくは長屋的建物と称されることが多い構造の建物である。これに対し、区画F西は柱穴が集中し、相当回数の建替えが行われていたと思われる。なかでも注目される建物は2種類の大型建物である。まずひとつは区画D同様の梁行1間の大型建物である。区画Fの南西部に造られており、複数回の建替えやそれに伴う東西棟・南北棟の建物方位の変化



第616図　掘立柱建物概略図（戦国期）（1:1000）

も認められる。今一つはこの区画の中心ともいうべき大型建物（99BSH46）である。梁行1間、桁行3間の主屋部分に北西側を除く3方向に1間の庇がつく建物である。この建物の主屋部分も99BSH47・48と重複しており、これを建替えと考えれば、3回の改修が加えられていると理解することができる。今回行った建物復元の検討では原案を提示できなかったが、庇部分についても柱穴が重複したり、近接して複数存在する個所も認められていることから、この建物に関しても建替えが行われていると想定することができる。

区画Gは下糟目地区に形成された区画であり、ほぼ全域が確認され面積は4402㎡と7区画中で最も広い。99D区に展開した谷地形に接する位置に選地されており、そのため区画は方形に近い形状を呈してはいるが、南西の区画溝がやや北へ振るように掘削されている。しかし、確認された遺構は井戸1基、掘立柱建物3棟のみである。これ以外に明確な遺構は下糟目地区では確認されていない。区画内で検出された掘立柱建物は大型建物（98DSH08）1棟、竪穴建物の上屋と思われる1棟（98DSH27）、これと軸線を同じくする2×3間（98DSH24）である。この3棟が同時存在したかどうかは定かではないが、少なくとも建替えは行われておらず、この区画は存在期間中空閑地を囲い込んでいたと思われるのである。

では、以上の7区画が展開していた戦国期の水入遺跡はどの様な性格であったのであろうか。まず下糟目地区の区画Gについてであるが、これについては先述の通り、大型建物1棟、井戸1基というような簡単な配置を取り、空間を囲い込むことに意味があったのであろう。その具体的性格については、遺物カウントの分析を踏まえた上で、論証することとしたい。

これに対し、大屋敷地区の区画はどうであろう。大屋敷地区の北東には矢作川に注ぐ宝蔵川が流れ、この宝蔵川に向かって大溝が掘削されている。この大溝は古墳時代以降のものを浚渫ではなく拡幅して再利用し、この拡幅に際し98B2区には大溝と接して広場（98B2SX01）が構築される。さらに大溝南東肩には土塁が構築されている。この様に改変された大溝は、埋土の観察により滞水していたか一時的に水流があったことが確認されていることから判断すれば、この大溝は矢作川から宝蔵川を経由した水路または運河的役割を果たしていたと考えることができるのではなかろうか。そう考えた場合、土塁で囲まれた区画に構築されていた大型建物は倉庫的役割を持ち、矢作川を利用して行われた舟運河川交通によって搬入れた物資を保管するためのものであったと推測される。そして、98B2区に掘削された広場に近い区画Cに展開する空閑地は、搬入された物資を仕分けするためのスペースであり、3面庇の大型建物のある区画Fは河川交通を管理する中心的空間とすることが可能となる。これらの区画から井戸が検出されていないことも、上記のように想定したとすれば、妥当な結果であるといえるのではなかろうか。これに対し、大溝北西側の土塁に囲まれない区画は、逆に井戸が検出されていること、大型建物が存在しないことなどから、物資集積とは異なる日常的空間と想定することができるであろう。

近世後期　戦国期に構築された7区画は17世紀前半には終焉を迎え、その後水入遺跡は耕地化され、生産域へと変貌を遂げる。その理由のひとつとして、矢作川による洪水の影響を挙げることができるであろう。第9章で述べたように、近世後期にはいると水入遺跡は幾度となく矢作川の洪水に見舞われる。そのため居住域としては適正を欠くようになり、生産域への変化を余儀なくされたのであろう。

水入遺跡のなかでも比較的標高の高い下糟目地区には耕作に関連すると思われる溝が多数検出されて



第617図　区画内遺構概略図（大屋敷地区）（1:500）

目次
終了

いる。この地域で水田が確認されているのは谷地形が入り込んでいた99D区のみであり、その他は畑地となっていたと思われる。これに対し、大屋敷地区は下糟目地区に比べて標高がやや低くなり、その影響もあってか、いずれの調査区壁においても水田の痕跡を確認することができた。近世後期以降も矢作川の洪水は続き、その結果水入遺跡は現地表下４ｍの位置に埋没することになるのである。

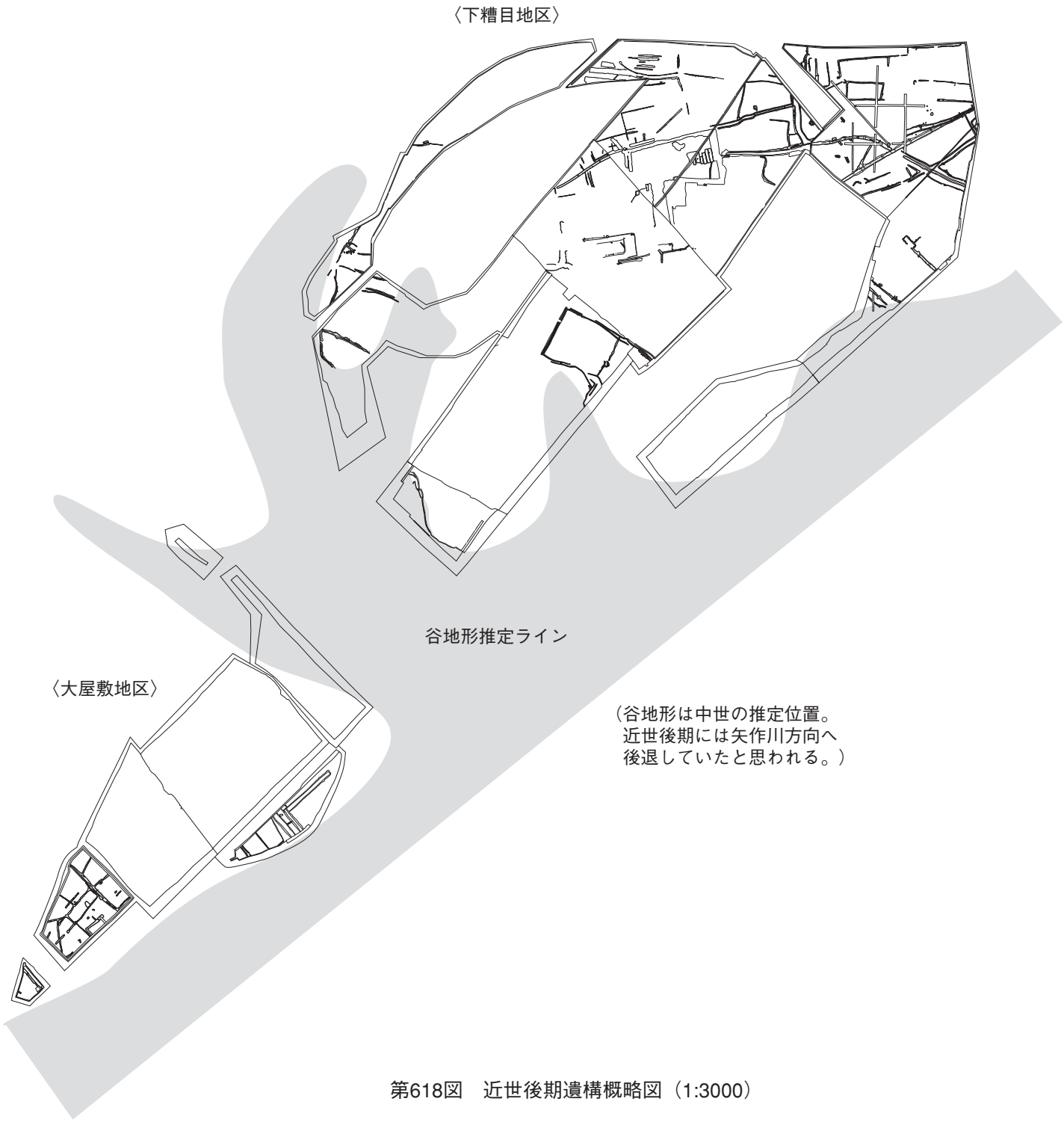
（２） 出土遺物からみた遺跡の分析

先に見た遺構変遷からみた水入遺跡の性格を、ここでは出土遺物をカウントし、分析することにより異なる視点からの検討を加えることとする。今回用いた遺物カウント方法は器種別・時期別の総破片数カウントを用いている。遺物の時期の特定たあたっては、灰釉系陶器椀・皿は底部を、土師器鍋釜は口縁部を基準とし、中世・戦国期の瀬戸美濃製品についてはその分類を藤澤良祐氏にお願いした。また、灰釉系陶器の口縁部及び体部、土師器鍋釜の体部等時期の特定が困難な遺物については、時期を特定できた遺物の比率をもとに案分して時期別出土数に加算した。なお、土師器皿については近年西三河における土師器皿の編年が進んでおり、かなり時期の特定が行える状況になってきてはいるが、未だ明確にされていない時期が残っていることや、また筆者の力量の問題も伴って、今回はあえて時期区分せずに一括して表記するに留めたことを断っておく。

遺物組成からの分析　ここでは遺物組成の観点からみた水入遺跡の中世以降のあり方を考えてみたい（第66表参照）。まず調査区全体でみてみると、今回出土した中世以降に該当する遺物は総破片数で26576点である。調査面積が67570㎡であることから、この出土量を１㎡当たりに換算すると0.4点となる。同じ矢作川流域に立地しほぼ同時代に遺跡が成立していた西尾市室遺跡では１㎡あたり9.7点（調査面積8800㎡、出土総破片数53188点）、同市八ツ面山北部遺跡の屋敷地からは0.67点（分析対象屋敷地面積1392㎡、出土総破片数934点）、また知立市腰前遺跡の屋敷地からは0.7点（調査面積8000㎡、出土総破片数5637点）が出土している。以上の３遺跡はいずれも溝で区画された屋敷地からの出土遺物を今回と同じ方法でカウントした結果の数値であり、これらの遺跡との比較で判断すると、水入遺跡から出土する遺物量はかなり少ないと考えられる。この理由は水入遺跡が中世前期は墓域であったこと、そこに造られた土坑墓に副葬品が伴わないものが大半であったこと、戦国期に下糟目地区での出土遺物がほとんど見られなかったことなどを要因としてあげることができ、換言すれば、出土遺物量の少なさこそが水入遺跡の特徴であり、遺構のあり方を如実に表現していると考えることができる。

次に地区別に遺物の出土量の変化をみてみることとする。まず、下糟目地区についてであるが、この地区は12世紀後半から出土遺物が増加し始め、13世紀後半にピークを迎える。その後14世紀にはいると減少し、15世紀前半には50点以下の出土数にまで減少する。この減少に歯止めがかかるのが15世紀後半であり、17世紀前半まで100点前後の出土数で推移する。そして17世紀後半に入り出土数が795点と再び急増する。この遺物出土数の増減はまさに先に見た遺構の変遷と一致しており、遺構変遷を補強する結果といえるであろう。

では、下糟目地区の出土遺物の傾向を器種の側面からみてみるとどの様なことを読みとることができるのであろうか。この地区で最も多く出土している遺物は灰釉系陶器椀・皿であり、全体の80％を占



第618図　近世後期遺構概略図（1:3000）

めている。これに対し、土師器鍋・釜と常滑産壺・甕は５％と、器種別出土量に著しい偏りが認められる。特に、常滑産壺・甕は17世紀後半にそのほとんどが出土しており、中世前期・戦国期に限ってみればわずか１％に過ぎないのである。この原因は先述の通り、この地区が中世前期に墓域が展開した結果、土坑墓にともなう遺物として供膳形態を持つ椀・皿が多く出土したためと考えるられる。また、調理形態としての土師器鍋釜の出土が少ない点については、このエリアで日常的な生活が行われていなかったことを示しており、少量出土する遺物は一時的な活動に伴うもの（例えば、葬送儀礼に関連する行為など）であったことを意味していると考えられる。これは、先に見た竪穴建物が恒常的は住居でなく、一時的な仮小屋的性格であることを裏付けているといえる結果であろう。

この地区でいまひとつ注目すべき点は、瀬戸美濃とした施釉陶器の出土が少ない点である。中世墓の場合、瀬戸美濃製品が壺・瓶類を中心として蔵骨器に使用されることが多いのであるが、水入遺跡の土坑墓で蔵骨器としての瀬戸美濃製品を伴うものは１基も確認されていない。蔵骨器の有無に関しては埋葬形態にも影響されるのではあるが、例えば吉良町善光寺沢遺跡や一宮市法圓寺で確認されている中世墓とは明らかに形態を異にしており、そこに埋葬された被葬者の身分・階級差を想定しうるのである。

また、戦国期に入り区画Ｇが成立しても遺物の出土量にほとんど増加がみられないということは、この区画内及び周辺での日常的な活動が行われていなかった可能性を示唆している。この点も先に考えた区画Ｇは空間を取り込むことに意義があるとするに合致する結果であると思われる。

最後に17世紀後半に遺物が増加する点についてであるが、この時期に出土する遺物の80％は常滑産の「赤もの」と称される甕である。これは生産域へと変貌を遂げる水入遺跡の再開発のために多くの甕が持ち込まれた結果であると考えられる。

次に大屋敷地区を見てみたい。遺物出土量の増減時期については下糟目地区とほぼ同様の動きを示している。中世前期に土坑墓が少なかったためか、出土量も下糟目地区と比べると少なく、ピーク時でもその１/３程度の出土にとどまっている。出土量の時期的変化と同様に器種別の出土傾向も同様であり、供膳形態である灰釉系陶器椀・皿がその大半を占め、調理形態である土師器鍋釜は少量の出土にとどまっている。このことから推測すると、前に述べたこの地区に墓域と異なる性格の空間が展開していたとする考え方については、否定的にならざるをえないのである。仮にこのエリアに異なる性格の空間が成立していたとすれば、遺物の出土傾向が下糟目地区とは異なっているはずである。しかし実際には量的差は認められるが、遺物組成に変化は認められない。つまり、大屋敷地区も下糟目地区と同様の空間であった可能性が高く、中世前期においては墓域が展開していたと考えることが妥当であると思われる。そして、多くの土坑墓が戦国期の開発により破壊されたため、遺構として確認できた土坑墓が少なくなってしまったのではなかろうか。

戦国期にはいると、この地区には６区画が成立するため瀬戸美濃製品の出土が増加し、これが要因となって遺物の出土量が増加に転じる。これは下糟目地区とは異なる傾向である。そこで成立した７区画の出土傾向を順に確認してみたい（第67表参照。但し、土師器皿については中世以降の区画内出土量を示しており、戦国期のみの数値でないことを断っておく）。

区画Ａは区画の全域を検出していないにも関わらず、遺物の出土量は区画Ｄ・Ｆについで474点と多

施釉陶器			前I		前II	前III		前IV中	後I・II		後III	後IV		大1・2	大3・4		大5・連1・2	連3～				
灰釉系陶器		3・4	5		6	7		8	9		10											
		12前半	12後半	12代	13前半	13後半	13代	14前半	14後半	14代	15前半	15後半	15代	16前半	16後半	16代	17前半	17後半～	17代	中世	不明	総計
下糟目	灰釉系陶器椀	236	1224		3100	5452		1173	279		11											11475
	灰釉系陶器皿	19	72		733	1197		102														2123
	灰釉系陶器鉢	10	31			185		21	21													268
	土師皿																			711		711
	土師器鍋釜	4	11		107	194		64	50		25	43		89	111		61	21				780
	常滑鉢				3	8		3	3													17
	常滑壺甕	19	30		42	76			11		4	4		8	8			631				833
	瀬戸美濃		2		21	2		7	32		6	39		25	37		13					184
	近世陶磁																	128				128
	青白磁						45															45
	その他		2															15		16	212	245
下糟目 計		288	1372	0	4006	7114	45	1370	396	0	46	86	0	122	156	0	74	795	0	727	212	16809
大屋敷	灰釉系陶器椀	355	1008		1749	2035		396	24													5567
	灰釉系陶器皿	27	81		333	331		13	3													788
	灰釉系陶器鉢		26		26	26		13	13													104
	土師皿																			737		737
	土師器鍋釜		10		39	33		6	8		21	39		384	684		102					1326
	常滑鉢							1	1		1	3										6
	常滑壺甕		62		25	12					25				12		25	186				347
	瀬戸美濃		2		4	2		4	21		5	117		184	206		41					586
	近世陶磁																	129				129
	青白磁						20															20
	その他																	11		1	145	157
大屋敷 計		382	1189	0	2176	2439	20	433	70	0	52	159	0	568	902	0	168	326	0	738	145	9767
総計		670	2561	0	6182	9553	65	1803	466	0	98	245	0	690	1058	0	242	1121	0	1465	357	26576

第66表　地区別出土遺物カウント一覧

目次
終了

い。これを１㎡に換算してみると出土量約１点となり、八ツ面北部遺跡や腰前遺跡の屋敷地からの出土遺物量とほぼ同レベルである。また、調理具である土師器鍋釜の出土量も多く、この点も先述の屋敷地の様相と類似する。

区画Bは規模的には区画Aとほぼ同規模であり、内部構造も類似しているにもかかわらず、出土遺物は43点と区画Aの1/10と少ない。双方の区画から出土する遺物組成に注目した場合、どちらも土師器鍋釜が最も多く、次いで瀬戸美濃となる点は一致している。常滑壺甕の出土量がやや少ないが、組成に大差は認められず、出土遺物から判断した場合、それぞれの区画の性格は類似していると考えることができる。ではこの量的な差をどう考えればよいのであろうか。このことを明らかにする材料を持ち合わせてはいないが、あえて言及するとすれば、検出された部分の区画内部における位置づけの違いに求めることができるのかも知れない。つまり、規模や内部構造が類似する区画ではあるが、調査により検出された範囲の区画内における空間利用のあり方が異なっていたため、その結果が出土量の差となったのではないかと思われる。

区画Cは区画全体が検出されたにもかかわらず、出土遺物は177点と少ない。遺物出土量の少なさは、空閑地が多く掘立柱建物等の遺構が希薄であるという内部構造に起因している可能性が高いと思われる。出土遺物の内訳については、土師器鍋釜が55点と最も多く、次いで瀬戸美濃38点、土師器皿33点、常滑壺甕30点となっている。他の区画では土師器鍋釜が出土遺物量の50%近くを占めるのに対し、この区画ではほぼすべての器種が２～３割程度を占め、均等に出土するという傾向を示している。各器種が均等に出土するという傾向を示す空間の性格を以下に理解するかは今後の検討課題であるが、屋敷地と称される居住域とは明らかに様相を異にしていることについては注意しておく必要がある。

区画Dは区画Fについで遺物の出土量が多い区画となっている。遺構の変遷からこの区画は倉庫群により構成される区画と推定したが、遺物組成から見た場合、調理具としての土師器鍋釜が全体の40%以上と最も多くを占めている。これに対し、瀬戸美濃製品の占める割合は60点、10%と他の区画と比べると低い数値となっている。この区画を倉庫群と考えた場合、瀬戸美濃製品が少ない点については、持ち込まれた製品はこの区画で一旦保管された後、他へ搬出されていた考えることで解決することができるであろう。そして、区画Dで出土している瀬戸美濃製品に焼成不良品や融着製品などの商品的価値を持たない遺物が含まれていないことを考えあわせれば、やはりこの倉庫群は物資の中継地点として利用されていたと思われる。では、土師器鍋釜の多さをどの様に考えるのであろうか。あくまで推定の域を出ないのであるが、区画Dとその北東側に位置する区画Fとの間には土塁（99BSX02）が構築されており、構造的に区画遮断された空間となっている。区画Dは今回全域を確認した区画C、ほとんど確認されなかった区画Eとともに複数の区画でひとつの機能を果たしていたことも想定できる。区画F内に主殿と倉庫群と空閑地が含み込まれていることを考えれば、この想定もあながち無理なものではないと思われる。そうした場合、中心部分は未検出部分の多い区画Eに展開したと思われ、その裏手にあたる区画Dに３区画の生活に関するエリアが一部存在していたため、土師器鍋釜の出土につながったのではなかろうか。

区画Fについて、まず区画F東は遺構変遷で考えた空閑地であったことが、遺物の出土の分析からも

確認される。このエリアの出土量はほんの一部のみを検出した区画Eをも下回っているのである。これに対し、区画F西は7区画中最も多くの遺物が出土しており、当時の活動の中心的空間であったことがこのことからも確認される。しかし、1㎡当たりの出土量についても0.49点であり、これは区画Aよりも少ない数値となっている。さらに、器種別の出土傾向も他の区画とほとんど変化がなく、質的にも主殿を持つ区画としての特徴的な遺物は認められない。これらのことから判断すれば、この区画F西も屋敷地と称されるような日常的生活空間ではなかった可能性が高いといえるであろう。

区画Gについては、広大な面積を区画しているにもかかわらず、出土量は少なく、居住域として考え得る遺物量は出土していない。先に見た空閑地を囲い込むことを目的とした結果が出土遺物量にも反映していると思われる。

以上、個別に区画の特徴をみてきたのであるが、全体としてこの視点からもや出土遺物量の少なさを指摘することができ、区画A以外は、屋敷地と称される中世集落に展開していた空間とは異なる性格を有していた区画であることが明らかとなった。区画は15世紀後半に成立し、遺物の出土から判断すれば16世紀後半に最盛期を迎え、17世紀前半に衰退する。この間約200年という長い存続期間が想定されるのであるが、全期間の出土遺物を合計しても2250点であり、中世以降の出土遺物量の1割にも満たない数値である。更に付け加えるとすれば、個別の遺物を概観しても、区画の階層差を示すような遺物は出土していない。この均質的な遺物の出土傾向も水入遺跡の特徴なのである。

これらの点を総合すれば、水入遺跡に展開した戦国期の遺構を考えた場合、先に遺構の変遷から言及した河川交通関連の遺跡であるという推定が妥当であるという結論に達する。さらに言及するならば、遺物の出土傾向から河川交通の中継地点としての役割を果たしていたと考えられるのである。つまり、遺構的には矢作川を利用した河川交通に対応するために、作業エリアとしての空閑地、物資集積用の倉庫群、管理機能を持つ主殿、水路または運河としての大溝を配し、その河川交通に関連する遺構が展開するエリアを土塁で保護する。しかし、この様に墓域を否定し行われた大規模開発の結果成立した大屋敷地区の6区画は、生活空間ではなく、あくまで物資の中継地点として成立したと思われる。そのため、生活に直接結びつく遺物の出土量が少なく、また中継地であるが故に商品として搬入された瀬戸美濃製品をはじめとする特徴的製品の出土も少量であったのではなかろうか。焼き損じや融着品など不良品が出土しないことも、すでに商品として選別された製品が搬入され、あくまで物資を中継する地点であったが故の結果であるといえるのではなかろうか。

出土分布からの分析　ここでは発掘調査時に設定した5m四方のグリッドを基準として、時期別の遺物出土量分布図を作成し、遺物の出土傾向からこれまで検討した遺構変遷に再検討を加える。

まず、灰釉系陶器についてであるが、各時期とも大屋敷地区の大溝と下糟目地区の谷地形から遺物が集中して出土していることが分かる。これは大溝及び谷地形が遺物の投棄もしくは廃棄場所として用いられていたためであり、したがってこの2ヶ所は分析の対象から除外して考える必要がある。この点をふまえた上で、まず灰釉系陶器の出土分布をみてみると、下糟目地区については、墓域が展開し始める時期の遺物は調査区内に入り込んでいた谷地形周辺に分布が認められる。その後時代が新しくなるにつれて遺物の分布は内陸に向かって遺物が集中して分布するエリアが移動していることを読みとることが

施釉陶器		前期IV	後期I･II	後期III	後期IV	大窯1･2	大窯3･4	大5,連1･2	連房3～		
灰釉系陶器		8型式	9型式	10型式							
		14前半	14後半	15前半	15後半	16前半	16後半	17前半	17後半～	不明	総計
区画A	土師器鍋釜				5	52	153	12			222
	土師皿									94	94
	常滑壺甕						11				11
	瀬戸美濃	1	1		16	21	72	18			129
	近世陶磁								15		15
	その他									3	3
	計	1	1	0	21	73	236	30	15	97	474
区画B	土師器鍋釜					3	10	12			25
	土師皿									2	2
	常滑壺甕									5	5
	瀬戸美濃					3	4	1			8
	近世陶磁								3		3
	その他										0
	計	0	0	0	0	6	14	13	3	7	43
区画C	土師器鍋釜	6	6	16		2	25				55
	土師皿									33	33
	常滑鉢			1	1		2				4
	常滑壺甕									30	30
	瀬戸美濃	1	4		9	6	18				38
	近世陶磁								11		11
	その他									6	6
	計	7	10	17	10	8	45	0	11	69	177
区画D	土師器鍋釜	2	3	3	12	70	141	22			253
	土師皿									227	227
	常滑壺甕			2						18	20
	瀬戸美濃				9	27	21	3			60
	近世陶磁								6		6
	その他									7	7
	計	2	3	5	21	97	162	25	6	252	573
区画E	土師器鍋釜					4	11				15
	土師皿									4	4
	常滑壺甕									5	5
	瀬戸美濃					1	3				4
	近世陶磁								11		11
	その他										0
	計	0	0	0	0	5	14	0	11	9	39
区画F東	土師器鍋釜					9					9
	土師皿									7	7
	常滑壺甕									1	1
	瀬戸美濃				1	1	1				3
	近世陶磁								1		1
	その他									1	1
	計	0	0	0	1	10	1	0	1	9	22
区画F西	土師器鍋釜			2	6	98	160	34			300
	土師皿									134	134
	常滑壺甕								2	42	44
	瀬戸美濃	1	2		26	59	40	4			132
	近世陶磁								11		11
	その他									4	4
	計	1	2	2	32	157	200	38	13	180	625
区画G	土師器鍋釜	3			15	19	56	30			123
	土師皿									29	29
	常滑壺甕						1			101	102
	瀬戸美濃	1	2		2	8	13	2			28
	近世陶磁								4		4
	その他									11	11
	計	4	2	0	17	27	70	32	4	141	297
総　計		15	18	24	102	383	742	138	64	764	2250

第67表　区画別出土遺物カウント一覧

できる。この遺物の分布は先に見た土坑墓の構築エリアが谷地形周辺から内陸部へ移動してゆくことと一致する。

今一つこの地区で注目すべき遺物の分布がある。それは14世紀後半に99I区で遺物の集中エリアが認められることである。12世紀前半から出土を見る灰釉系陶器は、14世紀前半までは98D区を中心としたエリアに遺物が出土している。この期間での灰釉系陶器の出土量が多いため、あまり目立たないのであるが、99I区の14世紀後半に灰釉系陶器が集中して出土しているエリアでは、13世紀後半から継続して遺物が集中しているのである。遺構の検出状況において、このエリアは98D区ほど土坑墓は集中しておらず、そのかわりに掘立柱建物が継続して構築されている。(今回は復元案から除外したが、検討時には四面庇の建物が復元可能であった。しかし、建て直しの復元案が確認できず、周辺の掘立柱建物が２棟１セットで構築されているとする復元状況を考慮して、小型建物の２棟１セットでの復元案を提示した。)このことから、これまで墓域の段階では土坑墓と竪穴建物による景観を想定していたが、これに掘立柱建物群が加わる可能性が考えられるのである。また、今回復元案のひとつとして提示した掘立柱建物の一部は、墓域に関連して構築されていた可能性が充分考えられるのである。特に、先に述べた99I区に見られる庇付き建物（99ISH07・11）や99G区南東壁付近で検出された四面庇の建物（99GSH32）が御堂的性格としての機能を果たしていたことも考えられるのである。

大屋敷地区の場合、灰釉系陶器の分布は大溝よりも南東側に遺物が集中して出土している。先に述べた大溝以外で継続的に遺物が集中するエリアである99A区調査区南端は崖が入り込んでいるため、99B区の南東壁付近は土塁中に大量の灰釉系陶器が含まれていたためである。これ以外のエリアでは、土坑墓の分布同様大溝北西側に遺物の分布は認められず、当時の活動エリアは大溝南東側に限定されていたと思われる。したがって、この分布からも周辺への遺構の広がりが認められないことが確認でき、後世の開発により当該期の遺構が削平された可能性が高いことが理解される。

次に瀬戸美濃製品の分布をみてみる。これは下糟目・大屋敷地区ともに15世紀後半から分布が広がりはじめ、なかでも遺物が集中するエリアは区画Ａと区画Ｆである。これは先に見た遺物出土量を反映した結果と考えることができる。しかし、もう少し詳細にその分布をみてみると、各時期によりこの区画Ａ・Ｆの分布も異なっていることが分かる。区画Ａでは、分布範囲は基本的に区画溝を中心としているが、16世紀後半のみ区画内に集中するエリアが確認される。これに対し、区画Ｆでは16世紀は区画の南西部分すなわち倉庫群が展開していたと推定したエリアおよび主殿が構築されていたエリアを中心に遺物が集中して出土している。この集中エリアには区画Ｄとの間に構築されていた土塁及び99BSD03という区画溝が存在し、そこに遺物が投棄されたことも影響していると思われる。

区画内で認められる遺物集中エリアをどの様に位置づけについては、建物などが存在しない空閑地であるとする考え方やそうではなく中心部であるとする考え方等議論の余地はあるが、水入遺跡では遺構の展開を考えた場合、区画Ａ・Ｆともに遺物の出土するエリアは建物等が存在し、区画の中心的部分に相当すると考えられる。したがって、16世紀前半までには大屋敷地区の景観はほぼ完成していたとすることができる。また、下糟目地区に１区画のみ成立していた区画Ｇもこれまでの結果を裏付けるように、ほとんど遺物の分布は谷地形または区画溝に集中し、区画内部は空閑地であり、遺物を廃棄する土坑も

		前期						中期					後期									古瀬戸	大窯												連房							総計
		I	I-II	II	III	III-IV	不明	I	I-II	II	III	不明	I	I-II	II	III	III-IV	IV	IV古	IV新	後半	不明	不明	後～大	1	1-2	2	3	3-4	3前	3後	4	4後	4前	不明	大～1-2	1	1-2	2	4	中期	後期	不明	
碗	天目茶碗															1			4	7		4		16	27		12	15	1	1		5	18	6	6		1	4	1					129
	小天目茶碗													1																			2										3
	丸碗																								3						1			1				8				13
	平碗								1						4			3	3						1																			12
	小碗																																								1		1
	浅碗													2																														2
	緑釉丸碗																																			1								1
皿	丸皿																										4	2		6	2													14
	丸皿か端反皿																									11																		11
	端反皿																								17						1												18
	腰折皿																			11																								11
	鉄絵皿																																				1			1				2
	灯明皿																								1																			1
	内禿皿																														6											1		7
	平皿												1																															1
	稜花皿																								2																			2
	稜皿																											1		3	2												6
	折縁皿								1																									9									10
	志野丸皿																			1													9									28
	小皿か						1																																					1
	折縁中皿																		1																									1
	中皿																														1						1							2
	底卸目皿								3																																			3
	緑釉小皿												1	2		3	4		3																									13
	卸皿								1							1																													2
鉢・盤	折縁深皿							2	3	9	3				1	1																													19
	大型卸皿												1																															1
	大皿																																1											1
	直縁大皿															3			1	1																									5
	鉄絵鉢																																								1			1
	盤類											4		4			7																													15
	擂鉢																	9	5	11		1			22		2				6	6		10	5	131			10		1			3	222
壺・瓶	口広有耳壺																								3																			3
	広口瓶子																1																												1
	四耳壺	3		5																																									8
	小型三耳壺	1																																											1
	小壺					1			2			1					4				1																			2					11
	水注		1		1																																								2
	徳利																											5	1		1								1					8
	徳利か																																		4									4
	瓶子						1											1																											2
	瓶類																	2																											2
	壺・瓶						1																																						1
	壺・瓶類		2			2	17		3			3										5																							32
	甕																	11											2																13
その他	エンゴロ																																					1							1
	その他																																									27	12		39
	桶																	8																											8
	灰釉（不明）																																		1									1
	建水																														2													2
	志野向付																																4											4
	水滴																	1																											1
	尊式花瓶													2																															2
	茶釜																																		7									7
	茶入																																		2									2
	筒形香炉																2																													2
	内耳鍋																1																													1
	不明																					3	6																							9
	仏供								1																																					1
	仏餉具																								1																					1
	片口																																				1									1
	緑釉ハサミ皿																								6																					6
総計		4	3	5	1	3	20	2	15	9	3	8	3	11	5	9	19	35	17	31	1	13	6	16	83	11	18	23	4	16	22	6	41	23	151	1	5	43	3	1	29	12	3	734

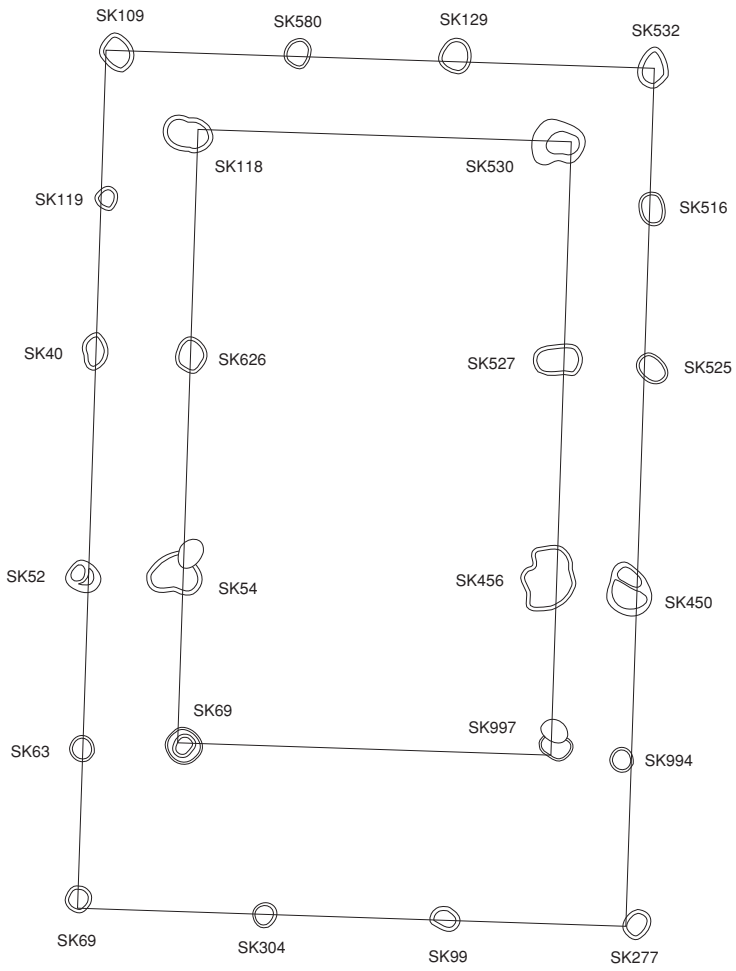
第68表　区画内出土遺物カウント一覧（瀬戸美濃製品）

目次
終了

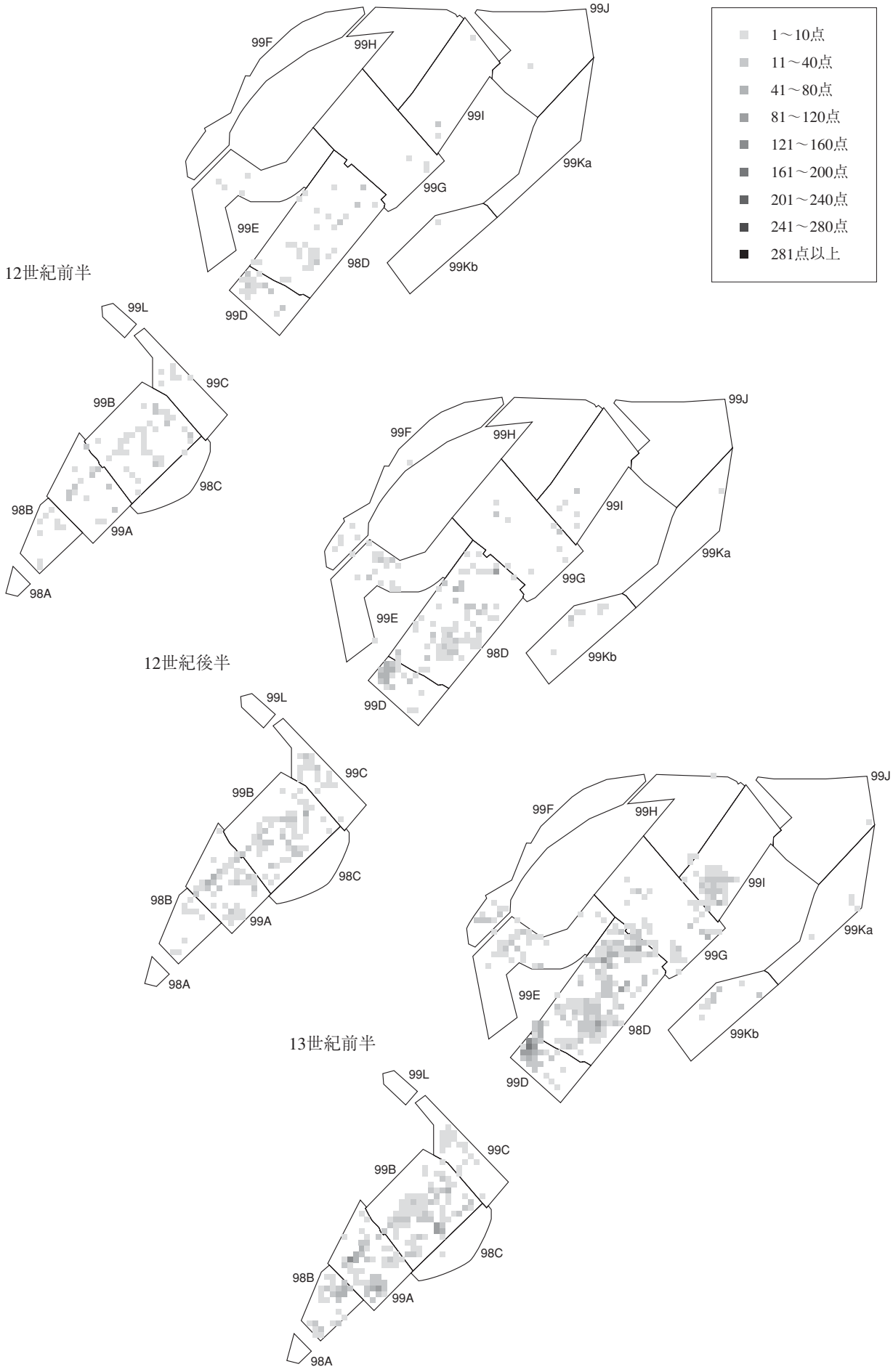
存在しない状況が確認できる。

以上、中世前期・戦国期に展開した遺構を遺物組成及び出土分布から分析を加えたわけであるが、結果としては、遺構変遷により確認できた内容を追認する結果となった。ここでの検討から判明した新たな知見としては、下槽目地区が墓域として利用されていた段階に、掘立柱建物が構築され、土坑墓と何らかの有機的関係を創り出していた点であろう。今回この遺物のカウントによる分析から、時期を特定できなかった掘立柱建物の動向を推定しようと試みた。しかし、結論としてはうまくそれを導き出すことはできなかった。遺物の分布が土坑墓の分布と重なり、時期別に掘立柱建物を分類することが困難であったためである。そのなかで、99I区のみが土坑墓の分布と遺物の出土分布のずれが生じていたことから、先のことが判明したのである。この様に遺構とと遺物の分布の微妙なズレを丹念に検討を加えることができれば、時期不明とした掘立柱建物の分布を含めた遺跡の景観を復元することは可能であると思われる。そのことが今回の発掘調査では捉えられなかった14世紀後半から15世紀前半にかけての水入遺跡の様相を明らかにすることができるひとつの方法といえるであろう。

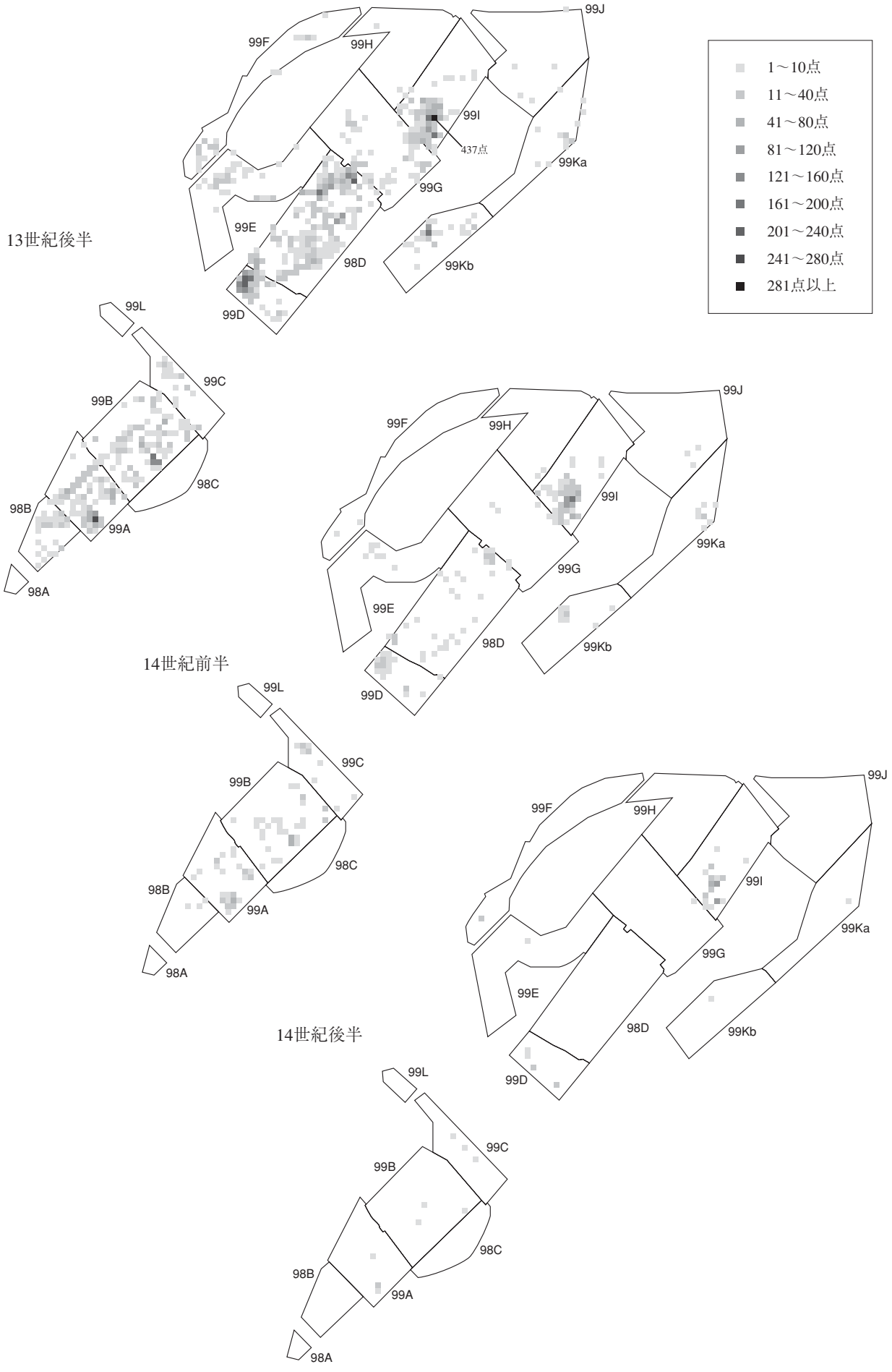
中世において出土遺物の中心が南部系山茶碗（本報告書では灰釉系陶器）である地域は、南部系山茶碗が出土しなくなる14世紀代の遺跡の様相が判然としないことが特徴であり、検討課題であるといわれている。この問題を解決するための糸口として、できる限り掘立柱建物を復元し、遺物カウントを援用することにより、14世紀に該当する建物を抽出し、水入遺跡の景観を復元することが、課題とされてきた14世紀代の遺跡を考える上での新たな提言になると考えた。残念ながら、結果的に建物は復元できたが14世紀代の遺構の復元案を提示することはできなかった。しかし、この分析が全く有効でなかったわけではなく、一部ではあるが建物を抽出することができ、また明らかにこの空白期に成立したと考えられる建物の存在が確認できたことは、遺構の空白期を明らかにできる可能性が存在していることを意味する。今後の検討課題である。



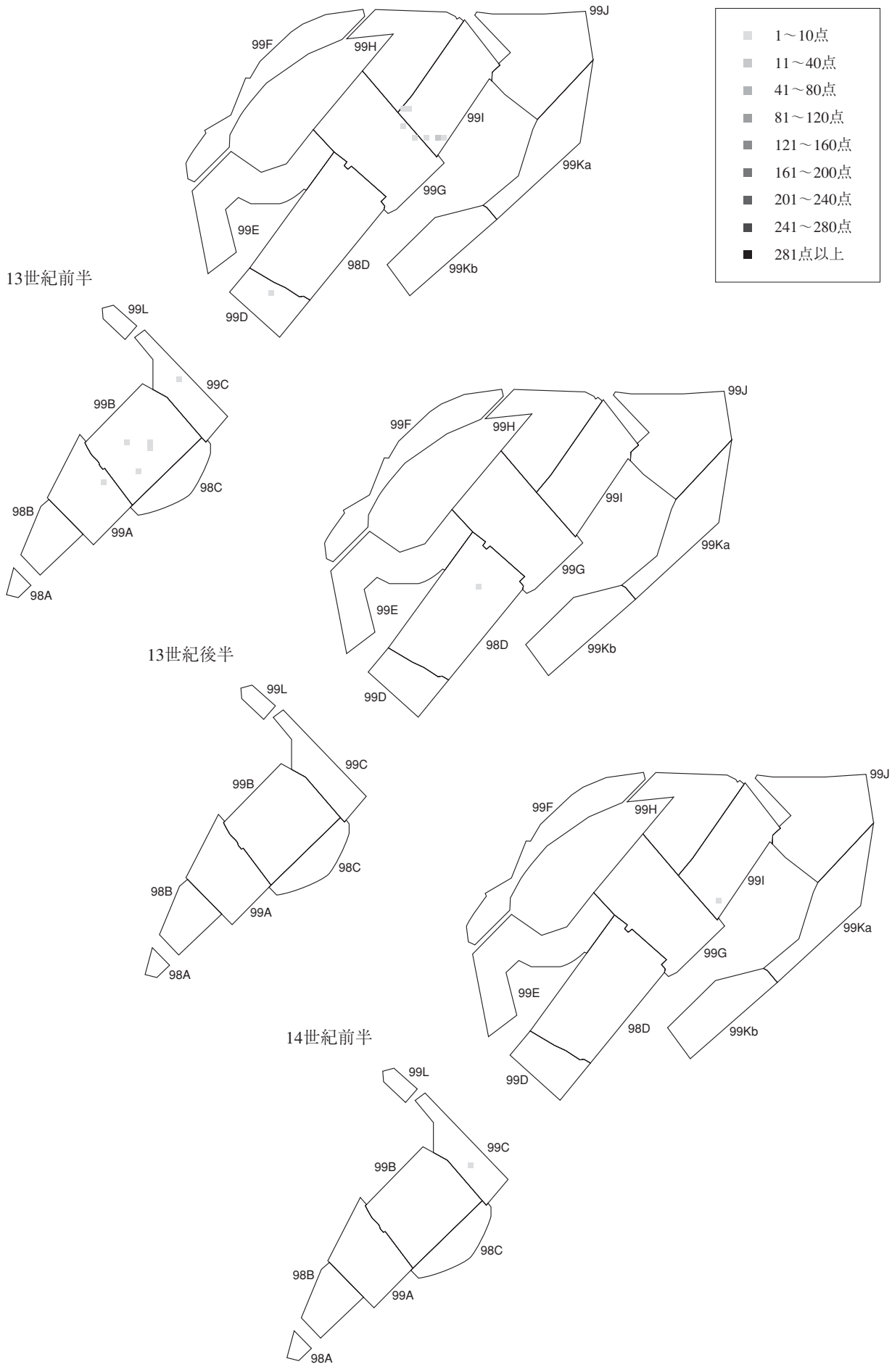
第619図　99I区四面庇建物復元案（1:100）



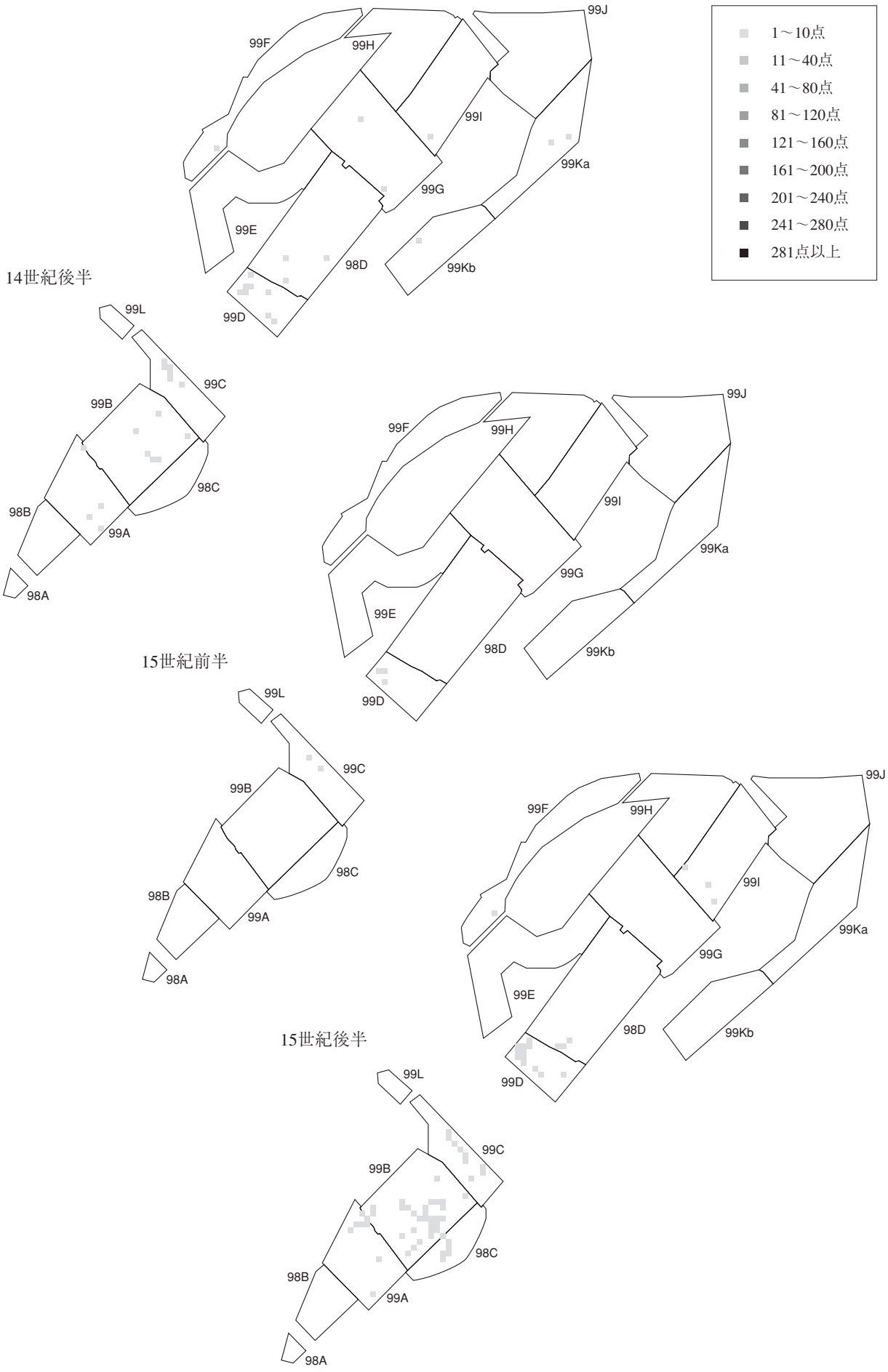
第620図　出土遺物破片数分布図１（灰釉系陶器）



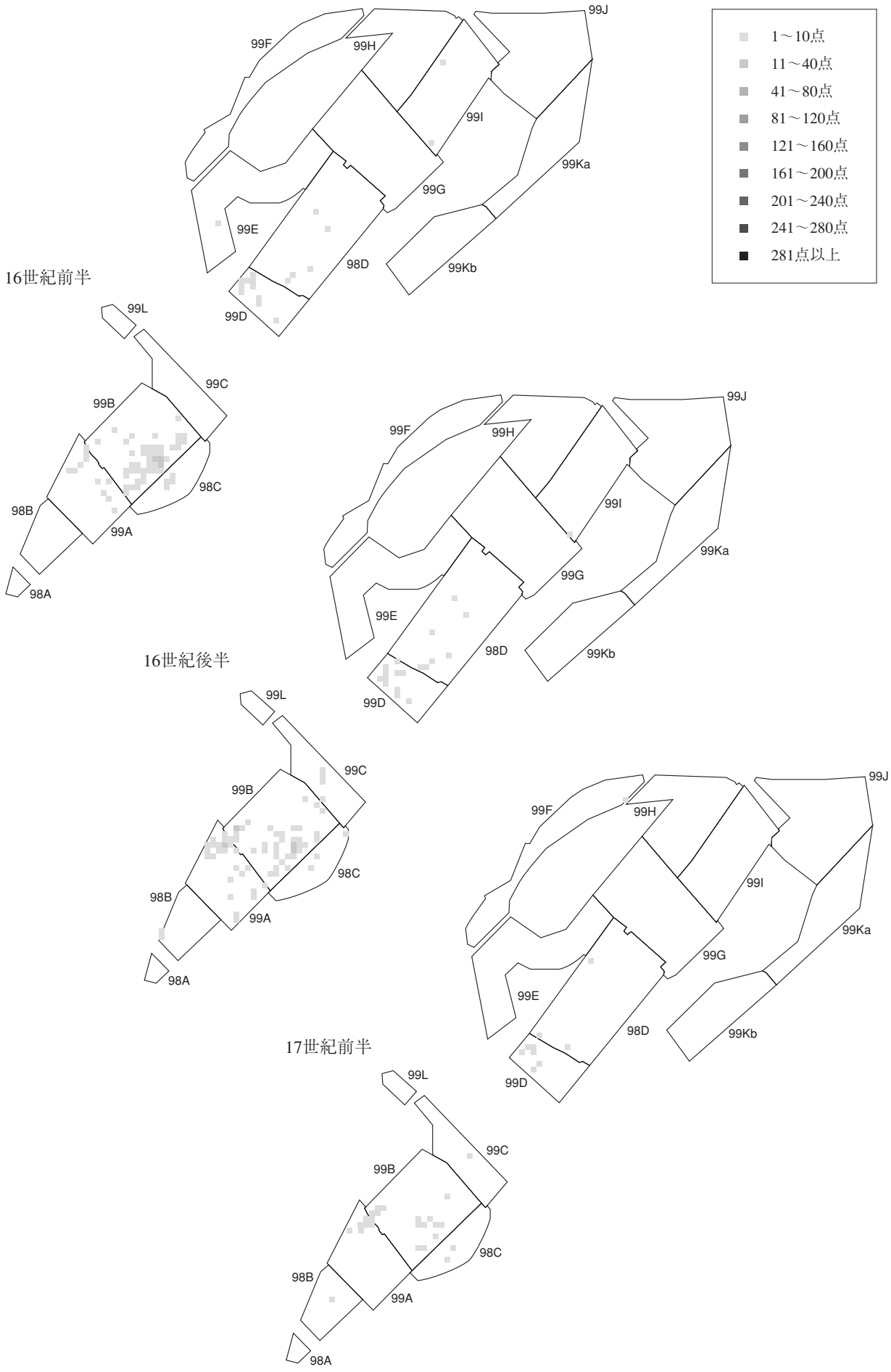
第621図　出土遺物破片数分布図２（灰釉系陶器）



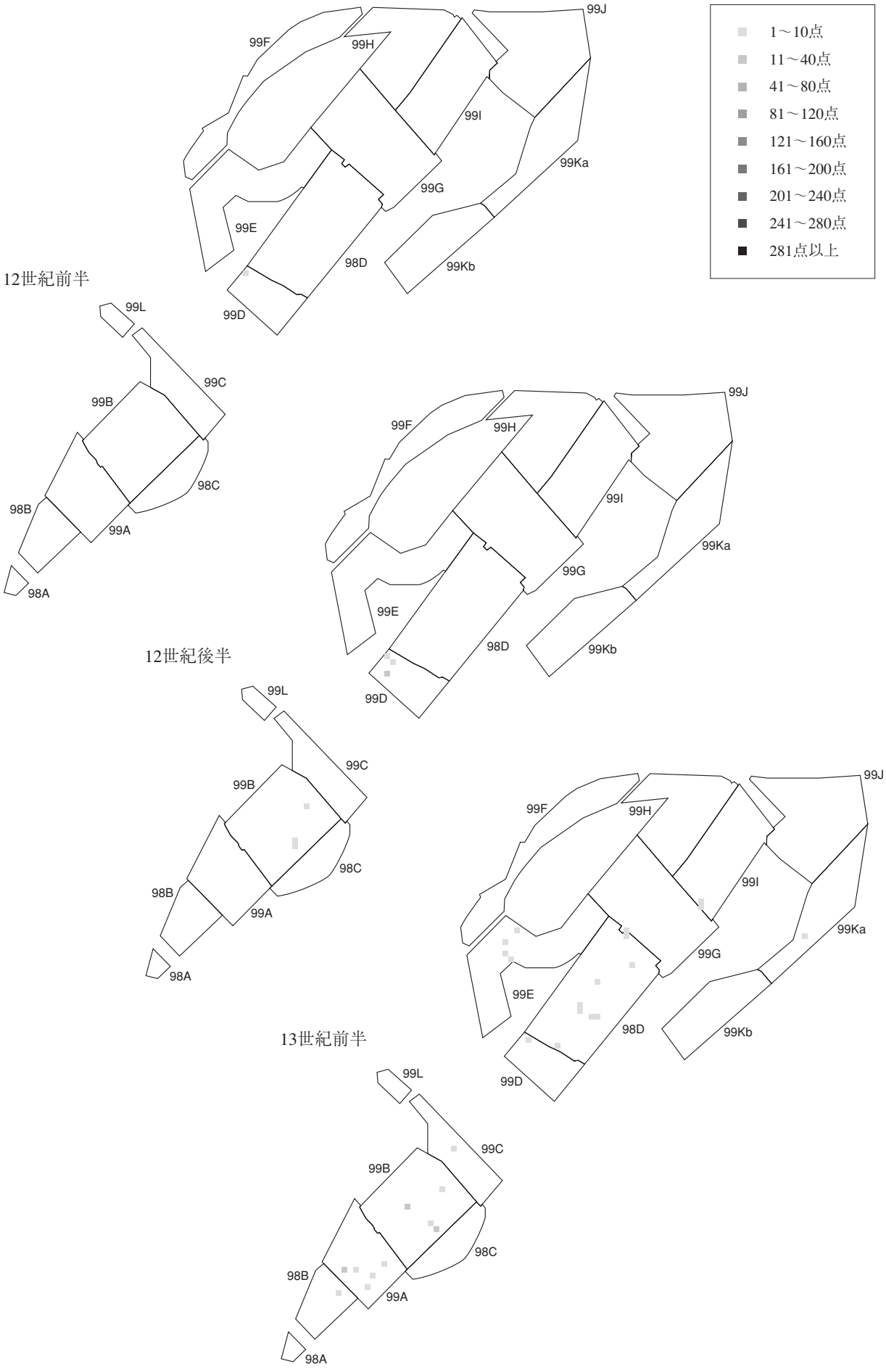
第622図　出土遺物破片数分布図３（瀬戸美濃）



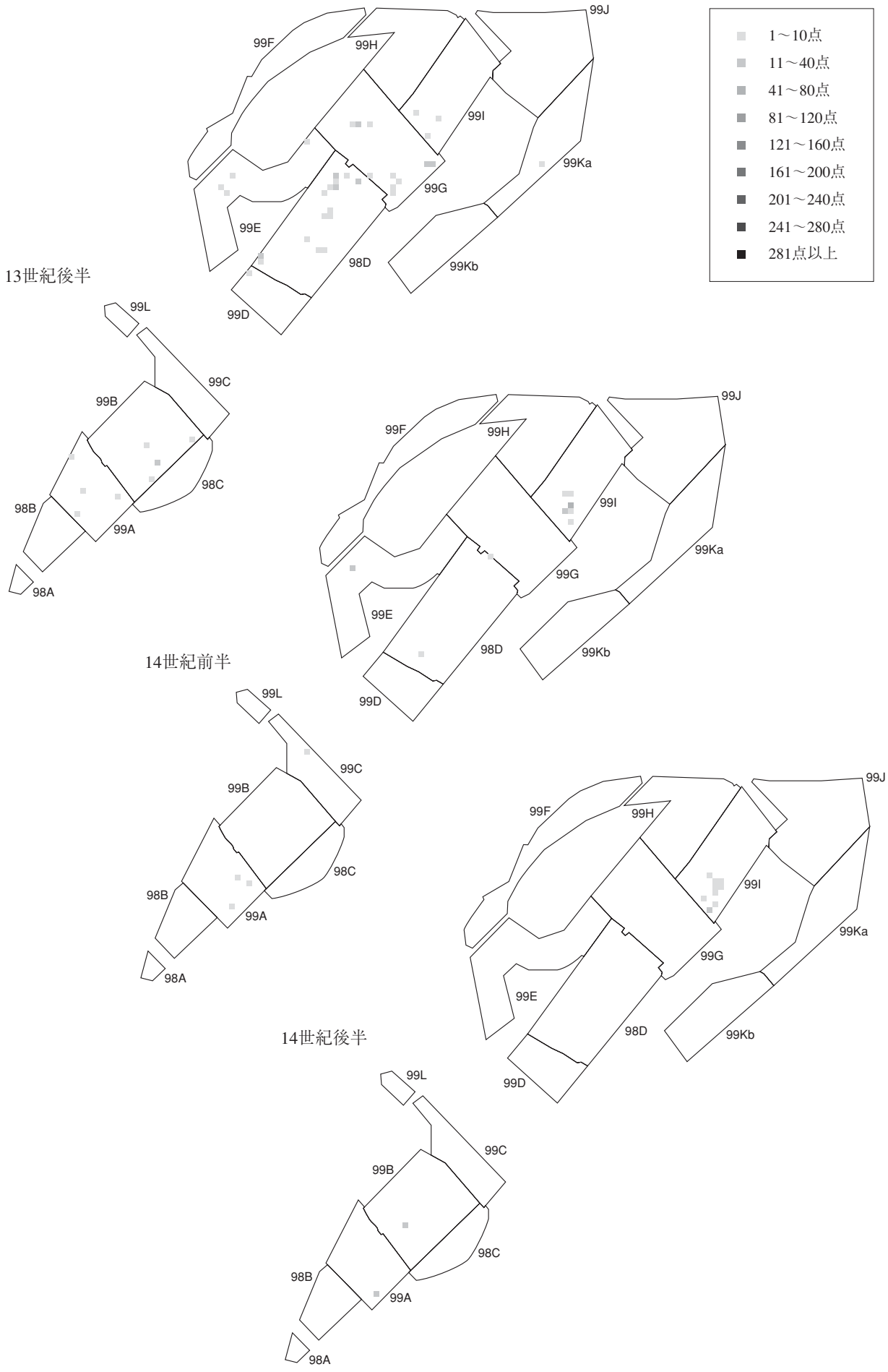
第623図　出土遺物破片数分布図４（瀬戸美濃）



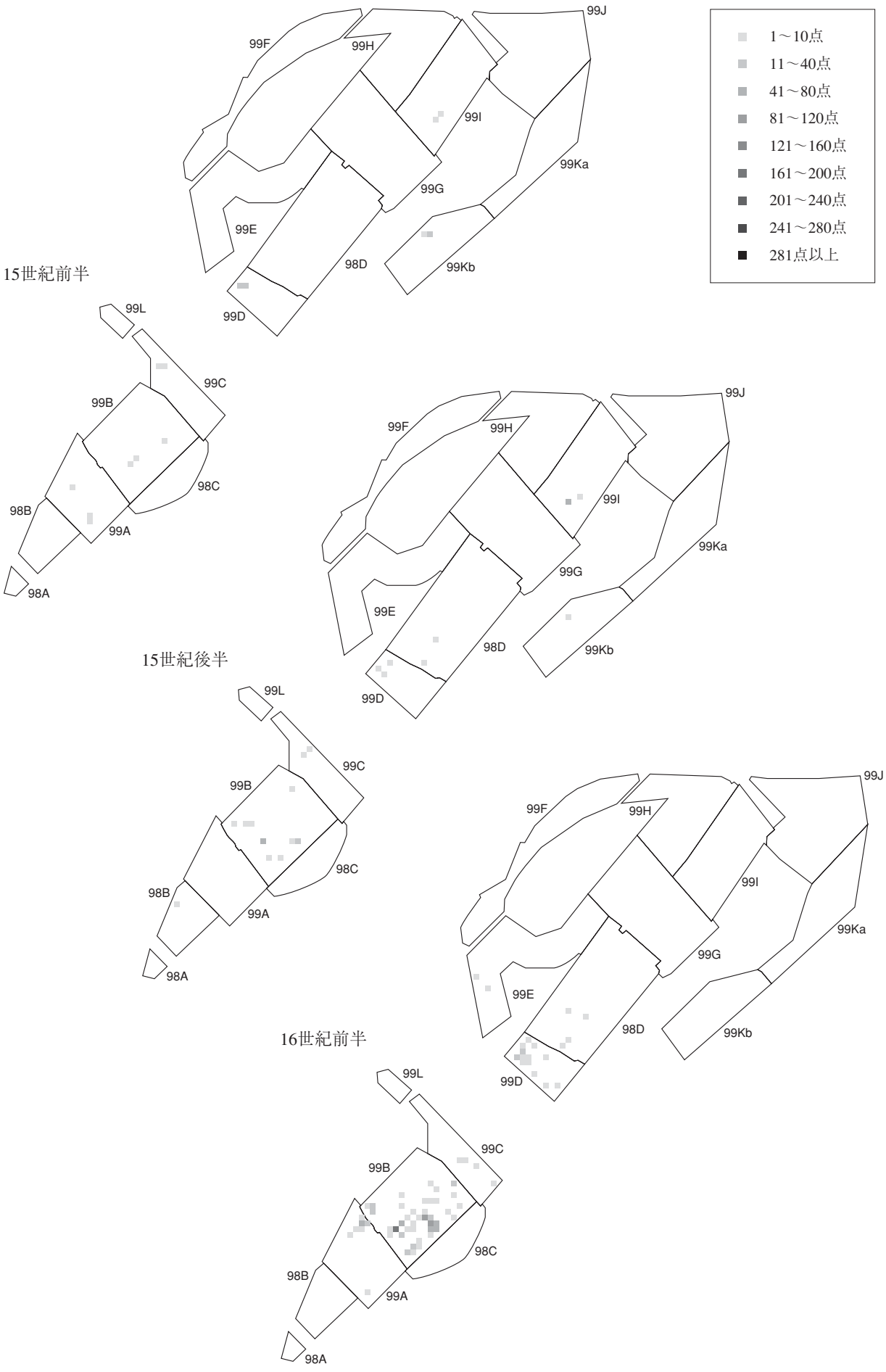
第624図　出土遺物破片数分布図５（瀬戸美濃）



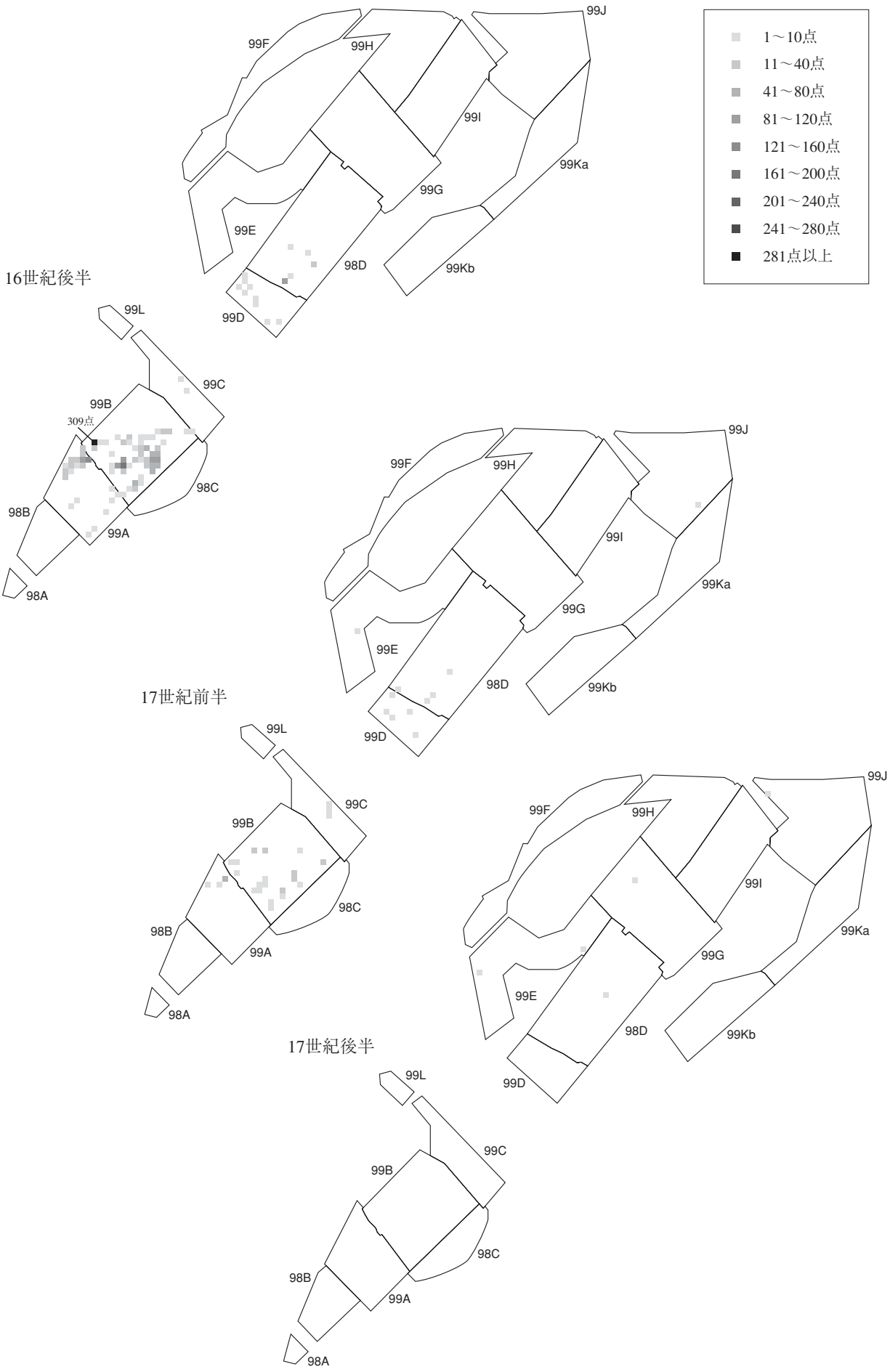
第625図　出土遺物破片数分布図６（土師器鍋釜）



第626図　出土遺物破片数分布図７（土師器鍋釜）



第627図　出土遺物破片数分布図８（土師器鍋釜）



第628図　出土遺物破片数分布図９（土師器鍋釜）

（3） まとめ　ー景観復元のための検討ー

水入遺跡の景観　水入遺跡は、中世前期は墓域、戦国期は矢作川を利用した河川交通の中継地、近世後期は生産域であったことが、これまでの検討で明らかにすることができた。ここでは今後の検討課題も含め、水入遺跡の景観を考えてみたい。

中世前期の墓域は土坑墓と竪穴建物、そして掘立柱建物により構成される共同墓地的空間であった。ここに展開した墓域は、遺物カウントの結果に拠れば、生活域とは隔絶された空間であった可能性が高い。事実水入遺跡内には中世前期の居住域が確認されていない。そうした場合、まずここに埋葬された人々の居住域はどこであったかという点が問題となる。当時墓域は低地や台地上の比較的開けた場所に立地することが多く、水入遺跡に墓域が展開した理由としては、矢作川と宝蔵川に挟まれた周囲より一段低い段丘で矢作川の後背湿地に面していた地形が、墓域として利用するのに適していたからであろう。そう考えれば、やはりこの地理的環境を利用しやすい人々がこの地を選定したのであり、例えば現在の渡刈町の集落といったように、遺跡周辺に被葬者の居住域が広がっていたと考えるのが妥当であろう。水入遺跡の墓域はその継続性や集団性を考えた場合、単一の集落の墓地と考えるよりも、地域の共同墓地として捉えることが妥当であると思われ、また、当時が今日ほど集村的景観を呈していなかったとすれば、もう少し広い範囲に居住していた人々の共同墓地として利用されていたと考えられる。

次に問題となる点はそこに埋葬されたのはどの様な人々であったのかということである。土坑墓という最も簡素な埋葬形態をとるということ、副葬品と思われる遺物がほとんど出土しないこと、長期間にわたり多数の人々が埋葬されていることなどが、被葬者を明らかにするための手がかりとなると思われる。まず、長期間にわたり継続して埋葬行為が行われていると言うことから、戦乱や疫病等で一度に葬られた可能性は低く、在地に根付いた墓地であると考えられる。また、ほとんど副葬品を伴わずに簡素な埋葬形態がとられているという点も、それを補完するデータであろう。蔵骨器を伴う中世墓群が確認されている吉良町善光寺沢遺跡では、そこ埋葬された人々は東条吉良氏関連の在地領主や武士であったと推定されている。また、15世紀後半の常滑産の壺・甕が大量に蔵骨器として用いられていることから戦いによる戦死者を一度に葬った可能性が推測されている。単純に比較はできないが、この指摘を参考にすれば、水入遺跡に埋葬された人々は善光寺沢遺跡に埋葬された人々よりも身分的にに低い可能性が高いと思われる。さらに推測を重ねるのであれば、水入遺跡の中でも副葬品を伴う土坑墓に埋葬された人々は副葬品を伴わない人々よりは身分的に上であった可能性が強く、家父長と諸子といった関係が想定される。ただ、今回の検討では副葬品を伴う土坑墓とその周辺に埋葬された土坑墓を明確な単位として捉えることができなかったため、この点を明確にすることができれば被葬者についても明らかにすることができるであろう。

この墓域が衰退し、15世紀後半からは舟運に関連する区画が展開するようになる。この時の中心は大屋敷地区へ移行し、そこには水路または運河的機能を果たしたであろう拡幅された大溝、土塁で囲まれた物資保管のための倉庫群、河川交通を管理する主殿が構築され、「川湊」と称し得るような景観が展開していたのである。水入遺跡は矢作川と巴川の合流点にほど近い場所に立地していることが川湊として選地されたことは想像に難くない。古代以来矢作川を利用した河川交通が行われていたことは既に提唱

されており、豊田市梅坪遺跡では多数の古代の製塩土器が出土していることから、これをもとに河川交通のあり方が検討されている。なぜこの時期に川湊が形成されたかについては定かではないが、緊張の高まる戦国期にむけて交通と流通の拠点としてこの地を掌握しようとした意志が働いたことは間違いはないであろう。ただ、この川湊的景観を造り上げた人々が完全に前代の墓域という意識を否定し、再開発を行ったとすることについては疑問が残る。すなわち、川湊が大屋敷地区に構築されるひとつの理由は水路として使用可能な大溝の存在があったからであろう。これに対し、下糟目地区にほとんど遺構の展開しない、また遺物も出土しない、空間を囲むためと思われる区画を設けたのはなぜなのであろうか。論旨の飛躍を覚悟して言及するならば、下糟目地区に展開した区画は、何度も言うように、空間を囲むことに意義があったと思われる。つまり、何もない空間を囲い込み、例えば祭祀的な空間として意識させた可能性が考えられるのである。すなわち、前代墓域が展開していた下糟目地区の非日常性を意識した結果、この地区に空閑地を囲い込む区画を祭祀的な空間として創出したのではないのであろうか。そうだとすれば、この川湊を形成した人々と墓域を形成した人々に意識的断絶は認められず、同一の勢力が一連の再開発を行っていったと考えることができるのである。

地域からみた水入遺跡　前項では水入遺跡を単独で考えた場合、想定される景観やそれにより導き出される問題点を指摘した。ここでは視野を広げて、地域という観点から水入遺跡を捉えるとどの様に考えられるのかを述べてみたい。

まず水入遺跡が所属したであろう地域＝エリアの設定が必要となる。水入遺跡は矢作川が豊田市中央部の狭小な流路から岡崎平野へ流れ出てその流路を広げる変換点に位置している。この変換点は古代碧海郡と加茂郡の郡境であったと推定されている場所である。水入遺跡が位置する渡刈町は古代においては碧海郡に属しており、そうした場合水入遺跡は古代の郡境という境界に位置していたのである。このことから類推すれば水入遺跡を形成していった人々は碧海郡側、すなわち南に向かう意識を有していたと考えられる。一旦開けた矢作川は現在の岡崎市北野町周辺で碧海台地が東へ張り出すことにより、再び流路を狭めており、地形的にはこの辺りまででひとつの空間を作りだしている（地形的まとまりについてはコンピューターグラフィックによる復元を参照していただきたい）。こう考えた場合、水入遺跡はエリアの最も北に位置し、古代郡界という境界に近い位置に存在したと考えられるのである。

仮に、この地形的なまとまりをもってひとつのエリアとした場合、この中に展開する他の遺跡はどの様な様相を示しているのであろうか。このエリアでは水入遺跡同様、第二東海自動車道関連の発掘調査が行われ、様々な成果がえられている。水入遺跡から約400ｍ南西に位置する郷上遺跡は古代から江戸時代まで居住域が展開した遺跡である。特に中近世においては、溝で区画された屋敷地が多数確認されており、明和四年（1767）に起こる矢作川の大洪水まで碧海台地縁辺の沖積地に集落が展開している。この西側に位置する川原遺跡では居住域は確認されておらず、中世以降は生産域として水田が形成されている。また、水入遺跡と郷上遺跡の間に位置する天神前遺跡は、狭い調査区ながら居住域と生産域の双方が検出されており、遺構の検出状況や出土遺物のカウントによる分析から、集落の末端に位置していることが明らかにされている。そして、最も南に位置する本川遺跡からは戦国時代の屋敷地が検出されている。

この様に、水入遺跡を含むエリアと想定した地域は、発掘調査の成果をみても、どれひとつとして類似した遺跡は確認されておらず、それぞれが特徴的性格を有していることが判明している。水入遺跡で確認し得なかった、遺跡を創出したであろう人々の居住域は遺跡周辺に広がっていたと推定したのであるが、このエリアに展開している遺跡同士が有機的な関連性を創出していたとすれば、郷上遺跡に住した人々も水入遺跡形成の一端を担った可能性が考えられるのである。事実、郷上遺跡の集落は13世紀に成立し、水入遺跡の土坑墓の成立時期と時を同じくしている。さらに、郷上遺跡で区画溝を持つ屋敷地が構築（再構築）される時期は15世紀であり、同様に川原遺跡の水田、本川遺跡の屋敷地も同時期に形成され始めるのである。このことは、水入遺跡を含むこの地域に13世紀、15世紀が画期となって開発が行われるようになることを意味しているのと同時に、エリアを構成する要因としてそれぞれが関連性を持っていたと考えることができるのではなかろうか。

まとめにかえて　以上、ミクロ的な視点とマクロ的な視点から水入遺跡を捉えることを試みたのであるが、砂上の楼閣に近い、推測に推測を重ねる結果となってしまった感は否めない。これはあくまで筆者の力量不足によるものと思われる。今回の報告に当たり、遺跡を単独で評価するのではなく、もっと広いエリアを捉え、その観点から遺跡を分析するということを心がけたつもりではあるが、果たしてどこまで行えたかははなはだ疑わしいものがある。水入遺跡だけではなく、すべての遺跡はけして単独で存在しているのではなく、遺跡が属する地域のなかで周辺の遺跡と有機的な関係を持ちながら、その特色を打ち出している。よく似た遺構やよく似た遺物が確認されたとしても、それはあくまで別の遺跡であり、どこかに相違点が存在するはずである。ひとつの遺跡はあくまでエリアや地域を構成するひとつのパーツであり、そのパーツが集まることにより地域が創り出されてゆくのである。そこに存在した遺跡の組み合わせにより、描き出される中世集落の景観は異なってくるのであり、この遺跡同士の関連性を明らかにすることが中世集落の景観を復元することにつながって行くのではないかと考える。

第 6 節　水入遺跡における環境復元 CG（Computer Graphics）の作成

(有)宮塚文化財研究所　宮塚　義人

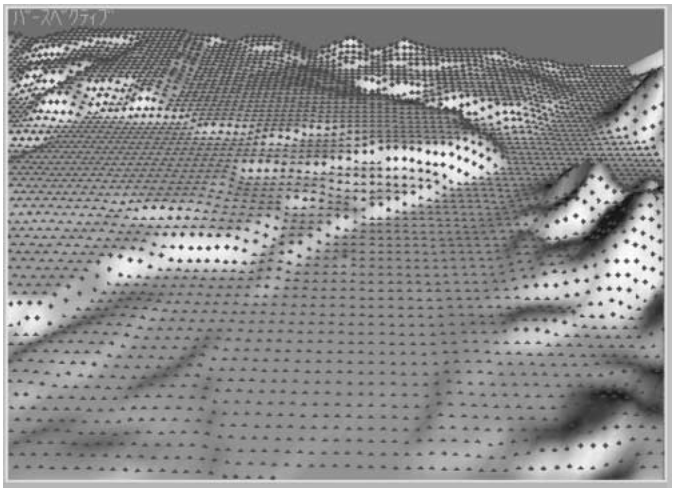
(1) はじめに

近年、遺跡の環境考古学的な復元手法に、CG あるいはアニメーションを用いることが多くなってきた。それは取りも直さず、わかりやすい表現方法を取ることによって、考古学者以外に理解させようとする試みである。水入遺跡でも、以下に述べるような方法で CG を作成した。

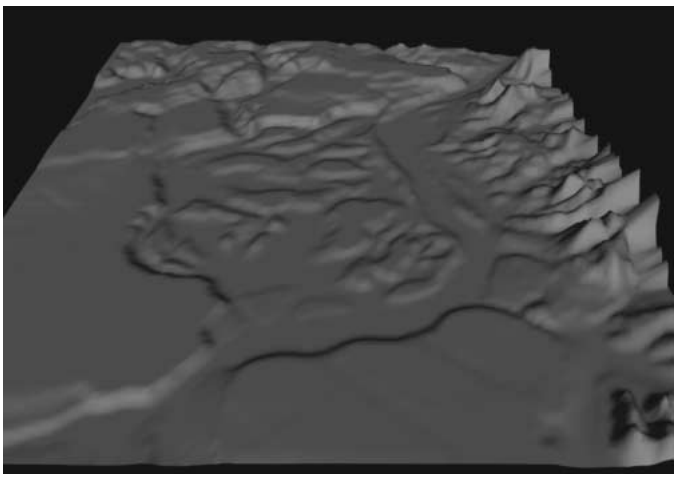
(2) 古地形の復元

CG 作成のために遺跡のみならず、周辺を含めた地形モデルを作成する必要がある。それも、遺跡の当該時期の古地形を復元しなければならない。そのため、古い航空写真（昭和 22-23 年に撮影された米軍写真が有効である）や古地形図、発掘調査データ等から、古墳時代中～後期、奈良時代、中世（鎌倉期）、中世末期（戦国期）の DEM（Digital Elevation Model）を作成した（第 629・630 図）。

古地形図は戦国期の集落復元等についても有効で、地形図ではわからない集落立地についても有効なヒントを与えてくれる（第 631・632 図）。



第 629 図　水入遺跡周辺の DEM



第 630 図　DEM からシェーディングモデルの作成

(3) 植生復元と海面変動

作成した DEM　に必要とする時期の植生を貼り付けなければならない。よく利用されるのは花粉分析資料であり、今回は 99BSD01・03 から採取した花粉分析資料を用い、当該期の花粉から植生を復元した。

CGを作成した地域全体の土地利用がはっきりしていない部分については、地形判読、遺跡からの距離によって、土地利用を想定し、植生をレンダリング（貼り付け）した。

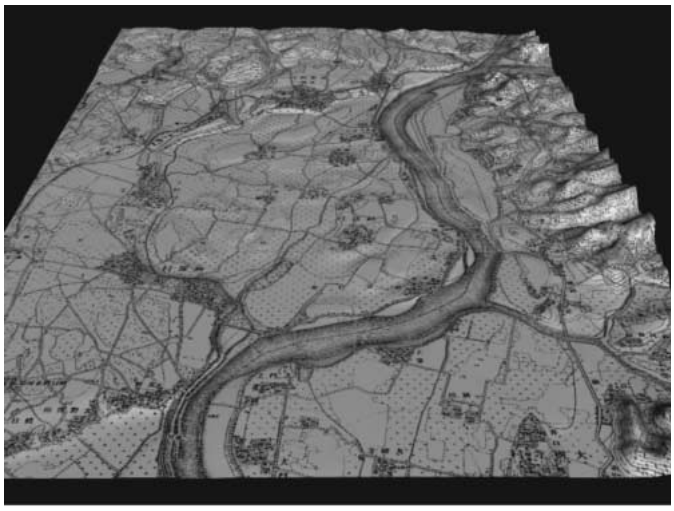
また、海面変動による地下水の高さも考慮しなければならないので、海面変動データ（福澤　1999）や珪藻分析を参考にした。古墳期の地下水位は 1.5m、鎌倉期

は0.5m、戦国期は1.0m地下水位を上げているが、海から離れているために、CG上で大きな変化は見られない（第633図）。

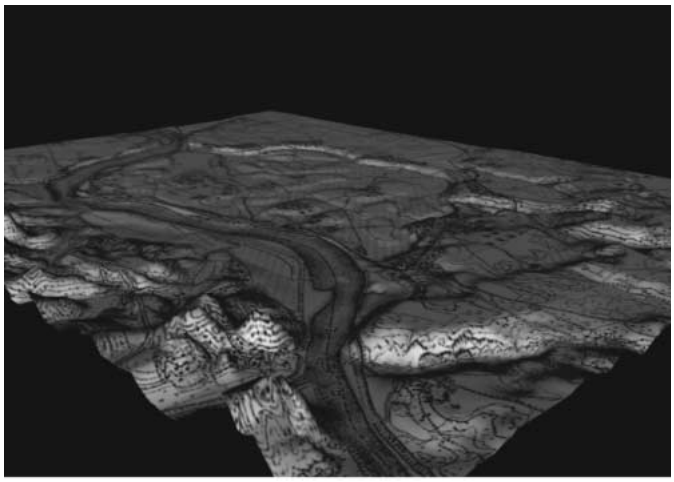
(4) 建造物の復元

遺跡上に復元する建造物については、発掘調査データをもとに、担当した調査員の意見も交え、建物を復元した（第634図）。建物個々についての設計図があるわけではなく、すべて発掘資料からの復元であるので、正確な復元とは言い切れない。また、かなり広域の地域を対象としたため、建物そのものに多くのメモリーを割くことができなかった。対象区域が狭くなれば、より細かな復元は可能である。

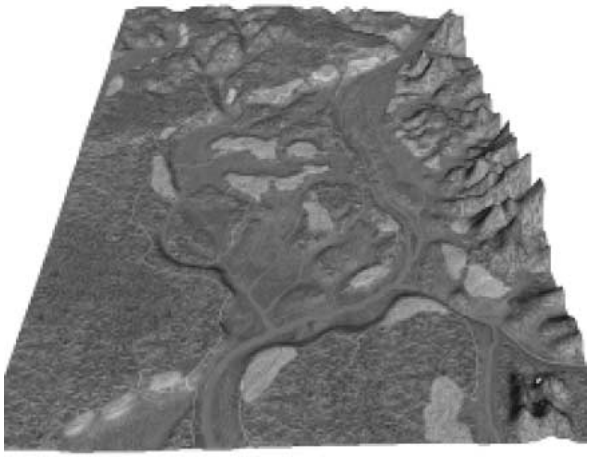
参考文献
福澤　仁之　1999「氷河期以降の気候の年々変動を読む」『科学』68　353-360頁



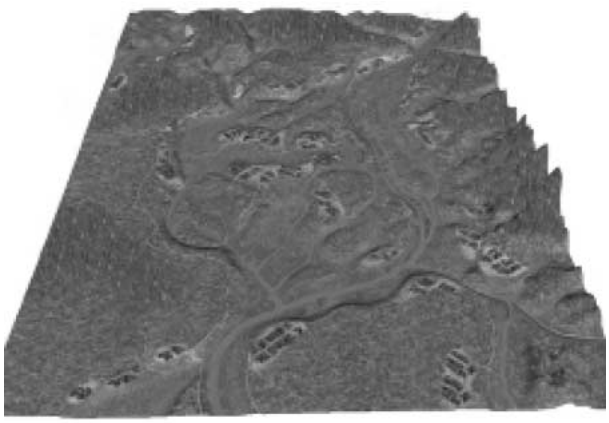
第631図　明治24年地形図をDEMに貼り付け（南から）



第632図　同上（北東から）



第633図　戦国期広域地形・植生復元



第634図　戦国時代広域CG

参考・引用文献

青柳泰介　2005「導水施設の意義について」『水と祭祀の考古学』 学生社
赤塚次郎　1990「廻間式土器」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　2001「川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定」『川原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎・早野浩二　2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』3　愛知県埋蔵文化財センター
荒井信貴　1994『ハサマ遺跡発掘調査報告書』 岡崎市教育委員会
飯塚邦男　2003『梅坪遺跡Ⅶ』豊田市教育委員会
岩野見司・齊藤基生・渡辺　誠　2003『愛知県史』資料編 1 旧石器・縄文　愛知県
宇野隆夫　2001『荘園の考古学』 青木書店
岡安雅彦　1995『企画展　古代集落遺跡を掘る』 安城市歴史博物館
岡安雅彦　1996『御用地遺跡』 安城市教育委員会
置田雅昭　1983「布留遺跡の調査」『古代を考える 32　天理市布留遺跡の検討』 古代を考える会
加藤博紀　2000「『年貢割附状』からみた江戸時代の災害」『研究紀要』1　愛知県埋蔵文化財センター
加納俊介・都築みどり　1984「愛知県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
加納俊介　1991「土師器の編年　東海」『古墳時代の研究』6　雄山閣出版
川合　剛　2001「若王子遺跡」『豊明市史』資料編補 1　原始・古代・中世　豊明市
川井啓介　2000「三河地域の中世集落」『研究紀要』1　愛知県埋蔵文化財センター
川崎みどり　1988「元屋敷式と神明式の間」『古代』86　早稲田大学考古学会
川崎みどり　1996「神明遺跡再報告」『神明遺跡』 豊田市教育委員会
北村和宏　2001「古代『三河型』甕考」『研究紀要』3　愛知県埋蔵文化財センター
鬼頭　剛・赤塚次郎　2005「AMS14C 年代と考古編年」『研究紀要』6　愛知県埋蔵文化財センター
小濱　学　2004「縄文時代早期東海型炉穴の形態的特長とその傾向」『Mie history』15　三重歴史文化研究会
小林久彦　1990「須恵器出現以降の土師器の変遷」『三河考古』3　三河考古刊行会
斉藤嘉彦ほか 1990『北野廃寺』 岡崎市教育委員会
斉藤嘉彦　2004『真宮遺跡』 岡崎市教育委員会
斉藤嘉彦　2005『高木・神明遺跡』 岡崎市教育委員会
酒井俊彦　2003『郷上遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
鈴木茂夫　1986『寺ノ下遺跡』 足助町教育委員会
鈴木正貴編　2001『天神前遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編　2002『矢迫遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
豊田土木事務所　1992『矢作川』 豊田土木事務所
豊田市文化財保護審議会　1993『豊田の史跡と文化財　改訂第三版』　豊田市教育委員会
永井邦仁　2005「古代の足助」『研究紀要』6　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁他　1999「水入遺跡」『年報　平成 10 年度』 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁他　2000「水入遺跡」『年報　平成 11 年度』 愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸　1995「奈良・平安時代の土師器甕について」『年報　平成 6 年度』 愛知県埋蔵文化財センター
永井宏幸　1996「清郷型鍋再考」『年報　平成 7 年度』 愛知県埋蔵文化財センター
贄元洋・小林久彦　1986『石巻神郷地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　豊橋市教育委員会
服部信博　2001『川原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二　2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観 3　弥生・古墳時代土器Ⅱ』 小学館
早野浩二　2005「伊勢湾沿岸と三河湾沿岸における土器製塩の展開」『三河考古』18　三河考古刊行会
樋上　昇　2004『本川遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
樋上　昇･永井邦仁･木川正夫　2000「豊田地区出土の木製品について」『研究紀要』1　愛知県埋蔵文化財センター
広瀬和雄　1991「2-1　耕地と灌漑」『古墳時代の研究』4　雄山閣出版
松井直樹　1991『八ツ面山北部遺跡群Ⅰ』 西尾市教育委員会
松井直樹　1992『八ツ面山北部遺跡群Ⅱ』 西尾市教育委員会
松井直樹　1993「煮炊具について―清郷型甕成立の直前―」『八ツ面山北部遺跡群Ⅲ』 西尾市教育委員会
松井直樹　1994『古新田遺跡』 西尾市教育委員会
松井直樹　1997「第 3 章　考察」『若宮西遺跡』 西尾市教育委員会
森　泰通　1996『神明遺跡』 豊田市教育委員会
森　泰通　2001『神明遺跡Ⅱ』 豊田市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	みずいりいせき
書名	水入遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第108集
編著者名	永井邦仁、川井啓介、川添和暁、鬼頭剛、鈴木正貴、森勇一、藤根久、今村美智子、植田弥生、佐々木由香、松葉礼子、宮塚義人
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方８０２－２４　TEL 0567-67-4161
発行年月日	西暦　２００５年８月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
みずいいせき 水入遺跡	あいちけんとよたしと 愛知県豊田市渡 がりちょうおやしき 刈町大屋敷・下 もかすめ 糟目	23211	63-475	35度 1 40	137度 18 20	1998.7.7 ～ 2000.3.30	67850	第二東海自動車道豊田東I.C.建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水入遺跡	集落	後期旧石器時代	なし	ナイフ形石器・剥片	
水入遺跡	集落	縄紋時代草創～早期	焼土坑群	なし	放射性炭素年代測定による時期判断
水入遺跡	集落	縄文時代中期	竪穴建物、土坑など	土器・石器	
水入遺跡	集落	弥生時代末期	竪穴建物	土器	
水入遺跡	集落	古墳時代中～後期	竪穴建物、掘立柱建物、大溝、土坑など	土師器・須恵器韓式系軟質土器・木製品・石製模造品	
水入遺跡	集落	奈良～平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、船着場、土坑など	土師器・須恵器・土錘・製塩土器・瓦塔・緑釉陶器・灰釉陶器	
水入遺跡	集落	鎌倉時代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑墓など	灰釉系陶器・青磁・白磁・土師器・渥美産陶器・常滑産陶器	
水入遺跡	集落	戦国時代～江戸時代初め	竪穴建物、掘立柱建物、大溝、井戸、土坑など	瀬戸美濃産陶器・土師器・木製品	

文書番号	発掘届出（10埋セ第140号・1998.5.15、11埋セ87号・1999.4.2）　通知（10教文第61-18号・1998.6.8、11教文61-17号・1999.5.6） 終了届・保管証・発見届（11埋セ第65、68号・1999.3.23、11埋セ35、36号・2000.3.28） 鑑査結果通知（10教文第61－18号、11教文61-17号）

要約	水入遺跡は、矢作川西岸に面する中～低位段丘上に様々な時代の集落が展開する遺跡である。後期旧石器は流れ込みであったが付近に生活空間があったことが考えられる。縄紋時代草創期～早期には焼土坑群があり、同中期末に竪穴建物からなる集落が出現する。その後弥生時代末期に集落が展開するが、本格的な段丘面の開発が始まるのは古墳時代中期である。大屋敷地区に下流への灌漑を目的にしたと思われる全長200m以上の大溝が掘削され、大溝機能停止後も集落が展開、尾張産初期須恵器が多く搬入される。そして7世紀後半には下糟目地区も開発され、集落域が拡大する。古代集落は9世紀代に急激な縮小を経て、11世紀代にはほぼ廃絶する。次いで当該地は鎌倉時代に土坑墓からなる墓地として利用される。墓地は14世紀代には廃絶し、15世紀代からは再び集落地となる。特に16世紀代の大屋敷地区は大溝の最掘削や土塁構築、大型掘立柱建物が造られ、一種の川湊として機能していた可能性が考えられる。しかし矢作川の洪水が増え、18世紀代には当該地での集落経営は断絶する。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集

水入遺跡

第2分冊
中近世・科学分析・考察編
2005年8月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　サンメッセ株式会社